

---

# ポケットモンスターACE ~ SECOND SEASON ~

ゆ ~ すけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜

### 【Nコード】

N2867H

### 【作者名】

ゆ〜すけ

### 【あらすじ】

ポケモンリーグでのユースケの戦いが終わってから暫く、ワカバタウンでは新たな物語が動きだそうとしていた。これは、少年イッキと、その仲間達の物語である。

## 憧れ（前書き）

こんにちは、ユースケです。早くも帰ってきました。タイトルは—  
応仮なので変わるかもしれません。では、どうぞ！

## 憧れ

「リザードン、フレアドライブ！」

オレが見つめるTV画面ではリザードンとバクフーンがバトルをしていた。リザードンのトレーナーであるオレと同じ年ぐらいの男子、ユースケさんがリザードンに大声で指示した。それに答えるようにリザードンは炎を身に纏いながらバクフーンに突っ込んでいく。

「最後は真っ向勝負か！面白れえ！オレ達はいつだって直球一本槍！こんなピンチぐらい、何度もそうやってはねかえしてきたんだ！バクフーン、フレアドライブ！」

オレの先輩、ゴールド先輩がバクフーンにそう指示すると、バクフーンも炎を身に纏いリザードンに向かっていく。

ドオーン

2匹が激突してももの凄い爆発が起こる。そして煙が晴れた。そこではバクフーンは倒れていて、リザードンは立っていた。ユースケさんの勝ちだ。くうく、何回見てもポケモンリーグでのバトルは最高だぜ！

「だよな、ワニノコ！」

『ワニ？』

オレの相棒、ワニノコがオレの言葉に対して首をかしげた。まあ突然だったから分かるハズ無いよな。特にゴールド先輩とユースケさ

んのバトルなんて最高に熱いぜ！オレはゴールド先輩と握手をする  
ユースケさんを見る。やっぱり憧れるよなあ、ユースケさんに・・・  
・ユースケさんはマサラタウン出身のポケモントレーナーだ。そ  
の実力はかなりのもので、パートナーであるユンゲラーと今戦って  
いたりザードン、サンドにサンダース、ストライク、キングラーの  
6匹と共に、ポケモンリーグ準優勝をなしとげたトレーナーだ。A  
CEという異名を持ち、どんなピンチでも諦めずに勝利を勝ち取る  
うという姿からそうつけられている。本当に憧れるぜ！

「オレ達もポケモンリーグでバトルしたいよなあ」

『ワニイ！』

オレがそうワニノコに言うと今度は元気に頷いた。

「イツキ！ユウイチ君が来てるわよ！早く降りて来なさい」

お母さんが下の階から大声で言った。おっと自己紹介はまだだった  
な。オレはイツキ、ワカバタウンのトレーナーズスクールに通う13  
歳だ。ちなみにそろそろ卒業も控えているんだ。

「は〜い！」

オレはそう大声で返すと、ワニノコをモンスターボールに戻した。  
それから、ビデオや電気を切って、部屋を飛び出す。そして階段を  
一気に飛び下りるように降りた。それから玄関にすぐに向かい、靴  
を履く。そして

「いってきま〜す！」

と大声で言っ て家を飛び出した。

「遅いぞ、イツキ」

外で待っていた親友のユウイチが言った。

「わりいわりい、ポケモンリーグのビデオを見てたらつい……」

「そんなにバトルが好きなら、スクールでやるぞ。今日はそのために行くんだからな。」

オレの言葉に対してイツキが言った。今日はオレ達は補修の日だ。基本、成績が悪い奴が受けに行くもんなんだけど、丁度試験の日にポケモンリーグの決勝戦があつて、サボつてオレの家で観てた。よつて補修をする事になった。まったく、ズルはするもんじゃないなあ

「走るぞユウイチ！」

「当然だ！」

オレ達は走り出した。絶対に間に合つてみせるぞ！

## 憧れ（後書き）

今回の主人公、イツキのパートナーはワニノコです。今回は前作のケーシイみたいにひねくれませんでした。

## 補修（前書き）

テスト期間中ですが、休憩の合間を塗って更新。バトルまではやっておきたいと思ひまして・・・では、どうぞ！



## 補修

オレは目の前のテスト用紙と戦っていた。補修の集大成であるテスト、内容は自慢ではないけど、一度も赤点をとった事が無い！まあ60点以上取った事は無いけどな！

(そんな事威張るな！)

隣に座っているユウイチが小声で突っ込みを入れてきた。ん？ちよつと待てよ！

(なんで、オレの心が読めるんだよ！？)

もの凄い気になった事を聞く。なんで人の心境が……

(お前分かりやすいし……)

理由になつてねえ！

「時間です!!」

オレの担任、キサト先生が言った。だあゝ！あんまり書けないまま終わっちまった！

「イツキ、どれだけ出来た？」

ユウイチが聞いてきた。それは……

「絶対赤点は無い!!」

と自信ありげに言う。でも裏を返せば……

「ようはギリギリって事だな……」

「うるさい！」

オレはユウイチに向かって怒鳴った。

スクールバトルフィールド

「ルールは1対1のシングルバトル、いいですね？」

審判をしているキサト先生が言った。

「はい！」

「もちろんです！」

それに対してオレとユウイチが頷いた。補修の最後は実技演習、つまりは実際にバトルをする事だ。これがオレの今日の唯一の楽しみだったんだ。相手はユウイチ、実力だとユウイチはオレより1枚も2枚も上、理由はすぐに分かる。

「行け、ワニノコ！」

『ワニワニー！』

オレがボールをフィールドに向かって投げると、それからワニノコが現れる。ワニノコは元気に踊りながら出てきた。

「マグマラシ、君に決めた！」

ユウイチはそれに対してマグマラシを出してきた。マグマラシ、炎タイプのポケモン、ヒノアラシが進化したポケモンだ。オレのパートナーのワニノコと同じ日にウツギ博士からもらったポケモンで、その実力は1級品である。ユウイチの育て方がいいのか、ほんのこの前、ヒノアラシが進化したらしい。ワニノコも早く進化しないかなあ……

『マグッ！』

マグマラシは背中から炎を噴射して戦闘体制に入る。

「ワニノコ、今日は勝つぞ！」

『ワニッ！』

ワニノコはオレの言葉に頷くと構えた。いつでも行けるみたいだな。

「試合開始！」

キサト先生がコールを掛けた。 先手必勝！

「ワニノコ、水鉄砲だ！」

ワニノコは水鉄砲を放った。それは一直線にマグマラシに向かっていく。

「電光石化でかわすんだ！さらに火炎車だ！」

マグマラシは水鉄砲を容易に避けてそこで炎を身に纏いワニノコに向かってきた。ワンランク上の技を使ってくる。進化してるから技も少し強力なものを覚えているな。だけどな！

「ワニノコ、正面から受け止める！」

「ワニ！」

「マゲ！？」

ワニノコは正面からマグマラシの火炎車を受け止めた。へっ！威力があってもタイプの相性が悪ければダメージも少なくて済むんだぜ！

「ここから反撃だ！ワニノコ、噛みつく攻撃だ！」

「ワニ！」

ワニノコはがつつりマグマラシに噛みついた。マグマラシは苦しげな顔をしている。更に行くぜ！

「水鉄砲だ！」

『ワニーーー！』

『マグッ！？』

「マグマラシ！」

ワニノコはマグマラシに噛み付きながら、水鉄砲を放った。ゼロの距離で当たった水鉄砲の一撃は強力でマグマラシは吹っ飛んだ。効果は抜群！これを食らって立てるかよ！

「やるなイツキ！だけどオレ達はまだ負けてないぜ！な、マグマラシ」

『マグ！』

ユウイチがそう言うとマグマラシはそれに応えるように立ち上がり、頷いた。おいおい、冗談じゃないぞ……

「反撃開始だ！マグマラシ、煙幕からスピードスター！」

ユウイチがそう指示をすると、マグマラシは背中から黒い煙を蒸かした。それによりこちらの視界が悪くなり、マグマラシを見失う。さらにそこから星型の光線がワニノコに向かってとんできた。っ！かわせない！

『ワニツ……』

ワニノコはスピードスターの一撃を受けた。くっ！ユウイチの奴、技を巧みに使いこなしてきやがる……ユウイチの強さの秘密、

それはその戦略制の高さにある。それを信頼してマグマラシも動いているので、マグマラシの動きには一切迷いが無い。その分速く、対応が難しい。正直煙幕に対応出来る技が無い。こうなりゃ一かバチだ！

「ワニノコ、吠えるだ！」

『ワニー！』

『マゲ！？』

「なっ！」

マグマラシは吠えるに驚いて煙幕の中から出てきた。捉えた！一気に決めるぞ！

「ワニノコ、水鉄砲！」

『ワニー！』

ワニノコの放った水鉄砲は、マグマラシに一直線に向かっていく。これが決まればオレの勝ちだ！

「なめるなよイッキ！ピンチは逆にチャンスにだってなるんだ！マグマラシ、火炎車で水鉄砲を押しきるんだ！」

『マゲ！』

マグマラシは炎を身に纏いつつ水鉄砲に向かって突撃した。へ〜中々面白い事やってくれるじゃんか！なら！

「ワニノコ、フルパワーだ！絶対に負けるなよ！」

オレがそう言うとワニノコの水鉄砲の水圧が増してマグマラシを押し始めた。

「まだまだ！行くぞ、マグマラシ！」

『マグ！』

ユウイチの言葉でマグマラシの炎が大きくなった。そして水鉄砲を押し返しながら進んでくる。急になんだ？もしか、特性猛火か！

「負けるな！」

「行っけー！」

オレとユウイチの声が木霊する。そしてついにマグマラシがワニノコの水鉄砲を押し切った。そしてワニノコは火炎車の一撃を無防備な体制で受けて吹っ飛ばされた。

「ワニノコ！」

オレはワニノコの元に駆け寄る。

『ワ、ワニ〜』

完全に目を回していた。こりゃこれ以上のバトルは無理だな……。オレはマグマラシの方を見る。マグマラシも完全に伸びていてユウイチが「大丈夫か？」と声を掛けている。もしかしてこの勝負って・

・・・

「両者戦闘不能！よって引き分け！」

審判をしていた、キサト先生がコールを掛けた。初めてだな。ユウイチと引き分けになったのは・・・オレは目を回しているワニノコを背中に担いでユウイチの元に向かう。ユウイチもマグマラシを抱きかかえ、立ち上がった。

「へへ、引き分けてやったぜ！」

オレは自慢気にユウイチに向かって言う。

「バーカ、威張るなら勝つてからにしろよ！」

ユウイチがそれに応えるように言う。

「言ったな！次は絶対に勝つてやる！」

「イヤ、勝つのはオレ達の方さ」

お互いに強気な発言をする。絶対に負けないからな！オレは強く心に誓った。



## 補修（後書き）

これでテストに集中します。

**実技練習〱やり過ぎ注意〱（前書き）**

テスト終了しました。これからガンガン行きます！

実技練習くやり過ぎ注意く

「イツキくん」

「はいいいいい！」

オレはスライディングで教室に入りつつもキサト先生の言葉に叫び声で答えた。ふう、なんとか出席に間に合ったみたいだな。

「遅刻すれすれ、まあいいでしょう。早く座りなさい」

「は〜い」

キサト先生の言葉に軽い口調で答えた。それからオレは悠々と自分の席に座った。

「流石は遅刻ギリギリの常州犯、ギリギリが大好きだな。」

隣の席に座っているユウイチが言った。そう、オレはユウイチの言うように遅刻ギリギリの常州犯！決して遅刻はしないが、出席が始まる前に来る事もないぜ！

「だから、そこで威張るなよ……」

「何で人の心が読めるんだ！」

最近お馴染みになりつつあるこのセリフ……ユウイチは何で人の心境が読めるんだよ！

スクールバトルフィールド  
という訳で、ちゃちゃっと授業が進んで実技の授業だ。オレはバトルフィールドに立つ。

「ルールは1対1のシングルバトルだ。いいな？ イツキ、サクラ」  
審判を勤めているユウイチがルールを確認する。

「ああ！ 勿論だぜ！」

ってか1匹しかポケモン持ってないから当然だけどな。

「OK！」

オレの正面に対峙している相手、サクラが言った。サクラはユウイチの幼なじみの女の子だ。しっかり者でユウイチにとって、姉のような存在らしい。活発な性格で短く切り揃えた髪型からも伺える。オレとも仲が良く、3バカトリオとみんなから呼ばれている。とにかく行くぞ！

「行くぞ、ワニノコ！」

『ワニィ〜！』

オレがボールを投げると、いつも通り元気よくワニノコが現れた。  
頼むぜ相棒！

「こつちも行くわよ！チコリータ、Ready's Go！」

『チコ！』

サクラはチコリータを出してきた。チコリータもユウイチのマグマ  
ラシと同じで、オレのワニノコと同じ日にウツギ博士に貰ったポケ  
モンだ。3匹共、仲が良くてしつかり個性が出るから、3匹の絡  
みを見てると楽しいんだぜ。

「試合開始！」

ユウイチが試合開始のコールを掛けた。行くぜ！先手必勝だ！

「ワニノコ突撃！」

『ワニワニワニワニワニワニ！』

ワニノコは気合いの雄叫びをあげつつもチコリータに向かって突撃  
していく。これがオレ達のモットー、ゴールド先輩譲りの正面突破  
だ！

「そんな動きじゃね、チコリータ、葉っぱカッター！」

『チコ！』

ワニノコに向かって葉っぱカッターが放たれた。それぐらいじゃオ  
レのワニノコの突撃は止められないぜ！

「ワニノコ！地面に向かって全力で水鉄砲、その勢いを利用して飛ぶんだ！」

『ワーニー！』

ワニノコは勢いよく地面に向かって水鉄砲を放った。さらに足の力も使ってジャンプする。それにより、チコリータの葉っぱカッターが外れた。一気に行くぜ！

「後ろに向かって水鉄砲！」

『ワーニー！』

ワニノコはチコリータに背中を向けて水鉄砲を放った。空中では体を支えるものが無く、水の勢いが推力となる。水鉄砲を利用し、もの凄いスピードでチコリータに向かっていく。

「なんて無茶な！チコリータ、かわしてからつるのムチを巻き付けて！」

チコリータは容易にワニノコのタックルを回避する。そりゃ、当たらないよな……

『チコー！』

『ゲワニイ！』

チコリータはサクラの指示通りにつるのムチを巻き付けてきた。あ！首に巻き付いてやがる……あんな声を出す訳だ……

「あちゃー……ごめんねワニノコ……チコリータ、ほどいてあげて」

『チコ』

『ワ、ワニィ……』

チコリータはサクラの指示を無視して、ワニノコは首に手をあてながら、苦しそうな声をあげている。ちよっとチコリータさん！それは残酷じゃないの!？

「ワニノコ、水……」

「ああ、ワニノコごめん！投げ飛ばすのよ!」

『チコ』

『ワ、ワニィー!?!』

投げとばされ地面に叩きつけられた。その時、なんとかつるのムチから解放される。

「ワニノコ、大丈夫か!?!」

『ワ、ワニィ……』

ワニノコは涙目でオレを見ながらこくんこくと頷いた。本心もつ嫌だっと思ってるんだろぅな……

「これで決めるわよ！チコリータ、体当たり！」

『チコオ！』

チコリータはワニノコに向かってくる。コイツはチャンスだ！これを逃したらもうチャンスはきつと無いハズだ！これで決めてやる！

「ワニノコ、水鉄砲！」

『ワニー！』

ワニノコは水鉄砲を放ちそれは見事にチコリータに決まり、動きが止まる。一気に行くぞ！

「睨みつけるから切り裂く攻撃！これで決まりだ！」

ワニノコは睨みつけるを使って、チコリータを驚かし、その後切り裂く攻撃を食らわせた。睨みつけられると、打たれ弱くなる。その後急に急所に当たりやすい切り裂く攻撃が上手く決まれば……

『チ、チコ……』

チコリータはゆっくりと倒れて伸びた。完全に目を回している。

「チコリータ！」

「チコリータ、戦闘不能！よってワニノコの勝ちだ」

ユウイチがコールを掛けた。よし！勝った！



「よくやったねワニノコ」

「ワ、ワニイ……」

ワニノコは無理に笑顔を作って頷いた。苦しそうだな……そんなに効いたんだな、アレが……

「ご苦労さん、授業が終わるまでボールで休んでいてくれ。」

オレはワニノコをボールに戻した。

「流石はイツキ、わたしの完敗よ」

サクラがオレの目の前まで歩いてきて言った。

「まあな。でもさ、チコリータのあれはやり過ぎだ！しっかり注意しとけよ！」

「分かってるって」

サクラはオレの言葉に頷いた。流石にアレはな……

「とにかく次は負けないからね！」

「ああ！望むところさー！」

売り言葉に買い言葉、サクラの言葉を力強く言い返した。

**事件（前書き）**

タイトル通りです。

## 事件

イツキ自室

うう……だるい……ここ連日は徹夜で毎日テスト勉強をしている。スクールの終業試験、テストは実技だけじゃなくて、筆記試験も行う。死ぬ気でテスト勉強はしているのだけど……生憎余り足しにはなっていない。ポケモン学と数学についてはあまり問題は無いが、問題は国語だ。国語には古典がある。古典……大昔の人がこんな訳の分からない言葉で話していたと思うと頭が痛くなってくる。オレが分かっているのは、『おかし』という言葉が、『よい』という意味にという事ぐらいだ。今はジョウトのおとぎ話を読んでいる。ただ内容は殆ど理解は出来ていない。ユウイチが訳してくれた内容は、生命の神と3匹の守護獣がいて、それを利用してうとする奴らがいた。そいつはまず、守護獣を捕まえ、その力を利用して生命の神の力を手に入れ、生きとし生ける人々に鉄裁をくだした。それに怒りし深海より現れた海の神は、勇気あるものと共に生命の神を止めるという話だ。こんなもんを訳せるユウイチは理解出来る！

『ワニ……』

ん？ワニノコの鳴き声でした。ありゃ、起こしちゃったか。現在は夜9時、さつきまで爆睡していたワニノコだったけど、さつきから解らないってバカ騒ぎしてたからな……オレは立ち上がってワニノコのもとに歩いていく。ワニノコは眠そうに目を擦っている。

「わりい、起こしちゃったな」

『ワニ……』

ワニノコに謝ると、ワニノコは無理に笑顔を作って首を横に降った。ふふ今日は早めに寝ようかな？オレは部屋のカーテンを閉めるためにオレは窓のもとに行く。ん？なんだアレ？真っ黒な服を着てんな・・・あからさまに怪しいな・・・

プルルルル、プルルルル

オレのポケギアが不意になった。誰だよ・・・こんな時間に・・・オレは走ってポケギアを取りにいつてそして電話に出た。

おいイツキ！

ん？ユウイチか。どうしたんだ？こんな焦った様子で・・・

「どうしたユウイチ、こんな時間に電話して」

ああ、お前サクラを知らないか！？

サクラ？・・・サクラがどうしたんだ？

「サクラ？知らないけど・・・サクラがどうしたんだ？」

オレは疑問に思った事を聞く。

サクラが・・・サクラが居なくなつたんだ・・・

ふふんサクラが・・・って、ええっ！

「おいユウイチ！それは本当かよ！」

ああ！さつきアイツの母さんから電話があつてな、チコリータと散歩に行ったつきり帰って来てないんだ！だから一応お前に確認をとつたんだが、やっぱりいなかつたか……

？

「おい！やっぱりってなんだよ！」

あいつが連絡無しで、こんな時間に家の外にいるもんか！これは誘拐事件だよ！

！

イツキ、力を貸してくれそんなに時間は経ってないから、すぐに見つかると思う

ユウイチの大声がオレの部屋に木霊した。そんなの、オレの答えは決まってる！

「当然だ！友達を見捨てられるか！」

オレは大声でいう

頼りにしてるぜ、また電話する

「ああ！」

ユウイチの言葉にオレは頷いた。さて、どこから探すか……ん？そつういえば……さつきの怪しい男……オレは窓から外を

見る。どこだ……。いた！さっきより大分離れた場所にいたけど、見失ってはいない。コイツは……。つけてみる価値がありそうだな。

「行くぞワニノコ！」

『ワニ！』

オレはワニノコをボールに戻し、部屋から飛びだした。待ってるよサクラ、すぐに見つけてやるからな！

事件（後書き）

最近スランプ気味・・・どうにかせねば・・・

衝突（前書き）

怪しい男をつけていったイツキだったが・・・



## 衝突

オレはさっきの怪しい男を尾行している。あそこまで真つ黒な服装をしているなんてあからさまに怪しいだろ！絶対アイツがサクラの失踪に関わっているぞ。今のところは気付かれてはいない。これもユウイチが教えてくれた尾行術のお陰だ。探偵小説が大好きなアイツは、何かがあると度々探偵を気取りだす。その時に教えてくれた一つが、尾行のテクニクだ。ふゝ、まさか役に立つ時がくるなんて考えてもいなかったぜ。着きすぎず、離れ過ぎずが基本らしいからな、このまま慎重に行くぞ……

「ん？」

男がある建物の弊を飛び超えて中に入ってしまった。あれは旧校舎じゃないか！スクールの旧校舎、今じゃ誰も使っていないくて、殆ど幽霊屋敷状態、なるほど隠れるにはうってつけたな。オレは走って弊のもとに張り付く……話声が聞こえる。仲間がいるのか？

「おい、さっき捕まえたガキはどうした？」

「サクラの事か！？」

「ああ、オレ達のポケモンを見たんだ。生かしておくわけには行かないだろ……」

ポケモンを見た？何でみたら不味いんだ？

「そつだな、凶暴化電波の副産物として生まれたオレ達のポケモンをな……」

凶暴化？聞いた事があるような・・・まさか・・・

「その通りだな。そしてそこで聞耳起ててるお馬鹿もな！」

気付かれてた！？

『ガアアアア』

オレは雄叫びに反応して真上を見る。すると、コラツタが真上からオレをめがけて突っ込んできた。不吉に飛び出た歯が輝いている。コイツは必殺前歯！？

「うおっ！」

オレは間一髪その攻撃を回避する。そして大幅に後ろに下がった。後一瞬タイミングが遅れていたら・・・

「出てこい、ワニノコ！」

『ワニー！』

元氣よくワニノコはボールから飛び出した。そのワニノコがコラツタを見たとたんに敵しい顔つきになった。どうしたんだらう？様子がおかしいぞ・・・

「聞いていたか、さっきの話、聞かれた以上は見逃せないな！」

男が弊を飛び越えてきて言った。

「サクラはどうした!？」

「サクラ? ああ、さっきのガキの事か! まだ校舎の中でぐっすりなはずだぜ」

無事か・・・よかつたぜ・・・

「とにかくメエは消えてもらうぜ。オレ一人で充分だ。黙ってみてる」

もうひとりの弊を飛び越えてきた男に対して男が言った。1対1か・・・なら十分やりようはある!

「コラッタ! 必殺前歯だ!」

『ガアアアア』

コラッタが奇声を上げつつワニノコに迫ってくる。こんな場合は!

「ワニノコ、吠える!」

『ワニー!』

ワニノコが大声を出して吠える。動きを止めて、そこから一気に攻める!

『ガアアアア!?!』

「な!」

『ワニッ!?!』

コラッタは足を止める事も無く、ワニノコに突進してきた。そして自慢の前歯を突き立ててワニノコの腕に噛みついてきた。

『ワニイ!ワニイ!』

ワニノコは痛そうにコラッタが噛みついた手をブンブン振り回す。しかしコラッタが離れる様子は無い。

「フルパワーの水鉄砲で弾き飛ばせ!」

『ワニー!』

ワニノコは全力で水鉄砲を放った。近距離で水鉄砲をうたれたコラッタは水流で弾き飛ばされた。あれだけ近距離でフルパワーの水鉄砲を受けたんだ!これで倒れなきゃ……

『ガアアアア』

コラッタが立ち上がってきた。おいおいシャレにならないぜ。

「おいおい、何苦戦してんだよ。」

もう一人の男が言って、イシツブテを繰り出してきた。

「ちっ、仕方ないな。一気に仕留めるぞ」

2対1……これは流石に不味いぜ……そうだ!

「ワニノコ、真上に向かって水鉄砲！」

『ワニー！』

ワニノコが空に向かって水鉄砲を放った。これで！

「相手が増えて絶望しておかしくなったか？」

男の一人が言った。これでいいんだよ！

「攻撃行くぞ！ワニノコ、イシツブテに水鉄砲！」

「イシツブテ、転がるだ！」

イシツブテは転がりながら、水鉄砲を受けつつも転がるで突撃してくる。そんな！イシツブテは岩・地面の二つのタイプを持っているから、水タイプの相性は最悪なはずだ！なのに何故！？

『ワニイイイ！』

ワニノコは転がるの直撃を受けて吹っ飛ばされた。

「大丈夫かワニノコ？」

『ワニイ・・・』

ワニノコは苦しそうな声を上げながらも立ち上がった。ナイスガッツだ！にしても・・・ワニノコの様子がおかしい、相手のポケモンを見て怒っているような・・・それにあのイシツブテやコラッタ、普通なら効果的な攻撃も通用しない・・・まるで兵器のよう

な……。「凶暴化電波の副産物」……急にそんな言葉が頭に  
浮かんだ……兵器……まさか！

「そのポケモン達……まさか……」

「気付いたか。そのポケモン達は凶暴化電波の実験の中で、完全に  
心を閉ざしたポケモンだ。そのせいでコイツらは忠実なオレの兵器  
さ。それを知った以上、さらに生かしてはおけないな……」

凶暴化電波……思い出した……シオンタウンのラジオ塔か  
らロケット団が流した電波で、野生のポケモン達を凶暴化させて、  
カントー地方中を恐怖に陥れたアレだ……ってことはアイツは  
ロケット団か！

『ワニイイイ！』

ワニノコが雄叫びを上げた。今の話を聞いて、そんな事をするアイ  
ツ達が許せないんだ！さつきから様子がおかしかったのはそれに薄  
々気がついていたらか……はらわたが煮えくり反ってきたぜ。  
ここまで、怒りの感情を覚えたのは初めてだ。絶対に叩きのめして  
やる！

「まずはワニノコからだ！コラッタ、必殺前歯！」

コラッタが素早くワニノコに迫ってくる。まずは！

「避ける！」

ワニノコはコラッタの攻撃をギリギリで避ける。そこだ！

「切り裂く攻撃！」

『ワニイ！』

ワニノコの爪が唸りを上げてコラツタに決まる。でもそれじゃコラツタは怯まずにワニノコに必殺前歯を決めて来た。

『ワニヤアアア！』

「ワニノコ！」

ワニノコが悲鳴を上げた。さらにそこにとどめと言わんばかりにイシツブテが迫ってくる。

「とどめだ！メガトンパンチ！」

イシツブテは拳を奮ってワニノコをぶん殴ろうとする。

「ワニノコ！」

オレは走ってワニノコの元に向かおうとする。その時！

「電光石化から火炎車！」

不意に後ろから声が聞こえたかと思うと、マグマラシが現れ、イシツブテを吹っ飛ばした。

「やっと来やがったか！」

オレは振り向かずに言う。

「ごめんな、それじゃさっさと片付けるか」

「分かってる、行くぞユウイチ！」

勿論助けに来たのはユウイチだ！何故ここが分かったかって？さっき真上に向かって撃った水鉄砲、最初からユウイチに呼ぶに放ったんだ。ホントにイチバチだったが、来てくれてよかったぜ！

「まずはワニノコ、コラッタを振り払え！水鉄砲！」

必殺前歯を受けていたワニノコは水鉄砲でコラッタを弾きとばした。コラッタもイシツブテも最初の位置に戻って仕切り直した。

『マグ、マグマグ？』

『ワニ……』

ワニノコとマグマラシが会話を交わす。少しワニノコが苦しそうだ。……ダメージを受けすぎみたいだ。オレの指示が悪いせいで……

「一人増えたぐらいで何ができる！コラッタ、必殺前歯！」

「イシツブテ、転がるだ！」

それぞれのポケモンが同時に迫ってきた。

「ユウイチ！」



「ああ、任せとけよ！マグマラシ、コラッタに電光石化から火炎車  
！」

『マゲー！』

マグマラシは素早い動きでコラッタの側面に回って火炎車を決めた。それを受けたコラッタは気を失う。あれだけ技を受けてたからな、重い一発があれば十分だ。さあ、今度はオレ達の番だな！

「ワニノコ、水鉄砲！」

『ワニーー！』

ワニノコは水鉄砲を放った。それはイシツブテに直撃した。しかし転がるは止まらない。だこど勢いを殺すには十分だ！

「今だマグマラシ、側面から電光石化からの突進！」

ユウイチの指示でマグマラシはイシツブテに物凄い勢いで突進した。電光石化で勢いがついてる分威力は通常よりも高い、転がる攻撃は正面からの攻撃には強いが、側面から狙われると案外弱いんだ。次で決めてやる！

「ワニノコ、フルパワーの水鉄砲！」

『ワニヤアアアア！』

ワニノコは水鉄砲を放った。さつきとは違い、転がるも使っていないイシツブテはこれには耐えれなかった！完全に気を失っている。よし！勝った！後は……

「逃げるぞ！」

「ああ！」

逃げようとするロケット団員達、コイツらは許せない！絶対に逃がすかよ！

「水鉄砲だ！」

「マグマラシ、スピードスター！」

「ワニイ！」

「マグ！」

ワニノコとマグマラシのそれぞれ放った攻撃は見事にロケット団員2人に直撃する。そして二人は倒れた。ふう……

「チコリータ、宿木のタネ！」

『チコッ！』

チコリータがサクラの指示で倒れているロケット団員に宿木の夕ネを使わせた。エグい事やるなあ……。あの後、すぐにサクラを助けた。旧校舎の奥で捕まっていた、案外見つけるのは簡単だった。で、サクラの話では、旧校舎の近くを歩いていると、何かもの音が聞こえて、覗いてみると激しいバトルが繰り広げられていた。しかしそれはポケモン達を道具のようにしか、見てないようなバトルで、止めに入ったらそこで捕まってしまったらしい。あれ？ポ―としてるうちにユウイチとサクラがいないぞ？

ウゝウゝ

警察のサイレンが聞こえてきた。そっぴや警察に通報したんだっとな……。ん、待てよ？あ！あいつら逃げやがったな！この後オレは警察の長い事情聴取を一人だけ受けたのは言うまでもない。

## 衝突（後書き）

少しバトルが単調すぎたきが……いづれ修正が入るかもしれま  
せん。

## 友情（前書き）

ロケット団と接触してしまい、警察の事情聴取を受けるハメになってしまったイツキ……。その翌日、イツキはさらなる強敵と対峙していた。

## 友情

ワカバタウンスクール教室

・・・試験までに時間が・・・無い！という訳で終業試験の1日前、とにかく全力で勉強をしているのだが・・・全く追いつかない。そして何より問題なのは・・・オレは昨日の授業を受けていない・・・ロケット団事件、あれは2日前の出来事で、昨日の1日、警察に事情聴取をされていたため、スクールを休んでいる。そして問題なのは授業の進行だ。昨日のうちに歴史の授業が異常なぐらい進んでいて、今日の内容があまりにも前回受けた内容と違い過ぎたので話にならなかった。他の授業は代々終わっているために殆ど進む事は無かった。しかしホントに問題なのは、この歴史という奴だ。コイツはどうすればいいんだ！

「大丈夫かイツキ？」

ユウイチがオレに声を掛けてきた。

「もうダメだ・・・明日のテスト、不合格だ・・・」

オレは絶望の声を上げる。

「歴史が問題なんだよね？」

サクラがそれに対していう。

「そう・・・なんで昨日に限ってこんなに授業が進むんだ！ノートが無くちゃ意味がない・・・」

オレは死にそんな声を上げる。すると

「ほらよ」

ユウイチがオレの机に向かってノートを投げてきた。これは！歴史のノート！

「ユウイチ！」

「これぐらい当然さ」

ユウイチが笑顔でオレに言った。ああ、ユウイチが神様に見える・・・

「はい、私のも」

サクラがオレにノートを差し出してきた。

「サクラ！」

「困った時はお互い様でしょ？」

おお、サクラから天使の翼が・・・あなたがたは神様だ！

「二人とも恩に切るぜ！」

そうやってオレは早速ユウイチのノートを開いた。

ユウイチノート

戦国探偵家康！関ヶ原の謎！名探偵家康の名刀のように切れた推

理は唸るか？

と始まり、落書きがノートに所狭く描き込まれていた。授業内容じやなくてただの落書きじゃなーか！

サクラノート

今日の授業は沢山進みましたけど、先生の字が汚過ぎるので、写せませんでした。先生のよた話ばかりに疲れたのでペンをここで置きます

肝心な所が書いてねえ！

「どうだ？役に立ったか！」

「感謝してよね」

「……コイツらはあ……」

「ヴァカがお前らは！」

オレの心の叫びが教室に響いた。

暫くして……息が切れるくらい二人に説教をしたオレは、冷静



になり、その他の友人達からノートを借りまくって写させて貰った。サクラのノートの情報によれば、つーかオレの経験上、歴史の先生の字が汚過ぎて解読するのが難しい、それを一字一句ミス無しで書いている。感動ものだな……

「イツキ、さっきは悪かったな」

「悪気は無かったのよ、悪気は……」

ユウイチとサクラがそれぞれ言った。

「分かってるさ。お前達が筋金いりのマヌケって事はな」

と嫌味をたっぷり込めて言う。

「だから悪かったって！代わりに古典を教えてやるからさ！」

古典だって!？

「英語も教えてあげるからさ、ね？」

英語？フフフフ

「よろしくお願いします！」

とにかくみんなの力をかりて全力を尽くす！そして一発合格だ！

スクール卒業試験、筆記試験終了後

よし、終わった！フッフ・・・いける！これなら筆記なら合格出来る！全部、みんなのお陰だぜ！後は実技のみだ！全力で行くぞ！

## 友情（後書き）

### 次回予告

イツキ「筆記試験を無事に終えたオレは、スクールの卒業を賭けてのバトルに挑む。バトルの結末はいかに！次回！ポケモンモンスタ  
I ACEY SECA ND SEASON」勝つも負けるも一騎打ち！絶対負けるか、終業試験！「次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ワニノコ「ワニイ！」

**ライバル登場！絶対負けるか終業試験！（前書き）**

筆記試験を終えて、イツキは終業試験に挑もうとしていた。

## ライバル登場！絶対負けるか終業試験！

### 実技試験会場

受験番号を呼ばれたオレは受験会場の扉を開けて中に入った。そこにはバトルフィールドがあり、中央には試験監のキサト先生が立っていた。まだ、対戦相手は来ていないみたいだな……

「先生！オレの対戦相手はまだですか！？」

やる気満々な様子で先生に向かって言った。このテンション、早くバトルしないと覚めてしまうぜ！

「そうはやらない、すぐに対戦相手は来るから」

先生がそういうと向こうの扉が開いた。そこからやってきたのは……

「勝負だ！イツキ」

入ってきたのは、オレのライバルであるコウ。普段はクールな性格でもの静かであるが、バトルではその中に秘めた熱い闘志が湧き出してくる。実力は互角で、勝率は互角ぐらい、お互いにライバルとして認めあっている。まさかこんな場所で戦う事になるうなんてな！

「望むところだ！」

オレはコウの言葉に力一杯返した。

「あゝ、盛り上がっているとこ悪いんだけど、指示してないのに始

めないでくれるかな？」

キサト先生が言った。すでにバトルフィールドには、ワニノコとコウのパートナーである、ニューラが出ていた。せっかちって損だね……

「なら、早くコールを」

「さもないと、勝手に始めちゃいますよ！」

コウの言葉にオレが続く。流石オレのライバル、言う事が違うね！

「ハイハイ分かりましたよ。ルールは1対1のシングルバトル、はい始め」

なっ！なんつー適当な……

「油断大敵だぞ！ニューラ、電光石化からひっかく攻撃」

コウが静かに言うと、ニューラが高速でワニノコに迫ってきた。相変わらず速いな！だが、いつもこのスピードとはやりあってきたから慣れている！

「ワニノコ、吠えるだ！」

『ワニー！』

『ニユッ！？』

ニューラはそれに驚き、動きを止めた。

「そこだ！水鉄砲！」

ワニノコは18番である、水鉄砲を放った。ニューラは吹っ飛ばされるが、身軽なフットワークで素早く体制を立て直す。畜生もうちよつと効いてくれててもいいじゃんか！

「……以前は使う事が無かった補助技か……。やるな」

補助技、確かに以前は使った事は無かった技だ。ワニノコは睨み付けるを最初から使えたが、一度たりとも使った事は無い。そしてオレが初めて使ったのは、この間の補修でのユウイチとのバトル。今まで補助技にはなんの意味も無い！と思ってたけど、まさかこんな効果的な技だなんてな！

「さあ、本番はここからだぜ！メタルクロー！」

この前のロケット団との戦いでワニノコが成長して修得した技だ。氷タイプを持つニューラには効果は抜群、一気に決めてやるぜ！

「それぐらいのスピードじゃ、ニューラは捉えられん！」

『ニューラ！』

ニューラは素早くその一撃を避けた。流石に当たらないか！

「そこだ、きりさく攻撃！」

『ニューラ！』

『ワニツ！』

ニューラはそのまま背後に回ってきて、ワニノコに一撃を決めてきた。

「大丈夫かワニノコ！」

『ワニー！』

オレの言葉に頷くと、再び構える。まだまだ元気そうだね。ニューラは再びワニノコから距離をとってきた。スピードを生かしたヒットアンドウェイか！

「もう一撃いくぞ」

コウが静かに言うとニューラがまた仕掛けてきた。

『ワニヤ！』

ワニノコはまた攻撃を受けてしまう。不味いぞ……ニューラの攻撃は確実にワニノコにダメージを与えてきている。なんとかしないとな……

「次行くぞ……」

再びニューラはワニノコに向かってくる。今度こそ止めてやる！

「ワニノコ、吠えるだ！」

『ワニー！』



「同じ手は効かん！ニューラ、嫌な音」

『キーーーーー！』

な！コイツは・・・黒板をひつかいた時の音！最悪だ！オレは耳を押さえる。それからフィールドを見る。ニューラが引いていない？もしかして嫌な音で吠えるの声を相殺したのか！

「決める」

『ニューラ！』

『ワニヤアアア！』

「ワニノコ！」

ワニノコが一撃を受けて、オレは叫んだ。ワニノコは膝をついた。

「これで決める！」

ニューラがワニノコにとどめを指そうと迫ってきた。どうする・・・  
どうするイッキ！

・  
・  
・  
・  
・

そつだ！まだ、まだあるじゃんか！オレ達のまだ見せていない切札が！もの凄いスピードでニューラがワニノコに正面から迫ってくる。

上手くやってくれよ……

「ワニノコ、怖い顔だ！」

『ワニー！』

ワニノコは怖い顔で睨みつけた。それにより、ニューラは脅えて動きを止める。これが最初で最後のチャンスだ！

「睨みつけるからメタルクローだ！これで決めるぞ！」

『ワニー！』

ワニノコは素早く、ニューラに近づくと、ニューラが素早く退こうとするが、すかさずに睨みつけて動きを止める。そして必殺のメタルクローの一撃を決める。効果は抜群！睨み付けるで防御力が低下しているニューラには耐えられないぜ！オレの予想通り、ニューラはその攻撃に耐えきれず倒れた。よっしゃあ！オレの勝ちだ！

「イツキくんの勝ち。はい、試験終了、帰っていいわよ」

「……軽！キサト先生、さっきあんなぞんざいな扱いしたからってそれは無いぜ！」

『ワニーー！』

ワニノコが走ってオレの元に駆け寄ってきて飛び付いてきた。オレはそのままバランスを崩して転倒する。

「よく頑張ったなワニノコ！」

『ワニヤ!』

とても疲れているハズなのに元気に言う。ホントに嬉しいんだね・  
・

「流石だなイツキ」

コウがオレに手をさしのべながら言った。オレはその手を借りて立ち上がる。

「んにゃ、正直こつちが危なかった。一撃離脱、ニューラらしいスピードを生かしたい戦法だったぜ!」

オレは素直にコウを賞賛した。

「それを止めるお前も大したもんだ。次は負けん」

「ああ、オレだっただ!」

オレはコウの手を握る手を強く握る。

『ワニ、ワニワニ!』

『ニューラ!ニューラ!』

ワニノコとニューラも何か話している。それから腕をがっんとお互いぶつけあった。こつちも再戦を誓ったんだな。

「行くぞ、ニューラ!」

『ニューラ！』

コウとニューラは振り返って歩いていく。オレ達はそれを見送る。

「ワニノコ、次も絶対勝つからな」

『ワニ』

オレの言葉にワニノコは静かに頷いた。その目はニューラの背中をしっかりと見つめていた。

ライバル登場！絶対負けるか終業試験！（後書き）

次回予告

イツキ「終業試験が終わってしばらく、オレのもとへ1通の手紙が届く、それは長い間共に学校生活をすごした親友達との別れをしめていた！次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『出発』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ワニノコ『ワニヤア！』」

## 出発（前書き）

ふう〜

イツキ「どうした作者？怪我でもしたのか？」

イヤ、ちょっとスランプが酷くなってきてね……

イツキ「おいおい大丈夫かよ！？」

んにゃ、次回の話の筋は浮かんだけど後どうやってもっていくか……

イツキ「しつかり頼むぜ！ユースケ先輩とは違ってここで完結しないでプツンは無しだからな！」

頑張る……という訳で始まります。

## 出発

ふが眠い……。目を覚ましたオレは、ベッドから降りる。あら？  
眠くてあまりバランスがとれないぞ。こりゃ不味い

『ワニ、ワニワニ！』

ワニノコがオレの心境を見透すように、オレに向かって言う。『全く夜更かしするから』って言いたいのか？まあ、確かに昨日は夜遅くまでマンガ、『カイリユーボール』を読んでたけどさ……

「イツキ、ワニノコちゃん！朝ごはんよ！早く降りてらっしゃい！」

「ふあゝい……」

『ワツニー！』

下から聞こえてきた母さんの声を聞き、オレは欠伸をしながらも答え、ワニノコはドアを開けて元氣そうに降りていった。元氣な奴だな……。オレはさっさとパジャマから、私服に着替えてトボトボと一階に降りていく。

「おはよー」

眠そうにオレは母さんに対して言った。台所では、ワニノコが既に箸を使って朝ごはんのたくわんをかじっている。お前、箸を使つてどんなに器用なんだよ……

「おはようイツキ、早く食べなさい」

「はっい」

またオレは眠そうに答えた。それからオレは自分の席について、手を合わせて「いただきます」と言ってから箸をとってご飯を口に運ぶ

「そっだイツキ、スクールから手紙が来てたわよ」

！

「ちよっ！母さん、見せて！」

オレは焦って箸を置いて母さんに向かって手を出す。

「ハイハイ」

母さんは素早くエプロンのポケットから封筒を取り出した。オレはその封を勢いよく剥がす。不器用な子の典型例みたいな破りかたになり、正直汚い。それから手紙を取り出す。む！これはテストの結果か！

終業試験成績

筆記

現文 60点

古典 41点

数学 80点

英語 44点

理科 75点

歴史 55点



地理 68点

ポケモン学 86点

結果・合格

「よっしゃあ！」

オレは歓喜の声を上げる。ぶっちゃけ、終業試験の筆記の合格条件は、赤点を取らないだからな。苦手な古典と英語をマークしときゃなんとかなるぜ！さてもう一枚は……

終業試験

実技

判断力 32点

コンビネーション 35点

勝利点 20点

合計 87点

合格

よし、こっちも合格だ！実技試験の採点内容は、判断力はその名の通りトレーナーとの判断力、コンビネーションもそのまま、トレーナーとポケモンのコンビネーションの高さを現す。この二つは各40点満点である。採点基準は不明で、先生はどんな考えで点数を付けているか分からない。そして勝利点、勝てば20点、負ければ0点、引き分けなら10点、合計100点満点で、75点以上とった者が合格となる。という訳で87点

「よっしゃあ！やったぜワニノコ！」

『ワニイ！』

ワニノコが嬉しそうに飛び付いてきた。そのままオレはイス事転倒する。全く、元気過ぎるのも考えものだよ

「イツキ、行儀よく食べなさいよね。」

と母さんの一言、この状況は無茶だって……

翌日

オレは朝早く目覚めた。ワニノコはまだ爆睡している。今日、オレは早速旅立とうとしている。ユウイチ、サクラも試験に合格して、一緒に旅立つ事になっている。忘れ物は無いな……カバンを開いてそれを確認してからオレは1階に降りた。

「イツキ、早いわね」

台所にいた母さんが言った。

「おう、なんせ今日は旅立ちの日だからね」

と言っ。

「すぐ出発するの？」

「うん、ユウイチ達を待たせてるから……」

「そっか、なら早く座りなさい。朝ごはんにするわよ」

母さんが言う。オレはその言葉に従ってオレは席に座る。こっちは朝ごはんを食べるのも当分無くなるんだな……。そう思つと少し寂しくなつた。

という訳で、みんなと合流してワカバタウンからヨシノシティの道を歩いてる。いつもと変わらない会話をしている。

「イツキ、ここから別行動にしようぜ」

丁度分かれ道になっているところでユウイチが言った。

「なんだよ急に？」

オレはユウイチに向かって言う。

「オレ達はこれからポケモンリーグを目指すライバルだからな！」

緒にちんたらやってちゃダメだと思っただ」

ユウイチが言った。確かにその通りだな。

「そうだな！んじゃオレはあっちに行くぜ！」

オレはヨシノシティ方面を指差す。

「それじゃオレはあっちだな！」

ユウイチはフスベ方面を指差した。

「それじゃ私はあっち！」

と言ってサクラが指差したのは……

「オレと同じかよ！」

ユウイチが驚いたように言った。

「だってユウイチを一人にしといたら、何をしでかすか分からないからね」

とサクラはユウイチをからかうように言う。

「分かったよ。んじやないツキ、行くぞサクラ」

「まったね」

「ああ、二人共元気だな！」

とそれぞれそう言ってからそれぞれの道に別れていく。さあ、ここからオレの冒険が始まるんだ。ユウイチとサクラとは当分会えなくなるのは寂しいけど・・・なんかこう好奇心を刺激されるみたいでワクワクしてくるな！よし！まずはヨシノシテイだ！

## 出発（後書き）

### 次回予告

イッキ「ユウイチ達と別れたオレは新たな出会いを経験する。その中で事件が発生する！次回、ポケットモンスターACEとSECON D SEASON」  
新たな出会い」  
次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ワニノコ「ワニィ！」

新たなる出会い（前書き）

今回は新キャラ登場！

イッキ「マジ!?!」

うん、名前はまだ分からないけどね。ただ、スランプが酷い、文章みりゃ分かるけど酷いことになってる。

イッキ「しっかり頼むぜ」

という訳で始まります

## 新たなる出会い

オレはヨシノシティに向けていつも通りの歩調で歩いていた。ワニノコはボールから出て、オレの隣を歩いている。オレのワニノコは基本ジーツとしているのが嫌いどころやって時々出してやらないと後で機嫌が悪い。さらにこんなに心地よい天気だ。出してやらない方がトレーナーとしておかし。

「ワニノコ、気持ちがいいな」

とオレはワニノコの方を見ずに言う。

『ワニツ！』

『パオツ！』

ワニノコが元気よく答えた。そうか気持ちいいか……『パオツ！』？オレは直ぐ様ワニノコを見る。あ！

『ワ、ワニ！？』

『パ、パオ！？』

「ゴマゾウじゃんか！」

オレは驚きの声を上げる。ワニノコと一緒にゴマゾウが歩いていた。確かゴマゾウはここに少しだけ生息している。ここでは珍しいポケモンだ。タイプは地面だ。長い旅になるだろうし、仲間は多い方がいいよな……。それにワニノコも一人じゃ寂しいだろうし……。



よ〜し早速ゲットだ！オレは素早くリュックから未使用のモンスターボールを取り出した。ワニノコとなにやら話しているゴマゾウはそれに気付いていない。

「行け！モンスターボール！」

オレはゴマゾウに向かってモンスターボールを投げた。しかしそれは検討違いの方向に飛んでいく。

「アチャア」

オレは顔を抑えたながら言った。ワニノコとゴマゾウもそれを呆然とした様子で見ている。

「ん？」

投げたボールは木に激突して撥ねかえった。そしてそれは……

「痛っ！」

オレの頭に当たってさらにバウンドする。

『ワニヤニヤニヤニヤ！』

『パオオオン！』

オレの目の前にいる2匹のポケモンは笑い出した。畜生……覚  
えてるよ……

「ワニ？」

ワニノコが何かに気付いたのか声を出した。ワニノコは空を見つめる。あ！さっきのモンスターボールが落ちてきたんだ。それは丁度、ゴマゾウに当たる。ボールにゴマゾウが飲み込まれて、ボールはすぐに閉じた。それからボールは左右に揺れてしばらくしたら止まる。中央のマークがついたと思ったら、直ぐに消えた。これは……

「……………」

『……………』

オレとワニノコは呆然としている。オレはしばらくしてからボールを拾う。そして

「とにかくゴマゾウ、ゲットだぜ！」

『ワニ……………』

ワニノコ、そんな呆れた目でオレを見ないでくれ……

ヨシノシテイポケモンセンター

何がともあれポケモンセンターに到着！まずはポケモン達を預けないとな！オレは受け付けの隣に置いてある、専用のトレー？にベルトに装着されているボールを取り出しセットする。そしてそれを受け付けのジョーイさんに渡す。ジョーイさん、ポケモン専門の医者でポケモンセンターを管理している。そして最も気になるのはその変な髪型！なんだあの髪型は！まあそんな事言ったらさ、同じワカバタウン出身のゴールド先輩の前髪のアレとか、クリス先輩の髪型とか、突っ込んでたらキリが無いな。まあいい、話を戻そう。

「よろしくお願いします」

「はい、分かりました」

オレがそう言うとジョーイさんがそれを手に持って隣の部屋に運んでいった。よし、後は部屋をとってから飯だな！オレは部屋の受け付けに走っていった。

食堂で昼食を取ったオレはジョーイさんから部屋の鍵とワニノコ達を受け取って、自室に向かっていた。

「え〜と205号室か……」

オレはその鍵の番号を見ながら2階に続く階段を登っていく。

「危ない！」

へ？突然上の方から聞こえた声にオレは上を向く、するとオレの視界一杯をカバンでうまった。それに直撃、オレはバランスを崩してそのまま……

「あだ！あだ！」

ケツから階段を落ちていく。うう、ケツが痛い……

「あわわわ、ちょっと！大丈夫！？」

カバンを落としたと思われる女の子が降りてきた。ポニーテールで、さっきの口調からも感じたが、お転婆な印象を受ける。

「なんとか……」

オレはその子の言葉に答えながらも立ち上がる。うう、ケツが痛い……

「ごめんね」

か、軽いなあ……

「まあ、ケガも無かったしいさ」

そしてオレも甘いな

ドゴーン

な！なんだ今の音！？

「キヤッ！」

「うおっ！」

音に続いて揺れまで発生した。それから電気も消える。一体……何があつたんだ？こんな時はどうすればいい？確かユウイチは分からない事があつたら足を使つて自分で調べろつて言つていたな……先生とかはこんな時はジツとしてろつて言つてた気がするけどな……ちよつと、調べてみるか……音が聞こえた方向は……確か外の方から……外から回つてみるか！オレは走つて正面玄関に向かう。

「ちよつとアンタ！なにつもりよ！？」

さっきの女の子がオレのやろうとした事を察したのか声を掛けてくる。オレはそれを無視して突つ走る。嫌な予感がするな……この嫌な予感的中しないといいんだけどな……

## 新たなる出会い（後書き）

### 次回予告

イツキ

「事件の匂いを感じたオレはポケモンセンターの外に向かう。そしてそこでオレが見たものとは！？次回！ポケットモンスターACE（SECOND SEASON）『じゃじゃ馬娘！？』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ゴマゾウ『パオーン』

じゃじゃ馬娘!?(前書き)

タイトル・・・関係あるかなあ・・・

じゃじゃ馬娘!?

オレはポケモンセンターの正面から抜け出して、裏の方に回った。急に消えた電気、そしてあの揺れ、冷静に考えてポケモンセンターに攻撃があつたって考えれる。誰が攻撃したか？オレが知る限りではこんなテロまがいな事をする奴らなんて……ん？話声が聞こえるぞ。オレは置いてあつた、木箱の裏に隠れる。それから少し顔をだして現場を見る。！黒い服装の男が二人、胸にはRの文字、間違いない！ロケット団だ！ジョーイさんも捕まってる……しばらく様子を探ってみるか……

「よし、あらかたポケモンを奪つたな？」

「当然だ！預かつてる途中のポケモンは全部奪つてやったぜ」

な!?

「これだけいれば、金にもなるし、実験にも使えるハズだ」

実験？まさか実験って！

「電波でポケモンを操ろうなんて、すごい事考えるぜ」

やっぱり！あの凶暴化電波の実験に使うつもりなのか！助けないと！トレーナーとパートナーが離れ離れになるのは辛いと思うし……なにより……この前戦つた、あのイシツブテのコラッタ……あんな風にポケモンがされそうなのを黙ってみてられるか！しかしどうする？正面から行くだけじゃマサラの時の二の舞になりかねないな。作戦があるとしたら、一人が囷になつてもう一人がそのス



キに反対側からポケモンを救出、更に両サイドから袋叩きつて作戦はあるけど・・・2人いないしこの作戦は実行は出来ない！何か他の作戦は無いか！

「なんて酷い事を」

ん？つておお！さっきの女の子じゃないか！なんでこんなところにいるんだよ！

「なんでお前がこんなところに」

たとえ初対面でも同じ年ぐらいなら普段通りの口調、これがオレ流！

「あんたの事が心ば・・・じゃなくて、嫌な予感がしたのよ。だから来てみたら案の定酷い事になってたの！別にあんたの事が心配だった訳じゃないんだからね」

・・・うん、いろいろ突っ込みを入れたいな・・・とにかく聞きたいのは・・・いつからそこにいたんだ！ま、そんな事はいつか・・・

「どっつする？」

女の子がオレに尋ねてくる。

「んなもんやるしかないだろ！オレが囹になるから、その間に後ろからポケモン達を奪回！頼むぜ、え〜と・・・」

「コノハ、ヨシノシティのコノハよ」

女の子、じゃなくてコトハが言った。そっか！

「頼むぜコトハ！」

「当然よ！」

そうと言ってコトハは走っていった。さて、まずはよじごじといきますか！

「頼むぜ、ワニノコ、ゴマゾウ！」

オレがボールを投げると、ワニノコとゴマゾウが現れた。

『ワニッ！』

『パオーン！』

2匹は力強く鳴き声を上げる。よし、いつでもいけるな！

「なんだ！」

ロケット団員の一人が言った。先制攻撃だ！

「ワニノコ、水鉄砲だ！」

『ワニー！』

「なっ！ぐおっ！」

ワニノコはオレの指示で水鉄砲を放った。それをロケット団員の

人は直撃を受けた。それで吹っ飛び、ロケット団員の一人は気を失う。よし！奇襲成功だ！

「くそっ！不届き者か！蹴散らしてやる！」

そう言うと、男はベトベターとヤミカラスを繰り出してきた。実力は多分あっちの方が上だろうな……。なら！時間を稼ぐだけだ！

「不届き者はそっちだっつーの！ワニノコ、ヤミカラスに怖い顔、ゴマゾウはベトベターに転がる攻撃だ！」

オレの指示に従い、ワニノコ達はそれぞれ攻撃する。ヤミカラスはワニノコに脅えて動けなくなり、ベトベターには、ゴマゾウの転がるが炸裂する。よしっしゃ！上手くいった！案外いけるんじゃないか！

「ちい、こざかしい小僧が！ベトベター、ヘドロ攻撃、ヤミカラスは鋼の翼！ゴマゾウを潰せ！」

ゴマゾウに狙いを絞ってきたか！だが！

「ワニノコ、突っ込んでヘドロ攻撃を水鉄砲で相殺！ゴマゾウはヤミカラスの攻撃を避ける！」

『ワニッ！』

『パオッ！』

『ベトッ！っっ』

「カア！？」

よし、みんな上手くやってくれたな！ワニノコは賭けだったけど、ゴマゾウは完璧だな！さっきのワニノコの怖い顔で減速してたんだ！そんなもんには当たらないぜ！

「ええい、ベトベター嫌な音！ヤミカラスは高速移動から、ワニノコに翼でうつだ！」

「ワニノコ、嫌な音を吠えるでかき消すんだ！ゴマゾウは……」  
くっ！指示が間に合わない！？

『ワニヤアアアア！』

ワニノコがヤミガラスの攻撃に吹っ飛ばされてしまう。

「ワニノコ！」

「よそ見るヒマは無いぞ！ベトベター、ヤミカラスやれ！」

『ベトベター』

『カアー！』

2匹のポケモンが同時にゴマゾウに向かってくる。まだまだ！まだこっちは切札が残ってる！

「ゴマゾウ、ヤミカラスに氷の礫だ！」

『パオー！』

ゴマゾウの周りに細かい氷の礫が出来上がり、それはヤミカラスに向かっていく。

『カア！？』

『なんだと！』

ヤミカラスはその直撃を受けて突進を止める。効果は抜群だしな！そのスキにベトベターがゴマゾウに迫っていた。でも大丈夫だ。

『ワニヤアアア』

吹っ飛ばされたワニノコの水鉄砲による攻撃、不意をつかれたベトベターはそれに堪らずにダウンした。後はヤミカラスだけ！次で決めてやる！

『ゴマゾウ、ヤミカラスに突進だ！』

『ヤミカラス、翼でうつだ！仕留めろ！』

『パオオオオ！』

『カアアアア！』

2匹のポケモンがもの凄い勢いで激突する。どうなったんだ！？

『カ、カア……』

ヤミカラスは崩れて地面に伏した。

「な、なんだと……」

男は膝を着いた。よっしゃあこの勝負……

「コラッタ！必殺前歯！」

！？

『パオツ！』

なっ、どこから！？ゴマゾウはコラッタの一撃を受けたが、直ぐ様  
高速スピンを使って振り払った。

「一人だと思ったら大間違いだ……」

もう1人のロケット団員！？目を覚ましたのか！

「ふふふ、形成逆転だな！」

ちよっ！さっきのロケット団員！なんだよこの変わり身の速さは……

「次で終わりだ！」

くっ……こちらには殆ど力が残ってない……ち、畜生……

「リオル、電光石化からはっけい！」

！

『はぁ！』

何だ？この心に直接伝わるような声は？コラッタはリオルのはっけいを受けて吹っ飛んだ。コラッタは目を回す。つ、強い！

「な、なにぃ……」

今のリオル……まさか！

「大丈夫だった？」

「助かったぜ、コノハ！」

オレは助けてくれた女の子の名前を呼ぶ。多分ポケモンのボールを奪回した後すぐに助けてくれたんだ……ホントに助かったぜ

「へへへ、おつと後はリオル、あの二人に電光石化からはっけい！」

「げっ！」

「なっ！」

リオルの一撃は二人に決まる。やる事が容赦ないなあ……オレはボールに2匹を戻した。2匹ともすぐにジョーイさんに預けてやるからな。

「よくやったねリオル、ゆっくり休んでて」

コノハもリオルを戻す。

「イヤー、あんた凄いよ。え〜と・・・」

そついや自己紹介してなかったな。

「オレはイツキ、ワカバタウンのイツキだ！」

オレはさっきコノハみたいに名乗った。



じゃじゃ馬娘!? (後書き)

次回予告

イツキ「キキヨウに向かつて旅立ったオレとコノハ、道中バトルをガンガン挑まれ、気付いたら夜になってしまった!」

コノハ「え〜、わたし野宿なんてやだよ!」

イツキ「我慢するしかあるまい!次回、ポケットモンスターACE  
〜SECOND SEASON〜『最悪なキャンプ』」

コノハ「次回もポケモンゲットだぜ!」

リオル「……………」

イツキ「何か言おうよ……………」

## 最悪な野宿（前書き）

調子が最悪に悪いっす・・・書き直しがこのはなしに入るかも・・・  
てか話自体が変わるかも・・・

## 最悪な野宿

「オタチ、避けてから体当たりで応戦だ！」

オタチはゴマゾウの突進を軽々と避けた。そして反撃の体当たりを叩きこんでこよつとする。

「丸くなるだ！」

『パオ』

ゴマゾウは丸くなり、体当たりの威力を最小限に抑える。よし、反撃だ！

「転がる攻撃！」

丸くなっていたゴマゾウはそのまま、オタチに向かっていく。

「避けてからもう一度体当たり！」

オタチは軽いフットワークで転がるを回避してきた。けどどな！

「急旋回をするんだ！」

『パオ』

ゴマゾウは地面にカーブを描きながら旋回する。その時に泥が沢山跳ねた。それがオタチに直撃してバランスを崩した。泥かけ……その技と同じ作用をした。これがオレの狙いだ！バランスを崩し、

スキだらけのオタチにゴマゾウは転がるで向かっていく。

「行っけえええ！」

『パオー！』

『キー！？』

「オタチ！」

転がるは長時間続けば続くほど威力が上がる技、丸くなるも使って更に威力も上昇している。その直撃を受けたオタチは倒れた。よっしやあ！これで6連勝！絶好調だぜ！

「やったぜゴマゾウ！」

『パオ！』

ゴマゾウは嬉しそうに鳴く。それを見るとオレはゴマゾウをボールに戻した。よく頑張ったな

「畜生……」

倒した男の子がそう言いつつもしやがみ込む。

「下がれ、次はオレの番だ！」

そう言って別の男の子が乱入してきた。これで何回バトルをしたんだ？オレもバトルは大好きだけどここまでやると流石にな……っかこの道路のトレーナーは戦闘民族か！？

「コノハ、交代だ！」

「OK……」

コノハが疲れ果てた様子で言った。え？なんでコノハと一緒にいるかって？あのロケット団との戦いの後ポケモン達を救出したジョーイさんに預けてから一緒に夕飯を食ってから各自自分の部屋に戻った。それで今日の朝、出発する時に同じタイミングでアイツも出発して同じ道を進んでるんだ。で「なんでついてくるんだよ」って聞いたら、「それは自意識過剰！わたしが行きたい所に偶々あんたがいるだけよ！」って言った。とか言いつつもなんだかんだと一緒に行動してるオレ達である。

「のわっ！ニヨロモ！」

リオルのはっけいが見事に炸裂してニヨロモはダウンした。流石はコノハ、こんなに短時間で勝負を決めるなんてな！

「今度はオレの番だ！」

そう言ってまた別のトレーナーが前に出てくる。こら！オレ達は何戦やりゃあいいんだ！

とまあ結局あれから何回もバトルをして現在時刻は午後7時35分、ポケギアで確認するとキキョウシテイまでまだ結構な距離がある・・・仕方ないな・・・

「ここで野宿だな・・・」

オレはイヤそうな顔で呟く畜生！早速野宿する事になるなんて考えても無かったぜ。

「えー！野宿うー、やだあ！」

という奇声上がる。勿論それはコノハだ。

「仕方ないだろ？適当にちゃちゃっと飯作って、食って寝るぞ」

とオレはなだめるように言った。コノハはそれに対して納得してなさそうに頷く。とにかくやる事は・・・

「オレが適当に薪を取ってくるからさ、お前はポケモン達と遊んでよ。すぐに戻ってくるからさ」

「ん、りょうかい」

コノハがそう言うのを確認するとオレはワニノコとゴマゾウをボールから出し、それから薪を求めて走りだした。

こんなもんかな？腕一杯に薪変わりの枝を持ってオレはコノハの元に戻った。

「あ、おかえり」

とコノハが言う。

「ああ」

とだけオレは答えて薪を適当に焚火が出来るように置いた。後は・  
・

「コノハ、炎技使えるポケモンいない？」

コノハにオレは尋ねた。火をつけたいからな。

「いるよ。おいでポニータ」

コノハの言葉を聞いてワニノコ達と遊んでいたポニータがオレ達のもとに歩いてきた。

「ポニータ、あの焚火に火の粉をお願い」

コノハの指示でポニータは火の粉を薪、もとい沢山の枝に火を付ける。火はたちまち大きくなり立派な焚火となった。これでよしっ！

「ありがとうポニータ」

うん、コノハって普段は勝気で少しお転婆ってかんじがするんだけど、こう見ると女の子らしく可愛いんだけどなあ……ってオレは何を考えてるんだ！

「どうしたのイッキ」

「ん、んにゃ、なんでもない！」

オレは焦ってコノハの問いに答える。ボーとしていたな……何を考えていたか悟られなかったよな？

「ふん、それじゃ夕飯作るからちょっと待ってて」

へ？

「マジ？」

「うん、薪をイッキに持ってきて貰ったんだから夕飯ぐらい作らないとバチが当たっちゃいわ。イッキは少し休んでて」

とコノハ、そうだな……オレは鞆を枕にするようにして転がる。  
……寝るか……



「ほら、イツキおきなさい！夕ご飯できたよ！」

怒鳴るような声が聞こえオレは目を覚ました。

「おはよ……」

オレは目をかきながら言う。

「すぐ夕飯にするよ。とにかく座って」

オレはコノハの言葉に従い、適当な岩を持ってきて焚火の前に座る。焚火の上には鍋が掛けてある。スープかな……

オレは中を覗いて完全に言葉を失った。スープの色が尋常ではない！紫色って何をしたらこうなるんだ！色々間違えすぎだ！コノハはそれを気にせずオレの鞆の中に入れてある携帯用の器にいれる。絶対食べる気がしない……

「どうしたの食べないの？」

とコノハ、あの……この毒物をオレに食えつてののか！？

「いや、それは……」

異臭が漂い余計食欲を奪っていく。

『ワニイ  
』

そんなオレの元にワニノコがかけよってくる。オレの膝の上に乗る。その手にはしっかりとスプーンが握られている。オレの鞆から勝手に出したんだな……

『ワニワニワー！』

と手を合わせた後、スプーンでその得体のしれないものを口に運ぶ……ちよっ！ワニノコ！

『ワニヤア！？』

「ワニノコ！？」

ワニノコは悲鳴を上げて絶め……じゃなくて気を失った。しゃ、しゃれにならねえ……

「これは……」

「食べないほうがいい……」

オレは首を横に振りながら言う。ワニノコが……このせいでワニノコが……

「そ、そうね」

コノハが冷や汗を流しながら言う。これからはコノハには料理は任

せないでおこう……オレはしみじみとそう思った。

という訳で火の始末もして、オレ達二人はそれぞれの寝袋に入った。ろくに食事もとれなかったので腹が減っている。この空腹を誤魔化そうとオレは口を開く。

「コノハ」

「ん？」

「お前、あの料理に何をした？」

気になる事を聞いた。とにかく思いついたのがこれだ。他に思いついても恨み事にしかならないだろう。

「うーんと、最初は順調だったんだけど……ちよつと砂糖と塩を間違えちゃって……だから同じだけ砂糖をいれて誤魔化そうと……」

それだ！でもそれだけなら……

「それと新たな味に挑戦したくなったから色々スパイスを……」

「

それが明らかに原因だ……

「寝よう・・・おやすみ」

「うん・・・おやすみ」

今の話で余計疲れた・・・オレはコノハの言葉を切るように言う。  
コノハもそれに頷いた。にしても・・・腹減ったなあ・・・

## 最悪な野宿（後書き）

### 次回予告

イツキ「キキヨウシティに到着したオレはさっそく初めてのジム戦に挑戦する。」

コノハ「相手は飛行タイプよ、大丈夫なの!？」

イツキ「大丈夫、何とかなる!つてかする!」

コノハ「はたしてイツキは激闘を制する事は出来るのか?」

イツキ「次回、ポケットモンスターACEとSECOND SEA SONの初めてのジム戦!」次回もポケモン、ゲットだぜ!」

ワニノコ「ワニイ!」

## 初めてのジム戦（前書き）

とにかく頑張りました。出来のほうは2の次ですが……

## 始めてのジム戦

朝起きてご飯が用意されていない悲しさ……。今日はそれをしみてしみと思い知った……。空腹により目を覚ましたオレは直ぐ様寝袋から出て自分の鞆をあさる。え〜とどこに入れたかな……。あった！ダイエツトの友、カロリーパートナー、これ1箱に3つ袋が入っていて1袋で1食分のカロリーが取れる。味はチョコレートやフルーツとバリエーションが豊富だ。ちなみにオレはフルーツ派だ。そしてこれもフルーツ味！オレはその袋を開けてそれをかじる……。なんか寂しくなってきた……。

あれから半日あるいてついにキキョウシティに到着！いやあ、長かった。昨日は最悪の日だったな。

「んじゃ、ポケモンセンターに行くか」

「そうね」

まあとりあえずはポケモンセンターだな。そうでもしんどどうにもならん。オレ達はポケモンセンターに向かって歩き出した。

ポケモンセンター 食堂

ふいふ、食った食った！ポケモンセンターに到着してすぐにオレは部屋を借りて速攻シャワーを浴びた。その後速攻で食堂に向かい昼飯をすませ現在にいたる。朝ろくに食べれなかった分しっかりお腹に入れて良かったよ。

「今日はどうするの？」

とオレの席の目の前でソバをすすりながらコノハが聞いてくる。コイツもよっぽど腹が減ってたんだなと思う。

「もちろんジムに行くぜ。部屋でゴロゴロしてても暇なだけだし余っている時間は有意義に使うさ」

オレはいつも通りの口調で答えた。

「わたしもいくよ、わたしも次にジム戦したいし……」

とコノハ



「そっか、なら早速行こうぜ！」

オレは空になった食器を持って立ち上がる。よし、さっさとポケモンをジョーイさんから受け取って行くぞ！やってやるぜ！

「ちょっと待ってよ。まだ食べてる途中なんだからね」

ふう、こんな風に意気込んでるのに水を刺されるとなあ……

「たのもー！」

オレはジムの扉を開きつつも大声で叫ぶ。ここがジムか……殺風景な場所だな……中央にバトルフィールドが1つあるだけか……

「やあ、君達は挑戦者だね？」

奥から少し大人びた声が聞こえてきた。そこには着物を着た男の人が立っている。あの人ジムリーダーのハヤトさんか……ジム戦、チャレンジャーのトレーナーがジムリーダーと呼ばれるそれぞれ

れのポケモンのタイプのエキスパートとジムバッチを賭けてバトルをするものだ。ジムバッチは8つ集めればポケモンリーグに参加する事が出来る。あの大きな舞台で最強の称号を賭けてバトルする。くうく考えただけでもわくわくしてくるぜ！ちなみにハヤトさんは飛行タイプのエキスパートだ。

「はい」

オレはそれに対して頷く。

「名前は？」

「イツキです」

「コノハです」

名前を尋ねられたのでオレ達はそれぞれ名乗った。

「イツキくんはコノハちゃんか。それじゃ早速始めようか。ちょっと待っててくれ」

ハヤトさんはそう言った後、自分の傍にあるレバーを引く。

グオングオングオングオン

な、なんだ！？急に室内が明るくなり始める。あ！天井が開いていくぞ！そうか、あのレバーは天井を開くレバーだったのか……飛行タイプの使い手らしいな……

「どっちからやる？」

「オレからやります」

ハヤトさんの言葉にオレは答えてバトルフィールドに入る。

「分かったよ。ルールは2対2のシングルバトル！先に2匹戦闘不能した方の勝ちだ。いいかい？」

「はい！」

オレはハヤトさんの言葉に力強く頷く。

「それでは試合を始めます。よろしいですね？」

「おう！」

「ああ！」

さつきまでバトルフィールドの中央で黙っていた審判が大声でオレ達に訪ねてくる。それに対してオレとハヤトさんはそれぞれ大声で答える。

「それでは試合開始！」

「行くぞー！ゴマゾウ！」

「頼むぞ、ポップ！」

審判の掛け声を聞いたオレはすぐにベルトに装着されているゴマゾウのボールを取り投げる。それから元気そうにゴマゾウが現れた。

それに対してハヤトさんはポツポを繰り出してきた。凄い勇ましい雰囲気だ。ああいうのを勇猛果敢って言うんだな。とりあえず！

「行くぞゴマゾウ！ 転がる攻撃だ！」

先手必勝だ！ 行くぜ！

「ポツポ、上昇しろ」

ハヤトさんがそう指示するとポツポは上昇して軽々と転がるを避ける。飛行タイプだからな……。空戦能力は高いか……

「そのまま風おこし！」

『ポピー！』

もの凄い風がゴマゾウを襲ってくる。ゴマゾウはそれに吹き飛ばされないように踏ん張っている。くっ！ 上手い！

「今だ！ 電光石化！」

ポツポは目にも止まらぬスピードでゴマゾウに迫ってくる。風に飛ばされないように踏ん張るゴマゾウは対処どころでは無い。スキだらこだ。不味い！

『ポー！』

『パオツ！？』

「更に泥かけ！ そして急速離脱だ！」

「ゴマゾウ！」

電光石化がゴマゾウに炸裂した。さらにポツポはハヤトさんの指示で容赦なく泥かけを決めてきた。くっ！強い！

「大丈夫か？ゴマゾウ」

『パオ！』

まだまだいけるみたいだな。けどどうする！飛行能力が無いゴマゾウじゃ空中戦は出来ない。そして飛べる事とスピードを生かしたヒットアンドウェイ、コウのニューラよりやっかいだ！これは不味いぞ……

「もうお手上げかい？」

ハヤトさんが聞いてくる。そんなの！

「まだまだあ！」

「ならば行くぞ！ポツポ、電光石化！」

再びポツポが高速で迫ってくる。そのスピードに追いつくには！

「氷の礫だ！」

『パオー！』

ゴマゾウの回りに細かい氷の礫が現れたそしてそれは高速でポツポ

に向かっていく。あたれ！

「くっ！ポツポ、避けるんだ！」

「ポツ」

ポツポはギリギリでその攻撃を回避してきた。今のを避けたのか！  
？でも回避で精一杯な以上、これは避けられないハズだ！

「突進だ！」

ゴマゾウはジャンプしてポツポに突進していく。

「避ける！ポツポ！」

「ポピッ！？」

「パオツ！」

反応が間に合わずにポツポに突進が炸裂した。ポツポは吹っ飛ぶがすぐに体制を建て直す。しかしダメージは少なくないみたいだ。そりゃ当然だよな。ゴマゾウの攻撃は一発一発が重いから一発決まれば致命傷にだってなるんだ。

「やるな！だが、次で決めさせてもらっぞ」

！？ハツタリだ！さっき数発攻撃を貰ったけど、あれぐらいの攻撃力じゃゴマゾウは倒せないハズだ！

「行くぞ！ブレイブバードだ！」

！？ブレイブバードだって！ブレイブバードは飛行タイプの中でもかなりの大技……流石はジムリーダーだぜ……だがな……

『パオー！』

「行くぞ！真正面から受け止めてやる！突進だ！」

ゴマゾウはブレイブバードで突進してくるポツポに突進していく。

「行つけえええ！」

「これで決まりだ！」

2匹はもの凄い勢いで激突した。砂煙がたちよく見えない。どうなつたんだ！？

「……」

「……」

暫く静寂が辺りを支配する。砂煙が晴れてきた。あ、あれは！

「ゴマゾウー！」

ポツポが地面にはいつくばりながら目を回していて、ゴマゾウが立っている。よし！まずは1しよ……

『パオツ……』

あ！・・・ゴマゾウはその場で倒れた。

「両者戦闘不能！」

審判がコールをかけた。くっ、やっぱり強い・・・

「ゴマゾウ、よく頑張ったな。後は休んでくれ」

オレはゴマゾウをボールに戻した。

「やるな、だが勝負はこれからだ！ピジョン！」

ハヤトさんは続けてピジョンを繰り出してきた。ポッポが進化したポケモンか・・・

「ワニノコ、君に決めた！」

オレはそれに対してワニノコを出す。てかオレは後ワニノコしか持つてないし・・・だけど相手がどんなポケモンであってもな・・・

「試合開始！」

審判のコールがかかる。この勝負、勝つのはオレ達だ！



## 初めてのジム戦（後書き）

### 次回予告

イッキ「ゴマゾウを倒されたオレは残るワニノコと共にハヤトさんのピジョンに挑む」

コノハ「気をつけてイッキ！スピードなんかもさっきのポツポとは段違いよ！」

イッキ「畜生！負けるなワニノコ、お前の力を見せてやれ！」

コノハ「はたして勝負の結末はいかに？次回ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEASON ～ 『決着！イッキVSハヤト』  
次回もポケモン、ゲットだぜ！」

リオル『ワツニ』

コノハ「リオル、悪乗りし過ぎ……」

決着！イツキVSハヤト（前書き）

なんとか書けたバトル……この先が不安です。

決着！イツキVSハヤト

「行くぜワニノコ！水鉄砲！」

『ワニヤアアア！』

オレの指示でワニノコが一番得意とする技、水鉄砲を放つ。

「甘い！ピジョン、上昇だ！」

『ピジョー！』

ハヤトさんの指示でピジョンは上昇して水鉄砲を避けた。そんな容易に当たる訳ないか……

「今度はこっちから行くぞ！ピジョン、電光石化だ！」

ハヤトさんの指示を受けてピジョンが高速でワニノコに迫ってきた。しかも複雑な軌道を描きながら迫ってくるので、ワニノコはそれを目で追うのに精一杯だ。ちっ！このままじゃ危ないぞ！

「水鉄砲を乱射して弾幕をはれ！」

『ワニッ！ワニッ！ワニッ！』

ワニノコはがむしゃらに水鉄砲を放ちまくった。通常の水鉄砲とは違い、発射時間も短く、連射性が高い。アクアバルカンとでも名付けるべきか？

「そんなものでは！」

ピジョンは水鉄砲をかくぐりワニノコに接近してきた。く、アレを全部避けるなんて！

「メタルクロー！」

「翼でうつ！」

『ワニヤア！』

『ピジヨツ！』

ワニノコの爪とピジョンの翼が真正面から激突したお互いに弾き飛ばされる。互角か……イヤ、こっちが若干押されてる……電光石化で勢いがついていた分あっちの方が威力が上だったか！

「もう一度電光石化から翼でうつだ！」

再びピジョンは高速で迫ってくる。くっ！どう対抗する……

「ワニノコ、地面に向かって水鉄砲！」

『ワニヤア！』

ワニノコは地面に向かって水鉄砲を放ち高くジャンプする。それによりピジョンの翼でうつを容易に避けた。先ずは誤魔化せたな……

「空中ならばこちらの独断上だ！ピジョン、風おこし！」

『ピジョオー!』

ピジョンが翼をふるい強風を起こしたそれによりワニノコは更に高く打ち上げられた。しまった!

「行くぞ!ブレイブバード!」

ピジョンは空中で身動きをとる事が出来ないワニノコに突撃していく。これは……不味い!

『ワニヤアア!』

ワニノコは両手をジタバタさせて逃げようとしてるけどそんな事しても逃れる事は出来ないって……にしてもどうする……何か、何か方法は……そうだ!

「ワニノコ!ピジョンにフルパワーの水鉄砲だ!」

『ワアアアニヤアアア!』

ワニノコはフルパワーで水鉄砲を放つ。水鉄砲は直撃するが勿論ブレイブバード止められるはずもない。ただ減速させる事が出来た。これで十分だ!

「ワニノコ、そのまま落下の勢いを利用するんだ!メタルクロー!」

『ワニッ!』

『ピジョオー!』

2匹のポケモンは空中で勢いよく激突する。お互いに反発しあつてワニノコはまた空中に打ち上げられる。くっ！今回は何とかしのげたが、次は危ないぞ！ピジョンはまた体制を立て直す。お互いにさつき受けたダメージは大きいハズ、次に大技を決めた方が勝ちになる。これは……

「ピジョン、行けるな？もう一度ブレイブバードだ！」

再びピジョンはブレイブバードでワニノコに向かってくる。さつきと同じ戦術を使って耐えられるとは思えない……何か手段はないか……こうなったらイチバチだ！

「ワニノコ、吠えるだ！」

『ワーニャアアアア！』

ジム内全体に広がるワニノコのほうこう。上手くいってくれよ……

『ピジョッ！？』

吠えるに驚きワニノコの目の前でピジョンは急速に減速した。今だ！

「ワニノコ、ピジョンを踏み台にしてやれ！」

『ワニャアアー！』

ワニノコはまず手でピジョンの頭を押さえつけ、腕力でピジョンの上に登る。そしてピジョンを踏み台にしてジャンプをした。それによりピジョンはバランスを崩した。このチャンス、貰った！

「フルパワーの水鉄砲だ！」

『ワニヤアアア！』

ワニノコはフルパワーの水鉄砲を放つ。この距離で放ったんだ！当然バランスを崩したピジョンには避けられないぜ！

『ピジヨオオ！』

「ピジョンー！」

ピジョンの背中に水鉄砲は直撃して悲鳴のような声をあげながら勢いよく落下した。これでどうだ！

『ピジヨオ………』

「ピジョンー！」

ピジョンは再び立ち上がってきた。アレを受けて大丈夫なのか！？

「ピジョン、翼でつつ攻撃だ。確実にワニノコにダメージを与えるんだー！」

来るか！

『ピジヨッー！』

！？どうしたんだ？翼をふってるけど上昇出来てないぞ………そうか！さっきの水鉄砲で翼がかなり重くなって羽ばたく程の浮力を得る事が出来ないんだ！なら、次で決めてやる！

「ワニノコ、そのまま落下の勢いを利用してメタルクロー！」

『ワニヤアア！』

落下中であつたワニノコは最もスピードのせる姿勢になりメタルクローを使い突撃、もとい落下していく。これをピジョンは当然回避出来ずに直撃した。これでどうだ！？

「ピジョン！」

ハヤトさんが叫んだ。ワニノコが落下したせいで大きな砂煙があがつた。どうなつたんだ！？

「あつ！」

オレとハヤトさんは同時に声を上げた。ピジョンとワニノコは目を回していた。あちゃ……かなり無茶させたからな……当然といえば当然か……つて、この勝負は……

「両者戦闘不能！よつてこの勝負、引き分け！」

審判がコールを駆ける。それと同時にオレはワニノコの元に駆け寄りワニノコをそのまま抱きかかえる。

「大丈夫かワニノコ？」

『……………』

返事は無い。完全に眠ってるみたいだな……なんとなく満足そうな



顔をしてるように見える。いいバトルだったからな

「イツキくん、このバトル、引き分けだったがこれを受け取って欲しい」

ピジョンを抱き抱えたハヤトさんがオレのもとに歩いてきてオレにバッチを差し出してくる。なんで……

「受けとれませんよ。この勝負、引き分けだったんですから」

オレは素直に思った事を言う。

「イヤ、私の負けさ、ピジョンとワニノコ、どう考えたって風おこして空中に打ち上げた時点で、飛行能力を持っているこっちに分があったハズだ。なのに君はそれを乗り越えて私のピジョンと見事な空中戦を繰り広げ、引き分けにされるなんて私にとって敗けも同然さ」

「だけど……」

「何も言わなくてもいい、それに挑戦者の実力を測るのがジムリーダーの仕事だからね。ウインドバッチを渡すのに十分な実力があると判断したんだ。いいじゃないか」

「そうだな」

「それならありがたく貰わせてもらいます」

オレはウインドバッチを受け取った。よし、まずは一つ目、ゲットだぜ！

「またバトルしよう」

ハヤトさんは手を差し出してきた。

「勿論です」

オレはそれを力強く握り返した。

「ハヤトさん、次バトルお願い出来ますか？」

見学席に座っていたコノハが立ち上がってハヤトさんに聞く。

「ああ、だけどポケモン達を休ませてからにしてくれ」

「ハイ！分かりました」

コノハはハヤトさんの言葉に頷いた。

で、この後にコノハとハヤトさんとのバトルだったが、ポニータが踏ん張りなんとか勝利を収めた。さあ二人そろって1つ目のバッチをゲット！このままの調子で行くぜ！

## 決着！イツキVSハヤト（後書き）

### 次回予告

イツキ「ギリギリの戦いでハヤトさんとのバトルに勝利したオレ達は好奇心に釣られてアルフの遺跡に訪れた」

コノハ「な、何このポケモン達！？何で突然襲ってくるのよ！」

イツキ「オレが知るか！こうなった以上、何とか乗り切るしかないだろ！」

コノハ「そんなわたし達の前にさらなる驚異が襲いかかる」

イツキ「次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEA SON」  
『古代遺跡での驚異』次回もポケモン、ゲットだけ！」

ゴマゾウ「パオーン！」

## 古代遺跡の驚異(前書き)

少し長めです。キキヨウシテイを後にしたイツキとコノハは、次の目的地に向けて歩いていました。

## 古代遺跡の驚異

ジム戦を終えた次の日、オレとコノハは次の目的地、ヒワダタウンに向けて出発した。結局半日とその半分くらいしかキキョウシティにいなかったな。そう思うなら観光しろって言われるかもしれないけどそんな観光するべきものなんて無いしなあ……え？マダツボミの塔？なにそれ、美味しいのか？まあ冗談はこれぐらいにして、マダツボミの塔、そんな所に行ってもなあって思う。確かに大人になつてから観光しにこればいい場所らしいけど生憎オレはまだまだ子供、そんな修行中の坊さんを見たって何も楽しくないぜ！（全国のお坊さんごめんなさい）という訳で出発した。とにかく目的地はヒワダとキキョウの間にあるつながりの洞窟前のポケモンセンターだ。そこで一晩休んでそれからヒワダに向かって出発する予定だ。とにかく今はその道中、ポケモンバトルも数回やって連戦連勝！う〜ん気分がいいぜ！

「ねえイツキ、あそこなんだろう？」

オレの隣を歩いていたコノハが何かを見つけたのか足を止めて口を開いた。何だ？オレはコノハの視線の先を見る。古い建造物が並んでるな……何かの遺跡か？

「ねえイツキ、見て」

コノハはいつの間にかオレの真横から消えて近くにあった看板の前にいる。いつの間に移動したんだ？もしかしてコノハは現在に生きる忍者なのか！？そうなのか？……さっきから暴走し過ぎな気がしてきた……それにコノハは忍者じゃなくてむしろ殺人料理人……ま、それはいつか……とにかく……オレは走って看板の前に向かう。え

「となになに？この先アルフの遺跡って書いてあるな……アルフの遺跡って確か結構前に発見された遺跡だよな。しかも結構昔に発見された割りにはほとんど何も分かってない謎の場所らしい。確か見学自由なハズ……でも普通は何も分かってないのに見学自由にするのはどうかと思う……とにかく」

「コノハ、行ってみようぜ」

オレはコノハに言う。幸い夜まで時間はあるし、何より興味がある。同じ古い建造物でもお坊さんばつかのマダツボミの塔より好奇心を刺激されるぜ！（全国のお坊さんごめんなさい）

「そうね。行ってみましょ」

コノハはオレの言葉に同意して直ぐ様アルフの遺跡に向かって走りだしていった。ちよっ！アイツ行動速いって！

「待ってくれよ！」

オレはコノハを後ろから追いかける。アイツの方が興味深々だったみたいだな。

アルフの遺跡出口

あれから色々見て回った。中々面白い所で、パズルのような石盤があったり各所にミステリアスな文字が刻まれていたり中々興味深

い場所だった。まあ、全く何の目的でこんなものが置かれているとかはわからなかった訳だけど……コノハはというと近くに設置されているお土産屋にいる。アルフ煎餅（遺跡に刻まれている文字を型どった煎餅）とかいう奴が売っていてコノハはそれを買っているのだ。後は支払いだけみたいだ。さ、それが終わってから出発だな。

プルルルル、プルルルル

オレの不意をつくように突然ポケギアが鳴りだした。電話か……誰だ？オレは通話のボタンを押して電話に出る。

イツキか？元気にしてるか？

この声、ユウイチじゃないか！

「ユウイチか、久しぶりじゃんか！」

とオレは大声で言う。

わたしもいるよ

ユウイチとは別の声が聞こえる。この声はサクラか！

「よう、久しぶり。そっちは元気にやってっか？」

何の冗談だよ。元気じゃなかったら電話なんてしないさ

オレの言葉に対しユウイチが返してくる。スクール時代から変わっていない会話、ホントに二人共変わらないな。なんか安心した。

「で、そっちの調子はどうなんだ？」

オレは二人に尋ねる。

フスベに着いたんだけどね、ちょっとイブキさんが強すぎてさ、今必死に挑戦してるとこ

オレも同じくだ

あっちも苦勞してんだな……

で、そつ…… X \* X

な！？どうしたんだ？突然変な雑音が……

「おい！ユウイチ！サクラ！聞こえてるか！？おい！」

X \* X @

ダメだ！繋がらない！一体何が……何かに電波が妨害されてるのか？

「どうしたのイツキ？」

買い物を終えたコノハがオレに話かけてくる。

「いや、電話してたんだけどな、急に繋がらなくなって……」

「うわあああ！」



なんだ！？今の悲鳴は！遺跡の内部の方から聞こえたよな……

「イツキ、なんか嫌な予感がする」

とコノハ、オレもだ……この遺跡で何か起きてるぞ……とにかく何か行動を起こさないと、何も解決出来ないぞ！

「コノハ！」

「OK！行くよ！」

コノハはもの分かりが良くて助かるぜ！オレ達は遺跡の中に向かって走っていった。

「うわあああ！」

遺跡の中では研究員の人が見たことの無いポケモンに襲われていた。なんだ？あの文字みたいなのポケモンは……ポケモンの周囲に何やらエネルギーが発生する。そしてそれは一斉に研究員の人に放たれた。アレは、目覚めるパワーか！？それは研究員の人に激突する事は無く、地面に直撃した。さほど威力は高く無いみたいだな……でもこのままじゃ危ない！

「ワニノコ、水鉄砲だ！」

オレは指示を出しつつもワニノコをボールから出す。

『ワニヤアアア!』

それに素早く反応し、ワニノコは出た瞬間に水鉄砲で謎のポケモンを攻撃した。その攻撃は見事にそのポケモンに直撃して地面に落ちる。あんまり強くないみたいだな……

「リオル、あの人を助けてきて!」

コノハもオレと同じように指示を出しつつもリオルをボールから出す。リオルはそれに従い素早い動きで研究員の人を抱えて戻ってきた。小柄な体格からはあまり考えられない力強さだな。

「大丈夫ですか?」

コノハが研究員の人に尋ねる。

「ああ、ありがとう」

「何があっただんですか?それにあのポケモンは一体……」

オレは研究員のおじさんに尋ねる。

「ああ、石盤のパズルがあるだろ?それを解いたら突然地面に穴が空いてね。そして床に落ちたかと思っただら突然このポケモン達が壁から出てきて襲いかかってきたんだ」

そんな事が……でも何で急にこのポケモン達は襲ってきたんだ?

「イツキ、呑気に考えてるヒマは無いみたいよ」

コノハの言葉を聞いてオレは前を見る。さっきとは形が違う同じようなポケモンがたくさんいる。コイツはボーとしてるヒマは無さそうだな！

「行くぞコノハ！」

「OK！おじさんは逃げてください！ここはわたし達が！」

「分かった！」

コノハの言葉を聞いて研究員のおじさんは走って出ていった。後は

……

「一体一体は大した事は無いみたいだからオレ達でも十分やれるぜ！コノハ、一気に決めてやろうぜ！」

「OK！」

コノハがさっきから同じような返事ばかりかしてるような気が……ま、いつか！今はそれどころじゃねえしな！

「行くぜワニノコ！」

『ワニッ！』

「こっちもよりオル！」

『いや、ちょっと待て！』

頭に直接リオルの声が聞こえてくる。コノハの話ではリオルは波動とかいう奴を利用してテレパシーを使う事が出来るらしい。何を待たせて……ん？なんだ？石盤が出てきたぞ？突然、謎のポケモンの周りに沢山の石盤が現れる。あれは、石盤パズルじゃないか！それは石盤のパズルのピースそのものだった。あれで何をするつもりなんだ！？

『  
』

突然謎のポケモンと石盤が輝きだした。何が起こってるんだ！沢山あった石盤は3つの塊に分かれた。それが眩い輝きを放つ。な、何が！？

『プシュー』

『ピシー！』

『ギー！』

！オレはそんな鳴き声に反応して目を開く。な！

「そ、そんなバカな！？」

「冗談じゃないわよ！」

二人そろって驚愕の声を上げる。目の前にはさっきの謎のポケモンの他にカブト、オムナイト、プテラの3匹がいるのだ。野生では絶対に存在しないハズのポケモン、それが目の前にいる！これだけで驚愕だ。確かプテラは物凄く獰猛なポケモンだったハズだ。他の化

石ポケモンも含めてこれはかなり危険だぞ……

「コノハ、ワニノコ、リオル、死ぬ気で戦うぞ！そうじゃなくちゃ絶対死ぬ！」

「勿論よ！」

『ワニイイイ！』

『こんな場所で死ぬるか！』

「行くぜ、みんな！」

オレは力強く叫んだ。

## 古代遺跡の驚異（後書き）

### 次回予告

イツキ「化石ポケモン達の圧倒的な力の前にオレ達はかなりの苦戦をしいられる」

コノハ「もう！絶対絶命よ！」

イツキ「そんな時に流星の如く一人の男が現れた！次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『危険な男』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ワニノコ『ワッニー！』

危ない男(前書き)

化石ポケモンの出現で絶対絶命のピンチに陥ったイッキ達は……

## 危ない男

「ワニノコ、水鉄砲連射！」

「リオル、カブトに電光石化からはっけい！」

「ワニイ！」

「うおお！」

オレ達の指示でワニノコは水鉄砲を弾幕を張るように放ち、リオルはその間を通ってカブトに迫っていく。1匹ずつ相手にしてけばなんとかなる。それがオレ達の出した結論だ。カブトやオムナイト、プテラとはワニノコとリオルは相性が良い。それを考えての結論だ。水鉄砲の弾幕でカブトは動く事は出来ない。よし、くられえ！

「ギー！」

プテラ！？プテラはオムナイトをかばうようにリオルに向かって破壊光線を放ってくる。

「リオル、引いて！」

「ちっ！」

リオルは破壊光線の斜線上から電光石化で離脱して元の位置に戻ってくる。ちっ！そう簡単にやらせちゃくれないか！

「ギー！」



『プシュー！』

『プシイ！』

それぞれのポケモンが唸り声を上げて同時に岩雪崩を使ってきた。な、なんつー技を使ってくるんだよ！無数のどこから発生したか分からない岩がオレ達に向かってくる。冗談じゃないぞ！くっ！くっ！3匹で共同して放った技ってだけある。こんなの避けようがない！

「ワニノコ、逃げる！」

「リオルも早く！」

オレとコノハは力一杯叫んだ。くっ！オレも早く逃げないと下敷きにされちまう！オレは背中を向けて走り出す。畜生！速い！雪崩っただけある。このままじゃ追い付かれてしまう！

「イツキ、アレ！」

コノハが前を指指す。出口だ！このままなら逃げ切れる！

「キャツ！」

コノハの声が聞こえた。オレは振り返るとコノハが倒れていた。もしかして転んでしまったのか！不味い！

「コノハーーーー！」

オレは無謀にもコノハの元に向かって走り出す。

『ワニイ！？』

『コノハ、イツキ！』

ワニノコやりオルの声が聞こえてくる。命を賭ける時みたいだな…  
…短い間だったけど共に旅をしたオレの大切な友達のコノハ、それを絶対に死なせるもんか！

「コノハ！」

オレはコノハの盾になるように移動する。

「バカ！何やってんの！」

「お前を置いて行けるか！」

オレは振り向いて後ろを見る。本当にギリギリまで岩雪崩が迫ってきている。オレは覚悟を決めた。

「うおおおおお！ギガインパクトオ！」

！？オレの真横を疾風の如く何が通り過ぎていった。オレはそれを目で追おうと振り向いた。そのポケモン、白と赤色のイタチのようなポケモンはもの凄いパワーで岩雪崩を全て跡形もなく粉碎した。なんてパワーだ……信じられない……

「おいお前ら、大丈夫か！」

オレは前を向くとそこには大柄でどこからともなく危ない雰囲気を出した男の人がいた。

「は、はい」

オレはその気迫に圧倒されつつも頷いた。

「後は下がってな！オレが何とかしてやるぜ！」

その人はさっきのイタチみたいなポケモンの隣まで駆け寄る。

「いくぜザングース！電光石化から気合パンチ！」

ザングースと呼ばれたポケモンが消えた。違う！電光石化って言うてたから速すぎて見えないんだ！ザングースはプテラの真正面に移動し気合パンチを叩き込んだ。プテラは声にならない悲鳴を出して地面に落下していく。

『プシイ！』

『プシューー！』

プテラがやられた事に焦りつつもカブトとオムナイトの2匹はザン

グースに向かつてもの凄い威力の水鉄砲を放った。これって、水鉄砲じゃなくてハイドロポンプか！

「ドラゴンクロオ！」

ザングースが紫色のパワーを宿した片腕を降りハイドロポンプをかき消した。そんな馬鹿な事ってありかよ……

「瓦割り！」

ザングースは目にも止まらぬスピードでカブトに近寄り瓦割りを叩き込んだ。それを受けたカブトは一発でダウンする。

「ザングース、気合パンチ！」

オムナイトはハイドロポンプで攻撃しようとするも、そのヒマを与えられる事が無く気合パンチを入られた。それに堪らずオムナイトは倒れた。この人、強すぎるぞ……倒れたプテラ達が輝きだした。それは姿を縮めていく……あ！石盤に戻った……あれは、なんだっただんだ？

『  
』

「避けるザングース！」

一方まだ戦いは続いていた。沢山の謎のポケモンが、ザングースに対して攻撃を仕掛けてくる。さっきまで攻撃をして来なかったのに今頃なんで……もしかして、石盤をポケモンの姿に実体化させるのに力を使っただけで何もして来なかったのか！

「ちっ！この数は流石に面倒だな……戻れザングース！」

男の人はボールにザングースを戻した。な、何をするつもりなんだ！？

「行くぜ！ミュウツー！」

『ぬおおおお！』

男の人がポケモンをボールから出した。な、なんだこの威圧感は……男の人が出したそのポケモン、凶悪そうな雄叫びを上げて現れる。な、プレッシャーに押し潰されそうだ！

「イツキ……」

コノハも恐怖を感じているのか震えている。な、なんだっていうんだ……

「コイツで終わりだ！スパイラル……サイコバースト！」

『ハアアアアア！』

ミュウツーと呼ばれたポケモンは身体全体を回転させながら強力なエネルギー波を放った。それは身体を高速で回転させたためか拡散して謎のポケモン達に向かっていく。

『  
』

スパイラルサイコバーストが炸裂した。謎のポケモンは一掃される。な、なんてパワーだよ。この人、まるで格が違う！

「よくやったなミュウツー、戻って休んでくれ」

その男の人はミュウツーと呼ばれたポケモンをボールに戻した。

「なんとか静かになったか……お前ら、いますぐここから出るぞ！」

「……」

「聞いているのか！」

「あ、は、はい」

少しの間呆然としていた オレはその言葉に頷いた。

アルフの遺跡管理小屋

遺跡内部から脱出したオレ達はここに案内された。勿論さっきの人も一緒だ。コノハは転んだ時に少し怪我をしたみたいで軽い治療を受けている。まあ治療って言うっても消毒ぐらいだろうけどな

「さつきは助かりました。ありがとうございます」

「いや、当然な事をしただけだ。オレはリヨウマ、警視庁の刑事課の刑事だ」

この人、リヨウマさんって言うのか。それに刑事だったなんて……でも刑事がなんでここに……

「警視庁ってヤマブキシティにありますよね。なんでこんな所に……」

オレは思った事を尋ねる。

「ああ、別件で近くの警察署で話を聞いてな、そこに電話があつて、丁度手が空いていたオレが駆けつけたんだ」

なるほど

「ところで研究員、なんであのポケモン達は襲ってきたんだ？」

リヨウマさんは隣にいた研究員の人に話かける。

「恐らくですが、何かの拍子で封印されていたあのポケモン達の封印が解かれたんでしょう」

？

「それになんの関係が？」

「眠ってるのを起こされて機嫌が悪くなったんでしょう。今のところ」

るそれ以外の仮説は思いつきません」

あ、なるほど

「そうか……なら、ここを研究員以外立ち入り禁止にした方がいいな」

「同感ですね」

研究員のおじさんはリヨウマさんの言葉に頷いた。

「てめえも絶対にこの事を口外は禁止だからな！」

「は、はい」

オレはリヨウマさんの気迫に脅えつつもそれに頷いた。

つながりの洞窟前PC

「疲れたな」

「うん、すっごい疲れた」

なんとかここに到着したオレとコノハ、もうすでに疲れきっている。ポケモンをジョーイさんに預けてから部屋の鍵を借りるそして一直線に部屋へと向かう。よし、ここがオレの部屋だな



「おやすみ、コノハ」

「うん、おやすみ」

コノハの返事を聞いてからオレは自分の部屋に入った。ドアを閉めて鍵をかける。そしてリュックを適当な場所に投げてからベッドにそのままダイブする。あ……意識が……オレはこのまま眠りに落ちていった

## 危ない男（後書き）

### 次回予告

イツキ「アルフの事件で疲れ果てたオレ達は1日休息を取る事になった」

コノハ「ねえ、どこか行こうよお」

イツキ「のんびり出来る所にしろよ」

コノハ「はたして行動派なわたしたちが向かった場所とは？次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『休日』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

リオル『パオーン！』

コノハ「だから悪乗りし過ぎ……」

## 休日（前書き）

今回は休憩の話、出来はあまり良くありません。コノハの意外な所が表せてたらいいなと思います。

## 休日

コンコンコンコン

オレはそんな音を聞いて目を覚ました。うう……まだ眠い……こんな時間にオレの部屋をノックするのってコノハしかいないよなあ……

「今、開ける……」

オレは眠そうに言うとノックは修まった。オレはベットからノコンと出て部屋の鍵を開ける。

「イツキ、おっはよ〜」

……なんだコイツのテンションは……ダメだ、ついていけない……

ボタン！

有無を言わずドアを閉める。

「ちょっと何よその態度！」

コノハは切れて勢いよくドアを開いて部屋の中にズカズカと入ってきた。まあそりゃそうか……

「今日は休むんじゃないの？」

昨日のアルフでの出来事で疲れはてたオレ達は相談して今日1日はゆっくりすることになっている。なのにこんなに早く起こしに来やが

つて……まだ9時だぞ！

「9時は遅いつて」

とコノハ、まあ流石に……つてちょっと待て！

「なんでお前はオレの心が読める！」

オレはコノハに突っ込みを入れる。ユウイチもそうだけど、なんでも人の思ってる事が分かるんだ！？

「別にいいじゃん。それはおいといて、イッキ、どこか行こうよお」

か、軽く流された……つてどこか行こうよつて……

「だから休むんじゃないの？」

さっきと同じ質問をオレはコノハにぶつける。

「だってじつとしてるの我慢出来ないんだもん！」

ああ、そうかい……ま、多分オレが元気だったらオレがこうだっただろうな……

「分かった分かった！行けばいいんだろ？」

と少し嫌そうに言ってみる。

「それじゃあ早く準備して！行くよ！」

ちっ、嫌そうに言っても効果無しか……仕方ないな

「んじゃ、コノハ早く出てっってくれ」

「なんで?」

なんでって……

「着替えれないだろ? まあコノハが見たいって言うなら別にいいんだけど」

とからかうようにコノハに言う。するとみるみる内にコノハの顔が真っ赤になっていった。

「だ、誰が!」

と怒鳴って部屋から出ていった。全く、冗談が通じない奴だなあ

「んじゃ、行こうぜ」

着替えも終えて、コノハが待っている1階に移動したオレは、コノハに向かっていった。

「遅いよ。で、どこに行くつもり？」

とコノハが聞いてくる。そんなの愚問じゃないか……

「釣りに行くに決まってるだろ？ほら、ここら辺は釣りの名所として知られてるんだからさ」

オレはそうコノハの質問に対して答えた。

「もしかして、ううん、やっぱりアンタが持つてるそれって釣りざおよね……」

コノハはオレが右手に持っている釣りざおを指刺して聞く。

「勿論だ。さつきボロの釣りざおって最高だよな。って聞いてきたおじさんが譲ってくれたんだ」

オレはそれにそう答える。

「それはあんまりにもお粗末過ぎるんじゃない？木の枝に釣糸を付けただけのそれは……」

決して間違った表現ではない。むしろそれ以上の表現は思いつかない。

「大丈夫！ほら、選別に釣人ルアーを貰ったから」

釣人ルアー、市販で売っている釣人のようなルアーである。他にもカスミちゃんスペシャルというハナダシテイのジムリーダーカスミ

を象ったルアーもあれば、現在ホウエン地方のチャンピオンであるミクリさんを象った、ミクリ様スペシャルというルアーもある。他にも水タイプの使い手の凄い人を象ったルアーは沢山あるのだが、はつきりいって使う気にはなれないものばかりだ。正直これだって釣人がポケモンに食われるような感じがしてなんか悲しい気持ちになっってくる。

「それは別にいいよ」

いいんだ……

「でもその釣りざおはダメよ！それで釣られるポケモンがかわいそうよー！」

釣糸とルアーは普通の物だからさ……あんまり関係無いと思う……  
ああ、なんでだろう……コノハから凄いメルヘンな空気を感じる……  
…コノハって、どこか天然な奴なんだなあとの時思った。

さて早速やるとするか！オレは釣りざおを振って釣糸をなるべく遠くに飛ばす。『ちゃぽん』という音を立ててルアーが沈む。釣りでいいポイントなんて知らないオレは、適当な場所に座っている。ただ丁度いい日差しにあたりもの凄く心地よい。うん、部屋に閉じ籠って寝てるよりいいな。誘ってくれたコノハに感謝だぜ。



「みんな、楽しそうだね」

コノハが口を開いた。その視線はオレ達の傍で遊んでいる、ワニノコ、ゴマゾウ、リオル、ポニータに向いている。ホントに笑顔でじやれ合っている姿を見ると本当に微笑ましい。ん？突然釣りざおに手応え、これは……

「かかったあ！」

もの凄く強い引きだ。コイツは大物だ！

「頑張つてイツキ！」

コノハのオレに対する声援、うおおおお！やってやるぜ！

「どおりやああ！」

よし！釣れたあ！つて……

「タイヤつて……なんてベタな物を釣つてるのよ……」

そう、オレの釣つたのはタイヤだった。なんでこうなるんだ……

「やっぱりそんな釣りざおを使うからよ。そんなお粗末な釣りざおに釣られたくないって事よ」

やっぱり頭がメルヘンだ……コイツ……ん？そういえばワニノコ達が静かだな……あ！寝てるよ……暖かい太陽のもと心地よさそうにポケモン達は眠っている。ワニノコをリオルとゴマゾウが枕にしている。凄い微笑ましいな……あゝ、こんなの見るとオレも眠くな

つてきたな。オレは隣に座っているコノハを見る。コノハも凄く眠そうに目を擦っている。なんだコイツも眠くなってきたのか……そうだな……今はゆっくり……意識が遠くなってきた。そのままオレは眠りについた。

## 休日（後書き）

### 次回予告

イッキ「1日休んだオレ達は、つながりの洞窟に入った。そこで一つのバトルを目撃する」

コノハ「あの子のガバイト強い！」

イッキ「へっ！相手が強敵なら余計にやる気になるぜ！オレと勝負だ！！」

コノハ「はたしてその少年の正体とは？次回！ポケットモンスター ACEのSECOND SEASON」  
『新たなライバル、アキト登場！』  
次回もポケモンゲットよ！」

リオル「あれ？いつもと違う」

コノハ「ちょっとダメ出しされちゃったから」

リオル「なんだそりゃ」

新たなライバル、アキト登場！（前書き）

タイトル通りです。かなりぐだぐだな感じがします……

## 新たなライバル、アキト登場！

つながりの洞窟

つながりの洞窟……ヒワダとキキョウを繋ぐ余り長くない洞窟である。内部構造はつながりの洞窟前PCのジョーイさんの話では複雑らしく、いろんな所につながっていて色々厄介らしい。しかし、ヒワダシティまで抜けるのは簡単らしく、最初入った道を真っ直ぐ進めば、迷う事無く簡単に進めるらしい。しかし、オレ達は普通では無かった。野生のヌオーを見つけ追いかけてみたり、バトルの音がすれば覗きに行ってみたりと色々やっていると、気が付けばどうしようも無く迷っていた。

「イツキ、どうしてくれるのよ……完全に迷っちゃったじゃない」

とコノハがオレに苦情を言うように言った。おいおい……

「そりゃないぜ、お前もオレと一緒に行動してる時点で問題だぜ。それに迷いたく無かったらオレを止めればよかったんじゃないのか？」

「うう……とにかくアンタが悪いって言ったら悪いの！」

な、なんつー横暴な……とにかく脱出する方法を考えないと……  
そうだな

「出てこい、ゴマゾウ！」

『パオー！』

オレはボールからゴマゾウを出した。

「何をする気？」

「まあ、見てろって」

オレはそうとだけコノハに言ってから、しゃがみこんでゴマゾウに話かける。

「ゴマゾウ、かぎわけるでオレ達の通った道をたどってくれないか？」

『パオ〜』

オレの言葉に軽くゴマゾウは頷く。鼻のいいゴマゾウなら、オレ達の通った道を匂いで辿る事が出来るハズだ。

「なるほど！考えたわねイツキ！」

「オレだってバカじゃないって事だ」

オレはコノハに余裕を持って言った。

「どうしたのイツキ、さっさまでの自信は……」

……コノハの余りにも冷たい視線を感じる。何があったか説明する。オレ達の匂いが途切れた。まあそう言えば簡単だろう。洞窟の中は沢山のポケモンが生息している。更に言えばこの繋がり洞窟には水タイプのウパーやヌオーのようなポケモンも生息している。何が言いたいのか？簡単な話だ。色んなポケモンの匂いが充満している上に濡れたポケモンが垂らしていった水のせいで匂いが消されたりする。こんな状況下では匂いもなんもあつたもんじゃないっー事だ。よって更に迷った。もう最悪である。

「悪い……」

そう言う事しか出来ない。

「全く！アンタを信頼したわたしがバカだったわ！」

！流石に今の一言にはカチンと来たぞ！

「なんだよ！ならお前に何かいい方法があつたのかよ！」

と少し逆ギレみたいな感じにいい返す。

「無いわよ！無いからあんなに途方に暮れてたんじゃない！」

少しケンカの主旨からずれてるような……

「うるさい！ならオレにそうやって怒鳴る資格はない！」

とにかく勢い良く怒鳴り返してやった。

「言っただわ……あれ？」

「ああ！言ったださ！」

コノハの言葉にオレは力強く言い返す。コノハの言葉が途中で途切れたが気にしない。

「ちょっとイツキ静かにして！」

「な、なんだよ急に！」

「いいから黙って！」

「あ、ああ」

コノハの気迫に押されてオレはそのまま黙ってしまふ。いきなりどうしたってんだ？

「聞こえない？」

「何が……」

コノハの言葉に反論するように口を開いた後に耳を澄ませてみる。

「……ドラ……クロー」



「……ゴ……ロン……トン……チだ」

！ポケモンバトル、バトルの音だ！バトルしてる場所には人がいるハズだ！

「よし！行こうぜコノハ！」

「全く、わたしに少しは感謝しなさいよね！」

コノハのその言葉を軽く無視して声が聞こえた方向に向かって走りだした。

「ガバイト、ドラゴンクローだ！」

「ゴローン、メガトンパンチだ！」

紺色のドラゴンのドラゴンクローとゴローンのメガトンパンチが激突した。パワーではゴローンの方が上らしく紺色のドラゴン、ガバイトと呼ばれたポケモンは後退する。さっさから続くバトルをオレとコノハはこの洞窟の広い場所に到着してから暫く見ている。男の子のガバイトがゴローンを押していて今のゴローンの一撃は苦し紛れの一手にしか思えない。ガバイトのスピードとパワーを生かして  
るな……アイツ、強いぞ！

「アンタもよくやったけどここまでだ！ガバイト、砂嵐からかわりだ！」

ガバイトが砂嵐を使うと突然ガバイトの姿が消えた。どこにいったんだ！？

「特性砂隠れよ！特性のアドバンテージを生かしたいいい戦い方ね…」

コノハがそう解説をする。砂隠れか…：…そういえばポケモンリーグでそんな戦術使ってた人がいたっけ？

「どこだ…」

『GRAAA!』

『ゴロ！？』

完全にガバイトを見失っていたゴローンは無防備だった。背後に回られていて、ガバイトの重い一撃を受け、倒れた。おいおい、コイツ、半端なく強いぞ

「ゴ、ゴローン！」

ゴローンのトレーナーであるお兄さんはゴローンに駆け寄っていく。お兄さんはゴローンをボールに戻して立ち上がる。それからさっさの男の子と握手を交して去っていった。

「なあ、さっきから気になってたんだけどアンタ達は何だ？」

男の子がオレ達に気付いてそう聞いてきた。

「もしかして、トレーナーみたいだし、俺とバトルしたいのか？」

となんか嬉しそうに聞いてくる。同い年くらいだからオレと同じ新人トレーナーか？まあそれは勿論！

「違うよ。わたし達は道を……」

「勿論だぜ！」

コノハの言葉を強制的に切り、オレが男の子の言葉に頷いた。へ、トレーナーの性って奴かな？強敵が目の前にいるとバトルがしたいってうずうずしてくるんだ！

「よし！ならやろう！俺はマサラタウンのアキトだ。清々堂々と勝負だ！ガバイト、もう！戦頼むよ」

『GRA』

ガバイトはアキトの言葉に頷いて戦闘体制をとった。へへっ！そうこなくっちゃ！

「ちよつとイッキ！」

「別にいいだろ？オレはワカバタウンのイッキだ！ワニノコ、君に決めた！」

オレはコノハの言葉を軽く流して、自己紹介の後にボールを投げてワニノコを出した。さあ、行こうぜ！

「ガバイト、ドラゴンクロー！」

「ワニノコ、メタルクローだ！」

正面からワニノコとガバイトは激突した。パワーで負けているのかワニノコが押されている。

「俺とガバイトはそう簡単に止められないぜ！行くぞ、もう一度ドラゴンクロー！」

高速で再びガバイトが迫りくる。速いしパワーもあって厄介な相手だが、コウのニューラより断然やりやすい！

「ワニノコ、怖い顔だ！」

『ワニイ』

オレの指示を受けてワニノコは怖い顔をする。それに驚いたのがガバイトが動きを止めた。このチャンス、貰った！

「ワニノコ、氷の牙だ！」

『ワニヤアー！』

「ガバイト、かわせ！」

「遅え！」

『ワニヤアー！』

『G r u u u ! ? 』

「ガバイト！」

よし！決まった！ガバイトにワニノコの新技、氷の牙が炸裂した。ガバイトはドラゴンタイプみたいだから……この一撃を貰ったら大ダメージはまのがれないぜ！

「やるなイツキ！だけど、まだまだガバイトは元気だぜ！」

『G R A ! 』

な！今を受けてまだ無事なのか！？

「今度はこっちの番だ！ガバイト、ワニノコをそのまま上空に投げとばせ！そして砂嵐！」

『G A A A ! 』

『ワニ！？』

「ワニノコ！」

ガバイトの腕に噛みついていたワニノコは強引に剥がされてそのまま上空に飛ばされる。そしてそこで砂嵐が使われた。しまった！ガバイトを見失なっちゃった！くっ！砂嵐の中にまた飛び込むまでが勝負だな……そうだ！

「ワニノコ、水鉄砲連射だ！」

ワニノコはがむしゃらに砂嵐に向かって水鉄砲を連射する。水鉄砲が通った場所は砂が一瞬だけ無くなり、その周囲が見えるようになる。見つけた！

「ワニノコ、そこだ！水鉄砲フルパワー！」

『ワアアアニヤアアア！』

オレが指差す場所に通常より3割増しの水鉄砲が放たれる。氷の牙のダメージもあるからだじやすまないハズだ！水鉄砲は直撃、ガバイトは砂嵐の中から吹っ飛んできた。よし！

「くっ！ガバイト！」

よし、勝った！

「なぐんで、言うかよ！」

何！？まさか！さっさのガバイトに似た物は消滅する。しまった！  
今のは！？

「終わりだ！ガバイト、ドラゴンクロー！」

地面に着地したワニノコの真後ろに影が現れる。

「逃げるワニノコ！」

『GRAAAA！』

『ワニヤアア!?!』

「ワニノコ!」

ワニノコにガバイトの重い一撃が入った。それを受けてワニノコは吹っ飛ばされる。ワニノコは完全に動かなくなった。オレはワニノコの元に駆け寄る。あちゃ〜、完全に目を回しているぞ……

「俺の勝ちだな!」

アキトが勝ち誇るように言う。オレはすぐにワニノコをモンスターボールに戻す。ゆっくり休んでろよ……

「完敗だ。強いなお前!」

「んにゃ、俺なんてまだまだ経験不足の未熟者さ」

未熟者ねえ……

「人は経験を積んで強くなっていくもんだからな、お前もその内強くなるさ」

ま、確かにアキトの言う通りなのだが……

「それ、他人の受け売りだろ?」

と言い返してやる。どこかオレと性格がそっくりな奴が、そんな事言えるほど大人なハズがないよなあ

「バレたか、俺の先輩の受け売りだよ」

やっぱりな

「その先輩、強いのか？」

「ああ、今はジョウトリーグに出場するために旅をしてるらしいんだ。俺はその先輩とジョウトリーグでバトルするためにマサラからジョウト地方に来たんだ」

なるほどな

「そっか、んじゃまたバトルしようぜ！今度はオレが勝つからな！」

宣戦布告をするようにオレは右手を差し出す。

「次だって俺が勝ってみせる」

そっぴいつつアキトはオレの手を握り返してきた。



新たなライバル、アキト登場！（後書き）

次回予告

イツキ「繋がりの洞窟を抜けて、ヒワダタウンに到着したオレ達は街のヤドンが失踪するという事件を知る」

コノハ「これはただ事じゃないわね！ほおっておけないよ！」

イツキ「当然だ！かくしてオレ達は事件の調査を始めるオレ達を待ち受けるものとは？次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『イツキの事件簿』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ワニノコ「ワニィ！」

## イツキの事件簿（前書き）

物語が強引に進行しています。そんな自分の技量の低さを恨みたいで  
す。今回は視点移動があるので注意してください。

## イツキの事件簿

アキトに道を教えてもらって、なんとか繋がり洞窟を抜けたオレ達はヒワダタウンに到着した。

「ねえイツキ、ちょっとなんか変じゃない？」

オレの隣を歩いているコノハが口を開いた。

「ん？何がだよ」

オレはコノハに尋ねる。

「うん、なんか活気が無さすぎるというか……そんな感じ……」

そうだよな……ヒワダタウンはワカバタウンと同じで小さな街らしいけど、ワカバタウンだってこんな静かな事なんて無かった。人はいるんだけど、何かが欠けていてみんな寂しそう……そんな感じだ。

「とにかくPCに行こうぜ。ワニノコ達を休ませたいし、街で何が起きてるかなんてPCに行けば自然に分かる」

「そうね。それじゃ早く行くわよ」

オレの言葉にコノハが頷く。……なんか事件の予感がする……何かがあった時のためにポケモン達の体調を万全にしたい方がいいな

……

オレは元気になったワニノコとゴマゾウの入ったボールを受け取った。

「みんな元気になりましたよ」

「ありがとうございます」

オレはジョーイさんにお礼の言葉を言う。そうだ！ジョーイさんは知ってるかな？

「ジョーイさん、一つ聞きたい事があるんですけど……」

「なんですか？」

「この町、なんか活気が無い様な感じがするんですけど、何ですか？」

「ええ、最近いつも町に遊びに来てたヤドンが居ないのよ」

ヤドンが？そういえばヒワダタウンって野生のヤドンがよく遊びに来るんだっけ？そうか……何か欠けてるものの何かってヤドンの事か……

「何か理由はあるんですか？」

「分からないわ？突然の事だったもの」

うーん……分からないな……なんで居なくなっただろう……なんかあるんだよな……

「ジョーイさん、お話、ありがとうございました」

「ううん、それぐらいの話ならいくらでもしていいわよ」

オレの言葉にジョーイさんは天使のような笑みで返してくる。うっ！ジョーイさんに心奪われる男性が多いって話を聞いた事はあるが、それは事実なんだな……オレは一瞬でも動揺した事を悟られないようにその場から抜け出した。

「あ、イッキ！あれ？どうしたの？顔真っ赤だけど」

抜け出したところにコノハが現れた。髪が濡れているところから見て、シャワーでも浴びてきたのだろう。

「な、なんでもねえよ」

とオレはその問いに対して答える。これじゃ動揺した事が見え見えだ……

「ふーん、ま、いつか」

コノハが人を疑うような顔つきでオレを見ながら言った。な、なんとか誤魔化せたか？

「それはいいとして、町に活気が無い理由は分かったよ」

「コイツもそこまで調べていたんだな……」

「ヤドンを急にいなくなったせいだろ？」

と、オレが調べた事実を述べる。

「そうそう、それともう一個面白い話があるのよ」

「面白い話？」

「そ、これもさっさの話と同じで、PCの食堂のおばちゃんに聞いたんだけどね」

食堂のおばちゃんって……スゲエな……食堂のおばちゃんの情報網……

「最近ね、ここら辺で黒い服装をした怪しい人達がうろついているらしいよ」

黒い服装の怪しい人達ねえ……

「今のところ何もしてないから警察は動いてないらしいけどさ……  
アンタはさ、黒い人達って誰だと思う？」

んなもん1つしか思いつかないぞ。

「ロケット団か？」

「だよな。そうになると、ロケット団がヤドン失踪に何か関係がある

って考えるのが普通よね」

なるほどな……

「ロケット団の潜伏してる場所でも見にいつてみるか？」

オレはコノ八に提案してみる。

「場所分かってんの？」

あつ……考えて無かった……

「あのね……まあいいけど……憶測に過ぎないけど、人目がつかない所に隠れてると思うわ」

それが当然の思考だよな

「人目のつかない所、ちゃんと聞いてあるわよ」

よ、用意周到だな……流石コノ八……つーかおばちゃんに感謝だな。時間は代々夜、人気も少ないから今のうちなら偵察に的してるよな。

「んじゃ、早速行ってみるか」

「ええ！場所はヤドンの井戸、中は洞窟みたいになっていて危険らしいから注意していくわよ」

とコノ八が威勢よく言った。

「暗くて危ないな……」

ヤドンの井戸に到着してすぐにオレは井戸にハシゴが掛けてあるのに気付いた。誰かが、出入りしてた事がそれからすぐに分かった。で、早速ハシゴを使って降りている訳だが、危ないったらありやしない、ホントに真っ暗である。

「イツキ、上見ないでよ！見たら蹴るからね！」

スカートを履いているコノハがオレに対して怒鳴ってくる。おいおい、真っ暗で足下が分からなくてそんな余裕は無いつての……とにかくハシゴから降りきって地面に足を付ける。ふう……

「よつと」

コノハも無事に降りきったみたいだな。

「んじゃ、行くつぜ」

「ええ」

オレの言葉にコノハが頷いた。で、歩き出そうとする……

「う、う……」



な!?!うめき声が聞こえてくる。真つ暗だから気付かなかったけどオレの足下から聞こえてきてるぞ……オレはポケギアのバックライトを点灯させて足下を照らした。あ!お、おじさんが倒れてるじゃないか!?

「だ、大丈夫ですか!?!」

オレはしゃがみこんでおじさんに尋ねる。

「ワ、ワシの事はええ……それより……ヤドン達を……ヤドン達を助けてやってくれ……ワシは助けに来たのはいいが、ハシゴで足を滑らせて落ちてしまつてギックリ腰で動けんのだ……」

とおじさんが辛そうな声を上げる。聞いてて情けなく感じるぞ……とにかく今は!

「分かりました!行くぜコノハ!」

「OK!」

このおじさんの口ぶりからヤドンが酷い事をされていると想像出来る。急がないとな!オレとコノハは奥へ向かって走つていった。

視点：……？？？

ふう〜、なんとかウバメの森を抜ける事が出来たよ……スピアーに襲われるとか最悪だよ……

「早くPCに行こうよ。今日は疲れたよ……」

僕の隣を歩いている女の子が口を開いた。そうだよ……僕自身も限界だよ……ん？どうしたんだろ？あの女の子？僕達の目の前に7歳くらいの女の子が立っている。どうしたんだろ？もう夜遅いの……

「ねえ君、どうしたの？」

僕は女の子に声をかける。

「え？お兄ちゃん達誰？」

僕に急に話かけられた事に驚いたのか女の子が驚いたような声を出す。

「僕達は通りすがりのトレーナーだよ。それよりどうしたんだい？もう遅い時間だけど……」

「お父ちゃんがヤドンの井戸にロケット団をしばきに行ってくるっていつてまだ帰ってこないの……だから心配で……」

なるほどね

「そっか、ならあたし達が様子を見てきてあげるよ」

「え、いいの？」

「うん、お姉ちゃん達がお父さんを連れて帰ってくるから、あなたは家に帰っててお父さんの帰りを待ってて、お姉ちゃんと約束出来る？」

「うん」

女の子は元気よく頷くと、彼女の家と思われる民間に走っていった。さてと

「それじゃ行ってこようか」

「うん、早く行ってあの子を安心させてあげなくちゃ」

僕達はヤドンの井戸に向かって走り出した。

## イツキの事件簿（後書き）

### 次回予告

イツキ「ヤドンの尻尾を利用して、金儲けを企んでいたロケット団を追い詰めたオレとコノハだったけど、ロケット4兄弟の2人のせいで大ピンチ」

コノハ「絶対に負けないのに……」

イツキ「絶対絶命のピンチ！諦めかけたその時！次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『ACE再び』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

？『ピッピカチュウ！』

コノハ「あれ？君、誰？」

## ACE再び(前書き)

今回も視点移動があります。

## ACE再び

オレ達が暫く歩いていると、奥の方から薄明るいオレンジ色の光が漏れてきている事に気付いた。誰かがいるのか！？

「コノハ……」

「分かってるわよ。ちょっと覗いてみるだけでしょ」

オレはその言葉に頷く、このオレンジ色の光の光源は多分この奥にある……進む事に明るくなってきたな。ズバットが灯りから逃げないように向かってくる。正直うっとうしいが、かまうてて騒ぎを起す訳にもいかないんだよねこれが……ん、あれは！？オレの視線の先には広い空洞が広がっていて、その空洞にはロケット団が3人と、ヤドン達がいた。見つかったら不味いとオレはコノハの腕を引きつつ近くにある岩影に隠れた。

「ねえイツキ、ヤドンを見た？」

コノハが殆ど聞こえないような小声で言う。

「見たけど、どうしたんだ？」

「あのヤドン、尻尾が無かったよ」

な！？

「ま、まじかよ……」

「うん、開運のヤドンの尻尾って知ってる？」

？

「知らん」

とオレはコノハの質問にぶっきらぼうに答える。

「まだ旅に出る前なんだけどね、それを結構な高額で売りつけようとするチラシが家に来てたのよ」

そうか！コイツら、金儲けのために……許せない！

「相手は見た所3人、奇襲さえ掛ければなんとかなるな……」

「ちょっとイツキ、なにするつもり!？」

コノハの言葉を完全に無視してオレはワニノコをボールから出す。

「ワニノコ、手加減は無用だ！水鉄砲！」

『ワーニヤアアア！』

「な、なんと!？」

不意を完全につかれたロケット団員は水鉄砲の直撃を受けて、壁まで吹き飛ばされた。壁に叩きつけられそのロケット団員は気を失ったみたいだ。

「なんだ貴様は、ラッタ殺ってしまえ！」

『ラッ！』

そのロケット団員がボールを投げつつも指示を出した。ラッタは現れるや否やでワニノコに向かってくる。こんな場合は！

「リオル、ブレイズキック！」

『この！』

オレが指示を出そうとした瞬間にコノハとリオルのコンビが割って入ってきた。リオルのブレイズキックは見事にラッタの額に炸裂した。今のが致命的だったらしく、ラッタは目を回している。よし！

「全く、すぐ無茶しちゃうんだからさ」

コノハが呆れた様子でオレに対して言う。

「悪い悪い、でも結果オーライじゃねえか」

「あのね……」

コノハが頭を抑える。ハハハ、少しは反省してやるか……ともかく

「覚悟は出来てるな!?!」

オレはラッタのトレーナーであるロケット団員に向かって言う。

「くっ！」



「少し騒がしいがどうした!？」

「ふ、フウスケ風助様、リンゾウ林蔵様」

な!まだいたのか!奥の方から更に2人ロケット団員が現れた。なんか少し偉そうな恰好をしている……コイツは手強そうだな……

「よくも我々の部下をかわいがってくれたな……」

「それにロケット団の資金元に手を出そうとはいい度胸だ。我々、ロケット4兄弟の長男、フウスケと」

「次男、リンゾウが退治してやる」

そう言うとフウスケはパルシエン、リンゾウはツボツボを繰り出して来た。相性はこちらが有利だな……なんとかなるさ!

「行くぜワニノコ!ツボツボに水鉄砲!」

「リオル、パルシエンにかわらわり!」

『ワアアニヤアアア!』

『はああああ!』

オレとコノハは先手必勝と言わんばかりに素早く指示を出す。それぞれの攻撃は完璧にターゲットを捉えている。しかし!

「それぐらいの攻撃が通用すると思ったか?」

リンゾウが勝ち誇ったように言った。そんな！？効果は抜群だぞ！  
？それが効かないなんて……

「今度は我らの番だ」

く、来る！

「ツボツボ、岩雪崩！」

「パルシェン、吹雪！」

二つの技は広域に放たれた。ダメだ、逃げ場が無い！

「ワニノコ！」

「リオル！」

ワニノコとリオルは岩雪崩と吹雪に飲み込まれてしまった。岩雪崩と吹雪のせいで舞った砂ほこりが晴れてくる。な！そこにはワニノコとリオルの氷像が出来上がっていた。そんな……こんな事って……

「リオル……あ！見てイツキ！」

どうしたんだ？コノハが指を指している先、ワニノコの方を見る。  
あ！ワニノコが輝き出している。な、何が始まるんだ！？光輝くワニノコの周りに赤いオーラが発生する。これは……

『アーリヤー！』

ワニノコは両手を開くように動かすと氷は粉々に砕け散ってワニノ

コは氷から解放された。今の技は、もしかして馬鹿力！？そして光を放ったまま大きく、姿を変えていく、まさか！？

『アリゲイツ！』

ワニノコが鳴いた。進化したんだ！遂にアリゲイツに進化したんだ！

「よゝし行くぜアリゲイツ、パルシエンにメタル……な！」

アリゲイツはその場で膝をついた。もしかしてさっきの馬鹿力が最後の力だったんじゃない……

「ふっ……驚かせやがって、パルシエン、トゲキャノンで止めを刺せ！」

『パルウ！』

パルシエンがトゲキャノンを放った。それはアリゲイツに向かっていく。

「アリゲイツ！」

気がつけばオレは走り出していた。

「イツキイ！アリゲイツ！」

コノハの悲鳴が聞こえる。クソッ！間に合わない！

「ユンゲラー、気合玉だ！」

突如そんな声が聞こえたかと思うと巨大なエネルギー球が飛んできてトゲキャノンと相殺された。今のは！？オレは声が聞こえた方向に振り返る。あ、あの人は！？

「久しぶりだね、ロケット4兄弟の2人！」

その人、ユースケさんが大声で言った。ユースケさん、前回のポケモンリーグの準優勝者……

「き、貴様はあの時の！」

フウスケが驚愕の声を上げた。

「あなた達には借りがある、容赦はしません！行くよ、ラン、ユンゲラー！」

「うん、任せて！」

その言葉を聞いてユースケさんの隣にいた女の子、ランさんが頷いた。確かランさんってポケモンリーグでベスト4を賭けてユースケさんとバトルしたんだっけ？ランさんとユースケさんの言葉がもの凄くオレには頼もしく思えた。

視点：ユースケ

「ふっ、まずはその小僧からだ！もう一度トゲキヤノン」

「ツボツボ、ストーンエッジ！」

2人はさっきの男の子のアリゲイツに攻撃するようにそれぞれのポケモンに指示をする。そうはさせない！

「ユンゲラー、サイココーティングシャワー！」

『ていー！』

ユンゲラーが気合いの声をあげてサイコカッターを回転させながら、上に向かって投げあげる。それに対してサイケ光線を当てるとエネルギーの干渉によりサイケ光線のエネルギーが拡散してシャワーの

ように降り注いだ。それによりトゲキヤノンは打ち落とされる。しかしストーンエッジはそれ程度じゃ落ちない。

「ラン！」

僕は僕の隣にいるパートナーである少女に言う。

「任せて！ピカチュウ、お願い！」

ランはモンスターボールを取り出して、素早く投げた。するとボールからピカチュウが登場して素早く、ストーンエッジの斜線上に移動する。そして得意の10万ボルトを放った。10万ボルトとストーンエッジは激突して相殺された。その間に僕は走ってさっきの男の子の元に駆け寄る。

「大丈夫かい？」

「は、はい」

僕の言葉に男の子が頷いた。何緊張してるんだろう？とにかく

「アリゲイツを戻して下がってて、後は僕がやるから」

「あ、はい」

男の子は僕の言う通りにアリゲイツをボールに戻して数歩後ろに下がる。男の子と並んで立っていた女の子ももうすでにリオルをボールに戻してランの後ろに下がっていた。よし！

「それじゃ一気に決めるよ」

「うん」

僕の言葉にランが頷いた。さあ、行くよ！

「ピカチュウ、充電して」

『ピカア……』

ランの指示でピカチュウは電気を溜め始めた。

「スキあり！ストーンエッジ！」

「オーロラビームだ！」

オーロラビームとストーンエッジがスキだらけのピカチュウに迫ってくる。そんなもの！

「ユンゲラー、気合玉のエネルギーを前方に集中！」

『おう！』

ユンゲラーが手を前にかざすと気合玉のエネルギーが発生する。そしてそれは壁の形に整形されたそれによりストーンエッジとオーロラビームは完全に防がれた。相性的にはこっちのほうが有利だからね。そんなの効かないよ

「反撃だ！」

『もってけ……』

ユンゲラーは壁として整形した気合玉をボール状に戻してパルシェン達に向かって投げつけた。

「くっ！吹雪で相殺しろ！」

パルシェンの放った強力な冷氣により気合玉は氷ついてエネルギーを失い消滅する。でも時間は稼いだ。後は！

「ユンゲラー、下がって！ラン、後はお願い！」

『ああ！』

ユンゲラーはテレポートを使ってその場から後退する。頼むよ……

「任せて！ピカチュウ、ライティングシャドー！」

『ピッカ！』

ピカチュウの隣にもう1匹ピカチュウが現れた。ライティングシャドー、ピカチュウの電気エネルギーを沢山消費して身代わりを作る技だ。通常の身代わりとは違い、体力では無く、電気エネルギーを消耗する技なため、充電さえ使えば電気エネルギーの消費無しで使えるのだ。ピカチュウの分身体は更に3つの分身体を作りだす。身代わり自身が電気エネルギーじゃなくて体力を消耗することで更に身代わりを作り出したんだ。2段階えのこの技こそが、僕とランが特訓の末に産み出した技だ！

「行くよピカチュウ、5人で直流電流の……雷！」



『『『『『ピイカアアアアチュウウウウウウ』』』』』

通常の5倍以上雷がパルシエン達に向かって放たれた。パルシエンとツボツボはそれに耐えられるはずもなくダウンした。よし！後は、この人達だけだ！

「くっ……戻れパルシエン、リンゾウ逃げるぞ」

「了解だ兄じゃ！ふん！」

リンゾウと呼ばれた男が地面に何か叩きつくだ。これは煙玉！？しまった！煙が晴れた。そこにいたのは気を失っていたロケット団とヤドン達だけであった。ふう、逃しちゃったけどなんとかあったね

……

「やったねユースケ」

「うん」

僕はランの言葉に頷いた。

## ACE再び（後書き）

という訳で前作の主人公がようやく登場しました。ただ、登場したのはいいですが活躍させすぎてイツキが空気になる展開は避けたいです。うーん、どうなることやら

### 次回予告

イツキ「ユースケさん達に助けられたオレ達は無事にヤドンの井戸から脱出する」

コノハ「やっぱりユースケさんとランさんって凄いよね。ってイツキ、どうしたの？」

イツキ「ユースケさん、オレとバトルしてください！」

コノハ「果たしてイツキはユースケさんにどう挑むか？次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『イツキVSユースケ』次回もポケモン、ゲットよ！」

？『リザア！』

コノハ「だから誰よ!?!」

## イツキVSユースケ（前書き）

間一髪危機を脱したイツキ達は……

## イツキVSユースケ

す、すげえ……凄すぎて声を出す事も出来ねえ……レベルがオレとは違うバトル、それを見てオレは声も出せずにいた。オレとコノハを簡単に倒した相手を、圧倒している。オレの憧れのトレーナーは、オレとは2つも3つも上の次元にいる。そう実感させられてしまう。

「ユンゲラーご苦労様、後はゆっくり休んでよ」

「ピカチュウお疲れ、後はゆっくりしててね」

ユースケさんとランさんはそれぞれのポケモンをボールに戻した。そしてすぐにオレとコノハの方へと振り返る。

「2人共大丈夫？」

ユースケさんがオレ達に声を掛けてきた。

「あ、はい大丈夫です」

いつもとは違う感じの口調で答える。なんか憧れのトレーナーが目の前にいると思うと緊張するな……

「あ、あの！ユースケさんとラ、ランさんですよね！」

コノハが興奮した様子で2人に尋ねた。どうしたんだいったい？

「うん、そつだよ」

ランさんが天使のような笑みを浮かべつつも頷く。うう、ノックアウトされちまいそうだ……

「わ、わたしランさんのファンなんです！」

「ファ、ファン？」

ランさんが動揺したように言う。そりゃいきなりそんな事言われたら驚くわなあ。にしてもコノハの奴の以外な一面だよな……まあオレもユースケさんのファンといったらファンなだけだな

「はい！カシスさんとのバトル！あれ凄かったですよ！ピカチュウとカイリユウの壮絶な空中戦、凄かったです！」

コ、コノハが熱い！確かにあのバトルは繰り返してビデオで見てたけどさ、アレは熱かったな！

「あ、うん」

ランさんがまだ動揺したように言う。そりゃなあ、あんな勢いで話されたら誰でも困るわなあ

「とにかくポケモンセンターに行こっか、いつまでもこんなところにいる訳にも行かないし、入口の方で倒れていたおじさんを自宅まで送ってかないと行けないしね」

ユースケさんはランさんに助け船を出すように言った。

「う、うん、それもそうだね」

ランさんはそれに同意するように頷いた。

……眠い……オレはいつも通りの時間に目を覚ました。もうちょっと寝ていたいがそういう訳にもいかない。ジョーイさんに預けたポケモンを受け取りに行かないとな……オレは眠そうに立ち上がり、ジャージから普段着に着替える。よし、行くか。オレは部屋の鍵を持って部屋を飛び出した。

「ポケモン達はみんな元気になりましたよ」

「ありがとうございます」

オレはジョーイさんからボールがセットされているトレーを受け取る。それから受け取ったそれからボールを取り出し、ベルトにセットした。よし！んじゃ飯でも食ってこようかな……

「おはよう」

オレがそう考えていると不意に背後から声が聞こえた。オレはその声に反応して振り返る。あ！

「あ、おはようございます」

オレは焦ってあいさつを返した。オレの後ろにはユースケさんがいたのだ。え〜と何から話す……そうだ！昨日のお礼を言わないと！

「昨日はありがとうございました！」

オレはいつも通り元気よくいう。ただいつもとは違って敬語だけどな

「う、うん……気にしないでよ。偶々あそこにいあわせただけだから」

ユースケさんは少し動揺しつつもそう返してくる。ユースケさんって、本当に温厚な人なんだな……

「朝ごはんは食べた？まだなら僕達と一緒に食べない？」

ユースケさんのお誘いだ！そりゃ勿論乗るでしょ！

「はい、喜んで」

オレはそう答えた。ポケモンリーグでの話があわよくば聞けるかもしれない……そう期待を膨らませる。

「それじゃ行くっか」

ユースケさんはそう言つと振り返つて食堂に向かつて歩いていく。オレは後ろからそれを追つた。

「ユースケ、こっち！」

奥の方の席でランさんが手を振っているのが見えた。その席の正面にはコノハが座っている。アイツ……もしかしてランさんに誘われたのかな？

「お待たせ」

ユースケさんはそう言いながらランさんの隣に座る。オレはそれに見習いその正面であるコノハの隣の席に座つた。

「自己紹介、まだして無かつたよね。僕はユースケ、マサラタウン出身のトレーナーだよ」

「あたしはラン、ユースケと同じでマサラタウン出身でユースケとは幼なじみなんだ」

……「ご丁寧にされたな。オレ達もしない訳にはいかないでしょ



「オレはイツキっていいいます。ワカバタウン出身です」

「わ、わたしはコノハです。ヨシノシティ出身です」

とオレ達は自己紹介をしる。

「イツキくんはコノハちゃんか、よろしくね」

ランさんが笑顔でオレ達に対して言う。

「はい、よろしくお願ひします」「」

「出来れば敬語じゃなくて普段通りの話方で頼むよ。堅いのは苦手だからさ」

ユースケさんが付け加えるように言った。案外ユースケさんって軽い人だなと思った。

PCバトルフィールド

「イツキ、準備はいい？」

オレの丁度反対側に立っているユースケさんがオレに尋ねてくる。何故急にバトルがスタートしたか？食堂での談笑の最中、コノハのセリフ、「わたし、ランさんとバトルしてみたいです」って一言のためだ。そこでランさんが頷いて「せっかくだからイツキさんとユースケもやったら？」と言った。なんともありがたい提案、ポケモンリーグで活躍したトップクラスのトレーナーが、最近旅を始めたばかりの新人トレーナーでバトルしてくれるなんてな。軽く感動だぜ。とにかく

「はい！」

オレはユースケさんの問いに力一杯答えた。

「ルールは2対2のシングルバトル、いいね」

2対2か……よし！先発は！

「ゴマゾウ、君に決めた！」

オレはゴマゾウのボールをベルトから取り出しフィールドに向かって投げた。

『パオーン！』

いつも通り元気一杯なゴマゾウが現れる。

「頼むよ、リザードン！」

『リザア!』

ユースケさんがボールを投げるとボールからオレンジ色の竜、リザードンがフィールドに姿を現した。ま、タイプは炎と飛行でドラゴンタイプって訳じゃないんだけどな。ポケモンリーグで沢山の名勝負を見せてくれたアイツか……

「試合開始!」

フィールドの中央に立っている審判のランさんがそう掛け声をかけた。

「ゴマゾウ、先手必勝だ! 転がる攻撃!」

ゴマゾウは真正面からリザードンに突っ込んでいく。転がる攻撃は相性はリザードンに対して最高、まともに受ければダメージは間のがれないハズだ!

「リザードン、地震を使って」

『リザッ!』

リザードンが片足を上げ、そのまま地面に叩きつけるとバトルフィールドが揺れ始めた。

『パオツ!?!』

ゴマゾウはバランスを崩して転がる攻撃を中断する。ちょっと不味いぞ。

「ゴマゾウ、体制を立て直す……」

「遅いよ！リザードン、テールバーナーからメタルクロー！」

『リザア！』

『パオオ！？』

「ゴマゾウ！」

ゴマゾウが体制を直そうとしている所に容赦なくユースケさんは指示を出した。リザードンの尻尾の炎がジェット噴射のように燃え上がりそれを推進として超高速でゴマゾウに迫りメタルクローを決めてきた。それを受けたゴマゾウは完全に目を回している。つ、強い

……

「ゴマゾウ戦闘不能！」

ランさんがコールを掛けた。よ、容赦ねえなあ……

「ゴマゾウ、後は休んでくれ」

オレはゴマゾウをボールに戻した。残るは……

「アリゲイツ、君に決めた！」

オレは相棒のポケモン、アリゲイツをフィールドに出した。タイプの相性的には有利、最近やられてばかりのような気がするが今回は勝っつ！

「試合開始！」

「行くぞ、水鉄砲！」

『アーリヤアアア！』

アリゲイツはリザードンに向かって水鉄砲を放った。それは一直線にリザードンに向かっていく。

「リザードン、避けてからテールバーナーで突っ込むんだ！」

リザードンはその水鉄砲を容易に回避する。そりゃ当たらねえよな。更に先ほどの加速技を使い急速にアリゲイツに向かってくる。2度も受けるか！

「アリゲイツ、水鉄砲連射だ！」

『アリッ！アリヤ！アリッ！アリヤッ！』

アリゲイツは広域に水鉄砲を乱射する。これだけ撃てば体格が大きなりザードンには避けれないハズだ！

「リザードン、上昇するんだ！」

リザードンは己の推進力にしていた尻尾の炎を地面に向けた。するとリザードンは急速に上昇した。それにより水鉄砲も当たらない！くっ！なんて動きだよ！

「リザードン、岩石封じ！」

『リザアア!』

リザードンはどこからか突然岩を取り出しそれをアリゲイツめがけて投げ始めた。

「アリゲイツ、かわせ!」

『アリゲイツ!』

沢山飛んでくる岩をギリギリで全て回避する。危ねえ危ねえ……

「まだまだ!リザードン、大文字!」

『リザアアア!』

ユースケさんの指示でリザードンはアリゲイツ目掛けて大文字を放ってくる。水鉄砲じゃまだまだ相殺できそうにないな……避けるしかない!つてげっ!

『アリゲイ!?!』

オレの出そうとした指示を察してかアリゲイツは回避行動に移ろうとするがそれが出来ない。さっきの岩に囲まれていて逃げ場がないのだ。くっ!攻撃に無駄が無い!

「こうなったら馬鹿力で脱出だ!」

『アーリゲイ!』

アリゲイツは真つ赤なオーラを身に纏い正面にあつた岩を粉碎して大文字を回避した。しかし！

「これで決めるよ！オーバーヒート！」

リザードンはいつの間にかアリゲイツの脱出した方向に先回りしていた。まさかさっきの大文字はおとりで……

『リザアアアア！』

『アライイイイ！？』

「アリゲイツ！」

リザードンの口からもの凄い熱線が放たれた。それを直撃したアリゲイツは吹っ飛ばさるその場でダウンした。オレはアリゲイツの元に駆け寄る。か、完全に目を回してる……畜生、完全に手駒に取られてた……完敗だ……

「アリゲイツ、後は休んでてくれ」

オレはそう言いながらアリゲイツをボールに戻した。

「ごめん、ちょっとやりすぎた」

ユースケさんがオレの元に駆け寄ってきて謝罪の言葉を言う。

「バトルだから当然ですよ。にしても強いスね」

「まだまだだよ。僕よりもっと強いトレーナーだっているからね」

まだまだねえ……にしてもさ

「ユースケさん、今回のバトルで良く分かりました。ポケモンリーグに出るにはまだまだ修行しなくちゃいけないなって」

オレの言葉にユースケさんは無言で頷く。オレはこのバトルで改めて気づいた。オレはまだまだ新人トレーナーで、まだまだ経験不足って事に

「もっと修行して強くなったらユースケさん、その時はまたバトルを受けてもらえますか？」

「勿論だよ」

オレの言葉にユースケさんが力強く答え、右手を差し出してくる。オレはその手を強く握り返した。

この後ランさんとコノハのバトルが行われた。結果はランさんの圧勝、ガルーラがポニータとリオルを圧倒していた。やっぱりポケモンリーグのトップクラスのトレーナーは凄いな。改めてオレは関心した。



## イツキVSユースケ（後書き）

### 次回予告

イツキ「ユースケさんとのバトルを終えてポケモン達が元気になった後、オレはヒワダジムに挑戦しに向かった。ってお前がジムリーダー？歳下かよ！」

ユースケ「イツキ、油断したら駄目だよ！ツクシの実力はかなりのものだよ」

イツキ「くっ！歳上の意地にかけて勝ってみせる！」

ユースケ「果たしてバトルの結末はいかに？次回、ポケットモンスターACEのSECOND SEASONの「ヒワダジムの戦い」  
次回もポケモン、ゲットだぜ！でいいの？」

ユンゲラー「グダグダじゃねえか」

## ヒコダジムの戦い（前書き）

タイトル通りです

## ヒワダジムの戦い

「みんな元気になりましたよ」

「ありがとうございます」

ジョーイさんの言葉にそう答えつつもオレはアリゲイツとゴマゾウが入ったボールを受け取った。ユースケさんとのバトルで完全にダウンした2匹はバトルの後、すぐにポケモンセンターにつれていった。で5時間程待つてようやく回復した訳である。時間はまだ午後3時、全然休むには早い時間だ。先にポケモン達が回復したコノハはランさんに誘われて買い物に出かけた。旅の最中に荷物を増やしてどうするつもりだよ……ユースケさんは知り合いに呼ばれたらしく何時間か前にその人に会いに向かった。うん……1人じゃ暇だな……よし、まだ時間もあるしジム戦に行くか！

「アリゲイツ、ゴマゾウ、ジム戦行けるか？」

オレはボールから2匹を出し尋ねる。

『アリ！』

『パオツ！』

うん、2匹共やる気満々みたいだな。さっき完敗したばかりとは思えないぜ。

「よし、行くか！」

オレはポケモン達をボールに戻し、ポケモンセンターを飛び出していった。

「たのもー！」

オレは叫びながらも堂々とジムの中に入った。ジムの中は森みたいになっていて沢山の木々がおいしげっていた。ジムってやっぱりそれぞれ特徴があるもんなんだな……

「どうぞ、こちらに来てください」

奥の方から声が聞こえてきた。少し高いくらいの声、ここのジムリーダーは女性なのか？

とにかく言われた通り前に進む。すぐに森の中に入った。ホントにここはジムかよ……って！

『キシャーー！』

「うわっ！」

イ、イトマル！突然前方の木から糸につながってイトマルが降りてきた。オレはそれに腰を抜かす。

「ハハハ、大丈夫ですか？」

まだ幼そうな笑い声が聞こえたかと思うと森の奥から男の子が現れた。体格は小柄でオレより歳下ってイメージを受ける。

「ああ」

オレは男の子の言葉に頷き立ち上がる。それから睨みつけるようにイトマルの顔を睨むとイトマルは木の上に焦って帰っていった。さてと……

「挑戦者の方ですね？僕はジムリーダーのツクシっています」

「オレはイツキ、ワカバタウンのイツキだ」

「イツキさんですね。よろしくお願いします」

……普通に会話してたけどちょっとおかしくないか？

「お前がジムリーダー？」

「はい」

……

「何歳？」

「10歳です」

……歳下かよ！驚いたぜ……ジムリーダーって若くてもなれるんだな……

「ルールは1対1のシングルバトル！いいですね？」

「おう！」

ツクシの言葉にオレは力強く頷いた。バトルフィールドに案内されて早速バトルがスタートしようとしていた。ツクシは確か虫タイプの使い手だよな……ならば！

「ゴマゾウ、君に決めた！」

オレはゴマゾウをボールから出した。岩タイプの技を持つコイツなら虫タイプ全般に対応出来るハズだ！

『パオー！』

いつも通りに元気そうになくゴマゾウ、戦意も十分だな

「行きますよ、ストライク！」

『ストライク！』

ツクシはストライクをフィールドに出してきた。虫、飛行タイプだっけ？そういえばユースケさんも連れていたなコイツを……ま、何にしたって歳上の意地にかけて負けてたまるか！

「試合開始！」

審判がスタートの掛け声を上げる。まずは先手ひっ……

「ストライク、電光石化！」

ツクシの指示と同時にストライクはオレの視界から消えた。は、速い！これは追い付けないな……なら！

「そこ！いあいぎり！」

「今だ、ゴマゾウ、高速スピンド！」

『パオー！』

『トライク！？』

いあいぎりで攻撃を仕掛けようとしたストライクであったが、ゴマゾウは身体を縮めて高速で回転を始めた。いあいぎりはこの技、高速スピンによって弾かれ不発に終わる。よし！反撃だ！

「転がる攻撃！」

『パオー！』

『トライク！？』

「ストライク！」

反撃の転がる攻撃がストライクに炸裂した。さっきの高速スピンド体制を崩していたストライクにはこれは避けられないぜ！よし、もう一撃だ！

「ゴマゾウ、もう一撃だ！」

『パオツ！』

ゴマゾウは再び丸くなりストライクに向かっていく。

「あまり舐めないでくださいよ。影分身！」

ツクシの指示でストライクは影分身を使った。そのため、転がるが外れてしまう。くっ！厄介な………けどな！

「ゴマゾウ、かぎわかるだ！」

『パオツ』

ゴマゾウはその鼻を使ってストライクの本物を探し当てようとする。コイツにはそんな小細工は効かないぜ！

「そうやってスキを作るのを待ってましたよ。ストライク、剣の舞」



分身体を含めたストライクは剣の舞を始める。剣の舞はグリーンとパワーを上昇させる技、パワーを上げて一気にケリをつけるつもりか！

「行きますよ！電光石化！」

ストライクはまた視界から姿を消した。またいあいぎりか？なら高速スピンド……

『パオツ！？』

なっ！？電光石化で直接狙ってきたのか！ゴマゾウはその一撃を受けてヒザを曲げる。

「大丈夫か？ゴマゾウ」

『パ、パオ』

ゴマゾウは再び膝を伸ばして立ち上がる。おかしい、いくら剣の舞をしていたって所詮は電光石化だぞ？なのに何故？

「驚いてるみたいですね。特性テクニシャン、知ってますか？」

テクニシャン？

「特性テクニシャンは弱い技の威力が上昇する技です。だから通常の電光石化より与えるダメージは大きいですよ」

なるほどな……

「という訳でもう一度電光石化！」

『トライク！』

『パオ』

ゴマゾウにまた重い一撃が入る。クソオ、あまりにもスピードで捉えられない上に高速スピも間に合わない、このままじゃなぶり殺しだ。何か、何か方法は無いか？

「終わりです！もう一度電光石化」

……こつこのをイチバチって言うんだよな……ゴマゾウの体力から考えてチャンスは1度……上手くやってくれよ……

「ゴマゾウ、丸くなって受け流せ！」

『パオツ！』

ストライクの電光石化は丸くなったゴマゾウに炸裂した。しかしダメージはあまり受けた様子は無い。何故か？丸くなるで防御力が上がったってのもあるんだけど、今までは踏ん張る事でそのまんまダメージを受けていたけど、今回は丸くなって踏ん張るような事はしていない。それにより上手く受け流す事に成功したんだ。反撃だ！

「ゴマゾウ、氷の礫だ！」

『パオー！』

『スト！？』

ゴマゾウは丸まった状態から元に戻り、氷の礫を放った。攻撃を受け流されたため、ゴマゾウに対して背中を向けていたストライクは超高速を誇る氷の礫に反応出来ずに直撃を受けた。効果は抜群であるこの一撃を受けてストライクは苦しそうに顔をしかめる。今だ！

「コイツで止めだ！ゴマゾウ、転がる攻撃！」

『パオーー！』

『ストー！？』

「ストライク！」

ゴマゾウの転がるによる重い一撃！これが決定打になった。ストライクはうつ伏せになって倒れて目を回している。よし！

「ストライク、戦闘不能！ゴマゾウの勝ち！よってチャレンジャーイツキの勝利！」

「よっしやあ！」

審判のコールがかかると同時にオレは歓喜の声をあげながら飛び跳ねた。へへっ！やったぜ！

『パオーン！』

ゴマゾウが嬉しそうにオレの元に駆け寄ってきた。そしてオレの胸に飛び込んでくる

「うわっ！」

当然そのままバランスを崩して転倒してしまう。いててて……

「イツキさん、僕の完敗です」

ストライクをボールに戻したツクシはオレの元へ歩み寄ってくる

「そんな事はないぜ、最後なんて本気で賭けだったからな。勝てたのは奇跡みたいなもんだ」

と事実を述べる。正直危ないってもんじゃ無かったな……

「とにかく僕を倒した証です。受け取ってください」

オレはツクシからバッジを受け取る。よっしゃ！これで2つ目！また一歩前進だ！

「また、バトルしてくださいね」

「ああ、勿論だ！」

オレはツクシの言葉に力強く返した。

## ヒワダジムの戦い（後書き）

### 次回予告

ユースケ「リョウマさんから歌声の話聞き僕は興味本位で繋がり  
の洞窟に向かうそこで僕が考える事は？次回！ポケットモンスター  
I ACE ～ SECOND SEASON ～ ユースケの金曜日」次  
回もポケモン、ゲットだよ」

？『マリイ』

ユースケ「まだ出てきちゃ駄目だよ」

## ユースケの金曜日（前書き）

タイトルのわりには内容が……最後のシーンは……いろんな意味で苦勞しました。書くことに抵抗があった事と、これでいくのか？って決断と……なんせ逃避のために別の小説を書いてしまっぐらい苦勞したんですから

## ユースケの金曜日

僕はイツキとのバトルの後、ある人に呼ばれてヒワダ警察署に訪れていた。ランとコノハは買い物に行つて、イツキは多分ジム戦をやっていると思う。なんの因果で警察署なんか……と思う。最後に警察署に行ったのはシオンタウンでのロケット団との決戦前に行つた。ヤマブキシテイにある警察の本部、警視庁だったっけ？まあとにかく……

「よお、久しぶりだなユースケ」

僕を呼んだ人、リヨウマさんが言った。

「リヨウマさん、お久しぶりです」

僕はその言葉に丁寧な口調で返す。

「ああ、今回てめえをよんだのは他でもねえ」

代々予想はついてるよ……

「ロケット団の事ですね……」

「ああ」

僕の問いにリヨウマさんが頷いた。やっぱりか……

「ヤドンの井戸でロケット団と戦ったんだな？」

「はい、ロケット4兄弟って名乗っている、ロケット団の中でもかなりの実力者の2人と戦いました」

「アイツらとか……」

流石はリヨウマさん、知ってるんだな

「ロケット団が壊滅してから1ヶ月半、ポケモンリーグが開催された頃だな。ジヨウト地方を中心にロケット団残党の活動が行われている」

あの頃……そういえばロケット団の女性団員、スバルさんがポケモンリーグに出てたからな……彼女の真意を知って活動を再開したんだろうな……

「それで、ケンスケさんに調査を命じられてキキョウ警察署に出向してたんだが……まさかここまで活発に活動してたとはな」

そんなに酷いのか……

「各地で事件が起こってる以上、もう巻き込まれないなんて言えたもんじゃねえ、てめえなら大丈夫だと思っが、一応用心しとけよ……」

「はい」

僕はリヨウマさんの言葉に頷いた。

「話はそれだけだ。ロケット団を目撃した当時者に話を聞きたかっただけだからな」



なるほど

「悪かったな。わざわざ呼び出して」

「気にしてませんよ」

「お詫びといっちゃんのだが、金曜日になると繋がりの洞窟から歌声が聞こえてくるらしいぜ」

歌声？何かのポケモンかな

「ありがとうございます。行ってみます」

「ああ、じゃあな」

リョウマさんはそう言った後、仕事に戻っていった。さて、今日は丁度金曜日、これからヒマだし繋がりの洞窟に行ってみようか。僕は警察署から出て繋がりの洞窟へ向かった。

繋がりの洞窟

確かに……聞こえる……歌声だ……とても綺麗な歌声が聞こえてく

る。でも少し悲しそうなそんな感じがする。とにかく行ってみようか。

「頼むよ、マリル」

『マリイ』

僕はジョウト地方に来て一番最初に仲間になったポケモン、マリルを出した。コガネシティの水辺で傷付いていたのを助けたらそのまま僕についてきたんだ。同じ水タイプのキングラーに比べたらまだまだ頼りないけど、僕の大切な仲間だ。

「マリル、この歌声たどっていつてくれない？」

『マリイ！』

任せてよ！と言ったのか、自分の胸をポンと叩いて繋がり洞窟の奥に向かって歩きだす。耳がいいマリルは簡単に音源を探り当てる事が出来るんだ。僕はそれにゆっくりと付いていく。ふう、それにして困ったなあ……現在僕は凄く悩んでいる事がある。それは……

『なあユースケ、ランの告白に答えたのか？』

不意にユンゲラーが僕にテレパシーを送ってきた。そう、僕が今悩んでいるのはランの告白についてだ。僕がジョウトに向けて旅立つ2週間前、ようは1ヶ月前かな？それぐらいに突然ランに告白された。それは凄い嬉しかったし、ランも僕の事が好きだったんだ。って安心もした。しかし僕は自身はランに想いを伝えていない。情けない話だと思っけど、どうも勇気が持てない。僕のやるべき事は一つだけなのに……

「まだだよ……」

僕はため息をしつつも答える。

『だよな……にしてもどうすんだお前？』

「明日、するよ……」

僕はウンゲラーの質問に答えた。明日、丁度いい節目でもある。明日はランの14歳の誕生日だ。これは丁度いい節目でもあるからこの日について結構前から決めてたんだ。ランを凄い不安にさせちゃったけど……ね……ただそれにしても問題が……簡単だ。プレゼントである誕生日だからやっぱりプレゼントもしたい。ただ全く今まで一人になる機会が無かったために準備が出来ていない。考えているのは……昨日助けたおじさん、ボール職人のガンテツさんにお礼として貰ったボール、ラブラブボールで何かゲットして渡すって方法だ。ちなみにガンテツさんにはみんな1個づつボールが貰っていて、ランはフレンドボール、イツキはヘビィボール、コノハはスピードボールを貰ってたっけ？

『マリイ！』

マリルが鳴いて足を止めた。ここが音源みたいだね……さっきより明確に歌声が聞こえるよ。辺りは水辺というか湖というか、とにかく水辺が広がっている。む？あそこにいるのはポケモンか？僕は遠いところにいるポケモンを見る。あ、あれって……ラプラスじゃないか！そう、そこにいたのはラプラスだった。ラプラス水、氷タイプのポケモン、とても心優しくて頭がいいポケモン、人を背中に乗せて運ぶのが好きらしい。多分、このラプラスが歌ってたんだ。金

曜日の歌声の正体はラプラスだったんだ。そうだ……コイツをゲットして……僕はポケットに入れておいたラブラブボールを、ベルトにセットしておいたリザードンの入っているモンスターボールを左手で取った。

翌日0時00分PC屋上

「何、ユースケ？こんな時間に……」

とラン、ユンゲラーもジョーイさんに預けてあるからちょっとかいはかけてこないはずだ。とにかく今は……

「ラン、今日なんの日分かる？」

「え〜と……」

「廃品回収の日とか冗談はいららないよ」

僕は僕の問いに少し考えているランに向かって言う。

「分かってるよ。あたしの誕生日だよね」

「うん」

僕はその言葉に頷く。

「ラン、誕生日おめでとう」

「うん、ありがとう」

「また、同い年になったね」

「そうだね」

ランは僕の言葉に頷いた。とにかくは

「これ、誕生日プレゼント」

僕はびしょ濡れになりながらもゲットしたラプラスが入っているラブボールをランに渡す。リザードンから落ちて風邪をひくかと思っただよ！

「え？これってガンテツさんに貰った……」

「中に今日ゲットしたラプラスが入ってるよ」

と一応説明を付け加える

「ユースケ……ありがとう」

「うん」

その言葉に僕は頷いた。さてと……

「ラン、いつかの……屋上での言葉、僕はまだ返事をして無かったよね……」

「え!？」

突然の僕の言葉にランは焦りだした。そして分かりやすく顔も赤くなっていく。まあ、かくいう僕も自分の頬が熱くなっていくことが分かる事から真っ赤になってるんだろうけどね……

「僕も……」

あゝ緊張するな……

「僕も……」

だー！何やってんだ僕は！後一言なのに！勇気を持って言うんだ！

「僕も、ランの事が好きだ!」

と力一杯言った。うっ……恥ずかしい……

「ウツ……ヒック……」

へっ！？僕が力一杯言った後、色々と恥ずかしがっていたらランが泣いていた。え！な、なんで！？

「ラ、ラン？」

僕は焦ってランに声をかける。

「ごめんねユースケ……凄いい、凄いいのに、泣いちゃって……」

「……」

僕は黙ってランを抱きしめた。

「しばらく……このままでいいよね……」

「うん」

僕はランの言葉に優しく答えた。

## ユースケの金曜日（後書き）

### 次回予告

イツキ「ユースケさん達と別れたオレとコノハはコガネシティに向けて出発した」

コノハ「ウバメの森、不気味過ぎるわよ！どうにかなんないの？」

イツキ「そんな中、オレ達がしてしまっただ事とは！？」

コノハ「次回、ポケットモンスターACEとSECOND SEA SON」『最悪な野宿、リターンズ！』次回もポケモンゲットよ！」

リオル『よろしくな』

コノハ「珍しくまとも……」



## 最悪なキャンプリターンズ(前書き)

現在人気投票を実施中です。ご協力お願いします

## 最悪なキャンプリターンズ

「それじゃ、オレ達は行きます」

「うん、それじゃコガネジム頑張ってね」

ツクシとのバトルから2日後、オレとコノハは次の目的地、コガネシティに向けて出発する事になった。コノハも昨日、ツクシに快勝してさあ次のバッジを目指してGO！GO！って感じた。で、キキヨウに向けて出発しようとしているユースケさん達とここ、ヒワダのポケモンセンターの前で別れようとしているところだ。

「はい、ユースケさんもランさんも頑張ってくださいよ。ハヤトさんは強敵ですからね」

「うん、ありがとうコノハちゃん！」

コノハの言葉にランさんが頷いた。それじゃ……

「んじゃ、行くか」

「ええ！それじゃランさん、ユースケさん失礼します」

コノハがそう言った後、オレ達はユースケさん達に背中を向けて歩きます。

「二人共、頑張ってね！」

ユースケさんの励ましの言葉が聞こえた。オレはそれに答えず、ウ

バメの森に向かった。

ウバメの森

すでに夜もふけて、辺りは暗くなっていた。

「どうしてこうなるのよ……」

「コイツばかりは運が悪かったって言うしかないだろ……」

オレはコノハをなだめるように言った。何があったか……まあ悪運も悪運、いつも通り、森の中で会ったトレーナーとバトルしてアリのゲイツとスリープがバトルの最後、馬鹿力と思念の頭突きを激突させた。まあ軍配はオレに上がったんだけど……その時の衝撃で、もの凄い音がたつて……で近くにスピアーが住処にしている木があった訳よ……それで起こしてしまった……睡眠中に起こしてしまつと、やっぱり怒る訳で……で、スピアーに襲撃されて逃げていたら完全に迷っていた訳だ。対戦相手の男の子はどうなったかは定かではない。無事だといいいんだけど……

「うっ……また野宿？」

「そうなるな」

コノハの小さい声にオレは嫌そうに頷いた。畜生……自分の悪運を呪うぜ……とにかくは……

「飯の準備でもするか……」

オレはため息をつきつつもカバンを下ろし、カバンから携帯用の鍋を取り出す。

「今回はオレが料理を作るからお前が薪を持って来てくれ」

オレはコノハに向かって言った。この前あんな失敗したんだ。今回はオレがやるぞ。そう思っていたところだった。

「イツキ、もう1回チャンス頂戴！」

え……

「しよ、正気か？」

「酷い言い方ね……わたしに落ち度なんてあった？」

おいおい……前回の失敗を忘れたのかコイツは……

「この前は食べたもんじゃ無かつたる！」

オレは力一杯コノハに向かって言う。

「なぐに、大丈夫だって！今回はなんてたつてランさんに料理を教  
えて貰ったんだからさ！」

ランさんに？なら大丈夫かな……まあ成果があればだけど……

「仕方ないな……オレが薪とか持ってくるからちゃんと準備しろよ  
！」

オレはそうコノハに言ってから薪を探しに森の中に駆け込んでいっ  
た。

「これでよしと……」

前回と同様に、上手く焚火を作つてその上に鍋を置いた。よし、準  
備完了！オレはさつき偶然見かけた川で水筒に入れた水を飲む。ふ  
う………生き返るうー！

「それじゃ後は任せて！イツキは前みたいに寝ててよ」

とコノハ、本当に大丈夫かよ……

「ああ、分かった。そうする」

多少の不安を抱えつつもオレは頷いた。

「イツキ！起きなさいって！」

コノハの声でオレは目を覚ました。またも前回同様、リュツキを枕にして寝ていたオレは頭から順番に体を起こしていく。さ……恐怖の時間が来たな……オレは鍋の前に座る。……色は……まともだな……白っぽい色をしているシチューだ。本当に極普通のもので食べても大丈夫感が漂っている。よし、これなら行けるな……

「はい、イツキ」

オレはコノハからシチューの入った器を受けとった。

『アリヤー!』

「飯だ!」と言わんばかりにアリゲイツはボールから出てきた。そしてコノハがシチューを器に入れているのを見て氷ついた。そりゃ……あれはトラウマになるよな……

『アリヤー、アリヤー!』

アリゲイツは首を激しく振りながらも涙を流している。もの凄い拒否反応を起こしてるな……そんなアレが……オレは約1週間前に見たあの奇怪なスープを思い出した。それに比べたら大分まともなこれ。全く、あの時に比べたら大分マシになったみたいだな。オレはカバンからスプーンを取り出し、右手でそれを持ち、1杯すくい、口に運ぶ。

「大丈夫だってアリゲイツ、見た目はまとも……」

口に入れた瞬間違和感に気づく……ぐっ……がっ……なんだ……これ……

「コ、コノ……ハ……テメ……何をしたんだ……」

オレは死にそうな声を上げつつダウンした。

『ア、アリヤー!』

「イ、イツキイイイ!」

ああ、意識がもつろつとしてきた。ハハハハハ、あれ？大きい……  
彗星かな？イヤ、彗星はもっとバーってしているな。訳の分からない  
思考がよぎってきた。そしてそのまま意識が飛んでしまった……

で、数時間後にオレはアリゲイツとコノハの必死な看病のおかげで  
復活した。で、その後、ユースケさんに電話でランさんの料理の腕  
を聞いたところ、ヘタらしい。話によれば見た目は普通なんだが、  
味が普通ではない奇妙な味らしい。まあコノハの料理とは違って死  
にそうになる事は無いらしいけど……まあ、下手な人が下手な人に  
習えば、やっぱり下手さに磨きがかかる訳で……で、ユースケさん  
の最後の一言、『お互いに料理の事でパートナーに苦労させられる  
なあ』……全くだ。ユースケさんのその言葉にオレは苦笑するしか  
無かった



## 最悪なキャンプリターンズ（後書き）

### 次回予告

イツキ「新たな仲間の力を借りて、上手くウバメの森を抜けたオレとコノハはコガネシティに到着さて早速ジム戦に挑む」

コノハ「イツキ……この人、強すぎるよ」

イツキ「くそお！何がダイナマイトプリティギャルだ！叩きのめしてやる！次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEA SON〜『圧倒的差』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

？『ピジョー！』

イツキ「だから勝手に出てくるなよ」

## 圧倒的差（前書き）

今回はコガネジム戦、金銀で一番の難関だったと僕は思います。イッキはそんな強敵にどう挑むか？

## 圧倒的差

「ふあゝ」

オレは大きな欠伸をしつつも目を覚ました。にしても良く寝たあ…  
…オレは寝袋から出て立ち上がり両手を伸ばす。

グウゝ

……腹の虫が鳴った。昨日食べたのは結局あの1口のみ、まだ気持ち悪い……オレは何も食べない訳にもいかず、リュックからカロリーパートナーを取り出す。勿論フルーツ味だ。それを一つ袋から取り出して口に含む……やっぱりフルーツ味は最高だぜ！

ううう……やっぱり寂しい……

コノハを叩き起こして、カロリーパートナーを食わせた。んで、ウバメの森から脱出する方々を考える事にした。何か無いか？

「イツキ、あれなんてどお？」

コノハが木に向かって指を差した。その木にはピジョンと、フクロウのようなポケモン、ヨルノズクが1匹ずつ留まっている。なるほど、そういう事だな。

「んじゃ、早速行くぜ」

オレは自分のリュックからモンスターボールを取り出した。コノハもモンスターボールを握っている。よし！

「行け！モンスターボール！」

全く同じタイミングで、オレ達はボールを投げる。朝になり居眠りしていたヨルノズクに向かってコノハのボールが、目を覚ましたばかりで意識がもうろうとしているピジョンに向かってオレのボールがそれぞれ向かっていき、それぞれのボールに収まる。それはそのまま地上に落下し、しばらく左右に揺れたと思っただけで停止して中央のマーカ―がゲットした事を知らせるために青い光を放った。よし！

「ピジョン！ゲットだぜ！」

「ヨルノズク！ゲットよ！」

とそれぞれ歓喜の声を上げる。よし、早速……

「ピジョン、君に決めた！」

「ヨルノズク、行くわよ！」

オレ達はそれぞれゲットしたばかりのポケモンを出す。ゲットされたのに驚いたのか2匹共目がさえているみたいである。よし、なら行けるな。

「ピジョン、ヨルノズク、ちょっと森の出口を探してきてくれない？」

『ピジョー！』

『ホー』

2匹は頷くと飛んでいった。頼むぜ……

「生き返る〜」

オレは機嫌よく、コガネシティのポケモンコミュニティセンターPC食堂でナポリタンを食べていた。まあ朝飯がカロリーフレンドだけじゃやっぱり足りない訳であります……勢いよく頬張りこんでいる。正面に座っているコノハはこれもまた勢いよくピザを食べている。

「飯食い終わったらジム戦行こうぜ」

オレは口にあったパスタを飲み込んでからコノハを誘う言葉を言った。

「OK、でもキキョウジムの時もさ……こんな流れじゃなかった？

「……気にすんな……」

ジム戦の前日は野宿……そんな変な法則は出来やしないよな……オレはそんな予感がしてたまらなかった。あんなの毎回やってたら体壊すぞ……

「たのもー！」

オレは勢いよくジムの扉を開けつつも叫んだ。お決まりのパターンだ。

「相変わらず迷惑ね……」

コノハは呆れた様子でオレの方を見てくる。うるさい奴だな……オレはジムの中を見渡す。これといった特徴がない、普通のバトルフィールドがあるぐらいだ。

「アンタら挑戦者か？」

ジムの奥の方からコガネ鉛丸出しの声が聞こえてきた。あの女の子が声の発信源か……小柄な体格で、オレ達と同じ年ぐらいだと思う。多分コイツがこのジムリーダー、アカネだ。ジムリーダーって案外若い奴が多いんだな……ツクシとかコイツとか……

「ああ、そうだ」

いつもの口調でアカネの質問に返した。

「ならどっちでもいいからかかってき、うちは準備バンバンやで！」

「コノハ……」

「分かってるわ。先いいわよ」

オレの言葉にコノハ肯定した。んじゃ、お言葉に甘えて……

「まずはオレから相手だ！オレはワカバタウンのイツキ！」

「ならイツキ、勝負や！ルールは1対1のシングルバトルや！頼むでミルタンク！」

アカネはバトルフィールドにボールを投げ、そこからミルタンクが姿を表した。ミルタンクか……強敵だな…強敵だな……

「オレはコイツだ！アリゲイツ、君に決めた！」

『アリゲイツ！』

オレも同様にバトルフィールドにボールを投げ入れるとそれからアリゲイツが現れた。さあ、行くぜ！

「ルキアちゃん、審判頼むで！」

「はい、分かりました。試合開始！」

ルキアと呼ばれたオレ達と同一年ぐらいの女の子が試合開始の合図をした。行くぜ！

「アリゲイツ、水の波動！」

『アリア！』

アリゲイツは口から水のエネルギーが塊を放った。それは一直線にミルタンクに向かっていく。新技のお披露目だ！食らいやがれ！

「そんなもんがミルタンクに効く訳無いやろ？ミルタンク、爆裂パUNCHや！」

ミルタンクの拳で水の波動は打ち砕かれた。水しぶきが散る。打撃技でアレを吹っ飛ばすなんてありかよ……



「今度はこっちから行くで！転がる攻撃や！」

ミルタンクは身を丸くして転がりながらアリゲイツに突撃してきた。げっ……オレのゴマゾウの転がるの何倍も迫力があるぞ……

「避ける！」

『アリヤア！』

アリゲイツはその攻撃をギリギリで避けた。ふう……流石にアレは危なそうだな……

「ドリフトしてアリゲイツに向き直るんや！」

『モー！』

なっ！ドリフトで急旋回をして再びアリゲイツに迫ってきた。あの転がるを封じなきゃ勝機はないぞ……

「アリゲイツ、水鉄砲だ！飛べ！」

『アリヤアアアアア！』

地面に向かってワニノコの頃より強力な水鉄砲を放った。それにより高く飛翔する。体格がでかくなったからどこまで飛べるか不安だったが、さほど問題にならないみたいだな！アリゲイツの高くジャンプしてミルタンクの攻撃を避けた。さっさの特殊攻撃がダメだった……なら！打撃攻撃で勝負だ！

「かわらわりだ！」

落下の勢いを付けたかわらわり、コイツが決まれば！アリゲイツは重心をずらして転がるで爆走しているアリゲイツの真上にはいる。食らえ！

『アリアアア！』

『モオ？』

真上からの一撃を受けてミルタンクの転がるは停止して崩れた。よし！これで……

「なかなかやるなあ、でもうちのミルタンクはまだまだ元気やで」

『モー』

……かわらわりを受けて伸びたミルタンクは何事は何事も無かったようにのしのと立ち上がった。おいおい……「冗談じゃないぜ……」

『ア、アリ……』

アリゲイツも少し弱気になっている。コイツは不味いぞ……

「スキありや！メガトンパンチ！」

しまっ！

「避け……」

『アリアア!』

弱気になってしまいミルタンクの目の前で呆然としていたアリゲイツはミルタンクの重い一撃を貰った。これは……不味いな……

「追撃や! 転がる!」

『モー!』

ミルタンクはもの凄い勢いでアリゲイツに迫ってきた。

「避ける!」

『アリアア!』

アリゲイツはその攻撃をギリギリで避ける事に成功する。しかし……

「甘いわあ! ドリフトしてから転がるからのしかかりに変更や!」

ミルタンクはアリゲイツのすぐ真後ろでドリフトをして旋回した。アリゲイツはそれに対応しようと振り返った。しかしそこでミルタンクが立ち上がった。不味い!

『アリアア………』

アリゲイツは押し潰されてしまった。そんな!

「うちの勝ちやな!」

……イヤ、まだまだ……アリゲイツは潰されはしたけど、まだ目は死

んじやいない！この攻撃でイチバチ、形勢逆転できるかやってみるしかない！

「舐めるなよアカネ！アリゲイツ、馬鹿力だ！」

『アリアアアア！』

潰されたアリゲイツは真つ赤なオーラを放ちながら上に乗っていたミルタンクを弾き飛ばした。格闘タイプの大技、馬鹿力！効果も抜群、これでどうだ！ミルタンクは吹っ飛んでその場でダウンした。流石にこれには耐えれないだろ……

「今勝ったと思っただやろ？」

？イヤ、だって今の一撃を受けたら……

『モ、モ………』

なっ……今を受けて立ち上がるのか……

「ミルタンク、ミルク飲みで回復や」

『モー！』

ミルタンクはミルク飲みと呼ばれる技を使う。するとみるみるうちに傷が治っていく。ミルク飲みって自分の体力を回復させる技なのか！？

「さあ、これで終わりや！ミルタンク、捨て身タックルや！」

見た目の割には素早いミルトンクがアリゲイツに突撃してくる。回避を……

「アリゲイツ、かわせ！」

『ア、アリ………』

アリゲイツは回避しようとするが動かない。まさか、もう限界なのか！？

「アリゲイツ！」

『モー！』

『アリア………』

ミルトンクは捨て身タックルをもらに受けてしまった。吹っ飛ばされてしまった。オレはアリゲイツのもとに駆け寄る。完全に気を失っている。

「アリゲイツ、戦闘不能！ミルトンクの勝ちです」

審判のコールがかかった。それと同時にオレはアリゲイツの元へ駆け寄る。

「大丈夫かアリゲイツ？後はゆっくり休んでくれ……」

オレはそう言いつつもアリゲイツをボールに戻した……

「どつや！うちの圧勝や！また修行して挑戦しに来るんやで、いつ

でも相手になつたるからな」

アカネが近づいてきてそう言った。オレは悔しさのあまり、アカネを睨みつけた。

## 圧倒的差（後書き）

### 次回予告

イツキ「完全にアカネに打ちのめされたオレは無力感に襲われていた」

コノハ「落ち込んでる場合じゃないわよ！さっさと特訓するわよ！」

イツキ「コノハの言う特訓とは何か？次回！ポケットモンスター ACE ～SECOND SADASON～ 『イツキVSコノハ』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

アリゲイツ「アリゲイツ！」

## イツキVSコノハ（前書き）

今日から学校がスタート、本格的に受験モードに入るため、更新速度が落ちます。1週間に1回、出来るかなあ……



## イツキVSコノハ

「……………」

あのバトルから丁度1日たった。正直、アレは落ち込むな……………さっさアカネに完敗したオレは正直落ち込んでいる。完敗だった……………今までだって何回も負けはあったけど……………ここまで辛い敗北は初めてだ。最初からミルタンクのパワーに圧倒されて、最終的には気合いで負けてた。そうだ……………気持ちで負けてたんだ……………オレのせいでアリゲイツはあんな重いダメージを受けたんだ……………もうすでにアリゲイツの治療は終わっている。アリゲイツは元気そうだったんだけど……………トレーナーとして何も出来なかった自分が情けなくて……………こういうのを無力感って言うんだな……………

「イツキー！起きてる？」

バンバンバンというノックの音と共に聞き慣れた声がオレの耳に入った。あ、説明してなかったが、現在自室のベッドでゴロゴロしている。正直何もする気が起きないんだよなあ……………とにかく聞き慣れた声の主、コノハに返事を返さないとな……………

「寝とる！」

とだけ返した。うん、これほど分かりやすい嘘は無いな……………

「起きてるじゃないのよー！」

とコノハが文句を言いつつ『ガッーン』ともの凄い音を立てて扉が開いた。蹴りやがったな……………しかもオレ鍵かけるのを忘れてるし……………

「ほら、アカネちゃんに1回負けたぐらいで何づじづじしてんのよ！」

コノハの部屋に入ってから第1声はそれだった。

「だってさ……」

と言いつくするように呟く。正直、あのバトルは……

「あゝも〜！アンタ誰よ！」

へっ!？

「わたしの知ってるイツキはアンタみたいのじゃない！ちょっと負けたぐらいじゃくじけないし、どんな時だって猪突猛進！目標に向かって一直線よ！」

コノハ……それもそうだな……これぐらいでヘコタレルなんてオレらしくないよな……それにこんな事やってつとユウイチとサクラ、コウにまで笑われちゃうな……

「悪りい……オレらしく無かったな……」

「そーよ、やっとらしくなってきたじゃない」

とオレの言葉にコノハが返してくる。

「んじゃ、早速特訓だ！行くぜコノハ！」

「OK！」

オレは立ち上がり部屋の外へと駆け出す。本当にコノ八には感謝だよな……

### PCCバトルフィールド

「コノ八、さつきは心配かけて悪かったな！だけど容赦はしないぜ」  
「べ、別にアンタの事が心配だった訳じゃないわよ。それに手加減なんかしたらハイキックをお見舞いしてやるんだから！」

す、凄い事言ってるなアイツ……現在、ポケモンコミュニケーションセンターに設置されているバトルフィールドにいる。無論、特訓の為だ。バトルをやってお互いに実力を高め合う。それが一番効果的だからだ。さあ、行くぜ！

「ルールは2対2のシングルバトルだ！行くぜ！ゴマゾウ、君に決めた！」

オレがバトルフィールドにボールを投げ入れるとゴマゾウが現れた。

『パオ！』

やる気も十分！一気に行くぞ！

「行くわよ！ポニータ！」

『ヒヒインー！』

コノハはポニータを出してきた。相性的にはこっちが比較的有利！

「先手必勝で行くわよ！ポニータ、電光石化からふみつけ！」

ポニータは電光石化でゴマゾウに迫ってきた。速いけど……ツクシのストライク程じゃない！

「ゴマゾウ、高速スピン！」

『パオー！』

ゴマゾウは体を素早く回転させてふみつけを弾いた。行くぞ、反撃だ！

「ゴマゾウ、突進で反撃だ！」

『パオー！』

『ヒヒインー！？』

高速スピンドでふみつけを上手く弾かれたポニータは隙だらけ、その隙に突進の重い一撃を叩きこんでやった。よし、もう一撃だ！

「追撃だ！ 転がる攻撃！」

「甘いわよ！ 飛び跳ねる！」

ゴマゾウは転がるでポニータに突っ込むがそれは自慢の跳躍力でそれは用意に回避された。くっ……不味い！

「広域に炎の渦で攻撃よ！」

ゴマゾウの周りに真上から炎の渦が放たれた。

「パオ？」

しまった……退路が……

「ゴマゾウ、氷の礫だ！ 少しは時間を稼ぐんだ！」

退路が無いなら少しでも時間を稼いで炎の渦を……

「無駄よ！ 火炎放射で氷の礫ごと焼き払っちゃえ！」

今だにさっきの飛び跳ねるで高いポジションを確保していたポニータはその位置から火炎放射を放った。ゴマゾウが放った氷の礫を溶かしつつも火炎放射はゴマゾウに向かっていく。くそお、こうなったらイチバチだ！

「特大の氷の礫だ！」

『パオー！』

ゴマゾウは礫というか特大の氷の塊を放った。それは大きさ故に断続も遅く、氷の礫本来の特性を発揮しない。拳句の派手な火炎放射に氷は溶けて水になりゴマゾウにかかった。これでよし！後は……

「高速スピンド！」

ゴマゾウは体を高速回転させた。そしてそのまま火炎放射に飲み込まれた。

「わたしの勝ちよ！」

力強くコノハが勝利宣言をする。だが……！

「ゴマゾウ、突進だ！」

『パオー！』

火炎放射により燃え上がっていたバトルフィールドの中央からゴマゾウが飛び出してきた。地上に着地し、油断していたポニータはそれに対応する事が出来ない。

「食らえ！」

『パオー！』

『ヒピン！』

「ポニータ！」

ポニータはゴマゾウの重い一撃を受けて吹っ飛んだ。ポニータは元々打たれ弱い。コイツで決まりだ！

「ポニータ……ゆっくり休んで！やるわねイツキ！氷の礫を守りに使うなんてね……」

最後に放った氷の礫、元々ゴマゾウを濡らす為に使ったんだ。氷が溶けて水が出来る。それがかかって体が濡れていれば体が焼ける事は無い。そして体を回転させて少しでも火炎放射のダメージを抑えた。これで必要最低限のダメージで抑えたんだぜ！でも大分無茶させたからな……ゴマゾウも限界だ。

「へへ、だろ？ゴマゾウ、後はゆっくり休んでくれ」

オレはゴマゾウをボール戻した。ホントによく頑張ったな！次で決着がつく……勿論最後はコイツだ！

「アリゲイツ、君に決めた！」

『アリゲイツ！』

オレが投げたボールからアリゲイツが元気よく飛び出した。さ、勝とうぜ！

「リオル、行くわよ！」

コノハはリオルを出してきた。コイツは強敵だな……

「行くわよ！リオル、電光石化からはっけい！」

『でやあぁー！』

ジグザグな機動を描きつつリオルはアリゲイツに向かってくる。そのうは行くか！

「メタルクローだ！」

『アリヤア！』

メタルクローとはっけいは激突してお互いに弾き合う。パワーは互角か！

「追撃だ！水の波動！」

『アリヤア！』

「甘いわよ！影分身！」

水の波動は影分身で容易に回避された。そして分身は増え続けてそれらに囲まれてしまった。こりゃ……不味いな……

「一気に行くわよ！真空波！」

『おおおおー！』

多方向から真空波がアリゲイツに迫ってくる本物は一つ……



『アリアア!』

「アリゲイツ!」

弾速の速い真空波の一撃を受けてしまう。くっ!弾速が速い上にどれが本物か分からなきゃ話になんねーな!なら!

「もう一度真空波!」

今だ!

「吠えるだ!」

『アリアアアア!』

アリゲイツが吠えると本物のリオルは攻撃のモーションを止める。そう、本物だけ。偽物は構わずにモーションを続けている。今だ!

「水の波動だ!」

『アリアア!』

『グウ!』

水の波動はリオルに直撃した。まだまだ行くぜ!

「アリゲイツ、滝登り!」

滝を登るとき勢いでリオルに突撃していく。

「負けないわよ!リオル、はっけい!」

『じのお!』

2匹は激突し、アリゲイツはリオルを弾き飛ばした。よし!行ける!

「追撃の滝登り!これで決める!」

『アリヤアー!』

「リオル!」

この時オレは勝利を確信した。が!

「なっ!」

『アリヤツ!?!』

リオルが突如姿を消した。そして直ぐ様アリゲイツの背後に現れる。

「な、何?」

『……………』

リオルからもの凄い気迫を感じる。今までにリオルから感じた事が無い強烈なものだ。一体何が……………まさか!

『うおおおおお!』

リオルが叫び声と共に突然輝き出した。そしてじょじょに大きく、姿を変えていく。

『はあああ!』

光が散るとそこにはリオルが進化したポケモン、ルカリオがいた。  
こんな土壇場で進化したのか!?

「リオル……よし!リオル!じゃなかった、ルカリオ、インフアイトよ!」

『行くぞ!』

背後にいたルカリオはアリゲイツにインフアイトを仕掛けてくる。  
こつなつたら真つ向勝負!これでも食らえ!

「馬鹿力だ!」

『アーリイゲイツ!』

アリゲイツは赤いオーラを身に纏いルカリオに突撃する。

ズゴーン!

2匹は激突し、砂煙があがる。どうなった……

「あ!」

コノハが大声を出す。砂煙が晴れる……完全に2匹は伸びていた。  
それだけの凄いパワーの激突だったって事だな……

「ご苦労さまルカリオ、後は休んで」

「サンキュー、アリゲイツ！ゆっくりしててくれ」

コノハは完全に伸びているルカリオをボールに戻した。オレもそれに見習いアリゲイツをボールに戻した。

「流石イッキ、やるわね」

とコノハが言う

「当たり前だろ！」

とオレは力強く返す。

「自信過剰……ま、いつか。次は勝つんだから！」

自信過剰ってなあ……ま、事実だけどさ……

「へっ！次のバトルに勝つのはオレだ！」

オレは強くコノハに言ってやった。

## イツキVSコノハ（後書き）

### 次回予告

イツキ「特訓を終えたオレ達は再びアカネに戦いを挑む」

コノハ「やっぱり強敵だけど！力が及ばない相手じゃない！イツキ、行っけえ！」

イツキ「この勝負を取るのはオレだ！次回、ポケットモンスター ACE SECOND SEASON」再戦、イツキVSアカネ」  
次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ルカリオ「ピッピカチュウ！」

コノハ「流石にその顔でそれはダメよ……」

再戦 イツキVSアカネ(前書き)

今回はお笑いの要素が……やっぱりアカネはアレでしょう

## 再戦 イツキVSアカネ

「たのもー!」

前回と同様、気合いの籠った声をあげながらジムの扉を開けた。あれから3日特訓したからな……あの時とは違っぜ

「アンタ達かいな。また倒されに来たんか?」

奥からアカネの声が聞こえた。この野郎……覚悟しやがれよ……

「ああ!いくら負けたって何回でも挑戦してやる!」

オレは強気で言う。

「面白い事言ってくれるわ!ルールは2対2のシングルバトル!全力で倒させてもらうぞ!どっちからくるんや」

「オレから勝負だ!オレとコノハで連敗を味わってもらっぜ!」

オレは前コノハの1歩前に出た。

「絶対に勝ちなさいよ」

「当然だ!」

コノハの言葉に頷いてから、バトルフィールドに入る。

「行くぞ!頼むぞ、ピッピちゃん!」

『ピィー!』

アカネがボールを投げるとそれからピッピが現れる。妖精ポケモンのピッピは月から来たポケモンと呼ばれている。タイプはノーマルだよな……ならこっちはコイツだ!

「ピジョン、君に決めた!」

『ピジョオ!』

オレはバトルフィールドにボールを投げ入れるとそれからピジョンが現れた。コイツだってレベルは上がってるんだぜ?

「ルキアちゃん、審判頼むで」

「はい、試合開始です」

この前同様、ルキアと呼ばれた同い年ぐらいの女の子がバトルフィールドに入って試合開始のコールを掛けた。行くぜ!

「先手行くぜ!ピジョン、電光石化から翼で打つ!」

『ピジョオオ!』

ピジョンは高速でピッピに向かっていく。食らえ!

「甘いわ!ピッピちゃん、コメットパンチ!」

『ピィー!』



翼で打つとコメントパンチが激突してお互いに弾き合う。しかしピ  
ツピがピジョンより後退している。電光石化で勢いをつけてたから  
な。まともにぶつかったらこっちが上だ！

「まだまだ！ピッピちゃん、恩返しや！」

『ピィー！』

恩返し、トレーナーになついているほど威力が増す技だ。甘い！

「燕返しー！」

ピジョンはオレの指示を聞き、燕返しを発動する恩返しによる攻撃  
を避けてピッピの背後に回った。チャンス！

「鋼の翼だー！」

『ピジョォー！』

『ピィー！？』

「ピッピちゃんー！」

鋼の翼の直撃を浴びてピッピは吹っ飛んだ。よっしゃ！絶好調だぜ！

「中々やるなあイツキ！こつなつたら奥の手や！」

な、何をするつもりだ！？その言葉を聞いてルキアはビクッと肩を  
震わせる。……なんか嫌な予感がする……アカネが何かをポケット

から取り出し耳に付けた。ルキアもそれに見習い耳に何かをつける。あれは耳セン？……まさか！

「ピジョン、耳を閉じるんだ！コノハも！早く！」

「へっ？」

それを聞いて訳も分からずコノハとピジョンは首を捻る。オレは直ぐ様耳に手を当てる。多分あの技を……

「ピッピちゃん歌うんや！」

くっ！歌うは相手を眠らせてしまう技、強力なものはトレーナーだつて眠らせてしまふという……オレは耳を抑える力を強くした。ピッピが大きく息をすう。くっ、来る！

『 × \*々@ //!!?!? 』

耳をつんざくような音が聞こえた。コイツは……本当に歌うなのか！？耳をつんざくような下手な歌、もとい騒音がオレを、ピジョンを、コノハを襲う。ピジョンは気を失い地上に落下する。

「ああ！ピジョンー！」

オレがそう叫ぶが騒音……じゃなくて歌うにかき消される。ボールに直ぐに戻してやりたいが……今耳から手を離したらオレがあなつちまう……

『 \* @ // 々 @ !?!?!? 』

まだまだ続くリサイタル、ああ、ド えもんの、の 太はこんなの  
に耐え続けてたんだな……くっ……意識が……飛びそうだ……なん  
て強力な歌うだ……そうか……意識を奪う程のヘタさで意識を奪っ  
て強制的に眠らせる……これが歌うの真髄なんだな……リサイタル  
が突如終了した。み、耳鳴りが……

「ピジョン、戦闘不能！ピッピの勝ち！」

ルキアがピッピの勝利とコールを掛けた。なんでこんなおされて平  
然でいるんだよ……やっぱり慣れなのか？苦労してるんだな……と  
にかく耳がおかしい……

「ピジョン、後はゆっくり休んでくれ！」

オレはピジョンをボールに戻した。……ごめんなピジョン、オレが  
悪かった……そう心でピジョンに謝罪しつつもオレは次のボールを  
持つ。

「やったなピッピちゃん！でも、もっと歌うまくなるっな？」

『ピィ……』

アカネはピッピを誉めているのか誉めていないのかよく分からない  
事を言う。とにかくは……

「アリゲイツ、頼むぜ！」

オレはアリゲイツを出した。コイツで絶対勝つからな……

「試合開始！」

ルキアが試合開始のコールを掛けた。ミルトンク戦までにアリゲイツの体力を無駄に消耗する訳にはいかない！一気に決める！

「アリゲイツ、突撃だ！」

『アリゲイツ！』

アリゲイツはピッピに向かって真正面から突撃していく。

「ならこっちも正面からや！ピッピちゃん、メガトンパンチや！」

『ピィー！』

ピッピは力を込めた拳を作り、アリゲイツに向かっていく。

「無駄だ！嫌な音！」

キーン！

アリゲイツは足を止めずに、嫌な音を使った。アリゲイツの声帯から出たとは思えないほど嫌な音、黒板をひっかいた時に聞こえる音だ！うっ、トレーナーにもダメメージ受けるよな……これ……ピッピはそれに耐えきれず、足を止めて耳を抑えた。今だ！決める！

「決めるぞ！かわらわり！」

『アーリィー！』

『ピィィィィィー！』

「ピッピちゃん！」

アリゲイツのかわらわりが炸裂した。効果は抜群！さらに嫌な音で打撃攻撃に対する体制が弱くなっているピッピには効果はてきめん、決まりだ！ピッピは目を回して倒れた。

「ピッピ、戦闘不能！アリゲイツの勝ち！」

よし！まずは1勝！

「う……もどるんやピッピちゃん、腕をあげおったな……よし、決着つけるで！行くんや、ミルタンク！」

アカネはミルタンクを繰り出してきた。来やがったか……

「試合開始！」

ルキアが試合開始のコールを掛けた。いつでも来い

「ミルタンク、転がる攻撃や！」

ミルタンクは体を丸めてアリゲイツに向かってくる。今だ！

「かわして雨乞いだ！」

新技、雨乞いをアリゲイツは発動した。バトルフィールドに雨が降り始めた。

「有利な状況を作ったんか……ミルタンク、ドリフトしてそのまま

突撃や！」

ミルタンクはドリフトしてアリゲイツに向かおうとするが、それは出来なかった。雨乞いのせいで濡れた地面、勿論酷く滑りやすくなっている。そのためドリフトに失敗してミルタンクは滑って転倒した。

「オレが前回完敗した理由、それは転がるからのコンビネーションに圧倒されたからだ！ 転がるさえ封じれば勝機はある！ アリゲイツ、滝登りだ！」

『アリアア！』

転倒しているミルタンクに向かってアリゲイツは滝を登るとき勢いで突撃していく。雨乞いのおかげで威力も上がっているんだ！ コシなら！

「まだや！ 捨て身タツクル！」

ミルタンクは素早く立ち上がりアリゲイツに向かって突撃してきた。激突し、お互いに後退する。パワーは互角か！ 雨でこっちはパワーアップしてんだけどな……

「まだまだ！ 水の波動！」

「避けるんや！」

ミルタンクは意外な軽快な動きをしてそれを容易に回避する。案外ミルタンクって素早いんな……

「反撃行くで！メガトンパンチ！」

ミルタンクがアリゲイツに迫り拳を奮ってくる。

「無駄だ！足元に水鉄砲！」

『ア—リヤアア—！』

ミルタンクの足元に放たれた水鉄砲は、雨乞いで濡れて柔らかくなっていた地面を簡単に形を変えた。そのため足をおもいつきり滑らせ、ミルタンクは再び転倒した。うっし！

「追撃の水の波動だ！」

『ア—リヤア—！』

もう一度放たれた水の波動、転倒していたミルタンクは回避出来ずに吹っ飛んだ。コイツで！

「ミルタンク！……イツキ、ホントに腕をあげおったな……おかげでうちのミルタンクもかなりダメージを受けたは……」

だろうな……

「だけど、うちのミルタンクを舐めたらあかんで！」

ミルタンクは辛そうにゆっくりと立ち上がった。くっ！倒しきれなかったか！

「ミルタンク！ミルク飲みや！」

前回と同様ミルク飲みを使ってきた。みるみるうちにミルタンクの傷は治っていく。くっ！不味い！こっちは体力を消費する一方なのに相手は簡単に回復しちまう！一撃に賭けるしかなさそうだな……相手はミルク飲みをしている……やるなら今だ！

「アリゲイツ、竜の舞だ！」

『アリゲイツ！』

アリゲイツはオレの言葉に頷いてから力強く舞始めた。その舞からは、竜の威厳みたいな、そんな感じのものを感じてしまう。

「回復完了や！ミルタンク、捨て身タツクルや！」

ミルタンクは正面からまた突撃してきた。そこだ！

「更に竜の舞！」

『アリアア！』

さっきより激しく舞を行うそれにより捨て身タツクルを受け流した。よし！パワーも十分に上がった！決めてみせる！

「ミルタンク、爆裂パンチや！」

『モー！』

アリゲイツの背後からミルタンクは迫る。それに対して素早い身のこなしでアリゲイツは振り返った。コレで決める！



「馬鹿力だ！」

『アーリアア！』

赤いオーラを身に纏い、アリゲイツはミルトンクの拳は激突した。今までにない砂煙があがる……どうなった！？

『ア、アリアア……』

「アリゲイツ！」

アリゲイツは目を回してフラフラになりながらも立っている。その様子はまるでパッチール、爆裂パンチを受けて混乱したんだな……げっ！ミルトンクも立ってやがる……アレに耐えたのか！？

「惜しかったなイツキ！ミルク飲みや！」

くっ！そんな事されたらもう勝目は……

『モ、モ……』

なっ！ミルトンクは回復する事なくダウンした。もしかして……

「ミルトンク、戦闘不能！アリゲイツの勝ち！よってチャレンジジャ―、イツキさんの勝利です！」

……よっしゃあ！勝った！

「イツキ、やったじゃん！」

「ああ！やってやったぜ！」

コノハの言葉にオレは力強くガッツポーズをした。んじゃ……そろそろ……

「へへっ！オレの勝ちだ！」

オレはアカネをあおるように言った。この前のお返しだぜ！

「あの、イツキさん……ちょっと……」

ルキアが少しバツが悪そうな声で話かけてくる。オレは何か尋ねようと口を開いたその時！

「うわ〜ん！酷いよあ〜！」

はっ！？突如アカネが大泣きしはじめた。な、なんだ！？

「す、すいません、アカネさんは凄く負けず嫌いなものでして……すいません」

……冗談じゃねーよ……

「あ〜、最低！女の子を泣かすなんて！わたし軽蔑しちゃうなあ」

とコノハがからかうように言ってくる。畜生……覚えてろよ……

「お、おい……」

「うわ〜ん！」

声をかけても効果はない。最悪じゃねえかよ！オレは思わずため息をついた。

で、3時間後、復活したアカネにバツジを無事もらう事が出来た。で、コノハも雪辱戦を挑み、見事勝利した。ヨルノズクとルカリオが大活躍だった。その時またアカネが大泣きしたのは言うまでもない……

## 再戦 イツキVSアカネ（後書き）

### 次回予告

ユースケ「久しぶりにカズマとカシスと久しぶりに僕らは電話ごしに話した」

ラン「ユースケ、二人に負けてられないし、あたし達もジム戦に行こうよ」

ユースケ「僕達はキキョウジムのハヤトさんに挑む。行くよユンゲラー、リザードン！絶対に勝つよ！」

ラン「次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEAS ON〜『高速の空中戦！火炎竜の意地』次回もポケモン、ゲットだぜ！なんちゃってね」

ピカチユウ『ピッピカチユウ！』

高速の空中戦、火炎竜の意地（前書き）

ユースケの視点です。ユースケの真の実力が分かります。イ  
ツキの視点の時よりかなり長いです……

## 高速の空中戦、火炎竜の意地

キキョウシテイPC電話口

「久しぶりだなユースケにラン、クチバの港以来じゃんか」

TV電話に映っているカズマが僕に言った。カズマは僕の親友でありライバルであるトレーナーだ。活発で真っ直ぐな性格で、決めた事は一直線に貫き通す強さを持っている。現在、パートナーの少女カシスと共にホウエン地方を旅しているんだ。約2ヶ月ぶりに僕とランはカズマ達と話す。まあ、近状報告みたいな感じかな？TV画面にはカズマだけではなくカシスも映っている。このコンビと話すのはホント久しぶりだな。

「そうだね。元気にやってるかい？」

「オレもカシスも元気にやってんぜ」

「もつちろんだよ。わたしはともかくカズマから元気を取ったら何が残るのよ」

「な！そんな言い方ないだろ！」

僕の言葉にカズマが頷き、それをカシスが軽く茶化した。ハハハ、2人とも変わってないな……

「2人共何個バッジを手に入れたの？」

僕の隣に立っているランが2人に尋ねた。

「まだ3つ、ホウエンの独特な地形で次の町に行くのに一苦労なのよ」

とカシス、意外だね……もっと手に入れてると思ってただけ……

「で、お前らはどうなんだ？」

「まだ2つ、でも速いペースじゃない？」

僕はカズマの言葉にそう返す。すると……

「違ってる」

と、妙な笑みを浮かべつつも言う。それを聞いてかカシスも妙な笑みを浮かべる。嫌な予感……

「キミ達二人の关系到決まってるじゃない！どこまで進んだの？」

ぶっ！や、やつぱり……予想通りというか……僕は隣にいるランを見る。あからさまに顔が真っ赤になっているのが分かる。

「え、カシス……その……ね」

「ユースケ、ラン、顔真っ赤だよお」

ランが何か言おうとするもカシスに切られる。カシス、凄く楽しんでるな……

「で、実際どこまで行ったんだ？」

「手をつなぐところ？アーン？それともキス？」

カズマとカシスのコンビネーション攻撃、効果は抜群だ。既にランは湯気が出そうならい真っ赤になっている。僕も大分顔が熱くなつてきている。多分僕も真っ赤だろうな……事実、アーンはしてないしキスもしていない、強いて言えば、ヒワダのポケモンセンターの屋上で僕がランを抱きしめたぐらい……でもカシスの言葉はかなり凶悪な訳で……

「カカカ、カシス！」

ランと僕を動揺させるには十分である。

「キスまでしちゃったんだ〜」

うう……カシスは化物だよ……

「し、してないよ！それより2人こそどこまで行つたの！？」

苦し紛れにランが言った。これはナイス切り返しだ！

「なっ！」

「へっ？」

カズマが真っ赤になる一方、カシスは変化無し。これってどういう

……

「いや、ランそのな……」



「いやだなあ、何言ってるのよラン、「冗談キツイよ」

へ？

グサアアアア

……凄く不快になるような……という心が砕かれたような音がしたような気がした。画面に映っているカズマはフラフラになりながらも画面から消えていく。ど、どこに行くつもりだろう！？とにかくご愁傷様……

「カ、カズマ！どこ行くの！？ああ！ごめん、ラン、ユースケ。わたしカズマ追うね。ジム戦頑張ってるね！」

電話が切られた。

「カズマくん、本当にごめんね！」

ランは消えた電話の画面を見ながら言った。カズマのご冥福を心からお祈りします……

キキョウジム

「こんにちは、ジム戦に来ました！」

僕はジムの中に入ってから大声で言った。特に変わった仕掛けもないバトルフィールドの向こう側には男の人が立っている。きっと彼がジムリーダーのハヤトさんだ。

「やあ、挑戦者だね？私はハヤト、キキョウジムのジムリーダーだ。君達はユースケちゃんとランちゃんだね？」

「え？何で名前を……」

ハヤトさんの言葉にランが驚いて尋ねる。考えれば簡単なんだけどね……

「ほら、君達ポケモンリーグに出場していただろ？」

「あ、なるほど」

ランが納得したように言った。

「君達程のレベルのトレーナーなら、実力を試すなんて言っていない！全力で行かせてもらう！」

その言葉と同時にハヤトさんが壁に備えつけられているレバーを引くと天井が開き始めた。それからバトルフィールドにハヤトさんが入った。

「ルールは2対2のシングルバトル！どっちからやるんだい？」

「僕からやります。いいよね、ラン」

「うん、頑張つてね」

「当然だよ」

僕はランの言葉に答えてから素早くバトルフィールドに入って、モンスターボールを一つ取り出す。

「頼むよ、ユンゲラー！」

『任せろ！』

僕がバトルフィールドにボールを投げ入れるとユンゲラーが現れた。さあ、頼むよ！

「行くぞ、ピジヨット！」

『ピジヨオ!』

ハヤトさんも同じようにボールを投げると大型の鳥ポケモン、ピジヨットが現れた。油断出来ない相手だね……

「試合開始!」

審判がコールを掛けた。先手必勝だ!

「ユンゲラー、スピードスター!」

スピードスターによる先制攻撃、無数の星の形をしたエネルギーはピジヨットに向かっていく。

「翼で打つで射ち落とせ!」

『ピジヨオ!』

スピードスターが直撃する寸前にピジヨットは翼を奮って全てのスピードスターを叩き落とした。流石にそんな甘くないか……

「今度はこっちから行くぞ!ピジヨット、電光石化から鋼の翼だ!」

ピジヨットはギザギザの起動をとりつつも高速でユンゲラーに向かってくる。それぐらいじゃ!

「ユンゲラー、気合玉の壁だ!」

ユンゲラーは気合玉のエネルギーを壁の形に形成する。エネルギー

のコントロールの得意な僕のユンゲラーだけの技だ。ピジヨットの機動を読んで気合玉の壁を貼る。

『ピジヨット!?!』

『へへっ! 甘いぜ!』

ギリギリで鋼の翼を弾いた。よし、反撃だ!

「気合玉でそのまま攻撃!」

『貰っとけ!』

ユンゲラーはピジヨットに向けて気合玉を放った。それは上昇していくピジヨットに向かっていく。

「ピジヨット、吹き飛ばしで気合玉を跳ね返してやるんだ!」

『ピジヨオオオ!』

『じよ、冗談じゃないぞ!』

おいおい、本当に冗談じゃないよ! 気合玉がピジヨットの使った吹き飛ばしによって本当に跳ね返ってきた。

「避けるんだ!」

『言われなくとも!』

気合玉が落着いた地点で大きな爆発が起こった。ユンゲラーはギリ

ギリそれに巻き込まれずにすんだ。ふう……間一髪……

『ユースケ、こりゃ色ボケしてる余裕なんてないぜ!』

……バトルの時ぐらいはランの事は考えてないよ!とにかくは……

「分かってるよ。とにかく相手のスキを作ろっか」

『だな……のわっ!』

ユンゲラーの足元に空気の刃が突き刺さった。今のはエアスラッシュか……油断も隙もないよ……とにかく反撃しないとね!

「エアスラッシュ乱舞だ!」

『ピジョオ!』

『のわあああ!』

ピジョットが連続でエアスラッシュを放ってきた。今のところ当たってないけど……一発でも当たったら少し不味いかな?とにかく反撃しないとね

「ユンゲラー、フラッシュだ!」

僕の指示でユンゲラーはエアスラッシュの猛攻の中から眩い光を放った。一瞬これでスキが出来る!後は!

「ユンゲラー、気合玉!」

僕の指示でユンゲラーみたいなものは気合玉のエネルギーを貯め始めた。そのエネルギーは徐々に拡大していく。

「くっ！させるか！エアスラッシュュ！」

ピジヨットは再びエアスラッシュュを放ってきた。それはユンゲラーらしきものに直撃して吹っ飛んだ。

「甘かったなユースケくん、それ程度ではまだまだ私は倒せないぞ」  
「ハヤトさんが勝ち誇ったように言った。甘いのはそっちだよ……ユンゲラーみたいなものは光の粒子となり消滅した。すっかりかかってくれたよ！」

「あれは身代わり！まさか！」

ハヤトさんが叫ぶがもう遅い！ユンゲラーは既にテレポートでピジヨットの真上に回っていた。さっきエアスラッシュュが直撃する寸前に身代わりとレポートの同時使用。身代わりで相手を引っ掛けるのは僕とユンゲラーの十八番だ。これぐらいの連携、ユンゲラーとならアイコンタクトで出来る。さあ、行くよ！

「雷パンチ！」

『だりやああ！』

『ピッ！ピジヨオ！？』

「ピジヨット！」

雷パンチを受けてピジヨットは勢いよく落下していく。だがただ落ちるハズが無い。ピジヨットは地面に落ちる寸前に翼を精一杯振って、地面に落ちるのを阻止した。今だ！

「ユンゲラー、ホールディングリフレクター！」

確保するリフレクターという意味のこの技、その名の通り細いリフレクターがピジヨットの周りに現れ、ピジヨットの動きを完全に確保し、封じた。

『一気に行くぜ！』

ユンゲラーの拳が輝きを放ち始めた。それは徐々に強大になっていく。

「サイコマグナム！行っけえ！」

「くっ！守るだ！」

ユンゲラーが輝く拳を落下の勢いを利用してつつ叩きつけようとする。と、光の膜、守るが現れてピジヨットへの拳は阻まれた。しかし！

『行っけえええ！』

ユンゲラーの気合いの叫びと共に拳からエネルギーが放たれた。それは守るを貫通し、ピジヨットに炸裂した。サイコマグナムはエネルギーを一点に集中させて放つ技、エネルギーを一点に集中させるため、貫通力が高く守るでは封じる事が出来ない。僕とユンゲラーの切札だ。ホールディングリフレクターが解除され、サイコマグナムの勢いでピジヨットは地面に叩きつけられた。ピジヨットは完



全に目を回している。よし！

「ピジョット戦闘不能！ユンゲラーの勝ち！」

『おっしやつ！』

ユンゲラーは地面に着地しつつも歓喜の声を上げた。

「戻れピジョット！やるなユースケくん、だが、まだ負けた訳じゃないぞ！頼むぞ、エアームド」

ハヤトさんは鋼の体を持った堅そうな鳥ポケモン、エアームドを繰り出してきた。ユンゲラーの息は少し上がっている。連戦は不味いね。

「ユンゲラー、後は休んでて」

『そうさせて貰うぜ。勝てよ』

僕はユンゲラーをボールに戻してベルトに戻した。言われなくても勝つつもりだよ。僕はすぐ隣にセットされているボールを握る。

「頼むよ、リザードン！」

僕の2番手はリザードンだ。頼むよ……

「試合開始！」

審判がコールを掛けた。行くよ！

「リザードン、火炎放射！」

『リザア！』

「避けてからドリルくちばし！」

『ギューイー！』

リザードンの火炎放射は容易に避けられ、エアームドはリザードンに迫ってくる。それに当たる訳にはいかないね！

「リザードン、テールバーナーで上昇するんだ！」

『リザア！』

リザードンの尻尾からジェット噴射のごとく炎を吹き上昇した。それによりギリギリ、ドリルくちばしの回避に成功する。

「高速移動で追いかけるんだ！」

エアームドはハヤトさんの指示で旋回して急上昇し、リザードンに向かっていく。高速移動で加速しているからこのままじゃ追いつかれる！

「リザードン、大文字！」

『リザアアア！』

リザードンは強大な炎を吐いた。あのスピードで向かってくるんだ！避けれるハズが……

「甘いぞ！燕返し！」

エアームドは大文字に当たる寸前に姿を消した。そして次の瞬間、リザードンの背後に姿を現した。

「しまっ……………」

「そこだ！ブレイブバード！」

『ギューイー！』

『リザア』

「リザードン！」

リザードンはブレイブバードを受けてリザードンは落下していく。しかしリザードンは地上すれすれで体制を立て直した。しかしそこにエアームドが迫ってきている。このままじゃやられる！？

「決まりだ！ブレイブバード！」

『ギューイー！』

「リザードン！」

リザードンのピンチに僕は叫んだ。って…………え？ブレイブバードが直撃する寸前にリザードンが姿を消した。急に目標を見失ったエアームドは勢いよく地面に落下した。…………リザードン、土壇場でやってくれたね…………

「今のは燕返しか！」

そう、燕返しだ。

今までのリザードンは出来なかった技、なら何故出来るか？それは天才だからだ。僕のリザードンはやたらと子供ぼいのだが、バトルの天才だ。一度見た技は、自分が使える技ならスポンジのように吸収してどんどん自分のものにしていくんだ。岩石封じやテールバーナーだつてそうやって自分の技にしたんだ。にしても土壇場でこれか……流石だね！とにかく

「追撃の火炎放射だ！」

『リザア！』

地上にはいつくばっているエアームドに向けてリザードンは火炎放射を放った。それに素早く反応して高速移動で大空に脱出する。でも今のでペースは掴んだ。後はこっちのものだ！

「こつなつたら一気に決めるぞ！エアームド、ゴットバードだ！」

『ギューイー！』

エアームドは光を放ちながらリザードンに突撃してくる。ゴットバードは中途半端な攻撃じゃ止めれない……多分、オーバーヒートでもあのエアームドのゴットバードじゃ受け止めれないと思う……なら！

「リザードン、ブラスト……え？」

リザードンは僕の方を向いて首を横に振った。もしかして、何かやりたい事でもあるのかな……なら！

「リザードン！君の好きなようにしていいよ！」

『リザア！』

僕の言葉にリザードンは頷いた。するとリザードンは赤いオーラを纏い始めた。なんか、凄い熱気を感じるオーラだ。そして尻尾の炎はオレンジ色から青色に変わり、徐々に大きくなっていく。これって……レッド先輩と戦った時の……

『リザアアア！』

リザードンは飛翔した。テールバーナーで加速しつつもゴットバードで突撃してくるエアームドに向かっていく。そんなリザードンは青い炎に包まれる。これは……フレアドライブ？いや、そんなレベルじゃない！炎タイプのギガインパクトって言うべきだ！これなら行ける！

「リザードン、行っけえええ！」

『リザアアアアア！』

「エアームド！ド根性だ！」

『ギューイ！』

2匹のポケモンは激突した。もの凄い爆発が発生して2匹のポケモンが落下してきた。相撃ちか！イヤ……

『リザアアア!』

リザードンはほうこうを上げ、翼を力いっぱい振るい落下するのを阻止した。一方エアームドは何もする事なく地面に落下した。これ  
つて……

「エアームド、戦闘不能!リザードンの勝ち!」

審判のコールが掛った。や、やったあ!

「リザードン!」

『リザア!』

僕は降りてきたリザードンを抱きしめた。本当に、よく頑張ったね

……

「ユースケくん、完敗だよ」

ハヤトさんが僕達のもとに歩いてきて言った。

「運がよかったですよ」

「そうかい、でも君の勝ちには変わりない、ウィンドバッジを受け  
取ってくれ」

「ありがとうございます」

僕はハヤトさんからウィンドバッジを受け取った。うん、3つ目の

バッジ、ゲットだ！

「次はランの番だよ。頑張ってるね」

「うん、当然だよ！」

僕は振り返り向き観戦していたランに言った。ランはいつも通りに元気よく僕の言葉に頷いた。

## 高速の空中戦、火炎竜の意地（後書き）

### 次回予告

イツキ「オレ達はコガネの地下市場に観光に来ていた」

コノハ「わあ、このアクセサリーかわいい」

イツキ「買ってやるよ。そいつには料理が上手くなるおまじないがかかっているらしいしな」

コノハ「イツキに買ってもらったアクセサリー、それがわたし達にとある事件を引き起こす！」

イツキ「次回！ポケットモンスターACEのSECOND SEA SONの『地下の悪戯コンビ』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ゴマゾウ「パオーン！」



## イタズラコンピ（前書き）

人気投票は今日までです。ご協力お願いします！

イツキ「必死だな……」

票が全然集まってるないんだ。

イツキ「おいおい……」

もしかすると延長するかも

イツキ「適当だな、おい！」

## イタズラコンビ

オレとコノハはコガネシティの地下商店街に来ていた。オレ達は何日かの間、コガネシティに滞在している。コガネデパートやら遊園地、ゲームセンターにラジオ局と色々なものがあるからそれを見て回っているんだ。ここ最近、ハードなバトルばかりだったし、丁度いい休憩になるかな？という訳で地下商店街、まあ名前通り、沢山の商店が並んでいる。ポケモンの毛並を整える美容室や宝石店、漢方専門店まである。で、現在アクセサリを取り扱っている露店を覗いている。ここは流石はコノハも女の子と言っべきか、普段はがさつで、女の子らしくなくて、短気なコイツだけど、こんなところもあるんだな……って思う。

「あ、このペンダント可愛い！」

しやがみ込んで沢山のアクセサリを見ている。正直あまりこんなのに詳しくないオレはそれをポーツと見てるしかない……オレは黙って財布を取り出して中身を確認する。小遣いも昨日送られてきた1カ月に1度の母さんからの仕送りのおかげで余裕があるな。そうだな……この前アカネに勝てたのもコイツの言葉でやる気が戻ったお陰だしな……

「気に入った奴があったら買ってやるよ」

「え！いいの！」

オレの言葉に俊敏に反応するコノハ。その反応速度はエビワラーも真っ青だ。

「ああ、この前のお礼をまだしてなかったからな」

といつも通りの口調で返した。するとコノハは目を輝かせつつも選  
び始める。

「おっ！坊主、優しいね。その譲ちゃんは彼女かい？」

ごはっ！店主のおっちゃんと言った。なっなんっく冗談を……

「誰が……」

「イツキなんかと！」

コイツなんかと！って続けようとしたのをコノハがその言葉を切っ  
てきた。オ、オレのセリフ……

「お〜お〜、若いっていいねえ！」

話聞いてねえな……

「まったく……あ！イツキ、これ！これ欲しい！」

コノハはペンダントを指差す。オレ自身ペンダントには詳しくないので詳しい説明はハブかせて貰う。まあとにかくシンプルなデザインだ。ん？なんか隣に説明が書いてあるぞ……ふむふむ、お守りみたいなにかご利益みたいのが1個1個にそれぞれあるのか……な  
になに『料理上手』……コノハ……気にしてたんだな……

「んじゃ、これください」

オレはそれを指差す。

「はいよ」

おっちゃんはそのを袋に入れてコノハに渡す。

「いくらですか？」

「1500円だよ」

1500円か……高いぞ……

「はい」

オレは財布を取り出して、1000円札1枚と500円玉を取り出した。それをおじさんに渡す。

「まいごありー！」

オレ達は露店を後にした。

「ありがとうイッキ！アンタ、たまには良いところあるじゃない！」  
たまつておい！

「オレはいつだっていい奴だぜ！」

オレは強気で言う。

「あ、そ。ま、とにかくありがとね」

そういつつ、コノハは袋からペンダントを取り出した。その時！

『ブイ！』

「あ！」

不意に何かが現れてコノハの手に持っていたペンダントをひったくつていった。

「あゝっ！わたしのペンダント！」

「今のはポケモン！？」

オレとコノハはそれぞれの反応を見せる。とにかく追いかけないとな！

「ゴマゾウー！」

『パオ―!』

オレはボールからゴマゾウを出した。コイツの鼻なら!

「コノハ、さっきの袋を貸せ!」

「あ、なるほど!」

オレはすぐにペンダントが入っていた袋を受け取り、ゴマゾウに掻かせる。コイツの鼻ならペンダントの匂いを追いかける事が出来るハズだ!

『パオ!』

よし!分かったみたいだな!

「頼むぜ!行くぞ、コノハ!」

『パオツ!』

「OK!」

ゴマゾウは率先して走り出す。さあ、しっかり見つけてくれよ!

ゴマゾウを追いかけてオレ達は再び地下に潜っていった。さっきとは違ってかなりの深い階層まで来ている。スイッチの押す順番によって開く扉が変わってくる。とにかく複雑に入り組んでるな……匂いで追えるのはいいんだが、この厄介なカラクリのせいで前にさっぱり進めないぜ……

『パオツ！』

ゴマゾウは足を止めてこっちに振り向いた。それからさっきの方向に向き直す。ここに、何かあるんだな……オレはゴマゾウのもとへ進みゴマゾウが向いている方向をみた。

「！」

「何？ イツキ、どうした……」

オレはコノハの口を手で塞いでゴマゾウを抱えて近くにあった壁に隠れた。

「ちよっ！ 何すんのよイツキ！」

「しっ！ 静かにしろ」

コノハの言葉にオレは小声で返した。そして壁の影から覗いてみる。

コノハもそれを見習う。そこには見るからに怪しい2人の男とさっきのポケモン、イーブイがいた。イーブイはペンダントを男に渡す。とにかく話を聞いてみよう

「お、ペンダントか、よくやったな！」

『ブイ！ブイブイ！』

「あ？仲間を返せって？ダメダメ！もつと上物を持って来なくちゃ」

『ブイー！ブイー！』

「あ？知らねえな？さっさと行け！」

……今のは……代々今の話で分かったぞ……多分アイツら泥棒とか空き巣とかそういう奴らだ……あのイーブイの仲間を盾にしてあのイーブイに無理矢理泥棒をさせてるんだ！人の……イヤ、ポケモンか……ポケモンの心を持って遊ぶなんて許せない！

「コノハ！」

「分かってるわよ！ポニータ！火炎放射！」

『ヒヒーンー！』

コノハがオレの言葉に頷くと素早くボールを投げた。それからポニータが登場し、泥棒達に向かって火炎放射を放った。

「うおっ！？」



「なっ！」

ちっ！外したか！

「なんだ手前ら！」

「なんにしてもオレ達のアジトを見られた以上、帰す訳には行か  
ねえ！」

男2人はそれぞれ、猫みたいなポケモンのニャースと大きな舌が特  
徴のポケモン、ベロリングを繰り出してきた。相手は何だろうと負  
けない！

「ゴマゾウ！ベロリングに突進だ！」

『パオー！』

コイツらだけは、絶対に倒してやる！

## イタズラコンビ（後書き）

### 次回予告

イッキ「泥棒を追い詰めたオレ達は泥棒とのバトルになる」

コノハ「中々やるわね……でも、負けないんだから！」

イッキ「次回、ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEA  
SON ～ 『新たな仲間達』 次回もポケモン、ゲットだぜ！」

イーブイ『バイバイ！』

イッキ「はて、何で君がここに……」

## 新たな仲間達（前書き）

テストのせいで更新が遅れ気味です。人気投票の結果発表も遅くなると思います

## 新たな仲間達

『パオー！』

ゴマゾウは吠えつつもニヤースに突進していく。

「避けてから乱れひっかきで反撃だ！」

男の指示でニヤースは俊敏にゴマゾウの攻撃を避けてゴマゾウに攻撃を仕掛けてくる。その反対側からベロリングがゴマゾウに仕掛けてくる。その巨体は拳を振り上げてゴマゾウに殴りかかるうとする。ちよつと試してみるか！

「ゴマゾウ、影分身！」

『パオツ！』

ゴマゾウは影分身を作り出し、2匹の攻撃を避けた。影分身に向かって同時に襲いかかったって事は……

『ニヤツアア！？』

『ベツ、ベロ！？』

分身に向かって殴りかかったベロリングの拳は分身を透けて、ニヤースに直撃した。2体のポケモンが同時に直接攻撃をして来た時に、影分身は上等手段だよな！反撃、行くぜ！

「ゴマゾウ、ベロリングを突進で弾き飛ばせ！」

『パオオオ!』

ゴマゾウの突進はベロリンガに炸裂して文字通り弾きとばした。よし!

『べ、べロ』

ちえ……流石にあれ程度じゃ倒せないか……

「やってくれるな小僧!」

「だが調子に乗るなよ!」

……2対1で圧倒されていた奴らが何を言うか!それに……

「イツキ、お待たせ!」

「流石コノハ、仕事が早いな」

コノハの言葉にオレが返す。コノハの足元には脅えきっているのとそれをなだめているイーブイが1匹ずついる。そう、オレが劣りになっている間に、コノハはポニータと共に捕まっていたさっきの泥棒イーブイの仲間を助けだしていたのだ。

「い、いつの間に!」

男の一人が驚愕する。ま、それほどの事じゃないんだけどな

「これで憂いなしでやれるね」

「ああ、コノハ、油断すんじゃないぞ」

「分かってるわよ」

軽く会話をこなしながら前を向く、おっしさと片付けるか！

「ちっ！舐めたマネを……ベロリング、メガトンパンチ！」

「ニヤース、乱れひっかき！」

『ベロー！』

『ニヤー！』

真正面から2匹のポケモンが突撃してくる。へっ！そんな単調な攻めかたなら！

「ポニータ、炎の渦！」

『ヒヒイン！』

ポニータが炎の渦を放つと2匹のポケモンは炎に包まれ動きを封じられてしまった。そんな真正面から固まって突っ込んでくるからだ！  
一気に決めてやる！

「コノハ、ダブル攻撃でケリをつけるぞ！」

「任せて！」

オレの言葉にコノハが頷いた。これで……決める！

「ゴマゾウ、ストーンエッジ！」

「ポニータ、大文字！」

ゴマゾウの放ったストーンエッジは大文字の炎を纏った、炎のストーンエッジとでもいうべきか？とにかくそれは炎の渦と一緒に捕まっているニヤースとベロリンガに向かっていく。炎の渦で捕えられている2匹は回避は不可能！貰った！

『ベロー！？』

『ニヤ……』

ストーンエッジは見事に2匹に炸裂した。岩タイプの大技、ストーンエッジに大文字による高火力の追加効果、これには耐えられずベロリンガ達は倒れた。後は！

「ぐっ……」

「バカな……」

2人の男は好き勝手な事を言ってから2匹をボールに戻して逃げようとする。だがそれは叶わない事だ。元々この2人は隠れ家としてここを利用するためにここにいた。複雑である地下の中でも最も複雑で滅多に見つからないような場所に、出口なんてオレ達のいる方向しかないから事実、脱出なんて不可能だ。

「んじゃコノハ、さっさと片付けようぜ」

オレはポキポキと手に音を立てさせつつも言う。

「そうね」

とても笑顔なコノハ、しかし目が笑ってないから正直怖いよ……オレ達は泥棒にじわじわ距離を詰めていく。2人の顔はコノハの出すプレッシャーのせいかなんて見える。覚悟は、出来てるよな……

「ギヤアアア」

地下中に男2人の悲鳴が響き渡った。

コガネ警察署前

「はぁ……疲れた……」

コノハが大きなため息をつきながらも言った。あの後あの二人をけちよんけちよんにしたオレ達はすぐに警察に通報した。暫くして警



察が到着して泥棒とオレ達は連行された。で、ちょっとやり過ぎたせいか嚴重注意をされた。流石にジャパニーズオーシャンスプレックスホールドとか、コノハのハイキックから、かかと落としへのコンビネーションはまずかったか……まあ一応誉められて、オレは鉄の塊みたいな物、コノハは王冠みたいな物を貰った。何の使い道があるんだ？これは……

「全くだぜ……」

オレはコノハの言葉に頷いた。ん？オレは後ろから感じた気配に振り返る。そこにはあの2匹のイーブイがいた。警察署の前で、ずっと待っていたのか？そうだな……

「着いてくるか？」

オレはなんの突拍子もなく2匹に尋ねる。すると……

『ブイブイ！』

『ブイー！』

イーブイ達は嬉しそうにそれぞれ、オレとコノハに飛び付いてきた。

「うわっ！」

オレはバランスを崩して転倒する。

『ブイブイ〜』

「ハハハ、よろしくな。イーブイゲットだぜ」

「わたしもイーブイゲットよ」

オレとコノハは嬉しそうな声で言った。

## 新たな仲間達（後書き）

### 次回予告

コノハ「お出かけしようよ〜」

イツキ「ああ、自然公園に行こうぜ!」

コノハ「自然公園での虫取り大会に参加したわたし達を待つものは？次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『憧れを越えて』次回もポケモン、ゲットよ!」

ピジョン『ピジヨオ!』

憧れを越えて（前書き）

更新速度を上げません……

## 憧れを越えて

### 自然公園

今日は自然公園に来ている。コガネシティを少し北に進んだ所にある自然公園、名前通り自然に囲まれていて、たくさんの草タイプや虫タイプのポケモンが生息している。そして何日かに1回、虫取り大会が行われる。で、丁度今日がその日だ。ルールは、支給される専用のボール、パークボールで、虫ポケモンを捕まえて、強そうなポケモンを捕まえた人が優勝となる。ポケモンは1匹だけ、連れて行くことが出来る。勿論オレもコノハも参加している。目指すは優勝だ！

「優勝は頂くからな」

「へえ、わたしを差し置いて優勝だなんてさせはしないんだから！」

お互いに戦線布告しあうオレとコノハ、絶対に負けねえ！勝つのはオレだ！

「なんで着いてくるんだよ」

オレは後ろから着いてくるコノハに向かって言う。戦線布告しといて着いてくる奴がいるか？普通

「べ、別にアンタに着いて行ってんじゃないわよ……ただわたしの行きたい所にアンタがいるだけよ」

か、勝手な理屈だなあ……おい……

「はいはい、分かりましたよ」

とコノハの言葉に適当に頷いた。全く……コノハの相手は疲れるぜ……ん？アレは？オレはとあるポケモンを見つけて草むらに隠れるようにしやがみ込んだ。コノハもそれにつられるようにしやがみ込む。

「コノハ、アレって……」

オレはコノハに尋ねる。オレ達の視線の先には緑色で鋭い鎌を持ったポケモン

「うん、ユースケさんやツクシが持ってたよね。ストライクだよ」

やっぱりストライクか……オレは1匹だけ連れて来たポケモンの入ったモンスターボールを握る。ストライクはユースケさんが持っているポケモンだから正直少し憧れていたりする。よし！早速ゲットだ！

「ピジョン、君に決めた！コノハ、悪いけどあのストライクは貰うぜ！」

「あ、ズルイ！」

オレはボールを投げるとピジョンが姿を表した。悪いけど、ちょっと奇襲させて貰うぜ！

「ピジョン、電光石化から翼で打つ攻撃！」

『ピジョオ！』

ピジョンは高速でストライクに迫り、翼をストライクに叩きつけた。

『スト！？』

見事なまでの不意打ちにストライクは驚いている。よし！大きなスキを作る！

「強力風起こしだ！」

『ピジョオ！』

ピジョンは力強く翼を振って、強力を起こした。ストライクはそれに吹き飛ばされないように地面にしゃがみ込んで、踏ん張り始めた。よし、今がチャンスだ！

「行け！パークボール！」

オレはストライクに向かってパークボールを投げた。普通なら弾かれていただろうが、風に飛ばされないようにするのに精一杯なストライクにはそんな事をする余裕は無い。ストライクはパークボールにしっかりと収まった。それは暫く左右に揺れてから止まり、中央のマーカ―が点灯した。よし！

「ストライク、ゲットだぜ！」

『ピジヨオ！』

オレの言葉にピジヨンは嬉しそうに頷いた。よっしゃあ、これで優勝は頂きだぜ！

「へへッ！やったぜコノハ」

オレは自慢するようにゲットしたストライクのボールを拾ってコノハに見せる。

「あわわ、イ、イッキ……………」

ん？コノハの様子が変だぞ？何か良くないものでも見たのか？オレはコノハの視線の先を見る。わあ……………スピア―が1、2、3、4、5、6匹……………じよ、冗談じゃない！凄―い怒ってるみたいだけど……………あ……………もしかして、さっきの風起こしのせいじゃ……………スピア―の視線はオレ達に向いている。ああ……………殺―す気満々じゃんか……………こういう場合は……………

「逃げるぞ、コノハ、ピジヨン！」

「当然よ！」



『ピ、ピジョン！』

オレの言葉を合図にオレとコノハは振り返って走り出す。それを合図にするようにスピアー達も追いかけてきた。やばっ！スピードじや断然スピアーの方が上、ウバメの森で上手く逃げたのは入り組んでいたのと運がよかったからだ。逃げれないなら戦うしかない！

「コノハ、コイツはやるしかないぞ！」

「そうみたいね！行くわよ、ヨルノズク！」

コノハはそう言うのと足を止めて振り返ってヨルノズクを出した。6対2、状況は最悪だな……とにかくやるしかない！スピードを生かした拡乱戦法を取るのが1番の戦略だよな……

「ピジョン、電光石化から翼で打つ！」

ピジョンはもの凄いスピードでスピアーの1匹に決めるよし！上手くいった！ピジョンはそのまま上昇していく。そこに仲間のスピアーが迫る高速移動を使ってるな！だけど舐めんなよ！

「燕返し！」

『ピジョンオー！』

背中を取られていたピジョンだったが、燕返しでスピアーの背後に回る。翼で打つでも食らえ！

『ピジヨオ！？』

「なっ……ピジョン！」

不意をつかれた。さっき翼で打つを決めたスピアーがピジョンに自慢の槍で突いてきた。完全に急所を捉えられたのかピジョンはそのまま地面に落下した。

「ピジョン！……ヨルノズク、ピジョンを助けて！」

『ホー！』

『スピッ！』

「邪魔しないでよ！」

ヨルノズクがピジョンを助けに行こうとするが、4体のスピアーに囲まれてしまう。く……そうしてる間にも残り2匹のスピアーはピジョンに止めを刺そうと気合いを溜めている気合い溜めを使って、確実に決めるつもりか……どうする……

「そうだ！ イッキ！ さっきのストライクにメタルコートを持たせて、わたしの手持ちに転送して！ 早く！」

コノハが焦った様子で言う。メタルコートって……昨日貰った鉄の塊か？ とにかくコイツを……オレはそれをボールの中にポケモンを収納する時に出るレーザーでそれはパークボールに収納された。コイツを……オレはポケギアのポケモン交換の画面を開いた。そして素早くコノハを選んでストライクを転送する。するとストライクのトレーナーがオレの名前からコノハの名前に変わる。そしてすぐに

またオレの名前に変わった。またストライクを送り返して来たのか？

『スピアー！』

2匹のスピアーが止めを刺そうとピジョンに向かっていく。

「イツキ！その子をピジョンの盾にして！」

なっ！

「大丈夫だから！わたしを信じて！」

……

「分かった！オレはお前を信じるよ！行け！」

オレはボールをスピアーとピジョンの間に投げた。ボールが開いてピジョンと2匹スピアーの間に赤いポケモンが姿を表した。ストライク？イヤ、ストライクの面影を残してるけど鎌がハサミだったり若干違うぞ……まさか…進化したのか？スピアー達はハッサムに襲いかかる。そして自慢の槍を突き出してくる。必殺のダブルニードルだ。2匹のそれは赤いストライク？に直撃した。しかし！

『サム？』

『ス、スピー！？』

き、効いてない！？確かにあのポケモンに2匹のダブルニードルは決まったんだけどな……もしかして、鋼タイプを持つてるのか？つて事は虫と鋼タイプか……コイツは凄いぞ！

「今よイツキ！ハツサムにバレットパンチを使わせて！」

ハツサム……それがコイツの名前か！

「なら……ハツサム、バレットパンチだ！」

『サムッ！』

オレはコノハに言われた通り、バレットパンチを指示した。ハツサムは弾丸の如きスピードでスピアーに接近して拳を数回見舞う。この一撃により、堪らずスピアーはダウンした。啞然とする、もう一匹のスピアーに対しても同じ攻撃を決める。コイツ……強い！

『スピッ！』

仲間がやられたのを見て、復讐に燃える残りの仲間の4匹が、ハツサムに向かってくる。頭に血が登ったらオレ達には勝てないぜ！

「よそ見はダメよ！ヨルノズク、連続エアスラッシュ！」

『ホー！』

ヨルノズクは翼を奮い、空気の刃を連続で放った。それにスピアーのうち3匹に直撃して落下していく。後は1匹！これで決める！

「メタルクローだ！」

『サムッ！』

『スピッツ!』

迫りくるスピアーに対してハッサムはメタルクローによるカウンタ―を決めた。それを受けたスピアーは堪らずダウンする。ふう、なんとか乗り切ったみたいだな……そうだ! ピジョン! オレは直ぐにピジョンの元に駆け寄る。

「大丈夫か?」

『ピジヨオ……………』

オレの言葉にピジョンは弱弱しく頷いた。

「ごめんな、オレの指示が足りないばかりに……………ゆっくり休んでくれ」

オレはピジョンをボールに戻す。さてと……………

「ハッサム、今回は助かりったぜ」

『サム』

「これからもよろしくな!」

『サム!』

オレの言葉にハッサムを力強く頷いた。へへっ……………頼もしい奴が仲間になったな。

で、虫取り大会でのオレが捕獲したポケモンとしてハッサムを出したら、何進化させてるんだ！ルール違反だ！と言われてしまった。コノハも坊主だし……散々な結果で終わっちゃったな……

憧れを越えて（後書き）

次回予告

イッキ「エンジュシティに向かって歩いてみると道を遮るように木と遭遇する」

コノハ「この木、なんか変じゃない？」

イッキ「とにかくなんとかして通るしか無いよな！やるぞコノハ！  
次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜  
『VS怪しい木』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

アリゲイツ「アリアア！」

VS怪しい木(前書き)

まあ、タイトルみれば分かりますよね



## V S 怪しい木

オレとコノハの目の前には不自然な巨大な木がそびえたっていた。

「なあコノハ、これって木だよな」

「不自然だけど木よね……」

オレの言葉にコノハは頷いた。オレ達は現在エンジュシティに向けて歩いている。その道を阻んだのはこの不自然な木だ。進行ルートは他にもあるのだが、他の道を通るのは後戻りをしなければならぬ。今更後戻りをするのもやっぱりまどろっこしいというか、面倒な訳で……オレとコノハはコイツをどうするか話合っ。

「なあ、どうする？」

「これも木だしあいぎりで切れるんじゃない？」

「あいぎりか……あいぎりはバトル以外の時は木を切る力を発揮する。オレ自身、ポケモンの暮らす環境を破壊する事に直結するからあんまり好きじゃない。だけどこの場合いた仕方ないか……」

「アリゲイツ、君に決めた！」

『アリゲイツ！』

オレはボールからアリゲイツを出した。あいぎりはコイツとハッサムしか習得してないからな。とにかく行くぜ！

「アリゲイツ、あの木にいあいぎりだ！」

『アリアアア！』

オレの指示でアリゲイツはその爪で木を切り裂いた。つてアレ？

『アリアアア！アリアアア！』

な！アリゲイツが痛がっている！？な、なんつー堅い木だよ……手を弱い水鉄砲で冷やしている……よっぽど痛かったんだな……

「なんで切れないのよ！」

カッカし過ぎだぜコノハ……こうなったらコイツは何をやり始めるか分かったもんじゃない……危険だ……

「こうなったらこんな木、焼き払ってやるわ！」

ちよっ！それは不味いんじゃない……

「コノハ、早まるな！周りが火事になったらどうすんだ！？」

「アンタがどうにかすればいい話でしょ。とにかくやるわよ」

んな勝手な……仕方ない……絶対被害を出さないようにしなくちゃな……

「頼むわよポニータ！」

コノハはポニータを出した。炎技の使い手と言えばコイツだよな。

「アリゲイツ、雨乞いの準備だ。火事だけは絶対に避けるぞ」

『アリア』

アリゲイツはオレの言葉に軽く頷いた。ふう……少し濡れるのを覚悟しなくちゃな……

「行くわよ！容赦無用の火炎放射！」

『ヒヒインー！』

ポニータはコノハの指示で強力な火炎放射を放った。しかしそれでも木は一向に燃える気配は見せない本当にコイツは木なのか？

「ああ！周りに燃え移っちゃた！イツキ、お願い！」

火種か何かが不自然な木の周りの木に燃え移ったらしい。コイツは不味いな！

「アリゲイツ、雨乞い！」

『アリアアアア！』

アリゲイツが手を空に向かって掲げると雨が振り始めた。これで直ぐに消火出来るはずだ。まあびしょ濡れになっちゃまうけどな……コノハが文句言ってきたても人の忠告を無視したお前が悪いって言っつてやればいいだけだし……ん？

「ちょっとイツキ！雨乞いって、びしょ濡れになっちゃうじゃない

！」

案の定コノハが文句を言ってきたが、そんな事は問題では無い。木が、少し動いてるのだ。何かを嫌がっているようなそんな動き……もしかして！

「コノハ、ルカリオだ！もしかしてコイツは……」

「きゅ、急にどうしたのよ……」

「いいから早く！」

オレの言葉にコノハの反論が入るが、それを軽く無視してオレはルカリオを出すように言う。オレのカンが間違っただけならばコイツは……

「分かったわよ。ルカリオ、出番よ」

『うん』

コノハがボールを投げるとルカリオが、登場した。

「で、どうすればいいの？」

コノハがオレに訪ねてくる。やることは決まっている。

「波動弾で攻撃するんだ。オレもアリゲイツの水の波動で攻撃する。もしかするとコイツは……」

オレはそこで言葉を止める。何の確証もない。だからこそそこで言

葉を切った。だが、高い確率でコイツは……

「了解、1・2・3で同時に行くわよ」

「そうだな。アリゲイツ、準備はいいな！」

『アリアアア！』

アリゲイツが力強く頷いた。よし、行けるぞ！

「行くわよ、3」

「2」

「1」

「行け！」

『行きます！波動弾！』

『アリアアア！』

コノハからの順番のカウントの後にオレが叫んだ。それに反応して、2匹はそれぞれ攻撃を放った。それは一直線に木に向かっていく。それは直撃すると思った瞬間だった。

『ウ、ウソオ！』

木が突然動きだしその攻撃を紙一重でさけた。動いた！やっぱりポケモンか！コイツは確かウソツキーってポケモンか……なるほど、

木になりすまするのが得意らしいからな。全く困った奴だぜ。

「イツキ、下がってて、アイツはわたしが仕留めるわ」

急にコノハが口を開いた。何で急に……

「よくも邪魔してくれたわね……これでまた野宿することになったらどうしてくれるのよ……」

そんなつまらない理由かよ……まあオレとしても暖かいシャワーがお預けになると、ろくな夕飯を食べないのは御免だけだな……

「行くわよルカリオ！」

『う、うん……』

少し焦った様子のルカリオ、いつもより暴走しているコノハについていけないのであるうか？イヤ、そうに決まってる。火炎放射で焼き払おうとした時点でかなり暴走してるよな……とにかくおてなみ拝見といくか。

「先制攻撃よ！かわらわり！」

『ええい！』

ルカリオは高速でウソツキーに迫る。それに対してウソツキーは動かない。何を考えてるんだ？

『行けえ！』

ルカリオが拳をウソツキーに叩きつけた。お、効いてる！ウソツキーは草タイプに見えるが岩タイプ、かわらわりは効果は抜群だぜ！  
つて！そんな！

『ウソオ！』

『うわあ！』

「ルカリオ！」

ルカリオがウソツキーに弾き飛ばされた。今のはカウンターか！カウンターは受けたダメージを倍にして返す技、油断もスキもないな

……

「やるわね！でも負けないわよ！ルカリオ、波動弾！」

『はああ！』

ルカリオは波動弾を放つ。弾速の早いそれはウソツキーに向かつていく。それに対してウソツキーは構える今度は何をやるつもりだ！？

『ウウウソオ！』

『へっ？』

「嘘お！」

コノハが冗談とも取れる事を言う。なんとウソツキーは波動弾を放ってきたのだ。多分物真似だ。そりゃ驚くわなあ……ルカリオの放ったそれと激突して相殺された。このウソツキーやるな。コノハと

互角にやりあってるぞ。

「やるわね。こうなったルカリオ、あれやるわよ！」

アレ？何をする積もりだ？

『うわああああ！』

ルカリオが両手の手のひらを向けあうとそこに光が集まり始めた。あれは……波動弾？違う……似てるけど……それより大きくて、色んな色が混ざり合っている。なんなんだ……

「コノハ、何だよこの技は？」

オレはコノハに尋ねた。するとコノハは口を開く。

「この技は波動弾の応用した技よ。生きるものにはどんなものにも波動つてものが宿っているの。だからその波動の力を少しずつ分けて貰ってそれを波動弾として放つ技よ。木や、花、太陽の力も借りるからその力は絶大よ」

凄い技だな……ついかいつの間にそんな物を覚えたんだよ。そう話している間にもルカリオのチャージは完了する。ルカリオの手と手の間には強大な7色の輝きを持つ波動の塊が完成していた。それを見たウソッキーは身構える。へえ〜いい中々根性してるじゃんかアイツ。オレなら逃げてるな。うん

「行くわよ！ルカリオ！ソウルサンシャイン！」

『このおおおおー！』



『ウウウソオ!』

ルカリオが放った波動の塊に対して、ウソツキーは物真似で覚えた波動弾を放ってきた。しかし威力の差は明確だ。ソウルサンシャインは波動弾を飲み込みウソツキーに向かっていく。ウソツキーは防御の姿勢をとったが無言を言わず吹っ飛ばされた。完全に目を回している。つ、強……そこにモンスターボールが投げ込まれる。それは暫く左右に揺れた後停止し、中央のマーカーが点滅した。

「ウソツキー、ゲットよ!」

コノハがボールを拾いつつも言った。なあ、お前さっきまでコイツに怒りを燃やしてたよな……

「さあ、イツキ行くわよ。早くしないと夜になっちゃうわよ」

……そうだな。また野宿をするのも嫌だしな

「ああ、行こう」

オレはコノハの言葉に頷いた。

## VS怪しい木（後書き）

### 次回予告

ユースケ「偶然の出会いがもたらしたバトルの後、僕達はキキヨウシティに移動した」

ラン「キキヨウで知る真実、そんな……こんな事って！」

ユースケ「次回！ポケットモンスターACEとSECOND SEASON」  
「辛い別れ」  
「次回もポケモン、ゲットだよ」

リザードン「リザア」

## 辛い別れ（前書き）

ちよつと、書いてて辛かったです。いつもの軽い調子から一気に落ちます……

辛い別れ

ヨシノシテイPC

んで、お前は新人トレーナー君に追い詰められたんだな

「うう、そ、そうだけどさ……」

TV電話ごしのカズマの言葉に僕は頷いた。さっきやったゴールドそっくりの、新人君とのバトル、少しは油断してたのはあったけど酷いバトルだったなあ……

キミ、腕落ちた？

カズマの隣にいるカシスが言った。いつもの人をおちよくるような口調ではなく、真剣な口調、心配してくれてるんだね……

「ラン、どう思う？」

僕は後ろからTV電話を覗いているランに尋ねる。

「ううん、あれは油断があったのもあると思うし、あの子の腕がよかったんだよ」

ランが僕をフォローをするように言った。凄いありがたいです……

ま、油断したのもお前の奢りがあったからだぜ。あんまり調子に乗るなって事だ

カズマにだけは言われたくない言葉だよ……

「カズマが言えた事じゃないよ」

それは酷いんじゃないかねえか

事実よ。しょうがないじゃん

カシスまで……

カズマ、ご愁傷様……ところで……

「バッジの方は何個手に入れたの？」

僕はカズマに尋ねる。それを聞いたカズマはよくぞ聞いてくれた。と言わんばかりにバッジケースを取り出した。そしてそれを開く。

ジャジャーン！もう6つゲットしたんだぜ！すげえだろ！

な！4日もたたないうちに何故こんなに……

まあ、ポケモンリーグまで時間があんまりない事に気付いて焦って集めてただけだけどね

だからいちいち余計な事言うなよ

……計画性の無さが浮き彫りになったただけか……

で、そっちはどうなの？

カシスがいつものおちゃらけた口調で聞いてくる

「何が？」

この前の事もあったせいかなランが少し警戒したような口調で尋ねる。それに対してカシスは少し笑ってから

そんなに身構えないでよ。この前のような事は聞かないからさ

と、言った。そのセリフ、本当だろうね……

「バッジは今のところ3つ、ジョウトリーグ開催までにはまだまだ時間があからね。のんびり行くよ」

カシスのセリフを信じて素直に答える。

ふうん、うらやましいなあ、旅って本来そんなものだよね

カシスが愚痴る。そりゃ4日でバッジ3つを手に入れるっていうハチャメチャな旅をしてたらねえ……

「それで、今日もバッジを取りに行くんでしょ？」

ランがカシスに尋ねた。その口調はいつもの穏やかな口調だ。

ううん、今日は移動だけ。ミナモシテイからトクサネに船で移動するんだ。その次の日にジム戦するつもり

へえ、中々大変なんだね……

「そうなんだ。ジム戦、頑張ってね」

ランが2人に対して言う。

勿論よ！そうよね、カズマ

ああ！絶対に負けないぜ！おっとそろそろ船の時間だな。またな  
ユースケ、ラン！

ユースケ、ランを泣かせちゃダメだぞ！またね！

なっ……カ、カシス……最後の最後でそれかい……TV電話の電源  
が切れる……うう、自分の顔が赤くなってるのが分かる……

「もう……カシスったら……」

僕は振り向くとランも真っ赤になっている。……カシス、分かって  
るよ……ここにいる僕が大好きな女の子を泣かせるようなマネは絶  
対にしないよ。そう僕は密にかつ力強く誓った。

「使用ポケモンは1体！手加減無用の全力の勝負だ！」

僕の前に対峙しているトレーナーの少年が言った。キキョウシティ

に向けて出発したところ、トレーナーに捕まった。本当にこの道路のトレーナーはバトルが好きだよなあ。キキヨウからこっちにくるのも大変だったからなあ。

「うん、受けてたつよ！」

少年の言葉に僕は力強く頷く。やっぱり売られたバトルは買うのが礼儀だよな。僕はボールがセットされているベルトに手を伸ばす。

「行け！ラッタ！」

『ラッ！』

先に少年はボールを投げると、それからラッタが登場した。あのラッタ……あんまり育てられてないね……まだ捕まえたばかり、そんな感じがする。ならこの子にも丁度いい相手になるよね。

「頼むよ、ヨーギラス！」

『ヨ〜』

僕は最近仲間になった、緑色の小さな怪獣のようなポケモン、ヨーギラスを出した。ジョウトに向けての旅立ちの前の日にレッド先輩に実は貰っていたんだ。なんでもシロガネ山で拾ったとかなんとか……そのちよつと曰くつきの卵が何日か前によく孵ったんだ。ヨーギラスはボールから出てくるなり僕の足にしがみついていた。あらら……見て分かるように凄く甘えん坊で直ぐに僕やランにくっついてくるんだ。

「コラコラ、君の相手はあっちだよ」



と僕はヨーギラスを足から離してラッタの方を見させる。納得したのか、ヨーギラスはラッタに向かっていく。よし、バトルの準備はOKだ。

「それじゃ、行くよ！ヨーギラス、体当たり！」

『ヨ〜』

ヨーギラスはラッタに真正面から向かっていく。意外に素早い動きで少し驚いたよ。

「ラッタ、怖い顔だ！」

『ラッ！』

ラッタの顔が見て分かるように怖い顔になる。すると……

『ヨ〜！！！』

なっ！ヨ、ヨーギラシ？ヨーギラスが背中を向けてこっちに走ってきた。そして今度は僕の後ろでバトルを見ていたランの足にくっついた。

「あの〜、ヨーギラスさんどうしたの？」

『ヨ〜』

僕がヨーギラスに声を掛けると泣き声が返ってきた。もしかして……

「大丈夫？うん、怖かったよね。ごめんね……」

ランはヨーギラスを抱き上げつつも、まるでお母さんみたいにヨーギラスに声を掛ける。ヨーギラス、よっぽど怖かったんだね……

『おいユースケ、子育てを嫁さんだけに任せていいのか？』

ユンゲラーが茶化してくる。突っ込むつもりにもなれない。でも、覚えときなよ……

『ヨ〜』

「うん、よしよし。ユースケ、まだヨーギラスにはバトルは早いよ」

だろうね反省してる。相手のトレーナーの少年も呆れてるし、ハア……なんか今日についてないなあ……

キキヨウシティPC

ふう、ようやく到着したよ。あれから暫く歩くとすぐにキキヨウシティのPCに到着した。長かったなあ……それじゃ早速ポケモン達

をジョーイさんに預けて……ん？

プルルルル、プルルルル

僕のポケギアが鳴った。電話？誰からだろう？僕はポケギアの操作を行い、通話状態にする。

「もしもし」

ユースケか！？

とても聞き慣れた声がポケギアから聞こえた。

「ケンイチ、久しぶりだね。どうしたの？そんなに焦って……」

声の主はケンイチ、僕の幼なじみであり親友なんだ。現在はシンオウ地方で修行の旅をしている。最近まで音信不通だったのにどうしたんだらう？

今、PCにいるのか？

「うん、そうだけど……」

いますぐTVを見るんだ！早く！

本当にどうしたんだらう……

「うん、分かったよ。またね」

僕はそう言って電話を切った。一体なんなんだらう……

「今のケンイチくん？」

「うん、TVを見るって言うってたけど一体なんなんだろう？」

僕はランの問いに答えた後、疑問を問いかける。そうしつつもPCロビーにあるソファ―に腰掛けてTVをつけた……な！

現場からの速報です！ミナモシティからトクサネシティに向かう連絡船が今日未明に沈没しました。現在分かっているところ、ヤマブキシティのカズマ君、14歳とカシスさん、14歳が行方不明になっています。現在海上保安庁が捜索を続けておりま……

え……嘘……だよ……冗談、酷いよ……

「そんな……カシス……カズマくん」

さっきまで、元気に話してたよね……それが……なんで！

「ユースケえ！なんで！なんでカシスとカズマくんがこんな目に会わなくちゃならないの！？なんで！なんでこんな……」

ランは顔を真っ赤にしながら、涙で顔をぐちゃぐちゃにしてもうほとんど声にならない声をあげていた。僕はそんなランを力強く抱きしめる。

「大丈夫、絶対に大丈夫だよ！二人には頼れるパートナー達がついているし……2人の強さは僕達が一番知っているよ。だから絶対に大丈夫！」

ランをなだめるように言った言葉だったけど、実際、自分を保つために言っている言葉にしか過ぎない。それでも僕は信じたい。イヤ、信じる。かけがえのない、僕達の親友の無事を……

## 辛い別れ（後書き）

### 次回予告

カズマ「あ、オレ行方不明になってっし！」

カシス「そんな冷静に言ってる場合！？」

カズマ「オレ達が行方不明になるまでにあつた事とは？次回！ポケ  
ットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『連絡船で  
の戦い』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ジユカイン『ジユプ！』

カズマ「てかバトル中心なのか！？」

## 連絡船の戦い（前書き）

今回はカズマサイド、カズマ達に何があったのか？

## 連絡船の戦い

「あゝ潮風が気持ちいいなあ」

オレの隣でカシスが思いつきり体を伸ばしながら言った。現在ミナモシティからトクサネシティに向かう連絡船の中だ。次のジム、トクサネジムを目指している。こうやってゆっくりするのも久しぶり、今日ぐらいはのんびり出来ていいぜ……デッキの手すりに捕まりながら海を見る。キャモメがとても気持ちよさそうに飛んでいるのが見える。確かに潮風が当たって気持ちいいなあ……

「カズマ」

「ん？なんだ？」

カシスがオレに話かけてきた。どうしたんだ？

「ハウエンリーグの後の事、考えてる？」

と、カシス。そうだな……ポケモンリーグの後の事か……ポケモンリーグが終わってから何をするか、まだそんなの考えちゃいない。前回のリーグの時は前々から次はハウエンを旅すると決めていた。今回はどうするか……

「やっぱり、ユースケと決着を着けるためにジヨウトを旅するつもり？」

カシスがそう言う。確かにユースケとは決着を……つかこの前の雪辱戦は果たさなければと思っっている。だけど……



「その前にもうちよつとホウエンを旅したいと思ってる。ゆっくりと色々を見て回って、その中でジユカイン達とまた一歩強くなりたい。それでユースケに負けない力を着けてからアイツが参加するリーグに挑戦しようと思ってる」

このホウエン地方での旅、なんかホントに慌ただしかったからな…  
…もう一度、今度はゆっくりと旅をしていきたいと思う。

「OK!カズマがそんなつもりならわたしもとことん付き合っつわよ！」

へへっ……サンキューな!

「んじゃ一回船内に戻ろうぜ。潮風に当たり過ぎると気分が悪くなるって言うしな」

「そっね」

オレの言葉にカシスが頷く。さて早く中に……

ドゴオン

「うわっ!」

「わっ!?!」

急に船が揺れて、オレ達はバランスを崩した。バランスを崩しながらも転びそうなカシスを必死に支える。なんとか……耐えられるな

「カシス、大丈夫か？」

「うん、ありがとカズマ」

オレが声を掛けるといつも通りの口調でカシスが答える。

「何か、あつたみたいだな」

オレは珍しく冷静に分析する。今までこんなに揺れる事は無かったんだ。急に揺れるなんて考えれない。

「そうみたいね」

とカシス、さてオレ達のやることは決まってるよな

「ちょっと調べてみるか」

オレはいつも通りの口調で言う。

「OK、でも調べるのはいいんだけどね……」

ん？どうしたんだ？珍しく顔を赤くして……

「カズマさ……さっきからどこ触ってるの？」

え……アアアアアア！

「そ、そのな……不慮の事故って奴でな……」

さっと手を離して、弁解するオレ。必死に弁解するオレの顔はきつ

と真っ赤になっているハズだ。

「カズマのエッチ」

~~~~~

「と、とにかく行くぞ！」

オレは誤魔化すように力強く言った。

#### 連絡船機関室

オレ達は船の機関室に忍びこんだ。勿論、通常は入室は禁止されている。なんでそんなところに入ったか？その理由は至ってシンプル。機関室の前に明らかに怪しい黒い服装の男が立っていたからだ。胸には大きなRの文字……その男はどうしたかって？オレのライボルトの電磁波で痺れて貰っているよ。でもあの男の服装、やっぱりあ

の組織のものだったよな……それからオレは一つの結論に辿りつくが、それはあまりにも考えられない事だ。あの組織はすでにオレ達の手で壊滅したハズだ！まあ、そんな事考えてる場合じゃないよな……？なんだ？誰かが話してるぞ……

「カズマ、こつち」

「ああ」

カシスの言葉に頷いて直ぐ様近くにあつた機会の裏に入った。何を話してるんだ？怪しい恰好の奴と……この船のクルーだな……

「いますぐにこの船を明け渡せ、さもなくば！」

怪しい男がそう言うと、男の手持ちであろうブーバーンとエレキブルがエネルギーを為始める。まさか、この機関部を破壊するつもりか！？そんな事したらこの船は……

「断る！この船は船長である自分の誇りだ。それを簡単に他人に渡せるものか」

おお！恰好いい！

「ほう……だが乗客やクルー達の事を考えたらどうだ？ここがこの2匹に攻撃されたらどうなるか分かるよな」

「くっ！」

男の言葉に船長らしき人は黙りこんでしまつ。普通はそうだよな……

「俺達の目的はこの船を占領して乗員のポケモンを全て奪うのが目的なんだ。それが終わればすぐにでもこんなオンボロ船返してやる」  
なっ……なんつー奴らだよ……やっぱりアイツは……とにかくオレがやるべき事は！」

「カズマ！」

「当然だ！行くぞ！」

オレはカシスの言葉を合図にベルトにセットされていたボールを握り走り出す。そしてボールを投げてジユカインを出した。オレの相棒であるジユカイン、頼むぞ……

「行け！エレキブルにリーフブレード！」

「わたし達も行くよ！カイリユー、ブーバーンにドラゴンダイブ！」

オレと同じタイミングで、カシスもパートナーのポケモンであるカイリユーを出した。食らえ！

『ジユプ！』

『リユー！』

それぞれの攻撃を受けたブーバーンとエレキブルは弾き飛ばされる。よし！上手くいった！

「な、なんだ！？」

完全に不意を付かれた男が言った。

「大丈夫ですか」

その間にオレは船長さんの元に駆け寄る。

「ああ」

「それなら直ぐに乗客達を避難させてください。ここはわたし達が時間を稼ぎます」

船長さんが頷くと直ぐにカシスがそう言う。

「ああ、分かった」

そう言うと船長さんは走っていく。よし……これで……

「くっ！餓鬼共めえ……ブーバーン、船長の前に電光石化で周りこめ！」

くっ！させるか！

「ジュカイン、嫌な音！」

『ジュプウ』

食器が擦れる音がする。うっ……本当に嫌な音だあ……でもそれによつてブーバーンは足を止めて苦しみだした。よし！上手くいった！今の内に！オレとカシス、ジュカインとカイリユーは素早く動いて、男とその仲間達と距離をとる。さっきまであまりにも距離が近

かった。正直危険って一言じゃ済ませられないぐらい危なかった。

「ええい、この餓鬼共！後一步のところを！」

男が怒鳴り始めた。ふう………本当に間一髪だったよな……

「あんたは何もんだ！？何故こんな事をする！」

オレは声を張り上げて男に尋ねる。コイツの目的はなんだ？

「俺か……俺はロケット団のハウエン地方先行制圧隊長、ロツカだ！」

ロケット団……

「馬鹿な！ロケット団は壊滅したハズだ！」

男に対しオレは力強く言う。

「確かに壊滅したさ。だがロケット団の新幹部、リオン、ルキ、ロケット4兄弟、そして俺の手によって蘇ったのだ」

……マジかよ……

「邪魔をするなら餓鬼でも容赦はしない」

その言葉から強い殺気を感じた。コイツはちょっと不味いんじゃないか……

「来るよ、カズマ」

「ああ、気合い入れて行くぞ」

カシスの言葉にオレはそう返す。この勝負、絶対に負ける訳にはい  
かない！



連絡船の戦い（後書き）

次回予告

カズマ「ロケット団の幹部を名乗る男、ロツカとバトルになったオレ達」

カシス「強いよこの人、油断もスキもあつたもんじゃない！」

カズマ「この！負けてたまるか！」

カシス「次回、ポケットモンスターACEとSECOND SEA SONの『沈没』次回もポケモン、ゲットよ！」

カイリユウ「リユウ！」

沈没（前書き）

カズマ編後半戦です

## 沈没

ロツカ率いるブーバーンとエレキブルと対立しているオレ達。先制攻撃、やってみつか！

「カシス、ダブル攻撃、行くぜ！」

「おまかせ！カイリユー、竜の波動！」

「ジユカイン、竜の波動！」

「リユー！」

「ジユプー！」

オレ達の指示に従いジユカイン達は口から竜巻のようなエネルギー波、竜の波動を放った。2体の竜の波動は融合して更に一回り大きなエネルギー波になった。それは相手の2匹を巻き込もうと迫る。コイツはそう簡単に回避はできないぜ！

「ふっ、中々出来るみたいだな。だが甘い！ブーバーン！エレキブル！」

「ブー！」

「エレ！」

ロツカの指示で2匹のポケモンが叫び声を上げたと思えば同時に火炎放射と10万ボルトを同時に放ってきた。それは竜の波動に激突

し相殺される。

「そんな生半可な攻撃じゃ駄目か……カズマ、一気に攻めこむよ！」

「おう！任せろ！ジユカイン、電光石化でエレキブルに貼り付け！」

「カイリユー、高速移動でブーバーンに！」

オレとカシスの指示により2匹共超加速でそれぞれに突っ込んでいく。だが

「そう簡単に行くと思うなよ！2匹共、電光石化だ！」

なっ！ブーバーン達も同じように加速技を使ってきた。そのせいでジユカインはブーバーンに、カイリユーはエレキブルに完全に貼り付かれてしまう。くっ！相性が悪い！コイツは不味いな！

「ブーバーン、ジユカインに炎のパンチを叩きこんでやれ！」

『ブー！』

「避ける！」

ジユカインはその攻撃をしゃがみだけの動作で回避する。反撃だ！食らえ！

「ジユカイン、爆裂パンチ！」

『ジュープー！』

ジュカインの爆裂パンチは見事に炸裂した。よし！これで状況は……

「フツ……」

！

笑った！？この状況でロツカが笑った。そしてエレキブルへの指示も止める事がない。何が可笑しいんだ！？

「あまり大人を甘くみるなよガキンチョ！」

ガキンチョ！？な、久しぶりっていつか滅多に聞くことがない言葉だなおい！

「何が……あつ！」

言葉を返そうとした時に気付いた。さっき爆裂パンチで吹っ飛ばした人形が光の粒子へと変わり始めたのだ。まさか……

「ブーバーン、ジュカインに大文字！」

『ブー！』

『ジュプー！？』

「ジュカイン！」

ブーバーンはジュカインの背後の床から船体を壊しながらも現れた。穴を掘る……身代わりを盾に見えないようにして使ったのか……

「ジュカイン！」

「よそ見出来るのか？エレキブル、10万ボルト！」

『ブルヴ！』

『リュウツ！？』

「カイリユー！」

カイリユーは完全に不意をつかれてエレキブルの攻撃を受けてしま  
う。くそ……ジユカインもやられたしこのまま……！

「中々やるみたいだったが、所詮はここまでだったみたいだな！終  
わりにする！ブーバーン！エレキブル！」

『ブー！』

『エレ！』

2体はそれぞれダウンしているジユカインと10万ボルトで痺れて  
しまったカイリユーの目の前でパワーを貯めている。チャンスは一  
回……上手くやれよ……

「や……」

ロツカが止めの指示を出そうと口を開いた。今だ！

「ジユカイン！ハードプラント！」

『ジユプー！』

「何だと!？」

倒れていたジユカインは倒れたままハードプラントを発動した。ハードプラントの茨がブーバーンを締め上げた。そしてそれをそのままエレキブルに向けて投げつけた。

「耐えていたのか……」

ロツカが驚きの声を上げる。まあ、当然だよな。さっきそれに気付いた時、オレ自身も驚いたからな

「堪える……コイツでダメージを最小限に抑えたんだよ!」

とオレは自慢気に言う。

「流石ジユカイン、ここ一番でやるじゃん!」

カシスが感心した声を上げる。

「ふつ、調子に乗るなよ!こっちはまだダメージをさほど受けてはいない。このまま勝ちを貰う。ブーバーン!エレキブル!さっきのフォーメーションで電光石化だ!」

2匹が再び迫ってくる。だけど、2度も同じ手を食らうオレ達じゃないぜ。

「カイリユー、地震を使って!」

「ジユカイン、守るだ!」

『リリユー!!!』

ジユカインは素早く光の幕を発生させ防御体制に入った。続いてカイリユーが床に自分の足を叩きつけて地面とつか船全体を揺らす。それによりブーバーンとエレキブルの動きが止まり転倒する。へへっ2匹共に地面は効果は抜群、今のはかなりのダメージになったはずだ! 一気に決着を着けてやる!

「これで決着を着ける! 行くぜカシス!

「おまかせ!」

その言葉を合図にジユカインとカイリユーはそれぞれ特大のエネルギーを貯め始めた。これで決める!

「リーフサイクロン!」

「彗星群!」

ジユカインは超特大の嵐をカイリユーは流星群を超える膨大なエネルギー波を放った。それぞれリーフストームと流星群を広域に渡る技として進化させたものだ。代償として特殊攻撃力が大幅に低下して、ハードプラントのように暫く動けなくなる。だけどその威力は折り紙つきだ。並大抵の技じゃコイツは止めれない。

「ぐっ……オーバーヒートに雷だ!」

ロツカは焦って2体に指示を出した。指示に忠実に従う2体であったが2つの大技に飲み込まれ全く意味が無い。行け!



『ブー！？』

『エレ！？』

リーフサイクロンと彗星群は2体に直撃した。その一撃で2体は完全に沈黙する。ロツカは信じられないと言いそうな顔で、ぼそぼそ何やら呟いている。よし！オレ達の勝ちだ！

「やったわねカズマ！」

「ああ！」

オレとカシスは高らかにハイタッチをした。さて後は……あのロツカって奴だけだが……って

「うわっ！？」

急に船が揺れ始めた。くっ……バランスを取るので精一杯だ……

「カ、カズマ、し、浸水し始めてるよ！」

カシスが焦った様子で言う。おいおい、もしかして沈没しはじめているのか！？

「早く、脱出するわよ！カイリユー、戻って！」

カシスはカイリユーをボールに戻した。オレもそれを見習ってジユカインをボールに戻した。カシスのカイリユーにしても言えるが、ダメージが大きくて限界に近い、本当によく頑張ったよな……ん？

「スキあり！ゲンガー！」

な、なに！不意をつくようにロツカはゲンガーを繰り出してきた。コイツ、まだ抵抗する気が……オレが直ぐ様ボールに手をかけようとする。その時！

「え！？」

な、何だ！？ゲンガーは素早くカシスの正面に移動した。何を……

「催眠術だ」

『ケケケー！』

ゲンガーが何か念力のようなものをカシスに対してしかけた。それを受けたカシスは倒れる。

「なっ！カシス！」

オレは焦ってボールを取り出すももう遅かった。ゲンガーが視界一杯に迫っていた。そしてカシスにかけたものと同様のものをオレに……かけ……てきた……い、意識が……遠のいてきた……カ、カシス……大丈夫……だよな……この時、自分の意識が失われるような感覚を感じた。

## 沈没（後書き）

### 次回予告

イツキ「あれから暫く、オレ達はエンジュシティに到着する」

コノハ「わあ！紅葉が綺麗だよ！」

イツキ「うおっ、コノハがおかしい！今回は何か悪い事があるぞ！？」

コノハ「何よそれ！」

イツキ「とにかくオレ達はエンジュジムに挑戦する。勝負の行方はいかに？次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEA SON〜『暗闇に向かって討て！』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

アリゲイツ『アリゲイ！』

## ユースケの怒り（前書き）

予定変更でユースケ編です。

イッキ「おい！」

今回は作者初の本編でのコラボです。さあ、誰が登場するのでしょうか？

イッキ「んじゃ、始まるぜ！」

どうぞ

## ユースケの怒り

「ふう……」

僕は大きくため息をついて座っていたソファに更に深く座りこんだ。……なんかやる気が起きないな……心にスツポリ穴が空いたそんな感覚だ。予想も出来なかった親友達との別れ……

「スウー、スウー」

僕の肩によりかかって眠っているラン、さっきまで泣きじゃくってたけど今は泣き疲れたのか眠ってしまっている。カズマ……カシス……僕は眠っているランの頭に手を乗せる。あの2人はどうなったんだろう……今は今は信じるしかないんだ……本当に辛いな……

『行方不明になっているカズマちゃんとカシスちゃんは、ポケモンリーグでベスト16に進出するなど、トレーナーとして将来を期待されていまして……』

またカズマ達のニュース、こればかりでいい加減にうんざりしてきた。あの2人の経歴とかはいい！だから早く発見の報を聞かせて欲しい！そうやって僕の苛立ちは強くなっていく。そんな時だった。

「フン……バカなヤツラだな」

僕の真後ろから声が聞こえた。その言葉を聞いた僕は振り返る。そこには赤い髪をした鋭い目つきの男の子がいた。僕より少し年下……この間のゴールドと同じ年ぐらいかな？

「何が、バカなんだい？」

多少の怒りを込めて少年に対して言う。もしかしてカズマ達の事を

……

「行方不明になったってトレーナーの事だ。ポケモン達がいればすぐに脱出する事が出来る。なのに何故しなかったんだ？」

……

「だからバカなヤツだと言ったんだ。それともポケモンが弱すぎて脱出出来なかったのか？フン、コイツは傑作だ」

そう赤い髪の少年が吐き捨てた。このいい加減にしないと！

「なんのつもりだ？」

気が付いたら僕は少年の胸ぐらを左手で掴んでいた。今まで中々感じた事の無い怒りが込みあげてきて……気が付いたらこうなっていた。

「僕の……僕の親友達をバカにするな！」

滅多に出さないような大声を出した。

「ふん、弱いヤツ程群れたがるか……親友に似てさぞかし弱いのだろうな」

ギリツと自分の口から不快な音が聞こえた。強く噛み締めている歯が鳴ったみたいだ。これ以上……黙ってられない！

「そこまで言うなら僕とバトルだ！その人をバカにしたような口が利けなくしてあげるよ！」

そういつつも僕は少年を押しつつも胸ぐらを離した。

「いいだろう。だが、弱いヤツかどこまでやれるか疑問だな」

と少年はそういつつも外に向かう。

「その口、すぐに黙らせてあげるよ」

売り言葉に買い言葉、僕はそう力強く返す。僕はジャケットを脱いで眠っているランにを掛けてやる。それじゃ、行ってくるよ。僕は少年を追いかけた。

「ルールは1対1のシングルバトル！手加減は無用だよ！」

そういつつも僕は力強くベルトにセットされているボールを握る。

「ふん、弱いヤツほどよく吠える。行け、ヨーギラス！」

少年が出してきたのは岩肌ポケモンのヨーギラス。僕のヨーギラスとは違って目つきが鋭い、トレーナーに似たのだろうか？あのヨーギラス、まだ余り育ってないね……ヨーギラスには悪いけど……

「ごめん、ユンゲラー……ケンカなんかにつき合わせちゃってさ……」

僕はユンゲラーに謝罪の言葉を言う。全く情けない話だよ……

『気にすんなって！オレも腹腸が煮えくりかえる思いだったんだ！』

「それじゃ、頼むよ」

『おう』

ユンゲラーが僕の言葉に応えると同時に僕はボールを投げ、ボールからユンゲラーが登場した。登場すると同時にユンゲラーが光を放ち始めた。これって……レッド先輩とバトルした時と同じ……あの時と同じだ……僕自身にも内側から力が込みあげてくるようなこの感覚……負けない……この子なんか、絶対に負けるもんか！

「ユンゲラー、エナジーボールだ！」

ユンゲラーは素早くエナジーボールを作りヨーギラスに向けて投げつける。そのスピードは普段より断然速い。

「セオリー通りにやれば勝てると思ったか？この前バトルしたゆと



りと同じ考えだな。避ける、ヨーギラス」

『ヨー！』

軽快なステップでヨーギラスはその攻撃を回避する。流石に甘くないか……

「今度はこっちから行く！嫌な音だ！」

『ぐう……』

ヨーギラスの放った嫌な音がユンゲラーと僕を苦しめる。そこに出来た大きなスキ、それを逃すつもりは無いみたいで素早くヨーギラスは迫ってきた。

「噛みつく攻撃だ」

ユンゲラーに効果は抜群である噛みつく攻撃、防御も低下してるユンゲラーにはかなり不味い技だ。だけど！

「ユンゲラー、バリアからリフレクター！」

『ちい！』

ユンゲラーがバリアで自分の打撃に対する防御力を回復させながらもリフレクターを発動した。リフレクターにより噛みつくの一撃は不発に終わる。『ちい』って言葉の割りには余りにも余裕な表情。流石といふかなんというか……さあ、反撃行くよ！

「サイケ……」

「砂嵐を使い！」

『ヨー！』

くっ……少年の指示でヨーギラスは砂嵐を発生させた。急に吹き始めた砂嵐のため視界が急激に悪くなりヨーギラスを見失ってしまう。しまった……特性は砂隠れじゃないにしても厄介だな……多分この中から噛みつくで仕掛けてくるハズだ……！今僕が瞬時に思いついた作戦、コイツで行こう！

「ユンゲラー、バリア！」

『ああ！』

ユンゲラーは素早くバリアを貼った。とにかく物理攻撃に対して抵抗をあげないと……

「受け身の姿勢か、弱いヤツには打って付けの戦術だな！ヨーギラス、噛みつく攻撃だ」

来る！

「ユンゲラー、ミラクルアイからバリア！」

『……そこだ！』

ユンゲラーはヨーギラスがいる場所を見つけてそっちを見る。そしてバリアを貼って防御体制に入った。ヨーギラスは腕に噛みついた。少しユンゲラーは顔をしかめるも余裕の表情は崩さない。掛った！

このチャンス、逃しはしない！

「これで決めるよ！ ユンゲラー、パワートリックから気合パンチだ！ 行つけええええ！」

「なに！？」

僕の言葉に少年は驚く。パワートリック、物理攻撃力と物理防御力を入れ替えるわざだ。さつきまで連続で発動していたバリアのおかげで十分な防御力を上げていたユンゲラーは今はかなり腕の剛腕の持ち主である。ユンゲラーは噛まれている反対側の腕を振り被る

『うおおおおお！』

ユンゲラーが拳を放つ瞬間身に纏っている光が一際大きくなりそのままユンゲラーは拳を叩き付けた。ヨーギラスは勢いよく吹っ飛んでいきそのまま立ち上がる事は無かった。ヨーギラスは完全に目を回している。勝ったみたいだね……

「僕の勝ちだ！ カズマとカシスをバカにした事を撤回するんだ！」

僕はユンゲラーをボールに戻さずに力強く少年に向かっていう。

「ふん、弱いヤツはこれだから困る。すぐにムキになりやがって」

な、なに！？ 少年は何も言わずにヨーギラスをボールに戻す。ありがとつの一言も無しなのか！ もしかして僕がバトルの最中ずっと感じてた違和感って……

「君は、ポケモンをなんだともものだと思ってるの？」

少年とヨーギラスから感じた違和感、絆が、本来トレーナーとポケモンの間にあるような絆を感じないんだ。彼はポケモンを道具のように見てるんじゃない……

「フン……お前がどう思おうが勝手だが、俺はお前のようなヤツが大ッ嫌いなんだ」

そうとだけ吐きすて少年は去っていく。ごめんカズマ、カシス……謝らせる事が出来なかったよ……

「あ、ユースケ……」

僕がさっきの場所に戻るとランがソファアに座っていた。心なしか少し顔が赤くなっている気がする。それが証拠に僕のジャケットで若干自分の顔を隠している。どうしたんだろう？ま、いっか……

「少しは落ち着いた？」

僕がそう尋ねるとコクリと小さく首を縦に降った。それはよかった。

「今日ゆっくり休んだら、アサギシティに行こうよ」

僕はそうランに告げる。

「え……カシス達の事は？」

確かに常にテレビに張り付いてカズマ達の情報を聞きたいとは思っても

「だからこそだよ。港町のアサギシティならもしかしたらそれについての情報も手に入ると思うし、それにこうやって落ち込んだのもよくないと思うんだ。絶対にカズマとカシスもそんなの望んでいないよ」

と、僕はランの問いに答えた。まあ、あの少年にバカにされる程カズマ達は弱くない！絶対に無事にいる！って思ったのが一番の理由なんだけどね……

「そう……だね。こんな事で落ち込んでいたらまたカシスにからかわれちゃうよね」

と、ランはいつもの笑顔で僕に言った。やっぱりランは笑顔が一番似合うよ。

「それにもしかしたらヒョコって出てくるかもしれないしね」

「うん、きつとそうだよね」

こうやって僕達はいつもの笑顔に戻る事が出来た。あの赤い髪の少年がカズマ達に言った事やポケモン達に対する考えにはとても腹が立つけど……彼のおかげで立ち直る事が出来たんだ。そういう面では、本当に感謝だね。

「それじゃあラン、部屋に行こっか。今日はもう休もうよ」

「うん」

ランが笑顔で僕の言葉に頷く。カズマ、カシス、僕達は行くよ自分達の目標のために……それと信じてるからね。君達の無事を……

## ユースケの怒り（後書き）

今回はプラネットさんの作品、金と銀の翼のシルバーに登場してもらいました。プラネットさん、シルバー、ありがとうございました。

ユースケ「彼の名前、一切出なかったけど……」

ごめん、だって彼ゴールドの時だって偶々トレーナーカードを見てゴールドが名前を知っただけだから彼が自分から名乗るかなあ……  
ってなつて名乗らせられなかったんだ。プラネットさん、本当にごめんなさい。

ユースケ「キャラが違う！とか名前を出せ！って時は連絡お願いします。即刻修正させますんで」

ごめんなさい……

ユースケ「で、ユンゲラーのあの力、久々に発動したね。あれって何？」

今は内緒だね。ただユンゲラーと君の絆が最大のヒントだよ

ユースケ「？」

次回こそ『暗闇に向かって討て』をやります。それと放送局のネタ（特に質問）を募集してまゝす。やりたいのにやれないので……

ユースケ「それじゃここで終わるか、今回のポケットモンスターACEは、僕、ラン、スペシャルゲストのシルバーでお送りしました」

闇に向かって討て！（前書き）

久しぶりにイツキ編です

イツキ「遅い！」

ごめん……ではどうぞー！



闇に向かって討て！

ウソツキーとの激闘から暫く歩き、遂にエンジュシティに到着した。既に鮮やかなぐらい赤く紅葉したもみじの葉っぱが散っていた。対して感性は強くないほうではあるがとても綺麗に見える。いい時期にこれたなと思う。

「わあ！すっごくいい！イツキ！凄く綺麗だよ！」

コ、コノハが壊れた？いつもとは全く違う様子のコノハに若干焦るオレ、なんせ普段は……「なんでアンタはいつもそうなのよ！」とか「ええい、黙りなさい！」とか「アンタなんて大ツキライ！」とかひたすら罵りの言葉ばかり言うてくるからな……それにかかと落としとかハイキックとか結構凶悪な事もしてくるし……名前がコノハだから散っていくモミジに共感を覚えたのか？

「どうしたのよイツキ？そんなポーとしちゃって」

「イヤ、腐ってもコノハも女の子なんだなって……あ……」

ヤバイ……く、口が滑ってもうた……腐ってもとかこれは不味い……

「へえ……イツキってわたしの事をそういう風に思ってたんだ……」

「ま、まあな……」

あ……また口が……

「ぶっっん」

綺麗な笑顔でコノハがオレに向かって言う。ただ……目が笑ってない！更にまがまがしいオーラが……

「Are you ok?」

「No! No thank you!」

コノハのセリフに対して己の知りうる全ての英語で返す。駄目だ！プレッシャーが消えない！

「Yes? Oh ok!」

誰もんな事言つて……ギヤアアアア

「たのも〜！」

オレはそう叫びつつもジムの扉を開いた。コノハに血祭りに挙げられた後、オレはPCでポケモン達を休めてから早速ジムに向かった。コノハはというと、「もうアンタなんかとは絶交よ絶交！」ってどこかに行ってしまった。まったく……後で探さなきゃな……おっと、そんな事よりジム戦ジム戦。オレはジムの中に入った。その瞬間だった。背後の扉が突然閉じてしまい、真っ暗な空間の中に閉じ込められてしまった。じよ、冗談じゃない……人間、真っ暗なところに長い間いると正常な思考を失うと言う。ヤバい！早速失いそうなんだが……

「チャレンジャーだね？こっちに来てくれないか？」

オレを呼ぶ声が聞こえた。畏か？イヤ、それは無いよな……全く、早速失いかけてるぞ……オレは声が聞こえてきた方向に踏み出す。一步一步慎重に、何かにつまづいたりしないように……

「そこでストップしてくれ」

またもや奥から声が聞こえてきたので、それに従いオレは足を止める。すると天井から薄暗い光が照らされた。ここは……バトルフィールドか！なんの特色も無いバトルフィールドが広がっている。おいおい……どういう事だよコイツは……あの真っ暗な中でオレを誘導したのか？このジムリーダーはハウオウと会うために千里眼を身につけたという話を聞いた事がある。まさかこの様子だと本当みたいだな……恐ろしい……

「やあ、僕はここのジムリーダーのマツバ、君は？」

「あ、オレはワカバタウンのイツキです！バッジを賭けてオレとバトルしてください！」

突然バトルフィールドの反対側から聞こえてきた言葉、ジムリーダーのマツバさんの言葉にオレは答えた。

「分かったよ。ルールは1対1のシングルバトルだ。いいね？」

「はい！」

それに対してオレは力強く頷いた。

「なら行かせてもらうよ。頼む、ゲンガー！」

『ケケー！』

マツバさんはゲンガーを繰り出してきた。コイツはかなりの強敵だな……ならオレはコイツだ！

「ハッサム、君に決めた！」

オレはバトルフィールドに向かってボールを投げるとそれからハッサムが登場した。ゴーストタイプに対応出来るポケモンはオレにはいない。ここは撃たれ強いハッサムで勝負だ！

「頼むぜ！ハッサム！」

『サム！』

オレの言葉にハッサムが頷く。へへ、頼もしいぜ……

「審判、よろしく頼むぞ……」

「ケケケ、了解です……試合開始……」

マツバさんの言葉を聞いてバトルフィールドの中央にいる審判にそう言つと審判が試合開始の合図をした。うう……盛り下がるなあ……

「こちらから行かせてもらう！ゲンガー、催眠術！」

『ケケケ！』

ゲンガーは素早い動きでハッサムに向かいつつも催眠術を掛けようと迫る。受けたら寝てしまうそいつを貰う訳にはいかない！

「バレットパンチだ！」

ゲンガーが催眠術を発動するより速く、ハッサムはゲンガーの懐に飛込んだ。そして自慢の拳を数発叩き込む。特性テクニシャンにより威力が向上している

『ケケケ！？』

ハッサムの素早くかつ重い一撃が見事に炸裂した。ゲンガーはそれを受けて弾き飛ばされるが、ふんわりとした動きで見事に着地する。流石はジムリーダーのポケモン、よく育ててあるな……

「中々やるね。だけど、これならどうだい？ゲンガー」

『ケケケ』

なっ……ゲンガーが消えた？急にゲンガーが闇に隠れるように消えてしまった。な、何が起こってるんだ！？

！

「ハッサム、後ろだ！」

『サム！？』

「遅い！」

『ケケー！』

『サムッ！？』

ハッサムは背後からのゲンガーの一撃を受ける。なっ……ヒットア  
ンドウエイか！？一撃を食らわせた後、ゲンガーはまた闇に姿を消す。コイツは……

「影討ちの応用だよ。気配を消して闇に溶け込む。これにへの対処は難しいだろ？」

くっ……暗殺者みたいな技を使う……

「ゲンガー、シャドーパンチ！」

『ケケッ！』

『サム！？』

再びゲンガーの背後からの攻撃がハッサムを襲う。くっ……ダメだ……全然捉えられない！このままじゃやられるのも時間の問題だ……なんとかしないと……

「もう一度だ！」

「鉄壁だ！」

『ケケ！？』

『サム！』

ハッサムは鉄壁を発動してダメージを最小限に抑える。これにしてもし時間稼ぎにしか過ぎない。何か……何か手は無いか？

「鉄壁で時間稼ぎしようたって無駄だよ。10万ボルト！」

「！？」

『ケケ！』

『サムー！？』

「ハッサム！」

ゲンガーが10万ボルトを放ってくる。突如背後から放たれたその一撃をハッサムは回避する事が出来ず、直撃を受けてしまう。まさか！そんな技まで使えるのか！？ハッサムはその攻撃を受けたため、

しゃがみ込んだ。このままじゃ不味い……何か、何か無いか……そうだ！こうなったらイチバチだ！

「止めだ！10万ボルト！」

これがチャンスだ……見えた！

「ハッサム、後ろだ！影分身！さらにバレットパンチ！」

ハッサムは当たる寸前に影分身を使いその攻撃を回避する。そして弾丸のごときスピードでゲンガーに拳を見舞った。

『ケケケ……』

よし！今のは効いたみたいだな！

「何故ゲンガーを！？」

マツバさんが驚いた様子でオレに尋ねる。

「ハッサムの背後に10万ボルトのチャージの際に発する微弱な光のお陰でゲンガーが少しだけ見えたんです。さあ、決着つけますよ！」

オレはご丁寧にマツバさんに説明した後、ハッサムに構えさせた。さあ、行くぜ！

「なるほど、真っ向勝負か……ならばこちらも正面から受けて立とう！ゲンガー、気合パンチだ！」



「アイアンヘッド！」

僕とマツバさんが叫ぶと2匹は同時に動いた。どうだ！2匹の激突によって砂が舞って視界が閉ざされる。本当にどうなったんだよ……

「この勝負、僕の負けだな」

え？マツバさんの突然の敗北宣言それが意味するのは……砂煙が治まり、オレはバトルフィールドを見る。あ！フィールドの中央では倒れたゲンガーと片膝を付きつつもいつも通りの表情を崩さないでいるハツサムがいた。これって！

「ゲンガー、戦闘不能……ハツサムの勝ち……よって、チャレンジヤーイツキの勝ち」

とさっきと同じように盛り下がるように審判が言った。ホント、勘弁して欲しいぜ……とにかく

「やったぜハツサム！」

『サム！』

オレがハツサムのもとに駆け寄るとハツサムは照れ臭そうにそっぽ向いた。ハハハ、照れてやんの……

「負けたよイツキくん」

マツバさんがオレのもとに歩み寄って来ながら言った。

「コイツが頑張ってくれたお陰ですよ。なっ？」

『サ、サム!』

またそっぽ向きやがった。素直じゃない奴……

「いいコンビだな。これが僕を倒した証のファントムバッジだ。受け取ってくれ」

「ありがとうございます!」

オレはマツバさんからバッジを受け取る。ファントムバッジ、ゲットだぜ!

「またバトルしよう」

「はい!」

オレはマツバさんが差し出した手を握り返しながらオレは頷いた。

闇に向かって討て！（後書き）

次回予告

コノハ「あゝあ、なんであれぐらいでケンカしたんだろ…… イツキとケンカ別れしたわたしはエンジュの町をさまよっていた」

イツキ「そんなコノハの心中はいかに？そしてオレはアイツ達と再会する」

コノハ「次回、ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEA  
SON ～ 『再会』 次回もポケモン、ゲットよ！」

ルカリオ『よろしくね』

再会（前書き）

今までに無いぐらい出来が悪いです……

イツキ「突然オレ中心じゃなくてコノハ中心にした罰だ！」

はい……とにかく始まります

## 再会

も〜！何よ何よ！イツキ、あんな言い方しなくてもいいのに！わたしはあのイツキの一言、「腐っても女の子」って一言で怒っている。何よ……確かにわたしはがさつでランさんみたいに優しくないし、口より先に出ちゃうけど……あんな事言わなくてもいいじゃない……わたしだって女の子なのにさ……

「イツキのバカー！」

力一杯お腹の底から叫ぶ。ふう〜少しは楽になったね……あ〜あ、どうしよう……絶交って言ったちゃったしなあ……会うのが気まずいなあ……そりゃ、言葉のあやで言っただけで本気で言ったんじゃないいわよ。べ、別にイツキの事が気になってるって訳じゃないんだけど……元々わたしが行きたいところにアイツがいただけ……

「コノハー！」

こんな声でどんな時も真剣にわたしに付き合ってくれるところに惹かれた訳じゃ……っておい！

「全く心配させやがって」

そう言いつつもイツキがわたしのもとに歩みよってくる。

「な、何しに来たのよ……」

とわたしはぶつきらぼうに返した。ああイヤだ……どうして素直になれないんだろう……

「ああ、その……さつきは悪かった……」

バツが悪そうに謝るイツキ、へえ！イツキにしては珍しいんじゃない？もしかして、わたしの事探してくれてたのかな？

「わたしの事、探してくれてたの？」

「心配だったからな」

イツキ……

「ありがとう……」

「気にすんなって！相棒として当然の事をしただけだ」

いつもみたいの笑顔でわたしに向かって言う。その言葉に照れた様子は無い。

『この言葉がイツキのセリフじゃなかったらロマンチックだったんだけどな……』

とルカリオがわたしにテレパシーを送ってくる。そりゃあ、イツキみたいなデリカシーも無い奴が言えばそのまんまに聞こえるけど、恋愛に関心を持っていそうな人が言ったら告白と勘違いしてたね。間違いなく……

「か、勘違いしないでよ！わたしの行きたいところにたまたまアンタがいただけで、相棒だなんて……一回も思った事ないんだからね！」

と、きつめの口調で返した。なんとというか……「わかってやっぱり照れ隠しだよね……なんだかなあ……」

「まあそんな細かい事は気にすんなって!」

細かいのかしら……

「お〜い、イツキ〜!」

突如イツキを呼ぶ声が聞こえてきた。誰だろう? わたしは声が聞こえた方を向く。男の子と女の子のコンビが手を振っている。イツキの友達かな?

「ユウイチ! サクラ!」

そうイツキは大声で返す。

「よお、久しぶり!」

男の子が駆け寄りつつもイツキに対して言う。

「ああ、そうだな」

それに対して笑顔でイツキが返す。

「ねえイツキ、この2人は誰?」

わたしはイツキに尋ねる。

「ああわりい、紹介するよ。このボーとしてそうな奴がユウイチ、

で、この真面目そうな子はサクラって言うんだ。2人共オレの幼なじみなんだぜ」

幼なじみか……なるほど……とにかく自己紹介しなきゃね

「わたしはコノハ、よろしくね。ユウイチ、サクラ」

初対面だっけって呼び捨てにしちゃうのはイッキの幼なじみだからかな？

「うん、よろしく」

「よろしくな」

とサクラとユウイチが返してくれた。イッキとそっくりで本当にいい人みたいだね。

「んじゃ、久しぶりに再会した訳だし……」

といつつもイッキはモンスターボールをベルトから外す。

「ああ、いっちょやってみっか！」

それに合わせてユウイチもボールをベルトから外した。

「バトルだ！」

そう叫んだ後、バトルフィールドを求めて二人は何処に駆けていった。う、うん……ユウイチもバトルバカか……サクラも苦労してるみたいね……



「ねえ、コノ八ちゃん」

「え、何？」

不意を付くように話かけてきたサクラ、優しい笑みを浮かべていて包容感を感じる。うん……完璧に人間として負けてる感じが……

「ユウイチ達も行ったから私達はポケモンセンターに行かない？コノ八ちゃんとゆっくりお話ししてみたいし……」

うん、それもそうね

「ええ、早速行きましょう」

わたしは笑顔でその言葉を返した。

「へえ、コノ八ちゃんここまでずっとイツキと旅して来てたんだ」  
サクラはチョコバナナパフェを一口食べた後に言った。現在地はポケモンセンターの食堂、わたし達は窓際の席に座り、サクラはチョコバナナパフェ、わたしはクリームソーダを楽しみながらお話をしている。

「そ。全くガキンチヨの相手は大変だわ」

まあそんな事言ってる自分自身も子供なんだけどね……

「へ」

「まあ、いざって時はとても頼りになるんだけどね」

本当にイツキには助けられてるからね……アルフの時もわたしをかばおうとしてくれたし……

「そうなんだ。やっぱりね」

？何がやっぱりなんだろ？

「何が？って顔だね」

いや、だってさ……当然じゃない

「イツキってさ変わったよね」

「嘘！」

思った事が短刀直入に言ってしまう。うそお！あのバカのどこが！？

「なんとなくだけど丸くなったし、強くなったように見えるよ」

「嘘！」

「冗談にしか聞こえないよ……」

「それだけイツキにとって、コノハちゃんが存在が大きいつて事だよ」

え、ええ！？うう、突然そんな事を言われて明らかに同様しちゃってるよ……」

「あれ、照れてるの？」

「うるさい！」

サクラの言葉にわたしは怒鳴り返した。もう……サクラったら……ま、いいわ。とことんイツキに付き合ってやるわよ。パートナーとしてね……」

## 再会（後書き）

### 次回予告

イツキ「マツバさんに頼まれ、オレとユウイチはミナキさんという人と焼けた塔の調査を行う事になる」

ユウイチ「おい、イツキ！アレってロケット団だよな!？」

イツキ「アイツら……行くぜユウイチ！叩きのめしてやる!」

ユウイチ「次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『伝説との出会い』次回もポケモン、ゲットだ!」

マグマラシ『バクウ!』

イツキ「鳴き声が進化してるし……」

伝説との遭遇（前書き）

今回はどうだろう？

イッキ「聞くなよ……」

ではどうせー

## 伝説との遭遇

オレとユウイチはミナキさんというマントのかっこつけた人共に焼けた塔の調査に来ている。ミナキさんは伝説のポケモン、スイクンを追っているらしく、文献を元にここに調査に来たらしい。で、なんでそんな人と一緒に？昨日のマツバさんとのバトルの後、マツバさんに変わりに行くのと頼まれたんだ。友人として頼まれたらしいのだが、生憎マツバさんはジムリーダー、そう簡単に休む訳にはいかないのだ。最近、修行の為に休暇を取ったためどうも休めないらしい。で、腕が立つトレーナーって訳でオレに代理を任せられた訳だ。腕が立つトレーナーか……言われて気分がいいぜ

「イツキくん、ユウイチくん、何かあったかい!？」

ミナキさんの大声が響いた。手がかりになりそうなものはない。

「ないっスよ!」

「こっちもです!」

オレの言葉に続いてユウイチもそう言う。全く……本当に何かあるのかよ……ま、弱気になってもダメだな。とにかくやれるだけやってみるか……

全く見つからない……ここは二階以降は焼けてしまつて一階しか無いからいるとしたらこの一階だけなんだ！畜生……いるならさっさと出てきやがれ……まあ、んな事言つても意味ないわな……

「何か見つかったかい？」

ミナキさんがオレのもとに歩みよりつつも尋ねてくる。

「イヤ、サツパリ……」

「オレもですね」

いつの間にかオレの隣にいたユウイチがそう答える。

「そうかい……私は地下に繋る階段らしきものを見つけたんだが……生憎瓦礫で埋まつていてね。使えたものじゃなかったんだ」

地下が存在していたのか……待てよ……つゝ事は階段の瓦礫さえ撤去出来れば……

「ミナキさん、階段の瓦礫を撤去しましょう」

とオレは提案する。地下に行く一番安全な方法だよな

「分かった。それぞれのポケモンの技で強引にでも突破しよう」

案外ミナキさんって、強引なんだな……

てな訳で地下、オレのアリゲイツの馬鹿力、ユウイチのカビゴンの怪力、ミナキさんのマルマインのギガインパクトで強引に瓦礫を撤去というより玉砕した。まあ、細かい事は気にしない。地下は薄暗くなっついて野生のポケモンの気配も感じる。夜のウバメの森並に不気味だな……結構進んだし、伝説のポケモンが本当にいるならそろそろいてもおかしく無いんじゃないか？

「ふう………」

ユウイチが小さなため息をついた。どうしたんだ？

「どうした、ユウイチ？」

「ん、ああ。サクラを連れて来なくて正解だったなってな」



確かに……アイツは怖がりだからな……いつかお化け屋敷に行った時、対して怖くもないところで大泣きされて大変だったっけな？ちなみにアイツとコノハは二人一緒に今日はジム戦に行っている。オレ達がバトルしてる間に仲がよくなったみたいだな。

「イツキくん、ユウイチくん、アレを見るんだ！」

ミナキさんが興奮した様子で前方に指を差した。その先には……

「ポケモン？」

4足歩行のポケモンが3匹いた。なんだ……すごい神々しいというか……偉大な感覚がする……動く気配は一切無く、眠っているみたいだ。

「ミナキさん、もしかしてアレが？」

「そうだ！3聖獣と呼ばれるポケモン、エンテイ、スイクン、ライコウだ！」

彼らが……オレは一瞬呆気にとられるが、すぐに嫌な感じを感じとった。強い殺気……そしてもの凄い嫌な予感……！

「みんな、下がれ！」

反射的にオレが叫ぶとみんな一歩下がった。そして元いた位置に強力な光線が突き刺さりそこは砕け散った。ひえ、今のは破壊光線……なんつく危ないことしやがるんだ！

「誰だ！」

オレは力強く叫んだ。出てこいよ！

「……中々修羅場をくぐって来ているみたいだね」

そう言つて一人の男が現れる。長身で冷静そうな顔つきの男だ。その隣には獰猛そうなニドキングがいる。さっき破壊光線を放ったのはアイツか……

「フフフ、そのようね……」

反対側からも声が聞こえてくる。オレがそつちを向く。そこには長身女性がいる。そして両者に共通する特徴、胸元に大きなRの文字、ロケット団……それも実力とか服装が一般の人から若干変わつてる所から見ると幹部みたいだな。幹部……いつか戦つたロケット4兄弟の2人と同じ実力つて考えたら結構不味いぞコイツは……

「あれが伝説のポケモンね。あなた達！」

女性の方が指を鳴らすとロケット団員が幹部2人の背後から3人づつ現れ、3聖獣を囲むように移動した。狙いは3聖獣か！

「させん！マルマイン！」

『 『

ミナキさんは素早くマルマインを出した。そして素早く3聖獣を囲むロケット団員を攻撃させようと……

「君の相手は僕、リオンがさせてもらっよ。ニドキング、メガトンパンチ」

『ガアアアア！』

「くっ！マルマイン、守るだ！」

マルマインにニドキングが立ち塞がる。く……否が応でも邪魔する気か！

「ならオレ達が！アリゲイツ、君に決めた！」

「続くぞイツキ！一気に行くぞ！バクフーン！」

『アリアアア！』

『バクフーン！』

オレ達がそれぞれポケモンを出すとポケモン達もそれぞれほうこうを上げた。ユウイチのバクフーン、パートナーのマグマラシが進化したポケモンだ。また一歩先を越された気分でなんか悔しい。バクフーンは背中から勢いよく炎を噴射させる。戦闘モードに入ったみたいだ。さあ、行かせ！

「バクフーン、火炎放射！」

「アリゲイツ、水の波動！」

各自得意な技で3聖獣を囲むロケット団員に直接攻撃を指示した。これでも食らえ！

「甘いわ、バシャーモ守るをいさない！」

!?

『バシャーモ!』

くっ……オレ達の前にさっきの女がバシャーモを出して、守るを使わせた。そのためアリゲイツ達の攻撃を無力化しやがった!この……

「邪魔をするなあ!」

ユウイチが力強く怒鳴り付ける。しかしそれでは女もバシャーモも怯まない。

「あら、慌てん坊さんね。遠慮しないでいいのよ?じっくりいたぶってあげるから?」

くっ……足止めされてる場合じゃねえのに!そうしてる間にもネットのようなものを3聖獣にロケット団員達がかけようとしている。クソオ……どうする事も出来ねえのか……!こうなったらイチバチ、やってみつか!オレは大きく息を吸い込んだ。そして……

「起きろおおおお!!この寝ぼ助どもおおおお!!!!」

オレは力一杯、腹の底から叫んだ。口から血でも吐いてしまいそうな感覚を感じる。その時だった

『クウウウウン!』

『ラアアアアアイ!』

『グルオオオオオ!』

!?

オレの言葉に呼応するように3聖獣は立ちあがりほうこうを上げる。それにより捕獲ようネットは弾き飛ばされ、困んでいたロケット団員達も弾き飛ばされてしまった。

「う……」

そのほうこうにより発生する風圧、それに飛ばされないようになる。なんて威圧感……これが……伝説のポケモンの力なのか!?ほうこうを放った3聖獣は走り出す。そのスピードはまるで風のような。

「!」

一瞬……黄色の聖獣、ライコウと目が合った……そしてそのまま風のように去っていく。あれが伝説のポケモン……ライコウ……

「お前達、何呆気にとられてるんだ。さっさと追いかけてな!」

女の方が叫ぶと我に戻った団員達はそれを追いかけていく。逃がすかよ!オレは走り出そうとしたその時!

「アンタ!」

うおっ!?

不意を付くような女の声、流石に驚いたぜ……

「よくも私達の邪魔してくれたな！このツケは高くつくわよ！」

さつきまでの冷静さの欠片も感じない。正体を表しやがったな？この性悪女め！

「消してやるう……………2対1でもかかってこいやぁ！」

「ル、ルキ……………暴走しすぎだって……………」

リオンが焦った様子で言う。なるほど、アイツはルキって言うんだな……………

「ユウイチ！」

「ああ、お望み通り2対1で相手になってやるよ！覚悟しとけよ！」

オレの言葉に頷いてからユウイチはルキを挑発する。これ以上怒らせるなよ……………本気で恐いからよ……………とにかく

「頼むぜ、アリゲイツ！」

『アリヤア！』

オレの言葉にアリゲイツは力強く頷いた。よっしゃ！叩きのめしてやるぜ！

## 伝説との遭遇（後書き）

### 次回予告

イツキ「ロケット団幹部のルキと正面から戦う事になったオレ達」

ユウイチ「相手の方が一枚上手……こりゃ不味いね……」

イツキ「この！性悪女なんかには負けるかよ！次回、ポケットモンス  
ターACE〜SECOND SEASON〜『コンビネーションア  
タック』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

アリゲイツ『アリヤア！』

## コンビネーションアタック(前書き)

イツキとユウイチはルキとの戦いに挑む。



## コンビネーションアタック

「バクフーン、電光石火からフレアドライブだ！」

バクフーンはユウイチの指示で炎を身に纏いつつも電光石化を発動して高速でバシャーモに突撃した。それに対して突撃した。フレアドライブとかまたワンランク上の技を使いやがって……嫉妬しちまうぞ。

「インファイトオ！」

『シャモ！』

！？

怒り狂っているルキの言葉に呼応してバシャーモは一瞬でフレアドライブで突撃してくるバクフーンの懐に入り込んだ。こ、このスピード！？

『シャモオ！』

『バクウ！』

「バクフーン！」

バシャーモはバクフーンに素早く拳を数回叩きつけた。その一撃を受けてバシャーモは弾き飛ばされる。く……冗談じゃねえよ……ユウイチのバクフーンを軽々と吹っ飛ばすなんてよ……でもな！負けられないんだよ！

「今度はオレの番だ！アリゲイツ、水の波動！」

『アーリヤア！』

アリゲイツは水のエネルギー球をバシャーモに対して放った。効果は抜群の一撃ならどうだ！

「無駄よ！無駄！ブレイズキック！」

『シャー！』

バシャーモは足に炎を纏わせて水の波動に対して蹴りを放った。水の波動は放たれた蹴りにより弾けて消滅してしまう。おいおい！こっちは水タイプの攻撃だぜ！それを炎タイプの技で容易に弾くって……レベルが違う……この僅かな展開でそれを察する。不味い……どうする……どうするよイッキ！

「消えるお！」

く、来る！

「電光石火、更にブレイズキック！」

バシャーモは電光石火を使い、高速でアリゲイツに向かってくる。しかし、電光石火にしては速いという印象を受けない……ならさっきのインファイトの時に見せた瞬発力はなんだ？とにかく対処しないとな。

「アリゲイツ、滝登り！」

アリゲイツは滝を登る勢いで高速で迫りくるバシャーモに迎え討つ。  
しかし！

「甘いわああ！」

「！」

『アリアア！』

アリゲイツがブレイズキックを受けて吹っ飛ばされた。しかし、思ったよりダメージは少ない模様で、さっきのインファイトのダメージから立ち直ったバクフーン隣に上手く着地する。そうか……見たぞオレは……

「ユウイチ、見たか？」

オレはユウイチに問う。奴のあの瞬間的な加速の秘密は……

「ああ、ブレイズキックで地面を蹴って爆発的なスピードの突撃をしたんだ」

やっぱりな……爆発的な突撃のせいであるスピードでの深い踏み込みをされるんだよな……これだけで相手の技量の高さが分かる。オレ達と比べても一枚も二枚も実力は上手……さっきの僅かな交戦でそれに察した。ちい……こりゃ本格的に不味いな……2人がかりで行って何処までやれるか……

（実力が上の相手と戦う時はまともなぶつかったらダメだよ。補助技を中心に使って、相手のペースを崩さないよね）

!?

オレはヒワダでユースケさんに言われた事を思い出す。そうだ、こ  
うなったらイチバチだけどやってやるしかねえ……

「ユウイチ、オレが隙を作るからバクフーンにいつでも超下級の必  
殺技をぶっ放せるようにしてくれ」

「大丈夫なのか？」

オレの言葉にユウイチが尋ねてくる。その言葉にオレは無言で頷く。  
まあ、絶対とは間違っても言えないけどな……

「なら、頼むぞ」

「ああ、行くぜ！アリゲイツ、真っ向勝負だ！馬鹿力！」

『アリアアア！』

アリゲイツは赤いオーラを身に纏いつつ突進する。それに対してバ  
シャーモは何も言わずに構える。受けてみやがれ！

「蹴散らしな！ブレイズキック！」

『シャモオ』

バシャーモはまた先程と同じような深い突撃を行なってくる。

『アリアア！？』

正面から激突し、完全にパワー負けしていたアリゲイツが弾き飛ば

される。まだまだ！

「波乗りを使い！」

『アリアアア！』

アリゲイツが地面に着地した瞬間に地面に手をつけると大きな波が発生する。アリゲイツはそれに乗りつつもバシャーモに突激していく。

「甘い、甘すぎるわ！スカイアッパー！」

バシャーモはギリギリまで波を引き付けそこでスカイアッパーを使った。高い位置で波に乗っていたアリゲイツであったが波を突き抜けてアッパーが突き刺さる。よし………かかった！バシャーモの落下する位置には今だ衰えない波がある。それがオレの狙い目だ！

『シャー』

バシャーモは口にエネルギーを溜め始めた。まさか、高威力の技を放って範囲外に逃れるつもりか！させねえ！

「頑張れアリゲイツ！嫌な音だ！」

『全ッメッ』

うわっ！ハツポースチロールがする音だ！アリゲイツは空中を舞いながらも嫌な音を発動する。もっとも近い位置で嫌な音を聞いたバシャーモは技の発動を中断して耳を塞ぐ。そしてそのまま落下していき波に巻き込まれた。今だ！

「アリゲイツ、フルパワーの冷凍ビームだ！バシャーモを閉じ込める！」

『アーリヤアアア！』

波に向かって放たれた冷凍ビーム、波はバシャーモを巻き込んだままあつという間に凍ってしまった。これがそもその狙い、上手くいったぜ！アリゲイツはそのまま変な体制で地面に落下してしまう。ありゃ……痛そうだ……アリゲイツは涙目になりつつも立ち上がり痛かったと思われるお腹を押さえた。よっぽど痛かったんだな……わりい、アリゲイツ……

「それで勝ったつもりか！？フレアドライブで溶かしてしまいなさい！そしてあの小僧を殺すのよ！」

「な、何！？」

バシャーモは体中に炎を纏い始める。するとみるみるうちに氷は溶け始めた。

「惜しかったわね小僧！」

……本気で恐いなあの女……でもな……

「惜しいもんか！オレ達の勝ち確定だ！ユウイチ、バクフーン！」

オレは叫びながらユウイチ達を見る。バクフーンの口にはもう収まりきらないぐらいのオレンジ色のエネルギーが溜っていた。頼むぜ！

「ああ、コイツがオレ達の全力全開の破壊光線だ！行っけえええ！」

『バクフウウウウン！』

バクフーンはユウイチの気合いの叫びに呼応するように特大の破壊光線を放った。一直線にその一撃はバシャーモに向かっていく。しかしバシャーモを包む氷は完全に溶けてしまい、回避を行おうと動き始めた。万事急須か！イヤ、まだまだ！

「アリゲイツ、吠えるんだ！」

『アーリヤアアア！』

アリゲイツはカ一杯吠えた。その気合いに驚いたのかバシャーモは動きを止める。そこに破壊光線の一撃は炸裂して大きな爆発が起った。どうだ！

「ごさかしい小僧共があああ……………」

ルキがいまいましたげな顔でオレ達を睨んでいる。さっきの爆発で起こった煙が晴れた。そこでは完全に目を回したバシャーモが倒れている。よし！オレ達の勝ちだ！

「ク……………リオン……………引くわよ！餓鬼共、覚えてなさい！必ず地獄を見せてやるわ！」

「それじゃ、失礼させてもらっよ。ニドキング、フラッシュ！」

『ニド…』

くっ！？ニドキングの放った眩い光のせいでオレは両手で顔を覆う。光が治まり、オレは両手を顔から放す。いない……逃げたのか！

「ユウイチ、ミナキさん！追いかけてみましょう！」

オレは二人に対して言う。ユウイチは首を縦に振るが……

「ダメだ。今の我々が追いかけてもやられるだけだ」

！？

「で、ですけどー！」

ユウイチがその言葉に反論しようとするが……

「リオンと呼ばれていた男の余裕、見ただろ？つまりまだ何か隠していたって事だ」

！？

「つまり見逃して貰ったって事か……」

オレは小さな声で呟く。また戦う事になる。そんな予感を感じると共に、強くならなにと改めて感じた。



## コンピネーションアタック（後書き）

イツキ「なあ、ユースケさんは前に会った時にあんなセリフ言ってたっけ？」

物語の最中には言っていないね。でも君とのバトルの後にアドバイスとして言っただって事にしといて

イツキ「うわぁ………適当だなぁ………」

次回予告

イツキ「ユウイチ達と別れて、オレとコノハはアサギシティに向かった」

コノハ「さあ、早速観光よ！灯台見学だ！」

イツキ「果たして、アサギの灯台でオレ達を待つものとは？次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『アサギの灯台』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ルカリオ『ピッピカチュウ！』

コノハ「久しぶりの悪のりね………」

無口な少女との出会い（前書き）

今回はコラボ、そしてイツキ編ではありません。

イツキ「この野郎！」

怒るなって……今回の主役、ランはどんな出会いをするのか？それでは！

ラン「始まります」

## 無口な少女との出会い

エンジュシティPC屋上

「あゝ暇だなあ……………」

あたしは精一杯体を伸ばしながら言った。ふう……………キキョウシティからエンジュシティに移動したあたしとユースケはPCに到着してすぐ、ゆっくり休んだ。そして今にいたる。今はもうお昼の1時、その……………寝過ぎちゃった……………おかげで凄いいい気分、こんなにゆっくり休んだのは久しぶりだなあ。え？ユースケ？うん、ユースケはジム戦に行っちゃったみたい。あたしのポケギアにそんなメッセーヂが残っていた。ハア……………ユースケがいないと本当に寂しいなあ……………カシスも今は電話がつかないし……………ああ！思い出しちゃったよ！もう……………あの事で悩まないって決めてたのに……………自然に目に涙が溢れてくる。

『ピカピカ？』

「どうしたの？」と尋ねるように、あたしの足元に立っているピカチュウが首を傾げる。心配、かけちゃったみたいね。

「ごめんねピカチュウ、もう大丈夫だから……………」

あたしはしゃがみ込んで左手で涙を拭いながら右手でピカチュウの頭を撫でながら言う。いつもピカチュウには心配かけちゃうんだよね……………

『ピカピカ』

ピカチュウは優しい声で鳴く。ピカチュウ……本当にありがと

「ピカチュウ、ちょっとお散歩に行つてこよっか？エンジユの町並みは綺麗だよ」

『ピツカ！』

あたしの言葉にピカチュウは嬉しそうに頷く。それじゃ早速行こう

「行くよ、ピカチュウ」

『ピカア』

あたしが立ち上がつて歩き出すとピカチュウが後ろからついてきた。本当に……あたしのパートナーがピカチュウでよかったなあと思つた。強く

「わあ、綺麗……」

『ピカア……………』

あたしの感嘆の声にピカチュウが頷くように声を上げる。すっかり紅葉した沢山の紅葉の木に囲まれた道を歩いている。本当に綺麗な道だなぁって思う。アレ？どうしたんだろう？あの子？あたしの視線の先、スズの塔の近くを歩いている女の子が目に入る。あたしより少し小柄で綺麗な黒くて長い髪、そして特徴的な青い瞳。とても可愛い女の子だけど、なんだろう？見た感じとても寂しそうな雰囲気……………どうしたんだろう？うん、決めた！声を掛けてみよう

「行くよ、ピカチュウ」

『ピカ？』

あたしの言葉にピカチュウは首を傾げたが、あたしはそれを気にせず走りだす。それを追うようにピカチュウがついてきた。あたしは女の子の前まで走っていき、声を掛けた。

「こんにちは」

『ピカア！』

あたしの言葉に続くようにピカチュウが片手を上げて挨拶をした。

「……………」

女の子は無反応でそのまま歩き去ろうとしていく……………無視された……………なんか悲しいよ……………でも……………この子から感じた凄い悲しい感じ……………お節介かもしれないけど……………少しでも力になりたい……………

「ねえ、ちよつと待ってよ！」

「……………」

あたしの必死な呼びかけも通じず女の子はそのまま歩いていく。ダメなのかな？諦めかけたその時！

『ムウツ！…！』

「きゃああああ！」

不意を突くように幽霊みたいなポケモン、ムウマが突然現れた。うう……………腰が抜けちゃった……………幽霊は苦手なのよ……………

「ごめんなさい。大丈夫？ムウマ、戻って」

女の子はムウマをボールに戻しながら言った。そして尻餅をついて倒れているあたしに手を差しのべてくれる。あたしはそれにつかまって立ち上がった。やっぱりこの子……………本当は……………

「じゃあ」

そう言って立ち去ろうとする女の子。それに対してあたしは口を開く。

「ねえ、あなたって、優しいんだね」

「……………！」

女の子はあたしのその言葉を聞いてか足を止める。この子、本当は

とても優しい子だよ。何があつたかは想像も出来ないけど……心を閉ざしてるみたい……

「私はユウコ。あなたは？」

女の子が口を開いた。それを聞いて、自然に自分の顔が笑顔に変わっていくのが分かった。ユウコちゃんっていうんだ。

「あたしはラン。よろしくねユウコちゃん！」

「ちゃ、ちゃん……？私、いつも呼び捨てだったから、ユウコで構わないけどね……」

あたしはいつも通りの笑顔で言うと、ユウコちゃんが少し苦笑いをしながら返してくる。その後、握手をしようと手を差し出そうとした。その時だった。

「あなたに話しておきたいことがあるの……あなたになら……言える」

意味が深そうな事をユウコちゃんが口にする。足元で立っているピカチュウをあたしは一回ボールへと戻す。多分、あたし以外には聞いて欲しくない事だから……

「うん、分かった。聞かせて、ユウコちゃんのお話」

「……そのベンチで話すわ。長い話になるし」

あたしが、真剣な顔でそう言うと、ユウコちゃんが、そう返してきた。あたしはそれに従って、丁度そこにあつたベンチのもとに歩い

ていき、あたしは軽く紅葉を払った。そこにユウコちゃんが、座つたのを見て、あたしはその隣に座った。それから聞かせてくれた。数年前にロケット団に両親を殺された事、自分を助けてくれた人を探している事、そしてロケット団に復讐したい事……聞いてて本当に辛いお話……でも目を反らす事は出来ない。ユウコちゃんが、辛いハズなのに話してくれた事だから

「そうだったんだ……本当に辛かったよね……怖かったよね……」

あたしは優しめの口調でユウコちゃんに向かって言う。思った事をありのままに

「……うん」

頷きながらユウコちゃんが寄り添ってくる。少し、甘えているのかな？辛い時にあたしがよくユースケにやる事だからすぐにそれが分かった。そんなユウコちゃんを見ながらもあたしは口を開く。

「ユウコちゃん、でもポケモンを復讐のために使うのは……」

「はい、悪いと分かっています。シジマさんにもそう言われていました……」

え？この時、凄いビックリした。さっきまで、最低限の事ばかりを話していたユウコちゃんだったけど、今は凄い積極的に口を開いた。なんか凄く嬉しくて、自然に笑みがこぼれてしまう。

「シジマさんって、もしかしてタンバジムのジムリーダーの？」

「はい、私の育ての親です」



「そうなんだ……じゃあ、そこでポケモンを育ててたんだね？」

会話する事が嬉しくて、どんどん会話が続く、これがユウコちゃんの、本当の顔なんだなって思う

「ジムバッジは取ってませんけどね」

ハハハ、と笑いながらユウコちゃんが返してきた。その笑顔に一瞬ドキッてしてしまう。こういうのが本当に天使の笑みって言ってるなあ……って思いながらも、本当に可愛いその笑顔が羨ましく思えてしまう。

「私のパートナーはシジマさんから貰ったんです。でも、その子は私のために動いてくれる。もっと意見を言ってくれてもいいのにね……」

ユウコちゃんの口から漏れたそのセリフ、多分彼女の本音なんだと思う。うーん、そうね……決めた！

「そうなんだ。ならあたしとバトルしようよ。きつとお互いの事がもっと分かりあえるよ」

「良い案ですね。勿論お受けしますよ……」

うん、決まり！そうなら早速……あたしは立ち上がり、少し向こう側に走っていき、構える。同じようにユウコちゃんも立ち上がり、構えた。お互いに準備はOKみたいだね

「ルールは1対1でいいよね？」

「はい」

あたしの言葉にユウコちゃんが頷いた。それを確認してから、あたしは上着のポケットに入っているモンスターボールを取り出す。

「お願いね、ピカチュウ」

『ピッカ！』

あたしがボールを投げると、元気よくピカチュウが飛び出した。うん、いつでもバトルが出来るみたいね

「ニョロゾ、行って！」

『ニョロ！！』

ユウコちゃんがボールを投げるとニョロゾがボールから飛び出した。それじゃ……行くよ

「10万ボルト！」

「直進して！」

あたしの指示でピカチュウは素早く10万ボルトを放った。しかしその攻撃は真つ直ぐ突っ込んできたニョロゾには当たらなかった。でも……直進して……普通ならそんな指示は……まさか……クリスの幼なじみのゴルドくんの「直球一本鎗！」と同じじゃないよね

「ニョロゾ、水鉄砲！」

ニョロゾは素早く水鉄砲を放った。でもその攻撃に当たるピカチュウじゃない。簡単にその攻撃を避けてニョロゾとの距離をつめた。行くよ！

「雷パンチ！」

『ピイカツ！』

ピカチュウの電撃が籠った拳が、ニョロゾに向かって放たれたしかし拳がニョロゾに入る前に、ピカチュウの体を両手で掴んでピカチュウの攻撃が届かなかった。うん、よく育ってる。今の雷パンチだってそんな甘くなかったのね。

「往復ビンタ！」

『ニョロ！』

『ピカピカピカピカ』

「ピカチュウ！」

ニョロゾは雷パンチを空振って隙だらけのピカチュウに反撃の往復ビンタを見舞ってきた。その攻撃を受けた、ピカチュウの頬は真っ赤に腫れてしまう。あ、なんか可愛い

『チャアアア』

「まだよ……のしかかり！」

『ニヨロー!』

わあああ!ピカチュウが往復ビンタで腫れた頬を押さえている間にニヨロゾがのしかかりを決めようと迫ってきた。可愛いと思ってる場合じゃないよ!

「ピカチュウ、身代わりを使って!」

『チャア………』

頬を押さえながらも、ピカチュウは身代わりを作り出した。身代わりはニヨロゾに潰されてしまい、光の粒子となって消えてしまう。ふう……間一髪……

「水鉄砲」

『ニヨロー!』

身代わりを潰した体制のまま、ニヨロゾは水鉄砲を放ってきた。ピカチュウはその攻撃で回避を余儀なくされて近づくチャンスを失ってしまう。攻撃は最大の防御……そんな感じだね……なら……攻撃も出来ないぐらいの攻撃を決めるだけだよ!

「ピカチュウ、次で決めるよ!」

『ピカア!』

あたしの言葉に元気よくピカチュウが頷くと電気エネルギーを溜め始めた。一気に行くよ……

「ニヨロゾ、水鉄砲で攻撃して！」

このままだと危険だと感じたのか、ニヨロゾに水鉄砲を使わせてきた。でもその攻撃をピカチュウは容易に避けた。決めるよ！

「ピカチュウ、ライティングシャドー！」

『ピイイカツ！』

充電で貯めた電気エネルギーを消費して身代わりが出現した。更に身代わりのピカチュウが更に身代わりを使って、一気にピカチュウが5匹になった。これで決めるよ！

「行くよ……直流電流の……10万ボルト！」

『『『『『ピイカアアアチュウウウウウ!!!』』』』』

ピカチュウの放った普通の5倍の規模の10万ボルト、それを回避する手段は無いみたいでニヨロゾにその攻撃が直撃した。その攻撃に耐えれず、ニヨロゾは倒れた。完全に目を回している。

「ニヨロゾ……」

ユウコちゃんがニヨロゾの元へ駆け寄る。それを見ていると……

『ピツカアア！』

いつの間にか1匹に戻っていたピカチュウがあたしの胸に飛び込んできた。あたしはそれを受け止めて、胸元で抱きしめる

「やったね！ピカチュウ！」

あたしはピカチュウに対して笑顔で言った。そうしていると、ユウコちゃんにはニヨロゾと一緒に歩いてきた。ちょっとやりすぎたって思ったけど、大丈夫そうだね。よかった

「ランさんは強いですね、完敗です」

さっきまでに比べると、かなり落ち着いた口調でユウコちゃんが言った。あたしに対して心を開いてくれたのかな？なんか強いつて言われると照れちゃうな……

「あたしなんてまだまだだよ」

と笑顔で言ってみせる。だって、ユースケやケンイチくんには比べるとあたしはまだだから……

「ランさんは何をしてるんですか？」

「ジョウトリーグに出るために各地を回ってる最中だよ」

「そうですか……私も目指してみようかな、いつか」

うーん、ユウコちゃんもポケモンリーグに出ることになったら、いいライバルになりそうだね……また、バトルしたいな。

「ユウコちゃんはこの後どうするの？」

「コガネシティに行こうと思います。あそこはジョウト1番の都会

ですから」

「そっか……じゃあお別れだね」

「そうですね」

ああ、なんかしんみりとしっちゃったね……急にユウコちゃんの表情が何かを思い出したような顔つきに変わる。どうしたんだろう？

「ランさん、ポケギアの電話番号交換しませんか？いつでも連絡できるように」

「うん、勿論だよ」

ユウコちゃんの言葉にあたしは笑顔でうなづく。それからポケギアの電話番号を交換して、しばらく談笑しながら、あたし達はエンジユシテイの入り口まで移動した。先に見えるのは36番道路。そう、コガネ方向、ユウコちゃんが向かう道

「ではまた会えれば」

「うん、またね」

あたしとユウコちゃんは小さく微笑んだ。真っ赤になった紅葉の葉があたし達のあいだに落ちる、ユウコちゃんは振り返ってコガネに向けて歩き出す。あたしはその小さな背中を見送る。

「ラン！」

不意をつくようにあたしが大好きな人の声が聞こえた。あたしが振

り向くとそこにユースケが走ってきた。その顔つきからして、ジム戦は勝ったみたいだね

「ユースケ！どうしてここにいるのが分かったの？」

「なんとなくかな？」

なんとなくって……それで見つけちゃうってのもすごいなあ……

『まあ、愛の絆ってやつだな……』

ユースケのボールの中にいるウンゲラーが茶化してくる。それに真っ赤になりながらユースケはウンゲラーに講義の言葉を言う。その言葉にあたしも真っ赤だよ……

「全くウンゲラーは……ところでランは何をしてたの？」

「え？あたしの新しい友達の見送りだよ」

あたしユウコちゃんを指をさしながら言った。丁度振り向いていたユウコちゃんは直ぐに前を向いた。あ……あたしは隣にいるユースケを見る。気を使わせちゃったかな？

「また、会えるといいね」

「うん！」

ユースケが優しく言った言葉にあたしは頷いた。ユウコちゃん、また会おうね！





無口な少女との出会い（後書き）

プラネットさんのユウコに来てもらいました。なお、プラネットさん、ありがとうございます

ラン「また、会えるよね？」

多分ね！次回は予告通りにお送りしたいと思います。

## アサギの灯台（前書き）

時系列的には前回のランの話の話の話。 イツキとコロハはアサギの灯台に観光に来ていた。

## アサギの灯台

「イツキ〜！早く来なさいよ！」

「は、はえーよ……」

オレは走ってコノハを追いかける。今日はアサギの灯台に来ている。昨日、ユウイチ達と別れ、夜にアサギシティに到着した。んで、今日はアサギの灯台に来ている。勿論観光みたいな感じだな。アサギの灯台の頂上からの眺めはとても綺麗らしく、観光スポットとして有名ならしい。それを焦ったみたいに早く登っていくコノハを追いかけている。全く元気な奴だぜ……やっぱりバカと煙は高い所に登り

……

「イツキー！早く早く！」

また距離が開き、そこでコノハがオレを急かす。全く……

「そんな焦るなよ！ゆっくりしてても頂上は逃げないぜ？」

そう言っつてコノハに足を止めるように促す。ここに来てからバトル少しやってるから多少はバテちゃってるんだよな……少しぐらいはゆっくりさせやがれ……

「え〜」

と不満の声を漏らしやがった……この野郎……あ、野郎じゃないか

……

「もしかして疲れちゃったの？」

とコノハが尋ねてくる。

「ああ、どっかの誰かさんに付き合ってたらな」

コノハの言葉に対して皮肉を交えて返す。まあ、これぐらいで動じる奴じゃないんだけどな

「これぐらいで疲れるなんてね、イツキってもう歳？」

な、なんだと

「言ったな！この野郎！」

だから野郎じゃないか……

「言ったわよ！イツキおじいちゃん、悔しかったらここまで追いで」

からかうようにコノハが力一杯言った。この野郎めえ

「待ちやがれ！」

「へへへ、こっちこっちー！」

コノハは無邪気な笑顔をして階段を登っていく。オレはその背中を追っていく。こっちやっつて、騒がしいけど楽しい日々がずっと続けばいいな……そうオレは思った。

## アサギの灯台（後書き）

次回予告

イッキ「アサギジムに挑戦に来たオレ達はジムリーダーのミカンと出会った」

コノハ「この子……可愛い顔して中々やるよ！」

イッキ「そうじゃねえと面白くねえぜ！見てるよコノハ！絶対に勝つてやる！次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『激突アサギジム（前編）』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

アリゲイツ「ワニィ！」

イッキ「退化してるよ……」

激突！アサギジム！（前編）（前書き）

アサギの灯台でノンビリしたイツキ達は翌日、アサギジムを訪れて  
いた。

激突！アサギジム！（前編）

「たのもー！」

オレはいつもの通り、叫びながらもアサギジムの扉を開いた。オレとコノハはジム戦に来ている。噂では鋼タイプのジムと聞いている。鋼って事でオッサンってイメージがある。さてどんなこついオッサンが出てくる事やら……

「こんにちは、挑戦者の方ですか？」

は？そう言いながら登場したのは、オレ達と同じ年位のワンピースが似合う少女、か、可愛い……一瞬見とれてしまふ。

「は、はい！そうです」

珍しく敬語になるオレ、照れてるのか？オレは……

「もう……何をデレデレしてんのよ……」

どうしたんだコノハは？妙に怒ってるみたいだが……

「そうですか。私はジムリーダーのミカンです。よろしくお願いします」

そっかミカンっていつのか……それにジムリーダー……いい！？

「き、君が？」



「はい」

オレの言葉に頷いたミカン。おいおい、イメージが一発でぶっこしちまったよ。いや、オレは炭鉱で働いている人のような服を着てスコップを背負ったゴツイおっさんを想像してたのによ……これってジエネレーションギャップって奴か！いや、違うか……

「ルールは2対2のシングルバトル、どちらからやりますか？」

と、丁寧な口調で言うミカン。そりゃ勿論……

「オレからでいいよな？コノハ？」

と、オレはコノハに尋ねる。

「別にいいわよ！先にやれば？」

き、機嫌が悪い……今触ると切れそうだ……それぐらい尖ってるぞ……とにかく……

「おっし！オレからやるぜ」

オレはそう力強く答える。さあ、勝負だ！

オレは走ってバトルフィールドに入る。それとは対象的にミカンはゆっくりと歩きながら、バトルフィールドへと入った。さあ……行くぜ！

「アリゲイツ！君に決めた！」

『アリヤアー！』

元気一杯な鳴き声と共にアリゲイツはフィールドに現れた。よし、頼むぜ……

「行って！レアコイル」

『  
』

無機質な音を起てながらレアコイルが現れた。確かタイプは電気、鋼……相性はわりいな……でもな……

「行きますよ。試合開始です！」

ミカンが掛け声をかけた。相性でビビッてたんじゃ、バトルになんねーんだよ！

「アリゲイツ、水の波動だ！」

『アーリヤア！』

アリゲイツは水の波動を放った。放たれたそれは一直線にレアコイルに向かっていく。それに対してミカンは真剣な表情を崩さず指示を出した。

「電撃波です！」

レアコイルの放った電撃波は水の波動を簡単に打消してしまう。さ、流石にこんなんじゃダメか……なら！

「アリゲイツ、距離を詰めるんだ！突っ込め！」

『アリアア！』

アリゲイツは真っ正面から突撃していく。お得意の突撃。猪突猛進がモットーであるオレ達の得意戦術だぜ！

「無駄です。レアコイル、10万ボルトです！」

ギリギリまで引き付けられて、レアコイルの放った高圧の電撃、真っ直ぐ進んでくるこの攻撃、アリゲイツに直撃コースだ。だが、そいつを貰う訳にはいかねえな！

「地面にメタルクローだ！」

『アリアア！』

アリゲイツは地面に力一杯その鋼鉄化した爪を突き刺した。そこに10万ボルトが直撃！だが！

「やりますね……メタルクローをアースの代わりにしましたか……」

メタルクローが使えるポケモンの奥の手とも言えるこの技、10万ボルトといった電気技を地面に流す事によってダメージを受け流す事が出来る。へへ……水タイプだからって油断してると痛い目を見るぜ！

「反撃だ！アリゲイツ、瓦割り！」

『アリアアアアア！』

「レアコイル！」

アリゲイツは瓦割りの一撃をレアコイルに叩きこんだ。使い勝手の良いこの技なら確実にダメージを与える事が出来る。まだまだ！

「水の波動でぶつとばせ！」

『アーリヤアア！』

アリゲイツが放った一撃は見事にレアコイルに直撃して吹っ飛んだ。へへ！してやったりだぜ！

「中々やりますね……」

『』

ちっ……そう簡単には行かないか……ミカンがそう言うと、無機質な音を立てつつも体制を直した。流石はジムリーダーってところだな……

「こうなったら奥の手行きますよ！」

な、何をやる気だ？

「レアコイル、身代わり！」

ミカンの指示を受けて、レアコイルは身代わりを作り出した。2体のレアコイル……対処は出来ない訳じゃないが……なんか不気味だな……

「フラッシュです！」

『 『

！？

レアコイルは突然もの凄い輝きを放ち始めた。しまった！目くらましか！あまりにもまばゆい輝きのため、一瞬視界が塞がれてしまう。だけど！

「アリゲイツ、地面にメタルクローだ！」

『ア、アリアー！』

アリゲイツの返事が帰ってきた。地面に指したのかな？

徐々にオレの視界が回復してくる……？

アリゲイツを挟むように2体のレアコイルが陣取っていた。嫌な予感が……

「レアコイル、磁力全開です！」

『 『 『

2体のレアコイルは磁石を前に突き出す。その磁石はひかれあつて……そしてその中央には……

「逃げる！アリゲイツ！」

「遅いです！NSタックル！」

『アリアアアア！』

「アリゲイツ！」

レアコイルに挟まれてアリゲイツは悲鳴を上げた。磁力によって引き付けあつて物凄い力で挟む……万力みたいだ……なんて技だ……2体のレアコイルが離れるとアリゲイツは倒れた。そんな……？

「まずは私の勝ちです」

嬉しそうにミカンが言う。しかしそれは間違いだな……なんせ……

『ア—リヤアア—！』

倒れていたアリゲイツが赤いオーラを纏いながら立ち上がった。そのためギリギリの距離にいたレアコイルは弾き飛ばされた。身代わりの方はそれを受けて消滅した。馬鹿力……不意をつくように発動したそれは見事に炸裂した。しかしまだレアコイルは戦えるみたいだ。またもや立ち上がり構える。

「油断もスキもありませんね」

ミカンが真剣な表情で言う。そりや当然の話だ……そう簡単にオレのパートナーがやられてたまるか！しかしもう限界は近い。その証拠としてアリゲイツの足は震えている。次の攻撃で決めるしかなさそうだな……

「雨乞いだ！」

『ア—リヤ—！』

アリゲイツが両手を上げると、雨が降り始める。これで水タイプの技の威力が上がる……これで……勝負だ！

「アリゲイツ！とっておきを見せてろっぜー！」

『アリアアア！』

アリゲイツは力強くその言葉に頷いた。さあ！行くぜ！

「ハイドロポンプだ！」

『アリアアアアアア！』

この前覚えた、アリゲイツの切札、ハイドロポンプ。水タイプの中でもトップクラスの威力を誇る。雨が降っている事で威力も向上している。コイツで決めてやる！

「甘いですよ！雨の日はこの技も強いんです！雷！」

『』

レアコイルは10万ボルトより強力な電撃を放ってきた。それはハイドロポンプした激突した。威力は……完全に互角……

『アリアアアア！』

！

アリゲイツは突如、体に青色のオーラを纏いだした。コイツは……特性激流！

ピンチの時に水タイプの技の威力が上がる特性だ！ハイドロポンプ

の威力は更に上昇したそしてそのまま……一気に雷を押し返した！

『 ……!!?』

「レアコイル！」

ハイドロポンプはレアコイルに直撃した。それに耐えられずついにレアコイルはダウンした。よっしゃあ！流石はアリゲ……

『 アリヤ……………』

え……

「アリゲイツ！」

力つきたようにアリゲイツは倒れた。オレはアリゲイツのもとに駆け寄る。

「おい！大丈夫か！？」

『 アリヤ……………ムニヤ……………』

なぐんだ。眠ってるだけか……よっぽど疲れたんだなあ……

「アリゲイツ、後はゆっくり休んでくれ」

オレはそう言いつつもアリゲイツをボールへ戻した。本当によく頑張ったよな。オレはアリゲイツのボールをベルトに戻してから自分の位置へと戻る。



「やりますね……これだけ楽しいバトルは久しぶりです」

とミカン。嬉しい事言ってくれるじゃないか！

「でもジムリーダーとして簡単には負けられません！ハガネール、お願い！」

『グオオオオオン！』

ミカンがボールを投げるとハガネールが姿を表した。その巨体に一瞬圧倒されてしまう。くっ……気持ちで負けたらダメだろ！

オレは首を左右にブンブンと振った後、次のボールを握る。行くぜ！

「ゴマゾウ！君に決めた！」

『パオー！』

オレがボールを投げると、ゴマゾウが登場する。にしてもサイズに差があるよな……ゴマゾウ、ビビッて無いよな？

「ゴマゾウですか……可愛いですね」

ミカンが笑顔で言う。そんなところを見ると、ジムリーダーでもやっぱり女の子なんだなって思う。

「でも、手加減はしませんよ」

と強気の口調。ああ！そう来なくっちゃ！

「勿論だ！な、ゴマゾウ！」

『パオ!』

オレの言葉にゴマゾウは力強く頷いた。へへ、ビビツちゃんないみた  
いだな!

「行くぜ! 転がる攻撃だ!」

オレは力強く叫んだ。さあ、この勝負、勝つぜ!

激突！アサギジム！（前編）（後書き）

次回予告

イッキ「ミカンのハガネールとのバトル、圧倒的なパワーの前にオレ達は窮地に立たされていた」

コノハ「イッキ！諦めたんじゃないでしょうね！？そんなんじゃない見損なっちゃうわよ！」

イッキ「だー！黙って見てろ！絶対に勝ってやるぜ！次回！ポケットモンスターACE＼SECOND SEASON＼」  
激突！アサギジム！（後編）  
「次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ハガネール「ガネール！」

イッキ「なんでここにミカンのハガネールがいたんだよ！」

激突！アサギジム（後編）（前書き）

イツキ「大丈夫か？」

うん。でもだやいがらちやちやっと投稿するよ。それとあとがきも遅れます。

イツキ「んじやどつぞー！」

## 激突！アサギジム（後編）

「行くぜ！転がる攻撃！」

『パオツ！』

オレの指示を受けて猛スピードでゴマゾウはハガネールに向けて転がっていく。それに対してハガネールは動こうともしない。とにかく食らえ！

『パオツ！？』

「何！？」

効かない！？まさか……確かに転がるは炸裂したはずだ！相性的には敵しいが、威力だけならあるんだぞ！なんて頑丈なんだよ……コイツは……

「反撃行きますよ。アイアンテール！」

超重量級の尻尾から繰り出されるその一撃は超ド級である。そんなもん、貰う訳にはいかない！

「避ける！」

『パオツ！』

ゴマゾウは軽快なフットワークでそれを回避した。

メキメキ

！  
な……アイアンテールが直撃した場所には大きなヒビが入った。重量を生かしたこの技は危険だな……一撃でやられかねないな……こうなったらこつちも隠し玉を使うしかないな！

「反撃だ！水鉄砲！」

『パオオオン！』

「え！？」

ゴマゾウは鼻から水鉄砲を放った。それを見たミカンは驚きを露にする。普通じゃ考えられない技だからな当然だな。オレだってアリゲイツとコイツがじゃれあっていて、その時に放ったこの技を見て驚いたもんな……

『グオオ！？』

中々強力なそれが直撃し、ハガネールは辛そうな声を出した。よし！効いてるな！地面タイプがある以上致命傷は避けられないぞ！

「もう一撃だ！」

「させません！地震です！」

『グオオオオン！』

『パオ！？』

続けて水鉄砲を放とうとしたが、ハガネールが起こした地震のために、発射を阻止される。そしてゴマゾウは地面に膝をついた。く……流石に甘くないか……

「アイアンテールです!」

「穴を掘るでかわせ!」

『パオツ!』

ギリギリのところゴマゾウは地面に潜った。そのおかげで、アイアンテールを回避することに成功する。危ないところだったぜ……

「甘いですよ!地震!」

『グアアアアア』

『パ、パオ!?!』

「ゴ、ゴマゾウ!?!」

ハガネールが地震を発生させると、地中にいたゴマゾウが地震のせいで地上に押し出された。くっ……しかもこの様子はさっきの地震を受けた時より遥かに苦しそうだ。コイツは……かなり不味いな……

「まだです!捨て身タックル!」

『グオオオオオン!』

『パオツ……………』

「ゴマゾウー！」

地中から地震で強引に地上に押し出され、そこにハガネールの巨体から繰り出された捨て身タツクルが火を吹いた。地震のダメージが簡単に回復する訳も無く、捨て身タツクルの直撃を受けて、吹っ飛ばされた。つ、強い……………オレは吹っ飛ばされたゴマゾウを見る。すでに体中、傷だらけでまともにバトルが出来る状態じゃない事が分かった。ゴマゾウ……………すまない……………

『パオ……………』

！

ゴマゾウが立った！あれほど酷いダメージを受けたのに、まだ……………やるつもりなのか！オレはゴマゾウの目を見る。その目を見ると分かる。未だゴマゾウの戦意は萎えちゃいない！ここからが勝負だ！

「行けるよな？水鉄砲！」

『パオー！』

ゴマゾウの鼻からさつきより強力は水流が放たれた。それを受けたハガネールはのけぞった。まだまだ行くぜ？

「ゴマゾウ、怪力だ！」

『パオ……………！』

『グオツ！？』



のけぞっているハガネールに怪力を使って突撃する。怪力はノーマルタイプの技だが、発揮するとかかなりの重量のもので吹っ飛ばす事が出来る。それを受けたハガネールは、さっきまでのけぞっていた事もあり、転倒し、揺れが発生した。その大重量のポケモンが転倒した時の揺れはすさまじい、立っているのがやっとなくらいだ。だが、ここで指示を休める訳にはいかない！

「水鉄砲だ！」

『パオー！』

『グオ……』

再び水鉄砲は炸裂した。これだけ受ければ……

「中々やりますね……」

ミカンが焦りの表情を見せた。後一押しだな！

「でも、私のハガネールはそんな簡単には負けませんよ！」

そうミカンが続けるとハガネールは起き上がった。げっ……元気だあ……ハガネールの姿を見て絶句するしか無かった。畜生……なんであんなに元気なんだよ……ゴマゾウはさっきのダメージもあって限界なのによ……どうする……どうするよイツキ！

「決めますよ！ロケット頭突き！」

く、来る！？

ハガネールは猛烈な速度で、ゴマゾウに突撃してくる。くっ！名前にロケットつてつくだけあるぜ……かわすしか……クソッ！間に合わない！

「ゴマゾウ！」

オレはゴマゾウの身を案じて走り出そうとする。その時！

『パオ……パオー！』

！？

ゴマゾウが力強く吠えた。そしてそれに呼応するように輝き始めた。コ、コイツは……まさか！

『パオー！』

その鳴き声と共にゴマゾウは一気に姿を変え、輝きは失われる。進化したのか……

『パオーン！』

進化したそのポケモンは地面を揺らす。その為、ハガネールは制止した。今のは……地震か！

「ゴマゾウ……お前……イヤ、違うな……ドンファン！決着つけようぜー」

『パオーン！』

オレは進化したゴマゾウを……ドンファンに言うとドンファンは力

強く頷いた。

「土壇場で進化するなんて……凄いです！でも、私もジムリーダーとして負ける訳にはいかない！ハガネール！アイアンテール！」

『グオー！』

ハガネールはその巨大な尻尾を振り下ろす。相変わらずその攻撃は圧巻……もの凄い迫力だ。ゴマゾウなら耐えれない一撃なはずだ。だが！ドンファンなら耐えられるはずだ。耐えて……あの技を叩き込む事が出来る！アイアンテールがドンファンに炸裂する。その瞬間にオレは叫んだ。これで……これで決めてやる！

「カウンターだ！」

『パオーン！』

ドンファンはカウンターを使い、そのままハガネールの重い一撃を倍にして跳ね返した。ハガネールは吹っ飛びそのまま地面に落ちて動かなくなった。完璧に目を回している。もしかして……

「ハガネール……私の負けですね……」

ミカンはそう呟いた。よし！やったぞ！

「やったぜドンファン！」

オレはそう言いつつもドンファンに駆け寄る。

『パオオオ……』

ドンファンは鼻を鳴らしながらも嬉しそうに鳴いた。それから直ぐに規則的な息をする音が聞こえてきた。あ……寝ちっまったのか……ふう……オレは何も言わずにドンファンの頭を撫でた後、ボールに戻した。

「負けました。まさかバトルの最中に進化するなんて……」

悔しそうに呟くミカン、そりゃそうだよな……

「たまたまだって。正直進化しなかったら負けていたぜ」

とオレは言う。そのセリフは本心からくる言葉だ。

「それでも負けは負けです。このスチールバッジを受け取ってください」

オレはスチールバッジをミカンから受け取る。よっしゃあ！スチールバッジゲットだぜ！

「流石ねイツキ！」

コノハがオレに対して言う。珍しいな……誉めてくれるなんてな……

「ああ！次はお前の番だぜ」

「見てなさいよ！次はわたしが勝つ番だからね！」

コノハが強気で言った。頑張れよコノハ！

激突！アサギジム（後編）（後書き）

イツキ「なあ、ゴマゾウって、水鉄砲を覚えるのか？」

知らないのかい？

なんとクリスタルバージョンでは卵技で覚えたんだよ。まあ、ルビ  
ー以降は修得しないんだけどね……興味がある方はクリスタルバ  
ジョンで試してみてください。

イツキ「次回予告は？」

するほどの話じゃないから省く。

イツキ「どんだけ適当だよ！」

## タンバへ(前書き)

そのまんまです。完全に繋ぎの話です

## タンバへ

### 連絡船

オレ達は現在、アサギからタンバへ向かう連絡船に乗り込んでいる。オレはデッキに出て、外の風景を楽しんでいた。そこから見える渦巻き列島、あの伝説の存在と呼ばれるポケモン、ルギアが住むとされている場所だ。ルギアは海の神と呼ばれるポケモン、是非とも一度会ってみたいもんだ。

「ハア……」

そう考えていると、オレの隣にいたコノハが大きなため息をついた。珍しい事もあるもんだ……コノハがため息なんてな……

「らしくねえな。どうした？」

オレはコノハにそう尋ねる。なんか悩んでる事でもあんのか？  
ちよつと心配だな……

「うん？お祭りを見たかったなあって」

の、呑気な奴……一瞬でも心配したオレがバカだったぜ……アサギで行われるお祭り、さっき話に出てきた、ルギアを奉るもので、アサギの巫が笛を吹くやらなんやら……とにかくそれをさっき、船に乗ってから聞いて、コノハは後悔している訳だ。

「祭りぐらいで騒ぐなよ……」

基本、祭だろうが、なんだろうがいつも通りにやるって決めている。

ワカバタウンでやってた春祭りとかだつて、屋台でチョコバナナとか焼きそばを買って、夜遅くまでコウとバトルをしていた。あの時も激戦だったなあ……アイツのニューラがワニノコの水鉄砲を……

「ぐらい。って何よ！わたしにとっては大事な一大イベントなの！」

うおっ！

コノハがキレた！

「お祭りの屋台の焼きそばとかたい焼きなんて絶品なのよ！それにあの楽しい雰囲気とか綿菓子とか……それを『ぐらい』って言うつもり！？」

怖いって……とにかく分かったのは、コノハって祭りが大好きって事だな……全くこんな事でムキになる奴なんて初めて見たぜ……

『僕の苦勞が分かりました？』

突然オレの思考に言葉が流れこんでくる。ああ……ルカリオのテレパシーか……確かにコノハに付き合うのって結構大変なんだよな……ルカリオは小さい頃から付き合っていた訳だから……苦勞してんな……とにかくさつきから吠え続けているコノハをどうにかしたいとな……

「今頃騒いでも遅いって！」

「でも～！でも～！」

幼児退行？



『それ、本人に言ったら駄目ですよ?』

分かってるって……てかルカリオって人の思考も読む事も出来るのか……プライバシーも何もあったもんじゃないな……まあ、ルカリオはそんな節操も無い奴じゃないから大丈夫だろうが……

「だあ、分かったって!今度からちゃんと各町のイベントをチエックして、到着して3〜6日以内に行われるなら一緒に出てやるからさ!これでいいだろ?」

半分キレたような口調で言うオレ、その言葉を聞いてコノハは嬉しそうに笑みをうかべた。

「その言葉、二言は無いでしょ?」

「あ、ああ」

と一応頷いておく

「流石イッキ!話が分かる〜!流石はわたしのパートナーよ!」

流石って2回も言われて若干幸せな気分になるが、この前「パートナー」って言ったなら、「わたしの行きたいところに偶々アンタがいるだけよ!勘違いしないでよね!」って言ってたよな……ツツコムところか?

いや、ツツコムなら痛い目を見そうな気がするので止めておこう。  
てかさ……

「お前、まんまとオレを釣ったよな……」

と確信に迫るような事を言ってみる。コイツ、オレが困るような事をあえて言っておれを釣りやがったんだ！

「なんの事？」

本当に何の事も分からないような顔でコノハが返してきた。わ、忘れてた……コイツってどこか頭がメルヘンだっけ……普段の勝気で尚且つ行動的のところばっか見てて忘れてたぜ……

『苦労するでしょ』

とルカリオ

「ああ……」

そのセリフにオレは声に出して頷いた。コノハはそのセリフを聞いてさらにクエスチョンマークを浮かべていた。

## タンバへ（後書き）

### 次回予告

ユースケ「アサギシティに訪れた僕とランはお祭りを見に行く事にする」

ラン「お祭りって楽しいよね。あ、ユースケ！次あっち行こ！」

ユースケ「かくして、僕たちがお祭りで出会うものは？次回！ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜……」

ユンゲラー「アサギのお祭り」次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ピカチュウ「ピッピカチュウ？」

ユースケ「ぼ、僕のセリフを取らないでよ！」

ユンゲラー「言ったもん勝ちだ！」

ラン「二人共落ち着いてよ」

## アサギのお祭り(前書き)

今回はコースケ編、なんとちょっととしたサプライズつきです。どうぞ！

## アサギのお祭り

アサギシティPCロビー

僕はロビーでそわそわしながらランを待っていた。え？  
なんでかって？

そりゃあ……その……つまり……デート……なんだよね……アサギ  
シティで行う海の神様を奉るお祭りを見に行くんだよ。現在はまだ  
お昼。お昼頃からお祭りをやってるって事は僕達に楽しめって言っ  
てるようなもんだよ。お祭り大好き人間の僕とランは是が否でもお  
祭りは見に行くからね

『あんなユースケ、いくらデートが楽しみでもさ……待ち合わせ3  
0分前からいるのはどうかと思うが……』

「ん？それだけ楽しみなんだよ」

ユンゲラーの的確な突っ込みにこれまた的確な突っ込みを返す。と  
いうか……デートが楽しみって……うう……なんか詰められた気が  
する……

『恋は盲目か……』

流石に意味が分からないよ……

「お祭りが楽しみなんだよ」

と一応反論しておく。

『素直じゃねえなあ』

……否定出来ないなあ……コレは……

「ユースケ、お待たせ！」

背後から聞こえた声、振り向くとそこからランが走ってきた。いつも通りの服装だ。浴衣で来るかな？って少し考えてたんだけどな。

「待った？」

「全然待ってないよ」

とランの言葉に答える。ユンゲラーが、『嘘つきめ！』って言っているのが気にしない。

「それじゃ行こっ！」

「わあっ！ラン、早いつて！」

ランが僕の右手を左手で握って、引っ張るように走り出した。ラン、本当に元気になったなあ……まだカズマ達の事を引きずっているって思ってたけど、僕の気のせいみたいだ。本当によかったよ

「ユースケ、早くおいでよ！」

ランが向こうで手招きをする。ちょっと……元氣過ぎるんじゃない？  
のんびりとたい焼きを食べてる暇もないよ……

「ちょっと待ってよ」

僕はそう言った後にたい焼きを口に放り込んだ。うん！口の中に  
餡子の風味が広がって美味しい！やっぱりたい焼きは最高だよ。よ  
し！それじゃランを追いかけないとね！

「待ってよ！」

そう再び叫んだ後に僕は走りだす。やっぱり込み合っているせいで  
思ったように前に進めない。え〜と……ランは……あーいた！

「ラン！」

「遅いよユースケ」

とラン、ふう……元氣過ぎるのも考えものだよね……

「ランが早過ぎるだけだよ」

といつも通りに返した。それに対してランは笑顔で「そっか、ごめ  
んね」って返してくる。僕はそれを見てから自分の手をランの手と  
繋いだ。少し……じゃなくてかなり恥ずかしいよ……

「ユースケ？」

ランが顔を少し赤くしながらも僕に向かって言う。

「込んできてるから離れないようにね……」

と少し顔をそらしつつも言う。少し自分の頬が少し熱を持ってきた事が分かる。僕の顔も赤くなってるんだろっと思って思う。

「うん！頼りにしてるよ」

「任せてよ」

僕はランの言葉に力強く頷いた。

「ちょっとそこのお二人さん」

？

突然、僕ら？に掛けられた声に僕は声の聞こえた方向を見る。そこにはアクセサリーが並べられている露店があった。僕はそこに腰掛けていたおじさんに声を掛ける。



「僕達の事ですか？」

「そ〜そ〜なんか買っていていかないかい？お隣にいるお嬢さんにさ」

……そうだね……

「そうさせてもらいますよ。ラン、好きなを選んでよ」

「え、いいの？」

「うん、せつかくのお祭りだしいいんじゃないかな？」

僕の言葉にランが尋ねてきて、僕はいつも通りに答えた。少し照れてるのは内緒だ。

「ありがとう、ユースケ」

その言葉に僕の顔の赤さが2割り増しとなる。これは本格的にヤバイよ……

「仲がいいねえ、気に入った！兄ちゃん、これ売るよ！」

？

おじさんはそう言うと、カバンをあけてとあるものを取り出した。これは……

「わあ……綺麗……」

ランがそう呟く、それは銀色に輝く羽根を中心に綺麗に裝飾されたペンダントだった。本当にすごく綺麗だ……

「偶々渦巻き列島に行った時に見つけた銀色の羽根を装飾したもんなさ。本当はいくら出されても売らないんだが……気に入ったから売るよ。30000円でどうだい？」

そりゃまたすごい物を買ってくれる気になったんだね……30000円か……僕は財布の中身を確認する……スツからかんになる事は無さそうだね……なら……

「はい、30000円」

「まいどありー！」

僕が10000円を3枚渡すとおじさんは笑顔でそのペンダントをケースに入れて僕に渡してくれる。

「ありがとうございます」

「お幸せにな」

なっ！それってどういう……

「どうしたのユースケ？」

「な、なんでもないよ」

僕は上手く同様していたのを誤魔化し、ペンダントの入っているケースを開き、ペンダントをランの首に掛けて上げる。

「わあ……ありがとう、ユースケ！」

とびつきりの笑顔でランが言った。

> i2579 — 308 <

どうも弱いなあ……この満面の笑みにはさ……

グオーン！

！？

なんだ！？

突然ものすごい轟音が響いたいったい何が？

「ロケット団だー！」

！？

誰かの叫び声があがる。ロケット団だつて！？

「子供が向かって入ったぞ！」

「いくらガバイトが強いからって無茶だ！なんで止め無かつたんだ……」

そんな声も聞こえてくる。ガバイトつて……まさか……まさか……

「アキトくん……？」

ランが不安そうな声を出した。嫌な……嫌な予感がする……

「行こう、ラン！なんか嫌な予感がする」

「うんー！」

ランは僕の言葉に力強く頷いた。この嫌な予感……気のせいだよね？  
そんな事を考えながらも僕達は轟音が響いた場所、海岸に向けて走り出した。

## アサギのお祭り（後書き）

はい、挿絵頑張ってみました。それでも酷いのはご愛嬌です。

ラン「酷いよ……」

ごめん、そのうちしっかり書き直すよ……

### 次回予告

ユースケ「僕達が海岸に駆けつけるとそこには仮面を被った二人のロケット団員と傷だらけのアキトの姿があった」

ラン「酷い！でも……どうしてだろう……あの二人……すごい懐かしい感じがする……」

ユースケ「とにかく全力でぶつかるだけだ！次回、ポケットモンスターI ACE ～ SECOND SEASON ～ 『そんな……冗談だよね……』 次回もポケモン、ゲットだよ！」

ストライク「トライク！」

「そんな……冗談だよな……」（前書き）

ユースケ「あれ？今回出てきたロケット団って……」

うん、プラネットさんの「金と銀の翼に」に登場してたっていい  
いんだろ？

ユースケ「うん」

長期コラボになる予定だから先に çıkさせて貰ったんだよ。

ユースケ「へ」

では、どげぞー！

「そんな……冗談だよな……」

「ハドウダン！」

「ち、畜生……うわっ！」

僕達が駆けつけると、仮面をつけたロケット団員が二人と、トゲキツスとマツスグマ、それと対峙するような位置にアキトとガバイトが倒れていた。酷い……傷だからじゃないか！

「いい加減にするんだ！なんであなた達ロケット団はこんな事ばかりするんだ！」

僕はそう力一杯叫んだ。それに気が引かれたのかロケット団2人は僕の方を向く。そのうちにランは走ってアキトの元へ走って行く。

「ホウ、オマエハゆーすけカ」

2人いる内の一人、男の方が言った。代々僕と同じ年ぐらいで身長はほとんど変わらない人物だ。それにしても僕の事を知っているのか！？

「きみハ、ワレワレろけつとだんニトツテメザワリヨ。キエテモラウワ」

もう一人、女の人の方が言う。同じく同じ年ぐらいだ。ただ身長が少し高めで僕より若干高めな感じがする。そんなの素直に頷く訳が無いよ。僕は直ぐにベルトに手を回す。

「ユースケ！アキトくんなら大丈夫だよ。そんな酷い怪我じゃないよ」

ランがそういいながら、アキトのボールを取り出して、ガバイトをボールに戻した。酷い怪我じゃないのか……それはよかったよ。僕の頬が一瞬緩んだけど、すぐに引き締める。アキトが完全に負けたって事は相手はかなりの使い手という事が分かる。決して油断出来た相手じゃない！

「頼むよ！ストライク！」

『トライク！』

僕がボールを投げるとストライクが鳴き声をあげながらも姿を表した。よし！戦意は十分！いつだってやれるぞ！

まずはアキトを逃がさないと……ランに連れて行って貰おっかな……でもそれだと少し戦力的に不味いよね……どうしよう……

「大丈夫ですか！？」

そう考えているところにワンピースを着たアサギシティのジムリーダーの少女、ミカンが走ってきた。昨日戦ったのだが、中々の使い手で、結構苦戦したんだよね。どうやら事態を聞き付けて、ジムリーダーとして事態を治めるために来たらしい。丁度いいところに来てくれたよ。

「ミカン、丁度いいところに来てくれたよ。ランの連れている男の子を連れていってくれないかい？」

「え……でもユースケさん達はどうするんですか？」



そうミカンが返してくる。そんなの決まってるよ。

「あたし達は足止めをするよ。だからミカンちゃん、アキトくんを  
お願い」

ランはアキトを連れて僕達の元へ走って来ながら言う。その動作と  
同時に空いている手を使ってボールからフシギソウを出した。フシ  
ギソウもやる気は満々、なんとかなるかな？

「わ、分かりました。お二人共、気をつけてください。エアームド、  
お願いします」

『ギューー！』

ミカンはそう言うすぐさま、エアームドを出した。その背中に  
アキトを乗せて自分自身は足につかまる。そしてエアームドは勢い  
をつけて飛びたっていった。ミカン……アキトを頼むよ……

「ニガサナイワ！とげきつす、ごっどばーど……」

「させないよ！フシギソウ、弦のムチ！」

『フシャア！』

フシギソウの背中から弦が伸びてトゲキッスに絡みついた。今だ！

「ストライク、電光石火からいあいぎり！」

『トライク！』

ストライクは自慢のスピードを活かしてトゲキッスの正面に入った。そして得意のいあいぎりを決めた。トゲキッスは弾き飛ばされてしまふ。よし！これでミカンを追撃は出来ないね。

「コノ……ジャマスルンジャネエ！」

男の方が怒鳴った。なんだ……この感じ……身に覚えが……その男、まあ同い年ぐらいなんだけど、誰かに似ている……誰だろう……本当に僕達が知っている誰かに……

「ユースケ、来るよ！」

ランの叫び声で僕は我に帰った。相手の実力はかなりのもの、一瞬の油断でも敗北に直結しかねない。でも……一体彼は誰なんだ？

「おれ、ばれっとノジツリヨクヲミセテヤル！オクレルナヨ、オレ  
ンジ」

そうバレットって名乗った男の子が叫ぶとマツスグマが一直線に突撃してくる。

「オマカセ！」

そう言いつつもオレンジもトゲキッスに指示を出そうと構えた。僕は……絶対にこのやりとりを知っている。

「ユースケ……」

ランも何かに気付いたみたいだね……

「うん……でもさ、僕達には仮面の知り合いなんていないよ」

「だよね……」

本当にあの二人の感じは何か知っている。なら……あの気味が悪い仮面を剥がして正体をつかむまでだよ！

「ステミたつくるダ！」

「ストライク、影分身から剣の舞！」

ストライクはマツスグマの攻撃が決まる寸前に分身を作り出した。そんな単調な攻撃には当たらないよ。そして剣の舞が発動、ストライクは攻撃力を上げていく。それを黙ってトゲキツスは見ているはずがない。波動弾ストライクに放ってくる。相性的にはこつちが有利だけど、絶対命中って点では、影分身を発動してるから有効な手段だね。でも、これは1対2の変則ルールのバトルじゃないんだよ！

「フシギソウ、マツスグマに弦のムチ！」

『フシヤア！』

ランの指示を受けて、フシギソウは弦のムチを使い、マツスグマを縛り上げた。不意をついた攻撃にマツスグマは対応出来ない。

「そのまま波動弾に向かって投げて！」

『フシヤアア！』

フシギソウは弦のムチを振り回し、それを波動弾に向けて投げとばした。マツスグマに波動弾は直撃、効果は抜群で結構ダメージは受けたハズだ。

「ナカナカヤルワネ」

とオレンジ。そう言うのと同時にバレットのマツスグマは立ち上がった。やっぱりそんな簡単にはいかないか……それじゃ、こっちらから攻めよっか！

「ストライク、辻切り！」

「フシギソウ、葉っぱカッター！」

『トライク！』

『フシャ！』

フシギソウの葉っぱカッターが2匹に向かって突撃していく。それを追いかけるようにストライクは移動する。

「カワセ！」

バレット達の指示で2匹は葉っぱカッターによる攻撃を回避する。そこが狙い目だ！

『トライク』

『トゲッ！？』

「とげきつす！」

トゲキツスが回避した瞬間にストライクは遅いかかり辻切りを決める。トゲキツスは悲痛な声を上げながらも地面に落ちるのを避けようとその場で踏ん張った。剣の舞でパワーを上げてるんだけどな……やっぱり強敵だね……

「スキアリ！まっすぐま、シンソクカラステミたつくるダ！」

『オーン！』

『トライ！？』

「ストライク！」

辻切りを決めて一瞬だけ出来たスキを逃さずにマツスグマは神速を使い、目にも止まらぬスピードで捨て身タツクルを決めてきた。神速で加速している分、捨て身タツクルの威力も通常よりも高い。そのためストライクはかなり吹っ飛ばされた。そんな……

「フシギソウ、ストライクを助けるよ！リーフ……」

「オソイワ！えあすらっしゅ！」

『トゲッ！』

『ソウ！？』

「フ、フシギソウ！」

ランが指示をする前にエアスラッシュがフシギソウに炸裂してしま  
う。それを受けたフシギソウはひるんでしまって動けない。こ、こ  
のままじゃ！  
押しきられちゃうよ！

「あいあんてーるデツイゲキ！」

「っ！ストライク、燕返し！」

追撃をストライクに回避させる。そしてストライクは一撃マッスグ  
マに叩き込んだ。よし！今の内に……

「アマイワ、ダイヤモンド！」

！？

オレンジの指示でトゲキツスはフシギソウに向かって大文字を放つ。  
バランスを崩しているフシギソウ強力な炎は回避が間に合わない！  
なら！

「ストライク、電光石火！」

大文字を放っていたトゲキツスにストライクは高速で迫り、電光石  
火を決めた。それを受けて体制を崩したトゲキツスはフシギソウに  
向けて放たれた大文字を外してしまった。なんとか間に合ったみた  
いだね……

「ヨテイドオリダゼ！まっすぐま、あいあんてーるダ！」

『オー！』

し、しまった！

一瞬安心したスキをマツスグマがアイアンテールで狙ってくる。これが……大文字からの一貫した作戦だったんだ！  
やられる！

「ストライク！」

僕は叫んで走り出そうとする。その時！

『オー！？』

突如マツスグマを襲った光の光線、それが直撃した今は、ソーラービーム！？

「ふう………なんとか間に合ったね」

『フシヤア』

ソーラービームを放った張本人、ランとフシギソウが安心してため息を漏らす。

「ナツ！………イツノマニ………」

バレットが焦った口調で言う。エアスラッシュを受けてフシギソウが沈黙してたからって、完全に油断したのが失敗だったね。

「ダブルバトルは常に周りをしっかりと確認しておかないとね。ユースケ、お願い！」

だ、そうです。それじゃ、決めるよ！

「ストライク、いあいぎり！」

『トライク！』

「と、とげきつす！」

ストライクのいあいぎりは見事にトゲキッスに炸裂した。それを受けてトゲキッスは地面に落下して目を回した。よし……今だ！

「おれんじマデヤラレタノカ……何！？」

僕はトゲキッスにバレット達が気を捕られている内に僕はバレットにギリギリまで駆け寄っていた。これでも食らえ！

「うわああああ！」

「クッ！」

僕はバレットの仮面に向かってストレートを放った。しかしそれをバレットは後ろに飛び、その拳による攻撃を受け流した。と、とんでもない反射神経してるよ……でもさ……

「ウッ……」

仮面にヒビが入る。完全に避ける事は出来なかったみたいだね。さて、正体をみせてもらおうよ！

仮面がそのまま崩れ落ちた。その時、僕は驚愕の真実を知る！

「え……」



そ……そんな……冗談だよ……僕の口から言葉が失われる。そんな……

「カ、カズマくん……」

ランから声を出す。仮面の男、バレットの正体、それは……カズマだった……って事は……

「ストライク、あの人の仮面を壊して」

『ト、トライ……』

ストライクもやっぱり動揺してる……僕の指示でストライクは瓦割りを使ってオレンジの仮面を破壊した。っ！……やっぱり……

「カシス……なんで……」

女の子の方は……僕達の親友、カシスだった。

「そんな……冗談だよ……」

僕の口からそう言葉が漏れた。二人の光を失っている目が強く僕達に威圧をかけている事が分かった。

「そんな……冗談だよな……」（後書き）

## 次回予告

ユースケ「バレットとオレンジの正体が、カズマとカシスだったなんて……」

ラン「……どうして……どうして二人が……」

ユースケ「とにかく……止めないと……次回！ポケットモンスター ACE 2 SECOND SEASON」  
「僕は……怖いんだ……」

ラン「次回もポケモン、ゲットだよ！」

ピカチュウ『ピッピカチュウ！』

「僕は……怖いんだ……」 (前書き)

ユースケ「なんで、なんでカズマ達が……」

とにかくがんばれ

ユースケ「うん……」

「僕は……怖いんだ……」

カズマ……カシス……仮面をつけた二人の正体……それはカズマとカシスだった。なんで……なんでこんな事が……

「おれカラハナレロ！」

「っ!？」

カズマが足を振り上げて僕に向かって蹴りを放ってくる。僕はギリギリでそれに反応して蹴りをガードして受けたダメージを最小限に抑えた。あ、危なかったあ……

『ユースケ！一回下がれ！コイツは普通じゃないぞ！』

ユンゲラーのテレパシーが聞こえた。確かに……普通じゃない……いつものカズマ達じゃない！

僕は迷わずに走ってランの隣に戻る。ランを見ると何か力が抜けた感じだった。親友があんなのになってるのを見たら当然だよ……僕だって正気を保ってられるのが奇跡に感じられるもん……

「ダイ2らうんどダ！じゅかいん！」

「マカセタワヨ！かいりゅー」

！

二人はパートナーのポケモンを繰り出してきた。ジユカインとカイリユー2匹の實力は折り紙つき……今のダメージを受けているストライクじゃまず勝てない……なら！

「ありがとうストライク！後は休んで。頼むよ！リザードン！」

『リザア！』

ストライクをボールに戻して直ぐに僕はリザードンを出した。リザードンかユンゲラーじゃないと、あのパートナーコンビとまともにバトルするのは辛いものがある。リザードン、頼むよ……

「……………」

ランは無言のままボールを取り出してフシギソウを戻した。そしてそのままピカチュウを出す。ラン……本当に大丈夫かな……

「イクゼ！リーふぶれーどダ！」

「どらごんくろー！」

2匹のポケモンがリザードンに迫ってくる。まずはリザードンから倒すつもり？  
そうはいかない！

「リザードン！思いっきり吠えるんだ！」

『リザアアアアア！』

リザードンがほつこうを上げると2匹はそれに驚き動きを止めた。  
今だ！

「リザードン、炎の渦！」

「リザアア！」

リザードンの放った炎の渦は2匹のポケモンを同時に捕えた。2匹は同じ渦に捕まって窮屈そうにしている。

「カズマ！カシス！僕だよ！分かるよね？ユースケだよ！」

僕は力強く訴えかけるように叫ぶ。なんで二人がロケット団なんかやっているのか僕には分からない。とにかく、呼びかけてみる！

「ゆーすけ……オマエノコトハシツテイルゾ……」

……

「きみハ、ワタシタチノテキツテコトヲネ！」

！？

そ、そんな……

「カシス……それは……それはないよ！あなた達はあたしやユースケ、ケンイチくん共友達でしょ！思い出してよ！一緒に遊んだり戦った事、ライバルとして戦ったよね！なのに……なのに！なんで！」

ランのとても悲痛な叫び声が上がった……確かに僕もランと同じ事を考えてる。だからこそランの辛い気持ちがよく分かる。

「ワタシタチハきみタチノコトナンテ……ウウ……」

「ゆーすけ？らん？フタリハタオスベキテキ？トモダチ？ウウ……」

!?

二人共頭を抱え始めた。なんだろう……もしかして、操られているのか？

なら、もしかしてもつと声を掛ければ！

「カズマ、カシス！思い出すんだ！ポケモンリーグの時、一緒に写真撮ったよね！？お互いにまたバトルしようって誓ったよね！？」

僕は力強く叫んだ。元のカズマ達に戻れ！

「ううう……オ、オレンジ……イチドタイキヤクスルゾ……」

「ウウ……シカタナイワネ……」

二人は苦しみながら声を出した。

「カシス！カズマくん！」

ランが力強く二人に声を掛ける。しかしその言葉は届いていないみたいで二人は指示を出そうとしている。力付くにも止めるしかないの！？

ジユカインとカイリユーに力が溜まり始める。それに警戒してリザードンとピカチュウもパワーを溜め始めた。カズマ達が口を開く、来る！

「りーふさいくるん！」

「スイセイゲン！」

二人は同時に叫んだ。それに呼応するように2匹は特大のエネルギー波を放ってくる。これを止めるには……

「……ピカチュウ、ライティングシャドー！」

『ピツカ!』

ランが迷いを抱えた表情でそう指示をすると、ピカチュウは5匹に増えた。

「直流電流の雷！」

『ピイイイカアアアチュウウウウ』

5匹のピカチュウから超極太の電撃が放たれる。しかし、それは二つの技のスピードを遅くするだけで相殺にはいたらない。僕が出すべき指示は……

「……」

分かってるのに声が出ない。

「ユースケ！」

ランの叫び声が聞こえる。やるしか……ない!

「ブラストバーン！」

僕はそう力強く叫んだ。それに呼応するようにリザードンはブラストバーンを放った。4つのエネルギーが激突してもの凄い爆発が発



生じた。それに僕は吹き飛ばされそうになるも、ランを守るように僕はランを大い隠すようにおうだちになった。

『リザア！？』

『チャア！？』

ピカチュウが吹っ飛ばされ、リザードンは素早く反応して、飛んでそれをキャッチする。爆風が止む。カズマ達は……爆風によって発生した砂煙が晴れた……！

「いない！？」

カズマ達の姿はもうそこには無かった。逃げられたみたいだね……

「カシス、カズマくん……」

ランが本当に辛そうな口調で言った。二人に本当に何があったんだろっ……ん？

僕はさっきまでカズマがいた場所に何か落ちている……僕はそこまで歩いていき、それを拾う。これって……ポケギアじゃないか……ん？

メッセージが来てる……見ていいかな？

僕はカズマに心の中で謝りながらもメッセージを見る。それには『怒りの湖まで帰還せよ』って書いてあった。なんの事だろう……

「ユースケ、アサギジムに行こうよ。アキトくんが心配だよ」

そうランが言った。確かにそうだね。

「うん、分かったよ」

僕はカズマのポケギアをポケットにしまってからゆっくりと歩き出した。

「それでは、包帯とかを取ってくるので暫くお願いします」

ミカンはそう言ってアキトを寝かせてある部屋から出ていった。現在はアサギジムにあるとある一室、僕とランはアキトの様子を見ている。突然目を覚ました時に一人にしておくのはちよつと問題だらね。

「ねえ……ユースケ……」

ランが重くるしい様子で口を開いた。当然、カズマ達の事だよ……

「カシス達、なんで……」

ランの重くるしいセリフ……僕にもそんな事分からないよ。

「分からない……でも分かるのは……僕は……怖いんだ……怖かつ

「ただ……」

今頃になって本音をランに語る。

「最後……ブラストバーンを放つのが遅れたのは……怖かったからなんだ……本当に怖かったんだ。二人が本気で僕達を狙っていたって思うと……」

「ユースケ……」

親友が僕達を狙ってあの特技を本気で放ってきたんだ……そう思うと背筋が氷つくような感じがする……でも……

「でも……ここで立ち止まる訳に行かないよ。辛いけど……次は怒りの湖に行こう。カズマ達にもう一度会おう。絶対に助け出すんだ！」

「うん……」

僕の決意、絶対に諦めない！いくら辛くたって、絶対に取り戻すんだ！僕達の大切な親友を！僕は強く心に誓った。

「僕は……怖いんだ……」 (後書き)

次回予告

イツキ「何とかタンバにオレ達は到着した」

コノハ「到着早々何を迷惑かけてんのよ！」

イツキ「すいません……オレ達が出会った人とは、次回！ポケット  
モンスター ACE ｾCOND SEASON ｾ 奇妙な出会い  
次回もポケモン、ゲットだぜ！」

アリゲイツ『アリヤ、アリヤ』

イツキ「お前は人をたかかってんだよ！」

奇妙な出会い（前書き）

イツキ「久々にオレの出番だ」

コノハ「そうね。誰かさんのせいで久々の更新だもんね」

ごめんなさい……

イツキ「とにかくいくぜ！」

どうぞ！

## 奇妙な出会い

う〜ん……オレは船のデッキに出て思いっきり体を伸ばした。アサギから出発して5時間、ようやくタンバに到着しようとしている。その証拠にタンバの港が直視出来る場所まで近づいていた。ふう〜やっぱり船旅は疲れるぜ……体はずっとじっとしたままだしさ、絶対に辛いものがあるぜ……

「それはあんたが落ち着きが無さすぎるからでしょ」

いつの間にかオレの隣にいたコノハが、人を馬鹿にしたような口調で言った。ムカつくなあ……てかよ……お前は心を読めるのかよ！ エスパーか！

「誰がエスパーよ！あんたはすぐに口に出るだけなのよ！」

あ……なるほど……つーかそれって前にユウイチにも言われたよう  
な……ま、いつか……

「よくないわよー！」

ん？

今のは意識して言わないようにしてたから絶対に聞こえてるハズがないが……って事は……

「聞こえてんじゃね〜かよ！どんなトリックを使ったんだよ！」

「乙女のヒミツよー！」

と返してくるコノハ。なにがよ……

「何が乙女だ！乙女なら乙女らしくもっとおしとやかな口調でしゃべれっての！」

「わたしに何を求めてんのよ！わたしはサクラとかランさんみたいに出来ないわよ！これがわたしよ！」

「だー！だからお前は男女って言うんだよ！」

「なんですって〜！女の子の踵落として死にかけるなんて男らしくないのよ！アンタは！ヒョロヒョロ男！」

「だー！普通は暴力するのがおかしいんだよ！この凶悪女！」

「なんですってー！」

「なにおー！」

ケンカは終わる様子を見せない。コノハがルカリオが「情けない」って言ってるような気がした。うん……本当に情けねえなあ……そう思いながらもケンカをやめれないオレ達であった……ハア……

「よっしゃあ！一番乗りだあ！」

とオレは元気よく梯子から降りて船から降りた。あまりにも退屈な時間とおさらば出来ると思うと幸せでたまらないぜ！

オレは振り向きコノハの方を見つつも一歩ずつ後ろに下がっていく。

「コノハ！早く来いっ……のわ！」

前方不注意だったため、誰かとぶつかってしまい言葉が途切れ、変わりに変な声を出してしまった。オレは前を向いて誰がいるのか確認した。そこには綺麗な着物をきた女性が立っている。この人って

……

「も〜イッキ！何やってんのよ！すいません」

コノハが素早く階段から降りてきてその女性に言った。全く、お前はオレの母親かよ！

「大丈夫どすえ」

明らかにエンジュ鈍りだ。この人、やっぱり……

「あなたは、まいごさんですか？」

オレはそう尋ねる。まず間違いなさそうだけだな。するとその人は頷いた。やっぱりか

「修行どすか？」



「は、はい……」

まいこさんの言葉にオレとコノハは戸惑いながらも頷く

「そつでやすか……頑張っておくれやす」

「は、はあ……ありがとうございます」

オレは戸惑いながらも礼を言った。そのまままいこさんは船に乗り込んでいく。

「掴みところのよく分からない人だったな」

「そつね」

オレがそう言つとコノハは同意するように頷いた。

タンバジム

「頼もー！」

オレは力強くそう叫びながらもジムの扉を開いた。え？コノハ？本

人曰く船酔いしたらしくてな、今はPCの自室で休んでいる。船を降りて暫くしたら調子が悪くなったらしい。まあ、アイツにも弱点があるってこつたな。目の前に広がるのは格闘技の道場のような空間、中央にはバトルフィールドがある。タンバタウンのジムリーダーは格闘タイプの使い手と聞いている。実力はかなりのものらしく、生半可な気合いでは相手にもならないらしい。へん！気合いと根性はオレ達の得意分野！真っ向から相手になってやるぜ！

「来たか。坊主、名前を教える！」

中年のオッサンが出てきて言った。強そうなおっさんだな……岩を持ち上げて投げそうだな……にしても、坊主って……ガキ扱いかよ

……

「オレの名前はイツキです。ジム戦お願いします！」

オレは威勢よく言う。見た目に威圧されてるようじゃ話になんねえ！気合いでは負けっか！

「中々威勢がいいなあ、分かった、ではやろうか！」

「はい！」

そう頷いてオレはバトルフィールドに入る。

「ルールは3対3のシングルバトルだ！いいな！」

気合いが籠った声で尋ねてくる。シジマさん、本気で熱い人だな。燃えてきたぜ！

「もちろんです！」

オレは力強く頷く。

「おおおおー！やあってやるぜ！」

## 奇妙な出会い（後書き）

### 次回予告

イッキ「ジムバッジを賭けたシジマさんとのバトル、畜生……やっぱり手強い……」

コノハ「全く……アンタの力はそんなもんじゃないでしょ！気合を見せなさい！」

イッキ「言われなくても！うおおお！やってやるぜ！次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『熱きバトル（始動編）』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ピジョン『ピジヨオ』

熱きバトル（始動編）（前書き）

更新が遅くなりつつあります……なんか忙しいです……テストさえ  
なければ……

## 熱きバトル（始動編）

「ピジョン！君に決めた！」

『ピジョー！』

オレがボールをバトルフィールドに向かって投げるとピジョンが力強く翼を奮いながら現れた。さあ……行くぜ！

「セオリー通りか……ならば！頼むぞオコリザル！」

『ブヒー！』

シジマさんがボールをバトルフィールドの中央に向かって投げるとオコリザルが出現した。ブタザルポケモン、オコリザルのタイプは格闘、相性的にはオレが有利だ。だが、ポケモンバトルは何が分かるか分からない。だから一瞬の気の緩みで敗北に直結する。油断は出来ないな。

「トウヤよ！審判を頼むぞ！」

「オス！試合開始い！」

シジマさんの指示でトウヤと呼ばれた道着を来た人が気合いの込めて試合開始のコールをかけた。うん……流石にここまで熱苦しいとなあ……ま、気にしないでおくか！  
さあ、行くぜ！

「ピジョン、電光石火！」

『ピジョー!』

ピジョンは電光石火を使い、目にも止まらぬスピードでオコリザルに突撃していく先ずは一発喰いやがれ!

「空手チョップで叩き落としてやれ!」

『ブヒー!』

突撃していくピジョンに対しオコリザルは空手チョップを決めようと構えた。ならば!

「ピジョン、風起こしを使え!オコリザルを拡乱しろ!」

『ピジョー!』

ピジョンは急停止してそこから強風を発生させる。空手チョップで迎えうとうと構えていたオコリザルはバランスを崩した。このスキを狙わせて貰うぜ!

「電光石火から翼で打つんだ!」

『ピジョー!』

ピジョンが勇猛な雄叫びをあげて突撃していく。食らえ!

「甘いわ!岩砕きだ!」

『ブヒー!』

オコリザルは足を使い地面を砕いた。その時に砕けた地面の破片はピジョンに向かってきた。さっきとは違って直撃してしまう。くっ……石に当たるのはちよつと不味いな……相性的に……ちよつと……

「まだまだだ！ストーンエッジ！」

『ブヒヤアアア！』

オコリザルはどこからか発生させた鋭い岩をピジョンに向けて飛ばしてきた。不味い！

「ピジョン、吹き飛ばしだ！」

『ピジヨ……ピジヨオオ！』

ピジョンはギリギリでそれに反応し、ストーンエッジを強風で吹き飛ばした。あぶねえあぶねえ……んじゃ、決めるぜ！

「竜巻、更に影分身からブレイブバードだ！」

『ピジヨオオ！』

ピジョンが翼を奮い、竜巻を発生させるとオコリザルはそれに対応しようとするが、巻き込まれてしまい、ひるんでしまう。これ事態は対した攻撃ではない。でもこれでコイツに対応するのが難しくなつたぜ！

これで終わりだあ！

『ピジヨオオオ！』



『ブ……ブヒヤア!?!』

「オコリザル、穴を……」

「遅え!」

『ピジヨオ!』

『ブヒヤアアア!?!』

驚きふためくオコリザルに、シジマさんが指示を出そうとするが既に時遅し、ピジヨンのブレイブバードが直撃し、オコリザルは悲痛な叫びを上げた。効果は抜群!それに堪らず、オコリザルは目を回している。よし!勝ったぞ!

「ぬうう……オコリザル……」

「オコリザル、戦闘不能!ピジヨンの勝ち!」

審判のコールが掛った。よし!まずは1勝!

「やったぜピジョン!」

『ピジヨオ!』

オレの言葉にピジョンが嬉しそうに鳴いた。

「中々やるな。では、コイツならどうだ!?!カイリキー!」

『リキー！』

カイリキーがポーズをとりながらも登場した。すげえ！自分を滅茶苦茶アピールしてる！

ある意味コンテストの方が似合ってるんじゃないか？

「試合開始い！」

またまた熱苦しい試合開始の合図が入った。ま、気にしたらダメだな。先ずはいつも通りに先に行かせてもらっぜ！

「翼で打つんだ！」

『ピジョオオ』

ピジョンは翼を広げてカイリキーに突撃していく。さあ、カイリキーはどうくる？

「ビルドアップ！」

『リキー』

再びポーズを取りながらビルドアップを行う。ダメだ！ポーズのせいで余計に強そうに見える。

『ピジョオオ！』

ピジョンの翼で打つ攻撃は見事に炸裂した。しかしカイリキーは余裕の表情、ちっ……相性的には最高の一撃をぶつけてやったのあまり効いてねえ……流石にやるな……

「今度はこちらの番だ！カイリキー！空手チョップだ！」

カイリキーは翼で打つをぶつけたばかりで近くにいたピジョンを空手チョップで狙う。そんなの甘過ぎるぜ！

「ピジョン、上昇しろ！」

『ピジョオ！』

ピジョンは鳴き声をあげつつも余裕の表情で上昇する。そんな攻撃、飛行出来るピジョンには……なっ！

「甘いわあー！」

『リキー！』

『ピジョッ！？』

くっ……ピジョンをカイリキーがものすごくスピードでジャンプして追撃を行い、空手チョップを決めてきた。ピジョンは落下していき地面に落ちそうになるが、ギリギリで体制を立て直し地面に激突せずにすんだ。な……なんでカイリキーがあんなフットワークを……

「特性ノーガード、知らない訳ではあるまい」

ノーガードだって？

「ノーガードはお互いに回避不能になる特性、今ではお前のピジョンは自慢のスピードでカイリキーの攻撃を避ける事は出来ん！」

ちっ……厄介にもほどがあるぜ……なんとかしねえと……

「今度はこっちから行くぞ！カイリキー、爆裂パンチ！」

くっ！？コイツは貰えない！普段は命中が悪いこの技も今は破壊力がある驚異でしかない。なんとかしないと……そうだ！

「オウム返しだ！」

『ピジヨオ！』

オウム返しは同じ技をそのまま返す技だ。ピジョンの足が輝きだしカイリキーに突撃していく。こっちも爆裂パンチだ！  
行っけえええ！

『リキー！』

『ピジヨツ！？』

カイリキーの拳とピジョンの足が激突し、お互いに相殺しあった。しかし、パワーの分劣るピジョンが大幅に後退する。不味い……このままじゃ防戦一方だ！  
スピードを活かして攻めようにも特性ノーガードにやられちまう……しかも翼で打つぐらいじゃあんまりダメージは無いみたいだし……こうなったら最高速度のブレイブバードを決めるしかない！  
しかしそんな隙をシジマさんが見せてくれるとは思えない。

「来ないのか？ならこっちから行くぞ！カイリキー、クロスチヨツプ！」

カイリキーがもの凄い勢いで突撃してきた。そうだ！  
一つ思いついた手段、本当イチかバチかだが……やってみるしかない！

「ピジョン、フェザーダンス、更にオウム返しだ！」

『ピジョオオ！』

「なんだと！」

フェザーダンス、相手の攻撃力を大幅に低下させる技だ。それにより威力が低下したクロスチョップを構わずにカイリキーは見舞って来た。それに対してピジョンも翼をクロスさせるように動かし、クロスチョップを行う。今回はパワー負けはしていない！  
それどころか後退させてやったぜ！  
さあ、次で決めてやる！

「ピジョン、吹き飛ばしだ！」

『ピジョオオ！』

ピジョンは翼を奮い強風を発生させた。それによりカイリキーは軽々吹っ飛ばされる。よし！距離が開いた！今だ！

「ピジョン、電光石火からブレイブバード！コイツで決まりだ！」

『ピジョオオオオ！』

ピジョンは電光石火で加速しつつも、ブレイブバードを使い、猛ス

ピードで突撃していく。その姿はまるで赤い弾丸みたいだ。それに対するカイリキーはようやく体を起こして頭をかいている。呑気な奴め！

コイツで決まりだ！

『ピジヨオオオ！』

『リ、リキイイ！？』

「ぬっっっっ！」

ピジョンのブレイブバードは見事に炸裂した。カイリキーは見事に伸びてしまっている。よし！勝った！

「カイリキー、戦闘不能！ピジョンの勝ち！」

審判のコールが掛った。よっしゃあ！やったぜ！

「やってくれるな。だがジムリーダーとして簡単には負けられん！ニヨロボン！」

そうシジマさんが叫びながらニヨロボンを繰り出してきた。よし！このまま勢いに乗って行くぜ！

「頼むぜ、ピジョン！」

『ピジヨォー！』

ピジョンの鳴き声がものすごく頼もしく聞こえた。

熱きバトル（始動編）（後書き）

次回予告

イツキ「最後に登場したのはニョロボン、なんだよ……今までは波気が違い過ぎるぞ！」

コノハ「一応応援してるから勝ちなさいよ！」

イツキ「言われなくとも！次回、ポケットモンスターACEとSEASONの熱きバトル（決着編）」次回もポケモン、ゲットだぜ！」

アリゲイツ「アツリヤア！」

熱きバトル（決着編）（前書き）

シジマを圧倒するイッキとピジョン、対するシジマの最後の1匹は  
……



## 熱きバトル（決着編）

ニヨロボンとピジョンは対峙していた。水、格闘タイプであるニヨロボンに対して飛行タイプを持つピジョン、相性ではこちらが有利だからって決してこちらが有利とは言えない。ニヨロボンは構えをとらずに自然体のまま。はっきり言って逆にこんなのが一番怖い。達人が見せる余裕というかなんというか……とにかくプレッシャーを感じる。

「いつでも来い」

っ！

余計にオレに対するプレッシャーが強くなる。しょうがない……少し不気味であるが……一気に行くぞ！

「先手必勝だ！電光石火！」

『ピジョオー！』

オレの指示を受けてピジョンは電光石火でニヨロボンに向かっていく。それに対してニヨロボンは黙って両手を天に掲げる。何をすつつもりだ！

「雨乞いだ！」

シジマさんがそう指示を出すとニヨロボンの両手からエネルギーが放たれ、それが空中で爆発し雨が振り始めた。その雨を受けてピジョンのスピードが急激に遅くなる。しまった……雨で翼が濡れて……

「そこだ、心の目を使ってピジョンを捕えろ！」

『ニヨロ』

落ち着いた口調でニヨロボンが頷いた。コイツは不味いぞ……

「ピジョン、上昇して距離を取るんだ！」

「無駄だ！ニヨロボン！」

『ニヨロ！』

『ピジョッ！？』

ピジョンが動くよりも早くニヨロボンがピジョンにギリギリまで接近した。やられる！？

「気合パンチ！」

『ニヨロ！』

『ピ……ジョ……』

「ピジョンー！」

気合パンチを受けてピジョンは地面に向かって落下していく。くっ……完全に目を回してる……完敗だな……

「ピジョン、戦闘不能お！ニヨロボンの勝ちい！」

熱くコールを掛ける審判。なんか負けのコールがかなり悔しいな。

「ピジョン、よくがんばったな。ゆっくり休んでくれ」

オレはそういつつピジョンをボールに戻す。本当によく頑張ってくれたぜ……

「今度はコイツだ！アリゲイツ、君に決めた！」

『アリアア！』

オレはアリゲイツのボールを素早くベルトから取り出し、アリゲイツを繰り出した。元氣よく飛び出す姿はいつもにまして頼もしく見える。よし！頼むぜ相棒！

「試合開始い！」

審判のコールがかかる。さあ、行くぜ！

「アリゲイツ、先手必勝だ！切り裂く攻撃！」

『アリアアア！』

真正面からアリゲイツは自慢の爪を起てて突撃していく。行けっ！

「舐めるな！滝登りで迎えうて！」

『ニヨロ！』

『ア、アリア……』

切り裂く寸前に滝を登るとき勢いで懐に入られ吹っ飛ばされた。くっ……相手の方が一枚上手か！

「まだまだ！メガトンパンチ！」

シジマさんはそう指示を出した。隙は与えてくれないみたいだな！

「アリゲイツ、足場を崩せ！水鉄砲！」

『アーリヤアア！』

アリゲイツはニヨロボンの足下に水鉄砲を放つ。それにより、足場がしっかり崩れて転倒した。よし！上手くいった！次行くぜ！

「ハイドロポンプだ！」

『アリヤア！』

アリゲイツは勢いよくハイドロポンプを放ち、それは見事に直撃し、ニヨロボンを吹っ飛ばした。だが……

「中々やるな……」

『ニヨロ……』

やっぱりこれぐらいじゃ倒せないか……相性的にも厳しいよな……なら必殺の一撃を叩き込むしかねえ！  
タイミングをミスったらそこでアウトだ……慎重にやるぞ……

「行くぞニヨロボン！滝登り！」

『ニヨロー！』

ニヨロボンが滝登りを使い突撃してくる。今だ！

「龍の舞でかわせ！」

『アリアア！』

アリゲイツは力強く舞、その攻撃を軽やかに回避する。よし、今の背後を取った！  
行くぜ！

「噛みつく攻撃だ！」

『アリアア！』

『ニヨロー！ニヨロー！』

アリゲイツはニヨロボンの腕に噛みついた。ニヨロボンは痛そうに噛みつかれた腕を振り回しているそれ程度じゃアリゲイツは離れないぜ！

「くっ……味なマネを……だがこちらには好都合だ！ニヨロボン、爆裂パンチを使え！」

『ニヨロー！』

な、何い！

「まじい！アリゲイツ、一旦そいつから離れる！」

オレは焦って離れるように指示をする。それに従いアリゲイツは口を離した。しかし……

『ニヨロー！』

『アリアアア！？』

「アリゲイツ！」

くっ……回避が間に合わずアリゲイツは爆裂パンチの直撃を受けてしまう。

『ア、アリアア？』

ア、アリゲイツ……アリゲイツは何とか耐えて立っているんだけど、フラフラになっている。くっ……焦点が定まっていない……コイツは混乱状態……かなりやばいぞ！

「貰ったぞ！気合パンチで止めだ！」

『ニヨロー！』

ニヨロボンが拳を振り上げる。まだまだ……まだ勝負がついた訳じゃない！

こうなったら奥の手だ！

「アリゲイツ、早く起きろ！飯だ！」

『アリアア!?!』

オレの大声でアリゲイツは正気に戻った。オレのアリゲイツは食い意地だけは負けないぜ!  
そう言ってる間にも拳が……危ない!

『ニヨ、ニヨロー!?!』

「信じられん!」

シジマさんが言ってる。オレも信じられねえ……なんとアリゲイツは両手で、ニヨロボンの拳を受け止めたのだ。食い意地ってすげえ!

『アアアアアアア!』

そのままアリゲイツは真つ赤なオーラを纏い出した。これは馬鹿力か!

『ニヨロー!?!』

「ニヨ、ニヨロボン!」

馬鹿力が発動したアリゲイツはニヨロボンをフルパワーで吹っ飛ばした。す、すげえよお前……

『アリアア!』

ん?

アリゲイツは走ってオレの元に駆け寄ってきた。そして何かをねだ

るよつに両手を出している。あ……そういう事か！  
オレは直ぐ様それを理解して口を開く。

「ゴメンなアリゲイツ、さっきのは嘘だったんだ」

『アリヤ………』

ガンと音がしたような気がした。落ち込んで………本当にすまない………

「でも、よく頑張ってくれたな。お前じゃなくちゃ勝てなかったぜ」

そう言うが無反応、本当にゴメン………

「見事だったぞ、坊主」

シジマさんがそう言いながら歩みよってくる。やっぱり威厳あるよな………

「坊主じゃなくてイッキですよ」

オレはそう返すがシジマさんは気にせず続けた。

「気にするな。ほら、これがワシを倒した証だ。受け取れ」

シジマさんはそう言いつつもオレにバッジを渡してくれた。よっしゃ！これでバッジ6目ゲットだ！

『アリヤ………』



アリゲイツが急に口を開くどうしたんだ？

『アーリヤア！！』

涙目になりながらもオレに襲いかかってくる。ま、まさか食べ物  
恨みって奴か？

食い物の恨みは恐ろしいって言う……まさにこの事だ……のわっ！  
コイツ、ハイドロポンプまで撃ちやがった！

「ハハハ、仲がいいのはいいものだな！」

シジマさんが笑いながら言う。笑い事じゃねえよ……って危ね！  
今度は馬鹿力か！

……オレは誓う。アリゲイツを2度と食べ物関係で怒らせないって

……

熱きバトル（決着編）（後書き）

次回予告

イツキ「シジマさんを撃破したオレ達はアサギに戻る」

コノハ「そこで再会したのは！？次回、ポケットモンスターACE  
＼SECOND SEASON＼『再会』次回もポケモンゲットよ  
」！

ルカリオ「短いよ今回……」

## 再会（前書き）

物語は再びアサギでそこでイツキ達を待ち受けるものは……

今回もプラネットさんとのコラボ、フラグを立てるためみたいなものです

## 再会

「ミカン、いる〜?」

コノハが元気よくアサギジムの扉を開いて言った。タンバタウンを後にして、オレ達はアサギシティに来ている。次のジムがある町、チヨウジタウンに向かうために戻ってきたのだ。で、今日はゆっくりする。って事で今日はアサギジムを訪ねている。コノハとミカン、ジム戦の後に仲良くなり、こうやってアサギに来た時は遊びに寄るほどの仲だ。性格が凶悪とおしとやか、サクラの時も思ったんだけど、なんで正反対な性格の二人が仲良くなるんだ? やっぱり磁石みたいに引き付け合うとか? うん、これは永遠の謎だな

「あ、コノハちゃんにイツキくん、いらっしやい」

ミカンが奥から出てきていった。相変わらず可愛いよな……

「アレ、これから出かけるの?」

コノハがミカンに尋ねた。確かにミカンの恰好はいつものワンピースと違い、ちよつとした正装をしている。

「うん、ちよつと警察署まで迎えにね」

「警察署?」

ミカンの言葉に首を傾げる。一体何で警察署なんか……ミカンが変な事やるなんて考えにくいしな……

「はい。訳あって家に居候している人を迎えに行くんですよ」

ふうん、なるほどな……

「わたしも着いていっていい？なんだかんだ言って暇なんだよね」

とコノハが言った。迷惑じゃねえか？

それって……

「はい、いいですよ」

とミカン、いいのかよ……

「そうと決まったら早速出発よ！」

と勇むコノハ、やっぱりツッコミどころ満載だぜ！

「イツキさん、ボーとしてないで行きますよ」

ミカンがそう言うってくる。オレはそれに「ああ」と頷いた。でもなあ……やっぱり迷惑だよなあ……そう考えてても拒否は出来そうにないので口にはしない。ああ、なんか辛いわ

「お、ミカン……とイツキとコノハ……色々突っ込みを入れたいんだが……」

迎えに行った人物、アキトの第1声はこれであった。アキトが警察に行った理由。ミカンの話では、2日程前にアサギシティでロケツト団が暴れたそうだが、アキトが調子に乗ってケンカを売ったところまではよかったが、返り伐ちにあつてしまい怪我をしたらしい。偶々、ユースケさん達が近くにいて逃がしたお陰か、幸い大した事は無かつたらしいが……で、怪我也代々治ったので、事情聴取に呼ばれた訳だ。全く運が無い奴だなあ

「悪かつたな。で、怪我は大丈夫なのか？」

一応そんな質問をする。社交辞令みたいなもんだ。

「ああ、すごぶる快調だぜ？」

そいつはよかったぜ。

「事情聴取、お疲れ様です」

「ああ、大した事は無いさ。それじゃそろそろ帰ろうか？警察署に

ずっといるのも気分悪いし……」

ミカンの言葉にアキトがそう返した。だよな……警察署の雰囲気ってなんか重くて苦手なんだよな……

「そうね！久しぶりに会ったんだし、さっさと帰ってみんなで盛り上がるう！」

そう言うコノハにミカンが「いいですね」と同意する。ちよつと待てコノハ！

お前、ミカンの家をさりげなく自分の家発言したよな！

「決まり！さっさと行くわよ！」

とコノハは調子に乗りながらも言っつて、警察署から飛び出そうと走りだす。待てよ！

お前はどんだけ偉いんだよ！

「え？わたしはスツゴい偉いわよ！」

だから読心術が使えるのかお前わあああ！

そうやってなんだかんだやってるうちに道路に出ている。そして相変わらずの会話を笑顔でするオレにコノハにアキト、そしてミカンの4人、やっぱりこういうのっていいよな

「ところでさ、アキトはこれからどうするつもり？」

コノハが唐突にアキトに尋ねた。あゝ、確かにこれからどうするつもりなんだ？

少し興味があるな

「俺か？俺はミカンにお世話になったから今日のどんちゃん騒ぎが  
終わってから掃除して、それからフスベシティに向かう予定だ」

偉いなアキトの奴……コノハとかオレとは段違いだ……にしてもフ  
スベか……

「修行か？」

「ああ、俺もまだまだだつて事が分かったしな。あそこで1からガバ  
イトと鍛え直そうと考えてる」

真面目なんだな……

「そつか、ならわたし達と途中まで一緒にいかない？ちょっとわた  
しもイツキだけってのは疲れて来ちゃったからさ」

な！

酷過ぎじゃね？

それは！

「そつだな。イツキを一人で面倒をみるのは大変そうだからな。し  
ばらくは付き合つてやるさ」

ひ、酷え！

オレってそんな手のかかる子だっけ！？

これは精神的攻撃にもほどがあるう！

「あの………すみません」



そう背後から声をかけられた。誰だ？

オレが振り返るとどこか高級感がただよる大人の女の人<sup>が</sup>いた。この人は……

「えつと……あなたは？」

さっきまでオレをからかい倒そうとしていたコノハが真面目モードになって尋ねる。か、変わり身早いなあ……

「私は<sup>わたくし</sup>ベネラ。よろしくね、坊や達」

「は、はあ」

そう適当に頷くオレ、最近こんなのはっかだよな……

「で、どうしたんですか？」

とアキト

「アサギの灯台に向かってたんですが、少し道に迷ってしまいましたの。場所、教えてくださらない？」

「はい、それなら私が案内します。アキトさん達は先に私の家に戻っててください」

「ああ、分かったよ」

ミカンはこのベネラさんに向かつて返し、アキトはミカンのセリフに頷いた。

「ありがと、それじゃまたね。坊や達」

「！」

！

今……なんか嫌な感じがした……突き刺さるようなプレッシャー……  
……そんな感じだ……それはコノハも同じで少し震えている。

「ついて来てください」

そうミカンは言い、灯台に向かって歩いていく。ベネラさんもそれに着いていく。

「どうしたんだ、イツキ、コノハ？」

アキトは、何も感じ無かったのか？

「イ、イヤ、別になんでもない」

そうオレは誤魔化すように返す。でも本当に……

「何者だったんだ……」

そうオレは口の中で言った。

再会（後書き）

イツキ「ちよっ！次回予告は！？」

若干未定だからさ……

イツキ「なんじゃそりゃ……」

「ユースケ……ユースケ!!」  
(前書き)

今回はコラボ、ユースケ編です。

「ユースケ……ユースケ!!」

……ここが怒りの湖か……バレットが……いや、カズマが落としていったポケギアのデータを元に僕とランは怒りの湖に来ていた。カズマのポケギアに残されていたデータ、『怒りの湖に帰還せよ』とメッセージが残されていた。その言葉は何を意味しているかは知らない、だけど……怒りの湖に何かがある事は間違い無い！帰還つて事はさ、やっぱりここに基地があるのかな？

でもそんなもの一切ないよなあ……あつたらどうするって？それは……もちろん、慎重に乗り込んででも二人を連れ戻してみせるよ。にしても何も無いなあ……綺麗な湖が広がっているだけだよにしても本当に綺麗だなあ

「わあ……ユースケ、凄い綺麗だよ!」

そう元気そうに言うラン、やっぱりランもあの事件から少し塞ぎ込んでいたけど、少しは元気になったみたいだね。本当によかったよ。さて、何をしようかな？

基地が見つからない以上は何も無いって事だからさ。少しは気分転換が出来るんじゃないかな？

僕はその場に座り込み、転がる。あゝそれにしてもいい天気だなあ。たまにはあつたかい太陽の下で昼寝もいいなあ……

「気持ちいいね」

僕の隣に座りながらもランは言った。僕はそれに「うん」と頷く。

「カシス達に何があつたのかな……」

と、ランが言う。この言葉はもう何回も聞いているセリフだ。でもその言葉には答えれない。僕にもさっぱりわかんない事だからさ……  
……ただ……分かるのは連絡船で何かがあったって事だけだ。

「ユースケ……また、二人と会ったらどうするの？」

「え？」

僕はランのその質問に体を起こして首を傾げた。どついう事だろう？

「ユースケは……カズマくん達と戦えるの？あたしは……嫌だよ……  
……あんな二人と戦うなんてあたしには出来ないよ」

……

「あの時は必死だったけど……また会ったら戦う事なんて出来るか  
分かんないよ……」

弱気のセリフをランが吐いた。その目はすでに濡れている。確かに  
さ……自分の親友があんなのになったら辛いよね……でもさ……

「ラン……君は無理でも、僕は戦うよ」

「え？」

僕のセリフにランが疑問の声を口に出す。僕はそれに続ける。

「二人共僕の親友だからね……辛くてもさ、殴ってでも僕は二人を  
連れ戻すよ」

と僕は強気に言う。それが……大事な親友に僕がしてあげられることだから……

「ユースケ……うん……あたしも覚悟を決めるよ。ユースケだけに辛い思いをさせたくないから……」

ラン……

「ありがとう」

僕はランにそう言うとランは小さく微笑んだ。やっぱり……僕ってランの笑顔に弱いんだよねえ……

『GRAAAA!』

なっ！不意に湖から現れたギャラドス。ここはコイキングが主に生息してるって聞いたけど……なんでギャラドスが！

とにかく、危険だ！

やらなくちゃやられる!?

僕は反射的にランの前に移動し、ボールを取り出そうとする。その時！

『GRAAAA!?!』

不意に背後から放たれた電撃によってギャラドスは沈黙し、湖に沈んでいった。今は……僕は電撃が飛んできた方へ振り向いた。そこには男の子1人と女の子2人、そしてピカチュウがいた。彼はもしかして……

「大丈夫ですかユースケさん!」

「ランさん、大丈夫でしたよね？」

そんな言葉が同時に聞こえた。

「ゴールド！」

「ユウコちゃん！」

僕とランは同時に叫んだ。そうか……あの子、ユウコちゃんって言うんだ。ゴールド、僕とヨシノシティでバトルした新人トレーナーだ。彼の潜在能力の高さには凄い驚かされたよ

「お久しぶりです！そんな事より今、このあたりでギャラドスが大量発生してるんです！一旦、離れましょう！」

ゴールドがそう叫んだ。なんだって……それって……やっぱりロケット団が関係してるんじゃない……とにかく今は……

「分かったよ、行こうラン！」

「うん」

僕の言葉にランは頷いた。僕は立ち上がり、ランの手を掴んでゴールド達のところに向かう。その時！

『GRAAAAAA!!!』

沢山のギャラドスがぼつこつをあげつつも湖から姿をあらわした。



まさかさっきのギャラドスを倒して怒ったんじゃ……

「と、とにかく撃退しないと！ピカチュウ、頼んだわよ！！」

『ピッカ！！！！』

その言葉にさっきのピカチュウの使い手、アイドルトレーナーを目指す女の子、クリスにそっくりな彼女より少し小柄な女の子が力強く叫び、直ぐ側にいたピカチュウが力強く頷いた。

「メリープ、行ってくれ！」

『りー！！！！』

「ムウマ、お願い」

『ムウ！！！！』

ゴールドはメリープを、ユウコはムウマをそれぞれ繰り出した。僕達ものんびりしてられないね。僕は素早くベルトにセットしてあるボールに手を伸ばし、それを投げた。ランも同様に自分のボールを手を取った。

「頼むよユンゲラー！」

「行くよ、ピカチュウ！」

『たく！なんでこう厄介事に巻き込まれるんだよ！！』

『ピッカ！！！！』

ユンゲラーは文句を言いながら、ピカチュウは元気よく姿を表した。ユンゲラー、そんなのんびりとした事を言ってる場合じゃないよ！

「サイケ光線で攻撃して！」

「GRAAAAAA！」

「ちい！」

とにかく迎撃を開始する。あまりにも多さでまともな相手にしていられない。流石のユンゲラーも苦戦しているみたいで、まともなバトルになっていない。放った攻撃も数を活かして簡単に打ち消されてしまう。

「メリープ、電気ショック！」

「ピカチュウ、放電よ！」

「ピカチュウ、10万ボルト！」

ラン達の三匹の電気ポケモンの電撃で多少のギャラドスを沈黙させる。でも……数が減った気がしないな……凄い劣勢……かなり不味いかも……なっ！今度はギャラドス達が反撃しようと一緒にハイドロポンプを放ってきた。完全に見境無しじゃないか！

このままじゃみんな危ない！

僕はそう考えつつもギャラドスから距離を取る。でもこれじゃダメだ……この数だと避けるのも困難だし、正面からやりあうのも危険だよ……

「不味いわよ、このままじゃ!」

クリス似の女の子が叫んだ。確かにこのままじゃ本気で不味いね……  
…こうなったらやる事は一つしかないよ……

「みんな!逃げるよ!」

僕はみんなに向かって力強く叫んだ。悔しいけど……今の僕達じゃ  
どうしようもない!

ここはリヨウマさんに連絡して警察の人に任せよう

みんなはポケモン達をボールに戻す。そして背中を見せて走りだし  
た。その時!

「キャツ!」

ランが石にでもつまづいたのか転んでしまう。そこにギャラドスの  
ハイドロポンプが放たれた。ランは足を怪我したみたいで動けそう  
にない。くっ……させない!

「ラーン!」

僕は無意識の内にそう叫ぶとランの前に立っていたそしてハイドロ  
ポンプの直撃を受けてしまう。

「ガッ……」

空気が抜けるような感覚、僕は吹っ飛ばされて勢いよく地面に叩き  
つけられ、そのままの勢いで転がっていく。うっ……体中が痛い……  
…体が動かない……

『ユースケ!』

「ユースケ!? ユースケ!」

ユンゲラーの叫び声とランの叫び声が同時に聞こえた。僕はランの方を見る。

「ラン……逃げて……」

無理矢理声を振り絞って僕は言う。ランは首を横に振っているのが分かる。

「イヤ! ユースケを置いてけないよ!」

……言い出したら聞かないよね……うっ……意識が朦朧としてきた……もうちょっと頑張るんだ!

「ゴールド、ランをお願い……」

無理矢理声を捻り出すとゴールドは無言でそれに頷いてエーフィとメガニウムを出した。そしてエーフィ達から眩い光が放たれた。僕はその時気を失った。

ラン視点

あまりに強すぎる光にあたしの目はくらんだ。ユースケは!?

「ユースケ……!?!」

フラッシュの光が和らぎ、目の前がはつきりしてきた。え……なん  
で……そこにはユースケの姿が無い。なんで……ユースケがいない  
の……?

そんな時にもギャラドス達が襲ってくる。完全に力が抜けてしまっ  
て力が入らない。え?あたしの手がゴールドくんの手に乗まれる。  
そしてそのまま、メガニウムの背に乗せられた。

「メガニウム、急いで!」

ゴールドくんがエーフィをボールに戻し、メガニウムに飛び乗る。  
ごめんね……ごめんねユースケ……あたしのせいで……あたしのせ  
いで……!

「ユースケ……ユースケ!!」

あたしはそう叫ぶ。そう叫ぶあたしの目からは涙が溢れてきて止ま  
らなかった……

「ユースケ……ユースケ!!」 (後書き)

次回に続く

## イツキVSゴールド(前書き)

道端で偶然出会ったリョウマに連れられてチヨウジに到着したイツキ達は……

## イツキVSゴールド

チヨウジポケモンセンター

オレとコノハとアキトは、チヨウジへ向かう道中にあのマッドポリスマンと定評があるリヨウマさんに会った。リヨウマさんもチヨウジに向かっていているらしく、一緒に連れて行って貰う事になった。その時に乗せて貰った、色違いの黒いリザードンの乗り心地は最悪だった事を追記しておく。チヨウジのPCにつき、リヨウマさんもここに用事があるみたいで一緒に中に入った……っ！  
なんだよ……いるだけで辛くなるような重い空気は……

「……彼処からだね……この重い空気の出所は……」

コノハがその空気を読み取り言った。確かにそうみたいだな……ん？あの人は……4人の少年少女の中に見知った顔を見つけるあの人は……

「ラン先輩じゃんか……でもどうしたんだ？それにユースケ先輩も居ない……」

アキトがそう言う。本当にランさんがそこにいた。でも……この前会った時とは違う……目が……生き生きした優しい目をしてない……本当に辛くて絶望してる……そんな目だ……一体何があったんだ……それにユースケさんはどうしたんだ……そんな暗い様子にリヨウマさんは声を掛けた。流石にこの空気に慣れてるみたいだな……流石は刑事さんだな

「てめえら、元気出せ」



「リヨウマさん……………」

リヨウマさんの言葉に男の子が返した。って！ゴールド先輩にそっくりじゃねえかよ！

「さつき、通報があつて、ロケット団が関与してる事が分かった。ユースケらしき少年がロケット団に連れ去られたらしい」

なっ……………なんだって！

あ、あのユースケさんが！ロケット団に捕まったのかよ！

あまりにも驚きの出来事に声が出なかった。それはコノハもアキトも同様みたいで口をパクパクさせながら目を大きく見開いている。

「他には何かありませんか？」

「チヨウジのどっかに前線基地があるって事だ」

髪長い女の子の質問にリヨウマさんが答えた。前線基地、んなもんがあつたのかよ……………？

ランさんが急に立ち上がり、無言でポケモンセンターから走り去っていく。ランさん……………ユースケさんが捕まって凄いショックだったんだろうな……………あの明るくて優しいランさんが人言も喋らない事から凄い辛い事を察する事が出来た。そりゃ、辛いよな……………クリス先輩にそっくりな女の子がそれを追いかけていく。って！そっくりさんが多いって！どんなんだよ！

「ランさん……………」

ゴールド先輩似の男の子からそんな言葉が漏れた。

「でも、よくそんな情報を通報できましたね」

長い髪の女の子が聞く。確かに。一体通報したのはどのごいっ  
だよ。

「ああ。ところで、名前は？」

「ユウコです」

「俺はリヨウマだ。ヤマブキの警視庁の刑事してんだ」

リヨウマさんはユウコって名乗った女の子にそう返した。にしても  
あの子可愛いな。あのだこ不思議な瞳に興味を惹かれるぜ。ん？  
背後からジト目が……コノハか……まあ、気にしないでおう……

「ところであなた達は誰ですか？」

そうゴールド先輩にそっくりな奴がオレに尋ねてくる。本当にゴー  
ルド先輩にそっくりだなあ。ドツペルゲンガーじゃねえのか？

「オレはワカバタウンのイッキ！よろしくな」

「僕はゴールドっていいいます。よろしくお願いします」

な、名前まで一緒かよ……本当に他人か？

とオレは考えつつも右手を差し出す。それに対してゴールドはその  
手を握り返してきた。

「わたしはコノハ、よろしくー！」

「俺はアキトって言うんだ。よろしく頼むぜ！」

とオレの隣にいるコノハとアキトが順に自己紹介をする。

「リヨウマさん、それでその前線基地の場所は分かってるんですか？」

「ゴールド？」

ゴールドがリヨウマさんに尋ね、ユウコは疑問符の声を出す。ゴールド、何か焦ってる様子だ。自分のせいでユースケさんが捕まっちゃって思ってるのか……オレ自身ユースケさんが捕まっちゃたに信じられない。あの人が……捕まるなんて……だからこそ助けたい。オレの憧れであり目標だからな。絶対に助けるんだ！

「気になるみてえだな。一応そっちの方も少し胡散臭いが持つてるぜ」

よし……

「教えてください！それからオレ達に行かせてください！」

「ちよつとイツキ！？」

コノハが驚きの声を出した。コノハには悪いが……ここは絶対に引けない！

ユースケさんを助けるんだ！

「僕からもお願いします！」

オレに続けてゴールドもそう力強く言う。コイツも……ユースケさんを助けたいんだな……

「へっ！……そういう事は分かっていたぜ……だがな……オレだって仮にも警察だ。一般市民を危険にさらす訳にはいかねえ……」

っ……ダメなのか？

「だが……実力があれば別だな。てめえら、二人でバトルしな。それでオレが認めたらいいぜ」

……よし！なら……やれるだけやってやる！

「イツキさん……」

「ああ、オレは手加減しないぜ」

「それは僕のセリフですよ」

そんなやりとり、へへ……言ってくれるじゃねえかよ。

「もう……頑張りなさいよイツキ！」

「コノハの言う通りだな。俺のライバルとして絶対に勝てよ」

コノハとアクトが激を飛ばしてくる。ああ……絶対に勝ってやるぜ！オレは走ってPCに設置されているバトルフィールドに向かって走り出した。

バトルフィールドの中にオレは入る。それに対峙するように向こう側にはゴールドが立っている。リヨウマさんがバトルフィールドの中央に立った。審判をしてくれるみたいだな。が審判をするようだ。

「いいか！勝負は1対1だ！！」

「はい！！！」

力強くオレとゴールドは同時に頷いた。

「頼むよ、エーフィ！」

『フィッツ！』

ゴールドはエーフィを繰り出してきた。相手はエーフィか……みただけでその実力が伺える。へえ、中々面白そうじゃなか！

多分、アイツがゴールドのパートナーなんだな……なら……オレも

……

「アリゲイツ、君に決めた！」

『アリアア！』

相手がパートナーに対しオレもパートナー、目には目を、歯には歯  
をもって言うだろ？

ん？なんか違う気が……ま、いつか

「こつちからいかせてもらっせ！アリゲイツ、アクアテール！」

『アリアアア！』

アリゲイツの尾が水に包まれる。まずはコイツからだ！食らえ！

「避けて」

軽快な動きでアクアテールを難なく避けられた。流石にそんなに甘  
くないか……

「今後はこちらからいきます！エーフィ、突進！！」

「馬鹿力で迎え撃て！」

「無駄ですよ」

『フィ！』

『アリアアア！』

アリゲイツが馬鹿力を発動する前にエーフィの突進が直撃した。く  
つ……パワーとスピードが半端じゃない……コイツ……強いぞ！  
だけど、動揺してる場合じゃねえ！  
なんとかしねえとな……

「エーファイ、サイケ光線！」

「アリゲイツ、ハイドロポンプだ！！！」

『ファイー！』

『アリアアアア！』

ゴールドの指示を聞き、慌ててオレはハイドロポンプを指示した。サイケ光線とハイドロポンプがぶつかり合い、相殺する。

なんて威力だよ！

相手はサイケ光線でこっちは水タイプの大技、ハイドロポンプだけ？ そいつを相殺するなんて…

「一気に畳み掛けさせてもらいます！エーファイ、フラッシュュ！！！」

「ファイー！！！」

っ！しまった！

エーファイの額の珠が光ると共に、もの凄い光が発せられる。オレは反射的に両手を使い、目を光から保護しようと構えた。

って何！オレが両手を離すとアリゲイツは無数のエーファイに囲まれていた。影分身か？それとも身代わりか？どっちにしてもかなり不味いな……。

「これで終わりです！エーファイ、シャドーハードラッシュ影猛突進！！！！！」

来た！ゴールドの指示を受けて一気にエーファイ達がアリゲイツに迫ってくる。そんなに甘い手にのるか！

「アリゲイツ、ハイドロポンプで上昇！」

『アーリヤアアア！』

宙に舞うアリゲイツ。よし！反撃開始だぜ！

「嫌な音！！」

『キーン！』

うっ……黒板に爪を起てる音だ……その音に堪らず、思わず耳を塞いだ。その音のせいでエーフィの分身は次々と消えていく。あのエーフィ、黒板に爪を起てる音が苦手なのか？  
とにかく大チャンス！

これで決めてやる！

「今だ、アリゲイツ！ハイドロポンプ！！」

「エーフィ、コッチはサイケ光線だ！」

『アーリヤアアア！』

『フィィィィ！』

お互いの攻撃はさつきとは違い、両方に当たる。  
げっ……その攻撃でアリゲイツが地面に落下していく……辛そうだがエーフィ立っている。おいおい……かなり不味いぞ……

『フ、ファイ……………』



『アリア……』

お互いに、軽く笑みをこぼす。すると2匹が同時に倒れた。お互いに目を回しているみたいだな……引き分けか……オレはアリゲイツの元へ駆けていく。

「よく頑張ったな、アリゲイツ」

『アリアア……』

オレは目を回したアリゲイツにそう言うと、アリゲイツは辛そうに立ち上がった。それからオレは立ち上がり口を開く。

「引き分けか」

「イツキさん、強いですね……」

「ゴールドだって強かったぜ」

オレとゴールドはポケモンと共に力強く握手を交わした。そこにリョウマさんが歩み寄ってくる。どうだ……？

「やるじゃねえかてめえら！」

そう言いながら、リョウマさんはオレとゴールドの頭に手を乗せて荒々しく撫でるように動かした。うう……頭がシエイクされちまう……

「ユースケやスバルにはまだまだ及ばねえが、合格だ。てめらも頼

りにさせて貰うぜ」

そうリヨウマさんが言う……スバルって誰だ？  
まあ深い詮索は止めておこつ。

「はい、よろしく願いします！」

オレは力強くリヨウマさんに言った。待っててくださいよユースケさん！今、助けにいきますよ！  
オレは力強くそう誓った。

## イツキVSゴールド(後書き)

しばらくは次回予告はおやすみです

「ユースケ、今行くからね！」（前書き）

今回はランサイド、ポケモンセンターから飛び出していったランは  
……

「ユースケ、今行くからね！」

……ユースケ……あたしは怒りの湖に向かって歩いてる。ユースケを……ユースケを助けるため。リョウマさんから聞いた前線基地の存在、それからゴールドくんから聞いた怒りの湖のコイキングが急に進化した話、それからカズマくんのポケギアに残されていたメッセージ、それから考えてユースケの居場所……ロケット団の人達に捕まっている場所について一つの可能性を思いついた。正直……今はとても辛い……カシスとカズマくんがロケット団に操られていて……それだけでもかなり辛かったのに、今はユースケまで……ユースケは……今の……すぐに折れてしまいそうなたしの心の支えになってくれていたのに……それなのに……ダメだよ……泣いてる場合じゃないよね！

あたしは自分の長い髪に手を回して、それを縛ってまとめる。うん、準備はOK！後は怒りの湖へ行くだけ……

「ランさん！」

え？誰？

不意にあたしの背後から聞こえてきた声にあたしは振り返る。

「クリスちゃん！」

あたしは驚きの声を上げる。もしかして……ついて来たのかな？

「その様子だと、ユースケさんを助けに行くつもりですよね？」

あ……やっぱり分かっちゃったかな……

「なんで分かったの？」

「今の何か決意した表情を見たらすぐに分かりますよ」

……うん、クリスちゃんにはかなわないよ。

「私も付き合いますよ。ランさんだけ行かせる訳にはいきませんか  
らね」

そうクリスちゃんが笑顔で言ってくれる。うん……この様子だと  
何を言ってもダメだね。

「うん、分かったよ。よろしくね、クリスちゃん」

「はい！よろしくお願ひします」

それに対してクリスちゃんは笑顔で頷いた。さ、早くユースケを助  
けに行かなくちゃ！

「行くよ、クリスちゃん！」

「待ってくださいよ！」

あたしは怒りの湖に向けて走り出す。ユースケには、一回あたしが  
病気になった時に助けてもらっている。命賭けで、シロガネ山にあ  
たしの掛った病気の薬になる薬草を採って来てくれた。今度は……  
今度はあたしがユースケを助ける番！ユースケ、今行くからね！

## 怒りの湖

あたし達は怒りの湖に到着した。さっきのギャラドスの騒ぎの時とは違ってかわつてとても静か、あの時、あんな事にならなかつたらユースケも……ダメ！

今、そんな事を考えてちゃダメだよ。あたしはすぐに頭を左右にブンブン振って、その思考を打ち消した。

「ランさん、来たのはいいですけど宛てはあるんですか？」

クリスちゃんがあたしに尋ねてくる。宛てが無かつたらここにこないよ。

「うん、それはね……」

そう続けようとして言葉は途切れた。あたしは周りから威圧感を感じとった……あたしの考えは間違つてなかつたみたいだね……

「ふふふ、来ると思つたよ。甘ちゃん達め！」

そう言いながらもロケット団の人達が5人も出てきた。ちょっと分が悪いかな？ロケット団員の人達はラッタ、サンドパン、ゴローン、サイホーン、バリアードを出してきた。

「お前達にも捕まって貰うぞ」

そう続けて言ってくる。あたしね……かなり怒ってるんだよね。

「クリスちゃん、ここはあたしに任せて」

あたしはそう言って自分のベルトのボールを2つ取り出す。行くよ！

「お願いね、ラプラス！ガルーラ！」

『ラプー！』

『ガルウ！』

あたしはボールを高く投げるとそれからラプラスとガルーラが勢いよく飛び出した。さ、手加減はしないよ！

「ちっ……甘くみやがって……やれ！」

ロケット団員の一人の指示でポケモン達が飛びかかってくる。まずは

「ラプラス、白い霧！」

『ラプー！』

ラプラスは白い霧を発生させてポケモン達の突撃を封じる。これなら迂濶にこれないからね。次はこれ！

「ガルーラ、地震を使って！ラプラスは守るで自分の身を守って！」

『ガルウ！』

『ラプッ！』



ガルーラが地震を発生させた。あたし達にもその影響は多少はあるけど、対した事はない。それよりもポケモンに多大な影響を与えている。ポケモン達の悲鳴が聞こえてくる。ダメージは大きいみたいだね。それじゃ、次で決めるよ！

「ラプラス、今で場所は分かったよね？吹雪！」

『ラプラーー!!』

ラプラスの吹雪は広域に放たれた。あたしにも伝わる冷気からその威力の高さがすぐに分かった。吹雪による攻撃が終わると同時に白い霧が晴れた。さっきのポケモン達の氷像が置かれている。あたしの勝ちだね！

「っ、強い……」

ロケット団員の人そんな事を言った。それじゃ、かまってる暇も無いし早速……

「そこまでだ！」

！？

突然の声、あたしは声が聞こえた方向を向く。そこには……

「ロケット団って仮面好きが多いのかしら？」

クリスちゃんが相手を煽るように言う。そう、そこには仮面をつけた人とその仲間が4人いた……

「え……」

「ランさん？」

突然、あたしを恐怖という感情が湧きあがってきた。仮面を付けたロケット団、それが恐怖を駆り立てている。トラウマ……そんな言葉がピツタリだと思う。カシス達と戦っているような……それだけでアサギの時に感じた恐怖を感じてしまう……怖くて……声が出ない……力が入らない……

「ふん、どうした俺が怖くて声も出ないのか？」

ダメ……イヤだよ……ユースケ……助けて！

「ランさん！ランさん！」

クリスちゃんと呼んでる……そうだよ……あたしがあたしがしつかりしなくちゃ……このままじゃ……

「やれ！」

そんな声が聞こえた。するとたくさんのポケモン達があたし達に迫ってくる。ガルーラとラプラスがそれに対応しようとするけど数の差があり、対応しきれない。

「キヤアアア！」

「ユースケ！！！！」

あたしは目を閉じて悲鳴をあげた。あれ？攻撃がこない……あたしはゆっくりと目を開く。そこにはローブを被った男のひと、ブラッ

キーがあたしとたくさんのお仲間達の間立つように立っていた。

「お前は何者だ!?!」

仮面を着けたロケット団員が威圧をかけるように言う。うっ……身  
体中が身震いする……怖いよ……

「女の子いじめるのがそんなに楽しいか?」

挑発するようにローブの人が言った。仮面を着けたロケット団が一  
斉にポケモン達に突撃の指示を下す。  
危ない!

あたしはそう叫ぼうとした時、ローブの人から余裕を感じた。え……  
…この人……

「ブラッキー、悪の波動だ」

『ブラッ!』

ブラッキーの額からもの凄いエネルギー波を放った。その攻撃範囲  
はとても広くて、それを受けたポケモン達は一撃で皆目を回してい  
る。この人、とても強い……

「……!お、覚えてろ!」

ロケット団員が逃げ帰っていく。た、助かった……

「大丈夫か?」

「ありがとうございます、助かりました」

あたしはローブの人の言葉を聞いて素直にお礼を言う。本当に助かったよ……

「助かりました？君は大切な何かを助けたいんだろ？今の君の戦いをさつき見せてもらったが、次あんなのに会ったらどうする？ポケモン達がいたぶられるだけだ。そんな甘い覚悟なら帰りなさい」

……甘い覚悟……か……あたしは……何をやってるんだろ……

「怖く感じるのも、何かあるんだろ？話してごらん」

「は、はい……」

あたしは全てを話した。

もちろんカシスとカズマくん達の事……話してとても辛いよ……

「……なら、尚更だな」

「はい？」

何がだろ……

「尚更、そんな事じゃいけない。大切な友達の目を覚ますためなら君自身が前に歩かないとダメだ、君には素質がある。今は辛いかも知れないが歩くしかない、友達を救うためにもな」

！

そうだよ……あたしがしなくちゃならないことは！

「アナタは誰なんですか？ところで……」

あたしはあまりにも心動かしたローブの人に尋ねる。名前は、知りたいな。

「そうだな……。まあ、『おじさん』とでも呼んでくれ。その方が助かる」

「は、はあ………」

う、うん……。ま、いっか

「で、行くのかい？」

おじさんがあたしに対して言った。あたしの覚悟を聞いてるみたいだね。あたしの覚悟……。それは……

「はい、あたしは……。あたしは、ユースケも、カシスもカズマくんもみんな助けます。それが……。あたしに出来る事だから……」

強い意思を持つてあたしは言う。さっきのお説教を聞いて目が覚めたよ……。二人はあたしの親友だから……。あたしが助けなくて誰が助けるの！？

あたしが怖がつてちゃいけないよね……。ユースケがいなければあたしがやるしかないよ！

「大丈夫なんですか？」

とクリスちゃん、心配させちゃったみたいだね……

「うん……心配かけてごめんね」

あたしはクリスちゃんに素直に謝る。

「その様子なら大丈夫みたいだな」

「はい」

あたしはおじさんの言葉に頷く。もう……迷わないって決めたから！

「よし、それじゃ行ってくるんだ。ここは何とかするから」

え？

おじさんの言葉を聞きあたしは驚く。あ……威圧感……その威圧感に初めてあたしは気付く。もしかして……

「気付かれたか……だが、さっきみたいにはいかんぞ！」

そう言いながらさっきのロケット団員が現れた。それに加えてさっきよりいっぱいロケット団員が現れる。ここは……

「ラプラス、ガルーラ！」

あたしはラプラスとガルーラに構えさせる。でもおじさんが手を横に出してそれを制する。

「言ったぞ。行くんだって。友達を助けてくるんだ」

……うん……

「ありがとうおじさん！」

あたしはそう言ってから「ありがとう」とガルーラを労いながらボ  
ールに戻した。ラプラスは既に湖上まで移動している。

「クリスマスちゃん、乗って！」

「はい！」

あたしはラプラスに飛び乗ってからクリスマスちゃんに呼びかける。す  
るとクリスマスちゃんもラプラスの背中に乗った。それじゃ、行くよ！

「クリスマスちゃん、息を止めててね」

「え？」

「ラプラス、ダイビング！」

『ラプー！』

「えー！？」

クリスマスちゃんは驚きの声をあげる。その間にもラプラスは潜水し始  
める。ユースケ、カシス、カズマくん、今、行くからね！

「ユースケ、今行くからね！」（後書き）

次回に続く！



## 突入！チヨウジ基地（前書き）

今回はイツキ編。リヨウマと共にロケット団の前線基地に突入することになったイツキとゴールド達は……

## 突入！チヨウジ基地

現在、オレ達、まあつまりはコノハにアキト、ゴールドとユウコ、更にリヨウマさんはチヨウジにあるあまりにも怪しい店の前にいる。リヨウマさんの話ではここに前線基地があるそうだ。確かに怪しいってポイントでは最高に怪しいな……突入は後30分後に行うそうだ。警官隊が周囲を固めるのにそれぐらいかかるらしい。作戦はオレ達が正面から強襲をかけて拡乱、内部がズタズタになったところに特ポケ隊（精鋭の機動隊）の人が数名突入して制圧する作戦らしい。オレ達が先鋒部隊として組み込むのをリヨウマさんが結構頑張ってくれたみたいだ。無茶言って悪いなあ……

「すみませんリヨウマさん、イツキが無茶ばかり言ってます」

コノハがリヨウマに謝罪の言葉を言う。だからお前はオレの母親かよ！

「気にすんな！餓鬼のお守りは今に始まった事じゃねえしな」

……今までにそんな経験を？

あ……オレの頭にはとてもものんびりした顔が浮かぶ、ユースケさんだあ……間違いないよ……

「だからしっかりと付いて来いよガキ共！」

「は、はい」

ゴールドはそのセリフに圧されながらも頷いた。リヨウマさんってなんか色々とすげえ！

「なあ、ゴールド、突然で悪いんだが、一つ聞きたいんだけど？」

不意にアキトが口を開いた。どうしたんだ？

「なんですかアキトさん？」

「お前のエーフィさ、強すぎないか？」

アキトがゴールドに言う。何が言いたいんだ。

「どついう事ですか？」

ゴールドも訳が分からず首を傾げた。オレもさっぱりだぜ。

「短刀直入に言えば、お前のお父さんの名前はなんだ？スクールで見たポケモンリーグの記録映像でお前そっくりなバトルスタイルを見たような気がするんだよ。教えてくれないか？」

なるほど……そついう訳ね。

「父さん……ですか」

ゴールドが口を開いた。ん……なんでそこで口籠るんだ？何か躊躇する理由でもあるのか？

「僕の父さんは……ヨウイチって言うんです」

な……なんだつてー！

「ヨウイチ？」

リヨウマさんが驚きの声を上げた。アキトに至っては驚きと衝撃、2つの表情が滲み出ていた。うん、面白い顔をしてやがる。

「皆さん、何でそんなに驚いてるんですか？」

ユウコが聞いた。おいおい知らないのかよ！あの伝説とも言えるあのトレーナーをさ！

「……かつて、ポケモンリーグでイーブイ系のポケモンだけを使い、リーグ制覇を成し遂げた凄腕のトレーナー、それがヨウイチ。あの人の子供なのか、お前は？」

アキトの説明的なセリフを言う。ワカバタウンじゃその人は半ば伝説になってんだぜ？ゴールドはコクリ、と頷いた。マ、マジかよ……すげえなおい……

「僕のイーブイ……いや、イーブイは父さんのポケモン同士のタマゴから生まれたんです。父さんはそれを僕に……」

「確か、ヨウイチってトレーナーが数年前から行方不明だったよな」  
「？」

「はい」

ゴールドの言葉にリヨウマさんが尋ねて、それにゴールドは頷いた。わりい事聞いちゃったんだな……

「よし、お喋りはおしまいだ。そろそろ突入するぞ」

「はい」

リヨウマさんが場の空気を変えるように言うと空気が引き締まった。それぞれがモンスターボールを片手に持ち構える。中でロケット団と戦闘になった時の事を想定しての行動だ。よし……準備は万全、行けるぜ

「警察………！」

勢いよく、先頭を切り、中に突入するリヨウマさん。おおかつこいって思ったが突然止まったりリヨウマさんの声を聞き、不自然に感じる。どうしたんだ？オレ達は中に入る。あ！中にはボロボロの男達と明らかに怪しい地下室が剥き出し状態にあった。

リヨウマさんが警察手帳を持ち、倒れている男の1人に問い詰める。

「警察だ。てめえ、ロケット団だな？何があつたんだ」

ロケット団と思われる男がゆっくりと話しだした

「突然、後ろにいるガキ共と同じくらいの奴が来て、一瞬にして風ぎ払ったのさ……。下っぱだったから手も足も出なかったのが普通だ……。しかも、知ってたかのように地下の扉まで開きやがった……」

「素直に色々ご苦労様だ」

リヨウマさんがそうはき捨てた。ガキ……ねえ……

「一体誰だよ？オレ達と同じくらいのがキって」

「知るわけ無いでしょー！」

オレがそう独り言のように呟くとすかさずコノハがツツコミを入れてきた。誰もお前に話してないっつーの！

地下は意外にも広かった。これがロケット団の前線基地、と考えればまあ妥当だと思う。ん？

待ち受けるように赤い髪の毛のゴールドと同年ぐらいの子供がいた。何者だ？まさか、コイツがさっき聞いた……

「何もんだ、てめえ？ロケット団か？」

リヨウマさんが威圧をかけて彼に聞く。流石に慣れてるな……

「あんな雑魚共と同じにするな、ただ欲しいものがあるから取りに来ただけ……相変わらず弱い奴らしく吊るんでるな」

奴がゴールドに目を向ける。人を見下した態度……気に入らないな

……

「彼なりの挨拶ですよ」

ゴールドがそう補足するように言った。うん、ムカつくな！

「……何でこの場所を知ってるのさ、シルバー」

「最近、ロケット団とやり合ってたな、無理矢理聞き出した」

たく……どうしてこうひねくれてやがるんだコイツは……

「一般市民を巻き込むワケにはいかねえ。その欲しいもんはオレ達  
が……」

「警察の言いなりなんざごめんだ。第一、じゃあそいつらは何だ？」

リョウマさんの言葉にシルバーはそう返した。リョウマさんを黙ら  
せるなんて中々やるな……

「……シルバー、君のねらいは？」

ゴールドが間に入るように言う。ゴールドには奴と因縁があるみた  
いだな

「ロケット団潰しに必要なモンだ。簡単に言うなら機密資料……と  
いうもの」

機密資料ねえ……そんな重要なもんが、子供一人に突入を許すよう  
な場所にあるのかねえ……にしても……

「気に食わないな……」

アキトがそう口にする。そいつには同感だな。

「なんでよ？」

コノハがそうアキトに返す。まあ普通に考えれば分かる事だけどな

「見張りが倒されたのに誰も援軍に来ないのはおかしいだろ！それぐらい考える！」

リヨウマさんが機嫌が悪そうに返した。コノハは少しその威圧感に圧倒される。リヨウマさんの言う通りだよな。さっきから一切援軍がない。この事から何か、裏があると読み取れる。それはいくらバカでも分かる。うん？コノハがわからなかったって事はオレはコノハより頭がいいって事か！？

やったぜ、もしかしたらスクールの成績もオレの方が上か？  
やったぜ！

イヤ、勝手な想像は止めておこう後で真実を知ってただの痛い子にはなりたくない。

「んで、今はこの殺気だ。やられたな」

そうさばさばした口調でリヨウマさんが言う。  
！？

これは……オレは気付いた。もう、とっくの昔に囲まれているって事実に。柱の影などから大量のロケット団の連中が出てきた。おいおい、団体様のご登場かよ！

「まったくおいたが過ぎると痛い目をみろぜ坊主共」



「迷子か？」

「相手はただの餓鬼とは拍子抜けだな」

口々に勝手な事を言うロケット団達、へへ……そこんじよそこらのガキと一緒に見ると痛い目に会うぜ！

「ちっ！ここは作戦通りだ！散るぞ！」

「はい！」

リョウマさんがそう叫ぶとゴールドは力強く頷いた。そもそもの作戦目的は拡乱、必要以上のバトルを行う必要は無い。3人一組ぐらいでチームを組んでここはひとまず退散だ！

「コノハ、アキト、逃げるぞ！」

「分かってるわよ！」

「了解だ」

「ユウコ、僕に付いてきて！」

「うん」

「ちっ！雑魚相手でも流石にこれだけはつらいな」

「無事でいろよてめえら！」

オレとコノハとアキト、ゴールドとユウコとシルバーでチームを、

リヨウマさんは単独で3つに分かれて逃げ始める。って！  
シルバーがゴールドと一緒に……ケンカしてねえといいけどな……  
うお！追って来てる！

背後からラッタとズバットの軍勢を先頭にロケット団達が追いかけてくる。よし！撒いてやるか！

「コノハ、アキト、行くぜ！」

「ああ、任せろ」

「あなたのお世話くらい任せておきなさいよ！」

そう各自叫びながらもそれぞれ、ドンファン、ヨルノズク、ガバイトを繰り出す。まずはオレからだ！

「ドンファン、吠えろ！」

『パオーン！』

ドンファンは力強く吠えると、相手のポケモン達はそれに威圧され動きを止めてしまう。さあ、次はコノハだ！頼むぜ！

「ヨルノズク、吹き飛ばしで吹き飛ばしなさい！」

『ホー！』

ヨルノズクが翼を強く奮うと強風が発生し、ラッタ達は吹き飛ばされ、ロケット団達に激突する。よし！コイツで最後だ！

「砂嵐だ！」

『ガア!』

アキトの指示でガバイトは唸り声を上げた後、砂嵐を発生させ相手の視界を封殺する。これで締めだ!これで追撃に時間がかかるはずだ!

「よっしゃあ!」

「上手くいったな!」

「ナイスコンビネーション!イエーイ!」

と各自好き勝手言った後、ポケモン達を撫でてからボールに戻した。よし!早くゴールド達と合流しないと。オレ達は走るスピードを上げてゴールド達を探した。

いたいた!オレ達はゴールド達を見つけた。無事だったみたいだ!それより……

「これ、どうやったのよ!？」

悲惨な惨状をみてコノハが叫んだ。そりやかなりの数のロケット団が寝てるんだもんなあ

「シルバーのゴーストの催眠術です!」

ゴールドがコノハにそう説明する。とんでもない催眠術だなおい!とにかく残るロケット団は6人。ちようどいいな。

「お前ら、1人1つずつ潰していけ!」

この野郎……調子に乗りやがって……とにかく今は集中だな……

「ピジョン、君に決めた!」

オレはピジョンを出す。それに対して相手はラッタ、ピジョンに向かって突撃してきた。軽くないなしてやるかな?

「エアスラッシュだ!」

『ピジョオ!』

ピジョンは翼を奮い、空気の刃を放った。それはラッタの額に直撃し、ラッタは怯んだ。止めだ!

「吹き飛ばしだ!コイツで決めてやる!」

『ピジョオオオ!』

ピジョンは翼を再び力つよく奮い強風を引き起こした。それにラッタは吹き飛ばされて指示を出していた団員に激突した。へっ！ざまあないぜ！

ロケット団員もラッタも起き上がってこない。気を失ったみたいだな。ま、運が悪かったって事で

「よくやったなピジョン」

『ピジョ』

オレの言葉にピジョンは嬉しそうに喉を鳴らす。久しぶりに圧勝雰囲気にお互いに喜びを感じるぜ。オレはピジョンに礼を言った後ボールに戻した。それから辺りを見回す。みんな終わったみたいだな。流石に早いな。ん？

さっきのシルバーって奴を見るとボールにゴーストを何も言わずに戻っていた。コイツ……あれだけの事を行ったゴーストに礼の一つも無しかよ……流石にこれでさっきまで我慢していた堪忍袋が切れた。これ以上我慢出来るか！

「おい！このとさか頭！」

オレは苛立ちをそのままシルバーと呼ばれている奴に向かってぶつける。コイツの態度はどうしても気に食わないんだよ！

「とさか頭だと……」

少し怒りが籠った声でシルバーが返してきた。流石に腹が立っていたからってとさか頭はまずかったか……ゴールドやユウコが笑いを堪えてやがる……

「お前しかとさか頭なんていねえよ！お前はポケモンを道具かなん

かだと勘違いしてんのか！ふざけるなよ！」

オレは力強く言う。こんな奴は……

「フン、お前もポケモンは友達か……雑魚はこれだから困る」

「なんだと！」

オレはシルバーのセリフに怒鳴り返す。つくづくムカつく野郎だな……コノハやアキトはオレを止めようとあたふたしているが、それに構わずにオレが怒鳴る。

「そこまで言うならバトルだ！ぶつとばしてやる！」

オレは力強く言う。こんな所でバトルなんて正気の沙汰では無いと思うが無視する。コイツだけはぶつとばしてやる！

「フン、貴様なんか10秒で十分だ」

シルバーが挑発に乗ってくる。オレはシルバーと距離を取って身構えた。

「たく……早めに終わらせろよ」

「やっちゃえイツキ！そんなバカぶつとばしなさい！」

コノハとアキトが各自適当に叫んでいる。アキト、んな事分かってる。このバトル……さっさと終わらせる！  
オレは素早くベルトに手を回した。

突入！チヨウジ基地（後書き）

続く！

## イツキVSシルバー（前書き）

意見の違いからバトルをする事になったイツキとシルバー……さあ  
どうなる？



## イツキVSシルバー

「ハツサム！君に決めた！」

『サムッ！』

オレがボールを投げるとハツサムが飛び出した。実力は現段階ではオレの手持ちの中でNo.1だ。シルバーなんざけちよんけちよんにしてやるぜ！

「エレキッド！」

それに対してシルバーはエレキッドを繰り返してくる。くっ……あのエレキッド……強いぞ……見ただけでそれが分かった。アイツもゴールドと同じで中々の使い手みたいだな。だが……負けねえ！

「まずはオレからだ！ハツサム、電光石火からシザークロスだ！」

『サムッ！』

ハツサムは電光石火で重い自らの体を素早く動かして、ジグザグの軌道を取りながらもエレキッドに突撃していく。まずは一撃決めさせてもらっぜ！

「ふん……エレキッド、電撃波でハツサムを撃て！」

『エレー！』

エレキッドが放った電撃波、くっ……ハツサムを追尾してきてやが

る……絶対命中のこの技……不味い!?

『サム……』

な……ハツサムは膝をついた。そんな……電撃波程度でハツサムがこんなにダメージを受けるなんて……

「フン、この程度か本当に10秒で決着が着きそうだな」

……シルバーがオレをあざ笑うように言った。ハツサムをバカにするなよ……今に見てる!

その人を子馬鹿にしたような気取ったツラをひっぺ返してやる!

「終わりだ!やれ!」

『エレー!』

エレキッドが電気エネルギーを溜め始めた。今だ!

「そこだ!バレットパンチ!」

『サムッ!』

『エレッ!?!』

「何!?!」

不意を付き、ハツサムが弾丸の如く飛び出した。目にも止まらぬスピードでエレキッドの目と鼻の先に飛び込み拳を連続で叩き込む。まだまだ!

「シザークロスだ！」

『サムッ！』

『エレッ！？』

「舐めるな！けたぐり！」

シザークロスがエレキッドに炸裂してエレキッドはバランスを崩した。そこにハッサムは更に攻め込もうとするが、エレキッドがけたぐりを使い自らの足を突っ込んでいくハッサムの足を払いハッサムは転倒する。不味い！

「電気ショックで止めをさせ！」

「まだまだ！燕返し！」

『エレッ！』

『サムウウ！』

エレキッドの放つ電撃を燕返しで寸前で回避し、背後に回る。これで終わりだ！

「馬鹿力だ！」

『サムウウウ！』

ハッサムの渾身の一撃がエレキッドを捕えた。エレキッドは完全に

目を回している。この勝負、オレの勝ちだ！

「……フン、戻れエレキッド」

この野郎！負けたクセにあの態度かよ！。

「おい、とさか頭！何か言っただれよ！！」

とさか頭と呼ぶのがクセになったみたいだ。うん、コイツぐらいムカつく奴には丁度いいだろ

「ポケモンに愛情注いだところで、それが何になる？いざというとき、非道にもなれやしない」

確かにそんな考え方もある。だけどよ！

「ポケモンがいるから僕達はこうやって喧嘩も出来るし、バトルも出来る。そういう意味でも感謝すべきなんじゃないのかな？」

ゴールドがそう言う。おいおい、オレが言いたかった事だぞ。それ

……

それを聞いてそっぽを向くシルバー。なんだかんだ言っても歳は相応なんだな……

「まあ、一応区切りは着けませんか？……やることあるし」

ユウコがそう言って会話を切る。まあ間違っちゃないから何も言えねえや……

「まあいいさ。なら、どうお前がポケモンを大事にしてるか見せて

もらつとするか……豪語するんだからな」

「言われるまでもねえよ」

挑発に乗るように言う。ガキかオレはって正直思つちまつただけだな。

「まったく……先に進むわよ!」

「イツキ、とにかく行こう」

「……………ああ」

コノハとアキトにそう言われ、オレはしぶしぶ頷く。で、結局6人は暫く一緒に歩く事になった訳だが……

事ある事にケンカになってよ……その度にコノハの踵落としを受けそうになったのは……まあまこう事なき事実だ。その度にゴールドが大きなため息をついたのは言うまでもない。

ケンカをしながらも奥に進んでいく。当初の目的、拡乱という使命

を果たしたオレ達はユースケさんを捜索していた。あの人なら無事でいると思うけど……まさかもう殺られたって事は無いよな……

「お、この扉は怪しくないか？」

アキトが突然口を開いた。やたらとロックなりなんなりがかかっているみたいで、色々不自然だ。かなり怪しいぞ。

「ちよつと見せて」

コノハがそれを覗き込んで色々いじっている。本当に大丈夫かよ……

「これは……パスワードが必要みたいね」

パスワードだつて？

「パスワードですか？」

ゴールドが首をかしげた。まあ唐突にそんな事を言われても分かんねえよな。

「そ、パスワードが無いとここには入れ無いみたいよ。誰か知らない」

んな事唐突に言われても誰も知っていないハズ……

「どけ、それなら俺が知っている」

つて……てめえが知ってるのかよ！シルバーが強引にコノハをどかしてパスワードを入れ始める。全く、いけ好かない奴だぜ……ま、

コイツが秘密通路への入口を知っていた訳だからな。知っていて当然と言われれば当然か……本当にコイツは何者なんだ……

「よし、開くぞ」

そうシルバーが言うと扉が開いた。その先にいたのは見覚えがあるロケット団員2人とその2人にそっくりな2人、あれ……ミスッた……これって相当不味い展開だよな……

「我々ロケット団のこの部屋に忍び込む者が現れるとはな……」

4人の内の1人が言った。

「セキュリティ軽過ぎなんだよ」

まあ確かに、入口なんて生意気なガキ1人にあっさり突破されたもんな。

「有りえん！この扉のパスワードやガードはココのどのセキュリティよりも固い！それを軽いだと!？」

どうせ入口の二人を脅して吐かせたんだろ？

「まあいいさ。ココに来たなら、それ相応の礼儀をしてやろう。我々はロケット4兄弟の……」

げっ……やっぱりアイツらだったか……若干苦い思い出が頭に浮かぶハア……最悪……

「フウスケ、リンゾウ、ホカゲにサンジ……だろ？」

「「!?!?」」

「1人ずつ指差して確実に当てるシルバー。く、詳しいな!オレには見分けがつかなかったぞ!

「なぜ我々の事を知っている……!?!?」

「雑魚に話すつもりは無い。どうせ、今も昔も雑魚なんだから?」

「シルバーのこの挑発に乗ったのが、フウスケはツボツボを、リンゾウはパールシエン、ホカゲはハガネール、サンジはマタドガスをそれぞれ繰り出してきた。まったく厄介なメンバーを揃えやがって……」

「おい、お前ら手伝え!」

「何でお前みたいなのタメに手を貸す必要があるんだよ!?!?」

「正直コイツに手を貸すつもりにはなれない。こんな事をしてる場合じゃねえんだけど……」

「それに対してシルバーは鼻でう。つくづくムカつく奴だな……」

「失望した……。俺を負かせたからことう時真っ先に出る奴だと思っただからわざわざ頼んだのによ……。所詮はこの程度だったか!」

「コイツ……」

「もういい。とっとと俺の周りから失せ……」

「オレはその続きのセリフは言わせない。全力で右手で頬にストリートを叩き込んでやった。まったく素直じゃねえ奴だなコイツは」



「コレで今までの分はチャラだ。お前も少しは正直になれっての！  
アリゲイツ、君に決めた！」

『アリヤア！』

鉄拳を叩き込んだ後、オレはアリゲイツを素早く出した。アリゲイツはいつも通り元気よくあらわれる。

「正直になんぞ俺はなれねえよ……」

腫れた頬を抑えつつも、笑みを浮かべながらシルバーが言った。だからなれって言うてんの！

「何をごちゃごちゃしている！ハガネール、ストーンエッジ！」

うおっ！やべっ！

完全に不意をつかれた。オレのバカ何やってんだよ！  
迫りくる鋭い岩……やられる！？

「エーフィ、念力！」

ゴルドの声と共にストーンエッジが止まり、岩は全て地に落ちる。  
ホカゲも驚いてしまっていた。全く、間一髪だったぜ……

「驚いた？」

「……ああ。あのイーブイか？」

ゴールドは首を縦に振る。するとシルバーは、ゴーストとヤミカラスを引っ込めた。何をするつもりだ？

「シルバー？」

「俺も見せてやる。コイツの姿をな！サナギラス！！」  
『サナツ』

ボールから現れたのは青いサナギのような姿をしたポケモン、サナギラス。へへ、中々よく育ってるじゃんか

「あのヨーギラスの？」

「勿論」

シルバーは自慢気に話している。全く、さっきまでのクールなお前は どうしたんだよ？

「マタドガス！」

「パルシエン！」

「ツボツボ！」

今度はフウスケ、リンゾウ、サンジが指示を出してくる。やべっ……  
…また油断してた……  
しかし、迫る3匹をルカリオ、ガバイト、そしてニョロゾがオレ達の背後から飛び出し、不意打ちの攻撃でそれぞれを後退させた。ふう………またも間一髪………

「あんたは何やってんのよ！これだからアンタは1人にしておけないのよ！」

ううう………面目ない

「もつと他の理由があるんじゃないのか？」

「無いわよ！」

アキトがコノハをからかうように言うのに対してコノハはムキになって反論した。ま、それはおいといて……

「始めようぜ、みんな！」

オレがそう力強く言うと、みんなが強く首を縦に振る。

「我々ロケット4兄弟の実力、見せ付けてやる！」

フウスケがそう言った。

へっ！舐めんなよ！オレ達の底力を見せてやる！

イツキVSシルバー(後書き)

続く!

「ユースケが嫉妬しちゃっぞ?」(前書き)

タイトルは……実際に本文中にあります。詳しくは本編で！  
どっぞ！

「ユースケが嫉妬しちゃっぞ?」

「ハアハア……死ぬかと思いましたよ」

「ゴ、ゴメンねクリスちゃん……」

ハアハアと荒い息をするクリスちゃんにあたしも同じく荒い呼吸をしながら返した。今はロケット団の湖の底にあった基地に来ている。ラプラスの背中に捕まって湖に潜ると……なんと! っっていうか……予想通り基地を見つけたんだ。それから入口みたいな所から潜り込んだ訳。それで現在に至る訳だけ……

「少しは頭を冷やしてくださいよ! これじゃ付き合ってる私が死んじゃいますよ!」

「ゴ、ゴメンね……」

みたいな感じでお説教されている。こんな事してる場合じゃないのになあ……でもクリスちゃんを酷い目に合わせたのは事実だから、言葉を切るような事は出来ないんだよね……辛いなあ……

「それじゃそろそろ行きますよ。見つかったら大変ですからね」

……それってクリスちゃんのセリフかな?

無駄に時間を取ったのってクリスちゃんのお説教のせいだよ……それに突っ込みを入れると余計に何か言われるよね……うん、突っ込みを入れるのは止めておこう。そうあたしは結論つけた

「うん、行こっ!」

そうあたしが言った……その時！

「おっとお嬢ちゃん達、勝手なマネはよして貰おうか！」

「迷子……の訳ないか……とにかく捕まっつて貰っぞ！」

ロケット団員が二人現れる。それぞれ1匹ずつ、ラッタとゴローンを出してきた。あれ……あの2匹……なんか違和感がある……でも……なんとかなるかな？

「行くよ、クリスちゃん！」

「はい！行くわよ、ピカチュウ！」

『ピカア！』

クリスちゃんは頷くと直ぐ様ボールを投げてピカチュウを出した。あたしも！

「お願いね、ピカチュウ！」

『ピッカ！』

あたしも同じようにピカチュウをボールから出した。さあ、行くよ！

「ゴローン、地震！」

ロケット団員の一人がそう指示を出した。えっと、こういう場合は！

「ピカチュウ、身代わり！」

『ピカア！』

あたしの指示でピカチュウは身代わりを作り出した後、それを踏み台にしてジャンプする。それに続きクリスちゃんのピカチュウもジャンプした。これならそう簡単に追撃は受けないよ

「ランさん、ここはアタシが！ピカチュウ、目覚めるパワー！！」

『ピカア！！！！』

クリスちゃんのピカチュウの周りに現れる小さいたくさん球体。それは透き通った水色これは行けるね

「目覚めるパワーは使用ポケモンによって変わる技……そして、蒼き力が指すタイプとは？」

「水？……つてまさか！？」

「当たり前！コレでおしまいよ！！！」

クリスちゃんの問いにロケット団の人が答えると、クリスちゃんが叫んだ。その瞬間にピカチュウが目覚めパワーを放ち、それはゴローンに直撃した。タイプが岩と地面のゴローンには相性は最高！その一撃で伸びてしまう。でも油断は禁物だよ！

「くそっ！ラッタ、怒りの前歯だ！！！」

ロケット団員が指示を出すと、ラッタが回転しながら、自慢の前歯



を剥き出しにしてクリスちゃんのピカチュウに迫ってくる。中々のスピードだけどね……これってダブルバトルなんだよ？

「10万ボルト！」

『ピイカアアチユウウウ！』

あたしが指示を出すと全力の電撃を放った。完全に不意をつかれたラッタは直撃を受け、目を回していた。うん、上手くいったよ。ダブルバトルはちゃんとフィールド全体を見通しておかなくちゃね？

「くっ！仲間を呼ぶん……」

「させないわよ！ラッキー、歌う！！」

次の瞬間、クリスちゃんはラッキーを繰り出し、ラッキーが歌いだす。わわわ、あたしは素早く両手で耳を押さえた。クリスちゃんにピカチュウ達も耳を押さえて聞かないようにする。ロケット団の人はその歌声にバタバタと倒れ、眠りについた。ふう……とにかく一安心だね。

「ラッキー、お疲れ様」

『ラッキー』

クリスちゃんはラッキーをボールに戻した。それから……

「ランさん、さっきのポケモン達……どこか変でしたよね？」

すぐにそう質問してきた。あたしはその質問に頷く

「うん。どこがどう……とかは言えないけどね」

「それについても調べてみませんか？ユースケさんの救出が第一とはいえ……」

あたしはなんとなくだけど、この変な感覚は知っている。だから……  
… 凄いいやな予感がする…… だから調べたほうがいいような気がする。そう考えてあたしは首を縦に振る。

ウー！ウー！

「な、何！？」

急にサイレンのような音が鳴り響き、あたしは思わず声をあげてしまふ。え！気がつけば、無数のロケット団員に囲まれている。ええ、こここれって……

「……何で」

「始めからばれてたって事じゃないかな？」

クリスちゃんの言葉にため息混じりに答える。うん……どうしようかな？  
アレ？

気がつけばクリスちゃんが、ボールを両手に持っていた。それからあたしに小声で囁きかける。

「目を瞑って、鼻を塞いでて下さい」

「えっ？」

思わず疑問の言葉を口にし、その瞬間にクリスちゃんはボールを投げた。と、とにかくイヤな予感がする……あたしは言われた通りに目を隠して、鼻を塞ぐ

「キマワリ、フラッシュュー!!」

「キマー!!!!」

ボールから、ひまわりのような姿をしたポケモン、キマワリが出た瞬間に、強い光を放った。フラッシュュ……これは辛いよ……

「こ、このガキッ!!」

ロケット団の員の人がそう口にするが、気がつけば威圧感は無くなっていた。うっん……フラッシュュって結構強力な技だからね……というよりいつまでこのままでいたらいいんだろう？

あ……光がやんだみたい……あ、あれ？

い、いつの間にかみんな倒れてるよ……一体何が……

「クリスちゃん、何をしたの？」

「キマワリのフラッシュュで目を暗ませてる間にバタフリーの眠り粉を」

その言葉と共にクリスちゃんの右腕に止まるバタフリー。二匹に「お疲れ様」と言い、ボールに戻した。

うっん……本当に怖い子だね、クリスちゃんって……

「じゃ、行こっか」

「はい」

あたしはそうクリスちゃんに声を掛けて、どこかにいるユースケを探そうと歩きだそうとする。その時！

「ソコマデダ」

！？

こゝの声って……

「カシス、カズマくん……」

あたしはそう口の中で言う。うう……本当に会う事になるなんて……でも、ここで会ってしまったからにはあたしも引く訳にはいかない。ユースケがいなくてもやってみせる！

「ウゴカナイデ、ウゴクトイタイムヲミチャウゾ」

この声はカシス、いきなり絶対絶命だよ……でも、あたしは絶対に諦めない！

「クリスちゃん、3つ数えたらあたしがピカチュウを出してフラッシュを使わせるから、目をくらんでいるスキに一回距離を取るよ」

「はい」

あたしが小言で言った言葉にクリスちゃんが頷く。それじゃ……行くよ！

「3」

これも小言、あたしはピカチュウの入っているボールを取り出す。

「2」

ボールを手のひらサイズにしていつでもピカチュウを出せる、スタンバイの状態にする。

「1」

そうカウントするとあたしは勢いよく振り返ってボールを投げようとした。その時！

「バアーン！」

振り返った瞬間にカシスがあたしの額に人差し指を当てて言う。それにこの前みたいに2人共仮面を付けていない。え？これってどういう……

「どお？びっくりした？」

「カシス？」

この展開についていけないあたしは拍子が抜けた声を上げた。それはクリスマスちゃんも同様で少し呆然としている。も、もしかして……

「そだよ。誰だと思っちゃった」

いつも通りの軽い口調で返してくるカシス。って事は……

「おいおい、普通は状況が理解出来ないと思うぞ」

と、カズマくんがいつも通りの口調で突っ込みを入れた。え……やっぱり……

「よっ！久しぶりだな！」

「ラン、ごめんね、心配かけちゃってさ」

そういつもの口調で言う二人、二人共……自然にあたしの目には涙が溢れていた

「カシス！カズマくん！」

あたしはそう叫びながらもカシスに抱きついた。

「うっ……心配……心配したんだよ！」

あたしは泣きながらそう訴える。本当に……本当に……

「ごめんね、ほら早く離れて泣きやまないとユースケが嫉妬ちゃうぞ？」

そうあたしをからかいながら励ますセリフ、やっぱり本物のカシスだ……

「って事があつたんだ」

カズマくんが苦虫を噛み締めるように言った。連絡船の中であつた出来事、それから推測すると、催眠術で眠らせてる時に、操られたみたい……催眠術……ポケモンの技としては眠らせるだけだけど……よくTVとかでみるマジシャンの催眠術、あれは相手に掛けて自分の思ったように操っていた……あれと同じ事だと思う……人の感情を完全に無視するなんて……あたしには許せないよ！

「それでいつ目が覚めたんですか？」

クリスが二人に尋ねた。確かに……それはあたしも気になってたんだよね……

「キミ達とのバトルの最中に少しずつね……必死の呼びかけが聞こえてきて嬉しかったよ」

「んで、基地に戻った頃に完全に意識が戻つたんだ。ようはお前とユースケのバトルがきっかけだったんだ。ありがとな」

そうだったんだ。あの時に……それを聞いてなんか安心……あたし

達の思いがしつかり伝わっていたって事だからね……

「とにかく本当にありがとね」

そうカシスが言うと、あたしは「友達だよ？友達として当然の事だよ」と返した。するとカシスが笑みを浮かべ、あたしも同じように笑みを返した。

「ところでカシスさん、カズマさん、一つ聞きたい事があるんですけど」

クリスちゃんが口をはさんでくる。どうしたんだろう？

カシスは「何？」と首を傾げた。

「ここで一回戦ったんですけど……戦ったポケモン、少しおかしかつたですよ？アレはなんなんですか？」

……そういえば……あの尋常じゃない様子……でも……あたしはこの感じを知ってるよ……あれってやつぱり……

「……見たか……知ってるよな、狂暴化電波をカントーのラジオ塔から流したって話……」

カズマくんが苦虫を噛み締める口調で言った。あの事は、やつぱり誰も思い出したいくないよね……それにクリスちゃんが頷く。あれは、ニュースになったもんね……

「あの電波の実験の過程で生まれた……心を完全に閉ざしてしまつたポケモンだ……」



……そんな……そんな事って……そう言うカズマくんも本当に辛そうだ。こんな話をしてて、普通は辛く無い人なんていないよね……

「だから……わたし達がここをしばらくしたら完全に破壊するよ」

カシスのセリフにあたしは頷く。それが一番だよ……これ以上……ポケモンが……道具みたいに扱われるのなんて見たくないよ！

「あたしも……」

手伝うよって続けようとしたんだけどその言葉をカシスは手を出して止める。

「何言ってるの？キミにはキミの彼氏を救うっていう重大な仕事があるでしょ？」

そう笑顔で言うカシス、その笑顔はいつもと同じ人をからかう時の顔だ。む……彼氏ってそんな言い方しないでよ……凄い恥ずかしいよ……

「真っ赤になっちゃって！ランって可愛いなあ」

「からかわないでよ！」

必死にそう言うあたしをカシスは面白そうに見ている。それはカズマくんもクリスちゃんも同じ……うう……恥ずかしいよ……

「ま、冗談はここまでだな。ユースケは最深部にある廊屋に閉じ込められている。これが廊屋の鍵と手錠の鍵だ。ユースケを頼むぞ」

「うん」

そう言いながらカズマくんがあたしにカギを渡してくれる。それにあたしは笑顔で頷いた。

「キミ、ランがユースケといちゃついてたらからかってもいいんだからね」

「ハ、ハア……」

クリスちゃんに余計な事をすりこむカシス……そんな人に人をおちよくって楽しいかな？

「カシス！それじゃクリスちゃん、行くよ」

「はい！」

あたしはカシスに怒鳴った後クリスちゃんに呼びかける。それに対してクリスちゃんは力強く頷いた。ユースケ待っててね！  
今行くから！

「ユースケが嫉妬しちゃっぞ?」(後書き)

今年最後の更新です。1年間ありがとうございました。良いお年を  
!

## VSロケット4兄弟(前書き)

今回はイツキ編、4兄弟と対峙する事になったイツキ達は……

## V S ロケット4兄弟

「数的に分けて戦うぞ、その方が楽だろ？」

シルバーがそう言う。確かに6対4とはいえ、相手の連携力を考えれば即席の6人より実力は上だつて馬鹿でも分かる。なら戦力を拡散させればいい。戦力が半分になれば、連携によって発揮される力も必然的に下がる。でもよ……

「分かった。でも方法はあんのか？」

オレはそうシルバーに尋ねた。そんな都合がいい手段なんて……つて領きやがった。どんな策を使う気だ？

「サナギラス、今の話は聞いていたな？」

『サナツ』

身体全体を使ってシルバーの言葉に頷くサナギラス。んじゃ……頼むぜ……

「何をごちゃごちゃ言っている！ツボツボ、ストーンエッジ！」

げっ……邪魔してきやがった……ストーンエッジは不味いぞ！

「援護は任せて！エーフィ、念力！」

エーフィの目が青白く光り、ストーンエッジが静止する。すげえ念力だな……ホントはサイコキネシスなんじゃね？

ふとそんな疑問がうかんだ。でも念力って言ってるから間違いなく念力だろうし……凄いな……

「そのエーフィは邪魔だな……ハガネール、アイアンテール！」

「パルシェン、トゲキャノン！」

「マタドガス、シャドーボール！」

「ッ！！！」

不意をつくように残りの3匹が仕掛けてきやがった！

ゴールドが声にならない言葉を吐く。不味い！

このままじゃやられる！

その時！

「ニヨロゾ、バブル光線」

「ルカリオ、波動弾！」

「ガバイト、ドラゴンクローだ！」

コノ八達の指示が聞こえ、ニヨロゾのバブル光線がトゲキャノンを、ルカリオの波動弾がシャドーボール、ガバイトのドラゴンクローがアイアンテールをそれぞれ相殺した。流石だぜ！

「助かったよ……ありがとう、みんな」

「別に気にしないで」

「そつよ」

「困った時にはお互い様だろ？」

即席のチームとは思えないコンビネーションだな。そう考えてる隙に4兄弟に向かって悪の波動が放たれた。な……人を狙って……

「「うおっ!?!」」

4人には2つに散った。

フウスケとサンジ。そしてリンゾウとホカゲ……結果オーライか？

「作戦成功だ」

「シルバー……だいぶ無茶するね……」

「当たらなかつただけいいだろ？」

シルバーの挑発的な言動にさすがのゴールドも少しキレ気味に、「まあね」と答えた。ケンカするほど仲がいいってか？

「今は目の前の敵に集中しようぜ」

オレは2人の間に入る。流石にバトル中にケンカされたら不味いからな……

「全く危ないじゃないの!」

「落ち着いて下さい……」

突如シルバーに向かって怒りだすコノハ、相変わらず沸点の低い奴

だぜ……ま、人の事は言えねえけどな。にしてもユウコは偉いな……あのコノ八をなだめてるぞ……

「今は前を見たらどうだ？もう来てるぞ」

「……そうね」

「いきましよう」

アキトの言葉でコノ八とユウコのギアが変わったみたいだ。ナイスだなアキト！

さあ、勝負だ！

行くぜ！

オレはアリゲイツに指示を出そうと口を開いた。

#### コノ八視点

さあて、集中しないとね……相手はハガネールとパルシェン……かなりやり憎い相手ね……両方ともかなり頑丈で、生半可な攻撃じゃダメージを与える事すら出来ない。でも……勝つわよ……特にパルシェンを使っている方には借りがあるわ！  
その借りは何倍にもして返して上げるわよ！



「トップはわたしとアキトが取るわ！ユウコは援護して！行くわよ、ルカリオ神速！」

『行くよ！』

「ちっ……仕方ない！ガバイト、ハガネールに接近しろ！」

『GRA！』

「分かったわ。ニョロゾ、水鉄砲を連射して」

『ニョロ！』

3者3用の指示を繰り返すとポケモン達はその指示に従う。水鉄砲が連射される中をルカリオとガバイトがすり抜けてパルシエンとハガネールに迫る。水鉄砲の牽制のおかげでハガネールは自衛に精一杯だし、パルシエンは反撃のトゲキヤノンを撃ってくるけど、がむしやらに放たれる水鉄砲に全て打ち落とされる。クロスレンジとつた！

さあ、行くわよ！

「「瓦割り！」「」

わたしとアキトが同時に指示を出し、ルカリオとガバイトが同時に攻撃を決める。よし！

先制攻撃決まり！

つてアレ……効いてない……

『うつつ……痛いよ……』

ルカリオ……逆に痛がるって……見てて痛いよ……ガバイトの与えた一撃もあまり効いていないように見える。前も思ってたけど頑丈過ぎるわよ！  
どうしてユースケさんとランさんはこんな化物をあんな簡単に倒せてたのよ！

「フン……進歩が無いようだな……アイアンテールでなぎ払え！」  
ホカゲだっけ？

とりあえずその人の指示を受けてハガネールがアイアンテールで2匹をなぎ払おうと横に振るう。

「わあ！？」

ルカリオ達は奇声を上げながらもギリギリでその攻撃の回避に成功した。ホント、ギリギリだったわよ……

「まだまだ甘いぞ！吹雪！」

え、ええ！

追撃を行うような吹雪による攻撃、あの攻撃は忘れもしない。あれでリオルは氷像にされたんだから！

「ルカリオ、神速でかわして！」

「分かってるよ！」

ルカリオはその攻撃をギリギリで避けてわたしの近くまで戻ってくる。ガバイトは高速で移動する技が無いため、吹雪を後退するだけの動きでなんとかかわした。ホント、ギリギリよねえ……

「フン、かわしきれると思うな！ハガネール、捨て身タツクル！」

ガバイトがかわしたところにハガネールが突っ込んで来た。あ、危ない！

「ニヨロゾ、水鉄砲！」

不意をつくように、水鉄砲が一直線に放たれてハガネールの頭に水鉄砲が直撃し、ハガネールは苦しそうな顔をして突撃をやめた。その間にガバイトは後退する。

「油断しちゃダメ」

「わ、分かってる！」

ユウコがアキトにそう警告すると、アキトは苦虫を噛み締めるような顔で返す。それにしてもやっぱり手強いわね……3人がかりで挑んでるんだけどまともにダメージを与えられないなんてね……ていうかなんであの4兄弟の手持ちは頑丈なポケモンばかりなのよ！やりずらいつたらありゃしないじゃない！

ホント嫌な性格な兄弟だわ！

こうなったら強力な特殊技を叩きこんで一気にダウンさせてやるわ！

「アキト、少し時間を稼いでくれない？ルカリオとニヨロゾの圈になるような感じで」

「待てよ。そりゃ酷いんじゃないか……」

『GRAー！』

わたしの言葉にアキトとガバイトが抗議の声を上げるが軽く無視をする。

「ユウコ、あなたのニョロゾの水鉄砲はハガネールに効いてるわ！ガバイトが囿になってくれるからその隙にわたしはパルシエンを倒すからアンタ達はハガネールを叩きなさい！」

「分かったわ」

「俺の意向は完全に無視かよ……」

うん、なんかわたしチームの司令塔みたい！

そんな感じで優越感に浸るけどすぐに切り替える。せつかくアキトが囿になってくれるんだから油断なんて出来ない。

「仕方ない！ガバイト、敵陣中央に突撃だあ！」

『GRAA!』

ガバイトは泣きながらほうこうを上げて突撃していく。うん、ホントごめんね……

「学習能力の無い子供め！パルシエン、トゲキャノン！」

「ハガネール、アイアンテールだ！」

ガバイトに向かってそれぞれのポケモンの得意技が放たれた。それに対してアキトは冷静な表情をしている。さっきの様子なんて絶対嘘でしょ

「砂嵐を使い！」

『GRA!』

ガバイトが砂嵐を発生させた。お得意の砂隠れを生かした戦法ね……これを攻略するのにイツキも苦労してたわよね……

「水鉄砲！」

『ニヨロ!』

砂嵐を生かした戦法でガバイトに拡乱されているハガネールに対して容赦なくユウコはニヨロゾに水鉄砲を使わせた。それを浴びて徐々にハガネールの表情が苦悶の表情に変わっていくのが分かる。効いてるわね！  
わたし達も負けちゃいけないわ！

「ルカリオ！」

『うん、分かってるよ!』

そう言うとルカリオは両手の間に特大のパワーを溜め始める。それは徐々に拡大していきとんでもないエネルギーを放ち始めた。行くわよ！

「行くわよ！ソウルサンシャイン！」

『行っけええええ!』

わたし達の叫び声と共にルカリオから波動の結晶とも言えるエネルギーの塊、ソウルサンシャインを放った。その一撃はガバイトに攻撃するのに夢中になっていたパルシエンに直撃した。その一撃は大きな爆発を発生させた。相変わらずとんでもないパワーね……風圧に吹っ飛ばされそうよ！

そう考えてる間にも爆発は治まる。そこには完全に伸びてしまっているパルシエンの姿があった。それからすぐにルカリオの方へ視線を移すと、少しへばっちゃっている。さすがにキツかったみたいね……ソウルサンシャインはいろんなものから少しずつ波動のエネルギーを分けて貰ってそれを収束させて放つ技だけど、波動を分けて貰うのにかんりの体力を消耗するからね……

「大丈夫ルカリオ？」

『うん、かなり疲れたけどね』

わたしの言葉にルカリオは頷く。素直ないい子よね。ルカリオは

「悪いけど、そのまま警戒してて、何が起こるか分からないから」

『うん』

わたしの言葉にルカリオは頷いた。

「これで決めるわ」

『ニヨロ！』

そんなユウコの言葉が聞こえ、わたしはユウコ達の方を向く。アキトの拡乱で集中力を失っているハガネールに対してニヨロゾは水鉄

砲でダメージを与えていた。そのダメージはかなり蓄積していたらしく、辛そうな顔を露にしている。それはガバイトも同じだ。2匹のかわし続けるのにかんりの体力を消耗したようだ。そこでユウコが下した決断。何をするつもりだろう……興味津々よ

「正面から向かって行って！」

『ニヨロ！』

そう指示を下すとニヨロゾは突撃していく。近距離で水鉄砲を決めて勝負をつけるつもりね！

「く……舐めるな！アイアンテール！」

ホカゲがそう指示を下すとハガネールはアイアンテールを放つてくる。それに対してユウコは

「集中力が切れているポケモンの技なんか当たらないわ。そのまま直進して」

え〜！

そんな無茶な指示をしちゃうの！？  
つて！

振り下ろされた尻尾はニヨロゾには擦りもしなかった。凄い読み……ユウコってかなりの使い手ね……

「ニヨロゾ、跳んで！」

『ニヨロ！』

ユウコの指示を受けてニヨロゾは地面に水鉄砲を放って飛ぶ。ハガネールの顔の目と鼻の先に陣とった。

「ぐ……頭突きを……」

「遅いわ、ニヨロゾ、バブル光線」

『ニヨロー！』

ユウコが冷酷に言い放つとバブル光線がハガネールの顔面に向けて放たれた。その一撃によってハガネールの巨大が倒れた。つ、強いって！

わたしより絶対実力は上よ！

「バ、バカな……」

「俺達がこんな餓鬼共に……」

リンゾウとホカゲロタに言う。わたし達を甘く見すぎたわね！でも、これで終わりじゃないわね。わたしはイッキ達の方へ視線を向ける。視線の先ではイッキ達が丁度決着がつくところだった。



んじゃいつちよやってやりますか！  
ロケット4兄弟のフウスケ、サンジと対峙するオレとゴールドとシルバー。にしてもこの馬鹿は……

「全く無茶するなあお前……」

オレはシルバーに軽く注意を促すように言った。あのやり方は問題ありだぜ……。

「やってくれるな……」

軽く舌を打つフウスケ。しかし、表情は余裕そうである。チッ……

…相変わらずムカつく奴らだな……この前の借りは闇金なみの利子をつけて返してやるぜ！

「ごめん、僕は援護に徹するよ。シルバーとイツキさんで攻めてもらえませんか？」

「分かった」

「構わないぜ」

オレとシルバーは頷いた。エーフィはさっきの念力のせいで、かなり体力を消耗しているみたいだな。ま、援護に徹すれば何かとなるよな。しっかり頼むぜ

「じゃあ、行くとするか。お前はサンジを頼む。マタドガスの方をな」

「いちいち命令すんなっての」

相変わらずの口調に反論しながら、オレはマタドガスに向き合う。出来ればツボツボの方とやりあいたかったんだけど……仕方ねえか……

「ツボツボ、ストーンエッジ！」

「マタドガス、ヘドロ爆弾！」

そう4兄弟の2人が指示をするとストーンエッジとヘドロ爆弾が放たれた。この程度の技ぐらいなんともないぜ！

「サナギラス、砂嵐」

『サーツ！！！』

シルバーの指示を受けてサナギラスの体から砂嵐噴き出された。げつ……2つの攻撃を止めやがった……コイツかなり強い……

「コイツはさっきのエレキッドより強い……コイツを出してたら10秒で終わってたな」

「……マジかよ」

冗談じゃねえよ……でもな！

「オレのアリゲイツもずっと一緒なんだ。お前のサナギラスにも負けやしねえよ」

「まあいいさ。始めるぞ」

相変わらずム力つく奴だなあ……とにかく行くぜ！

「アリゲイツ、ハイドロポンプ！！」

『アーリヤアアア！』

最近得意技となりつつあるこの技がマタドガスに1直線に向かっていく

「マタドガス、ヘドロ爆弾！」

その攻撃は簡単に相殺されてしまった。く……やっぱり強いな……

でもな……シルバーに馬鹿にされたんじゃ帰ってからうつかうか寝る事もできやしねえ！  
絶対に勝ってやる！

「ダブルアタック！」

連続攻撃のダブルアタックを仕掛けようとマタドガスが突撃してくる。接近戦か！

へへ……手足がある分こっちの方が有利なんだ！  
そいつを教えてやるぜ！

「アリゲイツ、冷凍パンチだ！」

『アリアアアア！』

アリゲイツは自分の拳に冷気を纏わせてマタドガスを殴りつけた。僅かなりーチの差、それが勝負を決したようで、ダブルアタックがアリゲイツに決まる事は無い。手足の差だなコイツはな。それを受けてマタドガスはフウスケのツボツボの隣まで後退する。まずは1発だ！

「こいつらはかなりのやり手だ……。特に赤髪は」

フウスケはシルバーを指差し、そう言った。って待てよ！  
シルバーが一番かよ！  
オレは……オレは……

「一気にカタをつけるか、なら。マタドガス……大爆発！！！」

「！！！！？」

な……あんの馬鹿！  
なんてマネを！

マタドガスの体が莫大なエネルギーと共に収縮を始める。大爆発は、自らを戦闘不能に追い込むことで相手に大ダメージを与える究極の諸刃の剣。んな技を使うなんて正気かよ！  
くっ……どうすればいい！？

「お許し下さい、サカキ様……」

静かに呟くフウスケ。サカキだつて……誰だよそいつは……まさか……ロケット団のおえらいさんか？  
つてマタドガスが爆発しそうじゃなか！  
クソ、何をよそ見してんだよオレは！  
畜生……ここまでかよ……ん？  
急にマタドガスの動きが止まったぞ？

「ゴールド！」

「……フン、やるな」

全く頼りになる奴だぜ……ゴールドはエーフィに念力を発動させて爆発を止めていた。いよいよ本当に念力なのか怪しくなってきたぞ

……

「イツキさん、何かしらの方法で雨を！」

「わ、分かった！アリゲイツ、雨乞いだ！」

『アリヤー！』

オレは焦って指示を出すとアリゲイツが両手をあげた。すると室内  
つて事にも関わらず雨が振り始めた。

「これでいいのか!？」

「ええ。いくよ、エーフィ。僕らの新技!！」

『フィ!!!!』

その言葉と同時にエーフィが身代わりを発動させ、もう1体のエ  
ーフィが現れる。一方、拘束を解かれたマタドガスは大爆発を発動  
させるも、それは不発に終わる。

「な、何!？」

驚くサンジ。そこへシルバーが説明する。全くそれ程度の事考えれ  
ば分かるだろ……

「雨を降らせた事で湿り気が増えて、大爆発はその湿り気で起爆し  
なかつたんだよ。分かったか!砂嵐!！」

その言葉と共にサナギラスの砂嵐がマタドガスとツボツボの動きを  
拘束する。ゴールドがイツキにこう言った。

「イツキさん、アリゲイツにいつでもアクアテールか冷凍パンチを  
放てるように指示をお願いします!」

「わ、分かったけどよ……何すんだ?」

「見てれば分かりますよ。エーフィ！」

その瞬間に1体のエーフィが高々と飛び上がり、地上のエーフィがシャドーボールをその飛び上がった方向へ撃ちだす。身代わりのエーフィがそれをアイアンテールで撃ち返し、その進行方向に走っていたエーフィがさらにアイアンテールでそれをイッキのアリゲイツに放ってきた。そういう訳な……バレーボールと行きますか！

「アリゲイツ、アクアテールでスパイクを決めてやれ！」

『アーリヤア！』

アリゲイツが勢いよく尻尾を奮うと、強烈な勢いでマタドガス達に向かって進み始めた。シャドーボール＋水のパワー……コイツで決まりだ！

それは直撃したのか、大きな爆音を起こす。

「どつだ……？」

オレはそう言った後に目を凝らした。爆煙が晴れ、見えた先には目を回して倒れるマタドガスとツボツボがいた。フウスケ、サンジ共に信じられないという顔をしている。

「やりましたね」

ゴールドが勝利を確信させる一言を言った。ん？

コノハ達も終わったみたいだな。相手側も啞然とした顔をしてやがる。オレ達は油断をせずに構えを解かずに4兄弟を睨みつけた。その中、シルバーが口を開いた。

「機密資料はどこだ？」

威圧をかけ、シルバーがロケット4兄弟に聞いた。全くコイツは本  
当に年下かよ……

「フン、我々もならば知りたい事がある。取り合ってくれるなら、  
構わないが？」

と、フウスケが尋ねてきた。なんだ？

「何が狙いだ！？」

アキトが食い付いた。なあ……オレはさっきから地味に出番が無く  
て悲しいんだけどさ……何か言わせてくれよ……

「我々はお前と会った試しが無い。なのに、何故我々を知っている  
？いや……幹部しか入れぬこの部屋にどうして入れた！？」

「どうせ、入口の2人から吐かせたんでしょ！考えなさいよ！！」

フウスケの問いにコノハが怒鳴り返した。流石コノハ、恐怖の魔神  
様だぜ……って睨まないでくれよ……変な事を考えるオレが悪かつ  
た。ごめんなさい……オレは無言で頭を下げる。ああ、空気が読め  
てねえ……

「……この部屋の暗号はその幹部でないと知らないんだ。下っぱが  
知るわけ無いだろう」

「「……」」



な、なんだって……オレはその瞬間にシルバーを見る。本当にこのときか頭の生意気なガキは何者なんだ？てかよ……今のフウスケの話が本当なら、シルバーはロケット団って事だぜ？  
ただどならなんでロケット4兄弟が知らないんだ？  
全くもって謎だぜ……

「……簡単な事だ、俺の知り合いがロケット団。ただ……それだけだ」

「シルバー、君は一体……」

ゴールドがシルバーに尋ねる。うん、それはオレも聞きたい。

「その暗号、聞かせてくれない？」

「……ヤドンの尻尾、ラッタの尻尾だ」

口から出た暗号にオレはもちろん、その他全員が呆れの表情を見せる。いくら何でも単純過ぎだろ！  
トップの顔を見てみたいぜ！

「今だ！」

！？

不意をつくようにホカゲが煙玉で辺りの視界を眩ませた。

「ち、畜生！逃がすかよ！」

そう叫んでみるも、完全に不意をつかれた。対応しなかったのだが反応が遅れてしまった。くそ！

オレの馬鹿！

煙が晴れると勿論、4兄弟はいない。逃がしたか……

「シルバー、君はロケット団をどこまで……」

「知らなくていい」

詮索すんな。って事だろうが、逆に好奇心がくすぐられるな。

「待てよ、シルバー。仲間だろ、オレ達？」

オレはそう言ってみる……我ながら臭いセリフだ。その言葉を聞きながら目的の品を探すシルバー。机の引き出しにそれはあったみたいだ。それを取り出すところ返す。

「仲間？俺はただ、目的が被っただけで一緒に戦っただけだ。勝手な事を抜かすな。仲間でも何でもない」

「ちよつとアンタねえ！」

今の発言には全員が顔を顰めた。当然のごとく、コノハはつつかかった。

「……師匠そっくりで腹が立つ」

シルバー小さく言った。師匠だと……師匠と言える人物がいたのにどうしてこうなったんだ！

師匠は……何を教えてたんだ！

「……じゃあな」

！  
そのセリフを吐いた瞬間、ヤミカラスを出して黒い霧でオレ達の視界を遮るシルバー。目的の品を取った今、要は無いつて事かよ！  
オレは何も言わずに強く拳を握り、シルバーの腹がたつ態度への怒り、シルバーをあんな風になるのを止めれなかったシルバーの師匠への怒りの捌け口として近くの壁に叩きつけた

V S ロケット 4 兄弟 (後書き)

次回に続く

「お熱いのは良いですけど」（前書き）

今回はラン編、カズマ達と別れたラン達は……

「お熱いのは良いですけど」

カシスとカズマくんからユースケが捕まっている廊屋の鍵を貰って、あたしとクリスちゃんはユースケの捕まっているという廊屋を目指して進んでいる。何回も……

「いい加減にしろこのガキ共！ここで終わりにしてやる！」

また出てきたよ……あたしは素早くベルトからボールを取り出して投げた。それからロコンが元気よく飛び出した。

「邪魔しないで！ロコン、怪しい光！」

『ロコン！』

あたしの指示でロコンはあからさまに怪しい光を放った。それは出てきたロケット団員に当たり、ロケット団員は混乱してしまいフラフラになる。うん、上手くいった！  
これで追って来れないよね

「ありがとうロコン！」

あたしはそう言いながらロコンをボールに戻して歩速を上げた。

ユースケ視点

「このおおおお！」

僕は廊屋の扉をぶち破ろうと、本日何回目かも分からないタツケルを行なった。肩に嫌な痛みが走るが、肩が痛むだけで扉はビクともしない。両手が手錠で封じられてるから思ったように力が入らないし、ギャラドスのハイドロポンプのせいで受けたダメージもかなり大きく、こつやつて体当たりするのも辛い……

「ユンゲラー、ボールから出れそう？」

僕はボールの中にいるユンゲラーに尋ねる。そういうのは、マリルリのボールを除く全てのボールが壊れているからだ……多分、ギャラドスのハイドロポンプを受けて叩きつけられた時に……マリルリにはボール越しの意思の疎通が出来ないから手を使えなくされている以上出す事は出来ない……

『ダメだな……にっちもさっちもいかねえや……修理して貰うまで無理だな……』

うつ……最悪だあ……ロケット団に何故か捕まった僕は廊屋に叩き込まれている。ラン……無事であるよね？

僕は自分が体を張って守った女の子の事を考える。ラン……どうしているんだろう……にしても早く脱出しないと、このままここに

たら殺されるか、カズマみたいになれちゃうよ。それだけは嫌だ！  
僕自身もそうされるのはご免だし、そんな事になったら……また、  
ランを泣かせちゃうな……

！

急に足音が聞こえてきた。2人ぐらいかな？

徐々にこつちに迫って来ている……なんだろう……普通なら嫌な予  
感がするハズなのに、嫌な予感がしない……もしかして……鍵が開  
く音がした。そして扉が開く……

「ユースケ！」

「ラ、ラン！」

僕は扉の先にいた少女、ランの名前を呼んだ。

「大丈夫ですか？」

ランとは別にもう一人女の子が僕に対して言った。ゴールド達とい  
たクリス似の女の子だ。その子はゆっくりと歩みよってきて僕の手  
錠の鍵を外した。よし……うっとうしいのが無くなって楽になったよ

「ありがとう、えっと……」

その女の子の名前を呼ぼうとしたが、名前が分からないのでそこで  
言葉が止まる。

「クリスです。よろしくお願いします」

……世の中って広いなあ……



「あ、うん、よろしく」

そう言った後に僕はランの方を見る。安心したような表情で微笑んでいるけど、そんなの作った笑みでしか無いのにすぐに気付いた。本当はさ……

「ラン、強がらなくてもいいよ」

「え……？」

僕の言葉にランが疑問符を浮かべる。僕が気付かないなんて思っているのかな？

「怖かったんだよね……僕までカズマ達みたいになってるんじゃないかってさ……ごめんね。心配かけてさ……」

僕だってランがカズマ達みたいな事になってたらさ……

「うん……ユースケ……ごめんね……ごめんね……あたしのせいで……」

そう言いながらランが僕の胸に飛び込んできた。その目には涙が溢れていて、少し泣き声になっている……また、泣かせちゃったな……普段なら背中でも叩いて元気付けようとしてもするんだけど……

「ラン、痛い！痛いから離れてよ！」

ハ……ハイドロポンプで吹っ飛ばされたダメージで……体中が痛い  
ー！

「あ、ご、ごめんね……」

い、色々と謝られたね……ま、あんまり気にしないけどね

「え〜と、お熱いのはいいんですけど、それは後にして貰えませんか？」

あ……クリスの突っ込みが入り、僕達は顔を真っ赤にしながらお互いに視線をそらした。

「後でいくらでもそうやっていいですから、今は早く脱出しましょう」

そう笑顔でいうクリスの口調はからかっている以外他ならなかった

……

「じつちです、急いでください！」

そう言いながらクリスは僕を誘導するように言う。そうは言われて

も歩くのも結構苦だからそんなに早く動けないんだよね……

「ここです！」

基地の出入口に辿りついたみたいだ。通路に比べれば広い空間になっている。奥には溜池みたいのがある。なるほど……多分彼処からポケモンにサポートしてもらうか、何かを使ったりして出入りしてたんだね……とにかく僕達も……

「逃がさん！」

っ！？

背後から感じたプレッシャー……これって……僕達はその言葉に振り向いた。そこには若干目付きが悪い男の人が……見た感じ……幹部かな？

悪いけど、さっきランに聞いた話、元に戻ったカズマ達が後少ししたらここを破壊するらしい。この人、実力もかなりのものみたいだから。マリルリしか戦えないこの状況、僕は戦力外と捉えてもいい。ランも相手がスバルに近い実力と仮定したら苦戦は必須、クリスの実力は湖での戦いを見る限り少し実力が不足している。とにかく倒すには時間がかかる。こんなのに構っていて巻き添えなんてごめんだよ！

「ロケット団にちょっとかいをかけるとはいい度胸だ。このロツカが相手になってやる」

っ！？

ロツカ……だって……

「あなたが……あなたがカズマさんとカシスを！」

僕が怒鳴るより先にランが怒鳴った。ランが怒鳴るなんて事はかなり珍しい。普段とても優しく、温厚なラン……それがこんなに怒鳴るなんて滅多に無い……強いて言えばカシスがからかい過ぎた場合に「カシス！」って声を荒らげるぐらいだ。それがここまで……それだけカズマ達にロツカがやった事が許せないんだ！

「カズマ？カシス？ああ、バレットとオレンジの事か……ああ、確かに俺がハウエンに侵略に行った時に手に入れた駒だな……」

！  
こ、駒だって！

「つくづく使えない駒だったな。実力はあるが、洗脳したのはいいが、最後の最後に理性か何か働いてかは知らんがためらって何の役にもたたなかったな」

カズマ……カシス……あの2人はやっぱり強いや……完全には……2人の心を操れなかったみたいだね

「許さない……絶対に許さない！」

ランの怒りの叫び、許さないのは僕だって同じだ。声には出しちゃいないけど今にも怒りが爆発しちやいそうだ。でも……

「お喋りはここまでだ……ハウエンの話をしたし、丁度いい……ハウエン土産でも見せてやろう」

！？

ハウエン土産だって！？

一体何をするつもりだ！  
僕達はその

「フン……来い、ラティアス」

ラティアス？

ロツカさんが何かのリモコンを取り出しそのボタンをいくつか押すと何か動く音がしたかと思うと、その背後から赤と白を貴重とドラゴンのようなポケモンが姿を現した。あれが……ラティアスか……それにしても……何か違和感がある……なんだろう……この感覚……知ってる……まさか！

「ホウエン地方に生息する幻のポケモン、ラティアスだ！本来なら気性は穏やかなポケモンだが……まあ、見て分かるように実験を繰り返した結果……心を閉ざして我々の劣兵となっているがな……」

っ！？

やっぱり……

さっきランが教えてくれたカズマの話では、あのシオンでの凶暴化電波の実験とかをしているって聞いた。今回のギャラドスの暴走はその影響だと思う……そして目の前にいるラティアス……どうしてこんな酷い事が出来るんだ……僕には分からないよ……ここで戦って止めたいけど……今は！

「ラン、クリス、一回逃げよう！」

「はい！」

「うん！ラプラス、お願い！」

『ラプラー！』

ランがボールを投げるとラプラスがバトルフィールドに登場した。僕とランとクリスは直ぐ様にその背中に乗る。

「逃げるのか！？」

「戦略的撤退だよ。ラン、お願い！」

「うん！ラプラス、白い霧からダイビング！」

ランがそう指示を出すとラプラスの回りに白い霧が発生するそれから直ぐにラプラスは海中に潜りだす。僕は潜る寸前に深く息を吸った。なんとかもってよ……ダメージを受けている以上息がもつか不安だ。だから僕はそう祈るしかなかった

「お熱いのは良いんですけど」(後書き)

次回に続く

**最強の刺客（前書き）**

今回はイツキ編、どうなる？



## 最強の刺客

「ユースケさんはここにいない!？」

ゴールドが嘆くように言った。その後、特ポケ隊が突入し、ロケツト団の前線基地は完全に制圧された。それから隅から隅までユースケさんを探したのだが、結局見つからなかった。全く……どこに行っただよ!

ユースケさんは……

「じゃあ、どこにいるのよ!？」

「宛ても無さそうだしな……」

コノハは何処にもやりようも無い怒りを撒き散らし、アキトが冷静に現在の状況を述べた。全く……だから困ってるんだよね……どうすりゃいいんだよオレ達は……ん?

ゴールドが何かに気付いたのか自分のポケットから何かを取り出した。それをゴールドは確認する……すると何かに驚いたような顔に変わった。どうしたんだ!？

「!こ、コレを見て下さい!！」

「どうしたの?」

ゴールドが慌てて叫ぶとユウコがそれに反応し、ゴールドに尋ねた。何が書いてあったんだ?

オレは勿論、その他のみんなもゴールドの出した紙を見る。そこには怒りの湖にもう1つの基地があるから向かえって内容が書いてあ

った。コイツは……とさか頭の奴か！  
アイツ……粹なマネしやがる……だが……

「でも、あの野郎の言う事は完全に信じられないぜオレは」  
仲間じゃないってアイツは言ったんだ。いくら共闘した事があってもあんな事言われたら簡単には信用出来ねえ。

「いや、シルバーの言ってる事はあながち嘘じゃないと思うんです。現にユースケさんが捕まった時にいたのが怒りの湖……そしてギヤラドスが大量発生した場所でしたから」

「確かにそう言われると可能性は高いな……」

ゴールドがそう言い、それにアキトが返す。それでもオレは気に入らないな……

「てめえら、何か分かったか？」

そこにリヨウマさんが駆けつけてきて、そう言った。リヨウマさんもユースケさんの事が心配なんだな……普段はアレだけどやっばり刑事さんなんだな。

「怒りの湖にもう一つ基地がある可能性がある位です」

リヨウマさんの問いに返すユウウ。リヨウマさんも驚きを隠せなかったが、ゴールドの話やシルバーの紙を見て可能性はある、と踏んだみたいだ。

「なら、早速向かうか。時間との勝負かもしれないねえしな」

「はい！……！」

リヨウマさんの言葉に全員が頷いた。そうだな……今は4の5言ってる場合じゃねえ！

いつ何があったっておかしくない。まったく……オレはバカかよ！

「シルバーがロケット団について何か知ってるってのか？」

怒りの湖へと向かいながら、リヨウマさんがオレ達に尋ねた。シルバーはロケット団の知り合いがいるって話をしてたからな……それについて聞くのは刑事としての当然の職務だよな

「リヨウマさん、サカキって誰ですか？フウスケが言ってたんですけど」

ゴールドはリヨウマさんの質問に答えない代わりにリヨウマさんに質問をする。サカキ……4兄弟が言ってた名前だな……

「サカキだと？」

「はい」

「サカキは以前シオンであった事件の時にロケット団を指揮していた男……いわはボスってやつだ。今はその行方も知れねえがな」

ロケット団のボスか……また厄介な奴が出てきたな……まったく……なんでこんな組織を作るんだろうね……その男はさ……更に今更復活させるか……めんどくさい奴だぜ

「サカキ殿は確かに偉大でしたよ」

！？

オレ達の前に突如黒いタキシード姿の男が現れた。背には黒のマントを羽織った黒髪の男だ。若干恥ずかしくないか？

あの恰好はさ……そう突っ込みを入れたいが、空気を読まずに突っ込みを入れるのはやめておこう。今突っ込みを入れたらただのKYだ。

「……君達がフウスケの言っていた子供達か？」

恥ずかしい男が口を開いた。コイツ……！

「ロケット団！」

オレが驚きの声を上げてすぐにみんなはボールを持ち構え、オレもそれに見習うようにベルトに手を回す。そして、その男の背後から出でる更なる数のロケット団。もしかしてあの痛いマントの中に隠

れてたのか？  
ま、それは無いか

「お前達はあのリヨウマとやらの相手をしろ」

「ハッ」

恥ずかしい男がそうその他の団員達に指示を下すと、オレ達の前に立ち塞がるように前に出てかまえた。ち……コイツ……手強いぞ！

「さて、君達5人の相手この俺……ジネルバがさせてもらおう。フウスケが言うにはまだ1人いるようだが……まあいいか」

ジネルバ……それがこの恥ずかしい男の名前か！

もう1人、とんがり頭の事だが、アイツはいない。そう考えるとジネルバはメガヤンマを繰り出してきた。ならオレはコイツだ！

「頼むよ、メリープ！」

「ガーディ、お願い」

「ピジョン、君に決めた！」

「頼むわよ、ヨルノズク！」

「チルタリス！！」

コノハはヨルノズク、アキトはチルタリス、ゴールドはメリープ、ユウコはガーディ、そしてオレはピジョンを繰り出した。いくら強くても……この戦力差なら！

「成る程。中々育ちは良さそうだな、では小手調べ……。メガヤンマ、エアスラッシュュ！」

ジネルバがそう指示を下すと、メガヤンマの羽から空気の刃が放たれた。

「ここはわたしが止めるわ！ヨルノズク、サイコキネシス！！」

ヨルノズクの目が青白く光り、エアスラッシュュを食い止めるとメガヤンマに返した。コノハのヨルノズク、知らないうちにまた強くなってるな……。オレもつかうかしてられないな……

「メガヤンマ、辻斬り」

撥ね返したエアスラッシュュはあっさりと斬り捨てられた。さすがに自分の攻撃でやられる訳はないか……。ん？

ジネルバは指示も出さず、顎に手を当て、何かを考え始めた。余裕のつもりかよ！

このチャンスに目にももの見せてやる！

「メリープ、電気ショック！」

「ガーデイ、火炎車」

「ピジョン、燕返し！」

「ヨルノズク、翼で打つ！」

「チルタリス、ゴッドバード！」

『リイイイ！』

『ピジヨオ！』

『ホオオオ!』

『ガルウウウ!』

『クルウウウ!』

まず、メリープの電気ショックが直撃し、怯んでいるところにピジョンが燕返しで急速に接近し一撃を与え、また怯んだ隙にヨルノズクが翼で叩き落とした。それでもまだ攻撃は終わらない。ガーディが炎車で落下地点に突撃し、メガヤンマは再び打ち上げられる。そこにチルトリスがゴッドバードで強襲を掛けた。そんな連続攻撃に耐えられるハズが無く、メガヤンマは地面に落下して目を回していた。……色々と踏んだり蹴ったりだな……少し悪い事をしたか？ ジネルバは軽く舌を打ちながら、メガヤンマをボールに戻した。そして再び構える。余裕なんて無い事は分かったハズだ！  
次はどうくるつもりだ!?

「……………。ジバコイル」

そついいながらジネルバはボールを投げた。するとまるでUFOのような姿をしたポケモンが現れる。ジバコイルって言ってたな……コイルの進化形か……

「少しはやるようだな……………。だが、もう手加減しない!」

!?

つ……………なんだ……………この鳥肌が立つような威圧感……………アイツ……………見た目は恥ずかしいが、嫌な威圧感を放ちやがる……………やっぱり並大抵の相手じゃねえなコイツは……………

「ジバコイル、相手ポケモン全員にロックオン」

その命令を聞いたジバコイルは機械のように視線をゆっくり向けていく。ロックオン……不味い！

次来る技は！？

「全員に電磁砲だ」

その指示を聞き、ジバコイルの両手の磁石の間から莫大な電気エネルギーの玉が放出された。マズイ！

『ガア！？』

『ホ、ホー……』

『クルウウ！？』

「ヨ、ヨルノズク！？」

「ガーディ！？」

「チルタリス！？くそお！」

まずヨルノズク……チルタリス、ガーディと次々に戦闘不能にされていく。コノハ達はやられたポケモン達の身を案じて、それぞれのポケモンの元へ駆け寄っていく。くっ……なんてパワーだよ……ロックオンされたら回避は不可能だし……くっ……このままじゃピジョンもやられるぞ！？

どうする！

どうするイッキ！？



「イツキさん、僕のメリープが電磁砲を相殺します、メリープの方に誘導して下さい!」

「だけど……」

「あれこれ言う状況じゃ無いんです!」

ゴールド……仕方ないな……それしか手が無いならそれに頼るしかない!

頼むぜ!

オレはピジョンにメリープの方へ接近するよう指示を出す。ピジョンは素早い動きでメリープの傍に移動を開始した。

「メリープ、2つ一気に相殺するよ。充電をフルパワーで」

『リッ!』

メリープはその言葉に頷き、電気エネルギーを蓄えていく。その充電量が生半可なものでないため、メリープの体が電気の光を帯び、黄色く光りだす。すげえパワーだ……今まであんなの見たことないぜ。

それと共にピジョンがメリープの傍に降り立った。

「メリープ!フルパワーの電気ショック!」

『リィー!……!』

メリープは特大の電気ショックを放った。それは2つの電磁砲とぶつかり合う。くっ……流石に2つ同時はキツイか?

メリープの表情がどんどん苦しそうな表情になるのが簡単に分かつ

た。今のうちに考える……どうすれば奴を倒す事が出来るか……

『リ、リイ………』

少しずつ押されだすメリープの電撃。不味い！

このままじゃ！

少しオレが絶望を感じたその時！

「メリープ！あなたの力はそんなものじゃないはず……真の力を見せて！私達を守るために！！」

「ユウコ……！？」

ユウコの力強い声が響いた。それに驚いたのがゴールドが少しマヌケな声を出す。うん、なんか微笑ましいな……

『リイイ！！！！』

なんだ！

その高らかな声と共にメリープは輝き初め姿を変え始めた。コイツは……進化しているのか！

やがて光が晴れた場所にはメリープが進化したポケモン、モココが立っていた。すげえ！

こんな土壇場で進化だなんてやるじゃねえか！

「このタイミングで進化とは………」

ジネルバが若干驚いた口調でいう。相変わらずの余裕っぷりが気に食わないな

「モココ、君の力……見せてくれ！」

『リイイイ！』

ゴールドの叫びに呼応するようにモココはさつきより更に大きな電撃を放ち始めた。コイツは電気ショックなんかじゃないぞ!?

10万ボルトじゃないか!

強力な電撃が2発の電磁砲とぶつかり合う。さっきまで押されていたのに今じゃ押しかえしてやがる!

凄い……凄いぜモココ!

そう思っている間にもモココの10万ボルトが2つの電磁砲を打消してしまう。へへ、勝てる希望が湧いてきたぜ!

「……やるな。だが、終わりだ」

「え?」

なっ……なんだ……完全にいきなりだった。オレにも何が起こったかも分からない。ジネルバのそんな言葉を言ったと思ったらピジョンとモココが、背後にあった木に叩きつけられ、目を回して倒れた。何かに攻撃されたのか?

「モココ!??」

「ピジョン、大丈夫か!」

オレとゴールドはそれぞれのポケモンの元へ駆け寄る。酷いダメーシだ……ピジョン……ごめんな……情けない主人でさ……

「ただの子供にしては相当なやり手。どうだ?仲間にならないか。勿論、腐った仕事はさせないがね」

く……悪役のお得意の勧誘かよ！  
誰が！

「嫌だよ、あなたが強いのは分かる……。だけど、僕達は僕達の道  
を行く！」

「ああ、お前らみたいな連中となんかオレは一緒になりたくない！」  
交渉の決裂だな……。でもそうになると今度はオレ達自身が危ないんじ  
やないか？  
不味いな……

「……仕方ない。殺すには惜しい。こちらの操り人形にでもなつて  
もらうか」

操り人形だと……

「操り人形だと……ふざけんなよ！」

「わたし、そんなのには絶対にならないわよ！」

「俺も同じだ」

オレ、コノハ、アキトはそれぞれ叫び、自分の意思を主張する。だ  
けど本格的に不味いな……。どうするよ！

「ジバコイル、トレーナーにロックオン」

っ……なんだって……。そんな事をコイツは平気で出来るのかよ！

そんなやり方、オレは絶対に認めるか！

認めないが……クソ！

今までに無い最悪のピンチ、ジバコイルが動きだそうとしたその時だった！

「リザードン、火炎放射だ！」

その声と共に灼熱の炎がジバコイルを襲った。ジネルバが慌ててジバコイルをボールに戻した。今の火炎放射は！？

「……黒いリザードン？」

「リヨウマさん！」

オレ達のピンチを救ってくれた人の名前を呼んだ。また助けられたな……にしてもリヨウマさんの黒いリザードン、なんてパワーだよ……火炎放射の熱気がここまで伝わってきやがる……

「待たせたな……。さあ、ここからは俺が相手になってやる」

おお！不良警官（本人の前じゃ言えないけどな）がかっこいいぞ！

「熱いな、まあ……別に構わない。そのリザードンはすでに墜ちているも同然だからな」

！？

なんだって……

「何だと！？」

リヨウマさんが声を荒げてリザードンの方を向く。リザードンの息

が上がっている。いつの間にこんなにダメージを受けてたんだ！？  
だってあのリザードン、チヨウジにオレ達が行く際に、かなりの長  
距離をオレ達3人とリヨウマさんに乗せて移動したのに息切れ一つ  
見せなかつたんだぜ？  
なのになんで……やっぱりピジョンの時と同じ何かが……

「……いいか。これは最終警告だ。君達はまだ伸びる……これ以上  
俺達に関わるな、貴重な卵を消すわけにはいかない」

卵……なんの事だ？

「何だと？」

リヨウマさんが声を荒げる。うっ……この2人の威圧感が強すぎて  
間に入っていけない……

「……今回は手加減させてもらったが次は本気で潰させてもらう。  
俺はロケット団のナンバー1、ジネルバだ。覚えておくと良い」

あれで手加減だって!？

ジネルバはそう言うと、人差し指を軽く曲げた。すると水の波動が  
ゴールド達とジネルバの間に激突し、その衝撃で生まれた水しぶき  
が双方の姿を隠す。

そして、その水しぶきが消える頃には当然ながらジネルバの姿は無  
かった。今の攻撃を放った奴がピジョン達を倒した奴なのか？

「……ロケット団のナンバー1……ジネルバ……」

ゴールドはそれを静かに復唱していた。畜生……あの野郎にオレは  
手も足も出なかった……もっと……もっと強くないと……オレ

は握り拳を作り、ピジョンの叩きつけられた木を力一杯殴りつけた。

**最強の刺客（後書き）**

次回に続く



「ユースケは自分の体を心配してよ」(前書き)

今回はユースケ編です。今回はなんと2話連続投稿です

「ユースケは自分の体を心配してよ」

っ……いきなり苦しくなってきたぞ……ランのラプラスの背中にし  
がみついて湖に浮上しようとする僕とラン、そしてクリス。嫌な予  
感はしてたんだけど、もう息が大分怪しくなってきた。ラプラ  
スの首にしっかりとまっついているランが心配そうに振り向いて僕  
の方を見ている。心配かけっぱなしだね……僕はなんて幸せものな  
だろう

「ん！？シーシー！」

クリスが何か急に騒ぎ始めた。どうしたんだろう？

僕は振り向いて、クリスの視線の先に目を向けた。

「！」

な……後方から赤色の……つまり色違いのギャラドスに乗ったロツ  
カさんが後ろから迫ってきた。やっぱり追いかけてきたね……ギャ  
ラドスに指示を出すようにロツカさんが手を前に出すように振る。  
するとギャラドスは鋭い石をどこからか出現させて放ってきた。そ  
れはギリギリで外れてラプラスの脇を通過した。今のはストーンエ  
ッジ……危ない危ない……本当に間一髪だったよ。このままじゃ海  
上に上がる前にやられちゃうよ！  
応戦しないと！

僕はランにアイコンタクトを取ろうと視線をランの目に送るすると  
ランは分かっていると言うようにウインクを僕に対して送ってきた。  
頼むよ……するとランはラプラスの耳元で口の中で何かを言った。  
するとラプラスは反転して反撃の体制を取った。そこに迫るギャラ  
ドスはまたストーンエッジを放ってきた。さっきより距離が短く、

狙いは正確だ。それをラプラスは守るを使って死守する。そこからさらに怪しい光を使い、ギャラドスに命中させた。混乱したギャラドスは焦点が定まっていけない。流星はラン！

上手くやってくれるよ。再びラプラスは反転して海上を目指して浮上しようとする。息もギリギリだけど……なんとか浮上出来そうだね……そう安心仕切ったその時だった。

『ユースケ！右だ！』

「ガ……」

！？

ユンゲラーの警告が聞こえた瞬間だった……完全に不意をつかれた……側面まで迫っていたラティアスが僕に体当たりをしてきた。海上では技を使えなかったのは不幸中の幸いだったかもしれない……でも今ので……息が……ラプラスの甲良をにつかまる力が緩んだ……そのまま手が外れて……僕は何とかしようと、マリルリのボールを取り出そうとするけど力が入らない……そんな……ここまでなの？意識が薄れてきた……そんな中、ラプラスが怪しい光を使ってラティアスを追い払ったのが見えた。よかった……ごめん……みんな……ラン……

！？

息が……続く？

突然息が続くようになった。一体何が……僕はそれを確認するために僕はうつすらと目を開いた……！！！！

ラ……ラン！？

僕が目を開くと……その……なんていうか……ランと僕の距離が0になっていた。なんというか……唇と唇が……それで口移しで僕に空気を送ってくれている……わああああ！  
な、な、な、何だつてえ！

ラ、ランとキ、キス……うわあああああ！

凄いい嬉しいけど喜んでられないよ！

ランは唇を離すと僕は目をしっかりと開いた。するとランはにっこりと微笑んだ。でも顔は真っ赤……無茶するから……かくいう僕も多分真っ赤なんだろうけどね……僕は状況を確認するために辺りを見回す。ラプラスはすでに海面スレスレまで移動していた。ラン、ラプラスから離れて僕を追ってきたの！

無茶するよ！

ラティアスとロツカさん達はまだ混乱しているみたいだ。よし……  
また息が危なくなっても困るしさっさと海面に上がろう！

僕はマリルリのボールを取り出し、手に取った。そしてそれからマリルリを出しす。

「浮上したいからサポートお願い」

僕はマリルリの耳元で口の中で言って伝える。するとマリルリは胸元をポンと叩くと僕の腕を掴む。僕は反対の手でしっかりとランを離さないように手を握った。ランはそれを握り返してくる。絶対に……息が続かなくなってもこの手は離さないよ……マリルリはそれを確認すると猛スピードで浮上し始めた。そして一気に光溢れる海面上に脱出した。その瞬間、僕は口を大きく開いて息を大きく吸った。

い、生き返る〜

「ありがとうマリルリ、助かったよ」

『マリイ!』

僕がそう言うとマリルリは嬉しそうに鳴いた。僕はその頭を撫でてあげる。それから僕はランの方を向いた。ランも大きく口を開いて空気を取り入れている。それが終わったのを僕は確認すると、僕はランに声をかける

「ラン、大丈夫?」

「うん、大丈夫だよ。それよりユースケは自分の体のしてよ。ユースケの怪我は凄い酷いんだからね?」

そう言いながらランは僕の胸をトンと軽く叩いた……うっ、痛い……

「ランさん!ユースケさん!大丈夫ですか!」

軽くじゃれ合っている所にクリスがラプラスに乗って近づいてくる。僕とランはゆっくりとそれに近づいていき、背中に乗った。乗る事にも一苦労、ランとマリルリに補助してもらってなんとか背中に乗った。ふう……とりあえず一安心だよ……

「ありがとうクリスちゃん、ラプラス」

そう言いながらランもラプラスの背中に乗る。

「いえ、むしろお二人の邪魔をして悪いぐらいですよ。ね、ラプラ

ス？」

『ラプー！』

クリスがまたからかうように口を開くと同意するようにラプラスが鳴いた。うう……からかわないでよ……さっきあんな事あったばかりだからさ……僕とランの視線が合う……しばらく無言の後お互いに真っ赤になって顔をそらした……うう……恥ずかしい……

「ク、クリスちゃん！」

ランが真っ赤になりながらそう怒鳴った。僕はすでに真っ赤になって何も言えない。しばらくこんな感じで談笑をしながら湖を移動するなんとか岸に辿りついて僕達は陸に降りた。

「ラプラス、よく頑張ったね。ありがとう」

ランはそう言いながらもラプラスの頭を撫でてあげている。その表情はいつものように笑顔だ。やっと色々と荷が降りたみたいだね。本当によかったよ……

「俺達を忘れるんじゃない！」

『G R A A A A！』

「っ！」

完全に不意をつくように赤いギャラドスに乗るロツカさんが現れた。か、完全に忘れてたよ……

「ギャラドス、ギガインパクトでラプラスを吹き飛ば……」

「ラプラス、雷を使って！」

『ラプー！』

『GRA！？』

ロツカさんの指示をよりも早くランが指示を出した。ラプラスの角から雷が放たれ、その一撃でギャラドスは沈黙した。ロツカさんは雷が直撃する寸前にギャラドスから飛び降りて陸に着地したそれから僕達と距離を取って対峙する。

「くっ……えげつないガキめ……来い、ラティアス！」

ロツカさんがそう言うのと湖からラティアスが飛び出してきた。ラティアス1体ぐらいなら、僕達が力を合わせれば……

「それだけでは無いぞ。ブーバーン、エレキブル！」

『ブー！』

『グオオオオ！』

っ！

更に追い討ちをかけるように2体の強力なポケモンを繰り出してきた。コイツは本格的に不味いな……でも幸運にもラティアスとロツカさんは正反対の位置にいる。悪く言えば挟みうちに合っている状態だけど、良く言えば戦力が分散しているって事だ。なら僕達もチームを分散させる事が出来る。それなら有利に戦う事が出来るハズだ！

「ラン！」

「うん、ラティアスは任せて！」

僕の次の言葉を分かっているようにランが言った。相手は幻と言われているぐらいのポケモン。その力は未知数だ。なので一番実力が高いランに相手をしてもらおう事にする。頼むよ……さてと僕とクリスは……

「行くよ、クリス！サポートお願い！」

「はい！」

僕がそう力強くいうとクリスが力強く頷いた。そこでクリスはボールを出して投げるとピカチュウが飛び出してきた。僕も行くよ！

「頼むよ、マリルリ！」

『マリイ！』

僕がボールを投げると再びマリルリが飛び出してきた。もう一回頼むよ！

「ごさかしい小僧が！エレキブル、雷！ブーバーン、大文字だ！マリルリを狙え！」

そんな指示をすると2匹はそれぞれ雷と大文字を放ってきた。ピカチュウは後回しにしても大丈夫って考えみただ。もちろんそんな猛攻の中を防御力が低いピカチュウを突っ込ませるのは無謀だ。技量が高ければ問題ないけど、あいにくクリスのピカチュウはそこま



で技量は高くない。とにかくこの攻撃を切り抜けないとね！

「ごさかしくて悪いか！マリルリ、アクアジェット！」

『マリイ！』

マリルリは水を身に纏いつつ、超高速でブーバーンに突撃する。エレキブルの雷はアクアジェットによる加速で擦りもしない。大文字に至ってはアクアジェットを使っているマリルリにはあまり苦では無い様子で、簡単にアクアジェットで突き抜けた。行け！

『ブウ！？』

アクアジェットの一撃が見事に決まりブーバーンが大きくのけぞった。僕のマリルリの特性は力持ち、圧倒的なパワーを発揮する事が出来る特性で、そのためパワーは前までトップだったキングラーだつて超えるんだ。そんなに甘くないよ！

「く……雷でブーバーンを援護しろ！」

『グオオオオ！』

雷がマリルリに向けて放たれた。これがチャンスだ！

僕はクリスに視線を送る。するとクリスは分かったように頷いた。さ、行くよ！

「マリルリ、ブーバーンを怪力で投げとばして雷から身を守るんだ  
！」

『マアアライー！』

『ブヴヴヴヴ!?』

「な……ブーバーン!」

マリルリは僕の指示通りにブーバーンを迫る雷に向かって投げて、それを盾として利用した。ブーバーンには少し悪い事したかな?

「調子に乗るな!エレキブル!電光石火で……」

マリルリに近寄れ!って言いたかったみたいだけどさせないよ!

「水鉄砲!」

『マリイ!』

マリルリはフラフラになりながらも立ち上がったブーバーンに水鉄砲を当てて吹っ飛ばした。それはエレキブルに激突し電光石火を発動し損ねる。ブーバーンもエレキブルも激突した衝撃から立ち直ろうと首を振っていた。今だ!

「行くわよ!ピカチュウ、目覚めるパワー!」

『ピイッカ!』

「な、何!?!」

完全に奇襲だった。僕のマリルリが拡乱によって完全に空気になっていたピカチュウ、マリルリだけに集中していたためこの奇襲が与えるダメージは非常に大きい!

ピカチュウが水色のエネルギーの結晶を雨のようにブーバーンとエレキブルにぶつけた。それを受けたブーバーンは完全に伸びてしまった。流石にあれだけダメージを与えればね！

「クソオ！舐めるな！」

そう奇声とも取れる声をロツカさんが出すとエレキブルがピカチュウに攻撃を仕掛けてきた。怒りに身を任せたら単調になるんだよね！

「ピカチュウ、フラッシュ！」

クリスがそう指示を出すとマリルリと僕はしつかりと目を被った。それにより眩い光が放たれた。僕は直ぐ様両手を離してマリルリに指示を出す。

「今だ！アクアジェットから気合パンチだ！」

『マリイ！』

僕の指示でまだ目を両手で目を押さえて苦しんでいるエレキブルに突撃していく。これで決めてやる！

「行っけえええええ！」

『マアアライイイ！』

マリルリの気合パンチは炸裂した。その一撃でエレキブルはそのまま地に伏せた。どうやら気を失ったみたいだね

「くっ……やるな……」

ロツカさんがそう言うと2匹のポケモンをボールに戻した。何を考  
えてるんだ……

「だが……お前達の仲間は苦戦しているみたいだぞ」

っ！

ランが！

僕は振り返ろうとした時だった！

「その甘さがお前達の弱点だ！ゲンガー、催眠術！」

！？

やられる！？

しまった！

完全に不意をつかれた。ロツカさんの出したゲンガーは一気に僕の  
目の前まで突っ込んでくる。そして何かの暗示をかけるような動き  
……ってアレ？効いて無い……どうしたんだろう？

「よくやったわね、バタフリー」

僕の隣にいるクリスが自分の腕に止まっているバタフリーにそう声  
をかけた。もしかして……

「甘かったわね！卑怯な攻撃なら予測済みよ！バタフリーの神秘の  
守りで無効化させて貰ったわ！」

そんな言葉をロツカさんに投げつけた。神秘の守り、眠りなどの異  
常にさせる技を無効化させる技である。ふう……おかげで助かったよ

『ケケ？』

自分の技が失敗した理由が分からないゲンガーは混乱状態に近い状態にある。そこに容赦なくバタフリーはサイケ光線が放った。その効果は抜群の一撃は長時間照射され続けゲンガーは堪らずにダウンしてしまう。

「くっ……バカな……」

不意打ちも失敗してもう手も足も出ないんだろう。声にもならない声を発している。

「大人しくしてください！あなたはもう負けたんだ！」

僕は力強く叫んだ。肋骨あたりがかなり痛むが我慢する。

「ぐ……ここは引くしかないか……」

なっ……逃げるつもりなの！？

『逃がすなユースケ！アイツだけはオレが殴りたい！絶対に捕まえる！』

な、何……その色々と勝手な理由……ユンゲラーの言葉にそんな突っ込みを入れたい衝動にかられてしまう。とりあえず逃がす訳にはいけないのでマリルリに指示を出そうとする……その時！

「じゃあな！」

そうロツカさんが言うとか何かの玉を地面に叩きつけた。急激に発せ

られた光に僕の目はくらんでしまっ。

『チッ！スタングレネードか！』

ユンゲラーの補足、その眩い輝き……ロケット団お得意の目くらましか……お馴染みの手段だ……輝きが収まった頃にはもうそこには誰もいない……しまった……逃げられたかみたいだね……でも助かったよ……

「やりましたね、ユースケさん」

そうクリスは言うけど僕はまだ油断をする訳にはいかない！

「マリルリ行こう！」

『マ、マリィー！』

僕はそう言ってランの隣へ向かって駆けていく。体中が痛いのが気にしてられない！  
ラン、今行くよ！

「ユースケは自分の体を心配してよ」（後書き）

ラン「……あたし……やっちゃった……」

うん、ユースケとキ……

ラン「わあああ！い、言わないでよ！凄く恥ずかしいんだから！」

ごめんごめん、とにかく次回に続きます。

「あたしが、傍にいるから」(前書き)

ラン編です。ランはどうラティマスと戦うのか？



「あたしが、傍にいるから」

あたしとラティアスは正面に対峙していた。ロツカさんはユースケとクリスちゃんを押さえてくれるからあたしは安心してラティアスと向き合う事が出来る。凄い安心感……この状態を作ってくれたユースケ達に報いるために……あたしは……絶対にラティアスを止めてみせる！

「お願い、ロコン！」

『コーン！』

あたしがボールを投げるとロコンが元気よく飛び出した。あたしのポケモン達は基地の中での連戦で大きく消耗している……ラプラスは特に疲れているみたいで、さっきの雷も威力にキレが無かった。相手がギャラドスだったから倒せただけ……ピカチュウもフシギソウもガルラーもエーフィも連戦で疲労してるから、今のあたしのポケモンで一番疲れてないのはロコンだけだよ。相性はどうかは分からないけど、やれるだけやってみる！

「行くよ！火炎放射！」

『コーン！』

あたしの指示でロコンは火炎放射を放った。一直線に伸びていくその攻撃、それに対してラティアスは動こうともしない。ラティアスは動かずに水色のエネルギー球を放ってきた。その攻撃によって火炎放射は相殺されてしまう。今のって水の波動だよ……火炎放射を完全に相殺するって事はかなりの威力って事だよ？

そう簡単に行く相手じゃないって事だね……集中していくよ！

「ロコン！電光石火から影分身で拡乱して！」

そうあたしが指示を出すとロコンは動き出した。電光石火と影分身の連携のおかげでいい感じで拡乱になっている。さあ、行くよ！

「火炎放射で攻撃して！」

ロコン達は口を開き、炎のエネルギーを溜め始めた。これは避けられないよ！

『！』

！？

攻撃の瞬間にラティアスがエネルギー球を放ってきた。それは地面にあたり拡散した。それが霧になってロコンの視界が塞がれる。この技……あたしの知らない技……もちろん、ロコンはラティアスを見失って攻撃を中断する。どうしよう……っ！

「あれって……流星群……！ロコン、守るを使って！」

『ロコン！』

霧の中からの奇襲攻撃、ラティアスが強大なエネルギーの塊を作りだし、隕石のように降らせてきた。か、影分身と一緒にロコンを吹っ飛ばすつもりなの！？

あたしは焦って守るの指示を出すとロコンの前に光が発生する。エネルギーの隕石はそのまま地面に落下した。その衝撃で強風が発生した。わわわわ……飛ばされちゃうよ！

あたしはしゃがんで吹き飛ばされないように踏ん張る。な……なんて威力なの？

やっぱり幻のポケモンって言うだけあるよ……凄いやつ……え……泣いてる……さっきまで凄い攻撃で攻めてきたラティアスが泣いてる……そっか……辛いんだよね……泣く事が出来るならまだ大丈夫……絶対に助けるから！

「ロコン、大丈夫!？」

強風が治まってすぐに、あたしはロコンに尋ねた。あんなの守るが発動してたって心配になるよ……

『コーン!』

ロコンはこつちを向いて鳴いた。大丈夫みたいだね……あたしは一息をついた後に直ぐにラティアスに視線を戻した。この子……本当に強い……一瞬でも隙を見せたらしたら簡単にやられちゃうよ……どうしよう……あたしは考えを巡らせる。まずは動きを停めない  
とダメだよ……

「ロコン、電光石火で距離を詰めて!」

『コーン!』

ロコンは吠えながらも電光石火を使い、高速で距離を詰めていく。

『!』

それを迎撃するようにラティアスは竜巻のようなエネルギー波を連続で放ってきた。竜の波動ね!

でもあたしのロコンはそんな短調な攻撃に当たるほど甘くないよ！

「ロコン、スピードはそのまままで避けながら接近して！」

そんなあたしの指示を受けてロコンは竜の波動の中を駆け抜けていく。これぐらいの攻撃を避けれないとユースケやカシスとはまとも  
に戦えないよ。それじゃ、行くよ！

「怪しい光を使って！」

『ロコン！』

スピードを生かして側面まで回って怪しい光を使わせた。不気味な  
光をロコンは発生させて、それはラティアスに向かって行く。

『！』

ラティアスの目の前に光の膜が発生した。それに怪しい光はその膜、  
『守る』に阻まれてしまう。今！

「今だよ！炎の渦！」

『ロコン！』

あたしの指示でロコンが炎の渦を放った。その炎の渦はラティアス  
に向かっていく。これで動きを止めれば！

『！』

「えっ！？」

『コン！？』

炎の渦が決まると思った瞬間だった……なんとラティアスはその炎の渦をサイコキネシスを使って方向を捻曲げてきた！  
もちろん炎の渦は外れて、ロコンはスキだらけ、それを逃してくれるほどラティアス甘くなかった……

『！』

『コン！？』

「ロコン！」

ラティアスがドラゴンクローを発動してロコンを吹き飛ばした。そしてそこに向かってラティアスは強力な光線を放ってきた。あれは……破壊光線！？

ロコンは防御体制に入ろうとしたが、間に合わない！

「ロコン！」

あたしはロコンの元へ駆け出そうとする。ダメ！間に合わない！

「ロコーン！」

またあたしは叫んだ。そんな時だった

『大丈夫』

え？

そんな優しい声が聞こえてきたような気がした。今は……あたしの知らない声……でも、どこかユースケに似ていて……そう考えていると破壊光線が何か別の光線によって相殺された。今の……何!?

「え……」

あたしの隣を何かが駆け抜けた。その何かはロコンとラティアスの間を割るように入る。あのポケモンって……

『ラティアス、正気に戻るんだ！僕だ！お兄ちゃんがだ！』

その何か、青と白を基調とした、ラティアスにそっくりなポケモンが叫んだ。これってやっぱりテレパシーだね？

あ……ロコンは!?

あたしはロコンの事を思い出して、すぐにロコンの元へ駆け寄る。

「ロコン、大丈夫？」

『ロコン……』

ロコンは辛そうに立ち上がりながら頷いた。でも……もう限界だよ

……

「無茶しないで……後はあたしが頑張るからロコンは休んで」

あたしはロコンの背中を撫でながら言うとロコンはそのまま座り込んだ。気が抜けちゃったのかな？

あたしはそんなロコンに笑みを浮かべながらボールに戻した。

『ロコンは大丈夫だったかい？』

「あ……うん、ありがとう！え」と……」

あたしの言葉はそこまで言った所で止まってしまつ。あたし、この子の名前知らないよ

『僕はラティオスっていうんだ。よろしく！』

「あ、うん……よろしくね」

丁寧なポケモンだね……名乗ってくれるなんて……

『聞きたいんだけど、妹は……ラティアスはどうしてあんなのに……あれじゃ、ただのモルモットじゃないか……』

ラティオスとラティアスって兄妹なんだね……それにこんな残酷な事を言わないとイケないの？

「ロケット団っていう人達に捕まって……実験対象にされて心を閉ざしちゃったんだよ……」

『そんな……』

あたしとラティオスは共に声のトーンが下がっている事が分かった。とても辛いけど……心を閉ざしてるなら開いてあげればいい……だから！

「ラティオス、力を貸して！あたしは……ラティアスを助けてあげたいの！お願い！」

『分かったよ！僕に指示を出してくれ！まずはラティアスの動きを止める！』

ラティオスのあたしの言葉に対する返事を聞き、自然に笑みが漏れた。

「うん、任せて！」

ラティオスの言葉に力強く頷く。方針はさつきと同じで動きを止める事……ラティオスの使える技……多分ラティアスと似たり寄ったりだと思つから……程々にダメージを与えて……それから説得をしないかね

「行くよ、ラティオス！まずはラティアスの視界を塞いで！」

『任せてくれ！』

ラティオスは身体からものすごい眩しい光を放ち始めた。アレ？ さつきのラティアスの使った技と全く違う……でも十分いい目くらましになったよ！  
あたしの目も若干くらんじやっただけど……でもあんまり関係無いよ！行くよ！

「ラティオス、竜の波動で攻撃！更に流星群！」

『手加減なしか……でもそんな事してられないな……行くぞ！』

ラティオスは竜の波動を放つ。ラティアスはがむしゃらな動きをしてそれを回避した。いくら視界を封じてもこれぐらいは出来るよね！でもね！



『ラティアス!』

ラティオスは吠えながらも流星群を放った。その特大のエネルギーの雨は回避はできないよ!

『!』

!?

ラティアスが流星群の直撃寸前に光の膜を発生させた。今のつて『守る』……流星群によりまた大きな衝撃が発生したけど、それによるダメージは見込めない。でも……それがあたしの狙いだよ! 流星群の衝撃のせいで発生した煙から反撃のチャンスと言わんばかりにラティアスが突撃してくる。今!

「ラティオス、サイコネシスを使って!」

『そうか!』

ラティオスはすぐにラティアスに向けて念力を放った。それに対応しようと、『守る』を発動しようとその場で止まって構えるけど何も起こらない。『守る』は連続じゃつかえないよ!

『!』

サイコネシスによる強力な念力を受けたラティアスは動きを止めた。ここが勝負所だよ!

「ラティオス、しばらくそのままお願い!」

『え……ちょっと……危ないぞ!』

あたしはラティオスの警告を無視してラティアスに向かって走り出した。ラティアスはサイコネシスに逆らおうと無理に身体を動かそうとしている。大丈夫……怖くない……

『……………!?!』

あたしはラティアスを正面から抱きしめた。ユースケが……泣いてるあたしにいつもしてくれるように力強く、それで優しく……

「もう、大丈夫だよ。ごめんね……あなたを止める為でも攻撃したりして……怖かったよね?」

『……………』

ラティアスがサイコネシスへの抵抗をやめた。ラティオスはそれを感じたのか、サイコネシスを止める。さっきまで感じていたサイコネシスの圧迫感が無くなった。

「今まで、辛かったよね……怖かったよね……でも……もう大丈夫だから……ほら、あなたのお兄さんも来ているよ。だからもう安心して?あたしも傍にいるから……」

『うん……』

あ……今の頭に直接響いた声つてもしかして!

「おはよう、ラティアス。あたしはラン、よろしくね」

あたしは抱きしめながらラティアスに対して言った。心を……開いてくれたんだ……よかった……ホントによかった！

『うん……ラン、ありがとう』

あたしの頭に響いた声、あたしはより一層強くラティアスを抱き締めめた。

「あたしが、傍にいるから」(後書き)

次回は多分怒りの湖編はラスト、プラネットさんとのコラボも一応  
次回で終了になると思います

## それぞれの道（前書き）

怒りの湖編、とりあえず決着です。なので、今回でプラネットさんとのコラボはとりあえずは終了です。

## それぞれの道

「ラン！大丈夫！？」

僕はランの元へと駆け寄る。ランはラティアスを抱きしめながら僕の方を向いて微笑む。うう……相変わらず弱いなあ……ランの笑顔にさ……

「ユースケ！うん、あたしなら大丈夫！それにラティアスも！」

そうなんだ……ラン、やったんだ！

「ランさん、凄いですよ！」

クリスがランを賞賛する。うん……本当に凄い事を行ったよ！

「あたしはほとんど何もしてないよ。頑張ったのはラティオスだよ」  
そう言いながらランはラティアスそっくりのポケモンの方を向きながら言う。そっか……あのポケモン、ラティオスって言うんだね。

『イヤ、ラン、君のおかげで妹を正気に戻せたんだよ。ありがとう』  
ラティオスが照れ臭そうにそう言った。あらら、随分人間らしいポケモンなんだね……

『ねえ、ラン……ちょっとお願いがあるんだけどいいかな？』

さつきまで黙っていたラティアスが口を開いた。どうしたんだろう？

「ん？何？」

ランはラティアスから離れて笑顔で尋ねる。なんかホント少し見ない間に前よりも素敵になったなあ……何か……ランを強くするような事があったのかな？

『私も、ランと旅をしていいかな？』

「『え？』」

ランとラティオスが同時に疑問符を出す。そりゃねえ……いきなりそんな事言われてもねえ……

『私ね……あんな事があったからさ……一人でいるのが怖いのも、ランと一緒になら乗り越えられる。そんな気がするから……』

……そうだよね……あんな目にあつたらさ……普通は恐怖は覚えるよね……

『ダメかな……？』

そう半分諦めた感じで言うラティアス。そんなのさ……決まってるよ。

「じつん、そんなこと無いよ。よろしくね、ラティアス」

『じつん、よろしく……』

ランの言葉にラティオスは笑顔で頷いた。これで一安心かな？

『ユースケ……だっけ？』

？

不意に頭に響いたテレパシー、これはラティオスのものだね。

「うん、そうだけど。どうしたの？」

『僕は君に着いていっていいかい？』

え……一切予想してなかった事を言われた。な、なんで……

「どうして僕に？」

『妹が心配だからな、ランと旅をしてる君の元で妹を見守りたいんだ。そんな理由じゃダメか？』

僕の質問にラティオスはそう答える。なるほどね……納得だよ

「分かったよ。ラティオス、よろしくね」

『ああ、よろしく頼む』

僕とラティオスは握手を交わす。うん、いい友達になれそうだよ。

「あー！」

「ど、どうしたのクリスマスちゃん……」



急にクリスが奇声をあげ、それに驚いたランがどうしたのか尋ねた。本当にどうしたんだろう？

「いえ……アタシ達、誰にも何も言わずにここに来たじゃないですか……少し不味いなあって思いました……」

「あ……」

クリスの言葉を聞き、ランも少しバツが悪そうな顔をする。ラン……何やってるんだい……

「えっと、すぐに電話しよっか？」

「そ、そうですね」

ランはクリスが頷いたのを確認すると、腕に巻いてあるポケギアに視線を移す。だれかに電話をするつもりかな？

プルルル プルルル

しばらく無機質な電話の呼び出し音が鳴り響く……そして……

もしもし……

呼び出し音が止まり、ポケギアから女の子の声が聞こえてきた。誰だろう？

「あ、ユウコちゃん？あたし、ランだよ」

「アタシもいるよー！」

ランさん、クリス……今までどこに行ってたんですか？

ランの電話の相手、ユウコって女の子が言った。なんとなくその声に怒気を感じる。心配してたんだね……

「ゴ、ゴメンね……」

ランが謝罪の言葉を口にする。まあ、当然だよ……

「それよりランさん、ユースケさんの居場所が分かりました。怒りの湖の海底基地です」

……必死にそれを伝えてくれるユウコ……うっ……悪い事をしていく気がする……

「ユウコちゃん、その……言い難いんだけどね……」

なんですか？

……ホントゴメンなさい……

「ユースケならもうあたしとクリスちゃんが助け出しちゃった」

ええええええ！？

ランのポケギアから沢山の驚きの声が響き渡り、僕達は耳を塞いだ。そりゃ急にそんな事を言われたら驚くよね……

た、助けちゃったんですか！？

ユウコのその質問にランが「うん」と答えてみせる。それから……

ユ、ユ―あのとさか頭必死になって言うな

ポケギアの向こうは、一斉に喋っているのか、色々な声が乱れるように聞こえてくる。な、何を言ってるか聞きとれない……

今、どこに？

「怒りの湖の湖面だよ」

ユウコの質問にランがそう返す。やっぱり戸惑っているのが、その喋り方から伝わってくる。

じゃ、今から合流しませんか？ イツキさんやコノハさん、アキトさんにリョウマさんもいますし

「皆いるのー!？」

ユウコの言葉にランは驚きの声を上げる。それは驚くよね……僕も実際にビックリしてるんだしさ……ゴールドはともかく……なんでイツキとコノハ、それにアキトまで……

はい、皆います。じゃ、向かいますね

その言葉を最後に電話が切れた。アレ？  
どうしたんだろう？

ランが凄く嬉しそうな顔をしてるけど……

「ラン、どうしたの?」

僕はそう尋ねる。するとランは笑顔のまま、口を開いて

「うん、ユウコちゃんがさ、変わったなあって」

変わった?

どういう事だろう?

「初めて会った時はね、スツゴい相磯が良くなってね、そう考えると変わったなって思って、なんか嬉しくてね」

そうだったんだ……ならこの笑顔の理由も頷けるね。それじゃゆっくりイツキ達が来るのを待つか

数分後、僕とイツキ達は合流した。なんかみんな懐かしいメンバーばかりだし、なんか前に会った時よりも頼もしく見える。アレ? 合流してスグにゴールドは膝をつく。どうしたんだろう?

「ユースケさん、すいませんでした!僕のせいで……!」

必死にゴールドは僕に頭を下げってくる。多分、最後の強すぎるフラッシュの事だよ……

「いいって。皆こつやって無事だったし……第一、ちゃんとランを守ってくれたよね。それで十分だよ」

「ユースケさん……」

そんな言葉を聞き、ようやく気持ちの整理がついたのが軽く深呼吸をして、ゆっくりと立ち上がった。  
うん？

ゴールドは視線をラティオス達兄妹に送る。珍しいポケモンらしいから、やっぱり気になるみたいだね

「あのポケモンは……」

ゴールドはポケットから、薄い箱のようなものを取り出す。ん……見覚えがあるぞ……アレってやっぱり……

「それ、ポケモン図鑑だよ……!?」

僕は驚き、思わずそう尋ねた。そう、アレはポケモン図鑑だ！

ポケモン図鑑、ポケモンのデータを収集するために開発された、ハイテクな図鑑である。ポケモンの生態を自動的に読み込んで書き込むという、ちょっとハイテク過ぎる機能を持っている。しかもアレは、サンダーズの事もあって、オーキド博士の研究所に行った時に見た、最新モデルじゃないか……

「あっ、そっか。言ってなかったっけ……。僕、オーキド博士から

図鑑完成させてくれって頼まれてるんですよ」

開いた口が塞がらないよ……イツキなんて凄い羨ましそうな顔をしてるしさ……

「クリスマスも持つてましたよ?」

「アレはアタシのおじいちゃんとおばあちゃんが博士と友人で、偶然貰ったのよ」

ポケモン図鑑のバーゲンセールだね……僕はマサラのトレーナーなのに貰えてないから、なんか凄い悔しい……

「あ、アレはなんだ!?!」

アキトが急に何かに気付いたのか、そう言う。その声にハツとして、僕達はその場に駆け寄ると、そこにはぐるぐるに縛られた物凄い数のロケット団員達がいた。

「一体誰が……」

「信じられない……」

イツキとコノハがポロリとそう言葉を口にする一方でランが口を開いた。

その様子だと、当てがあるみたいだね

「あの『おじさん』かも、やったの……」

「確かに可能性は極めて高いでしょうね……」

ランに続けてクリス。『おじさん』ねえ……

「ラン、その『おじさん』って誰なの？」

ランとクリスはそこで湖底基地の話をした。カズマやカシスの話など知っている話もあったけど、やっぱり興味を惹かれるのは、『おじさん』の話。もの凄いブラッキーの使い手か……真っ先にグリーン先輩が思い浮かぶけど、スグにその考えは打ち消す。でもなんか引つかかるな……僕は小さい頃にそんな人を見たような……確かお父さんの知り合いにそんな人がいたような、いなかったような……ま、考えても仕方ないね。その後スグに、イツキ達もチヨウジにあつたらしい基地の話をしてくれた。その中で出てきた名前、シルバー……あの赤い髪の男の子の名前らしいが、彼の登場に僕は驚いた。これも何かの因果かな……シルバー……彼は一体何者なんだ……『おじさん』と同じくらい謎だね……僕には疑問が浮かぶばかりだ。ランの話に登場した、『おじさん』に、シルバーの目的……イツキ達と戦った強敵ジネルバ……本当に謎が深まるばかりだ。僕によろしくない頭でも簡単に分かる話にして欲しい。

ザバーン

！？

不意に湖の中央から水しぶきが上がる音が聞こえた。やっと……帰ってきたんだね。僕が視線をそこに送ると、カイリユーの背中に乗った活発なイメージがある男の子と長身の割には、まだまだ幼い顔つきの女の子の姿があつた。

「カシス！カズマくん！」

ランが歓喜の声をあげる。やっぱり！

「ヤッホ〜！ラン、ユースケ、カシスちゃんのおかえりだよ〜」

相変わらずの口調で言うカシス。本当に帰ってきたんだね……そうカシスが元気よく言った後に、カイリユーはゆっくりと僕とランの前に着地した。それからカズマとカシスは降りて、「ありがとう」と労ってから、カイリユーをボールに戻した。

「よお、久しぶりだなユースケ」

「うん、久しぶりだね。無事で何よりだよ」

僕はカズマの言葉にそう返す。それに対してカズマは……

「悪い……心配かけたな。でもこの通りオレはピンピンしてるぜ」

いつも通りの調子に乗ったセリフ。それだけ聞ければ十分だった。



イツキ視点

あれから1日たった。あの後、リヨウマさんのリザードンやカシスさんのカイリユウ、カズマさんのオオスバメ、ユースケさんとランさんの仲間になったラティオスとラティアスなどに乗せて貰い、チヨウジのポケモンセンターまで帰還した。ユースケさんは嫌だときかなかったが、ランさんによって病院に強制連行された。ご愁傷様……で、怪我はそこまでは酷くないらしく、ハイドロポンプで肉体に与えられたダメージと、何ヶ所かにあった打撲、そして肋骨にヒビが入っただけらしい。まあなんとも頑丈な人だ。で、1週間は入院だそう。全く可哀想に……で、現在はゴールド達とアキトの見送りの最中

「これからゴールドはフスベに向かうんだよね？」

「はい」

オレの質問にゴールドは首を縦に振って答えた。フスベ、確かドラゴンの里とも言われている町で、多くのドラゴン使いを排出してきた事で有名だ。色々と修業するにも最適な環境らしい。フスベジムのジムリーダーのイブキさんもドラゴン使いらしく、かなりの使い手らしい。ユウイチとサクラが何回も負けたと嘆いていた。そうそう、ジムリーダーと言えばゴールドもヤナギさんを撃破したって言っていた。ヤナギさんは冬のヤナギという異名を持っているジムリーダーで、腕前もかなりのものだ。それを下すなんて流石だなと感じると同時に、負けてられないと思った。ゴールドと目的地が同じアキトとは双方が個人のペースで進みたいという訳で、別々に進むらしい。アキトなんて、バトルしまくるだろうしな……別々になって当然だな

「イツキさんもジム戦、頑張ってください」

「それはお互い様だろ？」

「そうですね」

ゴールドの言葉を聞き、オレはそう返す。すると苦笑いをゴールドはする。コイツも空元気かよ……ジネルバへの敗北……これはオレに取ってかなり大きなものだったりする。もっと強くなりたい……そう焦りを感じてしまう。

「ユウコ、もし出来たら次はバトルしない？」

「いいわ。でも、私は負けないから」

コノハはそうユウコに言った。チョウジ基地のロケット4兄弟戦の時に何かを感じたんだろうな……正反対の2人、なんかいいライバルになりそうだ。

「じゃ、そろそろ行くか」

そうアキトが言うと一足先にフスベへ向けて、その足を動かし始める。

「じゃあ、そろそろ僕達も行こうか」

「そうですね」

ゴールドの言葉に同意を示すユウコ。

「じゃあ、頑張れよな！」

「ユウコ、ワタシ負けないからね！」

ゴールドとユウコの旅の再開をオレとコノハは静かに見送る。2人の背中が見えなくなった頃、オレは口を開いた。

「んじゃ、行こうぜコノハ」

「どこによ?」

オレの言葉に疑問符を浮かべるコノハ、んなもん決まってるぜ!

「ジムに行くに決まってるだろ?ゴールド達には負けてられないぜ!」

そう力一杯言う。ユースケさんやジネルバ、越えたいものは沢山あるけれど、まずは地道に進んで行きたい。だから、ゴールドには負けてられねえ

「そうね!わたしもユウコをビックリさせるぐらい強くならなくちゃいけないもんね!」

そう力強く返してくるコノハ、お前の言葉だとなんか頼もしいぜ!

「んじゃ、行こうぜ!」

「ええ!」

オレ達はジムに向かって走りだした。そう、新しいライバルに負けないために!

## それぞれの道（後書き）

イツキ「……寂しくなるな……」

ユースケ「だね……」

なんかしんみりしてるね……

イツキ「トサカ頭にしてもさ……いたら憎いけど、いならったら寂しいもんだ……」

ユースケ「ふう……ホントなんか寂しいよ……」

とりあえずこれでコラボはとりあえずは終了です

ユースケ「それじゃ、久しぶりに次回予告行ってみよっか！」

### 次回予告

ユースケ「若干怪我をした僕は強制的にランに病院に連行されてしまっ」

ラン「って……ユースケ、やっぱり抜け出しちゃうのね……」

ユースケ「当然だよ。次回、ポケットモンスターACEとSECCO ND SEASONの「もうちょっと我が俥になっよ」『次回もポケモン、ゲットだよ！』」

ユンゲラー「最近オレ出番ねえ」

ユースケ「ご、ごめん……」

「もうちょっと我が俣になってよ」(前書き)

もう一つの怒りの湖編ラストです。

お気づきかと思いますが、セリフのサブタイトルの話はユースケ編とラン編になっています。試験的な意味もこめて導入しましたが、セリフを一つピックアップするのは難しいです

「もうちょっと我が俤になつてよ」

今は病院の屋上にいる。あれからランとカズマ、カシスに怪我が酷いからって強制的に連行された。結果、中々酷いらしく、1週間の入院を言い渡された。ロケット団の海底基地、カズマ達が、2度とポケモンが不幸になる実験をさせないように、実験施設だけを完全に破壊した。あれは……誰がやってもいけない、悪魔の実験だからね……みんな脱出してチヨウジまで戻った頃に、リヨウマさんと、特ポケ隊の人達が突入して、基地にいたロケット団員は全員逮捕されたらしい。僕のポケモン達は、ボールの修理を兼ねて、ポケモンセンターに預けている。だからユンゲラーに余計な事を言われる心配は無いわけだ。で、現在に戻り、ベッドで寝ててもヒマなので、僕はカズマ達がどこかに行つて、ランが寝てる（僕の看病をしていたんだけど、疲れて眠つたみたい）隙に、この病院の屋上に逃げてきた。僕はいつもみたいに星を見上げながら、今日の事を振り返る……今日は散々なような……嬉しいような……微妙な日だったな……ギャラドスに襲われて……ランを守つて痛い目にあつて……ロケット団に捕まつて……逃げる時に息が切れて溺死しそうになつて……ここまで確認すると最悪な1日だね……でも、でも……それを相殺しても足りない程の嬉しい事……ランと……その……なんていうか……キスをした事が……ね？

あゝ！

思い出したらなんか熱つてきたぞ……多分今の僕は真っ赤なんだろうなつて思う……

「ユースケ」

！？

不意に背後から聞こえた声、僕は驚き、肩をビクツと震わせる。僕

は振り返るとそこには、その声の主、ランがいた。ね……寝てたはずだったんだけどな……

「やっぱりここにいたんだ」

そう言いながら、ランは僕の隣まで歩いてくる。僕はそれに対して「うん」と頷いた。屋上で星を見るのは、なんていうか……もう週間みたいになってるしね。というか……ランに顔が赤くなっているのはバレてないよね？

うん、この様子だとバレて無いね。暗いのも万歳だよ……

「ユースケ、今日はありがとう……それと……ごめんね……あたしのせいでこんな怪我をさせちゃって……」

ランがそう切り出した。その口調は凄く沈んでいる……やっぱり……僕が酷い目にあつた事に責任を感じてるのかな……僕は……どう転んでもランを泣かせてしまう……情けないな……とにかく今は……

「僕は気にしてないよ。あの時は反射的に体が動いたんだし……それにさつきも言ったけど、謝るのは僕のほうだよ……凄く心配かけたからね……ごめん……」

僕はそう返すと暫くお互いに無言となる。今回の出来事はお互いに辛い出来事だったから……必然的にこうなる。なんとか話を転換しないかね

「あ……それとまだ言っただけで無かったよね……」

「え？」



僕の言葉に対してのランの疑問符、最近定番になりつつあるね。それを聞いてから僕は頬を赤らめながらも進める。

「あのさ……僕が溺れかけた時にさ……その……助けてくれて」

肝心な部分を僕は覆い隠すように言う。口移しで僕に空気を送ってくれたなんて……そんなの恥ずかしくて言えないよ……

「え……あ……う、うん……」

それを聞いたランも途端にオクタンみたいに真っ赤になって頷く。あわわ……しまった……なお悪かったみたいだ。僕とした事が……迂濶だったよ……で、またお互いに黙ってしまった。なんか……今回自分で自分の首を絞めたような気がする……それから暫くの沈黙……うっ、気まずい……

「ねえ、ユースケ……」

それを打ち破るように、ランが口を開いた。なんだろう？

「何？」

「ユースケって……優しすぎるよ……」

？

急になんだろう？

僕が優しすぎるって……確かに優しいっていうか甘いところは多々あるとは思っけど……

「いつも……自分の事より人の事ばかり考えて……今日だって、

あたしを守る為に酷い目にあって……もうちょっと自分の事考えてよ！あたしの……あたしのせいでユースケが傷つくのは嫌だよ……」

そう本当に辛そうな表情で言うラン。確かに最近自分がやる事が捨て身になりがちだなんて思う……もうちょっと自分を大切に……

「少しは人の為だけじゃなくて自分の為に行動してよ……ちょっとは我が侂になってよ……そうじゃないとユースケが壊れちゃうよ……」

……我が侂になってか……なんか言われて凄く複雑な言葉だな……でも……

「そうだね……それじゃ早速我が侂を言うよ……」

ランの言葉に僕は少し顔を赤くしながらも返す。僕の我が侂……それは……

「どんなに辛くて、君に何を言われても……ラン、僕は君を守るよ。僕は君の泣き顔を見たくないから……それが僕の我が侂だよ」

ランの為もあるけどそれだけじゃなくて、自分自身の為、大切なものが傷つくのは見たくないから、それを見ない為にも自分が辛くたって守る。これが僕の我が侂。よく分からないかもしれないけど、これが僕の我が侂だ。

「ユースケ……ありがとう……」

そう少しだけ涙声で、それでも弱冠嬉しそうな声を込めてランが言う。

「うん……」

僕はそれにそう頷いた……それからゆっくりと僕達の距離が縮んでいく。湖の時は喜んでる場合じゃなかったけど今ならあの時とは違って自分の意思で……それから唇が……

「ユースケ、ラン、いるか？」

「いちやつこつと思ってもそうはいかないわよ」

重ならなかった……声がとても小さく聞こえてきたからだ。僕はそれに反応してランの肩に両手を乗せて、僕から離す。少しランが不満そうな顔をするけど、僕はそれどころじゃない事に気づいている。

「お、ユースケ、ラン、こんなところにいたのか」

屋上の入口の扉が開いたかと思うとそこからカズマが現れた。続いてカシスもヒョコつと出てくる。タ、タイミング悪いよ！

「カ、カシス……カズマくん！」

ランが焦った口調でそう言う。不満な顔をしてる場合じゃないって気付いたようだ。その顔は真っ赤になっていて恥ずかしそうな顔をしている。そういう僕も多分真っ赤になってるんだろうけどね……

「どうしたんだ二人共、そんな恥ずかしそうな顔をしてさ」

と、カズマが言う。やっぱり僕もそんな顔になってたのか……嫌な予感がしてきた……

「むふふ〜、どうしたのユースケ？ランの肩に手を乗せちゃって、もしかしてキスでもしようとした？」

カシスが猫なで声で僕達をからかうように言う。その顔は面白いものを見つけた子供のようだ。で、僕達は……

「あ……カ、カシ……」

「あ……！その！そのね！？」

しまった……あからさまに分かりやすい動揺を……

「その様子だと凶星みたいね〜」

「~~~~」

あ……あ……

「2人共真っ赤になっちゃってさ……ホント可愛いんだからさ」

「カ、カシス！」

カシスの言葉に怒鳴る言葉、ランと僕のセリフが同時に響いた。

「で、カズマ達はこれからどうするの？」

そう僕は尋ねた。目一杯2人にからかわれた後、とりあえずお互いのこれからの事を話合う。カズマとカシスは元々ハウエンを回っていたから、これからはどうするつもりだろうか？

「オレ達は一回ヤマブキに帰るよ。リョウマさんの話じゃ、ケンスケさんが迎えに来るらしいしな」

お父さんが……事情聴取も兼ねてだろうね……お父さんには会いたくないなあ……なんか色々説教されちゃいそうだ……

「それに、お父さんとお母さんも心配してるしね。早く帰って元気なところを見せなくちゃ」

確かに心配してるだろうね……行方不明になってた訳だしさ……

「それから直ぐにジヨウトに戻ってくる」

ジヨウト？

なんで……ホウエンじゃないのかな？

「どうしてって顔ね」

そう言うカシス。流石と言うべきか……完全に見透かされてる……

「ホウエンのポケモンリーグはもう開催されてるんだ。だからまだまだ開催まで余裕があるジヨウトリーグに出るって決めたんだ」

なるほどね……って事はまたライバルって訳だね

「ユースケ、次は負けないからな」

「ランも覚悟してた方がいいよ。見違えたわたしの实力を見せてあげるからね」

自身満々にカズマとカシスが僕達に向かって言う。ホウエンで相当鍛えてたんだね……

「次だつて負けないよ」

「カシス、あたしだつて強くなってるんだよ？今度だつて負けないからね」

そう僕達は返す。またポケモンリーグで戦う事になるだろう僕達のライバルに対して。

「それでこそオレのライバルだよ」

そう言うカズマは笑顔だ。やっぱり久しぶりにこうやって話のは楽しいよね

「カズマ、カシス、ラン、今日はゆっくり話そうよ。久しぶりに会ったんだし、積もる話もいっぱいあるしね」

「うん、あたしもホウエンのお土産話を聞かせて欲しいな」

僕の言葉に続き、ランがそう言う。本当に元気そうなランを見るのは久しぶりな気がする。凄い安心したよ

「そうね、それじゃ今日はとことん話すよ」

「それじゃオレからだな。オレ達さ、最初は船のトラブルでムロタウンってところに行ったんだ……」

この後も長く続く話。久しぶりにカズマ達と会って話すため、話が途切れる事が無い。こんな楽しい日々がずっと続いて欲しい、僕は強くそう思った

「もうちょっと我が俵になってよ」「(後書き)

#### 次回予告

イツキ「チヨウジジムに挑戦してきたオレとコノハ。ってなんつー寒いジムだよ。凍えちまうぜ！」

コノハ「んな、呑気な事言ってる場合じゃないわよ！あのヤナギさんってジムリーダー、かなり強いわよ！」

イツキ「なめんな！オレだって修羅場を何度も切り抜けてるんだ！負けるもんかよ！」

コノハ「次回、ポケットモンスターACEのSECOND SEA SONの『極寒の戦い』次回もポケモンゲットよ！」

ハッサム「サムッ！」



極寒の戦い（前書き）

今回はイツキ編、ジムに行ったイツキは……

## 極寒の戦い

「たのもー!」

そう叫びながらも、オレは重い、ジムの扉を開いた。今日はチョウジジムに挑戦しにきている。チョウジジム、冬のヤナギという異名を持つじいさん……ヤナギさんのジムだ。使用タイプは氷タイプ、ハッサムが鋼タイプだから、ハッサムが中心のバトルになるな……そこから数歩歩き中に入る。目の前には、氷で覆われたバトルフィールドがある。あの氷の下は水だな……絶対に落ちたら心臓麻痺しちまうぜ……にしても……

「寒いわね……ここ……」

オレの隣にいるコノハがそう呟く。確かに寒い……氷に覆われてるぐらいだから相当寒いんだな……うう……体が震えてきた……

「む……挑戦者が、こっちに来なさい」

バトルフィールドの傍で杖をついて立っているじいさんが言う。この人がヤナギさんか……確かに厳しいイメージがあるな……冬のヤナギの異名は伊達じゃないな……オレとコノハは歩いてヤナギさんの元へと向かう。

「ワシの名はヤナギ、お主らの名は？」

そう尋ねてくるヤナギさん、ちゃんと答えないとな

「オレはワカバタウンのイッキです」

「わたしはヨシノシティのコノハっていいます」

オレに続いてコノハが答える。なんか妙にコノハのセリフがいつもより丁寧な聞こえたのは気のせいかな？

ま、いつもの事だな。年上に対してはコイツもおとなしいから……猫被りめ！

つて……睨むなよ……オレが悪かったから……てかコイツの読心術も神がかってきたな……オレの思考パターンはそんなに単純かな？

「それでは早速始めようかの……」

ヤナギさんは少し呆れた視線を送りながらそう言うと、バトルフィールドへゆつくりと入っていく。

「コノハ、オレからやらせて貰うぜ」

「どござ、ご勝手に！」

た、短気な奴……そう思いながらも、オレは走ってバトルフィールドの中に入る。さあ……行くぜ……

「ルールは2対2のシングルバトルじゃ！キンジよ。審判を頼むぞ」

「ウィ〜ス、それでは試合開始！」

キンジと呼ばれた、スキーウェアをきたお兄さんが試合開始の合図をする。それと同時にオレはベルトに手を回し、ボールを取り出す。

「ハッサム、君に決めた！」

「行くのじゃ、ジュゴン！」

『サムッ！』

『ジュゴォー！』

それに対してヤナギさんはあしかポケモンだっけ？  
とにかくジュゴンを繰り出してきた。タイプは確か、水と氷タイプ。  
鋼タイプだとしても、決して有利とは言えないな。

「では、早速いくぞ……ジュゴン、アクアジェットじゃ！」

『ジュゴォー！』

先手必勝と言わんばかりに、水を纏いながらもジュゴンが高速で突撃してくる。そんな攻撃じゃ！

「ハッサム、鉄壁を使って受け止める！」

『サム！』

ハッサムは鉄壁を発動させ、その攻撃を正面から受け止めた。わずかに後退するものの、ダメージは受けた様子は無い。ハッサムは打撃攻撃には強いんだ！

アクアジェットぐらいななんともないぜ！

反撃……行くぜ！

「ハッサム、電光石火からアイアンヘッド！」

『サムツ!』

『ジュゴ……』

アクアジェットを弾かれ、隙だらけだったジュゴンに、わずかであるが、電光石火で勢いをつけた、アイアンヘッドで攻撃する。それを受けてジュゴンは押し出されるような声を出しつつも後退する。まだまだこっちの攻撃は終わらないぜ!

「バレットパンチで追撃だ!」

「アクアテールで迎え討つのじゃ!」

『サムツ!』

『ジュゴ……』

弾丸の如くスピードで突撃し、連続で拳を放つハツサムだったが、それはアクアテールの一振りで相殺される。完全に威力は互角……特性テクニシャンと、元々の高い攻撃力のお陰だな……ラッキーだったな……

「安心するには早いぞ!吹雪を使うのじゃ!」

『ジュゴ……!』

!?

一瞬気を抜いた隙について吹雪を放つように指示をするヤナギさん。くっ!

本当に冬のヤナギの異名は伊達じゃねえな……手厳しいぜ!

だが！

「ハツサム、電光石火でかわせ！」

『サム！』

弱冠遅れた指示だったけど、ハツサムは直ぐ様反応して吹雪を大幅に高速で後退する事で、ギリギリで回避する。ふう……間一髪だったな……にしても強力な吹雪だな……視界がかなり悪くなったぞ……吹雪が晴れ始め、視界が良くなり始めた。

！？

ジュゴンがない！？

吹雪が晴れた時にはジュゴンは姿を消していた。

！

アレは……さっきまでジュゴンがいた位置に穴を確認する。ダイビングで海中に潜ったのか……コイツは不味いぜ……どこから出てくる？

前か？

後ろか？

それとも……！？

「ハツサム、真下だ！飛べ！」

オレがそう叫ぶと同時にハツサムの真下の氷が砕けた。不味い！

「ほう……勘はいいようじゃな……じゃが甘い！」

ハツサムは翼を奮い、脱出しようとした時だった……海中からジュゴンが表れ、ハツサムに抱きついた。そしてそのままハツサムは沈んでいく。ヤバ……ハツサムの体重は118キロ、泳げるハズが無

いハッサムが水に落ちたら確実に沈んでしまうぜ！  
多分浮上も無理……な、なんとかしないと！

「ハッサム、馬鹿力を使ってジユゴンから離れろ！」

「もう遅い……」

『サ、サムー！？』

「ハツサーム！」

ハッサムは馬鹿力を発動させる事なくパニック状態になっている。  
そしてそのまま沈んでいく。く……こうなったら仕方ない！

「審判さん、ハッサムは棄権をお願いします。戻れハッサム！」

オレは沈んでいくハッサムに焦ってボールに戻した。あ、危ねえ……  
…本当に沈んじゃうところだったぜ……

「ふむ……いい判断じゃ」

ヤナギさんがそう言う。ま、元々水中戦が出来ないハッサムに水中  
戦なんてさせる訳にはいかないよな……下手したら窒息しちゃうか  
らな……

「それでは次のポケモンを」

そう審判がオレに次のポケモンを出せと指示を出す。次のポケモン  
……… 勿論コイツだ！

「アリゲイツ、君に決めた！」

『アリアア！』

オレが出したのはアリゲイツ、水中に落とされるのが怖いなら水タ  
イプで挑むだけだ！

それにアリゲイツはオレのパートナーだ！

このピンチをひっくり返してくれるハズだ！

「試合開始！」

審判のコールがかかった。よし、第2ラウンドスタートだ！  
行くぜ！

「アリゲイツ、メタルクローで攻撃だ！」

『アリアア！』

アリゲイツは正面から突撃する。お得意の突撃戦法だ！  
食らえ！

「甘いな……ダイビングじゃ！」

『ジュゴー！』

アリゲイツの攻撃が炸裂する寸前にジュゴンが氷を砕いて再び潜水  
した。ちつ……また潜られたか！

でもさっきの作戦は通用しない……って事は……アリゲイツの死角  
から……攻めてくるハズだ！

だから……



「今じゃ！角ドリル！」

「アリゲイツ、後ろから来るぞ！」

『ジユゴー！』

『アリヤツ！？』

オレの読み通り、ジユゴンはアリゲイツの真後ろに現れた。そのジユゴンの角はドリルの如く回転している。角ドリルは一撃必殺と呼ばれる技、非常に当てるのは難しいが、当てる事が出来れば、一撃で相手をKOさせる事が可能な荒業だ。くっ……真後ろからくる事は読んでいたが、アリゲイツの反応が弱冠遅れてる……かわすのは無理……なら！

「アリゲイツ、馬鹿力で受け止めるんだ！」

『アリヤアアアア！』

オレが指示を出した瞬間、アリゲイツは真つ赤なオーラに包まれた。そして迫るジユゴン……アリゲイツ、しっかりやれよ……

キュイイイイイン

『アリヤ………』

アリゲイツは角ドリルを両手で掴んで受け止めた。旗から見れば無茶苦茶だが、かわせない以上、これしか作戦が無かったんだ。アリゲイツに賭けるしかない！

「アリゲイツ……根性見せる！お前ならやれる！」

『アリアア……！』

！？

角ドリルの回転が弱まりだしたのか！

今だ！

「アリゲイツ、フルパワーだ！」

『アリアアアアア！』

アリゲイツが吠える。すると回転がみるみる内に弱まっていきそして……

『ジュ……ジュゴ！？』

「な、なんじゃと！」

ヤナギさんとジュゴンの悲鳴のような声、よっしゃあ！

角ドリルが完全に止まった！

こっから反撃開始だ！

「そのまま投げ飛ばせ！」

『アリアアア！』

馬鹿力を発動させたまま、ジュゴンを上空に投げ飛ばした。勿論そんなジュゴンは隙だらけだ！

コイツで決めてやる！

「跳べアリゲイツ！」

『アリアアア！』

アリゲイツはハイドロポンプを地面に放ち、ジュゴンを追うように跳んだ。その間ジュゴンは体制を建て直すのに精一杯、これで決まれ！

「気合パンチだ！」

『ア—リアアアアア！』

「ジュゴン！」

アリゲイツの気合いの叫び、共に拳が輝き始め、そしてそれを叩きつけた。その効果は抜群の一撃を受け、更にジュゴンは打ち上げられ、そのまま氷上に落下した。落下したジュゴンは完全に目を回している。

「ジュゴン、戦闘不能！」

審判がコールを掛ける。よし！

『アリアツ！？』

うお……アリゲイツが落下してきて着地に成功したと思われたが、氷が張っているため滑って転倒してしまう。上手く着地出来れば決まっていたんだろうけどな……残念だ……とにかく……

「やったなアリゲイツ！次も頼むぜ！」

『アリヤア！』

オレが声を掛けると、アリゲイツが頷いた。よし！  
まだまだ行けるな！

「中々やるのお……」

ヤナギさんがボールにジユゴンを戻しながら言った。へへ……なん  
か照れるぜ……

「じゃが、勝負はこれからじゃ！行くのじゃ、マンムー！」

そうヤナギさんが叫ぶとボールを取り出し、バトルフィールドの中  
央に向けて投げた。それから4足歩行の2本の巨大な牙を持ったポ  
ケモンが姿を表した。見たことが無いポケモンだな……見た目はイ  
ノムーに似てるから、イノムーが進化したポケモンだな？  
だとしたら、タイプは、氷と地面ってところか……マンムー、ヤナ  
ギさんの切札みたいだからかなりの実力だな……だけどよ！

「アリゲイツ、こっからが本番だ！絶対勝つぞ！」

『アリヤア！』

アリゲイツが力強く頷く。この勝負、勝つのはオレ達だ！

## 極寒の戦い（後書き）

### 次回予告

イツキ「ヤナギさんを追い詰めたオレとアリゲイツは、ヤナギさんの怒涛の攻めを受けてしまう」

コノハ「何やってんのよ！根性見せなさい！」

イツキ「分かってる！アリゲイツ、今のお前ならやれる！フルパワーだ！」

コノハ「次回、ポケットモンスターACEとSECOND SEA SON」  
『新たななる力』次回もポケモンゲットよ！」

アリゲイツ「アリヤア！」

## 新たなる力（前書き）

前回の続きです。

イツキとアリゲイツは巨大な敵、ヤナギのマンムーにどう挑むのか？

## 新たなる力

オレは極限までの緊張状態の中にいた。フィールドの中央で、対峙するアリゲイツとマンムー、未知数の相手であるマンムーに対してオレはアリゲイツに迂濶に指示を出せずにいる。どっしりと構えて動かないマンムー、あの巨体に近づくのは正直怖い。ぶっちゃけ、あんな巨体に突撃されたら一堪りもないぞ！だから迂濶に接近戦が出来ないでいる。色々和不味いな……

「来ないのならこちらから行くぞ」

先に痺れを切らしたのはヤナギさん、来るか！

「マンムー、突進じゃ！」

マンムーがその巨体を真正面から突撃させてくる流石に正面からそいつを受けるのはお断りだ！

「アリゲイツ、横に避ける！さらにハイドロポンプ！」

『アリヤッ！』

アリゲイツは軽快なフットワークで突進を回避する事に成功する。そして引き続きハイドロポンプを放とうと口を開いた。行け！

「甘い！マンムー、地震じゃ！」

『マンムー！』

『ア、アリアア!』

地面にマンムーが力強く足を叩きつけると、巨大な揺れが発生する。それによってアリゲイツの足場の氷が砕けて、海中に落ちるていく。そのせいでハイドロポンプの方向が大幅にずれてハズれてしまった。流石に甘くねえよな……

「続けて原始の力じゃ!」

『マンー!』

マンムーの目が輝きだす。するとアリゲイツ足場の砕けた氷が力を持ち始めてそれは丁度それに挟まれた状態で海上にいるアリゲイツに向けられようとしている。それは不味いぞ!

「アリゲイツ、潜ってさける!」

オレの指示でアリゲイツは素早く潜水する。氷の塊はアリゲイツのいた場所でお互いに激突して砕け散った。あぶね〜間一髪やられるところだったぜ……んじゃ、ここから反撃だな!

でも海中のアリゲイツには指示が通らねえしな……参ったな……

「何!?!」

!?!

突然ヤナギさんが驚きの声をあげた。マンムーの足元にヒビが入り始めた。そのヒビは徐々に大きくなっていく。コイツはもはや!

『マンー!?!』



「マンムー！」

マンムーの足場の氷が砕けた。そしてマンムーは重力にしたがって海中に沈んで行こうとする。それに対して、砕けた氷の隙間から飛び出すもの、アリゲイツだ！

流石だぜ！

マンムーの足元をかわらわりで砕いて出てくるなんてな……相手は海中じゃ戦えそうにないからコイツは効果的だぜ！

アリゲイツは直ぐにフィールドに立ち、構える。よし……ハイドロポンプで勝負だ！

「マンムー、原始の力で足場を固めるのじゃ！」

『マンー！』

何！？

マンムーは再び原始の力を発動した。それで砕けた氷は足場のように再び固まってマンムーは海中に落ちるのを防いだ。原始の力をそんなふうに使うなんて……だが！

「そこだ、ハイドロポンプ！」

『アーリヤアア！』

アリゲイツの放った一撃、それは一直線にマンムーに向かっていく。これでどうだ！

「甘いぞ！マンムー、吹雪じゃ！」

何！？

マンムーが迫りくるハイドロポンプに対して吹雪を放ってきた。それによりハイドロポンプの勢いが失われ、マンムーまで到達しない。く……なんてパワーの吹雪だよ！

「隙ありじゃ！突進！」

『マンムー！』

『アリアツ！？』

「く……竜の舞でかわせ！」

ヤナギさんの指示で吹雪の中をマンムーが突撃してくる。それを間一髪察知して、それをアリゲイツは竜の舞で回避する事に成功した。よし、上手いぞ！

「そこに気合パンチだ！」

『アリアアアア！』

アリゲイツは拳を輝かせて、マンムーに拳を叩き込もうとする。威力は底上げしてある、コイツ食らいやがれ！

「まだじゃ！堪えるを使うんじゃ！」

『マンンンンンン！』

！？

堪えるだって！

堪えるはどんなに威力がある技を受けても、必ず持ち堪える事を可

能とする技だ。不味い！」

アリゲイツの気合パンチは叩きこまれた。しかし、その一撃を受けて、マンムーは顔をしかめるも、倒れる事は無い。くっ！

「吹雪で氷漬けにするのじゃ！」

『マンンンン！』

「アリゲイツ！」

アリゲイツはマンムーの放った吹雪の直撃を受けてしまった。吹雪による強烈な一撃、吹雪は暫くすると晴れてきた。あ……アリゲイツが氷漬けになっている。く……ここまでなのか……オレは悔しさのあまり拳を強く握る。畜しよ……ん？

急にアリゲイツの氷像は揺れ始めた。どうしたんだ……確か……前にも同じ事が1度……氷像となったアリゲイツが赤いオーラを纏い始める。間違いない！

コイツは！

「アリゲイツ、馬鹿力だ！お前の根性見せてやれ！」

『アーリヤアアア！』

アリゲイツがほうこうを上げた。それと同時に氷が砕けちり、さらにアリゲイツは光に包まれ始めた。よし……行け！  
アリゲイツ！

『ダイル！』

「進化したじゃと……」

そう……ヤドンの井戸で氷漬けにされた時と全く同じように氷から脱出してみせたアリゲイツ、その時と同じく姿を更に強力な姿へと変えた。

「オーダイル、こつからが本番だよな！」

『ダイル！』

アリゲイツが進化したポケモン、オーダイルが頷く。ヤドンの井戸の時は……体力的にもすでに限界ですぐにダウンする事になってしまった。だけど……今は違う。オレ達は色んな戦いを通じて強くなった。まだまだオーダイルは戦う余力は残している。さあ、行くぜ！

「オーダイル、アクアテールだ！」

『ダアアイル！』

オーダイルはアリゲイツを凌駕するフットワークでマンムーに接近する。そこで尻尾に水のエネルギーを溜めて叩きこもつとする

「まだじゃ！もう一度堪えるじゃ！」

『マンンンン！』

再びマンムーは堪えるを発動して、アクアテールに堪えてくる。く……しぶとい！

「そこじゃ、突進じゃ！」

アクアテールを放つて隙だらけのオーダーイルへの突進、当然避けれるハズがない。だが……今のオーダーイルなら出来るハズだ！

「馬鹿力を使つて受け止める！」

『オーダーイルイル！』

突っ込んでくるマンムーの牙をオーダーイルは両手で片方ずつ掴み、突進に押されないように踏ん張る。最初は押されていたが、徐々にスピードが抑えられていき、最終的に停止する。よし！マンムーの突進を防いだ！次で決めてやる！

「オーダーイル、コイツで決めるぞ！ハイドロポンプ！」

『オーダーアアイル！』

『マンンンン！？』

「マンムー！」

ほとんどの距離からのハイドロポンプが炸裂した。マンムーは悲鳴を上げながらも吹っ飛ばされた。吹っ飛ばされたマンムーはそれに耐えられるハズもなく目を回している。

「マンムー、戦闘不能。この勝負チャレンジャーの勝ち！」

審判のコールがかかる。やった……よっしゃあ！

「やったぜオーダーイル！」

『ダイル!』

オレがそう叫ぶとオーダイルがオレに抱きついてきた。へへ……よっぽど嬉しかったんだろうな

「中々やるのお……」

ヤナギさんがそう言いつつもオレに近づいてくる。その表情にはさつきまでの厳しさは感じられない。

「コイツのお陰ですよ。コイツが踏ん張ってくれなかったら負けてましたよ」

そう言いながら、オレはオーダイルの頭を撫でてやる。するとオーダイルは嬉しそうに鳴く。

「ふむ、それでは私に勝った証、アイスバッジを受け取って貰おう」

ヤナギさんはそう言いつつもオレにアイスバッジを渡してくれた。よっしゃあ!

アイスバッジゲットだぜ!

ポケモンリーグまで後1つだ!

絶対にゲットしてやるぜ!

「さすがイッキ!ここ一番で強すぎよアンタは」

コノハがそうオレを賞賛するように言う。コイツがこんな事を言うなんて滅多に無いからなんかくすぐったいな……

「サンキュー、次はお前の番だぜ！頑張れよ！」

「当然よ！」

オレの言葉にコノハがそう返す。勝てよ、コノハ！

## 新たなる力（後書き）

### 次回予告

イツキ「ヤナギさんを撃破したオレ達2人はフスベに向かう」

コノハ「あー、もう！なんで最近こんな寒いのか！びっくりだよ！」

イツキ「そんなのに縁があるんだろ？次回、ポケットモンスター ACE SECOND SEASONの『氷の抜け道の一時』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ドンファン「パオーン！」



氷の抜け道の一時（前書き）

フスベシテイを目指して出発したイツキとコノハは、氷の抜け道に差し掛かっていた。

## 氷の抜け道の一時

「寒い……」

「なんでここだけ氷ついでるのよ！」

「オレが知るか！オレが聞きたいくらいだ！」

オレの言葉にコノハが文句を言い、更にそれにオレは怒鳴り返した。今はチヨウジを出発して、氷の抜け道に来ている。フスベを目指しているのだが、なんともまあ迷宮みたいな場所だ。オレ達は毎回恒例、森や洞窟に入ったら迷ってしまふ。にならないように慎重に前へ進んでいる。まあ慎重に進んでるのはいいんだが……寒い！本気で寒い！

何故かこの洞窟、周りの道路とかと気候が完全に違っていて、ここの中だけえげつなく寒い！

寝るな！寝たら死ぬぞ！

みたいな世界だ……

「うっ……このままじゃ完全に風邪引くわよ……」

震えた声を出すコノハ、コイツにしては珍しい事もあるもんだ……やっぱり魔王様じゃなくて、女の子なんだなって思う。とにかくそろそろ昼時だし、一旦休憩を入れるか……

「コノハ、ここで一旦休んで昼飯にするか」

「そうね、わたしクタクタよ……」

コノハがオレの言葉にコノハが肯定するように言う。まああんなに文句をタラタラ言ってたからな……これは当然だよな……

「よし、焚火でも作ってスープでも作るか……体冷えてるしな……」

「イ……イツキがそんなの作れるの……？」

コノハはさも意外みたいな顔つきで言った。おい……料理が苦手なお前のセリフか？

それにさ……

「お前よりは出来る自信はある！それに今つくるのはインスタントの奴だから余計な事をしない限り、変な事にはならん」

そう言い切るとコノハは納得したように頷く。おい……オレの料理がそんな不安かよ……とにかくやるか……オレは焚火を作る為に、ここまで来るのに拾ってきた薪を丁寧に並べる。次だな

「コノハ」

「ハイハイ、ポニータ、薪に火の粉」

『ヒヒーン』

コノハがそう指示を出しつつもボールからポニータを出して、薪に火をくべさせた。ポニータも手慣れた様子で、絶妙な火加減で薪に火の粉を放った。すると、丁度いいぐらいの焚火となった。ふう……あつたまるなあ……とにかく休憩時間だけでも、全員遊ばせてやるか。体が暖まって余裕が出来たオレはみんなをボールから出してやった。それに見習ってコノハも同じようにボールから全員出して

やっている。するとすぐにオーダイルとルカリオを筆頭にじゃれあい始めた。みんな仲がいいんだな。トレーナーとは違ってな……ともかくスープを作るか……オレは携帯用の鍋を取り出し飲料水を入れた後にそれを焚火の上に乗せた。それから暫くお湯が沸騰するまで待つ。やはり暇なのでポケモン達の方を見る。オーダイルとドンファンは楽しそうに相撲をしていて、ルカリオはその審判をやっている。それを面白そうに見ているイーブイ達とコノハのウソッキー、寒そうに焚火にあたっているピジョンとヨルノズク、それからハッサムは近場の岩と氷を利用して、自分のハサミを磨いているし、コノハの足元でポニータは昼寝している。こうやって見ているとやっぱり個性が浮き彫りになってきて面白い。特にオーダイルとドンファン、2匹共、大型のポケモンへと進化して、バトルの時に見せる根性など、精神的に成長したなっている。でも、こうやって見ていると旅立った日と全然変わらない。あの時と同じ、仲良しコンビのままなんだなって思う。ん？

鍋の中のお湯がブクブクと音をたてはじめる。よし、沸騰し始めたみたいだな。オレはカバンからインスタントのコーンスープが入った袋を取り出した。こういうのは、料理が出来る訳でもないオレみたいな旅人には非常に便利だ。どんなに下手くそだって、お湯さえあれば、直ぐに出来ちゃうんだもんな。オレはその封を切って鍋の中へ粉末を入れる。それをお玉で回すと、自然とろみがつきはじめた。オレは鍋を焚火からどかして溢れないように、しっかりと地面におく、これで、よしと……さてと……

「コノハ、飯にしよ……」

そこまで言って口を止める。

「スー、スー……」

オレはコノハの小さな寝息に気付いた。コイツ……寝ちゃったのか……オレの隣に腰掛けながらも、コノハは小さな寝息を立てて眠っている。やっぱりロケット団のアジトに突入したって事もあったかな……そりゃ疲れも溜まってるよな……起こすのは悪いよな……オレは自分のバツクから毛布を取り出して、コノハに掛けてやる。あのままだと風邪引いちまうしな……よし！

飯だ！

オレはバツグから、ポケモンフーズを取り出し、大きい皿に沢山乗せる。まあ、これぐらいやらないと、この大所帯じゃ、足りないよな。

「みんな、昼飯にするぞ！」

『ダイル！』

『オーダイル速いよ』

遊んでいたオーダイルはオレの一声で、踵を返して高速で向かってくる。それに対してのルカリオの突っ込み……なあ、オーダイル……変わらないのはいいけどさ……その食い意地だけは変えてくれよ……これからの、ポケモンフーズの費用など考えると頭が痛くなってきた……

『ダイル』

「ハア……」

幸せそうにポケモンフーズを頬張るオーダイル、それを見て、オレは大きなため息をついた

## 氷の抜け道の一時（後書き）

### 次回予告

コノハ「氷の抜け道を抜けたわたし達はバトルに励んでいた」

イツキ「どうしたんだ……ピジョンの様子がおかしいぞ」

コノハ「イツキ、とにかく様子を見守ってみましょう。次回、ポケ  
ットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『苦悩』次  
回もポケモンゲットよ！」

ピジョン『ピジヨ………』

イツキ「ホントに大丈夫かよ………」

苦悩（前書き）

氷の抜け道を抜けたイツキ達はバトルに励んでいた

## 苦悩

「ピジョン、燕返しで避ける！」

『ピジョー！』

正面から飛んできた電撃を燕返してで避けて、相手のポケモン、ゲンガールの背後に回った。ここは氷の抜け道の出口、偶然であった少年とバトルしている最中だ。こいつがまた中々手ごわい。とにかく食らえ！

「そこだ！鋼の翼だ！」

「甘い！ゲンガー、身代わり、更に毒々だ！」

『ピジョー！』

『ケケケ！』

なんとゲンガーはトレーナーの少年の指示で、ギリギリで身代わりを作り出してそれを自らの盾としてきた。そしてその隙にゲンガールの背中に張り付いた。そして自らの拳を叩きつけた。ク……

『ピジョオ』

ピジョンが苦しそうな声を上げ始めた。く……毒々の効果で猛毒を浴びてしまったのか……このままじゃやられる……早く決めないと！

「まだ大丈夫だよな？ピジョン、旋回して電光石火から翼で打て！」



『ピジョー!』

ピジョンは気力を振り絞って電光石火で加速しつつも突撃していく。

『ケケ!?!』

さすがにこの加速にはついてこれなかったみたいだな!  
ピジョンの電光石火からの翼で打つ攻撃は見事に炸裂した。よし、  
もう一撃だ!

「ピジョン、もう一度……!?!」

『ピ……ピジョ……』

何……ピジョンの息が荒い、毒々毒が回ってきたのか?  
イヤ……それだけじゃない!  
毒が回るのはもっと時間がかかる。まさか!

「呪い、苦しいだろ?」

『ケケケ』

く……呪いをもらったのか……多分さっきの翼で打つを決めたとき  
……やられた

「大丈夫か、ピジョン?」

『ピジョ……』

く……かなり息があがってるな。このままじゃやられる……

「ピジョン、イチバチやるしかないぞ！」

『ピジヨ！』

気合いとしか考えることが出来ないピジョンの無理やりな顔つき、かなり無茶してるな……明らかにこれ以上時間は駆けられない。次で決めてやる！

「ピジョン、電光石火からブレイブバードだ！」

『ピジヨーー！』

ピジョンは力強い鳴き声をあげながら突撃していく。これならまともな動きじゃさけられないぜ！

「ふん、そんなもの！身代わりを使え！」

『ケケケ！』

ゲンガーは余裕をもって身代わりを発動しようとする。しかし、身代わりは発動しない。それは何故か？

「迂闊だったな！一度身代わりを使って更に呪いで大幅に体力の消耗、更に電光石火で威力を強化した翼で打つ攻撃を食らってんだ、体力はもう限界まで減ってるんだよ！そんな状態で身代わりなんて使えるか！行け、ピジョン！」

『ピ……ピジヨ……』

『ケケ！？』

ピジョンはそのまま高速で突撃していく。ゲンガーはそれに反応できそうにない。これで決まれ！

『ピジヨ……………』

ピジョン？

「ふう……………間一発だった。とにかく俺たちのかちだな」

少年はそう言った後ゲンガーの元へ駆け寄っていく。そんな…………

「ピジョンー！」

オレはカバンからすばやく毒消しといい傷薬を取り出してピジョンの元に駆け寄る。それから毒消しを飲ませてやり、それからいい傷薬を使ってやる。これで一先ずは大丈夫だな……………だが……………

「ごめんよピジョン……………オレがだらしないから……………」

はあ……………オレもまだまだだな……………

「それじゃジム戦の作戦会議といくか」

「あんだ、今までそんな事やったことあつたっけ？」

ポケモンセンターの一角のソファでオレとコノハは話し合っていた。その周りにはオーダイルに、ピジョン、ルカリオにヨルノズクとそれぞれの今回のバトルで主戦力になると思われるメンバーがいる。

「ない、ただ今回は事前情報があるからな。今回のジムリーダー、イブキさんはドラゴンタイプの使い手らしい」

コウイチ達から聞いた情報をコノハに伝える。まあ、ここはドラゴン使いの里って呼ばれる場所だし当然か

「で、手持ちは？」

「それは分からねえな。ジムリーダーは相手のレベルによって使用ポケモンを変えるらしいしな。ユースケさんはハヤトさんとバトルした時はエアームドを出してきたらしいしな」

手持ちが分かれば一番いいんだろうが、それはそのせいで分からないんだよなあ……ホント、面倒だよ

「で、フィールドはどうなってるの初めて？」

「ああ、ユウイチの話だとプールになってるらしいな」

プールになってるフィールド、大体の場合ブイがいくつか浮かんでいてその上で戦う事になる。できればそんなフィールドでは戦いたくないんだよ……

「嫌なフィールドね……とすると、わたしは主に飛行が出来る、ヨルノズクと竜の波動で相手の弱点を付く事が出来るルカリオが中心になるわね」

だろうな……コノハがそう言うと、ヨルノズクとルカリオがやる気満々ということをアピールするように元気そうに動く。次はオレのメンバーだが、必然的にメンバーは決まってくるな

「オレも飛行が出来るピジョンと、泳ぐ事が出来るオーダイルが主力だな」

ま、当然の選択だな。2匹共、ドラゴンタイプに効果は抜群の技を使う事が出来るからな。相性的にも地形的にも適任だろう

「頼むぜ、オーダイル、ピジョン」

『ダイル!』

『ピジヨ……』

ん?

オーダイルが元気一杯頷いたのに対してピジョンはあまり元気が無さそうに頷く。どうしたんだ?

「どうした、ピジョン?」

オレは元気が無さそうであるピジョンに尋ねた。流石にこの様子はおかしいぞ?

『ピジヨ、ピジヨ!』

ピジョンがオレに何かを伝えようとしているみたいだが、一切オレには伝わらない。く……トレーナーとして情けないよな……

「ルカリオ、ピジョンはなんて言ってるんだ?」

『え、うんと、ジム戦は明日まで待つてくれないかって言ってるよ』

オレの問いにルカリオは丁寧に答えてくれる。ホント、こんな時に頼りになるよ。

「ありがとうルカリオ、ピジョン、別にそれはいいけど、どうしたんだ?」

『ピジョ』……』

『なんでもないだって』

ピジョンの答えを翻訳して伝えてくれるルカリオ、でも、なんでもないハズが無いだろ……

「そう……か……」

とにかくその場を取り繕うためにそう言うしておく。後はしばらくピジョンの様子を試してみるか……

「コノハ、今日はもう休むか」

「そうね、それぞれの部屋に戻って明日に備えて休みましょう」

そのコノハの言葉にオレは頷いた。

## PC自室

オレはベットで横になって考え事をしていた。もちろんピジョンのことだ。今日のピジョンの様子は明らかにおかしかった。おかしい原因、覚えはいくつかある。多分……あれ……眠くなってきたぞ……オレは重いまぶたを強引に開きつつ辺りを見渡す。オーダイルを筆頭にみんな眠っている。いいや、オレも寝るか……

うにゃ……なんかやけに部屋が寒いぞ……オレは冷気の発生源と思われる場所、エアコンを見る。音はしてないから動いてないのか？ならこの冷気は……あ、窓が開いてる……もしかして……

「やっぱりかよ！」

部屋の様子を確認すると。オーダイルとピジョンがいなくなっている。ピジョンがいなくなったのに気づいてオーダイルが追っついてい



たみたいだな。アイツ、ピジョンを追う前にオレを起こしてけよ！  
ま、焦ってたんだから仕方ないか……んじゃオレも追わないとな！  
オレは焦ってクローゼットから着替えを取り出す。全く、オレの仲  
間は問題児が多いぜ！

オーダイル視点

『ダイル！ダイル！（おゝい、ピジョンどこに行くんだよ！）』

オイラはフスベシティから出て行くこととする。ピジョンに声をかけた。  
全く、急に出てくなんてどうしたんだよ。

『ピジョ〜、ピジョー！（町の外だよ。そこで明日まで特訓する）』

あ、明日って……そんな疲れた体でジム戦をやるつもりなのか？

『ダイル、ダイダイ、ダイ（なあ、ピジョン……どうしたんだよ？なんか今日のお前おかしいよ）』

『ピジョ、ピジョジョ（なあ、オーダイル……俺もイツキの仲間だよな……）』

オイラの問いにピジョンはそう返してくる。え……そんなの

『ダイル！（当然だって！）』

『ピジョ……（けどな、俺だけなんだよ、あまり活躍できないのはー）』

どういうことだ？

『ピジョ、ピジョ！ピジョジョジョジョ！ピジョ！（あまりバトルに参加してないイーブイはともかく、お前やドンファン、ハツサムは結構勝っているのに、俺だけあまり勝てないんだよ！俺だっってお前達と最初は一緒に肩を並べて戦ってたのに、今じゃ俺だけ全然勝てないんだよ！だから、俺はお前達ともう一回同じレベルで戦うことができるようになりたいんだ！だから……）』

ピジョン、お前は……でも、その気持ち分かるな……オイラだってアリゲイツになったばかりのころ、負け越してばかりで悔しい思いしたからな……

『ダイル、ダイル！（ピジョン、そんな理由ならオイラも手伝うよ。オイラもそんな思いしたことがあるからね）』

『ピジョ……ピジョオ！（オーダイル……ありがとな、けど決まった以上地獄の果てまで付き合ってもらうからな！）』

オイラの言葉にピジョンがそう返してきた。

『ダイル！ダイダイ！（はは、望むところさ！）』

そうオイラは返す。さあピジョン、どこからでもかかって来い！

### イツキ視点

……オーダイル、ホントうまくやってくれたな……ここはオレは口出ししたら駄目だな。オーダイル、ピジョン、しっかりやれよ。オレはそのままあいつらに背中を向けてPCに帰っていく。オレもアイツらに負けてられないな。明日のジム戦であいつらに力を最大限に発揮できるようにしっかり戦術の勉強しておかないとな。オレはPCに向かう足を速める。その気分はとて素晴らしい気分だった。

## 苦悩（後書き）

### 次回予告

イツキ「朝になって直ぐにオレとコノハはフスベジムに向かった」

コノハ「あつついわねこのジム……なんかやる気をそがれちゃうわ……」

イツキ「んな事言ってる場合じゃねえよ！行くぜ、イブキさん！いくらドラゴンの力が強かろうと負けてたまるか！」

コノハ「次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEA SON」  
イツキV S イブキ！波乱の開戦『次回もポケモンゲットよ！』

オーダイル『ダイル！』

イツキVSイブキ 波乱の開戦(前書き)

イツキはライジングバッジを手に入れるべくフスベジムに向かった。

## イツキVSイブキ 波乱の開戦

「たのもー!」

オレは力強く叫びながらジムの中に入った。

「うおっ!? 凄い熱気!」

オレは入ってすぐ、思わずそんな声を上げてしまった。熱すぎだろこのジム、サウナじゃあるまいし、蒸し焼きになっちまうぞ

「熱いのも無理ないわよ……あれを見てよ……」

コノハが指差す先は崖みたいになっていて、その底にはマグマが溜まっている。おいおい……冗談じゃねえぞ……オレ達を殺す気かよ

……

「よく来たわね。アタシはこのフスベジムのジムリーダー、イブキよ」

マグマを隔ててかなり向こう側にマントを羽織った少し水着にも見える服を着た女の人立っている。あの人イブキさんだな!

「オレはワカバタウンのイツキです!ジム戦に来ました」

「わたしはヨシノシティのコノハです。わたしもイツキと同じくジム戦に来ました」

オレに続けて同じようにコノハがイブキさんに返す。

「へ、元気がいい挑戦者じゃない……いいわ、相手してあげる。その仕掛けを通ってこっちまで渡ってらっしゃい」

そう言うイブキさん、渡って来いって……マグマの上だぞここは……事故になったらどうするつもりだよ

「あのボタンをおしたら仕掛けが動くみたいね。行くわよ、イッキ」

おいおい……コノハはやる気満々かよ……まあビビッても仕方ないな。ちゃちゃっと終わらせてやるぜ！

「予想以上に時間掛かったわね……」

イブキさんが若干呆れた口調で言った。う……確かに冷静にやれば簡単に突破出来るからくりだった……それにあれだけ時間が掛かったから当然か……

「イツキ、アンタが余計なボタンを押したせいでしょ！」

「違う！お前があのももの凄いスピードで動く台に興奮して繰り返して遊んでたせいだろ！」

いつも通りの言い争い、最近踵落としが無くなったのはコノハの進歩だと思う。

「なんですってー！」

「やるかよー！」

まあ最終的にこうなるのはお約束な訳で……

「痛い！コノハ、あらぬ方向に右肘の間接が曲がってる！」

「へーよかったじゃない！」

踵落としは無いもののこれはあんまりだ……

「遅い理由が分かったわ……」

呆れた表情でそれをイブキさんは見守っているけど、出来る事なら助けて欲しい。

「で、どっちからジム戦やるの？」

助けもせずにそう尋ねるイブキさんは鬼だと思う。



「オ、オレからやります……」

息絶え絶えにオレはイブキさんに言うとコノハの手を払ってすぐさまバトルフィールドに入った。フィールドは情報通りプールにブイがいくつか浮かんでいるだけのシンプルな水中フィールドだ。ユウイチの情報通りだ。

「ルールは3V3のシングルバトルよ」

3V3か……なら！

「わかりました。オーダイル、君に決めた！」

『オーダイル！』

オレはボールを投げると、一つのブイの上にオーダイルが力強く姿を表した。若干疲れている様子だ。多分昨日のピジョンとの特訓の疲れだな……でもやる気は十分みたいだな。よし、頼むぜ！

「ならアタシはこの子よ。ギャラドス！」

イブキさんは力強く叫ぶとギャラドスが姿を表した。ギャラドス……前回のユースケさんがやられた一件でコイツにはあんまりいい印象ないんだよな。別段コイツが悪い訳じゃないんだけど……

「それじゃ行くわよ！試合開始よ！ギャラドス、ハイドロポンプ！」

『G R A A A A！』

イブキさんの指示を受けてギャラドスはオーダイルに向けてハイド

ロポンプを放ってくる。

『ダイル!』

オーダイルはオレの指示無しで尻尾を奮いハイドロポンプを払った。今のはアクアテールだな。自分で判断しての行動、ピジョンとの特訓で身につけた新しいスキルだな。ホントにオレとしても嬉しい能力だよな。

「よし、反撃行くぜ! 高速移動から切り裂く攻撃だ!」

『ダイル!』

オーダイルは高速移動を使用し、素早くブイの上を移動しながらギヤラドスに突撃していく。

「行け!」

『ダイル!』

「甘いわ! ギヤラドス、アクアテール!」

『G R A A A A!』

オーダイルは正面から爪で襲いかかるが、アクアテールで弾かれて接近を許してもらえない。く………まだまだ!

「ただでやられるな! ハイドロポンプだ!」

『ダイル!』

「そうはいかないわ！ギャラドス、ハイドロポンプ！」

『GRAAAA！』

オーダイルは吹っ飛ばされ、体制を崩しながらもハイドロポンプを放つが、イブキさんが、素早く指示を出しそれに従って、ギャラドスはそれを相殺するようにハイドロポンプを放った。それにより見事に相殺され、オーダイルはその衝撃で更に吹っ飛ぶ勢いがました。だけどオーダイルはそれに堪える様子は無く、上手くブイに着地した。畜生……流石に最後のジムリーダーってだけあるな。かなり手強いぜ。だが、勝負はこれからだ！

「オーダイル、まだやれるよな？」

『ダイル！』

オレの質問にオーダイルが頷く。よっしゃあ、行くぜ！

「オーダイル、もう一度高速移動！」

『ダイル！』

オーダイルは再び高速移動を発動して素早い動きでギャラドスに突撃していく。

「その手は効かないのがわからないの？もう一度アクアテールで薙ぎ払え！」

『GRAAAA！』

ギャラドスは高速で迫るオーダイルを薙ぎ払おうと再び尻尾を奮った。そつちこそそんな手が何度も通ると思つなよ！

「オーダイル、勢いを緩めるな！その勢いを生かしたまま滝登りだ！」

オーダイルは高速移動で加速しながらも、水の力を身に纏い突撃する。それにより、アクアテールを弾きとばした。

「なんて力わざ……面白いじゃない！」

イブキはその戦術に驚きつつも笑みを浮かべた。これがオレのやり方だからな。さあ、ガンガン行くぜ！

「この距離なら！一気に行くぜ冷凍パンチ！」

『ダアアイル！』

限界まで迫っていたオーダイルは素早く冷気を纏った拳を叩きつけた。それを受けたギャラドスは苦しそうな顔を浮かべる。よし！次行くぜ！

「調子に乗らない事ね、ギャラドス、逆鱗で暴走しなさい！」

『GRAAAA！』

『ダイル！？』

「何！？」

そのイブキさんの指示でギャラドスが黄金色のオーラを放ち暴れ始めた。ちっ！  
厄介な技を使ってきたな……逆鱗と呼ばれる技、竜の力を解放して暴走する技……こりゃ本気でヤバイな！

『ダイル！？』

「オーダイル！」

オーダイルは正面から突撃してきたギャラドスに弾きとばされ、ブイに叩きつけられた。く……ヤバイ！

『GRRRAAAA！』

ギャラドスがオーダイルに尻尾を叩きつけようとしてくる。こうなったらイチバチやるしかねえ！

「オーダイル、馬鹿力で受け止める！」

『ダイイル！』

『GRRRAAAA！』

恐ろしいぐらい尻尾の一撃でブイの周りの水が浮き上がり、もの凄い水しぶきが上がった。く……どうなったんだ？  
！？

『ダイル』

『GRA!?!』

「何!」

へっ……… やつてくれたぜ……… オーダイルは馬鹿力を発動させてギヤラドスの尻尾の一撃を受け止めていた。よっしゃあ!  
この反撃のチャンス、逃してたまるかよ!

「そいつをそのまま投げとばせ!」

『ダーイーール!』

『G A A A A!?!』

「ギヤラドス!」

オーダイルはそのままプールの端っこの壁に叩きつけた。よし!  
このまま留めだ!

「行くぜ!破壊光線だ!」

「まだよ、破壊光線!」

オーダイルはオレンジ色の極太の光線を放った。それに対応するように、正常に戻ったギヤラドスも全く同じ光線を放った。その2つの光線は激突してとんでもない爆発が起きた。く、どうなったんだ!

「この勝負、引き分けのようね………」

と、イブキさん………く………そうみたいだな………爆煙が晴れると完全

にダウンしているオーダイルとギャラドスの姿が……あつた。く……逆鱗のダメージが堪えたな……

「よく頑張ったなオーダイル、ゆっくり休んでくれ」

オレはオーダイルをボールに戻す。ホントによくやってくれたな

「やるわね……だけどこれからが本番よ！ハクリュー！」

『リュー』

そういうと、イブキさんはハクリューを繰り出してきた。水色と白を基調とした竜はなんとなく神々しさを放っていた。アイツは強敵だな……

「なら、オレはコイツだ！ピジョン、君に決めた！」

『ピジョー！』

ピジョンが翼を羽ばたかせ、オレの正面に表れた。その姿は傷が沢山ついている。特訓をかなり頑張った証拠だな。

「さっきのオーダイルもそうだけど、そのピジョン、かなり疲れてるわね。そんなポケモンでアタシに勝てるんでも？」

そう言うイブキさんは余裕の表情だ。それはどうかな？

「ああ、オレはコイツのやる気に賭けた。今のコイツの気合いならやってくれるはずだ！な、ピジョン！」

『ピジヨオ!』

オレの声に力強く鳴き応える。

「強くなつたお前の力見せてもらつぜ!」

『ピジヨオオ!』

!?

オレの言葉に反応してか、再び吠えるように鳴くとピジヨンは輝き始めた。そしてその姿を大きくしていく。コイツは……進化か!

『ピジヨオオオ!』

再び吠えるような鳴き声、そして輝きが消えるとピジョンが一回り大きくなったポケモンの姿があった。鬣も立派になっているコイツは!

「よし、頼むぜピジヨット!」

『ピジヨオオ!』

オレの言葉に応えるようにピジヨットが鳴いた。さあ、行くぜ!



## イツキVSイブキ 波乱の開戦（後書き）

次回予告

イツキ「進化したピジヨット、すげえ、すげえよお前！」

コノハ「浮かれるのもいいけど、早く集中しなさい！油断してなんとかなる相手じゃないわよ！」

イツキ「分かってるって！ピジヨット、頼むぜ！」

ピジヨット『ピジヨオ！』

イツキ「うおおお！やってやるぜ！」

コノハ「次回、ポケットモンスターACEのSECOND SEA SONの『イツキVSイブキ 決着編』次回もポケモン、ゲットよ！」

ピジヨット『ピジヨオ！』

イツキVSイブキ 決着編(前書き)

ピジョンが遂にピジョットに進化！  
イツキはどう戦う？

## イツキVSイブキ 決着編

「確かに、この様子なら面白い勝負になりそうね」

オレと対峙しているジムリーダー、イブキさんが、そう不敵な笑みを漏らした。それにつられるように彼女のハクリューも笑みを浮かべる。さあ、オレ達の準備はOKだ！  
いつでも来やがれ！

「それじゃ、行かせてもらっわよ！ハクルュー、竜の波動！」

『リュー！』

ハクリューはイブキさんの指示と全く同じタイミングで竜巻のようなエネルギー波を放ってきた。そんなもんに！

「ピジョット、電光石火だ！かわしながら距離を詰める！」

電光石火を発動し、そのまま突撃していく。勿論、竜の波動は紙一重で避けているのでダメージは無い。

「く……アクアテールで迎撃しなさい！」

『リュー！』

竜の波動を放つ隙はとて大きいもので、ピジョットは電光石火の加速で一気に距離を詰めた。しかしそこに迎撃として放たれるアクアテールによる一撃、く……喰らってたまるか！

「ピジョット、燕返しでかわせ！」

『ピジョッ！』

ピジョットはオレが指示をした瞬間に更に加速してアクアテールの一撃をすり抜けてハクリューの背後に回った。このチャンス、貰った！

「そこだ！鋼の翼だ！」

『ピジョオオ！』

『リュウ！？』

「ハクリュー！」

ピジョットの渾身の一撃を受けてハクリューはブイに叩き付けられた。まだまだ！

「そこだ！追撃の竜巻を喰らわせてやれ！」

「く、竜の波動で相殺よ！」

『ピジョオオオオ！』

『リューーーーー！』

ピジョットの気合いの鳴き声と共に翼を奮い放たれた竜巻は一直線にハクリューに向かっていく。それに対してハクリューも竜の波動

を放って相殺を狙ってくる。それぐらいで……負けるかよ！

「ピジョット、フルパワーだ！」

『ピジョオオオオ！』

ピジョットがさつきよりも強く翼を奮う。するとさつきよりも竜巻のパワーが上昇し、そして竜の波動と激突した。

「そんな、パワー負けしてるの!？」

イブキさんの焦ったような声が聞こえる。なんたって激突した竜巻を相殺する所か、押され始めたんだもんな！

「ピジョットを余り甘く見ないでくださいよ！行け！」

オレは力強く叫ぶとピジョットはそれに呼応するように更に翼を強く奮った。すると竜巻は更に勢いを増し、竜の波動を押し切った。そしてハクリューは竜巻に巻き込まれ、竜巻の勢いで、ブイと共にプールに沈んだ。どうだ！

「く……ハクリューをこんなに簡単に倒すなんて……」

イブキさんがそう苛立ちの混ざったような声で言うとハクリューはプールから浮き上がってきた。その姿は完全に伸びてしまっている。よっしゃあ！

2 勝目だ！

「やるじゃないイツキ、だけどアタシにもジムリーダーとしての意地があるわ！行くわよ、キングドラ！」

イブキさんがボールを投げるとプールの中に竜の子を連想させるポケモンが姿を現す。ただ、竜の子というわりには威厳があり、キングとつく名前に相応しいものだと感じた。見た感じ、タツツーの進化形のポケモン、シードラが更に進化したポケモンみたいだな。タ  
イブはドラゴンと水つてところか

「ピジヨット、このまま頼むぜ！」

『ピジヨット！』

オレがそう声を掛けると、ピジヨットは力強く頷いた。よし、まだまだ行けそうだな！

「それじゃ、今度はこっちから行きますよ！ピジヨット、電光石火から翼で打つだ！」

『ピジヨット！』

ピジヨットはオレの指示を受けて、高速でキングドラに突撃する。まずは一撃決めさせて貰うぜ！

「キングドラ、ダイビング！」

イブキさんがそう指示を出すと、キングドラは潜水して、高速の一撃を回避してきた。く……流石にそんな甘くないか……

「キングドラ、ハイドロポンプで攻撃しなさい！」

『リニューー！』

その指示を受けてキングドラは海上スレスレを飛行しているピジョットの正面に姿を現した。水中ではあっちの方がスピードは上か！そして容赦なくハイドロポンプを放ってくる。そんなもんに！

「ピジョット、上昇しろ！それに当たるな！」

『ピジョオー！』

ハイドロポンプは正面からピジョットに迫ってくるが、それを上昇して紙一重で回避に成功する。ホント、間一髪だったぜ……

「フッフ、まだまだ甘いわね。キングドラ、雨乞いをしなさい」

『リユーー！』

「しまったー！」

イブキさんの指示を聞き、オレは思わず声を上げてしまう。マズイ！雨乞いなんてされたら！

『ピジョ………』

ピジョットの焦ったような鳴き声、それと共にピジョットの上昇は止まってしまふ。く………雨乞いの雨を浴びたせいで、翼が重くなっ  
て思ったように飛べなくなっちまったか………コイツは本格的にマズイぞ………

「その隙、逃さないわ！キングドラ、ハイドロポンプを連射！」

『リユール！』

く……キングドラが狂ったようにハイドロポンプを連射してくる。く……さっきのハイドロポンプを放つスピードより断然早い……天候が雨の時に速くなる「すいすい」って特性か……？

何にしてもこっちはスピードが落ちているのにあっちが加速するのはマズイ！

なんとかしないと！

「ピジョット、高速移動を使ってかわせ！」

『ピジョオ！』

ピジョットは高速移動を発動させた。それにより、自分の体が軽くなったのか、さっきまでとほぼ同速で飛行している。当然そんなピジョットにはハイドロポンプは掠りもしない。ふう……なんとかあったが……このままじゃヤバイぞ……今は一時のその場凌ぎにか過ぎない。また雨の影響で体が重くなるのも目に見えている。なんとか反撃のチャンスを抑えないと……

「反撃のチャンスなんて与えないわ。吹雪を使いなさい！」

『リユール！』

キングドラはその口からもの凄い冷気を放ってくる。だが、上昇しているピジョットにはそんなもの！

！？

『ピ……ピジヨ……』



ピジヨットが突然奮えだした。まさか、雨のせいで冷気が広域に広がってしまったんじゃない……ピジヨットの体も濡れてるし、寒さにも弱いから……マズイ！  
このままじゃ！

「これで終わりね……ハイドロポンプ！」

『リユー！』

「ピジヨット！」

キングドラから放たれたハイドロポンプ、震えているピジヨットにはそんなものをかわせる訳もなく直撃を受けてしまった。そしてそのままブイに落下してしまう……

「どうやらここまでみたいね」

そういうイブキさんの表情は最初の余裕の表情に戻っている。く……ホントにここまでなのか？

イヤ、終わりなんかじゃないハズだ！

昨日の夜、特訓に出かけたアイツにはもの凄い気迫を感じた。これぐらいで終わる訳がない！

まだ……絶対に終わってないんだ！

「ピジヨット！お前はまだ戦えるだろ！お前の根性はこんなもんじやないハズだろ！」

「そんな事を言っても無駄よ！さっさと次のポケモンを……」

オレの叫びに無駄と言っイブキさん、でも……イブキさん、その台

詞は間違ってるぜ！

『ピジヨ……！』

そんな鳴き声が聞こえたかと思うと、ピジヨットが翼を広げて、その両足で立ち上がった。よし……お前のバトルはまだ終わっちゃいないよな！

「まだ、やる気なの……」

そう言うイブキさんはピジヨットの気迫に押されているようにも見える。すげえ……すげえよピジヨット！  
んじゃ、ここから反撃といくか！

「ピジヨット、竜巻だ！」

『ピジヨオー！』

ピジヨットはその場で翼を奮い、もの凄い竜巻を発生させた。キングドラは素早い動きで回避に転じ、当たりはしない。しかし、その竜巻はプールに突き刺さった。そしてそれは渦潮と全く同じ効果をもたらした。

『リユー！？』

「キングドラ！」

キングドラは渦に巻き込まれた。よし！コイツは最大のチャンスだ！  
逃してたまるか！

「ピジヨット、渦に飛び込め！」

『ピジヨオ！』

ピジヨットは重い翼を奮い再び上昇する。そしてそのままキングドラが巻き込まれている渦の中に突撃していく。

「まだよ、竜の波動よ！」

『リュ、リュー！』

渦に巻き込まれながらも竜の波動でキングドラは反撃してくる。しかしそんな状態で狙いが定まるはずもなく不発に終わった。そこだ！

「上空に向かって吹き飛ばせ！」

『ピジヨオオ！』

「キ、キングドラ！」

水のない、渦潮の中央に入ったピジヨットは翼を奮って強風を起しました。それによりキングドラは打ち上げられる。これで決めてやる！

「ピジヨット、行け！」

『ピジヨオ！』

正面からピジヨットは突撃を開始する。これが最後の勝負だ！

「落下の勢いを使いなさい！滝登り！」

「負けるな！オウム返しだ！」

『リユウー！』

『ピジョー！』

ほぼ同じタイミングで2匹共、滝登りを発動した。2匹は激突してお互いに弾き会う。反発した瞬間にキングドラはハイドロポンプを放とうとピジョットに顔を向けてきた。マズイ！

『ピジョオー！』

『リユウ！？』

おお！

ピジョットはバランスを崩しながらも自分の翼をめい一杯のばしてキングドラの顔面に叩きつけた。やるじゃねえかよ！

それによりハイドロポンプはあらぬ方向に飛んでいってしまつ。そしてピジョットは強引にキングドラの背後にまわり、バランスを立て直した。そして体キングドラに向けて一直線に伸ばす。これで終わりだ！

「行け！ゴツドバードだ！」

『ピジョオオオオー！』

「キングドラ！」

ピジョットはこの瞬間もの凄い光りに包まれ、そしてそのまま突撃

していった。その直撃を受けて、キングドラはプールへ落下した。どうだ！

「そんな……キングドラが負けるなんて……」

イブキさんがショックを受けたような声を上げた。するとプールに落下したキングドラが浮き上がってくる。その姿は完全に伸びてしまっていて、目が渦巻きになっていた。

「よっしゃあ！やったぜピジョット！」

『ピジョット！』

オレがそう叫ぶと嬉しそうにこっちに突撃してくるピジョット……  
つてちょっと待て！

「ぐぼっ……！」

『ピッ……ピジョ……』

……体がでかくなったんだから加減をしてくれよ……とにかく……  
オレは腹を抑えつつもピジョットをオレの隣に立つように促す。流石に肩はもう無理だから……

「ハア、完敗よ……」

そうため息をつきながらイブキさんが歩み寄ってくる。そんなにため息をつかなくてもいいのに

「最近のトレーナーってこんなにレベルが高いの？これじゃジムリ

「ダーの威厳も何もあつたもんじゃないわ」

うーん……そんな愚痴を言われてもな……なんとも言えないな……

「とにかくアタシの負けよ。ほら、このライジングバッジを受け取りなさい」

そう言つてイブキさんはオレにライジングバッジを渡してくれる。よし……最後のバッジ、ゲットだぜ！

「これが最後のバッジみたいね。ポケモンリーグに行っても負けるんじゃないわよ。アンタが負けたらアタシが弱いみたいじゃない」

「当然ですよ！絶対に全勝してポケモンリーグを制覇して見せますよ。な、ピジヨット？」

『ピジヨオー！』

オレの言葉にピジヨットはそう頷いた。へへ……頼もしいぜ

「またバトルするわよ。次は負けないわ」

「次もオレが勝ちますよ！」

イブキさんがそう言いつつも手を差し出してきた。それに対してオレも力強く返し、その手を握り返した。

## イツキVSイブキ 決着編（後書き）

### 次回予告

イツキ「オレはイブキさんの紹介で修業のためにとある民家に向かった」

コノハ「わたし達が今より強くなる鍵ってなんだろう？」

イツキ「さあな……ただ、一筋縄じゃいかないって事だな。次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『特訓！究極技！』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

オーダイル「ダ〜イル！」

**特訓！究極技！（前書き）**

イブキに見事勝利したイツキ達はイブキの紹介でとある家へと向かっていった



## 特訓！究極技！

「こんにちはー」

オレはそう言いながらも、フスベのとある民家の中に入った。今日はイブキさんの紹介でとある民家に来ている。ここに行けばパワーアップ出来るって言ってたけど……一見普通の民……！

「カッター！」

「あだっ!?!」

グ……イッテーな！

入った瞬間顔面に重い一撃を貰ってしまった。チクショーいきない何だってんだよ……今の鉄拳はかなり効いたぜ……

「ふむ……油断大敵という奴じゃな……」

そういうのはオレに鉄拳を叩き込んだ人物……凄い筋肉質なじいさん。ここの住人？  
とにかく！

「な、何するんですか!」

そうオレはじいさんに対して力強く叫んだ。

「イッキが敬語なんて……明日氷柱が降ってくるわよ……」

失礼な……オレは年上にはある程度は敬語は使っぜ？

「イツキ……ふむ……やはりイブキが言っておった子か」

「へ……」

コノハの口から言われたオレの名前を聞きそう言っじいさん、そして展開に着いて行けず、マヌケな声を上げてしまっオレ。情けない……

「イブキから聞いておるよ。荒削りじゃが将来強くなる可能性を秘めたトレーナーじゃと」

……おいおい……あのイブキさんがそんな紹介をしたのかよ……なんの間違いだ？  
まあ嬉しいんだけどさ……

「へ……イツキが赤くなってる。アンタも照れる事があるのね……」

そう感心するような言い方をするコノハ、おいおい……お前の中のオレは冷血漢かよ……

「ふむ……確かに良い目をしておるな……よろしい！お主のパートナー、オーダイルに究極技、ハイドロカノンを伝授しよう」

オレのパートナーまで……これもイブキさんの情報だよな。それより究極技か……究極技、炎のプラストバーン、水のハイドロカノン、そして草のハードプラントの3種類存在している。威力は破壊光線に匹敵するものと言われていて、使用するポケモンによってそれ以

上の力を発揮すると言われている。特定のポケモンしか習得出来ない技らしく、まさに究極技だな。ちなみにオレが知ってる人の手持ち中でこれが使えるのはユースケさんのリザードン、カズマさんのジユカインぐらいだ。

「ホントですか!」

「うむ……」

そう頷くじいさんから強いものを感じる。この人……かなりの達人だな……

「え〜と……わたしは?」

あ……コノハはどうするんだ?

究極技を習得出来る特定のポケモンを持ってないぞ

「ふむ……おぬしはコノハじゃな?」

「は、はい……」

そう言われてコノハは頷く、コイツはどうなるんだろ?

「お主は婆さんに相手して貰ってくれ。怪我はせんようにな」

そう言いつつもじいさんは歩いていき、オレはそれを追った。怪我  
つて……大変な事になりそうだな……

「ほう……お主のオーダーはしっかり育ておるようじゃなあ…  
…お主の事もよく信頼してるようにも見える」

じいさんの家の庭に移動すると、庭はバトルフィールドのようにな  
っていた。オレはオーダーを出すように言われたためその指示に  
従ってオレはオーダーを出すと言われた。まあ、一番バトル  
を経験してるのは間違いないけどコイツだし、苦難の度にコイツと共に  
乗りきってきた訳だし当然と言えば当然だな……

「素質は十分じゃな。オーダー、お主にはわしのチルタリスと組  
み手をしてもらうぞ」

そういうとじいさんは懐からボールを取り出してチルタリスを出し  
た。歴戦の勇姿のようで、その綺麗な綿毛にはいくつもの傷がつい  
ている。

「よし、なら行くぜ！オーダー……」

バトルと同じ要領で指示を出そうとした。その瞬間だった。

「何をやっておるんじゃ！お主の相手はわしじゃ！」

「ぐぼっ！」

じい……じいさんの鉄拳がオレの頬に突き刺さりオレは転倒する。畜生……さっきからこんなのばっかりだ……

「お主の相手はこのわしじゃ、わしと戦いながらオーダイルを勝利に導いてみせる。行くぞ、チルタリス、竜の波動！」

『チルルーー！』

戦いながら……どうみても達人のじいさんと戦いながらバトル……そんな上手いくのかよ！  
とにかくオーダイルに指示を……

「オーダイル、高速移動で……っ！」

指示を出そうとした隙にじいさんの拳による攻撃、間髪避けれなかったが、それはじいさんが手加減してくれていたからに過ぎない。オーダイルはとうとうなんとか高速移動で避けたものの、次の動作に移る前に指示が途絶えたせいで冷静さを失ってしまう。指示が途切れるだけで心配を与えてしまうのか……それじゃ臨機応変って話にもいかないわな……とにかく！

「おりゃ！」

オレはやられた分を返すように右手で拳を作り殴りかかるそれは容

易にさばかれてしまいダメージは与えられない。だが、こうやって攻撃していれば……容易に指示を出す事が出来る！

「オーダイル、もう一度高速移動から冷凍パンチだ！」

『ダール！』

今度は高速移動による超加速で急激にチルタリスに接近し、冷気を纏った拳を叩き込もうとする。食らえ！

「中々飲み込みがいいの……相手に攻撃して相手の攻撃が無い間に素早く状況判断をしてオーダイルに攻撃させるとはな」

じいさんの言う通りだ。相手の攻撃のせいで指示がままならないなら、相手に攻撃をして隙を作ってその間に状況を飲み込んで指示を出すだけだ。ただ言うのは簡単だが、これをやるのにはとてつもなく体力が消耗する。瞬間的に高いレベルの集中を繰り返す訳だから正直しんどいものがあるぜ……だけど『ながら』のバトルなんかしたら不器用なオレには出来ないからこれをやっていくしかない！

「じゃが、そう簡単にはいかん。チルタリス、白い霧じゃ！」

『チル！』

くっ……じいさんが体勢を崩しながらも出した指示にチルタリスは反応して白い霧を発生させてきた。その攻撃でチルタリスを見失ってしまふ。これじゃ攻撃に移れねえ……やっぱり達人って呼ばれるぐらいのレベルだぞ……この人は……『ながら』でもまともに戦ってくる

「動揺は隙を生むぞ。ほりゃ！」

「うっ……」

隙を見せたところに拳の一撃、それをガードしてみせるがそれでも痛いものは痛い。これでも余裕そうな表情をしているじいさんを見ると手加減してくれてるといのが分かる。

「まだまだ甘い竜の波動じゃ！」

「チルー！」

「ダイ……！？」

しまった！

チルタリスが放った竜の波動は冷凍パンチを決めるべくぎりぎりまで迫っていたオーダイルに直撃した。く………白い霧に惑わされなければ……

「オーダイル、大丈夫か？」

「ダイル！」

「まだまだ余裕だ！」といった表情で立ち上がるオーダイルは頼もしい。でもこのままじゃ勝てないのも確実だよな……

「ホホホ、焦らなくてもよい。センスはあるのじゃからの」

「チルー！」

そう言うつじいさん達から余裕を感じる。畜生……すっげー悔しいぞ……

「ならまだまだ行きますよ！オーダイル、高速移動からアイアンテール！」

『ダアアアイル！』

オレとオーダイルはそれぞれの目標に向かって駆け出した。



現在時刻はもう既に夜になっている。夜になったため、休息のためにPCに帰された訳だが……帰った頃にはもう体中は擦り傷や打ち身だから、あのじいさん手加減はしてくれりけど、隙あれば容赦なく攻撃をしてくるもんな……畜生め！

で、現在治療中な訳だが、思いのほかコノハの荒い治療がオレにさならぬダメージを蓄積させる。な、泣きたい……

「はい、終わりよ！」

「つてー！」

留めと言わんばかりに治療したばかりのところを軽くだろうが、平手で叩いてくる。涙が出そう……

「で、アンタは究極技を完成出来たの？」

「もうちょっとらしいぜ、問題はオレ自身のトレーナーとしてのレベルによるらしい」

究極技を放つにはオレとオーダー、両者のレベルが一定以上に達した時初めて使える技らしい。今日のオレの特訓は精神的な修行に、肉体的な修行、それから集中力を鍛える修行だったらしい。集中つてバトルでも大事だもんな、肝心な時に集中力が途切れたら指示とかが遅れて話にならないもんな

「ふん、わたしはルカリオと座禅させられたわよ……何回も叩かれて肩が痛いわよ……」

コイツもコイツで苦労したんだな……座禅って事は精神修行だな。

なるほど、波動を高めるにはもってこいな訳だ。

「今日は寝ないでおこうかな……寝たら明日が来るし……」

「寝なくても明日は来るぞ……」

コノハの言葉にそう突っ込みを返す。コイツのメルヘンな思考が事実であって欲しいと今日ばかりは思った。

「オーダイル冷凍パンチだ！」

「チルタリス、電光石火で避けるのじゃ！」

あれから数日たった。今は久しぶりに普通のバトルをしている。あの鉄拳が叩きこまれないと思うと嬉しくて堪らない。

『ダイイル!』

『チルー!』

チルタリスは強力な冷気を纏った右手を振り上げながら接近してくるオーダイルから電光石火で急速に上昇して逃げる。ちっ! 威力とかも繰り返して使ってたから上昇して当てれば勝てるのに当てる事が出来ない!

「そこじゃ、竜の息吹じゃ!」

「オーダイル、ガードしてダメージを最小限に抑えるんだ!」

『チルー!』

『ダイル……………』

ガードをしたもののオーダイルのダメージは少なくない。そして発生した際に畳みこんでくる。

「ゴツドバードじゃ!」

『チルー!』

く……………超高速で突撃してくるチルタリスのその攻撃は超ド級だ。そんなのまとも貰う訳にはいかない! かわせなくとも受け止めてやる!

「オーダイル、馬鹿力だ!」

『ダイール!』

そう指示を出すとオーダイルは赤いオーラを纏いながら突撃してくるチルタリスを正面から迎え討った。オーダイルはフルパワーで受け止めようとするのだが、完全にパワー負けしてしまい。弾き飛ばされた。く……今のままじゃ勝てないのか？

「大丈夫かオーダイル!」

『ダイル……』

吹っ飛ばされたオーダイルは頭をかきながら立ち上がる。ダメージはかなり大きいみたいだが……まだやれるよな

「相変わらずタフなようじゃな……じゃが……次で終わりにしてやるわい」

『チルー!』

何!

そう言うじいさんの言葉と同時にチルタリスの真上に巨大なエネルギーの塊が形成された。あれは……

「ドラゴンタイプの奥義、流星郡じゃ!受けてみるがいい!」

『チールウウウ!』

チルタリスが吠えると同時にオーダイルに向けて特大のエネルギーの塊、流星郡を落としてきた。あ、あんなの受けたらオーダイルは……どうする……どうすればいい!?

『ダイル!』

!?

落ちてくるエネルギーの塊に対してオーダイルは構えた。すると水色のオーラを身に纏い始めた。コイツは特性『激流』か!

よし、水タイプの威力があがる。これなら相殺できるかもしれない……イヤ……それじゃダメだ……どうせ相殺出来たとしても、その後は互角の戦いが出来ないなら負けは目に見えている。なら……あれを貫いて致命傷を与えるしかない!

「オーダイル、一か八か! やってみるしかないぞ!」

『ダイル!』

オレが力強く叫ぶのを聞いてそれに呼応するようにオーダイルが吠える。激流も力を貸してくれるから出来ない事は無いハズだ……後は……オレとオーダイル次第……上手くいけよ……

「ハイドロカノン!」

『ダアアイイル!』

オレの指示と同時にオーダイルの口からハイドロポンプより圧倒的に強力な水流が放たれた。それは流星郡に激突してそのまま流星郡を押し返し始める。

「な、なんじゃと!? まさかこんな事が……」

「行けええ!」

『ダアアアイル!』

じいさんの動揺に追い撃ちをかけるようにオレとオーダイルは叫ぶ。それに呼応するようにハイドロカノンも勢いを増して流星郡を貫いた。そして貫かれた流星郡は消滅してハイドロカノンがチルタリスに直撃したのが見えた。そしてそのままチルタリスは落下していく。やったのか……？

「チルタリス……ほほう……わしの負けじゃな。よくやった。見事なハイドロカノンじゃったぞ」

じいさんはチルタリスをボールに戻しながら言った。へへ………なんか照れるな……

「強くなったお主ならポケモンリーグでも戦っていけるじゃろう」とすると……ユースケさんともまともにバトル出来るのか？  
だとしたらすっげー嬉しいんだけどな

「はい、今までありがとうございました!」

そうオレは勢いよく礼をした。この数日の感謝の気持ちを込めてよしくしませぬはコノハに自慢してやる!  
そう思いオレはコノハの元へ駆け出した。

特訓！究極技！（後書き）

次回予告

イツキ「特訓を終えたオレ達は一度ワカバに戻るべく歩いていた」

コノハ「見てよイツキ！あのポケモン……」

イツキ「オレとコノハが見たポケモンとは！？次回、ポケットモンスターACEのSECOND SEASONの『迫る疫災』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ポニータ「ヒヒイン！」

## 疫災の予感（前書き）

グダグダになってしまいました。とりあえずどうぞ！



## 疫災の予感

フスベでの修行を終えたオレとコノハは今は47番道路を歩いている。当面の目標は一旦オレの故郷、ワカバタウンに一度帰郷するためだ。それに続いてコノハの故郷のヨシノシティ、とにかくジムバツジを全部集めたから一度帰らないとな。

「ワカバタウンねえ……そういえば今まで行った事無かったわね」

「あ、そうなのか」

そんなコノハの言葉にオレはそう返した。ワカバとヨシノの距離は結構近い。だから結構オレはヨシノシティの海岸にワニノコやユウイチ達と海水浴に行ったりしてた。ユウイチがとうもろこしを焼いてくれたのが、懐かしい。

「キキヨウには結構行ってたんだけどね。ほら、あそこにはポケモン塾があるから」

なるほど……ポケモン塾か……

ポケモン塾、トレーナーとしての知識をスクール以上に学ぶためにキキヨウに立っている塾だ。確かジヨバン二つて面白いおじさんが経営してたんだっけな？

なるほど……そこで勉強してたから、ストライクがハッサムに進化させた時の事みたいに色々な事を知ってたんだな

「って事はお前、ポケモン塾に通ってたんだな？」

「そ、おかげで結構役に立つ知識があるでしょ」

まあ……ホントに稀にな……と思ったがあえてそうは言わない。言ったらどうなるかなんて分かっている。むしろ料理教室に通っていて欲しかったなんて更に言えたもんじゃない

「そういえばイツキの旅立つ前ってどんな感じだったの？」

そういえばコイツにオレのスクール時代の話とかはした事がないな……今ある事が楽しかったり苦しかったりして話す機会が無かったんだな。いい機会だし話してやろうかな

「どうせヤンチャな奴だったんでしょうけどね」

そう水を差すかよ……まあ、間違っちゃいけないけどな

「そうだな。オレのスクール時代は……!？」

突然感じるようになったプレッシャー……人が放ったものじゃない……これってポケモンの特性の『プレッシャー』なのか？

「イツキ、あれ！」

そう言つてコノハが指差す先には4足歩行の黒い顔に白い毛、それから特徴的な三日月のような角というかアンテナというか……ま、いいや。それを持ったポケモンがいた。あいつが……プレッシャーを放っていたみたいだな。

「あのポケモン……見たことが無いな」

そうオレは口にする。結構長い間ジョウトを見て回ったけど、初め

て見るポケモンだな

「アブソルよ。ホウエンに生息してるポケモンらしいけど、ジヨウトの洞窟に極少数生息してるって聞いた事があるけど……本当にいたのね」

そう感心した様子でコノハが言った。これもポケモン塾の知識だな。

『アブ……』

アブソルはオレ達が自分の事に気付いたのを確認するように鳴くと背中を向けてゆっくりと歩いていく。アイツ……

「オレ達を誘っているのか？」

そうオレは呟く。まさにそんな行動としか思えない。何が目的なんだ？

「コノハ」

「分かってるわよ。追うんでしょ？」

流星はコノハ、結構付き合いが長いせいかわれの行動パターンも分かかってらっしゃるな……

「ああ、行くぞー！」

オレはそうコノハに返すとアブソルの背を追っていった。

「暗っ！怖っ！迫っ！」

そうコノハが微妙な3拍子をあげる。あまりに微妙過ぎて突っ込みが思いつかない。だが間違った表現では無いと思う。現在は暗闇の洞窟、アブソルを追っているとここに入って行ったので、オレ達も追って入っていった訳だが……やたらと暗いし、道も狭い、まさに最悪な環境だ。道も入り組んでいるから移動するのも大変だし……とにかく暗いのぐらいなんとかしないと。オレとコノハのポケモンはフラッシュを覚えてないから……とにかく……オレは野宿になった時のために拾っておいた木の棒を何本か鞆から取り出して、ビニールのロープでまとめる。後は……

「コノハ、よろしく」

「ハイハイ、ポニータお願い」

オレの言葉にコノハはそう言いつつもポニータを繰り出した。するとポニータはわかりきったようにオレの手に持っていた棒に火を付けた。よし、たいまつの上上がりだ。

「行くぞ」

そうコノハに声を掛けるとコノハは黙って頷いてからポニータをボールに戻した。それから暫く黙って歩いていく。あのアブソルの目的はなんなんだ……？  
ん……そういえば……

「なあコノハ、出口覚えてるか？」

オレはコノハにそう尋ねる。洞窟に入れば迷ってしまうってお約束がオレ達にはある。アブソルを追うのに夢中でルートの確認なんて一切してなかったからな……迂闊だった

「覚えてないわよ。でも、リュックに詰めておいたきのみをいくつも道中に置いてきたわよ。これなら帰り道も大丈夫よ！」

おお！

流石はコノハ！

かの有名な童話の作戦だな。色々頼りになるぜ！

オレはそれを確かめるためにたいまつで地面を照らしながら振り向いた。ってアレ……

『GRA!』

……オレが振り向いた先にはおいしそうなきのみを食べる青い、どこか鮫を連想させられるドラゴンポケモン、ガブリアスがいた。す

「ごいおいしそうに食べてるのはいいんだけどね……」

「えー！そんなのアリ!？」

コノハが悲鳴をあげる。うん、これで帰り道がわからなくなった訳だ……

「コイツは最悪だぜ……」

そうオレは沈んだ口調で呟いた。じよ、「冗談じゃないぞ……また迷ってしまったって事じゃねーかよ！

「なあ、お前はイジメっ子か？」

そう涙が出そうなのを堪えてガブリアスに言う。ガブリアスは『G RA?』と頭を捻っていてなんの事だか分かってないみたいだ。の、のんきな奴だぜ……というかこのガブリアス、やけに人に懐いてるな……それになんかこのガブリアスを知ってるような気がするぞ？

「お、こんなところにいたのかガブリアス！」

そう考えていると知ってる声と共に駆け寄ってくる人影、あれは……

「げ、イツキにコノハ……お前らとは縁があるのかなあ」

そう言う人影の正体はアキトであった。ガバイト、ガブリアスに進化していたのか。とにかく、怒りの矛先をぶつける相手がいる訳だ。

「アキト……覚悟は出来てる？」

そう尋ねるコノハのプレッシャーは恐ろしい。並のトレーナーなら

裸足で逃げ出すであろう

「ちよっ……どうしたんだよコノハ！いきなりなんなんだよ！」

見苦しい言い訳だな。覚悟してもらおうか

「イ……イッキまで……ちよっ！ストップ！」

「自分のポケモンぐらいしっかり面倒見る！」

アキトの願いは聞き届けられなかった

「く……イッキにコノハめ……手加減つてのを知らんのかお前らは  
そうばやくアキトは軽く無視する。確かにやり過ぎた感はある。な

んせコノハの踵落としを貰ってるんだからな多少は同情するぜ……アキトは暗闇の洞窟で修行していたらしい。で、気がついたら迷っていたらしく、出口を探して歩いているとガブリアスと離れてしまい、ガブリアスを探していて現在にいたる訳だ。とにかく今はアブソルを探さないと……どこだ？

「イツキ、あそこ！」

コノハの指差す方向をオレは見た。そこにはアブソルの姿があった。やっぱりオレ達を誘っていたみたいだな……

「コノハ、ルカリオをだしてくれ」

「分かってるわよ」

オレの台詞に当然のようにコノハがそう言う。やっぱり長い間一緒に旅してきた訳だからこれ程度の事は分かるよな

「お前は……なんでオレ達を誘ったんだ？」

オレはアブソルにそう尋ねる。

『アブ、アブアブ』

『君と話たかったからだ』

アブソルの言葉をボールから登場し、それから訳してくれるルカリオ。オレと話がしたい？

「なんでオレと？」



『アブ、アブアブ』

『君のその真つすぐで強い目に惹かれたからだ』

……

『アブアブアブ』

『そんな君なら私の話を真剣に聞いてくれる。そう思ったんだ』

なるほど……でもオレは別段強い人間って訳じゃないんだけどな……  
…まだまだ精神的にも幼稚だと思うし

「で、何の話だ？」

オレはアブソルに尋ねる。

『アブアブ！』

『ああ、私、アブソルという種族は災害が起こるのを察知する事が出来る』

へへ、凄い能力だな。やっぱりポケモンって凄いんだな

『アブ、アブアブ！』

『そして人やポケモンにそれを警告する為に姿を現すのだ』

凄い良い奴じゃねえかよ！

「オレの目の前に姿を表したって事は……」

『アブ……アブアブ』

『そつだ……大きな疫災が起ころうとしている』

疫災……地震か？

津波か？

災害を考えたらキリがないな……

『アブ、アブアブ』

『それは人が起こす人災、放っておいては取り返しのつかない事になる』

人災だって……それに取り返しのつかない事って……まさか

「もしかして……ロケット団の事!？」

そう言うのはコノハ、コイツもオレと同じ事を考えていたのか……ロケット団は過去にシオンのラジオ局を占領してポケモンを狂暴化させる電波を放っている。だから奴らが人災になるって十分想像出来る。

『アブ……』

『それは分からない……』

そつかよ……でも、その可能性は高いだろうな。とにかく

「アブソル、その人災の事ならオレ達に任せておいてくれよ。オレ達はそんな奴らには借りだらけだから。借りを返すのと一緒にその人災って奴を止めてやるぜ！な、コノハ、アキト」

「当然、痛い目に逢わされた分何倍にもして返してやるわよ！」

「お調子者め！でも、付き合ってやるよ！」

そう2人は返してくれる。やっぱりコイツらはこっぴつ奴だよな。頼りになるぜ

『アブ、アブアブ』

『やっぱり君達に言って正解だったよ。それと頼みたい事があるんだが』

頼みたい事？

『アブアブアブアブア？』

『私も一緒に連れていってくれないか？』

連れていってって……なんで……

『アブアブアブ！』

『私も人任せというのは嫌だからな。それにその真っ直ぐな目……信用に値するからな。君達との旅なら楽しそうだ』

……へへ……嬉しい事言ってくれるじゃんか

「ああ、もちろんいいぜよろしくなアブソル」

『アブ！』

これには通訳はいらない。もちろんって頷いてるんだよな。オレはそれを確認してから空のモンスターボールを取り出してアブソルに当てた。よし、アブソル、ゲットだぜ！

「それじゃ……頑張って出ようか……」

さっきとは急変、コノハのテンションが急激に下がった。オレ達は迷ってたんだっけ……ハア……

何時間か掛けてなんとか脱出したのだが……出口が入った場所じゃない……出た場所はよりによってキキョウシティの付近に出てしまった。もちろんアキトに八つ当たりが行われたのは言うまでもない

## 疫災の予感（後書き）

### 次回予告

イツキ「キキヨウに訪れたオレ達は、マダツボミの塔で修業をする事になり登っていく」

コノハ「絶好調！最上階まで一気に駆け上がるわよ！」

イツキ「っておい！アイツ、屋根に登って何をやってんだ？迷惑な奴だ、すぐに屋根の下にひっぺ返してやるぜ！」

コノハ「次回、ポケットモンスターACEとSECOND SEA SONの『ドッグファイト』次回もポケモンゲットよ！」

ハツサム「サムウ！」

## ドッグファイト(前書き)

タイトル間違えたような気がします

## ドッグファイト

「うわぁ……でっけえ……」

オレは思わず驚きの言葉を口にした。オレとコノハはキキョウに来たという事でマダツボミの塔に修行に来ている。ん？アキトはというと、キキョウジムに行っている。マダツボミの塔は一度制覇したから、あそこの門下生とバトルするんだってさ。マダツボミの塔は、いわゆる五重塔って奴で古いなんというか趣がある。その大きさはなんと30メートル以上あると聞く。古い建築物のくせにでかいよな……まあ、そんな事言ったらエンジンにあるスズの塔の方がかいけどな

「いつも思うけどこんな柱一本でよく立っているわよね……」

でかい入口の奥に見える太い柱。それは揺れてはいるもののあれが無ければこの塔は成り立たない。それほど重要なものらしい。それほど重要には見えないんだけどな……

「しかもこの柱は30メートルぐらいのマダツボミが姿を変えたものって伝説……あそこまでヒョロツとしたポケモンを信頼出来る野太い神経がわたしには分からないわよ」

30メートルのマダツボミって……大ききにも驚きだけどそれが柱になったって……マダツボミ、弦？

みたいので出来た体につぼみのような頭をしたポケモンだ。確かにあそこまでヒョロツとしてたのが柱だったら色々と不安だよな。

「それじゃ行くわよイツキ、途中にいる修行僧の人がいてバトルを

挑んでくるけど、油断無しでいくわよ」

「ああ、分かってるって」

そう中に入る事を促すコノハにそうオレは頷く。どんな相手だろうが全力勝負、それがオレのポリシーだ。相手が修行僧だろうがなんだろうが手加減は無しだぜ！

それにしてもマダツボミの塔について詳しいコノハ。この前の話からしてポケモン塾に行っていた時代にここを訪れた事があるんだろうな……で、あの口ぶりからして痛い目を見てるハズだ。なんとなくだがそれについては想像出来る。

「んじゃ、行こうぜ」

「ええ」

オレのそんな言葉にコノハが頷いたのを確認するとオレとコノハはマダツボミの塔へ入っていった。



「ふう……なんとか最上階についたな」

「ホント、危なかったわね」

なんとかオレ達は襲いくる修行僧達を撃退してなんとか最上階に到達するのに成功した。いやいや、まさか6対2みたいな不利なバトルをすることになるなんて思ってたぜ……フォーメーションを組んで戦って来た時は冷や汗ものだった。だが、強引にハッサムで陣形の中心のマダツボミを叩き、隙を作ったところにコノハのポニータのフレアドライブ、ハッサムのシザークロスで確実に倒していきなんとか危機を脱した。その後何かバトルを繰り返して来たが、明けても暮れてもマダツボミばかり！  
いい加減うんざりしてきたぞ……

「んじゃ、最後に老師さんとバトルといきますか！」

「そうね！今日こそ制覇してみせるわよ！」

頂上にいる人物、ここの修行僧の師匠と言える人物、老師だ。この人を倒せばこのマダツボミの塔を制覇した事になる。頂上の最深部にいると考えられるからこっちから出向かないとな

「おーい、早く降りてきなさい。危ないぞ」

ん？

不意にそんな声が聞こえた。どうしたんだ？

オレは声が聞こえた方を向く。そこには窓というか……まあ開いて

いる風の抜け道だな。修行僧と同じく坊主になっている頭、だけどさつきまでの修行僧より高級そうな服を着ている。この人が老師さんだな。

「どうしたんですか？」

コノハが老師さんにそう尋ねる。本当にどうしたんだ？

「うむ、君達より先には来たものがあるのじゃが……」

オレ達より先に来た奴？

そんな話は修行僧の人達は言って無かったぞ。出してきたマダツボミも元気そうだったし……まさか……修行僧の人に誰ひとり気づかれずにここまで登ってきたのか？

おいおい……忍者とか怪盗って訳じゃあるまいしそんな奴……とにかく

「オレが強引にでも連れ戻してきますよ」

「そうか……すまぬな」

オレはそう言つと老師さんがすまなさそうにそう言った。そりゃホントなら老師さんがやるべき事だからな。当然と言えば当然か

「任せてくださいよ。行くぜピジョット！」

『ピジョオオ！』

オレはそう言いながらもピジョットを出すとピジョットは高らかと鳴く、フスベジムの戦いのおかげでコイツは自信を取り戻したから

な。今じゃ元気いっぱいだ。

「イツキ、気をつけて行きなさいよ」

「分かってるって！頼むぜ、ピジヨット！」

『ピジヨオ！』

オレはコノハの言葉にそう答えるとピジヨットにそう告げる。するとピジヨットは穴を体を縮めて通過する。意外に大きい穴でなんとかそれをする事が出来た。さて、次はオレだな。オレも同じように穴を通ってそのまま同じように飛び降りた。この風を切る感じ……なんかいいな、そう思っている肩を何かに捕まれる感覚を感じる。そして浮遊感、ピジヨットがオレの肩を掴んで上昇したんだ。なんか酔いそう……ま、そんな事を言ってる場合じゃないよな。

「ピジヨット、頂上まで飛べ！」

『ピジヨオ！』

オレの指示を受けてピジヨットは急上昇を始める。ヤバイ……本当に酔うかも……と……とにかく頂上まで上がったぞ……オレは前を見るそこにはなんと頂上についているアンテナというか……とにかくなんか尖った奴がある訳よ。それが外されていて何か機会が取り付けられている。それと黒いシルクハットにタキシード、それにマントをつけた同い年ぐらいの少年……く……アイツを見てるとある奴を思い出して嫌な記憶が蘇ってくるな……と……とにかく！

「おい！アンタはそんなところで何をしてるんだよ！ここから降りろよ！」

「ちつ……邪魔が入ったか！フライゴン！」

『ギューイー！』

「うわっ！」

『ピジヨオー！』

少年が指示を出すと上空からオレンジ色の光線が飛んできた。それをぎりぎりです。ピジヨットは回避する。ふう……ホント間髪だつたぜ……今のは破壊光線か！

オレは破壊光線が飛んできた方向を見る。そこには緑色のどこか昆虫をイメージさせるドラゴンがいた。アイツがフライゴンか……

「いきなり攻撃だなんてずいぶんな挨拶だな！」

「オレも仕事をやってるんでね。邪魔されたら困るんだよ」

そう言う奴は余裕そうだ。く……この怪盗気取りめ！

「だから落ちてもらおう！フライゴン、ドラゴンクローだ！」

『ギューイー！』

怪盗気取りの指示を受けてフライゴンは一気に迫りくる。く……ピジヨットは今の状態じゃ上手く回避は出来ないのに……とにかく考えろ……思いつくまではピジヨットが回避するのを信じるんだ！

『ピジヨットー！』

『ギュー！？』

ピジョットは素早く翼を畳んで降下する事でその攻撃を回避する。  
ふう………なんとかなったか………それでも執拗に迫るフライゴン、今  
度は対策が思いついたぜ………覚悟しろよ！

「ハッサム！君に決めた！」

『サムウー！』

「何！？だが！ドラゴンクローだ！」

ハッサムの登場により怪盗気取りが驚くが、すぐさま叩き落とそう  
と指示を出してくる。そうはいくか！

「ハッサム、メタルクローで迎え討て！」

『ギューー！』

『サムウウー！』

ハッサムは自慢のハサミを更に硬化させ、フライゴンの竜の力が宿  
った爪を受け止める。ハッサムは空中には重量の関係で長時間空中  
にはいられない！

一気に決めてやるぜ！

「そこだ！アイアンヘッド！」

『サムウー！』

『ギョイ！？』

ドラゴンクローを弾き、隙が出来たフライゴンにまた更に硬化させた頭をフライゴンの腹に叩き込んだ。それを受けたフライゴンは苦しそうに腹を抑えながら後退した。もう一撃！

「よく頑張ったな。戻れハッサム！ピジヨット、エアスラッシュ！」

『サムッ！』

『ピジヨオー！』

オレはハッサムをボールに戻しながらピジヨットに指示を出す。するとピジヨットは翼を奮い空気の刃がフライゴンを襲った。それを受けてフライゴンは怯んだ。これでしばらく追撃は無いはずだし、頂上に戻るう！

「ピジヨット、頼む！」

『ピジヨオー！』

そうオレが頼むと再びピジヨットは急上昇する。うえっぶ……オレにはジェットコースターはダメみたいだな……

「く……不利な状況でオレのフライゴンを停めるとは……」

「へへ……今度こそ降りてもらっぜ……」

そう言う怪盗気取りにオレはそう返す。

「おいおい、顔色悪いけど大丈夫か？」

……と怪盗気取り、あんま大丈夫じゃね〜よ……

「とにかく降りてくれよ……」

このままじゃオレ間違いない吐いちゃうから……

「そうだな。オレの目的は達した訳だしたな」

な……何……!??

その台詞の後、塔の中央から急に空に向かって光の柱が放たれた。

な……何だよこれ……そしてその光は塔の側の森に落ちる。な……  
本当になんなんだよ!??

「遂に姿を現すぞ……今回のターゲットが!」

タ、ターゲット!??

コイツは一体……

「マダツボミの塔の柱から化石復元マシンを使って復元した……」

落ちた光は巨大な何かを形成していく……あ、あのシルエットって

……

「マダツボミだ!」

そう怪盗気取りが言うと光が晴れて超巨大なマダツボミが姿を表した。コイツは……冗談じゃねえぞ!

まさか……アブソルの言ってた疫災ってこの事だったんじゃ……オ  
レはその巨体に完全に威圧されるのであった



## ドッグファイト（後書き）

次回予告

イツキ「何だよアレは、あんなマダツボミ、見たことないぞ！」

コノハ「突如姿をあらわしたマダツボミ、こんな化け物に勝ち目はあるの!?!」

イツキ「とにかく適当にやってみるさ。次回、ポケットモンスター

ACE〜SECOND SEASON〜『脅威、巨大マダツボミ』

次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ピジョット『ピジョオ』

脅威、巨大マダツボミ（前書き）

巨大なマダツボミの前にイッキは……

## 脅威、巨大マダツボミ

「うわぁ……でっけえ」

突如姿を表した超巨大なマダツボミを見て、オレは思わず驚きの声を漏らした。超巨大、その表現は間違ったものじゃない、大体マダツボミの塔と同じ大きさぐらいある。って事は大体30メートルぐらいか、その大きさに正直少し呆れてるぜ。

「おい！お前何したんだよ！」

そうオレは大声でいつの間にかフライゴンの背中に乗っていた怪盗気取りに尋ねる。コイツの使った機械の影響でコイツが現れたんだ。間違い無くコイツの仕業だ！

「言っただろ？化石復活マシンを使ったって」

化石復活マシン？

確かそれって化石になっているポケモンを復活させる装置じゃ……まさか！

30メートルのマダツボミが柱になったって伝説があるから……柱からコイツが復活したって事か……？

じよ……冗談じゃないぞ！

「そして奴は今回の俺のターゲット……コイツで捕獲させてもらう！」

く……この怪盗気取り……コイツをゲットするつもりなのか……しかもあの手に持つてる紫色のモンスターボールは……マスターボール

ル！

マスターボールは最強のモンスターボールで、どんなポケモンでも確実にゲット出来るらしい。どうしてあんな物を……とにかく……アイツにゲットさせる訳には行かない！

「行けっ！」

「ピジョット、ボールを狙え！エアスラッシュ！」

『ピジョオオ！』

ピジョットはオレの指示を受けて、翼を奮い空気の刃を放った。それは見事にマスターボールを捉えてマスターボールを切り裂いた。よし、上手くいったぜ！

「あ……お前！何すんだよ！」

焦った様子で野郎が言う。だってせっかくのマスターボールを破壊されたんだから当然だよな

「悪いな！あのマダツボミはキキョウじゃ伝説になっていて色んな人に慕われてるんだ！お前や依頼人の都合の為だけにゲットさせる訳にはいかないんだよ！」

マダツボミの塔でオレは何人も修行僧と戦ってきた。その修行僧が使ってきたポケモンは全部マダツボミだ。進化系のポケモン、ウツドンとかじゃない、マダツボミだ。マダツボミと共に長い間修行してたならウツドンに進化してもおかしくない。なのに今だマダツボミ、それから考えてマダツボミがそれだけ好かれてるんだ。だからその好かれるようになった元である超巨大マダツボミはもつと

慕われてるハズだ。だからコイツを1人や2人の都合の為にゲットさせてたまるか！

「く……全く面倒な仕事を増やしてくれる。こうなったら正攻法だ  
」

そう言うと野郎はフライゴンに攻撃の指示を出し始めた。力づくでゲットするつもりか！

『ツボオ！』

！？

「うおお！？」

『ギョイ！？』

「のわっ！」

『ピジヨオ！？』

マダツボミが鳴いたと思うとマダツボミは葉っぱカッターを放ってきた。その規格外にデカイ葉っぱカッターをなんとか回避は出来た。危ない危ない……でも当たったらピジヨットでもアウトだなコイツは……

「ピジヨット、一回降りよう。このままやり合っても危険すぎる」

『ピジヨット！』

オレの言葉を聞き、ピジヨットはゆっくりと降下し始める。幸い怪盗取りが正攻法でゲットしようとマダツボミへ攻撃を仕掛けている。それでいい感じで囿になってくれている。これなら安全に降下出来る。それから対策を考えよう。暴走する超巨大マダツボミを止めないとな。あの怪盗取りはその後だ。全く、あの怪盗取りが余計な攻撃をして暴れさせなければこんな事考えなくてよかったのに……

『ギユウウ!?!』

「ぐぐうううう」

は？

『ピジヨオ!?!』

「ぐぼっ!」

イッテー……弦の鞭なんかで吹っ飛ばされてきたフライゴンと気が取りがゆっくりと地上すれすれまで降下していたオレ達と激突して地面に叩きつけられた。く……ぎりぎりまで降下出来てダメージを最小限に抑えられて助かったぜ……状況を確認する。ピジヨットがフライゴンに潰されていて、怪盗取りはピジヨット達の隣でオレと同じく頭を抑えながら立ち上がるうとしている

「悪いな。マスターボールが破壊された仕返しだと思ってくれ」

この野郎……何が仕返しだよ!

「覚えてろよお……」

『ピジヨオ……』

恨みがましくそう呟くオレに釣られてか、ピジヨットも同じふうに鳴いた。まあ潰されたんだから当然だよなあ？

『ツボオ！』

げっ！

マダツボミが怪盗気取りに止めを差そうとこちらに向かって葉っぱカッターを飛ばしてきた。あまりにも広域に放たれたそれは怪盗気取りが邪魔で避けれそうにない！  
くそお！

「だあ！お前なんとかして打ち落とせよ！」

「フライゴンにやらせてるさ、それが追いつかないだけだよ！」

確かにフライゴンは竜巻のようなエネルギーを吐いて葉っぱを打ち落としているけど迎撃が間に合っていない。く……ピジヨットがこのフライゴンに潰されてなければなんとかなるのに……どうすればいい！

「エール、フライゴンを守るを使わせて自分達の身を守ってる！」

そつどこからか声が聞こえた。この声は……まさか！

「そつか！フライゴン、守るを使え！」

『ギューイ

気取り、もといエールの指示でフライゴンは守るを発動した。思ったがいい加減。ピジヨットから降りて欲しい、オレとエールは潰されてないからいいが、ピジヨットは潰されているからな……いい加減降りてやって欲しい……

「バクフーン、噴火だ！」

『バクウウウ！』

そのバクフーンの気合いの叫びが聞こえると同時にいくつもの巨無数の大きな炎の塊がオレの視界に入った。その炎は迫る葉っぱカッターを全て焼き付くし消滅する。今のは！

「よう、イツキ！随分デカイのと戦ってるじゃねーかよ！」

「全く……お前の登場タイミングはいつも美味し過ぎるぜ。ユウイチ！」

そう、オレ達を救ったのはオレの親友とも言える人物、ユウイチであった。本当に美味しいところに出てくるよな、コイツは……オレは立ち上がり、すぐさまユウイチの元へ駆け寄る。もちろん潰されていたピジヨットもいつの間にかフライゴンから脱出してオレと共に移動する

「た、探偵君か……」

『ギユ、ギユイ……』

ん？



どうしたんだ？

エールって奴、ユウイチが出てきた瞬間嫌そうな顔を شدしたぞ

「ようエール、お前も久しぶりだな。今すぐにでもお前を捕まえてやりたいが、今はお預けだ。まずはコイツを止める！」

「そうかい。ならば、隙あらばコイツを捕まえて逃げさせてもらおうよ」

「そうはさせないさ」

……なんだ……この2人からライバルのような空気は……しかもなんかユウイチが何故か探偵君って呼ばれてるし……ユウイチの奴、何かの事件に首を突っ込んだな……

「ゆーいち！もあ、少し目を離したらこうなんだから」

「イツキ、アンタ、ケガはしてないわよね！？」

そんな声を出しながら現れたのはコノハとサクラだ。いつの間にか流してたんだ？

まあ、オレがマダツボミの塔を出てからだろうな。

「1」……ごめん、サクラ……オレが悪かった……」

そう謝るユウイチは相変わらずサクラには頭があがらないようだ。まあ、その関係は簡単に崩れないよな。とにかくオレもコノハに言葉を返しておかないとな

「イヤ、軽く流血を……」

「嘘！」

オレのそんな言葉にコノハが過剰に反応する。外見じゃ分からないかもしれないが、実は……

「唇を切っちゃまってさ、嫌にヒリヒリするんだよな……」

あのエールと激突した時にやっちゃまって、口の中に少し血が入ってしまったって鉄のような味が口の中で広がり、気持ち悪いんだよな……

「余計な心配させるんじゃないわよ！」

「わあ！悪かった、悪かったって！」

流石に今のはまずかったのかコノハの殺気を感じ取り素早く謝る。危ない危ない……こんな場面で踵なんて落とされたらたまったもんじゃないぞ！

「まあまあコノハちゃん……どうやってアレを止めよっか？放ってはおけないし……」

そうサクラがコノハをなだめながらもそうみんなに尋ねる。流石サクラ、面倒見がよくて真面目だよな。普通だったら逃げるところだぜ？

コノハからもあのマダツボミからもさ。ともかく今は作戦会議だ。エールがマダツボミをゲットしようかと奮戦してるお陰でいい感じに囿の役割をしてってくれるからな。今の内に……

「とりあえず倒してみるか？被害がこれ以上広がる前にさ」

とユウイチ、ま……間違った選択じゃないが……

「ちょっと乱暴過ぎる気がするけど……仕方ないわね……」

そう言うのはコノハ、いやさ……

「お前から乱暴過ぎるって言葉が……ごめんなさい……」

突然の殺気を感じ取り、オレは言葉を切って、謝罪の言葉を口にす  
る。いやさ……誰でも怖いさ……コノハの殺気はさ……てかい加  
減に直さないとな、余計な事をつい口走ってしまっこの口を……

「でも、倒すっていつでもあんなに大きいポケモンを倒せるの？」

オレとコノハの子供染みた争いはサクラによって華麗にスルーされ  
る。あれ……ここまで華麗にスルーされると流石に悲しくなってく  
るぞ……

「手はあるさ……イッキ、お前のオーダイルは究極技を使えるな？」

！

突然ユウイチがオレにそう言う。それって……

「勿論使えるぜ」

そう言うオレの口調は少し自慢気。なんせあれだけ泣きそうになり  
ながらも修得した技だからな。

「なら大丈夫だ……作戦はオレのバクフーンのプラストバーン、サ

クラのメガニウムのハードプラント、イッキのオーダイルのハイド  
ロカノンによる頭部への1点集中攻撃だ」

## 脅威、巨大マダツボミ（後書き）

### 次回予告

イツキ「ユウイチの作戦で究極技を集中させる事になったオレ達」

ユウイチ「でもあんな化け物にどうやって攻撃を当てるよ……」

コノハ「それならわたしに任せときなさいって！次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『決着！巨大マダツボミ！』次回もポケモンゲットよ！」

ルカリオ「なんか……次回が不安だ」

決着！巨大マダツボミ（前書き）

ユウイチの提案した作戦……果たしてうまくいくのだろうか？

## 決着！巨大マダツボミ

ユウイチの提案、頭部への1点集中攻撃……もつともダメージ効率が  
高いやり方だ。確かにこの戦術ならなんとかなるかもしれない……  
だが……

「あんなデカイのの頭にどうやって当てる気よ」

そこにコノハが突っ込みをいれる。そりゃそうだよな……

「そこはコノハちゃん、よろしくね」

「え……ちょっとサクラ、それは酷いんじゃない！」

そう言う無茶振りをするサクラは強引だと思う。やっぱり多少強引  
じゃないとユウイチのお姉ちゃん役はやってけないよな

「んじゃ、よろしく！」

そうユウイチが言うとサクラはメガニウムを出してユウイチと一緒  
にマダツボミに向かって駆け出す。よし……オレも！

「ピジョット、よく頑張ったな。後は休んでくれ。それじゃ、行  
くぜ！オーダイル、君に決めた！」

『ダール！』

そう言いながらもオレはピジョットをボールに戻し、反対の手でオ  
ーダイルのボールを投げてオーダイルを出す。オーダイルはいつも

通り力強く叫びながらも姿を現した。さあ……頼むぜ……

「イツキ、ちょっと待ちなさいよ」

そうコノハがオレを止めてくる。一体なんだよ……

「なんかいい作戦とかないわけ？」

……いい作戦って言われてもな……要するにあのマダツボミの頭を低い位置に持つてくる作戦だよな……

「ウソツキーのけたぐりなんてどうだ？」

けたぐりは基本的に相手をずっこけさせる技だ。だからこれなら強制的に転倒を……

「サイズ差を考えてよ」

……流石に無理か

「ヨルノズクの催眠術が効く相手じゃなさそうだしな……」

仮にも相手はポケモンだ。しかしあんな化け物を見たことがない。

そんな規格外の相手にそんな技が通用するかは怪しい

「ルカリオとポニータ、イーブイのごり押しなんて問題外よね……」

とコノハ。確かにごり押しが出来れば楽なんだろうが、今戦っているエールのフライゴンが防戦一方なんだからな。あいつと戦ったから分かるけど並の腕じゃないからなエールとフライゴンのコンビは



……だからまともに正面からやるのは得策じゃねえな……それにコノハの手持ちは大型のポケモンがないから尚更その戦術には厳しいものがあるんだよな

「こつなつたらこれしかない！流星群！」

『ギューイ！』

さつきから防戦一方だったエールがそう叫ぶとフライゴンは特大のエネルギーの塊を自分の上に作り出した。ドラゴンタイプの奥義、流星群……よし……これならあいつも頭を丁度いいところまで下げるハズだ！

オーダイルもそう思ったのかハイドロカノンをいつでも放てるように構えた。よし、行け！

『ツボオ！』

！？

『ギューイ！？』

「バカな！」

驚愕したとしか言えないぞ……マダツボミが口から葉っぱを交えた竜巻みたいなものを吐き出した。それにより流星群は飲み込まれ、竜巻はそのまま何も無い空間を通過していった。おいおい……流星群を飲み込んだだと！

あの技は……

「リーフストーム……だけどアレは洒落になってないわよ……」

そう言うコノハの額に冷や汗が出てきているのが分かる。あのリーフストーム、撃たれたらマズイのは確かだよな……

『ツボオ！』

「しま……フライゴン、避け……」

『ギューー！？』

な……流星群が簡単に敗られたせいも、呆然としているエールとフライゴンの隙ゆ付いて、マダツボミは自分の葉っぱを使い、飛んでいるフライゴンを叩き落とす。本当にあいつが巨大なだけのマダツボミなのか心配になってきたぜ……

「フライゴン！」

そう叫びながらもエールはフライゴンのもとへ走っていく。そりゃあんな事されたら心配だよな……

『ツボオ……』

！？

何……まだ……アイツはエール達に攻撃するつもりなのかよ！

それだけ無理矢理起こされたのが気に入らなかつたのかよ！

そして両手を振るい葉っぱをカタッパを繰り返した。く……止めないと！

「そうは行くか！バクフーン、もう一度噴火だ！」

『バクフウン！』

ユウイチの指示がオレより早く入り、バクフーンは吠える。するとバクフーンの背中から火山のように炎が噴き出され、オレを救ったように葉っぱを全て焼き払った。さっきも思ったがすげえ……アイツ……また強くなってやがるよ……

『ツボオオ！』

「ゲツ……こっち向くなよ！」

『バクツ！』

ユウイチの悪態、そうマダツボミは今度はユウイチに怒りの矛先を向けたのだ。全く……これだから気分屋は……

『ツボオオ！』

「うわっ！危なっ！」

『バクウ！』

げ……酷い……ユウイチに向けて、マダツボミは繰り返して足を弦の鞭みたいに叩きつけた。当然、ユウイチはそれを間髪で避け続けている。多分避けれるのはアイツが武道家であるが故だな。そういう勘は凄いいいからな！

「ゆーいち！メガニウム、甘い香りを使ってこっちに気を引いて！」

『メグウ！』

サクラがユウイチを守る為にそう指示を出す。ああ……なんか凄いフローラルな匂いが……コノハがなんか凄いリラックスした顔に……お前は頼むから作戦を考えてくれ。逆にオーダイルはガタガタと震えている。もしかしてウツギ博士のところに行った時にこれで痛い目にも逢わされたのか……

『ツボオ……ツボオ！』

マダツボミの顔は一瞬緩んだが、すぐさま顔を怒りの形相になる。

おいおい！

どんなイライラしてんだよ！

そして……

「キヤア！」

『メグウ！』

マダツボミはユウイチに向けて足を振り回しながら、器用に片方の葉っぱのような手を振るって葉っぱカッターでサクラに攻撃する。それにサクラは悲鳴をあげ、メガニウムはサクラを守るように光の膜……守るを発動してサクラを守る。く……今度はオレが助けに………そしたら今度こそ気を引けるはず……いや、待てよ……まだ口が残ってるぞ……って事はリーフサイクロンが飛んでくる可能性があるわけか……イヤ、考えてる場合じゃないよな……ユウイチ達の事、助けないとな！

「オーダイル、みんなを助けるぞ！吠え……」

「イツキ、ちょっと待って！」

つと！

オレが指示を出そうとしていたところをコノハに止められる。いきなりなんだよ……

「いい作戦思いついたわよ！だからしばらくあのままにしよう！」

つて……酷い話だな……おい……

「作戦つて……」

「見てなさいよ！それ！」

オレが言い切る前にコノハが行動に移る。コノハは近くの木で何かを黄色いものを片手に持ってマダツボミを見物している紫色の尻尾が手みたいになっているサルのようなポケモン、エイパムに向かってモンスターボールを投げた。それはエイパムに見事命中して地面に落下し、しばらく左右に揺れた後に停止し、真ん中のボタンがキヤプチャに成功した事を知らせる為に光った。不意打ちだからってこんな簡単に……

「出てきて、エイパム！」

『ウキイ！』

それをすぐさまコノハは手に取り、その場に出す。すると小気味よい鳴き声を上げてエイパムは登場した。

『ウキイ……ウキイ……』

……小気味よい鳴き声を投げた後直ぐさま片手にある黄色いものを剥き始めその中身を口に入れる……バナナ……なんでんなもんを……

…てか状況を考えて欲しい……

「エイパム、わたしはコノハよ、よろしく！」

『ウキ、ウキ』

バナナを食べながらもコノハの自己紹介に対して答えるように鳴く  
エイパムは大物だと思う……

「エイパム、早速だけど頼み事するわよ？」

『ウキィ？』

そういうコノハにエイパムは首を傾げる何を頼む気なんだ？

「あのバクフーン達を叩こうと頑張っている足があるでしょ？あそこら辺にそのバナナの皮を電光石火で置いてきて頂戴」

『ウキィ！』

……イヤ、待てよ……お前の思いついたのはそれか？

バナナの皮で滑って転ばせるって奴か？

……

「この！メルヘン頭！」

「何よイツキ！これ以外で何かいい作戦があった訳！？」

「う……無いけど……そんなので上手くいくかよ!」

「やってみなけりや分からないわよ!」

『2人共やめなよ……』

そうルカリオによるテレパシーが伝わってくるが……これは流石に……体格の事も考えてもさ……続けてオレが怒鳴ろうとオレが口を開こうとした……その時だった!

ードゴオオオオンー

「うわっ!」

『ダイル!』

急に聞こえた何かの衝撃の音と揺れ、それに思わずオレ達は驚き声を上げてしまう。これは……ま、まさか!

『ツ、ツボオ……』

……お前……何古典的なギャグをかましてるんだよ……マダツボミは見事に転倒しているまさかあのバナナの皮に滑るなんて……あんな体格も違うのに……転ぶなよ!

「ほら見なさい!わたしに間違いは無かったわよ!」

いやいや、間違いだらけだからさ……とにかく今は!

「サクラ!イツキ!準備はいいか!」

そうユウイチの叫び声が聞こえた。そう転んでいるこのチャンスに  
一気決める！

ユウイチは足元にいたせいか、頭のある場所にバクフーンの背中に  
乗って電光石火で移動している最中、あまり準備がいいとはお世辞  
にも言えない。

「ああ！ユウイチも急げよ！」

そう促すセリフをオレが言うと、射程に捕らえたのかその場で停止  
する。よし！

一気に行くぜ！

「待って！何かする気だよ！」

何！？

そんなサクラの警告、口にエネルギーを溜めている……リーフスト  
ームを撃つ気なのか！？

馬鹿言うなよ、あんな規格外のも撃たれたら、オレ達だけじゃなく  
で、マダツボミの塔も……キキヨウシテイも吹っ飛ぶぞ！

守るでも多分自分の身を守る役しかなさなйдらう……どうすれば  
いい……！

「わたしに任せなさい！みんなは究極技を撃てるように……早く！」

そうコノハがせかしてくる何をする気かは知らないけど、信頼して  
いいんだな？



頼むぜ……

「なら……行くぜオーダイル！」

『ダイル！』

そう叫ぶとオレ達は集中力を高めるために一度目を閉じる。ただまだ自由にハイドロカノン撃つのは難しい。だからこうやってまずは集中力を高めないと……！

「行くぜ！」

『ダアイル！』

オレがそう叫ぶとオーダイルも吠えてエネルギーを蓄え始める。これで決める！

『ツボオ！』

その瞬間だった。マダツボミは溜めたエネルギーを放とうとしてくる。く……イヤ、今はコノハを信じて撃つしかない！

「今よ！エイパム、猫騙し！」

『ウキイイ！』

そんなコノハはの指示が耳に入った瞬間、エイパムがマダツボミの正面でパンと両手を叩いて驚かせた。それに怯んだマダツボミは技を発動しぞこねた。そしてエイパムはその場から電光石火で離脱した。サンキュー、コノハ、エイパム！

「ハイドロカノン！行けええ！」

「うおおお！ブラストバーン！」

「行くよ……ハードプラント！」

『ダアアアイル！』

『バクウウウウ！』

『メエグウ！』

全く同じタイミングで3つの究極技は発動した。その3つは怯んで  
いるマダツボミの頭に直撃し大爆発が起こった。これでどうだ！

『ツ……ボ……』

徐々に爆煙が晴れてくる。するとそこにあつたのは息絶え絶えの巨  
大マダツボミの姿だ。オレ達は……勝ったんだ！

『ツボ……』

もう一度そんな鳴き声があった。するとマダツボミは光になって再び  
空に刺さるような柱を作った。それからまたその柱はマダツボミの  
塔へ落ちた。今のって……また眠りについたって事か？  
ポケモンの不思議にまたオレは触れたような気がするな。

「にしてもコノハ、助かったよ」

「本当、どうなる事かと思ったよ」

そうユウイチが言い、サクラもそれに続ける。確かに実はコイツが一番の功労者なんじゃないか？

「たいした事無いわよ！ドーンと来なさいよ！」

今回はコイツのメルヘンな思考に感謝だな……本気でそう思うオレであった。

## 決着！巨大マダツボミ（後書き）

### 次回予告

イツキ「マダツボミを何とかオレ達の前に突然姿を現すもの……それは……次回、ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEA SON 『雷の使者』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

コノハ「短くない？」

イツキ「気にすんなって」

雷の使者（前書き）

マダツボミをなんとか倒し、いつも通りなのほんとしているイッ  
キの目の前に現れたのは？

## 雷の使者

「さて……マダツボミは止めた！次はお前だぞ、エール！」

そうユウイチが叫ぶ、そうだ！

そういえばユウイチはこのエールって奴となんか一悶着があったみたいだな。会って早々喧嘩腰だったし……

「そうかい！だけど君には戦う余力なんて残っているのかい？」

「く……」

確かにエールの言う通りだ。ユウイチにはほとんど体力は残っていないからな。確かにアイツのバクフーン以外の手持ちポケモンは使って無いからポケモン自体には問題は無い。しかし、ユウイチ自身は体力を弦の鞭から逃げる為に大幅に消耗している。そんな状態であのエールを捕らえるなんて至難の技である

「ま、かく言う俺も結構疲労してるから人の事を言えないんだがな……」

それもそうだな。エール自身も結構攻撃されてたからそちらも限界って言えば限界なんだな……って事はオレの活躍のチャンスか？

「おーい、イツキ、コノハ、大丈夫か？」

不意に空からそんな声が聞こえた。「なんだ？」とオレ達4人は空を見上げる。

「ピジヨット、あそこに降りてくれ」

更にそんな声、上空にはピジヨット、それから聞き覚えのある声が2つ、1つはアキトで、もう1つはハヤトさんだ。事件を聞いて、事態を收拾するためにジムから飛んできたんだろう。まあアキトは勝手に着いてきたただけだろうか……

「油断大敵だ！またな、探偵君！」

「しまった！」

ユウイチが空を見上げているうちにエールは獰猛な姿のカラスのようなポケモン、ドンガラスを繰り出し、黒い霧を発動させてきた。それが煙幕と同じ効果を果たし、オレ達はエールを見失ってしまった。逃がしたか……我ながらここまで迂闊な事をしちまうなんて……

「大丈夫かい？イツキ君、コノハちゃん、ユウイチ君、サクラちゃん」

「はい、みんな大丈夫ですよ」

ピジヨットがゆっくりと地上に降下してきてそれから降りたハヤトさんがオレ達に聞いてきて、それにコノハが答えた。正直ユウイチとかサクラは危なかったんだけど……本当に危険だった……

「イヤ、巨大マダツボミって聞いた時は冗談かと思ったぞ……」

そう言うアキトは少しがっかりした表情をしている。まさか戦いたかったのか？

「それじゃイツキ君、私はマダツボミの塔を調査してくるよ。事件の原因の調査もジムリーダーの仕事だからね」

そう話しているとハヤトさんがそう告げてくる。なるほど、ここを調査しててももう何も出ないよな

「分かりました。それじゃ、オレ達は疲れましたしPCに戻ります」

「ああ、また話を聞きにいくかもしれないからその時はよろしく頼むよ。ピジヨット、頼む」

オレはそう返すと、ハヤトさんはそう言い、それからピジヨットに乗ってマダツボミの塔へ向けて飛んで行った。ジムリーダーも大変なんだな

「で、イツキ、そっちの2人は誰なんだ？」

そうアキトがユウイチとサクラを見ながら尋ねてくる。ああ、そう言えば知らないんだっけな……

「ああ、紹介するよ。こののんびりした顔付きの奴はユウイチ、それとこの真面目そうな顔付きをしてるのはサクラっていうんだ。2人共オレの幼なじみだ」

そうオレはアキトに紹介する。まあ間違った説明じゃないかな？

「それでユウイチ、サクラ、コイツはアキト、旅の途中で会ったマサラタウン出身のトレーナーだ」

続けて2人にアキトの紹介をする。こんな感じでいいか？



「そうか、ユウイチ、サクラ、よろしく」

「ああ、アキト、よろしくな」

「うん、アキトくん、よろしくね」

そう簡単に挨拶が交わされた。ま、紹介はこんな感じでいいな。

「それじゃみんな、帰ろうぜ」

「ええ、わたしもうクタクタよ……」

オレの言葉にコノハがそう返してくる。クタクタって……まああんな塔を往復したら疲れるわなあ……

「それじゃ行くか」

ユウイチがそう言つとオレはそれに促され、振り向いて歩きだそうとする。その時！

「なんだ!？」

不意にオレ達の隣に疾風が走った。あまりにも力強いそのせいで思わずオレは声を上げてしまう。今のは!？

「おい、みんな……アレをしてみるよ……」

アキトの言葉を聞きオレは振り返る。そこには！

「ライコウ……？」

オレはそうこぼす。そこにいたのは黄色の4足歩行の神々しさを身に纏った伝説のポケモン、ライコウがいた。なんでこんなところに……

『ほう……俺が来る前にマダツボミを治めたか……』

……この声は？

『俺だよ。ライコウだ。久しぶりだな、坊主！あの時は助かったよ。サンキューな』

テレパシー……ライコウのか！

「サンキューって……オレはアンタの事を寝ぼ助扱いしただけだし……」

「イツキ……貴方は伝説のポケモンに何をやってるの……」

オレの言葉に素早くサクラの突っ込みが入った。まあ『起きろ寝ぼ助』は無かったよなあ……

『まあアレを聞かなかつたら俺とスイクン、エンテイはみんな寝たまま捕まってた訳だからな。感謝してるさ』

……まあ、勝手に感謝してくれてもいいか。特に気にする事じゃねえし……

『急に話は変わるが……俺と戦ってもらおう』

!?

ほ、本当に話が変わったな！  
なんつー急な話だよ……

「なんで……」

『ジヨウトに疫災が迫っている』

!?

『その顔、知っていて、なおかつそれに首を突っ込むつもりだった  
みたいだな』

完全に凶星を突かれた……否定出来ない……

『俺達守護獣にはジヨウトを守る指命がある。勝手に首を突っ込ま  
れて邪魔をされては困るからな。それが出来る力があるか見極める  
ために戦って貰う』

……なるほどな

「分かった、容赦はしないぜ！」

『ほう………言ってくれな』

そうライコウが言うとライコウはオレから距離を取って戦闘体制を  
取った。それに見習いオレもいつでも戦えるように構える。

「イツキ！アンタ大丈夫なの!？」

そうコノハが叫ぶ。それだけ心配なんだろうな

「大丈夫だって！見てろよ、絶対に勝ってやるからよ！」

そう言うオレは余裕は全く無い。いつもの空元気、そのものだ。まあ、空気がこそがオレの自慢の技、どんなピンチだって跳ね返してきたオレの必殺技だ。今回もそれを見せてやるぜ！

「みんな下がってる！怪我するぜ！」

そうオレが叫ぶと全員がオレから距離を取った。よし、これで心置きなく戦えるな

「ドンファン、君に決めた！」

『パオーン！』

オレがそう叫び、ボールを投げるとドンファンが姿を現した。ドンファンの力強い雄叫びが心強いぜ！

『坊主、お前の全てをぶつける！そして俺を倒してみせろ！』

「分かってる！行くぜ！ドンファン、突進だ！」

『パオーン！』

オレの指示を受けてドンファンが突進していく。よし、オレも……

「うおおおお！」

オレも気合いの叫びをあげながらドンファンの背中を追いかけるように走る。ライコウはオレに全てをぶつけろって言うてきた。だからオレは全部ぶつけてやるんだ！  
そんなもって、絶対に勝ってやる！

雷の使者（後書き）

次回予告

イッキ「ライコウとのバトルが始まった。く……流石は伝説のポケモンだぜ。なかなかやるじゃねえか……」

コノハ「何やってんのよイッキ！アンタの力はこんなもんじゃないでしょ？」

イッキ「当然だ！余裕をこいてるライコウに一太刀浴びせてやる！次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜  
『VSライコウ！』次回もポケモン、ゲットだぜ！」

ドンファン『ぱお〜ん！』

## Vsライコウ！（前書き）

ライコウと戦うことになったイッキ、どのやうにライコウと戦うの  
だろうか？

## V S ライコウ！

『そんな単調な攻撃には！』

ライコウはそう言つと、ドンファンの正面からの攻撃を避けた。逃がすか！

「ハツサム、シザークロス！」

『サムウ！』

オレはそう叫びながらボールをライコウの目と鼻の先に向かって投げた。するとそこからハツサムが出現し、ライコウに切り掛かる。行けっ！

『ほう……：…本当に全てをぶつけるつもりのような……：…だが、甘い』

ライコウはそう言つと急激な加速を行い大幅に後退してその攻撃を回避した。まだまだ！

「ドンファン、もう一度突進だ！」

『パオーン！』

休む暇は与えない、電光石火で移動したばかりのライコウにドンファンに追撃を仕掛けさせる。行け！

『ちっ！』



思ま思ましいとでも言いたげにライコウはジャンプで回避する。そしてドンファンに自らの尻尾を叩きつけよつとする。アイアンテールで来る気か！  
だが……甘い！

「ハツサム！」

『サムウ！』

『何！？』

ドンファンに仕掛けようとするライコウに向けてハツサムは電光石火で突撃していく。この距離なら回避出来ないハズだ！

『く……賢しい！』

ライコウがアイアンテールを中断して電撃を貯め始めた？

ハツサムの一撃を受けてでも確実に電撃による攻撃を決めるつもりか！  
させるか！

「とんぼ返りを使え！」

『サムウ！』

『ぐ……おおお！』

ハツサムは体全体をぶつける体当たりを決めた後に素早い身のこなしでオレの前にまで戻ってくる。それによりライコウの電撃は命中

しない。とんぼ返りは本来なら攻撃した後急速に離脱してボールに戻る技なのだが、今回は急速離脱をするためだけに使わせて貰った。今のでライコウは体制を崩している！  
もう一撃……食らえ！

「ドンファン、捨て身タックル！」

『パオーン！』

『ぐううう！』

ドンファンの捨て身の一撃が決まった。それを受けたライコウは弾き飛ばされるが上手く着地する。しかしそれでも与えたダメージは大きいようで、息を荒くしている。ドンファンとハツサムのパワーファイト、正面からやり合えばそう簡単には負けないぜ！

『く……中々やるな……だが、俺も本気で行かせてもらうぞ！』

そうライコウのテレパシーが聞こえる。な……何をするつもりだ！？

『うおおおお！』

ライコウの雄叫び、それと同時に空が急激に暗くなり始めた。これって、雨雲が掛かってきたのか？  
いや……違う、コイツは雷雲か！  
これはライコウの力なのか？

『うおおおお！』

再び上がる雄叫び、それと同時に空に閃光が走った。雷？

天気が悪いのはライコウが暴れているからなのか？

ライコウ……流石伝説のポケモンって呼ばれるだけあるぜ……

『受けてみる……俺の雷の一撃を！』

ライコウがそう言うのと同時にライコウからさっきとは比にならないくらいの電撃を纏い始めた。このままじゃまずい！

「ドンファン、ハツサムの前に出ろ！ライコウの雷からハツサムを守るんだ！」

『パオーン！』

ドンファンはハツサムの前に立つように移動する。地面タイプを持つドンファンには電気タイプの攻撃は効かない。これなら！

『舐めるなあ！』

『パ、パオ！？』

「ド、ドンファン！」

ライコウの放った雷はドンファンに直撃した。それを受けて、ドンファンは悲鳴を上げている。バカな！

電気攻撃はドンファンには効かないハズだ！

なのになんで……まさか……あまりの威力でタイプの関係を覆したのか！？

く……冗談じゃないぞ！

「大丈夫かドンファン！」

『サムウ!』

『パ、パオ……』

ゆっくりと膝をついたドンファンにオレとハツサムは駆け寄る。力強く頷くドンファンの姿勢とは裏腹に弱々しい返事が返ってくる。ダメージはそこまで酷くは無いみただが、体が少し痺れているのか……そこまで酷く無いみただから、しばらくしたら治るハズだ……とにかく相手に休む暇は与えない!

「ハツサム、電光石火からシザークロス!ドンファンはストーンエツジで援護!」

『サムウ!』

『パオー!』

早期決着を狙ってオレはそう指示を出す。ドンファンはストーンエツジを使い、いくつかの鋭い岩を出現させ、それをライコウに向かって飛ばす。これを避けるためにライコウは電光石火を使い、これをおかましてきた。更にそのままの勢いでライコウはハツサムに接近してくる。行くぜ、返り討ちにしてやる!

「ハツサム、バレットパンチ!」

『サムウ!』

オレはハツサムに先手を取らせるためにそう指示を出した。相手が高速で向かってくるなら、こっちも更に加速してやれば回避は出来

ないハズだ！  
それプラス相対速度で威力増加だ！  
食らえ！

『甘いぞ！』

『サムウ！？』

「ハ、ハツサムを踏み台にした！？」

ま、まじかよ……バレットパンチを使い、電光石火プラスのスピードで突っ込んでいたハツサムが同じく電光石火で突っ込んで来ているライコウに踏み台にされてしまった。そんなのありかよ……

『そこだ！』

！？

呆然としてるオレにもせず、踏み台にされて体制を崩しているハツサムに向けてライコウは雷を放ってきた。もうちょっと手加減は出来ないもんか？  
とにかくあれを避けないとハツサムがやられる！

「ハツサム、剣の舞いをするんだ！」

『サ、サムッ！』

ハツサムは焦りながらも剣の舞いを行い、その不規則な動きにより雷を回避する事に成功した。けどまだ油断は出来ないな……援護しないと……

「ドンファン、ストーンエッジで援護だ！」

『パオーン！』

オレはドンファンにハッサムを援護するように指示を出す。それを聞いてドンファンはいくつかの鋭い岩を放つ。そのせいで回避を余儀なくされたライコウは後退し、追撃が出来ない。そこだ！

「ハッサム、電光石火から瓦割りだ！」

ハッサムはストーンエッジが通過した瞬間電光石火を使いライコウに向かって突撃する。食らえ！

『むっ……そうは行くか！』

そう言いながらライコウも加速しながらハッサムに突進してきた。その加速で懐に突進してきてハッサムの体制を崩された。く……さつきからスピードで張り合ってきたけどスピードが遅いハッサムでライコウのスピードに勝とうなんて虫が良すぎるか！

『パオーン！』

『何！？』

ハッサムに突進して隙が出来ているライコウにいつの間にか飛び出していたドンファンが突進を仕掛けた。

『ええい！』

ライコウはドンファンの突進を体制を崩しながらもギリギリ回避す

る。そしてハッサムの接近を許さないために体制を崩しながらも電撃をハッサムに向けて放ってきた。これはチャンスだ！

「ハッサム、バトンタッチを使いえ！」

『サムウ！』

オレの指示と同時にハッサムは動く、ハッサムは小さい光の玉になってオレのボールに戻ってくる。当然、ライコウの電撃も当たる事は無い。これで決着を着けるぜ！

「イーブイ、頼む！」

『ブイ！』

ハッサムが戻って来てすぐにオレはイーブイの入っているボールを投げた。それから勢いよくイーブイが飛び出しそのままライコウに向かっていく。バトンタッチでハッサムの力を受け継いだお前なら！

『く……負けるか！』

そう言いながらもライコウはイーブイに今までにない程強力な電撃を放とうと電気を貯め始めた。そうは……いくか！

「ドンファン、水鉄砲！」

『パオオオ！』

『く……そんな技で……』

ドンファンはオレの指示で鼻から水鉄砲を放った。しかしライコウはそれに怯む様子は無い。だけどそれが狙いじゃないぜ！

『俺の最大パワーの雷で纏めて薙ぎ払う！うおおおお！』

ライコウの言葉と共に貯めていた電撃を放とうと身にまとい始める。掛かった！

『何……体が痺れて……』

そう言い、纏っていた電撃をライコウは収める。体が痺れたんだよな！

「水鉄砲で濡れた体！普通の電撃を使うぶんなら大した影響は出ないけど、お前は必要以上に強力な電気を使おうとしたからショートと同じ現象を起こしたんだ！」

そう自慢気にオレはライコウに向かって言う。これで決まりだ！

「イーブイ、電光石火から捨て身タツクルだ！」

『ブイイイ！』

イーブイは電光石火で更に加速し、捨て身のタツクルを行う。行っけええ！

『うおおおお！？』

イーブイの捨て身タツクルが炸裂した。その威力はさっきのドンファンが決めた一撃を凌駕していて、ライコウを大きく吹っ飛ばしダ



ウンさせた。ハッサムの剣の舞による攻撃力のパワーアップの引き継ぎ、電光石火によつてついた勢い、自分と同じタイプの技の威力を大幅に上昇させるイーブイの特性『適応力』これだけの要素が重なつてなんとか与える事が出来た今のオレ達の最大の一撃だ。今のでダメだつたなら危なかつたな……マダツボミとの戦いで消耗したオーダイルとピジョット以外はこれぐらいしかライコウに対する決定打になる攻撃は無かつたからな……

『ブイイ！』

『パオーン！』

元気の良い鳴き声と共にイーブイとドンファンはオレの元へ駆け寄つてくる。

「よくやつたなお前ら、それとお前も」

そう言いながらオレはベルトからハッサムのボールを取り出す。この勝負……コイツの剣の舞のサポートが無かつたら勝てなかつただろつからな……

「イツキ！」

そんなコノハの声が聞こえたかと思うとみんながオレの元へ駆け寄つてくる。それに対してオレは無言でブイサインをしてみた。

「お前スゲーよ！」

「大丈夫？」

そうユウイチ、サクラの順番で言われる。それに対してオレは「ああ」と頷いて返す。

「やべ……次バトルしたら負けるかも……」

そう言うのはアキトだ。もちろんオレは負けるつもりは無いけどな

『中々やるじゃねえか、坊主!』

ん？

そんな声が聞こえたのを感じ、オレは辺りを見回す。げ……

「ラ、ライコウ……」

いつの間にかオレ達のすぐ側へライコウが来ていた。それに驚いたのかコノハが驚きの声をあげる

「流石だぜライコウ……アンタやっぱり強いよ」

2対1で戦ってなんとか与えたさっきの一撃、でもまだ動けるなんて……

『イヤ、正直今動くのもしんどいんだ……この勝負俺の負けだ』

な、納得いかない……

『さて……お前の力は分かった。お前達ならこれより迫る疫災にも負けないハズだ……お前達に俺の加護を授ける。負けるなよ』

そうライコウが言うと俺を少しビリッとした感覚が襲った。これが

……ライコウの加護って奴か……特に変わった感じはしないが……  
ま、いつか

「ああ、分かってるって！」

オレがそういつもの根拠の無い自信を持って言うとならライコウは満足したような顔で頷いた。それから高速でその場から去っていく。おい……さっきの絶対嘘だろ……まあいいさ、オレも全力でやってやるよ。約束……したからな

## V Sライコウ！（後書き）

### 次回予告

ユースケ「久しぶりにケンイチに会うためにコガネを訪れた僕たち」

ラン「あ、あれってカシスたちじゃない？おい！」

ユースケ「久しぶりにみんな集合って感じになりそうだね。そんな中でカズマを襲う出来事とは？次回、ポケットモンスター ACE 1 SECOND SEASON 1「しっかりとカシスへの株を上げとくんだよ」 次回もポケモン、ゲットだよ」

ユンゲラー「おい、このセリフは誰のだよ？」

「しっかりとカシスへの株をあげるんだよ」(前書き)

今回はユースケ編、ユースケとランはコガネに訪れていた

「しつかりとカシスへの株をあげるんだよ」

僕とランは今日はコガネの遊園地に来ている。え？

今日はデートじゃないよ。今日は久しぶりにケンイチと会う事になっている。という訳でコガネで一番大きい人気スポットである遊園地に来ている。ケンイチはまだ2ヶ月程シンオウリーグの開催日まで暇らしく、最近まで山に籠って修行してたらしいけど、気分転換を含めて久しぶりに僕達に会いに来るらしい。うん……ケンイチと会ったのはクチバで別れて以来だから楽しみだな

「ケンイチくん、元気かな？」

「2日前話した時は元気だったからきつと元気だよ」

そんなランと僕の他愛の無い会話、あの怒りの湖の事件が終わってからランは元通りの元気を取り戻したと思う。僕もまだ肋骨の辺りに違和感があるけど殆ど完調し、僕達2人、いつもの調子を取り戻してバツジもこの前回れなかったタンバも回ってバツジも7つ、後はフスベジムだけ、ジョウトリーグ開催までの期間はまだまだ余裕があるから。ゆっくりと回る事が出来るよ。この前みたいに何かを抱えた状態じゃなくて、2人で楽しく……

「お、あれはユースケとランじゃないか？」

「あ、ホントだ！おーい！」

唐突に遠くから聞こえた、聞き慣れた声の会話、これは……僕達はそっちを向くそこにいたのは

「あ！カシス！カズマくん！」

嬉しそうにランが手を振りながら言った。そう、そこにいたのはカズマとカシスのコンビだった。もうこっちに来てたんだ。

「やつほお、ラン、ユースケ、元気そうじゃない」

そう言うカシスは元気そのもの、ロケット団に操られた時の影響は無いみたいだね

「うん、カシスも元気そうで何よりだよ」

笑顔でランはそう返した。やっぱり親友との再会って嬉しいよね。

「もうジョウトに来てたんだ」

「ああ、家でじっとしてるなんてオレもカシスも苦手だからな。父さん達に顔を出して、警察の事情聴取が終わってから飛び出してきたんだ」

……流石カズマとカシス……行動力の高さは半端じゃないよ。

「で、ここにいてるって事はやっぱりデートか？」

「だよね〜、う〜ん青春しちゃってるね〜。いいなあ、ユースケとランは」

とコンビネーション攻撃を仕掛けてくるカズマとカシス、カシスの冷やかしの攻撃

「うっ……ち、違っよ……」

「そっだよ今日は別にデートしてきた訳じゃ……」

「うん？顔を真っ赤にして言っても説得力無いぞ」

効果は抜群だ……うっ……本当にデートじゃないのに……それでも真っ赤になる僕たちは本当に冷やかに弱い。いつか克服……出来ないだらうなあ……

「ランは幸せだよな。恋人と旅をすることが出来て。わたしにもそんなそんな人を紹介して欲しいわよ」

あ……これって僕とランを攻撃したんだよね……実際僕もランもダメージを受けてるけど……受けてるけど……これで一番ダメージを受けてるのって！

「ぐっ……」

……カズマ……可愛いそ過ぎるよ……凄い辛そうに頭を押さえているカズマは満身創痍にも見える。ひ……酷いダメージだ。効果は抜群なんてもんじゃない。一撃必殺を受けたみたいだ。

「カ、カズマ！？どうしたの！？」

「なんでも無いって……うん……なんでも無いからさ……」

明らかになんでもあるよ。それはさ……

「そっ？ならいいけど……」



イヤイヤ、なんでもあるって！  
どう見ても重傷だってこれはさ！

「か、カシス！とにかく遊園地に入ってからゆっくり話そっか！な  
かには喫茶店もあるし、こんなところで立ち話をするよりそっちな  
ほうが断然いいよ」

そう言うランは僕にアイコンタクトを送ってくる。カズマのフォロ  
ーをよろしくって事だろうね。そんなの分かっているよ。

「そうね、カズマ、ユースケ、わたし達先に行ってるよ」

「あ、うん、分かったよ。僕はケンイチとの約束もあるからここで  
待ってるよ」

ランの言葉に僕はそう返した。とにかくはやくカシスをカズマから  
離さないと……

「うん、お願いね。カシス、早く行こうよ！」

「あ、ラン、ちょっと待ってよ！」

そんな感じでランとカシスは入場券の券売機に向かって走っていく。  
ランの機転の良さには助けられるよ。とにかくカシスも離れたこ  
ろだし……

「カズマ、大丈夫かい？」

「フッフ……もう慣れたさ……」

そう言うカズマには哀愁が漂っている。駄目だ。今のカズマに自分で言うのもどうかと思うけど勝ち組の僕が迂闊に声をかけても同情の言葉にすぎない。僕はどうすればいいんだよ……

「なあユースケ、お前はどうかやってランを落したんだよ……」

突然そう口を開くカズマ、お、落したって、人聞きの悪い言い方するなあ……僕は別段何もしてないし……むしろ何もしない過ぎだから彼……パートナーとして失格かな？

「僕は特に何もしてないよ……ってカズマ、なんかさっきよりダメージ受けてない？」

「く……オレはどうせ負け組みさ……」

もしかしてぼくのセリフがまずかったのかな？

さっきより落ち込んでしまったよ……ケンイチが来たらさらに厄介な事なりそうだから早めに收拾したいんだけどな。僕にそれが出来るのかなあ……強引な話の方向転換でもしようかな？

それなら無理やりにも事態を收拾出来るはずだ。それで行く。

「カズマ……」

その言葉に僕は続けようとしたが、それは突然聞こえた轟音にかき消された。いったい何なんだ？

「おい……ユースケ、この音は尋常じゃないぜ」

そう言うカズマの口調はいつも通りになっている。うーん……奇跡

的だけどいい方向転換になったよ。あんまり喜んでられないみたいだけど……

「だね、遊園地の中でなにかが起こったみたいだね……」

一応冷静を装って見せるが内心全然冷静ではない。ランとカシスが心配だ。

「行こうカズマ、ラン達を守らないと！」

「ああ！当然だ！」

そう言うカズマは完全にいつも通り、さっきまで沈んでいたのが嘘みたいだ。

『ユースケ、気を付けろよ……なんか体中がピリピリしてて外からなんか不快感を感じるんだ。気持ち悪い何か……』

そうユンゲラーのテレパシーが聞こえた。僕はそんなの感じてないけどいったい急にどうしたんだ？

「大丈夫かい？」

『イヤ……全然……この感覚に似たの……オレは知ってる……何かは思い出せないけどポケモンに会った時は注意しろ、何か、何か悪いことが起こるぞ』

き、気持ち悪いこと言うなあ……でもユンゲラーがこんな弱気なセリフを言うなんて珍しい、これは警戒していく必要があるね……

「カズマ、ユンゲラーの言葉を聞いてたよね？」

「ああ、注意はしとくさ」

僕の言葉にカズマはそう返してきた。さあ、行こっか！

「カズマ、こういう時にしっかりとカシスへの株を上げとくんだよ」

「さっきの仕返しのつもりか？お前こそランに良いとこ見せとけよ！」

一応僕なりに励ましたつもりでからかったつもりはないんだけど……ま、いつか。僕はその言葉に赤面しながらも笑みを浮かべて見せる。それにカズマも便乗するように不敵な笑みを浮かべた。さ、早く自分たちのパートナー守りに行くよ！  
僕たちは遊園地の中に全力で駆けだした。

「しつかりとカシスへの株をあげるんだよ」(後書き)

次回予告

ユースケ「悲鳴の聞こえた方向に向かった僕たちは危険な気配を感じ取った」

カズマ「おいおい、こんなの冗談じゃないぞ」

ユースケ「また、またあんなことが起ころうっていうの……次回、ポケットモンスターACE〈SECOND SEASON〉」  
「通りすがりの小僧だ！」  
「次回もポケモンゲットだよ！」

ラティオス「よろしくな」

「通りすがりの小僧だ！」（前書き）

遊園地に乗り込んだユースケとカズマ、そこで起きた事とは……

「通りすがりの小僧だ！」

遊園地の中に僕とカズマは正面から乗り込んだ。さっきから思うけどあまりに様子がおかしい。なんていうか静まり返っている。さっきまで沢山いたお客さんも見当たらないし、いったいどうしたんだらう？

それともう一つ気になるのは……

「ポケモンの殺気……ユースケ、この感じって……」

そうカズマが言う。やっぱりカズマも気づいたみたいだね……このいやな感覚……あのシオンタウンの事件、シオンのラジオ塔からロケット団が流した凶暴化電波でポケモンたちが凶暴化した時に感じた殺気とまったく同じだ。まさか……アレと同じことが起こってるのかな……でもそれだったら奇妙なことがあるよ。

「うん、でもここは遊園地の中だよ？野生のポケモンがこんなところまで入ってくるなんて……」

そう、あの事件の時は凶暴化したのは野生のポケモンだけだ。だからこんな整理された遊園地の中に野生のポケモンが入ってくるなんて考えられない。この尋常じゃない殺気……いったい何で……まさか！

「まさか……ゲットされたポケモンまで凶暴化してるのか……？」

そうカズマが尋常じゃない顔つきで言った。僕もそう考えてた。考えたくもないけどそうとしか考えられない。それにそれだとさっきのウンゲラーの様子にも合点がいく。こんなの……冗談じゃないよ！

ランとカシスには頼りになるポケモン達がいるからしばらくは大丈夫だっと思ってたけどそんなんじゃない！

「ラティオス、聞こえる？」

僕はラティオスのボールを取り出してボールに向かって言う。ボールの中にいればまだ大丈夫だっと思って信じた！

「ああ……すごい不快感を感じるけどね……」

僕の言葉にそう返答が返ってくる。良かった。ボールの中には多少は不快感を感じていても凶暴化はしないみたいだね。

「ラティオス、テレパシーでラティアスに連絡を取ってくれない？ ラン達の場所が知りたいんだ」

「分かった、やってみるよ」

ラティオスとラティアスはテレパシーで長距離でも話すことが出来る。それを利用すればランの居場所も分かるはずだ。

「……ユースケ、場所は大きな輪っかがあるところだ！」

大きな輪っか？

それってまさか……

「カズマ、観覧車の近くだよ。早く行こう！」

僕はカズマに声を掛ける。早く行かないとラン達が！



「ああ、行くぞ！」

僕たちは大きくそびえたっている観覧車に向かって走り出した。

いた！

観覧車の近くでランとカシスは黒づくめの男の人たちに囲まれていた。周りに他の人たちがいないことを見るとどうやら逃げ遅れたみたいだ。あの黒づくめ……ロケット団！

あの人達はどうしていつもランとかカシスとか僕の身近な女の子ばかり襲うんだ！

まあ僕達が余計なことに首を突っ込むせいだと思うけど……とにかく、あなた達には借りがある。容赦はしない！

「そのロケット団！歯を食いしばれ！」

「ん？」

カズマがそう叫ぶと一番傍にいたロケット団に突撃していく。そのロケット団がこちらに振り向きカズマの接近に気付き構えた。だれどそれじゃ遅いよ！

「この野郎！」

「」

カズマは素早い動きで蹴りをロケット団員に向けて放った。その蹴りの一撃は非常に重たいもの。脇腹に決まって気を失った。お気の毒に……同情はしないけどさ。

「カズマ！ユースケ！」

「大丈夫か！カシス、ラン」

カシスが声を上げ、それにカズマはいつもの調子よさそうな口調で返す。いいところをカシスに見せれて機嫌がよさそうだな……さすがカズマ……扱いやすいというかなんと……

「ユースケ！」

「大丈夫そうじゃなかったよ」

ランが僕の名前を呼び、僕はそう言いながらランの元へ駆け寄る。カズマも同じようにカシスの傍に走ってきた。とにかくランとは合流できた。でも……

「ほう……ロケット団の超A級のターゲットが自ら出向いてくるとはな」

そう言うロケット団員の一人、まあ4人ぐらいに囲まれてる状況には変わりはないわけで……まいったなあ……ポケモン達が出せないって事は対抗する手段がほとんど残ってないってことだしなあ……それにしても超A級ターゲットか……僕たちも随分有名になったもんだよ……

「まあな、こいつらはオレ達にとって大切な人だからな。助けに来るのはあたりまえだろ？」

カズマはそういつもの自信満々な表情で言う。根拠のない自信、それはカズマの必殺技だ。ピンチな状況でこのセリフは本当に勇気を与えてくれる。

「へ〜中々かつこいいこと言うじゃない！」

カズマの言葉を聞きカシスがそうカズマに対して言う。それに若干照れたしぐさをするカズマは、決して僕のことを笑えないと思う。

「超A級ターゲットらしく、あなた達の邪魔をさせてもらいますよ！」

僕もカズマを見習って力強く言う。今はこのピンチな状況を乗り越えるために少しでも気を強く持つんだ！

「言ってくれるな。だが、分かっていると私が我々が占領したラジオ塔から流れている凶暴化電波で我々ロケット団のポケモン以外は凶暴化してまともに戦えないぞ。この状況でもそんな事を言えるの

か？」

な、なんて都合が悪い話なんだろう。でも僕の推測は間違ってたみたいだね。合つてほしくなかつたけどさ……

「やって出来ない事は無いよ」

まあそうは言ってみるけど……

『おい……よくお前はそんなはったり言えるよな……』

そんなよわよわしい突っ込み、辛くてもしっかり突っ込みを入れてくれるユンゲラーは律儀だと思う。まあ、はったりなんだよなあ……

「強がりはやしたほうがいい。観念するんだな」

く、来るのか!?

僕はランを守るべくランを僕のもとへ抱き寄せる。男がボールを取り出した。その時！

「子供相手に大人げないんじゃないか？おっさん達」

「お、おっさ……誰だ！」

不意に聞こえたその声はよく聞きなれたものだ。それで頼りがいがあるこの声は！

「通りすがりの小僧だ」

そう言って突如現れた男の子、ケンイチがさっきまでしゃべってた

ロケット団員に奇襲の顔面パンチを決めてダウンさせた。

「ケンイチ、来るならもうちょっと早く来てよ。正直結構やられるって思ってたんだからさ」

「お前、助けられといて文句言うか？普通……」

僕たちと合流しながらも若干呆れた口調で言うケンイチは前と変わっちゃいない。ただ、最後に会った時より断然たくましくなってると思う。

「ケンイチ……？ふ、シオンの時の邪魔ものを一気に始末が出来る時が来たとはな……」

僕達ってやつぱり有名なんだね……しっかりとロケット団のブラックリストにのっちゃってるよ。

「ケンイチ、この状況をどうする気？」

そうカシスがケンイチに尋ねる。こんな状況下に自ら飛び込んでくるって事はなんか策があるってことだよな？

「……スマン、あまりに遊園地の様子がおかしいもんで何も考えず突っ込んできた……」

……ケンイチってこんなに無鉄砲だっけ？

まあ、友達のピンチに冷静さなんて残ってなかったただけなんだろうけど……

「く……このメンバーってこんな無謀な奴ばかりなのか！」

「カズマ、お前には言われたくないぞ」

ケンイチに対してそう言うカズマだけどケンイチの突っ込みはもつともだと思う。多分この5人のなかで一番無鉄砲で向う見ずなのはカズマだよな。

「ほ、本当にあたし達どうなっちゃうんだろう……」

そう言うランはすごい不安そうだ。今気付いたけどさっきからランを抱きしめたままだ……でも、空想的になんか離れたら悪そうだな……とにかく少しでも不安を和らげようと抱きしめる力を強める。そうしてる間にもロケット団達は自分のポケモンを次々と出してくる。ラッタにドガス、ゴルバットにデルビル、そのバリエーションは豊富である。これは本格的に不味いぞ！

そのポケモン達が戦闘態勢を取る。く……これ以上ラッキーには期待できないぞ……万事急須か？

「かかれ！」

ロケット団員の一人の掛け声、一世に迫りくるポケモン達、それでもランだけは守ろうと抱きしめる強さを強くする。来る！

『火炎放射！』

！？

突然そんな声が聞こえたかと思うと突如真上から極太の炎が降り注いだ。これって……火炎放射？

その火炎放射は次々とロケット団のポケモンを薙ぎ払っていく。今のは！？

「あ、あれって……」

驚きの声を上げるカシス、そこにいたのは茶色の毛を身にまとって  
いて偉大な何かと、強いプレッシャーを持ち合わせたポケモンがい  
た。あのポケモン、みたことないな……でも、あのポケモン、強い

……

「エンテイだと……」

そうケンイチが言った。エンテイだって！

エンテイって神話でホウオウの守護獣をやってる伝説のポケモンじ  
やないか！

それがなんで……

『ガルウ……』

！？

さっきの火炎放射の炎の中からデルビルが姿を現した。まさか、特  
性『貰い火』なのか！

貰い火は炎攻撃を吸収して自らの力に変換する特性だ。だからあの  
炎の中を耐え抜けたのか……

『ガルウ！』

来るのか！？

さっきのロケット団員の命令を忠実にデルビルがこっちに向かって  
くる。油断したところにこれは無いよ！

今度こそ万事休すか？

『むづ、させん!』

そんな声が聞こえたかと思うと急に体が芯からあったまる感じがするこれって……

『ユースケ!今ならいけるぞ、オレを出せ!』

!?

急にユンゲラーがそう僕に伝えてくる。その調子はいつものものだ。いったい何があったんだ?とにかく!

「なら、行くよユンゲラー!」

僕はそう叫んでランから離れて自分のベルトからユンゲラーのボールを取り出しデルビルの正面に投げた。そこからユンゲラーが姿を現す。そしてそれに噛みつくようとしてくるそうはいかない!

「ユンゲラー、気合玉のエネルギーを前方に集中!」

『よし来た!』

そのセリフと同時に格闘エネルギーの壁がユンゲラーとデルビルの間に発生して噛みつく攻撃を遮った。今だ!

「そのまま反撃だ!」

『喰らえ!』

僕とユンゲラーの叫び声と同時に気合玉が球体に形成されなおされ



ゼロの距離で気合玉が放たれた。エネルギーをためる時間が短かったこともあり、その気合玉はエナジーボールと同じぐらいの大きさだったけど、それで十分だった。ゼロ距離それも効果は抜群。小さな爆発が起こり、ユンゲラーはテレポートを使ってその場から離脱する。爆発が晴れるとそこにはノックアウトされたデルビルの姿があった。

「ふうっ」

僕はあまりにおおきな溜息をついた。な、なんとか助かった……今までに無いピンチに肝を冷やす僕であった。

「通りすがりの小僧だ！」（後書き）

次回予告

ユースケ「なんとか危機を脱した僕達はエンテイに今ある状況を聞かされる」

ケンイチ「ピンチのピンチ、大ピンチだな……」

ユースケ「でもさ、こんなピンチぐらい僕達は跳ね返してきたじゃないか」

カズマ「そうだな、オレ達でやってやるっぜ」

カシス「次回、ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEA SON ～ 『今度は僕の番だ』 次回もポケモン、ゲットだよ」

ラン「よろしくね」

ユンゲラー『すげー、フルメンバーだ』

「今度は僕の番だ」(前書き)

なんとか危機を脱したユースケ達は……

「今度は僕の番だ」

『おいおい、大丈夫かユースケ?』

気の抜けた溜息をついた僕に対してユンゲラーが言った。正直あまり大丈夫じゃないよ。前もこんな経験した気がするけどいつだったかな?

「伝説のポケモンまで出てきたと……それに凶暴化電波が聞いて無いだと……」

「ここは一旦引く、体制を立て直す」

「了解!」

「あ、待て!」

ロケット団達はあまりに自分達が劣勢に気付いたのかそんな会話をした後退却していった。カズマが「待て」って言ってももう遅いよ。それにしても鮮やか過ぎるぐらいの引き際だったな……また何か仕掛けてくるつもりなんだろうか?

「おいユンゲラー、お前大丈夫なのか?」

ケンイチがそうユンゲラーに尋ねる。そう言えばさっきまでなんか辛そうな声出してたのに今じゃ何んともなさそうにピンピンしてるよ。本当にどうしたんだろう?

『ああ、なんか急に熱い何かが入り込んできたと思ったらさ、なん

か体が楽になつてさ。ラティオス、ラティアス、お前らはどうだ？  
そうウンゲラーはラティオス達に尋ねる。テレパシーを使えてポ  
ールから出ずに会話が出来るこの二人に尋ねるのが順当だよな。

『うん、私もそんな感じ。お兄ちゃんもそうだよな？』

『ああ、よく分からないけど、僕も同じだよ』

ラティオス達もか……つくづく不思議だ……いったい何があつたん  
だろう？

「そういえばエンティはどうしたんだろう？」

そうランは疑問の言葉を言う。僕たちのピンチを助けてくれたポケ  
モン、エンティ、僕はさっきエンティがいた観覧車の頂上を見る。  
すでにそこにはエンティの姿はいない。そういえばあのポケモンも  
ウンゲラーみたいな状態にはなっていなかった。やっぱり伝説のポ  
ケモンだから普通のポケモンとは訳が違うのかな？

『私がどうかしたのか？』

「うわっ！出やがった！」

不意に背後からそんなこえが聞こえ僕たちは振り返る。振り返った  
そこにはなんとエンティの姿があった。それに驚きカズマは腰を抜  
かしている。な、なさけないよ……

『無事だったようだな』

「うん、なんとかね」

エンテイの言葉に僕はそう返す。威厳たっぷりのその口調に若干ビビっているのは内緒だ。

『ならいい』

そう言うエンテイもやっぱり威厳に満ち溢れている。やっぱり伝説のポケモンってだけあるなあ

「ホント助かったよ、ありがと！」

そうカシスがいつものお気楽な口調で言う。こんなところは流石だ  
って思う。

『気にすることではない。私は生命の神、ハウオウの守護獣だから  
な。命を守るのは当然のことだ』

へへ、そうなんだ。

『それに……』

それに？

『貴方らの事はファイアー達から聞いている。操られた自分たちを  
解放してくれたとな』

シオンの事件の時の事だね。そんなの当然だよ。

『それを見込んで頼みたい、ジヨウトを護るのに力を貸して欲しい』

!?

それって!

『身をもって感じてると思うが今ジョウトに危機が迫っている。私たちホウオウの守護獣と、カントーにすむファイアー達、ルギアの守護鳥がそれを防ぐために動いているがとてもじゃないが我々だけでは正直なところ力が足りない。だから力を貸して欲しい。頼む』

ええ!

エ、エンテイに頭を下げられちゃったよ。伝説のポケモンなのにさ。それにしてもそんなにひどい事件になろうとしていたのか……もちろん僕の答えは……

「もちろんだよ。そんなの断る理由はないしね。ね、みんな?」

「うん、あたしもユースケと同じ気持ちだよ」

「ああ、そのためにオレはここに来たんだしな」

「おう、今回の事件にはロケット団もかわってるみたいだな。あん畜生にやり返さないと気が済まないぜ。な、カシス?」

「そうね、ギャフンって言わせてやらなくちゃね」

僕に続いてラン、ケンイチ、カズマ、カシスの順番で言う。みんな同じ気持ちみたいだね。

『頼もしい言葉だな。さっきの戦いのさなか、私は貴行らに加護を施した。こえなら貴行らのポケモンは他のポケモンみたいに暴走は

しないだろう』

加護って……あの戦いの最中に感じた温かい感覚がしたあれかな。そう言えばあの直後ウンゲラーの調子が戻ったっけ？

「そうか、ありがとなエンテイ」

そうカズマがエンテイに感謝の言葉を言った。これで僕たちも戦えるね。

『私はもう行くぞ。まだやらなければならぬことがあるからな』

そう言いエンテイは駆け出して行くこととする。その前に

「本当に色々ありがとう。僕たち、頑張るよ」

『ふ……武運を祈っているぞ』

僕の言葉にエンテイはそう返して目にも止まらぬスピードで去って行った。行っちゃったか……

「オレ達も行くぞ。いつかみたいにやってやるっ」

そうケンイチが僕達に出発するように促してくる。そうだね、そろそろ……

『待てケンイチ』

いきなりウンゲラーがケンイチを止める言葉を言う。そう言えばウンゲラーを出したまんまだっけ？



急にどうしたんだらう？

「どうした？ユンゲラー」

『イヤ、たいした事じゃないさ。さっきのお前のセリフが気に入ってな』

セリフ？

えっとなんて言ってたっけ？

『「そのためにオレは来た」ってお前はこんな事になるの知ってたのか？』

そういえばそんな事言ってたね。どうなんだらう？

「ああ、ある人から聞いてな」

ある人？

「ある人って？」

カシスが首をかしげる。人から聞いたって驚きだよ。

「スバルだよ。あのロケット団幹部だった女、スバルがオレに教えてくれたんだ」

な……ス、スバルだって！

『ロケット団の幹部としてオレ達と何回も戦ったアイツがなんで！』

ユンゲラーはそう声を荒げて言う。スバルさん、ユンゲラーの言うとおりロケット団の幹部として何回も僕達と戦った女の人だ。恐ろしいほどの実力と信念を持ち合わせた人で、一度倒してるんだけど、今戦ったら正直勝てるか分からないそれほど危険な人だ。あの人がなんでケンイチにそんな事を……

「自分の信じたい信念が今のロケット団には無い。って言ってた。今のロケット団が気に入らない、だからって自分の手で自らが所属していた組織を潰すのには抵抗がある。出来れば他の人に潰して欲しい。そんなのだと思うよ。オレに教えてくれた理由って」

な……なんて勝手な……

「で、オレはここにきた訳さ。どうせなにかあつたらユースケの事だ。ランちゃんの制止も無視して一人突っ走るにきまつてる。そんな時にはオレがいなくちゃダメだろ？」

う、酷い理由だけど否定できない……

「で、まあ遊ぶって口実を付けたのはお前らを心配させたくなかったからだ。アイツの言ってることが嘘かも知れないしな」

『おお、それなら納得だ』

ユンゲラー、納得しないでよ……

「ユンゲラーも納得してくれたし、さっさと行くか。ウィンディ、行くぞ！」

『ガオーン！』

そうケンイチが言うとケンイチはボールを投げた。すると4足歩行のエンテイにも劣らないほど力強さと勇猛果敢さを感じるポケモン、ウィンディが姿を現した。前にみたときより強くなってるみたいだね……ケンイチがその背中に乗るとウィンディは駆け出していく。ケ、ケンイチ早いつて！

「カシス」

「ハイハイ、行くよ！」

カズマとカシスのやり取り、それからカシスはカイリユールを出して二人はケンイチと同じように背中に乗った。そして……

「カイリユール、ラジオ塔に向けてレッツゴー！」

『リユール！』

カシスがそう指示を出すとカイリユールは羽ばたき上昇する。そしてそのままラジオ塔に向けて飛んで行った。それじゃ僕達も……

「ラン」

「うん、行く、ユースケ」

僕はランがうなずいたのを確認してからユンゲラーをボールに戻し、代わりに

「行こう、リザードン！」

『リザア!』

僕がボールを投げると赤色のドラゴン、リザードンが姿を現した。尻尾の炎はいつもよりも強く燃えている。よし、いつでも戦えるね。

「ラン」

「ユースケ?」

「行こう」

「うん」

僕はランの手を握ってリザードンの背中に飛び乗る。ランも手をひかれながらも僕と同じようにリザードンの背中に飛び乗った。この前は、僕がランに助けてもらった。だから今度は僕の番だ。ランは絶対に守りとおして見せる!

「リザードン!」

『リザアア!』

リザードンが方向を上げて空へと飛び立った。今度こそ決着をつけるよ……ロケット団!

「今度は僕の番だ」(後書き)

今回は次回予告は無し、お楽しみに

再会（前書き）

今回はイツキ編、イツキが再開したのは……

今回からしばらくコミボです

## 再会

オレとコノハ、それからユウイチにサクラ、そしてアキトの5人はコガネシティに訪れていた。ここコガネはジョウト地方の一番の大都市だ。で、ライコウとの約束を守るためにオレ達はここを訪れた。一番の大都市、だから何かが起こる可能性が一番高いのはここだ。それにここのジムリーダーはなんか精神的に情けないし……で、今はこそそと路地裏に隠れている。それはなぜか？

もうすでに時遅しだったから。もうすでにコガネシティはロケット団に占領されていて何人もロケット団がうるついていた。ユウイチとサクラはともかくオレとコノハ、アキトの顔は知られているからな。見つかる訳にはいかないな

「イツキ、どうする気？これじゃ身動きが取れないわよ！」

そうコノハがイライラした口調で言う。それが思いつかないからこんな苦労してるんだろ……

「ユウイチ」

「オレにふるなよ。とにかく情報が欲しい。それが無いと行動に移せないしな」

オレがユウイチに尋ねるとユウイチがそう答えた。なるほど……それもそうだな……とにかく地下道にでも行ってみるか……あそこなら見つかりにくいだろうし、情報も収集しやすいだろうしな……

「イツキさん」

うおわっ！

突然の不意打ち、オレ達以外の声が不意にオレ達に掛けられた。それに焦りながらもオレは振り返る。

「ロケット団！」

声をかけてきたのはロケット団だ。それも二人だ。なんでだよ！しかもさん付けか？  
畜生、こうなったら強行突破を……

「ぼ、僕です！ゴールドですよ！！」

ん……オレはそのセリフを聞いてよくそのロケット団をみる。なんか見覚えがあるような……そうしているとそのロケット団は、その黒服を脱ぎだす。あ……こいつらは……ゴールド、それにユウコじやにか。チヨウジで出会った二人、なんか懐かしい。な。まあ、あれから色々あったし当然か

「久しぶりね、ユウコ！」

「ええ……」

コノハがユウコに声をかけ、ユウコもそれに返した。なんだかんだと仲がいいこの二人、毎回思うが、性格は正反対なんだけどなあ

「イツキ、誰だよその子？ゴールド先輩そっくりじゃないか」

「確かにそうよね……」

そう言うのはユウイチとサクラ、コイツらはゴールド達とは初対面



だっけな？

「ああ、コイツはゴールドって言うんだ。名前も同じでオレもビツクリしたけどよ、ゴールドはさ、あのヨウイチさんの息子なんだよ」

「ヨウイチってあのジヨウト伝説って言われるあのヨウイチか!？」

突拍子な話にユウイチが張り上げるような形で返す。おいおい……お前がそれでどうすんだよ……

「ああ、それともう一人、ゴールドと一緒にいるのはユウコ、ゴールドのパートナーだ」

オレは引き続き紹介をする。こういうことはしっかりやっておかないといけないからな。

「よろしく……」

ユウコがオレがそう紹介するとそう言う。相変わらず愛想が悪そうだけど、チヨウジで会った時に比べれば断然愛想は良くなってる。これが成長してるってやつなんだなあ

「ゴールド、ユウコ、このポーってしてるのがユウイチ、それとこのマジメそうなのはサクラ、二人ともオレの幼馴染だ。二人とも気がいい良い奴だよ」

最近定番になりつつある紹介をゴールドとユウコにする。

「よろしくな」

「よろしくね」

それに対してユウイチとサクラはそれぞれそう言う。やっぱり最初のあいさつは重要だよな。

「自己紹介も終わったことですし、皆さん。ちょっとついて来て下さい……」

ユウコがそう言うのにオレはうなずく。こいつらの言うことは信用できる。オレ達はユウコ達についていった。

オレ達はゴールドが誘導するままに地下に来ていた。これまたうまく誘導するんだわ、都合良く一人にも見つからなかったしな。えっ  
とここは衣裳部屋だっけな？

確か好きな服に着替えて記念写真を撮ることが出来るんだっけ？  
なんでこんなところに……

「クリス！」

「入ってきて！」

ゴールドの言葉に声が返ってくる。今の声はクリスだよな……とにかく中に入りクリスにユウイチとサクラの紹介をする。その後、クリスは何も言わずにオレ達にロケット団の服を手渡してきた。どこで調達したかは突っ込んだら駄目だな。まあ色々文句があった訳だが、クリスの尋常ではない睨み付けが全員が口を無理矢理閉ざした。やっぱりクリス先輩に瓜二つだからそこから辺怖いんだよな……

「いい？アタシが手に入れた情報によれば、ロケット団の活動の拠点はラジオ塔。今、街中がこのラジオ塔を中心にあるモノが流されているわ」

「何なんだ、それは？」

クリスの言葉にユウイチが返す。だいたい見当がついてるさ。コガネに来るまでに感じたポケモンの殺気から察するに……

「電波。以前、シオンであった事件の時のより事態は最悪よ」

やっぱりか、でも最悪って……

「より最悪の事態？」

クリスの言葉にサクラが首をかしげる。最悪の事態ってまさか……

「ええ。以前はトレーナーのポケモンには効かなかったけど……今回はそれをも手中に収めてしまっている」

「ヤバいだろ、それは……」

クリスの言葉に対しアキト。おいおい、本気でシャレになってねえぞ。

「トレーナーの指示を受け付けられない以上、今のアタシ達は無力そのもの。だから、変装して情報を手に入れておくのよ」

なるほどな……だが……

「その必要……無いと思っせ」

「イツキ、どういう事？」

クリスがオレにそう聞いてくる。アイツのやってくれた事が本当だとしたら……

「キキヨウシテイでさ、オレ達はライコウに会ったんだ。その時に、この街でも大丈夫なように加護みたいな奴を付けてもらったのさ」

「僕とユウコモスイクンに会ったよ。イツキさんと同じ事が僕ら2人にもあったんだ」

へへ、ゴールドはスイクンに会ったのか……なんか奇妙な縁みたいのを感じるな。

「なら、試しにポケモンを出してみましようよ。アタシのポケモンは皆、電波の影響を受けてるからダメだけど……」

「分かった。オーダイル、出て来い！」

クリスの指示にオレは頷き。オーダイルのボールを取り出し投げしてみる。同じ事をゴールドも行う。

『ダイル！』

「エーファイ！」

『ファイ』

おお、いつも通りのオーダー達じゃなか。微塵も電波の影響を受けていないぜ。それを見たクリスは軽く笑みを浮かべる。そして

「なら、アタシも情報を提供するわ。いい？ 所長さんは地下に捕まっているみたいなの、ただ……その地下は地下通路の最深部。扉があるんだけど、扉を開くにはラジオ塔の所長室にある鍵を使わないと開かないらしいのよ……これくらいかしら」

へへ、了解だぜ。とにかくやってやるぜ！

「充分な情報よ、ありがとねクリス！」

コノハがクリスにそう返す。クリスは頷くとユウコに近づいてあるものを渡しているのが見える。あれって……

「ポケモン図鑑……」

「今、この道具はアタシよりユウコが持つべき。その図鑑が助けになると、アタシは信じてる」

「……分かったわ、必ず帰しに行くから」

クリスからポケモン図鑑を受け取るユウコ。まじかよ！  
う、うらやましい！

「イツキ……何指くわえて羨ましそうにしてんのよ……」  
は！

コノハの鋭い突っ込み。い、いつの間にオレはこんな事を

「じゃあ、そろそろ行くか。変装して」

ユウイチがそう言うと全員がそれに頷いて、自分の服の上に着ていく。トホホ……こんな着たくないぜ……かつこ悪いしムカつくし……  
……こんなのロケット団の連中はよく着てられるな……

「ク、クリス!?!」

うおー!

急に響いたゴールドの声にオレは驚きゴールドの方を向く。いったいどうしたんだ?  
若干顔が赤いし……

「どうしたゴールド?急に変な悲鳴をあげて」

「な、何でもありませんっ!」

オレの言葉にあきらかに動揺してるように返すゴールド。いったいどうしたんだよ?

「なあコノハ、ゴールドはどうしたんだ?」

「少しぐらい顔つきから察してあげなさいよ……」

……何のことかさっぱりだ。でもなんかクリスが面白そうに笑ってるように見える。うーんあれはどこかで見たことある目だ。なんと  
いつか怒りの湖で見た、ランさん獲物を狩るカシスさんの目というか……と  
にかく触らぬものには祟りなし、余計な突っ込みは入れずロケット  
団との決戦に意識を集中させた。

再会（後書き）

次回予告はしばらくお休みです

**突撃開始！（前書き）**

ロケット団の姿に変装したイツキ達は……



## 突撃開始！

オレ達は達は表通りを歩いてきた。クリスはもしもの時を考えての別行動だ。アイツのポケモンは完全に凶暴化しちまってるらしいしな。ポケモンが自分の指示を聞かない以上戦力が言ってるっても過言じゃない。ポケモンなしで危険な場所には行かせられないからな……

「この先がラジオ塔ですね……」

ゴールドは緊張した様子で言う。敵の本拠地へ乗り込むのだから当然と言っちゃ当然か。そして、ラジオ塔の目の前と言える場所まで来た。マダツボミの塔もでかったがこれもでっけいな

「いよいよだな……修業の成果を見せてやるぜ！」

そう言うのはアキト。フスベで修業を重ねたって言ってたからなあ。あん時より強くなって今回も活躍してくれるんだろうな。劣りとそて

「さあ、行くこうぜ」

「そうだな」

オレの言葉にユウイチも小さくうなずいた。へたな行動は大きく出るからな。

「ラジオ塔ね、あれが……」

「ロケット団だらけだね……」

コノハとサクラが思い思いの言葉を吐く。ラジオ塔の前には特に目付きの悪そうな男がいた。マフラーなんかもして若干偉そうな印象を受ける。あれがロケット団幹部みたいだな。不意打ちでもしてなんとか倒せないかな？

そう考えていると別のロケット団員がその男に話かける。彼の手にはラッタが握られていた。いやな予感しかしないな……

「ロツカ様、この使い物になりそうもないラッタ、如何しましょうか？」

「使い物にならない駒は必要いらん。とっとと捨ててしまえ」

なっ！？

心の底からイラッとしたものが込み上げてくる、今は我慢するしかない我慢するしかないけど……畜生！

ロケット団員がラッタを放り捨てた。だが、そのラッタが地に着く事は無い。おい……オレが我慢してお前が我慢しないってどういうことだよ……ユウコ！

ユウコがラッタを助けた。オレとしては称賛してやりたいけど……今の行動はかなり危険だ！

案の定、えくと、確かロツカだっけ？

とにかくそいつがユウコに詰め寄る。ま、不味い！

ユウイチ、頼む！

オレのアイコンタクト、ユウイチはそれに頷く。

「おい、今の話、お前は聞いてたな？何で邪魔するんだ」

「……………」

やばいって事に気付いたのか、ユウコはだまりこける。ロツカの不審感はますます強くなってるみたいだ。あわわわ……

「お前……怪しいな？」

ロツカがそう言った時、ユウイチが割って入る。行け、お前のはつたりと大ウソのうまさを見せてやれ！

「このラッタも少し体の調子を良くして、訓練すれば役にまた立ちます！まだ捨てるのは早いと言いたいですよ……」

うまく、ユウコのミスをフォローするユウイチ。ロツカも不審な面持ちは持ちつつも、納得がいったのか「そうか」と言っただけで帰ろうとする。ふくた、助かった……

「ポケモンを捨てるなんて言葉、最低……この下道」

「「！！？」「」

ユウコの声が響き渡った。あ、あんのバカ！

大声では無いにしろ、ロツカに響くには十分すぎる距離だった。

そして、ユウイチのフォローをこの一言で水の泡にしてしまう。せ、せっかくのフォローを……このままじゃ……

「何だと？」

「下道って言ったのよ」

「お前……どう見てもロケット団じゃねえな！？そこのデメェも！」

コウコをフォローをする　それは味方だという証拠。ロケット団員じゃないと言い切るには充分過ぎた。畜生、我慢するんじゃないか！

オレが動いてアイツに一発見舞っておけばよかった！

「って事は……その連中の中からコイツ等は出た……。お前らもロケット団じゃ無さそうだな……！」

だあー完全にばれちまったじゃねえか！

こうなりや強行突破だ！

「もう、やるしかねえ！オーダイル、君に決めた！」

『ダイル！』

オレはロケット団の服を脱ぎ捨てながらもオーダイルを出す。こんな胸糞悪い服、ばれてまで着てられるか！

それを見た他のメンバーも服を脱ぎ捨てる

「こいつら……以前フウスケ達の言ってたガキか……。だが、今の騒ぎを聞き付けて、下っぱ達が近づいている……。たかが、数人で何とか出来るわけが無いだろうな」

確かに数的には圧倒的に不利である。始めは押していても、後々ポケモン達の体力が尽きる可能性は今回の場合、極めて高い。ほ、本格的に不味いぞ……焦りを隠しいれない。こうなったらコイツらだけでも仕留めてやる！

死なばもろともだ！

覚悟を決める。その時だった！

「ちよつと待ったあ！」

突然そんな声が響いた。突然の事にオレは驚きながらも声が聞こえた場所、上空を見上げた。あ！

「お前の相手はオレ達だ！この最低野郎！」

「この前の借りはしつかりと返させてもらうよ！」

「カ、カズマさん！カシスさん！」

上空より響いていた声、それはカイリユーに乗った、カズマさんとカシスさんが放ったものだった。カイリユーはゆっくりとオレ達の前に降り立ちそれからカズマさんとカシスさんはカイリユーの背中から降りる。なんておいしい登場の仕方だよ。

「よお、イツキ、ゴールド久しぶりだな」

登場してや否やそう強気の表情でカズマさんが言う。なんか凄い頼もしく見える。

「く……バレットとオレンジが来たか」

そう言うカズマさん曰く、最低野郎の表情にはさっきまでの余裕は無い。話では一度追い詰めてるらしいから……当然と言えば当然か

「この間は痛い目に逢わされちゃったけど、今度はそうはいかないわよー！」

そう強気で言うカシスさんも珍しくシリアスな表情だ。あまり似合

わらないな……

「イツキ、ゴールド、お前らは先に行け！ここはオレが相手をする！」

そうカズマさんが言うと、緑色の竜？

のようなポケモン、ジュカインをボールから出して構える。あのジュカイン、半端なく育ってるな

「だ、大丈夫なんですか？」

そうコノハが2人に尋ねると、カシスさんがオレ達の方へ振り向いて笑顔を向けてきた。どういう事だ？

「わたし達なら大丈夫！それに君達の事も心配いらないよ？ちゃんとエスコートして上げるから……」

え……エスコート？

それってどういう……

「お前ら速いぞ！」

「そつだよ、もうちょっとゆっくりでもいいんじゃないかな？」

そんな言葉と共に現れるウィンディとリザードン、その背中には人を乗せている。ウィンディの背中に乗ってる人は知らないけど、リザードンに乗っているのは！

「ユースケさん！」

「それにランさんも……」

「マジかよ……ケンイチ先輩までいる……」

今度はゴールド、ユウコ、アキトの順番に声を上げた。コイツは頼もしい援軍だぜ！

ケンイチとアキトに呼ばれた人はウィンディから、ユースケさんとランさんはリザードンから降りて、値切らしいの言葉を言ってからポールに戻した。

「ごめんねケンイチ、カイリユーで空にいたらユースケとランに悪いかなあつて思っちゃってさ」

「おゝ、なるほどな」

「という訳だからユースケ、ランと仲良くしてたか？」

「し、知らないよ！」

「も〜！からかわないでよ！」

カシスさんにケンイチさん、カズマさんからユースケさん、そしてランさんの順番で台詞が続く、多分普段からこんな会話してるんだろうな……この人達は……こんな状況でもそんなやり取りが出来る余裕が凄い。

「と、とにかくみんな、あたしとユースケとケンイチくんがフオロ一するから、一気に登ってくよ！」

そうランさんが顔を真っ赤にしながらも言う。カズマさん達がしん

がりを勤めてくれて、ユースケさん達がフォローしてくれるんだっ  
たら百人力だぜ！

「なら早く行きましょう！」

そうサクラがオレ達を促すように言う。それにオレ達全員が頷き、  
塔の入口に向かって走りだした。

「く……行かせるか！」

最低野郎……確かロツカって言ったっけ？

がこっちに向かってボールを投げようとしてきた。マズイ！  
ポケモンでオレ達全員を足止めするつもりか！  
オレがボールに手を回そうとした、その時だった

「カイリユー！破壊光線！」

『リユー！』

「ちょ……のわっ！」

う、撃ったよ！

カシスさん、人に向かって破壊光線を撃ったよ！  
まあ、わざと外したみたいだけどさ……

「流石カシスだ、的確な判断だな」

そう言うケンイチさんは鬼だと思う。だがこれでラジオ塔に入れる！  
……うん……今回の戦いいろんな意味で波乱になりそうだな……



**突撃開始！（後書き）**

今回でACEシリーズ累計200話達成！

ユースケ「え！」

イツキ「マジかよ！」

ミニポケやANOTHERに収録されてる話も全部合わせると200話になるんだよ

ユースケ「よくここまで続いたよね」

イツキ「ですよね」

え〜と、多分記念に人気投票をするとおもつのでその時はミニポケでご報告します。

## 分裂？最大の危機（前書き）

ラジオ塔になんとか侵入したイツキ達は……

現在人気投票を実施中です。ご協力お願いします

## 分裂？最大の危機

ユースケさん達の乱入でなんとかラジオ塔内部に侵入することが出来た。

だが、ユウコは中に入る前からも入ってからも今までと違って、感情的だ。怒りだけが今のコイツにはあるように見えた。一体……どうしたんだ？

コノハが怒る時のとは根本的に違う怒り方だな

「ユウコ！さつきから何焦ってるのさ……」

ゴールドがユウコの肩に手を置いて、声をかける。

だが、ユウコはゴールドを軽く睨むように見ると手を振り払った。こ、怖っ！

やっぱりいつの時代も女の子は怖い。コノハなんて典型れ……いやだなコノハさん、冗談ですよ。

「ゴールドは冷静ね」

皮肉が混じった言葉だな。オレの場合うまくそれが表現できなくいんだよな

「冷静に見えるだけさ。僕だって焦ってる……。だけど、さつきの行動や言動は自爆行為だ！何であんな事したのさ……」

「このままじゃ、ジヨウト中のポケモンや皆が危ないのくらい、私だって分かっている。でも、私は1匹たりとも犠牲を払いたくないの。ゴールドだって、犠牲なんてあつて欲しくないでしょ!？」

「だからって、僕達が捕まれば全部終わっちゃうんだよ！？助けたいポケモンや人だって助けられなくなる！」

「なら、犠牲は必要だって言うの！？」

「必要だなんて一言も言っていない！」

あわわ、取り付く島もねえぞ……さっきからコノハもユウイチもアキトもユースケさん達もなんかあたふたしてるけど止めれそうにないな。

「ユウコは小さな犠牲を出さない代わりに皆が辛い目に遭うほうが良いの！？」

「そんな事、一言も言っていないわよ！」

だー！

こんな事してる場合じゃないのに！

「今のユウコに……今の君に、僕の考えは分からないだろうね」

「それはこっちも同じよ……」

おおい、ちょっと待て！

そのセリフは最悪な流れに行くセリフじゃ……

「私は別行動させてもらっわ。今の状態……いや、メンバーじゃ何も進みそうに無いから」

「ああ、勝手にすると良いよ」

そう互いが吐き捨てやがった。ユウコは宣言した通りに自分が突破する状態だけを作って、そそくさと先へ急いでしまった。な……マジかよ……このタイミングで大喧嘩なんて……イヤさ、オレもコノハと喧嘩はしょっちゅうするけどこんなシリアスなタイミングじゃ……流石にしないぜ……とにかくこの亀裂を埋めないと今走っていったユウコもオレ達と一緒にいるゴールドも危ねえ……メンタル的に堪えている場合まともな指示をポケモンに送れないし、冷静な判断もつかなくなっちまうぞ……それにコイツらはオレとコノハと違って凄く繊細だからな……オレ達の場合は笑って会えば直ぐに仲直り出来るけどコイツらは違う……早めに修復しないと手遅れになるぞ……オレはコノハにアイコンタクトを送る。コノハはそれに対し首を横に振った。だよな……喧嘩をよくするから分かる……今回みたいな考えの違いは簡単には修復できないってのを……

「追わなくていいのか？」

ユウイチがそうゴールドに尋ねる。しかしゴールドは黙って首を横に振った。コレは本気で穏やかじゃないな……

「ゴールドくん、もう一度しっかりとかりとユウコちゃんと話合おうよ。見えてなかった何かが見えてくるかもしれないよ」

お、流石は姉ちゃんキャラ、伊達にユウイチのお姉さん役をしてる訳じゃねえな

「イツキ、後で覚えとけよ」

……そうだった、ユウイチも読心術を習得してるんだって……ってそんな事を考えてる場合じゃねえな……

「話合ってどうなるって言うんですか！話合っても何の解決にもな  
ったからこんな喧嘩になっただんでしょう！」

言い返されたサクラは困ったような顔をする。確かにゴールドが言  
った事は正論だからな……。でも、この様子を見るとゴールドの完全  
に感情が暴走してる……。コイツは今爆弾と同じだ。下手に触れた  
らオレ達まで喧嘩の影響が飛び火しちまう……。サクラでもなだめら  
れ無かったんだ……。オレなんか迂闊に触れたら大変な事になる……

「……ゴールドくん」

今度はランさんが声をかけた。どうしたんだろう？

凄い悲しそうな表情だ……。ユースケさんが捕まったあの時とはまた  
別の……

「なんですか？説教なんてしても意味は無いですよ」

……。筋金入りの馬鹿野郎だなコイツは……

「うっん、あたしは何も言わないよ」

「なら……」

何も言わないって言いながら色々言ってるじゃんって突っ込みは言  
わないでおく。揚げ足を取るような真似はしたくないからな

「ゴールドくんはユウコちゃんの過去の話を知ってる？」

「ユウコの……過去ですか？」

ランさんがそう言つとゴールドが首を捻る。この様子だと知らないみたいだな……にしてもユウコの過去か……それが今回の喧嘩に係しているのか？

「今回ユウコちゃんが焦ってる理由はねそれにあると思うの……」

ランさんが優しくそうゴールドに言う。やっぱりどこか悲しそうなのは変わらないな……

「その過去って……」

「言ったよ？あたしは何も言わないって。それはゴールドくんがユウコちゃん自身に聞いて。この戦いが終わってからでもいいから絶対に……それから考えてみて、なんでユウコちゃんがあんな事を言い出したのかを」

そういうランさんの台詞はやっぱり優しい、でもその中には厳しさが込められている気がする。

「ユースケ、あたしはユウコちゃんを追いかけるよ。ユースケはみんなをお願い」

「分かったよ、気をつけてね」

「うん、ユースケ達も気をつけてね」

そんなユースケさんとランさんの会話の後、ランさんはユウコを追って走っていく。まるっきり恋人同士の会話に若干嫉妬したのは内緒だ。ここまでお互いの事を信頼し合えるなんてすっげえうらやま

しい。

「過去……………か」

1人小さく呟くゴールド。

ゴールドは苦々しい顔をする。何か苦い過去があるのだろうか？

「……………皆さん」

「ゴールド？」

ゴールドの言葉に乗るユースケさん。その表情は何かを決心した顔だ。へ、余計な心配させんじゃねえよ。

「僕も追います……………。考えの食い違いは直らないと思うけど、でも、ユウコがあんなに焦るその理由わけを僕は知りたいんです」

「なら、早く追い掛けようぜ！」

その決心、むげにする訳にはいかないからな、協力は惜しまないぜ。オレがそう言つとゴールドは頷きユウコが行った道に進んでいった。



「あたしね、今凄いイライラしてるんだ」(前書き)

一人暴走したユウコを追ったランは……

現在人気投票実施中です。ご協力よろしくお願ひします

「あたしね、今凄いイライラしてるんだ」

「ピカチュウ、雷！」

あたしが階段を駆け登ると、ユウコちゃんが追い詰められているのを目に入った。ニョロゾもトゲキツスもミルタンクもガーディも既に傷だらけになっている。だからあたしは迷わずにピカチュウをボールから出してそう指示を出した。

「ピイカアチユウウ！」

あたしの指示に応えるようにピカチュウは力強く鳴き声を上げながら強力な電撃を広域に放った。その攻撃はジワジワと迫っていたパルシェン、マタドガス、ツボツボそしてハガネールの付近を通過し、その攻撃にハガネール以外のポケモンは後退していく。ハガネールには電撃は効かないから後退はする訳ないよね……ならこうするだけだよ！

「ピカチュウ、気合パンチでハガネールに攻撃して！」

『ピツカー！』

『グオオオオ！』

ピカチュウの重い一撃を受けてハガネールはツボツボの傍まで弾き飛ばした。うん、なんとかピンチは切り抜けられたね。

「ラ、ランさん……！」

「ユウコちゃん、大丈夫だった？」

ユウコちゃんが少し驚いたような口調で言ったのを聞いてあたしは  
そう優しくそう言う。

「な、なんで……」

そう尋ねるユウコちゃん、そんなの決まってるよ

「大切な友達を助ける事がおかしい事かな？」

そう優しくユウコちゃんに微笑みかける。そうするとユウコちゃん  
はその場に座り込む。気が抜けちゃったのかな？

「お前は、ヤドンの井戸の時の小娘か！」

4人いるロケット団員の一人が言った。小娘って……まあ、間違っ  
ては無いと思うけど……あの人達の内2人は知ってる。ヤドンの井  
戸の時の人ね……

「久しぶりだね。あんまり再会はしなくなっただけだね……」

一応笑みで返しておく。あんまり再会したくないのは本音だったん  
だけだね。

「ユウコちゃん、後は下がってて、ここからはあたしがやるから！  
ピカチユウ！」

『ピカア！』

あたしのセリフを聞いてピカチュウは構える。うん、いつでも行けるね。

「でも……」

そこで食い下がるユウコちゃん、でも……

「あかしなら大丈夫だよ。ここは任せて戻ってみんなと合流して。大丈夫、絶対に後でみんなと合流するから！」

そう力強く言ってみせる。多分これぐらい言わないとユウコちゃん  
は聞かないから……

「……わかりました……でも、約束ですよ……絶対合流するって」

「うん、分かってるよ。約束だよ」

ユウコちゃんの言葉にあたしがそう返すと笑顔を浮かべた後ポケモン達を戻してあたしの来た道に戻っていった。うん、これでよし！

「別れはすませたようだな……」

えくと、確かロケット4兄弟だっけ？

の1人が言った。うん、後で会おうって約束をしたつもりだった  
んだけどな……

「覚悟してもらおうか……」

「覚悟するのはそっちの方だよ……あたしね、今凄いいライラして  
るんだから……」

相手の言葉にあたしはそう返す。とは言っただけど大丈夫かな？  
相手は4人……しかも実力者だから……しょうがないね、ユウコち  
やんと約束も守りたいし、アレを使おうかな？  
あたしは自分のジャケットのポケットに手を入れてあるものに触れ  
る。それはビー玉と同じ触り心地だけど少しだけビリッと痺れる感  
じがする。

「ピカチュウ、これを使って！」

『ピカア！』

あたしはそれを取り出してピカチュウに向かって投げると、ピカチ  
ユウはそれを両手でキャッチしてから口にくわえた。するとピカチ  
ユウの体から何もしてないのにも関わらず、パチパチと電気が走る。  
うん、ちゃんと使えてるね。

「な、何をした……」

ピカチュウの尋常じゃない様子を見て相手の1人が言う。

「電気玉を渡したんだよ。電気玉を持ったピカチュウは凄い強くな  
るんだよ？」

そうあたしは質問に答えた。ピカチュウの潜在能力を最高まで引き  
出すコレ……電気玉はレッドさんから貰ったもの。本当は……ポケ  
モンリーグで、ユースケかカシスとバトルするまで使わない予定だ  
っただけど……今、使うよ！

大切な友達との約束を果たすために！

「行くよ、ピカチュウ！」

『ピカア！』

あたしの言葉に答えるようにピカチュウが鳴いた。この戦い、絶対に勝つよ！

「ふん、所詮は多勢に無勢……いくら粹がっても無駄な事には変わらない」

……あまりね……

「あまりね、あたしとピカチュウを甘く見ないほうがいいよ」

「強がりはやめる。いくら腕に自信があつたとしても我らロケット4兄弟、4人そろって風林火山と恐れられる我々に勝てるわけがない」

あたしの言葉にそう返してくる。フウスケさんとリンゾウさん、ホカゲさんにサンジさん、うづん……無茶しないと風林火山にはならないよ。それに出してるポケモンってマタドガス、ツボツボ、ハガネール、パールシエン……守りが得意なポケモンばかりで火の攻撃的な部分を感じられないよ。全部山って感じがする……でも強敵いは変わらない、決して油断は出来ない。でも！

「言いたいことはそれだけ？あたしが1+1が3にも4にもなるって事がどういふことか教えてあげるよ」

あたしはいつもの口調を崩さずにそう言う。正直内心スゴイイライラしてるんだけど冷静さを失えば勝ち目は無くなるからね。平生を

保つためにもそうする。

「なめるな……かかれ！」

そうロケット4兄弟の一人が言うと、ハガネールとマタドガスがピカチュウに向けて突撃してきた。前衛を2匹、後衛を2匹っていうチーム攻撃で来るつもりだね。その証拠に、援護するように後方のパルシエンとツボツボがそれぞれトゲキヤノンとストーンエッジを放ってくる。ピカチュウが回避するだろう場所に放ってくる。回避コースを塞いで確実にハガネールとマタドガスの攻撃を決めるつもりみたいね。でも！

「捨て身タツクルだ！」

「ダブルアタックで弾き飛ばせ！」

ほとんど同じタイミングで攻撃を仕掛けてくるハガネールとマタドガス、ギリギリまで引き付けて……今なら！

「ピカチュウ、波乗りを使って！」

『ピツカチャアア！』

あたしが指示を出すと同時にピカチュウはバック転をする。するとどこからかサーフィンのボードと、大波が現れてピカチュウはそのボードを利用してその大きな波に乗った。行っけ〜波乗りピカチュウだ！

『グオオオオン！』

『ドガア……』

「な、何い……」

大きな波にハガネールとマタドガスは巻き込まれ流されてしまった。電気玉のお陰で今のピカチュウは凄い力の持ち主、だから今の攻撃はかなり効いたハズだよ。

「ふん、状況判断能力が欠如しているな。態々敵陣中央に乗り込んでくるとはな」

波がおさまると波に乗って進んでいたピカチュウはツボツボとパルシエンに挟まれる形になっていた。凄い危ない状況だけど……上手くいけば！

「パルシエン、吹雪で氷漬けにしてしまえ！」

『パル！』

ロケット4兄弟の一人の指示に従いパルシエンは吹雪を放ってくる。それには当たれないよ！

「ピカチュウ、電光石火でよけて！」

『ピカア！』

ピカチュウは電光石火を使って、そのスピードで吹雪を後退するだけの動きで回避する。反撃を……

「かかったな！ツボツボ、巻きつけ！」



『ツボオ!』

!?

電光石火で後退した先には予想できてたみたいにつぼつボが待ち受けていた。そしてピカチュウに巻きつこうと迫ってくる。え〜と、こんな時は!

「ピカチュウ、身代わりを使って!」

『ピカア!』

あたしの指示でピカチュウは身代わりを作り出した。それにツボツボは巻きついてなんとか危機を脱する。次は!

「ピカチュウ、パルシエンに威張ってみせて!」

『ピカピカチュ〜』

あたしの指示でピカチュウはその場でパルシエンに挑発するように背中を向けて尻尾を振った。するとパルシエンの顔がみるみる内に赤くなってきた。そして……

『パルウ!』

「おい、パルシエン!」

トレーナーの指示を無視してパルシエンはピカチュウに向けてトゲキヤノンを放ってきた。でも冷静さを失ったパルシエンの攻撃は単調で当たる攻撃じゃない。ピカチュウは余裕を見せながら回避した。

『ツ、ツボオ!』

「な、ツボツボ!」

ピカチュウが回避した先には身代わりのピカチュウをなんとか巻きつくで倒したツボツボ、もちろんスピードの遅いツボツボじゃトゲキヤノンは回避出来ず直撃した。これで一気に決めるよ!

「ピカチュウ、アイアンテールでツボツボをパルシエンに向けて弾き飛ばして!」

『ピツカ!』

『ツ、ツボオ!?!』

ピカチュウは電光石火を使ってツボツボの背後に入ったそれから体を回転させて遠心力をつけたアイアンテールでツボツボをパルシエンに向けて弾き飛ばした。ツボツボもパルシエンも凄じいポケモンだから……

『ツボ』

『パ、パル』

2匹のポケモンの悲鳴が響いた。激突した時のダメージは凄じい大きいんだよ?  
これで決めるよ!

「ピカチュウ、雷!」

『ピイカアチュウウウウウウ！』

ピカチュウは力強い鳴き声をあげながら特大の電撃を放った。それは見事にパルシェンとツボツボを纏めて捉えた。

『パルウウウウ！？』

『ツボ！？』

また2匹のポケモンが悲鳴を上げる。その悲鳴が途切れてるのと同じ時に電撃は止み、2匹のポケモンは気を失ったみたい。やった！まずは2匹！

「このまま引き下げられるか！」

「あまり馬鹿にするなよ、マタドガス、ヘドロ爆弾！」

『ドガ！』

マタドガスは牽制するようにヘドロ爆弾を連続で放って来る。

『ピカ……』

ヘドロが爆発する時の爆風で動きが制限されてしまう。そうしてるうちにハガネールが迫ってくる。また波乗りを使う？

でも二回も同じ手が使えるなんて思えないしどうしよう……どうなったら！

「ピカチュウ、フラッシュ！」

『ピイカア!』

「な……何!」

あたしは両手で目を覆ってからそう指示を出した。するとピカチュウはものすごい光を発する。それからすぐに手を放し前をみる。今の一瞬のもの凄い光でひるんだみたいで動きを止めていた。この夕イミング!

一気に決めるよ!

「ピカチュウ、ライトニングシャドー!」

『ピイツカ!』

ピカチュウはあたしの指示をきいて両手を広げて力強く鳴く。すると一瞬まぶしい光が放たれたかと思うとピカチュウの分身が4体姿を現した。電気エネルギーを使って作り出した身代わりとその身代わりが体力を消耗して作り出した身代わり、短い間だけと戦力はいつもの5倍、一気に決めるよ!

「行くよ!気合パンチ!」

『ピカア!ピカア!ピカア!』

『グオオオオオオ!』

5匹のピカチュウは電光石火を使い、一気にハガネールに飛びかかった。その途中1体の分身が尻尾に叩きつけられて消えてしまう。それでも4体のピカチュウの攻撃が入る。行っけ!!

『『『ピカア！』』』

『グオ…………』

流石に頑丈なハガネールでも4体の同時攻撃には耐えられなかったみたいだね。まだまだ行くよ！

「ピカチュウ、終わりにするよ！ボルテッカー！」

『『『ピカアアア！』』』

「な、何！」

あたしの指示で分身体のピカチュウがマタドガスに向かって突撃していく。これなら！

「ふん、マタドガス毒ガスから大文字で薙ぎ払え！」

『ドガ〜ス！』

え！？

迫るピカチュウ3体に向けて毒ガスを放ち、さらにそれに対しての大文字、それにより大きな爆発が起こった。

『『『チャアアア！』』』

それに巻き込まれて分身体はきえていつてしまう。そ、そんな……そんな戦い方してくるなんて……

ピカチュウ自身を突っ込ませなくてよかったよ……

「とどめを受ける!」

『ドガアア!』

!

トレーナーの指示を受けてマタドガスが爆発の中を突っ切ってピカチュウに接近してくる。本当にギリギリの距離まで迫っているマタドガス、その口には炎がたまっている。ま、まだだよ!

「ピカチュウ! 電磁浮遊を使って!」

『ピイカア!』

「な、なに!?!」

ギリギリのタイミング、ピカチュウは電磁浮遊を使ってふわって浮き上がって放たれた炎をなんとか回避できた。今度こそ! これでおしまい!

「ピカチュウ、10万ボルト!」

『ピイイカアチュウウウ!』

『ドガアアア!?!』

「な……マタドガス!」

ピカチュウの放った電撃は見事にマタドガスに決まった。もちろん電気玉の恩恵で威力が上がっているから耐えることは出来ず、ダウ

ンしてそのまま地に落ちた。なんとか勝てたみたいだね……ふう……  
…なんとか勝てたよ……ピカチュウもよく頑張ってくれたよ……ピ  
カチュウは走ってあたしの足元へ駆け寄ってくる

「ピカチュウ、ご苦労様、ホントによく頑張ったね」

『ピカピカア〜』

あたしはしゃがんでピカチュウの頭を撫でながらそう言つとピカチ  
ユウは嬉しそうに頷いた。それじゃ、みんなと合流しなくちゃね！  
ユースケならあたしの考えを分かってくれてると思うから、もう上  
の階にいるよね？  
早く行かなくちゃ！

「あたしね、今凄いイライラしてるんだ」(後書き)

続く!



合流、誓い（前書き）

今回はイツキ編です

## 合流、誓い

オレ達が階段を駆け登っているとほどなくして階段を駆け下りるユウコが見えてきた。帰ってきてくれたのか？

「ユウコ……………」

「……………何？」

うわ…………… 険悪な雰囲気……………こ、こんな状況って最悪じゃん……………でも…………… 上手くいくか見守るのが先輩の役目だよな。

「……………さっき、ランさんに聞いた。ユウコ、君の過去 話してくれないかな？」

「何だよ。私の過去を知って、同情とかして仲直りしようってわけ？」

…………… おいこら、そんな言い方はないだろ…………… ゴールドはランさんが言ったみたいに話を聞いたうえで考えてみようか……………

「……………」

おい…………… 凶星かよ。

「やっぱりそうなんですよ。私は別ルートから探すわ、じゃあね」  
そう言い捨て、去ろうとするユウコ。おい…………… お前は何しに帰ってきたんだよ……………

「ロケット団は僕にとっても憎い存在だよ！……親友を殺されたんだから……」

「！」

その言葉にユウコの足が止まった。殺されたって……そんな事って……

「……分かったわ。話す、私の過去を」

「……お願い」

そして、ユウコは語り始める。言うのもつらいであろう過去をゴールドだけじゃなくてオレ達にもはなすのは信頼したからなのかもしれない。

「私はタンバの出身。ゴールドもいずれ行くであろう、ジムリーダーのシジマさんに私は育てられたわ」

シ、シジマさんにか……どうりで突撃さっぼうが板についてる訳だ。納得だぜ。

「育てられた？ユウコのお父さんやお母さんは？」

ユウコが軽く深呼吸する、だいたい今ので察せたな。

「殺された。今から5年前、ロケット団にね。私がタンバを発つた理由はロケット団への復讐、そして……その時私を助けてくれた人を探すため」

「え……………」

ゴールドは言葉を失った。な、なんとなくユウコの心情が理解できた気がするな。ユウコは多分……

「ユウコ、もしかして……………。もう、何も失ったり、傷つかせたくないからあんな行動を……………」

ユウコはそれにコクリと頷いた。親が殺されるか…………辛かったらろ  
うな…………

「そっか…………。トゲキッスがあの時、君に懐いたのはただ単に君が優しかったんじゃない、僕ら似た者同士をくつつけるため…………だったのかも」

オレの知らない話だな。って事はさしずめトゲキッスは恋のキューピットか？

…………ちよつと違つよな…………

「…………そう言えば、さっきループを殺されたって言ってたわね…………何なの？リールって」

ループは僕の昔の遊び仲間のマリルなんだよ。エーフィがイーブイにだった時、毎日と共に過ごした仲間。だけど、5年前。ロケット団がやってきて、リールは僕を守ろうと……………」

5、5年前って凄いい偶然だな。こんな偶然ってあって欲しくないが…………

「ゴールドもロケット団への恨みはあるわよね？何でそんなに冷静でいられるの」

「これね……結構辛いんだ。内心、ユウコみたいに感情を表に出したいって思っていたりする。けど、敢えてしないんだ」

「どうしてよ？」

本当にどうしてよだ。オレならそんな事があつたあ絶対いちいち爆発してるけどな。まあ普段から爆発してるけど。

「繋がり洞窟でロツカに操られてたカズマさんとカシスさんの2人と僕とクリスは戦った。けど、結果は完敗……イーブイも奪われそうになった時、リヨウマさんに助けられたんだ」

「リヨウマさんに？」

ユウコの問いに頷いて、ゴールドはさらに続ける。にしても運が良かったな。来てくれたのがリヨウマさんでさ。じゃなかったらホントに危なかっただろうな。

「そして、クリスとリヨウマさんにループの事を話したら……。感情ぐらいコントロールしろ、感情に身を任せて勝てる敵じゃない  
そう言われたんだ」

「だから、あんな風に……」

ふっん、納得だ。ユウコも納得したみたいだしこれで一件落着だな。その証拠に自然と両者の口から漏れる「ごめん」の言葉。なんか微笑ましい

「これからは何の犠牲も出さず……………」

「自分達の感情に身を任せ過ぎず……………」

「ロケット団を止める!」

それぞれに無かったものを口にし、2人は今一度、見合った。完全に伸直りしたみたいだな。ってか喧嘩前より仲良くなってね?ま、負けた気分だ……………」

「ユウコ!そう言えば……………これを受け取って!」

「えっ?」

うん?

急にリュックから冠みたいのをゴールドは取り出しユウコに投げ渡すゴールド。いきなりどうしたんだ?

「ニョロゾにはニョロトノってポケモンにも進化できる!その王者の印は、最大のキーアイテムなんだ!……………まあ、全部図鑑のなんだけど……………」

「分かったわ。やる!」

へえ、進化させるのか。これは戦力アップだな。それにしてもオレも戦力アップしたいな……………別にオーダイル達が頼りないわけじゃないんだ。この戦いを確実に戦い抜くためにオレは新たな力が欲しいんだ。この戦い、絶対に負けれないからな。

「そうだ。イツキ、コノハ、アキト、いい機会だし良い物うをあげるよ」

ゴールド達を見てかユースケさんが唐突にそんな事を言う。いいもの？

「いったいなんだ？」

ユースケさんは自分のジャケット懐から何かのケースを取り出し、開けてそれをオレ達の方に向けて差し出した。こ、これって！

「進化の石……」

コノハがそう呟いた。そう、そのケースには3つの進化のいしが入っていた。透明な石の中に炎が宿ったような炎の石、水色であり透き通ったような感じの水の石、そして一見普通の石だけど、葉っぱみたいなマークが描かれたリーフの石だ。進化の石、特定のポケモンを進化させる力を持った石だ。その原理は特定されていなく、とにかく珍しくて貴重な石らしい。確か凄い貴重なものらしいけどユースケさんがなんでこんなものを……

「あ、懐かしいなこれサント・アンヌ号で貰ったやつだろ」

「うん、もう雷の石はサンダースがいたずらで使っちゃったけどね」

ケインチさんの言葉にユースケさんが頷く。サ、サント・アンヌ号って……そんな豪華客船に乗った事があるって……

「いいんですか？」

アキトがユースケさんに尋ねる。まあ貴重なもんをくれようとしてんだから当然か

「うん、僕には必要ないからさ。それにチヨウジの時はみんなに迷惑をかけたからね。そのお詫びだよ」

き、気前いいなあ……でもくれるって言うんなら。遠慮なくもらいますよ。

「「「ありがとうございます」」」

そう言いながらもオレ達3人はそれぞれ石を受け取る。オレは炎の石、コノハは水の石、そしてアキトはリーフの石だ。ユウイチとサクラは羨ましそうにそれを見てるので軽く見せびらかしてやりながらオレは一つボールを取り出した。んじゃ早速使ってみるか。

「イーバイ！」

『バイー！』

オレはボールのボタンを押してイーバイを出す。オレの手持ちじゃ進化の石が使えるのはイーバイだけ、でもイーバイが進化したポケモン、ブースターになれば新しい力を得る事ができる。でもな……

「なあイーバイ、お前はこの進化の石を使ってブースターに進化したいか？」

一番重要なのは自分の意思だ。そんな自分勝手に進化させるのはトレーナーとして失格だと思うし、そんなトレーナーにはなりたくない。

『バイ……バイー！バイバイ！』



オレの言葉にイーブイは少し考えてから頷いた。そうか……それが  
お前の意思か……なら!

オレは炎の石をイーブイにあてる。するとイーブイは光だし少しづ  
つ姿を変えてく。そして光が晴れた、そこにいたのは

『ブイ、ブイブイ!』

イーブイが少し大きくなり、オレンジ色の体、それからそれよりか  
なり薄いオレンジの毛皮を纏った炎タイプのポケモン、ブースター  
の姿があった。よし、成功だな。

「ブースター、これからもよろしくな」

『ブイ』

そうオレが言うのと陽気にブースターが鳴いた。それじゃそろそろ…  
…オレはブースターをボールに戻し、ゴールド達の様子を覗く。ど  
うやらあっちも終わったみたいだな。

「さあ、早く行くこつぜ!」

オレはそう力強く言った。

「あ、そうだ……ユウコ、ランはどうしたんだい?」

ほとほりが覚めたのを見計らってかユースケさんがユウコに尋ねた。  
そっぴやユウコを追って行ったつきり帰ってきてないな……一体ど  
うしたんだろう?

「ランさんは……上の階でロケット4兄弟と戦ってます」

「4兄弟と！」

オレが思った事と全く同じ事をコノハが言った。まあ、オレ達は苦汁を舐めさせられた事があるからな……コノハやオレが焦るのは当然と言えば当然か……

「そっか……なら、みんな別のルートを進もう……」

「そうだな……それが一番かもな……」

ユースケさん！ケインイチさん！

「ちょっと！それってどういう事ですか！」

コノハがユースケさんとケインイチさんに突っ掛かる。彼の選択にしては少しおかしいものはあるから……

「……ランなら大丈夫って事だよ……」

大丈夫って……

「僕とケインイチはランの強さはよく知ってるからね。ランがロケット4兄弟なんかには負けない事もね」

ユースケさんがそう言い切った。言い切るって事はそれだけ自信があるって事だな……

「それに絶対合流するって約束したんだよね？」

「はい」

そう尋ねるユースケさんの言葉にユウコが頷く

「なら大丈夫、ランは約束は絶対に守るから」

やっぱりユースケさんとランさんの信頼関係って強いんだな……

「それだけじゃない。ロケット4兄弟みたいな幹部をそこに配置するって事はよほどそこは進まれたら困るって事だ」

「それじゃそこを攻め込めば……」

アキトがそんな意見を出す。確かにその通りだよな……

「馬鹿、重要って事は守備は4兄弟だけじゃないって事ぐらい分かるだろう！」

なるほど……それもそうか……そんなところを無茶に通ったら戦力が大幅に消耗してしまう……

「とりあえず作戦ならある。コイツを見てくれ」

ケンイチさんは入口の受け付けに置いてあったパンフレットを懐から取り出す。いつの間にかそんな手に入れてたんだ？

「コイツを見て分かるように、ラジオ塔ってのはあまりにも複雑な構造になっている」

……確かに……これじゃ絶対に初めて入ると迷子になっちまうよな……

「だから、オレ達は2手に別れてちよこちよこ騒ぎを起こしながら移動する。で、そしたら多分今ランちゃんがいるところの付近の戦力がオレ達の方へ別れ始めるハズだ。そこでオレ達は1人ずつ確実に撃破しながら、現在ランちゃんがいる場所に移動……つまりは敵の重要ポイントに移動する。これなら最小限の消耗でなお、ランちゃんの消耗を減らせるだろ？」

な、なるほど……ケンイチさんはそこまで考えてたのか……

「チーム分けはどうするんですか？」

サクラがそうケンイチさんに尋ねる。確かに気になるな……

「そうだな、まずはオレとユースケをリーダーにして、ユースケのチームに4人、オレのチームに3人編成する」

まあ人数的にはそれが妥当だよな……

「ユースケのところにはイツキとコノハ、ゴールドとユウコって編成だな。オレは残った奴らと行く」

なるほど……それは妥当な編成かもな……

「それじゃ、行動開始だ。ユースケ、気をつけるよ」

「そっちこそ。気をつけてね」

ケンイチさんの言葉にユースケさんがそう返す。それからオレ達は散開して走り出した。さあ、派手にやっつけてやるっぜ！

合流、誓い（後書き）

続く！

## カズマ&カシスVSロツカ ラウンド2

「さあ、ロツカ！お前をどう獵理（料理）してやるうか！」

オレとカシスはその最低野郎、ロツカと対峙していた。この前は酷い目にあわされたが……今日はそうはいかない！

「く……エレキブル、ブーバーン、ギャラドス、ゲンガー！」

『ブー！』

『エレガアー！』

『GRAAA！』

『ケケケ！』

ロツカは焦っているのか4体のポケモンを一斉にボールから出してきた。ギャラドスの色が赤いせいかなんか色々と怖いものがある。

「行くよカズマ、一気にやっつけちゃうよ！」

「ああ、やってやるうぜー！」

カシスの台詞で自らの士気を高める。さあ、どっからでもかかってきやがれ！

「調子に乗るな！しばらくすればオレの部下達来る。そうなればオレ達には負けは無い！」

そう最低野郎は調子に乗りながら言う。そんな訳あるか！

「あまり甘くみんなよ最低野郎！オレとカシスのコンビが、最強だつて教えてやる！」

「なに……そんな根拠があるのか！？」

そう最低野郎がオレに向かって言う。根拠だつて？

「そんなもん無い！だがそれを事実にする自信はある！」

「出た！カズマの根拠の無い自信！」

そうカシスがいつものおちやらけた口調でそう言う。根拠の無い自信はオレの必殺技だ。こうやって自分自身の士気を高める効果もあるし、相手に少しだけ精神的なプレッシャーを与える事が出来る。

「行くぞジユカイン、電光石火で敵陣中央に切り込め！」

『ジユプ！』

ジユカインはオレの指示を聞いた瞬間、電光石火を発動、そしてギヤラドスとゲンガーの間に切り込む。

「く……寝言は寝ながら言え！ゲンガー、黒い眼差しでジユカインを捕らえろ！そしてギヤラドスは氷の牙でジユカインを攻撃！ブーバーンとエレキブルはカイリユを牽制しろ！」

そう最低野郎は一気に指示を下した。



『リユール……』

「当たらないけど……攻撃が出来ないね……」

ブーバーンとエレキブルの火炎放射と十万ボルトによる牽制でカイリユールは攻撃に転じる事が出来ない。そしてゲンガールの目が大きく開き、黒い眼差しを発動しようとする。それに加えギャラドスがジユカインに接近する。動きを止めて一気に仕留めるつもりみただが……そうはいくか！

「ジユカイン、そんなもん見切つてやれ！」

『ジユープ！』

ジユカインはオレの指示を聞くと、目が輝く。すると完全にゲンガールの視線を回避した上で、接近するギャラドスの後頭部に回る。これで氷の牙もかわしてやったぜ？  
さあ、食らえ！

「ジユカイン、後頭部に爆裂パンチを叩き込んでやれ！」

『ジユープ！』

『GRA……』

ジユカインの放った一撃、後頭部への爆裂パンチが見事に炸裂した。ギャラドスはそのまま黒い眼差しの範囲に落ちてしまい動きを止めた。

「な……ブーバーン、お前はジュカインに標的を変える！炎の渦！  
ゲンガー、お前もシャドーボールでジュカインを狙え！」

『ブー！』

『ケクー！』

ブーバーンはまずは自らの陣を掻き回すジュカインを止めるために  
炎の渦をジュカインに向けて放ってくる。そして回避コースを封じ  
るためにジュカインの回避コースにシャドーボールをいくつも打ち  
込んでくる。くっ……

「やられる！？」

『ジュー！？』

「ふっ……所詮は子供のみえだったようだ……」

「って言うか！」

『ジュプ！』

少しだけ調子に乗らせるだけ乗らせて、それを頭から否定してやる。  
確かにジュカインのスピードや見切りを活かしても回避は難しい、  
けど！

「カイリユー、神速でジュカインを拾って来て！」

『リユー！』

カシスの指示、カイリユーは十万ボルトを振り切ってから目にも止まらぬ加速でジュカインをその場から救い出してそのまま上空にカイリユーは逃れた。さっすがカシス！  
良い動きしてくれるぜ！

「次行くよ〜！必殺雷落とし〜！」

『リユー！』

カシスのおどけた指示を受けてカイリユーもカシスと同じ表情で雷を雨を降らせるように落とす。それはゲンガーとギャラドスの周りに落ちる。それは動きを止められていたギャラドスに直撃してギャラドスはダウンした。それはゲンガーにも直撃してゲンガーは痺れたみたいだ。よっしゃあ！

ゲンガーにはオレが引導を渡してやるぜ！

「カイリユー、頼むぜ！」

『リユー！』

オレがそう言うとかイリユーはジュカインを抱える手を大きく振りかぶって……

『ジュ、ジュプー！？』

ジュカインを投げた。

「行けえ！弾丸ジュカインだ！」

ジュカインは痺れたゲンガーに向けて突撃していく。さっきまで歎

いていたジユカインは体制を立て直し体を一直線にしてゲンガーに向かっていく。それでも食らえ！

「リーフブレード！」

『ジユプー！』

『ケ、ケケケ……』

落下の勢い、それにカイリユウの投擲によってついた勢い、それと以前より断絶上がったリーフブレードのキレ、そんな3つの要素が重なって相性の悪さなんて関係無いぜ！  
見事にゲンガーはダウン、これで2つ目！

「く……まさかここまで簡単に……」

そうロツカが悔しそうに言う。当然だ！

「あの時は船内だったからね。ちよつと遠慮してたんだ」

そうカシスが言う。オレ達のバトルはフィールドが広くて始めて本領が発揮出来る訳だからな。あの時のオレ達は本来の半分程度しか発揮出来て無かったって訳だ！

「く……だがまだブーバーンとエレキブルがいる。それを倒すまで終わると思うなよ……」

……確かにな……油断はまだまだ出来ないな……

「それにお前達の戦力は分断されている状態！そこが隙だ！」

……おいおい……そんな単純な戦力計算で勝てると思ってるのか？

「行け、ブーバーン、エレキブル！ ジュカインを潰せ！」

『ブー！』

『エレー！』

ブーバーンが拳に炎を纏わせたままジュカインに突撃してくる。それを支援する如くジュカインの周りに雷を放つ。その雷は拡散しているため、上空にいるカイリユーにも牽制の効果を与える。だが、それぐらいの動きなんて！

「ジュカイン、草結びだ！」

『ジュプ！』

『ブベ！？』

ジュカインは草結びを使うとブーバーンの足元に草が巻き付くように現れ、それによりブーバーンは転倒し、道が開いた、広域に放たれる雷の穴がそれにより開ける。行くぜ！

「そのこのルートだ！ 電光石火！」

『ジュプウ！』

ジュカインは転倒しているブーバーンをまたいでエレキブルに接近した。一撃だ……一撃で仕留めてやる！

「0 距離攻撃だ行け！」

『ジユウプウ！』

『エレー！？』

ジユカインはエレキブルの顔面をわしづかみにした。そしてそのままエナジーボールを放つ。するとエレキブルは悲鳴を上げながら大きくのけ反る。しかしそれだけじゅまだ攻撃は終わってないぜ！

『ジユプ！』

ジユカインは手を離して体を回転させてエレキブルに尻尾を叩き付けてバランスを崩させる。こいつで止めだ！

「リーフストームだ！」

『ジユープウ！』

『エラアアア！』

その重い一撃でエレキブルが弾き飛ばされた。これにより完全にエレキブルが目を回している。へへ、楽勝楽勝！

「く……だが、ブーバーンを忘れてるぞ！」

！？

気がついたらブーバーンがジユカインの背後に回っていた。しまった……調子に乗りすぎてブーバーンが復帰してきたのに気付かなか

ったなんて……マズイ!

「大文字で終わりに……」

と思ったけど全然マズクなかったな!

「ハイ、冗談はそこまで」

『リュ』

カシスの軽い台詞に続いてカイリユーがエレキブルに自らの翼を叩き付けた。さあ、これで終わりにするぜ!

「ジユカイン、爆裂パンチで打ち上げる!」

『ジユープ!』

ジユカインは自らの拳をブーバーンの顎にたたき付けて上空に打ち上げた。今だ!

「頼むぜ!カシス、カイリユー!」

『ジユープ!』

オレの台詞に続きジユカインもカシスとカイリユーに想いを託すように叫ぶ

「お任せ!カイリユー、流星群!」

『リュー!』

カシスが叫ぶと打ち上げられたブーバーンの目の前に高密度のエネルギーが出現した。勿論そんな技を回避する術は無い。これで終わりだ！

『ブバー！？』

ブーバーンに見事にそれは直撃した。そのままブーバーンは地面に落下した。完全にブーバーンは目を回している。よし！

「く……ブーバーンまで……だが、少し遅かったみたいだな……」

！？

周りからくる威圧感、オレは辺りを見回す。あちゃ……いつの間にか囲まれてるし……

「ハハハ、これで俺の勝ちだな、バレットにオレンジ。俺に盾突いた事を後悔するがいい！」

……コイツ……ムカつくな……

「ジユカイン、みねうちだ！」

オレがそう指示を出すとジユカインは自分の腕に付いている葉っぱを使い、ロツカを気絶させた。さて……コイツを黙らせたのはいいがこの軍勢をどうするかだ……

「カズマ、ここでいつものアレやっちゃおう？」

そうカシスがオレに言う。アレを使うのか……この場合仕方ないよ



な……いつの間にかロケット団員達はそれぞれのポケモンを出している。一気に薙ぎ払うぜ！

「うおおお！リーフサイクロン！」

「いつけ〜、彗星群！」

『ジュープア！』

『リュ〜イ！』

オレ達の叫びがこだました瞬間放たれる超強力は二つのエネルギー波、それにロケット団のポケモン達は巻き込まれ気を失っていく。そして瞬く間に一気に全滅してしまった。よっしゃ！

「強い……強すぎる！」

そう言いつつもロケット団員達は後ずさっていく。そりゃこれだけ実力差を見せ付けたんだからな！

「まだやるかよ！」

そうオレが調子に乗って挑発をする。さあ、どう出てくる？

「く……ロツカ様がやられてしまったてはもうダメだ！」

「ロツカ様は回収したんだろ？早く撤収するぞ！」

そんな会話が続く。ん？

あ！

い、いつの間にか最低野郎が回収されてやがる！

畜生逃がすか！

そいつにはオレは個人的な恨みがある直接殴ってやらないと気がすまないんだよ！

「撤収！」

っ！

そうノリノリでロケット団員が言うとか何かを地面に叩き付けた。するとそれから煙りが吹き出した。畜生！  
お馴染みの目くらましか！

「カイリユー、霧払いをお願い！」

『リュウ！』

カシスはそれに対して素早い対応をする。カイリユーは頷くと翼を振るって煙りを払った。よし、これで視界が……遅かったか……そう、そこにはもう人影一つ残っていない。なんて逃げ足の早い奴らなんだ

「逃がしちゃったね」

そう少しだけ残念そうにカシスが言う。

「ああ、それでもオレ達の役割は果たせたって」

「そうだね。やる事はちゃんとやったよ。わたし達は偉い！」

そうオレとカシスは会話を交わす。

「ジユカイン、お前も本当に良くやったな！」

「カイリユー、お疲れ！」

続けてそれぞれの相棒に労いの言葉をかけた。この劇的な勝利はコイツらがあつてこそだからな。するとジユカイン達は嬉しそうに頷く。それを確認するとさらに言葉を続ける

「もうちよつと無茶する事になるけどそんな時はよろしくな」

『ジユプ！』

そのオレの言葉に対し、ジユカインは親指を立てて返事をする。「任せろ！」って言ってるんだろつな。本当に頼むぜ。オレは少しでもジユカインを休ませるためにジユカインをボールに戻す。それはカシスも同じようでカイリユーを戻している

「それじゃカズマ、早くランを追いかけよつか！」

「ああ、この大金星、早く自慢してやろうぜ」

そんな会話を交わしてからラジオ塔の中に向かって走っていく。こつからが本番だ！  
覚悟してろよ！

カズマ&カシスVSロッカ ラウンド2 (後書き)

今日の投稿はここまでです

ケンカ?いいえこれがこの二人の普段通りです(前書き)

ふざけたタイトルですがイッキ編、ギャグが入っています

ケンカ？いいえこれがこの二人の普段通りです

現在オレ達は、かなり迂回してランさんが戦っている場所の丁度上の階を目指して歩いている。そうすれば上手く合流も出来るだろうし、万が一ランさんが4兄弟に追い詰められていても挟み打ちにするような形で強襲する事だって出来る。それに反対側のルートから進んでくるケンイチさん達とも合流ポイントとしても上等な場所だ。ここを落とせば戦いが一気に有利になるのは間違いないな……まあ、襲ってきたロケット団はまあ結構いたが、見た目はハデだが、威力はそれほど……って技で気絶させてやった。陽動の目的を達成するには一番効果的な戦術だよな

「ユースケさん」

「どうしたんだい、コノハ？」

突然そう言うコノハにユースケさんは振り向く。コノハの奴、一体どうしたんだ？

「ランさんの事、ホントによかったんですか？ワタシ達はほっといて助けに行けばよかったんじゃないですか？」

そうコノハが意見を言う。確かにコノハの言う通りだよな……といつか、体を張ってランさんをハイドロポンプから守るようなユースケさんが助けに行かなかったのが信じられないな……

「確かにそうかもしれないね……」

「ならなんで……」

その言葉に肯定するユースケさんにそれに追い撃ちをかけようとするコノハ、ユースケさんはどう答えるつもりだ？

「言ったよ？信じてるからって……」

……

「それに……ランの事も大切だけど……僕もランもポケモン達の仕事が好きだから……多分、今助けに行ったら怒られるんじゃないかな？」「今はあたしの事よりポケモン達を守ってあげて！」「って」

あ……確かになんか分かるかもしれない……

「そういう訳だよ。納得してくれた？」

「はい！」

ユースケさんの言葉にそうコノハが頷いた。やっぱりユースケさん達ってスゲエ！

改めてそう感じたオレであった。

「ここは？」

オレが扉を開いて先に進むとそこは広いやけに奥行きのあるスペースになっていた。いくつもデスクがある事を考えるとここは会議室みたいだな……とにかく、この部屋を通れば目標の地点である、ラオンさんが戦っているフロアの丁度一つ上のフロアにつく事が出来る。例のパンフにそう印されているから間違いないハズだ。ここまでくるのに随分とロケット団の連中をノックアウトしてきたからケンイチさんの方へ送る戦力を考慮するともうさほど戦力は残ってないと思う。

「ここを抜ければ……合流地点！」

ゴールドがそう引き締まったな表情で言う。決戦は近いか……

「でも、そんな簡単に通してくれないみたいだよ」

！

ユースケさんがそう言うと突然周囲からプレッシャーを感じるようになった。くっ……最初から待ち伏せされていたのか！

「よく気付いたな！だが、これ以上、我らも貴様らを進める訳にはいかんだ！」



一人の男が現れ、そう言うとゾロゾロとその他の連中も湧いて出てくる。ざっと15人か……コイツはマズインじゃないか……

「あなた達に構っている暇は無いわ……直ぐに決着をつけさせて貰うわ……」

そう静かに言うユウコの口調はいつもより荒い、やっぱり感情つてのは簡単に整理出来るもんじゃないよな……とにかく……

「派手に行かせて貰うぜ！下っ端に構ってる余裕なんてねえしな！」

『パオーン！』

『サムッ！』

そうやってオレはドンファンとハツサムを出した。

「そうよね！下っ端になんて用は無いわよね！」

『ヒヒインー！』

『ウソオ！』

オレに続き、ポニータとウソツキーをコノハは繰り出す。やる気は満々みたいだな！

「だからって容赦はしませんよ！」

『バクウ!』

『リユウ〜!』

「覚悟してもらおうから……」

『モ〜!』

『ガルウウウ!』

そうゴールドとユウコが続き、バクフーン、ハクリュー、ミルタンクにガーディが登場した。な、なんかユウコが怖い……

「それじゃ、行こっか!」

『リザアア!』

『ルリイ!』

そうユースケさんがリザードンとマリルリを出しながら行った。さあ……行くぞ!

「ドンファン、捨て身タックル! ハッサムはアイアンヘッドだ!」

すでにポケモンを登場させているロケット団達に向かってハッサム達は向かっていく!

一気に終わらせてやるぜ!

ふう……大体片付いたか……15人のロケット団のポケモン達は殆どノックアウトされていた。辺りを見回すと色々大変な事になっている。沢山あった机も悲惨な有様だし……煙幕とかで曇って大変な事になってるし……とにかくやり過ぎた感がして堪らない……弁償は……うん、するのはロケット団だな。まずこんな事するあいつらが悪いんだ！

オレ達は不可抗力だから別に悪くない！

「大体終わったみたいですね」

「ああ、そうだな」

ゴールドの言葉にオレはそう返した。大体のロケット団員も既に撃破し、ユースケさんとユウコは気を失っているソイツらを縄で縛りあげている。とにかく大きく消耗したけど、なんとかかなったな……

「よく頑張ったな、お前ら！」

『パオオンー！』

『サムッ!』

そんなオレの言葉に嬉しそうに鳴くドンファンと、そっぽを向くハッサム、相変わらず素直じゃない奴だなあ……

「ちょ、調子に乗るのはそこまでだ!この餓鬼共!」

!?

そう聞こえた方向にオレとゴールドは振り向いた。その声の主と思われるロケット団はコノハの首を絞めようとしていた! どういう事だよコイツは!とにかく……こういう場合は!

「コイツの命が惜しかったら今すぐて……」

「行け!ドンファン!ハッサム!突撃だ!」

「ちょっ!イツキイ!?!」

ロケット団の言葉を遮るようにオレが叫ぶとコノハも声を上げた。えい!!

「黙れ偽物!コノハがそう簡単に捕まってたまるかよ!」

そう高々と言うオレ、うん……オレ良いこと言ってる!

「イヤイヤ、コイツ本物だって!」よっしゃあ!馬鹿そんな餓鬼に一撃かましてやったぞ!」ってハッターかけたらお前を探しだして隙が出来たところを捕まえたんだって!」

な……なんだと！

「コノハ……お前……」

「な、何よ……！」

若干コノハの顔が赤いのは気のせいだろうか？

多分若干絞まっていて苦しいんだろうな……とにかく……

「コノハ！お前は鬼か！負傷したオレにトドメをさそうだなんて！」

「ちょっと！どうしてそうなるのよ……！」

「ひ、否定出来ないところが怖いな……」

そう言うオレの言葉にコノハ（？）が突っ掛かって来て、ゴールドが適切なツツコミを入れた。

「わ、私はアンタの事が心配で……」

し、心配だと……

「それは本当か？」

「そつよ……悪い!?」

……決まりだな！

「行くぞ！ドンファン！突撃だ！」

「イツキイイ！」

オレがそう叫ぶと、コノハ(?)の悲鳴が上がり、そこに向かってドンファンが突撃していく。

「ちょ……だから本物だつて！」

「えい！黙れ！いつまでも見破られた作戦に固執するとは馬鹿な奴め！本物のコノハが素直に心配したなんて言うかよ！」

「くそお！」

ロケット団の男は自分の身を守るべくコノハ(?)を突き飛ばし、素早くボールをとろうとする。させるかよ！

「氷のつぶてだ！」

『パオーン！』

「あがつ！」

高速で放たれた氷のつぶてはロケット団員の腹部に直撃した。それを受けてロケット団員は気を失う。よっしゃあ！  
後は……

「ゴールド！注意しろ！コイツ変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

そうオレが叫ぶとコノハ(?)が立ち上がり近づいてくるア、アレ……これって……

「イツキ……覚悟は出来てる？」

……この身震いがするような威圧感……まさか……まさか！

「ゴールド！前言撤回！コイツ本物のコノハだ！」

「アンタは一度地獄に堕ちなさい！」

この後オレはどうなったかは想像しやすいと思う……

うう、酷い目にあつた……コノハの折檻を受けたオレはなんとか合流ポイントに到着することが出来た。これもユースケさんとゴールドがコノハをなだめてくれたお陰だろう。助けてくれなかつたユウコはオレは鬼だと思う。とにかく反対からケンイチさん達と合流するまで待機だな。出来ればランさんとも合流したいし……

「あ、来ました！」

ゴールドがそんな声を上げる。お、来た来た。ケンイチさんにユウイチ、サクラ、アキト、それととさか頭。うん？

とさか頭だつて！

「シルバー……」

「お前はあのとさか頭！」

「君はあの時の……」

一斉にゴールド、オレ、ユースケさんの順で言う。なんでコイツが一緒に来るんだよ……とさか頭事シルバー、とにかくムカつくやつでさ、オレはコイツが正直あまり好きじゃない。

「ユースケ、知り合いか？」

「まあね……キキヨウの時に軽く……」

ふうん……ユースケさんもコイツと会ったことがあるのか……あんまり良い顔つきじゃないからなんか嫌味でも言われたんだろうな。

「何でお前がここにいんだよ！？」

「ちょっと、イツキ落ち着きなさい」

どうしてもけんか腰になってしまつ口調をコノハがなだめるように言う。落ち着けて言われてもな……

「ロケット団を叩き潰すため、これじゃ不服か？」

「……」



「不服だ！」って言ってやりたいがここじゃそんな事やってる場合じゃないのは分かっている。とにかくオレはコイツの前の態度が気に入らない、今すぐにも土下座させてやりたいけど、今は我慢だ。

「この先はカードキーが無いと一切進めない、ましてやそのカードキーは一つを除いてロケット団が隠し持っているがな」

「やけに詳しいね……」

と、ゴールドが言う。コイツは毎度のことながら色々知りすぎだ。本当に何者か分からない。

「ふん、カントーのシオンでラジオ塔を使った事件があり、更に今のロケット団の復活宣言を行うには一番簡単なのはラジオ塔のジャックだ。だから、予め調べておいたのさ。まあ、正解だったようだがな」

シルバーはまるで今回の事を見透かしていたかのようにそう言い切った。確かにそうだな。冷静に考えればそうなるよな。ん？とさか頭は急に懐からカードキーを取り出すと、ケンイチさんに投げ渡した。

「どういっつもりだ？」

オレの言いたい事を代弁するようにケンイチさんが言った。本当に何のつもりだよ。

「見た通りだ、開けるのはお前らに任せる」

そう言つととさか頭はゴールドを見る。この馬鹿野郎まさか！

「……………分かったよ。皆さん、先に行つてもらえますか？」

「ゴールド！？」

驚きの声を張り上げるユウコ。やっぱりかよ。ならオレのやることは一つだ！

「おい、この状況でお前ら戦うのかよ！？」

アキトがこの二人に警告を入れるように言う。でもそれじゃこの二人は止めれないよな

「すみません、でも……………僕らの因縁にも決着をいい加減着けよう、そう決めたんです」

「ゴールド……………」

あきらめたようにアキトがそうつぶやく。それに打って変わつてとんがり頭はニヤリと口元を笑わせる。

「流石だな、それでこそ俺と因縁を張る敵だ」

「言つとくけど、疲弊し過ぎたくないから早々に終わらせるよ」

「その言葉、綺麗に返してやるよ」

互いが互いに威圧感を放つ。お互いにやる気満々だな。

「ここは先へ行こう！」

「ゴールド、シルバー、必ず来い！」

「はい」

「言われるまでもない」

ケンイチさんの言葉に余裕そうに返す二人。本当に余裕かは怪しいけどな。おつと言付けぐらいしとかないと。

「サクラ、オレも遅れて行くからそこら辺よろしく」

もうすでに次の階に向かって行ったユースケさん達、そこでオレは一番近くにいたサクラを捕まえて言付けを頼むコイツらを護る必要があるからな。それが年長者の義務だ。

「分かったよ。ユースケさんに伝えておくよ」

「ああ、ワリイな、面倒かけて」

そうサクラにわびの言葉を入れる。本当に迷惑かける訳だからな。

「気にしないよ、それとちゃんと戻って来て、イツキが戻ってこないとコノハちゃんが悲しんじゃうよ？」

コノハが？

まあパートナーだし当然か。それにサクラが言うことだから、間違った事じゃないだろうし……

「分かってるって。ちゃんと戻るさ」

そう言つとサクラは力強くうなずいてから階段を上っていく。気を付けるよ……

「という訳で、お前らが思う存分やって疲れたのを狙われたら面倒だから残るぜ、オレは」

「……………勝手にしろ」

オレの言葉にとさか頭が吐き捨てる。相変わらずいけすかない奴だ。そして、両者が距離を置く。

「じゃ行かせてもらつぞ」

「手加減はしないから」

ライバル同士のバトルが始まるのか……………とにかく守ってやるさ。お前らの先輩としてな

ケンカ? いいえこれがこの二人の普段通りです(後書き)

次回に続く

「警告したはずだ。二度とかかわるなとな」(前書き)

今回はラン視点。ロケット4兄弟を撃破したランは……

「警告したはずだ。二度とかかわるなとな」

「まさか…… 4人揃って風林火山と呼ばれる我々……をこつとも簡単に……」

なんとかロケット4兄弟を倒したあたしはみんなと合流するために歩き出そうとしているとそんな言葉が聞こえた。だから風林火山つて異名はなんかまちがってるよ。

「く……こつなつたら力尽くで捕まえるぞ」

「そつだ！所詮は小娘、ポケモンの攻撃に注意すれば……」

「かかるぞ！」

「うおおおおお！」

えつと……そんな会話の後にあたしに向かって掛かってくる。凄いバラバラになつて向かってくるからピカチュウだけじゃ対処が間に合わない。これって大ピンチだよね……

「悲鳴を上げてもいいんだぞ！」

そう4人の内1人がいる。うん……いつもならユースケの名前を叫ぶと思う……でも、あたしの頼りになる仲間は、ピカチュウだけじゃないんだよ？

『ランはやらせないよ！』

あたしはバレないようにボールのスイッチを押すと赤と白を貴重としたドラゴンが姿を現した。それと同時にロケット4兄弟の人達は何かの力を受けたように動きを止める。

「ありがとう、ラティアス」

『ううん、これぐらい当たり前だよ』

あたしの言葉にドラゴン、ラティアスはそう返してくれた。ラティアスがしたこと、それはサイコネシス、サイコネシスで動きをみんなまとめて縛っちゃったみたい。でも普通ならみんなまとめてなんて事は難しいんだろうけど……ラティアスの力はやっぱり凄いよ

「それじゃラティアス、その人達を動かさないでね。ピカチュウ、電磁波！」

『チュウウウウ！』

「ぐばばばばばー！」

動かない4兄弟に向かってピカチュウは1人ずつ電磁波を当てている。それにより悲鳴が聞こえてくるけど、今は少しイライラしてるから……

「2人共、ご苦労様」

『ピカピカア』

『たいした事じゃないよ』



そうあたしの言葉に2人は返してくれた。それにあたしは頷いた後、ボールに戻した。ゆっくり休んでね。

「さ、ユースケ達を追いかけないと！」

そうあたしは独り言を呟いた後、あたしは次の階に向かう階段に向かおうとする。その時だった、後ろから、つまり下の階から足音が聞こえてくる。え……まだ……来るの？

あたしは振り向いていつでもボールを取り出せるように構える。何が……来るの……？

「ふう……まだユースケ達と合流出来ないのか？」

「キミがあまり調子に乗りすぎるからだよ」

あ……この緊張感のカケラも無いやり取りは！

「悪かったって、でも景気良くやり返せたからなあ、調子に乗るって！」

「やっぱりそうよね……わたしもある程度調子に乗ったから人の事……あーラン！」

カズマくとカシスが階段から姿を現した。それにしても今の会話……調子に乗ってたって……何をやってたんだろう……すごい気になるな……

「カシス、カズマくん、大丈夫？」

「おう、オレ達にかかればあんなのちょちょいのちょいだって！」

あたしの質問にカズマくんがそう答えてくれた。

「まあそのせいで余計な事をやって余計に時間を食うハメになっちゃったんだけどね」

「お前はいつも一言余計だって！」

そのやり取りは普段と一切変わらない。うん、大丈夫みたいだね

「ユースケ達は？」

「あたしはここで足止め、ユースケ達は先に行ってるよ」

カズマくんの質問にあたしはそう答える。それ以外説明の仕方なんて無いよね

「ふ〜ん、なら早く追いかけないとね。早くしないとユースケがランの事が心配で力を発揮出来なくなっちゃうからね」

「カ、カシス！」

カシスの台詞に焦ってあたしは声を荒げる。もお！いつもからかうんだから！

「やっぱりランを弄るのって楽しいなあ」

そう言うカシスの表情はいつもと変わらない。もお……いつかカシスにからかわれ無いようになりたいよ……

「それじゃ早く行くぞ。カシスの言う事もあるしな」

そうカズマくんが早く行くように後押しするけど……その言い方……  
…やっぱりカシスとカズマくんはあたしに対して最強コンビだよ

「ホラホラ、顔真っ赤にしてないで行くよ」

そう言うカシス達は先にさっさと歩いていく。あゝ

「ちょっと待ってよ！」

あたしは焦って二人についていく。いつか2人の言葉に動揺しない日は来るのかな……こないだろうなあ……

あたし達は階段を駆け上がっていると上の階から何か激しい音が聞こえてくる。上で誰かが戦ってるのかな？

「急ごう、みんなが心配だ」

そうカズマくんがあたし達を急がせるように促した。そして一気に階段を抜けて次のフロアにたどり着く。そこで戦っている光景が見えた。戦ってるのはイツキさんとゴールドくん、それと赤い髪の毛の男の子、あの子が噂のシルバーくんかな？

アブソルとブーバー、エレブーにエーフィ、それだけのポケモンが戦っている。一見イツキくん達が有利に戦っているように見えるけど、戦力の差は歴然、いつかは押し切られちゃうよ！

ここは一気に！

「カシス！」

「分かってるって！カイリユー、頼むよ！」

「行くよ、ラプラス！」

『リユー！』

『ラプー！』

あたしがカシスに声をかけるとカシスが分かっているって言うようにカイリユーを出す。それに見習ってあたしもラプラスをボールから出した。さあ……行くよ！

「何！4兄弟様がやられたのか！」

「構う事は無い！所詮は子供、これだけの差は覆せない！」

「奴らも纏めてやるぞ！」

そうロケット団員が口々に言い、何匹かのポケモン達がこっちに向かってくる。

「みんな、しっかりと防御しててよ！カイリユー、地震！グラグラつてやつちゃって！」

『リユー！』

「ちよっ！カシスさ……おわっ！」

カシスの指示を聞いて、イッキくんが焦って突っ込みを入れようとする。でも構わずにカイリユーは地震を発動して地面を揺らす。もちろんラプラスやアブソル、エーフィ達は守るを発動してダメージは無い。それに対してロケット団のポケモン達は結構ダメージを受けているみたいでフラフラとしている。

「カ、カシスさん、無茶し過ぎですよ！」

「た、建物を倒壊させるつもりか！」

ゴールドくとシルバーくんの的確な突っ込み。確かにジムでもない室内で地震を使うのはかなり危険な事、だけど……それから人に与える心理……それが今の地震の狙い

「あ、あいつら危険だ！迷いもなく地震を使ったぞ！目の前のガキ

共は後だ。まずは全員でカイリユーを狙え！」

「おー！」

そんな会話が聞こえたと思うとさっきの地震でダウンしなかった全てのポケモン達がこっちに向かってくる。今！

「これで決めるよ！ラプラス、吹雪！」

「まとめて吹っ飛ばしちやえ！彗星郡！」

『ラーパー！』

『リユー！』

沢山のポケモンが迫りくる中、あたしとカシスの指示が走り、ラプラスが吹雪を、カイリユーが流星群の規模を更に大きくした技、彗星郡を放った。その攻撃を受けたポケモン達は全て完全にダウンしていた。うん、上手くいった！

「やったね、カシス」

「イエーイ、ナイスコンビネーション！」

そう言いながらあたしとカシスはハイタッチを決めた。あたし達の完全勝利だよ！

「く………退却だ！」

そう言いながらも多くのロケット団は逃げて行くこととする。でもね

……彼は逃がしてくれないよ？

「ジユカイン、電光石火からみねうちだ！」

『ジユプ！』

いつの間にかカズマくんのボールから現れていたジユカインは電光石火を発動して高速でロケット団員達にみねうちを決めていく。それを受けてどンドン気を失っていくロケット団員達、そして最後の一人もみねうちで気絶させてしまった。

「大丈夫か、イツキ、ゴールド、それと……」

「シルバーだ」

カズマくんの言葉にシルバーくんがそう名乗った。やっぱりシルバーくんだったんだ。

「はい、オレ達なら大丈夫です」

そうイツキくんが答えてくれる。そ、よかった

「ランさん、さっきはありがとうございます」

ゴールドくんが突然あたしに対してそう言うってくる。ユウコちゃんのことね？

「仲直り出来た？」

「はい」

あたしの質問にゴールドくんは嬉しそうに頷いた。そっか、それならよかったよ。

「それで、みんなは？」

カシスがみんなに尋ねる。すると……

「もう先に行っている。上から物音が聞こえることから上の階にいるだろう」

と、シルバークンが答えてくれた。ユースケ、大丈夫かな？

「早く行こう、早くユースケ達に加勢してやらないと大変だろうしな」

「そうツスね、早く行きましょう！」

カズマくんの言葉にイツキくんが頷く。その通りだね。早く行かなくちや！

「ほら、ランもゴールドも早く早く！ユースケもユウコモランとゴールドの事が心配で力を発揮できなくなっちゃうぞ！」

「カ、カシス！」

「カシスさん！」

カシスの言葉にあたしとゴールド君は怒鳴る。ゴールドくんは少し赤くなってるって事はあたしも赤くなってるのかな……



「何をやっている、早く行くぞ」

そう言いながらもシルバーくんはカズマくんの後ろを追って行く。あたしも赤くなってる場合じゃないよね。あたしもそれを追うように次の階に向かって走り出した。

下の回でバトルをしだしたゴールド達を置いて僕達は上の階に来た。またこの階でロケット団達と遭遇、これまた結構な戦力、中には偉そうなマフラーをつけてるものもいる。全く……どこにこれだけの人員がいるんだろう……いい加減にうんざりしてきたよ……

「中々やるね……」

そう言うのはニドキングのトレーナーである、え〜と、リオンって言ったっけ？

とにかくそんな人である。

「まあ、オレとユースケのコンビが負ける要素は無いから当然だな」  
そうケンイチが返した。明らかに相手を挑発する台詞、ケ、ケンイチ、そんな事言ったらリオンさんはともかく……

「舐めやがってえ！潰してやるわ！確実に潰す！」

こ、怖いって……そういう狂暴な女の人、ルキさんが力強く叫ぶ。そんな人と僕とケンイチは対峙している。戦っているのは僕はストライクでケンイチはドードリオ、そしてルキはバシャーモだ。2対2のダブルバトル、本当なら僕のリザードンとケンイチのウインデイの炎のダブル攻撃で一気に突破したいところだけど、生憎ここは室内、こんなところでそんな事したら火事になってしまう。だからここは自重している。だけど、勝てない相手じゃない！

「ストライク、電光石火で一気にバシャーモに接近するんだ！」

『トライク！』

ストライクは電光石火を発動して素早い身のこなしでバシャーモに接近する。

「舐めるなあ！バシャーモ、ブレイズキックウ！」

！

ルキさんが怖い声を上げるとバシャーモがとんでもないスピードで接近してきた。これのスピードの源は分かっている。ブレイズキックで地面を蹴る事による超加速、一気に接近を許してしまい、ストライクに必殺の一撃を叩き込もうとしてくる。そうはいかない！

「ストライク、燕返し！」

『ストライク！』

ストライクは体を捻るようにしてその蹴りによる攻撃を軽快に回避してバシャーモの背後に回った。今だ！

「ストライク、辻切……」

「させない、ニドキング、毒突き」

『ニドオー！』

リオンさんが僕より早く指示を出した。それに従いニドキングはストライクに迫ってくる。意外に素早い動きで普通に攻撃してたら回避が間に合わないね……なら！

「ストライク、とんぼ返りを使うんだ！」

『ストー！』

ストライクは僕の指示を聞いて、バシャーモに体当たりをする。そしてそのまま僕のボールに戻ってきた。とんぼ返り、相手に一撃を決めた後、自分のボールに戻る技だ。本来なら威力は低いけど、ストライクの特徴『テクニシャン』によって威力は向上している。効果はいまひとつでも与えられるダメージはそこまでは低くない！ それを受けてバシャーモは体制を崩している。今だ！

「ケンイチ！」

「任せる！ドードリオ、ドリル嘴だ」

『ギューイイ！』

ケンイチの指示でドードリオはバシャーモに突撃、そして見事、ドリル嘴の一撃をバシャーモに与えた。当然、格闘タイプを持つ、バシャーモには効果は抜群、さっきのトンぼ返りのダメージの蓄積があつたせいも、バシャーモはダウンした。けどまだ！

「ニドキング、まずはドードリオを潰そう、メガトンパンチ！」

『ニドオー！』

リオさんの指示で倒れたバシャーモの背後からニドキングがドリオに襲い掛かってきた。流石はロケット団の幹部だ。ありとあらゆる状況で攻め込んでくる。でも！

「まだまだだな。そこだ、バトンタッチ！」

『ギューイ！』

迫りくるニドキングの拳をドードリオは光の玉になってボールに戻る事で回避した。そしてケンイチは素早く別のボールを取り出してニドキングの目の前に投げた。そこに姿を表したのは……

『ガラアア』

骨を頭に被り、片手に骨を持ったポケモン、ガラガラだった。ガラガラはケンイチの手持ちでも屈指のパワーファイターだ。ガラガラも以前よりたくましく見えるのは見間違いない。そしてガラガ

ラはケンイチの指示無しで骨を振りかぶった。

「ボーンラツシュだ！」

『ガラガラガラガラガラ！』

ケンイチの指示と全く同じタイミング、ガラガラは吠えながら骨を連続でニドキングを叩いていく。それによるダメージは大きいみたいでニドキングは怯んだ。凄いな。前に見た時とはまるで別人だよ。

「ガラガラ、まだまだ行くぞ！ニドキングの顎を狙え！」

『ガラア！』

『ニ、ニド………』

ケンイチとガラガラはニドキングに休む暇は与えない、怯んでいるニドキングの顎に骨を下から上向きにたたき付けた。それにより見事に体制を崩す。

「これで決めるぞ。ローブローストライク！」

『ガラアア！』

ケンイチの指示、それを聞いてガラガラはニドキングの額に骨を勢いよく叩き付けた。ローブローって相手の弱点の事だよ……確か額って基本的に弱点だけど……それをピンポイントに狙うって事だよ。もしかしてポケモンの額に骨を叩きつける技？

それって結構酷い技じゃない？

きゆうしよに当たりやすい骨こん棒ってどこ？

『二、二ド……』

見事に急所に入ったみたいだ。余りに大きなダメージのために二ドキングは仰向けに転倒した。

「く……二ドキング……」

今の一撃で二ドキングは気を失ったみたいだ。まあ、ある意味外道みたいな攻撃だから当然といえば当然か……

「まさかこれほど出来るトレーナーだったとはな……超A級ターゲツトつてのも領けるな」

「畜生！この餓鬼共め……憎い、憎い！」

リオンさん、ルキさんの順番でそう言う。だからルキさん怖いって……

「ユースケさん、こっちは終わりましたよ」

そう言いながらユウイチ達が僕達の元へ歩み寄ってくる。ユウイチ、アキト、コノハ、サクラ、そしてユウコの5人にはこの2人の部下と戦ってもらっていた。僕は辺りを見回す。痺れてる人や眠っている人、それからなんか骨抜きにされたような顔の人までいる。な、何をやってるんだか……

「お、俺の部下を絶対に潰す……潰してやるう」

そういうルキさんは本当に怖い、こついうのを狂気に満ちた性悪女

って言うんだらうな……

「ルキ、落ち着いて……ここは歩が悪いし引かせてもらおうよ」

え……こんな状況をどうやって逃げるつもりなんだ……そんな事出来る訳……

「キルリア！」

そう言うとりオンさんはキルリアを出してきた。キルリアはサイコキネシスでさつきまで倒したたっぱの人達を引き寄せた。な、何をするつもりだ……まさか、その人達を盾にして逃げるつもりなのか？

「知ってるかい？テレポートって技はレベルがあがると正確なナビにより座標が分かっている場所には確実に複数人と共に飛ぶ事が出来るんだよ」

そんなの知ってるけど……まさか！

「だれか、挑発を使えるポケモンを！早く」

僕より早くそれに気付いたケンイチはそう叫ぶ、僕は焦ってユンゲラーのボールに手をかける。

「もう遅いさ、テレポートだ！」

そうりオンさんが指示を出すと一瞬の内にさつきまでいたロケット団全てが消えていた。逃がしちゃったか……ま、いつか

「みんな、次に進もうか、今ので大分時間を食っちゃったよ。早く行かないと」

「そうですね、早く進みましょう」

そうコノハが僕の言葉に賛同するように言う。う、うん……イッキといえる時とはなんかギャップがあるな……イッキの前なら普段の自分を出せるって奴？

なんか素直じゃないコノハらしいかもしれない……

「それじゃ……」

「ユースケ！」

僕が行こうと続けようとしたのがその言葉に切られる。この声！

「ラン、みんな！」

僕はその声、ランの声に振り向くとラン、カズマ、カシス、イツキ、ゴールド、シルバーが走ってきた。心配なんてしてなかったけど、みんな元気そうでよかったよ。とにかく僕が聞きたいのは……

「バトルはどうだったの？」

僕はゴールドに尋ねる。まあ、あんな強引にバトルを始めるんだらね気になるよ。ゴールドはそれに首を横に振る。まあだいたい察しはついたよ

「ロケット団の介入で中断です」



やっぱりそうだったみたいだね。まあ、当然といえば当然だけどね  
「さて、じゃ行くか。この先にカードキーが必要な場所があったはずだ」

そう言って歩こうとするシルバー。だけど……

「シルバー、聞きたい事がある」

いつもとは違う雰囲気ですilverを止めて話し始めるゴールド。一体どうしたんだ？

「君のポケモン、何で電波の影響を受けていないの？」

あ……そういえば……僕達にはエンテイの加護ってのがかかっているから何ともない、でもそんな事言ったらイツキやゴールド達だつて……

「確かに……そうだよな」

「うん、確かにシルバー君のポケモンは普通にバトルしていたしね」  
イツキとランがその言葉に頷く。そこら辺疑問だからね……

「ユースケさん。ここに来る前にもしかしてエンテイに会いませんでしたか？」

突然イツキが僕に尋ねてくる。なんでそれを……

「会ったよ……でも何でエンテイだと？」

「僕とユウコはスイクン、イツキさん達はライコウにそれぞれ会いました。ならユースケさん達はエンテイじゃないかと」

「確かにそこまで知ってたら俺達がエンテイに会ったんじゃないかと思っても仕方ないな」

ゴルドの言葉に納得したようケンイチが返した。それなら僕も納得さ。

「分かった。種明かしをしてやる。俺のポケモンが平気なそのワケ……それはコイツにある」

観念？

したのかシルバーが懐からなにやら光を放っている黄土色のような色をした小石を取り出し語り始める。なんだろう、あの光、何か温かい感じがする

「コレは……？」

「コイツは俺が師匠と別れる際に貰ったもんだ。師匠は『いつかお前を導くキーアイテムになるからお守りとして取っておけ』とか言っただけじゃなかった。まあ、師匠の言った事はあながち間違いじゃなかったがな。さらにシオンのラジオ塔事件の時、俺は偶然にもカントーにいて襲われた。その時この石が輝き、ポケモンが大人しくなった。この石にはこういう電波を受け付けられない力があるらしい……はつきりしてんのはそれくらいか」

ゴルドの質問にシルバーが答えてくれる。不思議な石だね……それよりもその石を渡した師匠って何者なんだ？

「またお前の師匠かよ……」

イツキはシルバーの話聞き、そう言った。なにがあったかは知らないけどイツキはその師匠が嫌いみたいだね……

「でも……その師匠はまるでシルバーがこの事件に関わる事を始めから知っていたみたい……」

「た、確かにそんな感じもするな」

ユウコの言葉に同意するアキト。2人の言うとおりだ。本当に何者なんだろう？

「さあ、お喋りはここまでだ。さっさと行くぞ」

シルバーが先頭になるように歩きだし、それを追うように僕も歩き出す。シルバー、本当に色々つかみどころがないな……本当に分からない……一体どんな人生を彼は送ってきたんだろう……僕には想像できないものなんだろうな……

なんとか、カードキーを差し込む事で開くであろう扉の前に到達した。

「頼むぞ」

「ああ、分かってる」

シルバーの言葉でケンイチが頷く。にしても荒い口調だね……彼にしては丁寧に言ってるつもりだろうけどなんか荒く聞こえるな。カードキーが認証し、扉が開く。ここからはより慎重に進む必要があるね。

「警告したはずだ。二度と関わるなとな」

!?

突然響く声。はじめて聴く声だ。それに関わるなって？

「この声……ジネルバ！」

ジネルバだつて!?

ゴールドが叫んだ名前、それはいつかイツキ達が言っていたロケツト団のナンバー1の名前……ゴールドに名前を呼ばれてかタキシードにマントと気取った格好の男の人が現れた。彼がジネルバか……

「久しぶりだな……」

そう言う声で分かる威圧感、この人は強いつて事を知るのに十分すぎるものだ。この人とは戦うしかない……僕はそう覚悟を決めた。

「警告したはずだ。二度とかかわるなとな」(後書き)

次回に続く

「絶対に守りたいから戦うんだ！」（前書き）

再び現れたジネルバ、それに対してユースケ達は……

「絶対に守りたいから戦うんだ！」

僕達はジネルバって名前のロケット団の幹部と対峙していた。放っている威圧感からかなりの使い手という事が分かる。あの人……今までの相手とは一味も二味も違うぞ……油断したら一気にやられる！

「でやがったなジネルバ！この前の借りを返してやるぜ！行くぜ、ユウイチ、サクラ、コノハ、ゴールド、ユウコさん、シルバー！」

……確かに今のイツキ達なら束になってかかれば勝てる相手だ。だけど、大きく消耗するのも必須だ。だけど、ここから先に何があるか分からない以上、ここで無駄な消耗をする訳にはいかない！

「ケンイチ、イツキ達の事任せていいかな？」

「任せとけよ。お前のお守りでその役には慣れてるからな」

……好き勝手言ってくれるよ。でも、任せたよ。

「ユースケさん、まさか一人で戦うつもりじゃ……」

「そんな無茶よ！ユースケさんはアイツと戦ってないからそんな事を言えるんですよ！」

ゴールドの言葉に続きコノハがそう力強く言う。そのセリフから察するに彼に痛い目に合わされたみたいだね。でもさ……

「大丈夫だって。コイツはオレのライバルだぜ？そう簡単にくたばるかよ」



「そ〜そ〜、それにランを置いてユースケが一人勝手に死ぬことは無いもんね〜」

「カ、カシス！」

そう言うカズマにカシス、それにそのセリフに焦って反論しようとして声を荒げるラン。僕も若干頬が熱くなっているけど、それは気にしない。

「大丈夫……ですよね？」

そういうユウコの口調もどことなく不安そうだ。酷い負け方をしたから当然か……

「うん、大丈夫だよ。だから先に行って」

「分かりました！ユースケさん、気をつけてくださいよ！」

「ユースケ、絶対に元気に追いかけてきてね。怪我とかもしちゃイヤだよ」

「うん、分かってる。約束するよ」

僕はそういうイッキとランの言葉に言葉に頷く。それからみんなは階段に向かって走り出した。そっちも気を付けなよ……

「逃がすか！ジバコイル、ロックオン！」

ジネルバさんがそう指示を下すとジバコイルは、その目でケンイチ

達を凝視する。ロックオン、絶対に次の攻撃を命中させる技って事は次の技は想像がつく、そうはいかない！

「ユンゲラー！」

『分かってるよ！』

僕は素早くボールを取り出しジバコイルの正面に出した。そしてユンゲラーは愉快そうに手を叩いてリズムを刻む。間に合ったよね？

「電磁砲発射！」

ジネルバさんは力強く発射の指示を出した。

『ジジ？』

「どうしたジバコイル？」

ジネルバさんの疑問の声、ふう………なんとか間に合ったみたいだね

『アンコール、相手を拡乱するのはオレの定石だぜ？』

自慢気にジネルバさんに向かってユンゲラーが言った。アンコール、一番最後に使った技しか使えなくなる技だ。ロックオンに固定出来てよかったよ。しばらくジバコイルはまともに戦闘にならないね。

「やるなユースケ、相変わらずいい判断してる」

そうケンイチが褒めるように言う。でも………

「いいから早く行ってよ！この人相手にみんなを気にしながらのバトルなんてできないよ」

今はみんなを行かせる事が最優先だ。殆どこれから先の事を任せっきりにするのはあまり頂けないけど、今これが僕のすべき事だから！とにかく今は集中しないとやられちゃうな。

「ふん、ソイツに追撃を許したら許さんからな」

「頼むぞユースケ」

ぶつきら坊に言うシルバーと信頼した目を向けて言うケンイチ、それから一同は次の階に向かっていく。やっと思ってくれたね……

「油断ならん男みたいだな。君は……自慢のジバコイルを攻撃技も無しで無力化するとはな」

「こつ見えてもポケモンリーグで準優勝してるからね」

ロックオン以外使えなくなったジバコイルをボールに戻しているジネルバさんに対して僕は余裕の表情を見せる。少しぐらい余裕を見せとかないとこの人の強いプレッシャーに負けてしまう。

「余裕か……だが、いつまで余裕でいられるかな？」

！？

何か来るのか！

『ぐ……』

な……そんなジネルバさんのセリフの後にユンゲラーはバランスを崩した。ジバコイルは攻撃出来ないし一体何が……まさか！  
見えない何かがあるのか？  
なら！

「今の耐えたか、ならばもう一度だ！」

「そうはいかない！ユンゲラー、サイココーティングシャワー！」

『でええい！』

ユンゲラーはその場からレポートで姿を消した。そして僕の丁度真上ぐらいに現れる。そして雄叫びを揚げつつもサイコッターを回転をかけながら投げてそれにサイケ光線を連射する。するとサイケ光線のエネルギーが拡散して僕とジネルバさんの間に雨のように降り注ぐ。無差別にそれも不規則に降り注いだ。

『ゲエ……』

見えた！

今、確かに見たぞ！

虹色の雨を受けて苦しむ緑色のカメレオンみたいなポケモン、カクレオンの姿が！

姿を消して襲撃してきたのはカクレオンだったんだ！

「見えたよねユンゲラー、シャドーボール！」

「くっ……水の波動だ！」

『食らえ！』

『グエエ!』

僕とジネルバさんが指示を出すと同時にユンゲラーは黒球を、カクレオンが水色の球を投げた。それは激突して相殺され、小規模の爆発が発生した。今だ!

一気に攻める!

「ユンゲラー、ホールディングリフレクター!」

『よっしやあ!』

爆発に怯んで動きを止めているカクレオンに対してユンゲラーは動きを拘束するように幾つもの細かいリフレクターが出現した。この隙に!

「そこにシャドーボール!」

『うおお!』

「そうはさせん!メガヤンマ!」

『ギー』

カクレオンに攻撃を仕掛けようとしているユンゲラーにたいして、ジネルバさんはメガヤンマを出して攻撃させる。2対1の有利な展開に持ち込むつもり!?  
でも!

「電光石火!」

「テレポートでかわすんだ！」

メガヤンマの超加速による攻撃をユンゲラーはテレポートで回避した。そしてメガヤンマの背後に出現してメガヤンマにしがみついた。今だ！

「身代わりを使うんだ！」

『任せろ！』

「な、なんだと！」

ユンゲラーはメガヤンマから身代わりを使ってから離れる。それをした意味は何か……

「く、メガヤンマ！振り払え！」

『ギー！』

そう、身代わりの人形がしっかりとメガヤンマに貼りついていて、それが邪魔して思ったように飛行が出来なくなるんだ！

これでメガヤンマのスピードは封じた。一気に決める！

「く………カクレオン！」

いつの間にかリフレクターから抜け出して姿を消していたカクレオンに対してジネルバさんが指示を出した。く………対応が間に合わない！

なら！

「ユンゲラー、バリアだ！」

『うおおー！』

『くええ！』

ユンゲラーが叫ぶとすぐに鳴き声が聞こえ、そう思うとユンゲラーは体制を崩していた。く……サイココーディングシャワーは多分もう通じない……なら！

「もう一撃だ！」

「今だ！ユンゲラー、もう一度バリア、更にミラクルアイ！」

『見えた！そこだあ！』

ユンゲラーは振り向いてガードの体制を取った。しかしその攻撃に押されバランスを崩す。でも何か様子がおかしい……もしかして！

『へへ、捕まえたぜ。この陰湿カメレオン！』

やっぱり！

カクレオンを捕まえたのか！  
なら……一気に決める！

「捕まった！？メガヤンマ、身代わりは後でいい、今はカクレオンを援護しろ！」

『ギョー！』

そして通常より断然遅いスピードでメガヤンマが迫ってくる。行くよ！

「ユンゲラー、パワートリックだ！カクレオンをメガヤンマに向けて投げつけるんだ！」

『このー！』

ユンゲラーは見えないカクレオンをそのままメガヤンマに向けて両手で放り投げた。それをメガヤンマは身代わりのせいで回避が間に合わない。というかもともと見えてなかったカクレオンをかわすのは難しいよね。どうやらぶつかったみたいでメガヤンマはバランスを崩した。そして今の拍子でカクレオンが姿を現した。これで決めて見せる！

「ユンゲラー、ホールディングリフレクター！」

『おう！終わりにしてやる！』

ユンゲラーがそう言い、手をカクレオンとメガヤンマに向けてかざすとさつきカクレオンを拘束していたものと同じリフレクターが今度は2匹まとめて拘束する。そしてユンゲラーの右手にエネルギーがたまり始めそれは集束して高密度のエネルギーの塊となった。そしてそれは姿を大きくした。

「く……ここまでやるとは……教える、お前は何のため危険を覚悟してまでロケット団と戦っているんだ！その力の源を答える！」

突然そう言い出すジネルバさん、戦う理由……それは……



「僕が戦う理由……そんなの簡単だよ。僕にとって大切なもの、ありふれた日常を守るために戦ってるんだ！」

「何!？」

「僕の周りに友達がいて、好きな女の子がいて、家族がいて、そしてポケモンがいる……そんな日常を壊されたくないから、絶対に守りたいから戦うんだ! ユンゲラー!」

「おう!」

ユンゲラーは頷くと拳の光は一層輝きを増し、ユンゲラーの体中を包み込むように輝き始める。これっていつもの!

「サイコマグナム! いっけえええ!」

「終わりだああ!」

ユンゲラーはレポートしてカクレオン達の目の前に姿を現す。そしてその右手のエネルギーをメガヤンマに叩き込んだ。放たれたサイコマグナムはまるで光の矢だ。高い守るを貫く貫通力と1点に集中させることで得ることのできるその威力。まさに必殺の一撃、これがユンゲラーと僕の切り札だよ!

それにより、カクレオンとメガヤンマを、拘束していたリフレクタールごと、まとめて吹っ飛ばした。2匹はそのまま壁に激突し、そこで目を回した。よし!

「よっしゃあ、やったなユースケ!」

そうユンゲラーは歓喜の声を上げた。しかし僕たちは身構えたまま構えを解かない。この人が相手だ。何が起こるかなんて僕にはわからないからね。それにしても……これが本当にこの人の実力なのか？ イツキとゴールド達の5人を破った本人なのか？ それにしては……弱い印象が……

「君は危険だと分かっている……いや、勝てない相手だと分かっているても戦うというのか？」

突然ジネルバさんがそんな質問をしてくる。さっきの続きかな？ それに対して僕は黙って頷く。相手がどんな強大な相手でも、絶対に負けないつもりだ。この戦いに勝って大切なもの達を守るのがトレーナーとしての僕の義務だと思うから……うん？ どうしたんだ？

ジネルバさん、笑みをうかべたまま目なんて閉じちゃって……

「何がおかしいんですか？」

「いや、おかしいんじゃない……。君のような子供にそんな勇気が出せて、大人の俺がこの様じゃ情けないと感じたのさ。それに……決意も固めたよ」

「決意？」

僕は警戒を解かずにそれを尋ねる。それって一体……

「フライゴン、出番だ」

『ギギーッ』

ジネルバさんのボールからフライゴンが姿を現した。まだ……戦うつもりなのか？

ユンゲラーもそれに警戒したのか、いつでも飛びだせる体制をとった

「確か……君の名前はユースケだったな」

「……」

僕はそれに黙って頷く。急に何なんだ？

「君には話しておこう。これから言う事は嘘偽りは全く無い。その代わりに1つだけ頼みがある。何、そんなにヤバい事じゃないさ……まあ君達次第ともいう事ではあるがね」

「何ですか？その頼みは」

僕はジネルバさんにそう尋ねる。一体何の頼み何だ？

頼むって事は変な事じゃないと思うけど……

「君達と共にロケット団を倒したい、ただそれだけだ」

「！？」

な、なんだって！

正直驚きを隠せないよ……それにイツキ達を捕まえようとした事があるらしいから正直あんまり信用する気にはなれないんだよね……

「俺は元々こんな組織に未練も何もないし、ハナから潰す気だった。だが……怯えていたんだろ？な、それが今まで出来なかった。今更のようだが、しかし、黙って指をくわえて君達の活躍を見たくもな

い。俺にも出来る事はある。それが今の言葉さ」

……迷うなあ……僕が受け入れたとしてもイツキ達が受け入れるかって言ったら微妙なんだよね……酷い目に会わされてるし、エキセントリックな性格だし……

「いいか。まずは今のロケット団のボスについて……サカキは一切今回の件では無関係だ」

な、なんだって……この事件にはサカキさんは関与してないだって！ロケット団の総帥サカキさん、前の事件では戦った強敵だ。あの人がこの事件には関与してないって……でも

「でも、イツキ達はロケット4兄弟との戦いで……」

サカキさんの名前を聞いている。だから今回の事件も関与してると思っただけだな……

「あれは元々旧ロケット団のジョウト支部。そしてあの部屋は元ボスのサカキの部屋。ロケット4兄弟は旧ロケット団にもいたからな、多分その影響だろう」

なるほどね……つまり……

「今のロケット団のボスは全くの別人って事ですね……」

「その通り。そして、もう1つの事は君達にとって大事な事。君達の仲間は間違いなく展望台に向かうはずだ。ここからは展望台まで何も無いからな」

「その展望台に何かが？」

うっ……なんだろう？

いやな感じがする……背筋が凍るような冷たくて嫌な感覚……これ  
って前にも……確か、ランが病気になつた時に……

「展望台には罨が張られている。君達全員を間違いなくボスは殺そ  
うとするはずだ。100%な」

「なっ……！？」

！？

驚きのあまり声にならない声をあげてしまつ。そ、そんな事つて！

「だから早く展望台に向かわないと大変な事になる。だが今の現状  
から言つて、ポケギアの電話機能も封じられているから正攻法では  
間に合わないだろう……しかもこの辺りになると電波の発信源も近  
い……」

っ……なら！

「なら、ラティオスのテレパシーで！」

僕はすぐさまラティオスのボールを取り出す。頼むよ……

「よし、それで間に合えば万々歳だが……」

焦るようにジネルバさんが言う。本当に間に合つててよ……

「ラティオス、ラティアスに今どこにいるのか聞いてくれないかい

「？」

『分かったよ』

それから暫く返事が返ってこなくなる。その間に轟音、どつやらラジオ塔の壁をジネルバさんが壊したみたいだ。

『展望台で……完全にロケット団達に包囲されている……』

返ってきた絶望的なラティオスの返事だけ……

「そんな……！」

「ならばエレベーターも止まったはず……。ユースケ、空を飛べるポケモンはいるか？」

「はい、います！出番だよリザードン！！」

『リザア！』

僕はジネルバさんの言葉に頷きながらユンゲラーを素早くボールに戻し、リザードンを出す。まだ、みんなやられた訳じゃない！今から行けばもしかしたら！

僕はすぐさまリザードンの背中に乗るそれからジネルバさんの指で案内の案内にしたがって破壊された壁からフライゴンに続いて外に出る。

「いいか！展望台まで飛ばすぞ！！」

「はい！！」

そんなの……あたりまえだよ！

「フライゴン、フルスピードだ！」

『ギギーッ！』

そんなジネルバさんのの指示、僕達も！

「ジネルバさん、僕が先行します！リザードン、テールバーナー！」

『リザア！！』

僕の指示を聞きリザードンは尻尾の炎をバーナーの用に噴射し超加速を行った。それにより一気にフライゴンを追い抜いて展望台に向かって行く。

『ユースケ、囚われのお姫様の救出としゃれこもつぜ！』

ユンゲラーが僕にそんなテレパシーを送ってくる。いつもなら顔を真っ赤にして反論するセリフだけど、今は

「そうだね！ラン、みんな今行くよ！」

僕はそう叫ぶ、絶対に絶対を守るんだ！

僕の大切なものを！

「絶対に守りたいから戦うんだ！」（後書き）

次回に続く



観（前書き）

今回はイツキ視点、展望台へと進んでいくイツキ達は……

ユースケさんがジネルバを引き受けてくれている隙にオレ達はラジ  
才塔を駆け登っていた。

「この先、展望台以外は何もないな……」

パンフレットを見ながら、ケンイチさんがそう言った。展望台ねえ  
……多分ジネルバが守ってたぐらいだから奴らにとつて重要地点だ  
とは思うんだが……にしてもユースケさんが心配だな。あの人の事  
だからケロツとした顔ど帰ってくるとは思うけど……怒りの湖でも  
そうだったし……あ、なんか思い出したらムカついてきたぞ……全  
く、あの時のオレ達の苦労は本当になんだったんだ!?

「ユースケさん、大丈夫かな……」

突然ゴールドがそう呟いた。コイツも同じような事を考えてたんだ  
な。まあ心境は全く違うけど……

「大丈夫だよ。ユースケは絶対に負けないから」

そうランさんがゴールドの肩を叩きながら言った。その表情から本  
当にユースケさんの事を強く信じているのが伺える。

「ですよね」

にしてもランさんの言葉には説得力があるよな……あんなに心配し  
てたゴールドがこう安心するなんて……やっぱり恋人の台詞っての  
はこんなに重みがあるものなのか!?

「そうそう、ユースケはランの元へ絶対に来るもんね。」

「カ、カシス!!」

やはりというかなんと言うか……この手の話題にとんでもない素早さで食いつくカシスさん、そして早速ランさんを弄り、顔を瞬く間に真っ赤にしてしまう。お、恐ろしい……これが歴戦の勇姿、カシスさんの実力なのか……ここで少しであるが、全員から笑みが漏れた。ムードメーカーとしての能力もカシスさんは高いみたいだ。

「さつきから全くロケット団員が現れない……変だろ、コレは」

笑いが収まるとカズマさんがそう言う。この人がなんかこんな知的な台詞を言うとなんか似合わない。そういえばそうだよな、さつきからロケット団の口の字も出てきてないな。だけどそれってこういう事だよな？

「ジネルバは強いですからね、多分大丈夫だと思ってるんじゃないですか？」

オレはその疑問にそう返す。イヤ、あいつの実力おかしいでしょ！少し自重するべきだって！

「そのジネルバ、そんなに強いのか？」

そうユウイチがオレに尋ねてくる。んなもん……

「ああ……オレ、コノハ、アキト、ゴールド、ユウコさんの5人をあつという間に倒しちまったんだよ」

「しかも、あの強さで手加減って言ってたしな」

オレの言葉に捕捉を加えるようにアキトが言う。

「5対1であつという間……凄く強いんでしょうね……」

そう言うサクラは少し不安気だ。またユースケさん一人に任せられたからユースケさんの事が不安になるよな……

「だから、一人でジネルバと戦うのは危ないって私達は……」

ユウコがそう言うとなんとなく不安が沸いてくる。そうだよな……やっぱりオレも残るべきだったかな……

「バカか。アイツは俺が認めた数少ないトレーナーだ……信条はともかくとして腕は本物だ。簡単に潰されてたまるか、そんなに柔じやないのはお前らも分かつてるだろ」

そう突然トサカ頭が言い出す。コイツが人を認めるなんてな

「シルバー……」

ゴールドがシルバーの言葉に呆気に取られるようにそう返す。コイツも驚いたんだろうな

「そうだよな！シルバーくんの言う通りだよ、ユースケは簡単に負けたりはしないよ！必ず勝ってあたし達の元へ来てくれるよ！」

トサカ頭に続くようにランさんが力一杯主張する。うん、ランさんにそう主張されたら返せないな。ケンイチさん達だってうんうんって頷いてるし……こうなったらユースケさんを信じるだけだな

それから暫く、オレ達はエレベーターの中にいた。展望台へはエレベーターを使わないといけないからな。展望台に重要な何かがあるらしいが……それを拝ませてもらおうぜ！

<展望台に到着しました>

エレベーターのアナウンスが聞こえてすぐに扉が開く。オレ達は警戒しながらもエレベーターから降りて展望台のフロアに足を踏み込む……そして最後にサクラがエレベーターを降りた瞬間だった！

「なっ!?!」

思わずオレは声にならない言葉を上げる。突然、エレベーターの扉が閉まり、辺りに煙りが撒かれる。それをなるべく吸わないようにオレは腕で口を覆うようにする。な、なんだってんだよ！

「エレベーターへ避難するんだ！」

ケンイチさんがそう叫び、それに反応したユウイチがエレベーターの開閉スイッチを押す。

「げっ……マジかよ……」

とユウイチが言う。エレベーターに反応は無い。ようは……

「まさか畏だったとはな……迂濶だった」

シルバーが忌ま忌ましげに舌打ちをしながら言った。そう、畏にはめられちまったんだ……そして、煙が晴れるとオレ達は無数のロケット団に囲まれていた。10とか20だったらよかつただけけどな……100人以上いるぜ……コイツは……

「へへへ……一網打尽だぜ」

四方八方から感じる殺気。

しかも、オレ達全員の目の前にはスピアーの針やラッタの鋭い牙、といったやばいもんがオレ達に突き付けられていた。じよ、冗談じゃないぜ……

「中々掻き回してくれたみたいだがここまでだな……」

そう言うロケット団員の男、畜生……ここまで絶対絶命って感じた事は無いぜ……どうする！

「なあ、おっさん達、子供を倒すためだけにこんなに酷い畏を貼るか？普通よ……」

そうカズマさんが相手を挑発するように言う。おいおい……やめてくれよ……煽らないでくれ……

「普通にやって勝てないからこうしている!」

「計略を張り巡らせても勝てないからこうしている!」

……正論……正論だけど情けなすぎるぞ!

「ねえ、キミ達、こんなにして凄く熱くなかったか?」

そうカシスさんが少し哀れむように言う。まあ無理矢理詰め込んだみたいな感じだからな……こりゃ熱いに決まってるよな。むさくて暑苦しくて……

「そうだな……って、本当にお前ら追い詰められた人間の取る態度かそれは!」

そう言うロケット団員が逆に焦ってるようにも見える。正直オレもかなり焦ってるんだけどな……コノハもユウコもサクラもかなり怖がってる様子だ。ユウイチだっていつもの余裕そうな表情じゃないし、ゴールドもとさか頭、アキトも焦ってるように見える。それに対してケンイチさん、カズマさんは勿論、カシスさんもランさんまでいつも通りの表情だ。し、心臓に毛でも生えてるのか……それともそんな余裕の表情を見せられるぐらいユースケさんを信じているのか?

「さあな、だけど一つだけ教えてやる。さっきの「ここまで」って言葉は間違いだ」

！？

な、なんだって！

ケンイチさんのその言葉にロケット団達だけでなく、ケンイチさん達以外のみんなが驚きの表情を見せる。この万事休すの状況でどうするつもりだ！

「ふん、目の前にラッタの牙があって何が出来る。動く事も出来ないだろ」

た、確かに……ケンイチさんの言う事はハツタリか？

「動く必要なんてないさ……オレには頼りになる電腦戦士っていう伏兵がいるんだからな」

電腦戦士？

伏兵？

一体それってどういう……

！？

そう考えている間に突然ケンイチさんのポケギアから何か飛び出した。そして広域に炎や氷、電撃を連続で放ち始めた。これって……トリアアタックか？

でもトリアアタックは今の3つのエネルギーを一点に集中して放つ技だし……それにあの赤色と青色のアヒルみたいな奴……あれは……ポケモンなのか？

「ポリゴン2だと！」

「ああ、こいつはコンピュータ機器に入る能力がある。だから念のためにポケギアの中に忍ばせておいたのさ」



ロケット団員の驚きの声にケンイチさんが説明する。電腦戦士に伏兵、一気に謎が解決したぜ！

そうしている間にも余りに突然過ぎる不意打ちに何もすることがなく倒れていくよし、助かった！

これでポケモンが出せる！

「いい不意打ちだ……だがこの数、覆せるか！」

そ、そうだけど……それぐらい覆してやらあ！

ピンチにピンチ、それがオレのポリシーだ！

「上等よ！やってやるうじやない！」

「やられた分はやり返すわ……」

そう言うコノハとユウコは本当に怖い、普段は正反対だけど、どこか似てるんだな……てかさっきまで怯えてなかったかお前ら……

「流石だな、危機的状況をここまでなんとかするとはな」

「まあ、さっきよりマシだけどさ……」

そういつとさか頭とゴールド、やっぱり多少は弱気なのは間違いないさそうだな。で、どうしてやるうか、オーダイルとひと暴れしてしてやるうか？

それともブースターの火力で薙ぎ払ってやるうか？

全員が思い思いボールを取り出して構える。そしてボールを投げようとした瞬間！

「待つてみんな……彼が来てくれたよ……」

突然ランさんがそんな事を言い出す。一体どうしたんだ？  
まさか……まさか！

「みんな、伏せて！」

そんなランさんの叫び、迷わずオレはその場に伏せる。その瞬間！

「リザードン、メガトンキックだ！行っけええ！」

『リザアアア！』

「わあああ！？」

そんな叫び声とほうこうが響いた。それと同時に展望台の窓が割れて中にリザードンが侵入してくる。その割れた破片がいくつかオレにかかった。ふう……伏せてよかった。その時にロケット団員が何人かが吹っ飛んだ。それにしても「来てくれたよ」って……しかもそれで本当に来るなんて……こういうのを以心伝心って言うのか？

「ユースケ！」

「ラン、お待たせ」

そう言いながらユースケさんはリザードンの背中から下りて構えるにしても危うい場所に登場したな。見事にロケット団員に囲まれるぞ。さすがにユースケさんでもあれはまずいんじゃないか？

「やっと来たわね王子様、お姫様と協力してひとつよろしくね」

「カ、カシス！」

「え、あ……お、お姫様って……」

そうカシスさんが二人をからかうように言う。それに動揺して赤くする。それにどうしても笑みが漏れる。緊張が解れてしまう。やっぱりお約束だよな……

「うっ……ラン、とにかくくやるよ！」

「ま、任せて！」

相変わらず動揺しながら二人は構えてモンスターボールを投げる。それぞれ白と青を貴重としたポケモンと白と赤を貴重としたそっくりなポケモンが姿を表した、あれはラティオスとラティアスか！怒りの湖の時にユースケさん達の仲間になったポケモンだよな。何をするつもりだ？

「行くよ……」

『念力全快！ラティアス！』

『うん、お兄ちゃん！』

「「テレポート！」」

ユースケさんとランさんが同時に叫ぶとラティオスとラティアスの目が青色に輝く。するとオレ達を囲んでいたロケット団が全員消えた。な、何が起きたんだ？

テレポトって事はどこかに飛ばしたのか？  
それってどこに……

「ねえラティアス、どこにテレポトさせたの？」

ランさんがラティアスに尋ねる。やっぱり気になるよな……

『え？さっきエレベーター止められちゃったでしょ？そこに押し込んでやったよ』

ひ、酷い……とんでもない数いたよな。それをあのエレベーターにか……確か20人程度余裕を持って乗れるらしいけど……100人なんて大丈夫なのか……あんまり大丈夫じゃないだろうなあ

「助かりました、ユースケさん」

何もなくなつた展望台。そこゴールドがユースケさんに声を掛けた。ホントに感謝だぜ……あれだけの数とやりあつてたら本当にどうなつてたか分からないからな

「うん、まあ今回はランとラティオスとラティアスの力があつてこそだつただけだね」

『愛の力の間違いじゃないか？』

『あ、言えてるかもな』

そんなテレパシーが聞こえてくる。後者はラティオスで前者は……

「「ユンゲラー！ラティオス！」」

『冗談冗談』

それを聞いた瞬間にユースケさんとランさんが顔を真っ赤にしながら吠え、最初のテレパシーはそう陽気に返した。どうやら最初のテレパシーはユンゲラーのものだったんだな。今のやり取りで思ったんだけどユースケさん達も苦労してんだな……

「全く……それにあの人が教えてくれたから間に合ったんだ」

「あの人？誰ですか？」

サクラがユースケさんに尋ねてユースケさんが答えようとした瞬間だった。

「俺だ」

突然、背後からした声に反応する一同。そこにいたのはジネルバとフライゴン。で、出やがったな！

「「ジネルバ！！」」

思わずオレとコノハ、アキトにゴールド、ユウコはほえる。ほほ事件反射みたいな感じだな

「ユースケ、間に合って良かったな」

「はい、ありがとうございました。おかげでみんな無事ですみました」

はい？

「ありがとうございます」？

「おかげで」？

ええと……意味がわからないぞ？

ともかく！

「「ええ！！？」」

どうやらコノ八達も考える事は同じだったらしい。そけへ静かにこちらに近寄るジネルバ。オレは思わず身構え、いつでも戦えるように構える。

「すまなかった」

へ？

突然頭を下げたジネルバ、それってどういう事って言われたらそう言う事なんだろうけど意味が分からない。だけどオレやコノ八、ゴルドにユウコ、アキトは警戒は緩めない。あれだけ酷い目にあわされた訳だから当然だぜ……

「怒りの湖ではすまなかった。あの時の操り人形発言は完全に嘘だ。連れていく気はあったんだがな……」

「お前の言う事は信じられるかよ！」

ジネルバの言葉にオレは間髪入れずに返した。そんなの信じられるかよ！

「嘘だと思っただけから聞いてくれ。あの時、本来ならば怒りの湖へ行くのは俺ではなく、ナンバー2のアネガランだった。そして、恐らくお前達5人はその時に殺されていただろう」

「ッ！!?」

な……なんだと……殺されていたと……オレ達の反応を楽しんでいるようにも見えない……冗談だろ？

「君達を死なせるわけにはいなくて、俺はボスに頼み込んで、アネガランの代わりに怒りの湖へ向かった。だが、ボスは既に俺が裏切る気で見抜いていたんだろうか、監視の下っぱを数人同行させた。あの時、リヨウマに戦わせたのがその下っぱだ。そして、俺はリヨウマがうまくいように下っぱを倒す時を見計らっていたが、俺が苦戦してはいけなかったから、仕方なくジバコイルで君達のポケモンを戦闘不能にした……だが、それでも良かったからな。少しあいつで時間稼ぎをさせてもらったのさ」

「連れていく気と言ったが、それはどういう事だ？」

トサカ頭の質問にジネルバはすぐに答えた。

「もし、どうしても間に合わなければ君達をアジトへ連れていき、アジト自体を俺と一緒に壊してもらうつもりだった。いつでも……ロケット団を裏切れるように」

「ロケット団を裏切る!？」

驚きに満ちたアキトの言葉。オレだって驚きだぜ……

「ジネルバさんによると、イッキ達がチヨウジで聞いたサカキさんの名前はチヨウジの基地が前のロケット団の基地だったらいいんだ。それにサカキさんは今回無関係だと言い切ってる」

そうユースケさんが補則するように言う。旧ロケット団の基地が…  
…あの時叩き潰したのは旧ロケット団の基地だったんだな

「なあ、ジネルバさん」

突然、ケンイチさんがジネルバに尋ねる。どうしたんだ？

「なんだ？」

「アンタはボスを知ってるんだろ？それに今回の事件の目的を」

「……ああ。知ってるとも」

「なら、それを教えてほしい」

流石は作戦参謀のケンイチさんだ。重大な情報を確実に聞き出そうとする。ジネルバはそれに頷く。オレは……この男を信じていいのか？

ま、いいだろ……ここまで誠実にされちゃなんも言えないからな。

「……話してもいいが、ボスの名前はあまり口にしたくない……。ボスを……いや、姉さんを悪人のように呼びたくはないんだ」

「「姉さん!!?」「」

な……マジかよ……ジネルバの言葉が正しければ、今のロケット団のボスはジネルバの姉さんって事だよな……なんか話がまた複雑化してきたな……

「今回のロケット団の真の目的……それはジヨウトに伝わる伝説の



ポケモン、ルギアとホウオウを手中に収める事」

「ルギアと……」

「ホウオウ……」

そうランさんとゴールドが驚いたように言う。特にランさんに至っては自分の首に掛けていているキラキラ銀色に輝いている羽根を貴重としたペンダントを見ながら少し怪訝な顔をしている。それはユースケさんも同じみたく、ランさんの胸元にあるペンダントを見ながら怪訝な顔をしている。一体二人共どうしたんだ？それにゴールドとユウコもなんか物思いに老けってるし……にしてもホウオウとルギアだと！

なんて大それた事を考えてやがるんだ！

冗談じゃねえぜ！

<パリーン！>

うおっ！

突然そんな音がしたかと思うと窓が割れていてドンガラスに捕まっていたコート男の姿を現す。一体何者だ！

「アイツの言った話と違うようだが……まあいい」

ソイツはそう言うてから静かにその足を歩み寄らせる。なんだ……この威圧感……ただものじゃないぞ……そしてオレ達とある程度距離を取り、口を開く

「久しい顔が揃っているな。だが……一番は……」

そう言つてユースケさん達5人の顔を見ていく男。顔は隠れているので分からないが、コイツがヤバい奴つて事は分かった。

「やはりお前だな」

そう口にし、トサカ頭を見つめる。

「なっ………なんで、なんでこの人が………」

「………ここでこの男が登場するとはな………」

そう驚きの声を上げるカシスさんとケンイチさん、そして驚きを隠せないユースケさん達、知り合いなのか？

「ユースケ先輩、知ってるんですか？あの人を………」  
「そうアキトがユースケに尋ねる。すると………」

「忘れもしないさ！あの方は………」

なっ………そう言うユースケさんはかなり怖い、普段は凄く温厚なユースケさんがこうなるなんて………あの男………一体何者なんだ？

関（後書き）

続く！

「なんで今頃ここに来たんですか!？」 (前書き)

ユースケの目の前に現れた男の正体は!？

「なんで今頃ここに来たんですか!？」

突然現れたこの男性、僕は……この人の事は忘れもしない！  
僕は口を開く。

「なんで、なんで今頃ここに来たんですか!？あなたは!」

「……力を貸してやってくれと頼まれたから来ただけだ。それ以上の理由は無い」

「僕はあの事件であなたがやった事は忘れてはいません。それがどういっつもりですか!」

僕の口調はあまりに荒々しい。僕は……トレーナーとして、人としてこの人を認める事は出来ない

「……」

「ユースケさん、誰なんですかあの人は？」

そうイツキが僕に尋ねてくる。僕が口を開こうとした瞬間だった。

「奴の名……それは元ロケット団ボスのサカキだ」

「「!!!?!？」」

そうシルバーが言った。正体を知らないイツキやゴールド達は驚きの表情を浮かべる。なんで……なんでシルバーがこの人の名前を知ってるんだ？

僕にはそれが疑問で堪らない。サカキさんは観念したのか、帽子を外す。今の彼は無表情だ。正直、少し怖い何かを僕は感じる。

「な、なんで前のロケット団のボスがこんなところに……」

コノハが驚きに満ちた声をあげた。頼まれて来たって言うてたのをコノハは聞いて無かったのかな？

「なっ……」

！？

急にカズマがそんな声を上げる。それも当然かな……だってシルバーがサカキさんの胸ぐらを無理矢理掴んだだからさ。

「何で来た？」

「未来を変えるため、とでも言うっておこう」

シルバーの質問にサカキさんはそう答えた。未来を……変えるためだって？  
それってどういう……

「俺はあんたみたいなのは断固として認めない！勝手にロケット団なんかで大暴れしやがって……ふざけるな！」

どうしたんだ？

シルバーが怒ってる？

あのクールなシルバーが感情的になるなんて思っても無かったよ。

「なあ、もしかしたらこのサカキがシルバーの師匠なんじゃないの

か？」

「確かに今、サカキは未来を変えると言ったしな」

突然そうアキトが自分の考えを言う。その言葉にユウイチが頷いた。確かにその可能性は高いよね……

「あの人にシルバー君は……」

サクラが静かに言った。

正直この人ならが育てたんだったら、あんなポケモンを道具扱いするようになって無理は無い……ん？

え……でも確か前にゴールドの言ってた話じゃ……

「待つて。私は違うと思う」

「どついう事なのユウコちゃん？」

突然ユウコが反論の意見を言い、その言葉にランが食いつく。どうやらユウコも矛盾に気付いたみたいだね。

「チヨウジの戦いの際、シルバーは自分の師匠がイッキ達に似ていて腹が立つて言っていました。それに彼がロケット団に詳しいのは親近者がいるという事も」

……どうやらユウコの予想は僕の上を行ってみたいだね。僕が予想したのは師匠の話だけ、でもまさかそついう事だったとはね……

「シルバー、もしかしてサカキさんは……」

ゴードルの言葉を聞いてシルバーはサカキに視線を向けながらも、僕達みんなを見ながら口を開く。

「……………サカキは……………俺の親父だ。俺はロケット団ボスの血を引く唯一の人間なんだよ」

やっぱりそうだったんだ……………サカキさんはシルバーのお父さんか……………それなら合点がいく話もある。シルバーのどこか冷酷な性格、それが彼に似たつて事だね。シルバーのお父さんっていうのなら自分の子供を守るために戦うのか？  
それなら信頼が出来ない事は……………だけど、だけど！

「サカキさん、正直僕はあなたの事は嫌いですが今更信頼しろって言われても多分信用することは僕にはできません」

「そうだろうな、正直私も君の事が嫌いだ」

だろうね。一回この人の野望を叩き潰した訳だから僕の事が嫌いで  
も仕方ないさ

「でも今はそんな事言ってる場合じゃない事は僕にも分かります。手伝ってくれるなら勝手に手伝ってくれてもいいです」

そう僕は少し高圧的な態度でサカキさんに向かって言う。この人相  
手に弱気な態度を取る訳にはいかない！

「おい、ユースケ！」

カズマが気に入らない様子で言うけどここはそれを無視する。僕だ  
つて気に入らいけどさ……………さっき言ったようにそんな事を言ってる



場合じゃないんだ……

「ユースケ……」

ランが僕の表情を読み取ってか心配そうな口調で言う。正直今の僕の表情はかなり歪んでると思う。それだけ僕はこの人の事が嫌いだし、あの事件を起こした張本人をトレーナーとして、一人の人間として許す事が出来ない。正直この人の手を借りるのは気が進まない。だから僕は次の台詞を付け加える。これは……本気だ！

「だけど……あなたが少しでも妙な事をしたら僕は後ろからでもあなたを討ちます」

「ユースケ……」

今度はケンイチの声……流石に今回はかりは苛立ちを隠せないからね……本気で怒ってるよ

「それぐらいなら覚悟の上だ。気に入らない事があるなら自慢のユンゲラーのミュウツーを倒した一撃で私を討てばいい。その覚悟があるならな」

……僕にはその覚悟はあるのか？

正直分からないな……

「こんな奴の助けは借りる気はしない。第一、俺はお前を父親とは認めていないからな」

「……」

僕が覚悟があるか考えているとそうシルバーが言う。それに対してサカキさんは無言になる。やっぱり自分の息子にそんな事を言われたらシヨックなんだろうな……

「サカキさん、あなたは未来がどうの、と言っていましたよね？」

「そうだ」

「本来の未来を教えてもらえませんか？そして、あなたはシルバーの師匠の名も間違いなく知っている。それも教えて下さい」

そうゴールドがサカキさんに尋ねる。確かにそれは気になるね……

「前者の質問は答えよう。だが、後者の質問には答えられない。それはアイツに固く口止めされている。絶対に名を出すなとな」

……シルバーの師匠……本当に何者なんだ？

よほど自分の名前を知られたく無いように聞こえるね。それにわざわざサカキさんに頼まなくて自分で来ればいいのに

「アイツの本来言っていた未来だと私が救援に向かう事でお前達はここで遭遇する危機を脱する。もし駆け付けなければ、危機を自分で脱しても全員とはいかずないが、内数人はその命を落とすだろうと奴は予想していた。勿論、それはただの予想であって、アイツの知る未来は私が助けに入った未来で全員が生きる未来だ」

……まあ今回はこの人抜きでなんとかあった訳だが……そのシルバーの師匠って人物も随分不吉な予想をするんだな……

「何人かが死んでいたかもしれない……………」

「信じたくも無いな、その未来……………」

サカキさんの言葉にある種の恐怖を示すサクラとユウイチ。それは無理は無い事だよ……………僕だって、このうちの誰かが欠けるなんて考えたくもないよ……………

「最も私も始めはアイツの誘いを断った。だがアイツは私が行かねばならないと言い、折れなかった。結局こうやってのこのこと姿を現したという事だ」

……………だからそのシルバーの師匠自体が直接来れば済む話なのにどうして自分で来なかつたんだ……………そこまで予測出来たなら。このメンバーがサカキさんって人物を毛嫌いしているのを理解出来たハズだ！

「皆！地面に気を付けろ！！！！」

「え！？」

不意にジネルバさんが叫び、その瞬間に地面に揺れを感じる。その瞬間に床のタイルを破壊して姿を現す紫色のサソリを連想させられる姿のポケモン。その自慢の両爪は紫に光っていた。まさかあれって……………クロスポイズンの構えじゃ……………しかも、その標的になってるのって……………ゴールド！

「ドラピオンだと！？ギャラドス、頼む！」

ケンイチが焦ってモンスターボールを取り出し、ギャラドスを出した。ついにあの暴君が姿を現すのか……………それでもドラピオンの攻撃

には間に合わない。このままじゃ!?

ドラピオンの攻撃が入る瞬間にフライゴンの尻尾がクロスポイズンを受け止めていた。今のはアイアンテールか!

「大丈夫か?」

ジネルバさんがゴールドに尋ねるとゴールドは静かに頷いた。呆気に取られた表情で。だが、攻撃は終わらない、一旦ハサミを引いて今度はフライゴンに仕掛けようとする。しかし!

「ギヤラドス、しっぱを振ってやれ!」

ケンイチが余裕の表情でそう言う。って……流石にしっぱを振るじやまずいんじゃない……

『ガー!』

『ド……ドラ……』

……冗談だと言って欲しい……だ、だって!

ギヤラドスが急激にドラピオンに接近して尻尾を振るとドラピオンのハサミを弾いた上にもう一回振るとドラピオンの顔面に直撃して大幅に後退したんだよ!

そ、そんな冗談みたいな事って……ほら、みんな啞然としちゃってるしさてる……にしてもドラピオンだっけ?

こんな伏兵がいたとはね……

「いるんだろう? アネガラン、ネスト。姿を現したらどうだ!？」

「フフフフ……」

そうジネルバさんが言うところにある柱の影から姿を現す2人の男性女性。この人もロケット団の幹部か！

「お前はネスト……！そうか、全ての発端はお前か」

サカキさんが男性に向かって言った。発端って……どういう事だ？その、ネストって呼ばれた男性は髪の毛が青で茶の色をした瞳。白い服を来ていた。その胸の部分にはくつきりとRという赤い文字の刻まれたバッジが着けてある。どうみても幹部だね……

「お久しぶりです、サカキ様。しかしそこで対峙するという事は……非常に残念です」

「お前こそかつてのボスを捨てたくせによく言ってくれるな」

「いたし方ありませんでしたので、応急措置を取ったまで。以前のロケット団の比にならない強さを手に入れましたよ。かつてポケモンリーグでベスト4という成績を持ち、今もバトルの修練を重ねるナンバー1のジネルバ殿とナンバー2のアネガラン殿。そして、その彼らをも上回る強さを誇るボス。正直信じられませんよ。ここまで強さを増すなんてね！」

……ロケット団内部でも色々あったみたいだね……このネストっていう人は始めて見るな……僕達が戦ったのはいつもスバルさんだったけど……こんな人もいたのか……

「ポケモンリーグでベスト4を……」

イツキが呆気にとられる口調で口にした。それは驚くよね……正直

かなりの強敵だね……油断なんて出来た相手じゃないよ

「人の命を平気に狙えるまで墜ちたようだな、正直失望したぞアネガラン」

「兄様こそ姉様とアタシを捨てたくせに、偉そうな事を口にしないで貰いたいわね」

そう言う人物、アネガランさんは紫のドレスを身に纏い、髪の毛は茶で赤い瞳をしている。そんな事より……

「兄様!!?」

だって!

アネガランさんの言葉にまたもみんな驚愕する。今日何回目だろうか?

「ジネルバ、まさか……」

ユウイチがそう恐る恐るジネルバさんに尋ねる。ジネルバさんは静かに首を縦に振り、こう話した。

「アネガランは俺の妹。今のロケット団は俺達がトップ3を張っている。そして、ネストはボスに……いや姉さんにボスになるよう提案した張本人」

「あの人か!??」

僕は驚きながらもネストさんを見る。発端ってそういう事か……この人がいなければこんな事にはならなかったのに……

「残念だけど、兄様もそこのお邪魔達もここで抹殺するわ」

アネガランさんが冷徹に言い放ち、指を鳴らすと彼らの背後に突如として姿を一齐に現すロケット団員。また出てきた!? しかもこの人達って……

「なるほど……嵌められたか」

ジネルバさん平静を保ちながらも言う。正直焦ってるんだらうな……

「この人達ってまさか……」

ランも気付いたらしく、そう焦った表情で言う。やっぱり……

「さっきお前達が吹っ飛ばしたロケット団員を一齐に呼び戻した。いや、正確に言うならテレポート!」

「信じられないな……伝説のポケモンのラティオスとラティアスが2人で出来るあの業をどうやって!？」

ケンイチの言葉はもつともだよ。あれはラティオスとラティアスの高い念の力があってこそ出来た技、だからこそエレベーターに閉じ込める程正確でかつ強力なテレポートが出来たのに……まさか、より強力なエスパーの使い手がいるのか? とにかく今やるべき事は!

「ゆけ、ドサイドン」

そう言いながらサカキさんは、ボールからサイドンのようなポケモンを出す。サイドンに鎧をつけたようなポケモン……あれがドサイ

ドンか……まさかあのサイドンが進化していたなんてね

「私はこの者達の一掃に回る」

そう言うと、サカキさんとドサイドンがロケット団員達の前へ出た。そこでジネルバさんが全員を見て言った。

「みんな、すまないが俺はユースケとの戦いで傷ついたポケモンの治療に専念したい。今ネストが言ったように姉さんは俺以上の実力の持ち主だ。戦うならばベストの状態で挑みたい。わがままを押しつけてすまないが……」

「分かりました」

そう言ったのはゴールドだった。さっき事でジネルバさんをもう信賴しても大丈夫だって判断したんだろうね。

「治療が終わったら戦線に出てくれますよね？」

そう僕はジネルバさんに尋ねる。彼は首を縦に振り、「勿論」と言う。それ続けて忠告するように言う。

「ネストとアナガランは気を付ける。今までの幹部とは桁違いの腕の持ち主だ。特にアナガランは本気でトレーナーの命をも狙うだろう。さらには真の実力も相当なレベル。気を付けて戦ってくれ」

ジネルバさんの忠告に全員が頷いた。一瞬の油断が命取りか……あんまりそんなバトルはしたくないけど仕方ないか……

「よし、オレ達も行くぞ」



そうケンイチが号令を掛ける。どうするつもりだろう？

「オレはアネガランとかいっつのを相手にする」

ケンイチはそう言うとベルトからボールを取り出し不適な笑みを浮かべる。するとケンイチが続ける。

「イツキ、コノハ、ネストの方はお前らに任せるぞ」

「はい、あんな野郎ぶつとばしてやりますよ！」

「決まったらさっさと行くわよ！」

そうイツキとコノハが頷く。頼むよ……でこぼこコンビ……

「カズマ、カシス、アキト、シルバー、ユウイチ、サクラはサカキの加勢をしてくれ」

「分かりました。先輩！」

「ちっ……なんで俺があんな奴を……」

「サクラ、オレから離れるなよ！」

「ふう、ユウイチからそんな責任感がある台詞を聞けるなんて思わなかったよ」

そうそれぞれ言いながらもサカキさんを加勢するために走っていく。それからケンイチはウィンディを出してから指示を続ける。僕達は

……

「ユースケ、ランちゃん、お前らはピンチなところのフォローを頼むよ。ゴールドとユウコはジネルバさんの護衛を頼む」

そうケンイチが指示を出す。そんないい加減な指示、ケンイチらしく無いような気がする……そんな中ケンイチは僕とユウコを捕まえて自分の元へ引き寄せる。

「ユースケ、ユウコ、お前らはランちゃんとゴールドを守る事に集中しろ」

！  
それって……

「ランちゃんのペンダントの銀色の羽根、あれは本物だろ？」

「うん……多分ね……」

……確証はないけど多分あれは本物……渦巻き島は海の神様が住むと言われる場所、これを売ってくれたおじさんはそこで拾ったって言っていた。だから本物の確率が高い

「ユウコ、ゴールドはハウオウに関係する何かを持ってるよな？」

「はい……」

そのケンイチの質問にユウコが頷く。それにしてもどうしてそれをケンイチが？

「どうしてって顔だな。さっきの表情から察すれば分かるさ」

……そういえばわかりやすい表情を取った事があつたっけ？  
忘れてたよ。

「奴らの狙いはホウオウとルギアだ。多分それに関連するアイテムを奴らは狙うと思う」

確かに……

「オレの勘だとまだ伏兵がいる。それも極めて強力なテレポートを  
使える伏兵がな……」

だいたい話は読めたよ……

「それがゴールドとランさんを狙ってくるからしっかりと守れって  
事ですね」

そうユウコが言うとケンイチが頷いた。やっぱりそういう事か……

「そういう事だ……二人共、好きな奴をしっかりと守れよ」

「ケンイチ！」

「ケンイチさん！」

その台詞で僕とユウコは顔を赤くして怒鳴る。そうしてる間にもケンイチは走ってアキト達の手伝いに向かう。って……ユウコも顔を赤くして……流石はケンイチ、目ざと過ぎるよ……とにかく

「ユウコ……」

「分かってますよ。ランさんにもゴールドにも指一本触れさせません」

そう言うユウコの目には覚悟が宿っている。よし！

ユウコは大丈夫そうだね……

「ユースケ、ケンイチくんはなんて言っていたの？」

「この戦いは僕達の働きしただってさ」

ランがそう聞いてきたので僕はそう嘘をついておく。ラン……君の事は僕が意地でも守ってみせるよ！

「なんで今頃ここに来たんですか!？」 (後書き)

次回に続く

## VSネスト（前書き）

今回は3話連続投稿、イツキ視点です。

## V S ネスト

「ふ……なめられたものです。私の相手がどこの馬の骨とも分からない子供が相手ですとは……出来ればあの名高いユースケさんとランさんのペアと戦いたかったですね」

そうオレ達と対峙する相手、ネストがそんな事を言いやがった！

……な、なんだと！

「バ、バカにするな！」

「そうよ！アンタなんてわたし達2人にかかれば楽勝よ！」

そうオレとコノハが連続して言う。それでも余裕な表情は崩さない奴は間違いなく強者である。野郎……バカにしゃがって！

「では始めるとしましょう、ヘルガー、マタドガス」

そう言い奴が出すのは黒い獰猛そうな犬？

とにかくそんな感じのポケモン、ヘルガーと最近お馴染みになりつつあるガスを出している紫色の球体が連結したようなポケモン、マタドガスが姿を現した。負けてたまるかよ！

「オレはコイツだ！ブースター、君に決めた！」

「コッチも行くわよ！シャワーズ、頼むわよ！」

『『ブイブイ!』』

オレとコノハはヘルガー達に迎え撃つべくオレとコノハはブースターとシャワーズを出した。この兄弟コンビなら!

「こつちから行かせてもらいます。マタドガスは煙幕をヘルガーは悪巧みを使いなさい」

く……ネストの指示でマタドガスは煙幕を発動してきた。く……こんな密閉空間でそんな技を使ったら他のみんなの視界まで奪われちまう……そんな戦略を立てるコイツは中々の策士だな……それにヘルガーが悪巧みを使って自慢の火力を高めている。放って置いたらマズイぞ……なら!

「ブースター、火炎放射だ!」

「イ、イツキ、それはマズイわよ!」

え?

そのの何が悪いんだ?

『ブーイー!』

『ヘルウ』

……なんだ?

煙幕のせいでよくわからないが……今、ヘルガーの鳴き声が聞こえたと思ったら炎が何かに吸い込まれるように消えていった。今のは



……まさか！

「ありがとうございます。ヘルガーの火力を強化して頂いて」

っ！

やっぱりか……アイツの発言から考えるとあのヘルガーの特性は貰い火、貰い火は相手の炎を吸収して自らの火力に変換する特性だ。く……これは厄介過ぎる！

ブースターの火力がこれじゃ使えない……

「だから言ったのに……とにかくここはわたしに任せなさい！シャワーズ、広域にバブル光線！」

『ブ〜イ〜！』

コノハのシャワーズは今だ煙幕につつまれているヘルガー達に向けて無数の泡の光線を放つ。これなら！

「マタドガス、ヘドロ爆弾を使って防御しなさい」

『ドガア』

煙幕の中に爆発が起こる。ヘドロ爆弾を自分達の前に起こしてその爆発を利用して防御したのか……その爆発により煙幕は流されていき辺りが晴れてくる。く……やっぱり無傷かよ……

「では反撃と行きましょう！ヘルガー、悪の波動！」

っ！？

ヘルガーは口を開き黒いエネルギー波を放ってくる。ブースターとシャワーズはそれをギリギリのところまで回避し、大事にならないですんだ。く……なんて鋭い悪の波動だ……

「休む暇なんて与えませんよ？マタドガス、ダブルアタックでブースターに攻撃しなさい」

『ドガア！』

そうマタドガスがブースターに突撃してくる。そんなんもの！

「ブースター、バックステップで避ける！」

『ブイイ』

オレの指示に従いブースターは軽快なステップでその攻撃を軽々回避する。さあ、反撃といくか！

「コノハ！」

「OK！シャワーズ、バブル光線！」

『ブイイ！』

コノハの指示により、シャワーズはヘルガーに向けてバブル光線を放った。コイツは牽制、これでヘルガーの動きを制しておいて……オレ達は……

「ブースター、マタドガスに火炎放射で攻撃だ！」

『ブイイ!』

オレはブースターにそう指示を下す。ダブルアタックを空振りしているマタドガスにはこれを回避する術は無い。これなら決まるハズだ!

「かかりましたね。毒ガスを吐きなさい」

『ドガス』

な……コイツは……まさか!?

<ドゥン!>

『ブイイ!?!』

『ブ……』

毒ガスに火炎放射が引火した。それにより大きな爆発が発生した。それにブースターとシャワーズは巻き込まれた。な……なんて事を!

しかもその爆風にオレ達にも影響を与える。このままじゃやられる!?

ちい!

「コノハ!」

「キャ!?!」

オレはコノハに飛び付いて地面にふせさせた。それにより爆風に飛ばされる事は無かった。あ、危ねえ……それよりブースター達は！？

あっ！

『ブ……ブイ……』

『ブイ……』

なんとか……無事だったみたいだけど……ダメージが大き過ぎる！ブースターとシャワーズは炎に対性があるから大ダメージを受けるだけですんだけど……他のポケモンだったらどうなってたか……にしても爆発は貰い火で吸収できなかったんだな……

「ブースター、シャワーズ、大丈夫か！？」

『ブ……ブイ……』

『ブイ……』

なんとか立ち上がった2体だけど……激しくマズイな……このままじゃやられるぞ……でもそれはブースターだけじゃない。奴のマトドガスも傷だらけだ。く……あの野郎……ポケモンを道具みたいに扱いやがって！

「まだ無事でしたか。ではこれで止めます。マトドガス、最後の仕事です」

『ドガ……』

その台詞を聞き、マタドガスは嫌そうな顔をする。あの野郎まさか！

「ブースター、シャワーズの前に移動しろ！それから守るを使え！」

『ブ、ブイ！』

オレの指示を聞き、満身創痍の状態のブースターが駆けた。そしてシャワーズの前に立ち、光の膜を作り出した。

「コノハ、しっかり顔を下げてるよ！」

「え……な、なんで！」

オレは地面に伏せたままコノハの顔を下に向かせる。

<ドカーン！>

「うわっ！」

「キヤア！」

今度はマタドガス自身が爆発した。それによりまた爆発がオレを襲う。く……さっきのより断絶ヤバイ……ブースター達は大丈夫なのか！？

そしてすぐに爆発が収まった。オレは倒れたまま前を見る。ブースター達は無事だ。守るを発動させてなんとか身を守りきったみたいだ。けど足は震えている。さっきのダメージはそれほど大きかったって事が……それに対してマタドガスは完全に力尽きている。目を回して地に落ちていた。

「戻りなさいマタドガス、中々しぶといですね……ならば私のパー

トナーで引導を渡してあげましょう。ガブリアス、出番です」

『GRAAAA!』

っ！

ガ、ガブリアスだって！

ガブリアス、藍色のサメをどこか連想させるドラゴンポケモン……アキトのパートナーのポケモンで、実力はかなりのもの、これは……ヤバイぞ……

「この展開でドラゴンの登場、さぞかし絶望したでしょう」

……く……普段なら誰が！

とでも言ってるんだろうが……ブースターにもシャワーズにもドラゴンに対して決定打になる技を覚えていない……ブースターもシャワーズも進化したばかりだからそれぞれのタイプの固有な技をほとんど覚えていない。ブースターは火炎放射、シャワーズはバブル光線ぐらいだ。他に補助技が一つか二つあるぐらい……どうする？

「さあ決めましょう、ヘルガーは悪の波動でブースターを、ガブリアスはシャワーズを狙いなさい！」

ヘルガーは再び大きな口を開き、まがまがしい波動を放ってくる。それをブースターは横にステップでギリギリで回避する。危ない危ない……ガブリアスはどうとすでにギリギリまでシャワーズに接近して大きく振りかぶった。マズイ！

「今よ！シャワーズ、溶けなさい！」

『ブイ〜』

お！

シャワーズはギリギリのところまで溶けて水溜まりのようになりその攻撃を回避した。上手いぞ！

そうだな、補助技が残ってるじゃんか、それを活かして勝負していくしかないよな！

「よしブースター、ガブリアスに頭突きだ！」

『ブイイ！』

ドラゴンクローを空振って隙が出来ていたガブリアスにブースターが顔面から突撃する。その攻撃を受けてガブリアスは大きく体制を崩した。まさに火事場の馬鹿力って奴だな！

「く……ヘルガー、悪の波動！」

それを援護するべくヘルガーはまた悪の波動を放ってくる。く……追撃を許さないつもりかよ！

「そうはいかないわ！シャワーズ、アイアンテール！」

『ブイ！』

その悪の波動を弾くために鋼鉄と化した尻尾をシャワーズは悪の波動に向けてたたき付けた。上手い！

悪タイプの技は効果はいまひとつだからシャワーズにはダメージはほとんど無いし、いい防御だ！

「よし、オレも行くぜ！ブースター、鬼火だ！」

『ブイイ！』

ブースターは体制を崩しているガブリアスに容赦なく鬼火を放った。ガブリアスに見事に鬼火が直撃し、少し苦しみ始めた。鬼火……命中した相手を火傷状態にする技だ。火傷状態になれば攻撃力は半分になるって言われている。これで少しは有利になるな……よし、ガブリアスが苦しんでる間にヘルガーを一気にしとめる！

「コノハ、行くぜ！」

「任せなさい！」

そうオレが言うくとブースターとシャワーズがヘルガーの方に向かってかまえる。さっさと片付けるぞ！

「ブースター、電光石火でヘルガーに突っ込め！」

「シャワーズ、バブル光線でヘルガーを牽制して！」

『ブイイ！』

シャワーズのバブル光線でヘルガーに攻撃を仕掛ける。それはいい牽制になっているヘルガーにバブル光線は効果は抜群だからな。回避か相殺するしか無いよな！



そうしている間にもブースターはヘルガーに接近している。コイツでも喰らいな！

「頭突きからじたばたするんだ！」

『ブイイ！』

ブースターは正面から突撃し、頭をヘルガーにたたき付けた。それにヘルガーは怯んでしまい動きを止める。これで終わりだ！

『ブイイ！』

『ヘルウ！？』

「な……ヘルガー！」

ブースターがその場でじたばたと暴れ出す。じたばた、使用ポケモンがピンチな程威力が高くなる技だ。さっきの爆発のダメージはかなり重かったからな……これで仮は返すぜ！

ヘルガー自身はそんなに防御は強く無いポケモン、じたばたの渾身の一撃に耐え切れずに倒れた。よし！  
まずはヘルガー撃破！

「く……中々やりますね……ですがガブリアスは倒せません！ガブリアス、シャワーズを潰しましょう！」

『G R A A A !』

火傷で苦しみながらもガブリアスはシャワーズに向かってくる。へ

っ……一度オレ達を勢いに乗せたらそう簡単に止められないぜ！

「シャワーズ、溶けて回避しなさい」

『ブイ！』

再びシャワーズはガブリアスの攻撃を溶けて回避する。どうやら舐めてた相手にヘルガーを倒されて冷静さを欠けてたみたいだな……コイツで終わりだ！

「シャワーズ、バブル光線！」

『ブイイ！』

溶けてるシャワーズはガブリアスに向けてバブル光線を放つ。勿論殆どゼロの距離からのバブル光線、すでに長時間にわたって火傷のダメージを受けているガブリアスにはこのバブル光線のダメージは大きい、さあ……止めをさすぜ！

「ブースター、もう遠慮はいらないぜ、最大パワーの火炎放射だ！」

『ブーイイ！』

バブル光線を喰らいバランスを崩してしたガブリアスをブースターの火炎放射が飲み込んだ。それによりガブリアスも流星に限界を迎えたようだ。そのままガブリアスは倒れた。よっしゃ！

ガブリアス撃破！

「やったぜ！」

「ナイスコンビネーション！」

「よっしゃあ！」

オレと腕をぶつけあう形のハイタッチ？

を決めた。そんな事よりも……

「大丈夫か、ブースター！」

「シャワーズ、アンタ、怪我は大丈夫なの！？」

そう言つてオレとコノハとブースター達に近寄る。すると気がぬけたのかブワスターはその場で座り込み、シャワーズも溶けるのを止めてその場で寝転がる。ふう……勝つたには勝つたが……コイツらに無茶させちまったな……正直コイツらで本格的な実践は始めてなの……

「悪いな……無茶させちまって……」

『ブイ〜』

素直に頷いたよコイツ……まあ事実だしな……

「すぐにでも治療してやりたいんだけど……この木の実食って我慢してくれよ……」

そう言つてオレはベルトにセットしておいた携帯用の木の実から茶色の木の実、オボンの実を取り出してブースターの口にくわえさせ

る。

『ブイ!』

ブースターはそれにならずくのを確認するとそのままボールに戻した。ごめんな、しっかりとした治療してやれなくて……ただ今は……オレはネストをにらみつける。この状況を打開するまでうっかり気を抜けない!

オレはなにが起きても大丈夫なように次のボールを取り出して構える。刻一刻と決戦の時間が迫っているのをオレは肌で感じた。

VSネスト(後書き)

次回に続く

## ケンイチの力（前書き）

久々に今回はケンイチ視点です

## ケインチの力

オレが対峙するのはアネガラン、ロケット団最強幹部の一人……だがそんな怖く感じない……むしろ軽く余裕を感じるぐらいだ。

「なあウィンディ、ギャラドス、普通だったら逃げ出すところだよな」

相手は今までに無い強敵、多分、今まで戦ってきた相手のなかじゃ、ユースケの親父さん、ケンスケさん以外はいないだろうな。おまけに相手は命まで狙ってくるかと来たもんだ。普通だったら逃げ出すだろうな。

『ガルウ！』

『ゴゴー！』

オレの言葉にウィンディ達は余裕を持ってそう鳴く。

『イヤ、行けるぞ』

とでも言ってるんだろうな。それなら、遠慮なく行かせてもらおう。

「気に入らないですわね。その余裕は……」

アネガランはビークインを出しつつもそう言う。だろうな……自分でも不思議なぐらい余裕だからな。

「いつでも来い。オレの準備は出来てるぞ」

そうオレはいつもの口調で返す。それは自分が余裕である事を示している。

「く……行きますわ。ドラピオン、クロスポイズン、ビークインは攻撃指令で攪乱ですわ！」

先手必勝と言わんばかりにアネガランはドラピオン達に攻撃の指示をする。その指示を聞き、ビークインは蜂の巣みたいな場所から小柄な蜂を無数に放出する。それはギャラドスとウインディを取り囲むように移動した。く……これで視界を奪うつもりか！

勿論オレの視界も完全に塞がれる訳だから、攻撃に転じる事が出来ない。く……流石はポケモンリーグベスト4なだけはある。巧みな戦術の使い手だな。

『ドラアアー！』

く……完全に死角になっている場所からドラピオンはギャラドスを狙って姿を現した。く……流石に早いな。ならば！

「ギャラドス、跳ねろ！」

『ゴゴゴゴー！』

「な……」

ギャラドスは跳ねるを使ってドラピオンの強襲を回避に成功する。普通はこんな下級な技を使うとはアネガランも想定出来なかったみたいだ。それに驚きの表情を見せる。これがコイキング時代からの



伝家の宝刀、跳ねる。攻撃をかわす事の出来るギリギリの跳ねる、それを実行するコイツの技量はかなりのものだ。しかもギリギリの回避をしたって事は次の攻撃に繋げるのも簡単だ

「アクアテール！」

『ゴゴゴゴ！』

「な……ドラピオン！」

アクアテールの攻撃は完全にドラピオンを捕らえた。ギャラドスのアクアテールでドラピオンは弾き飛ばされた。それに驚きの表情のアネガラン、次に出てくる時はギャラドスを仕留めていると思つてみたいだな。だが、甘すぎるぞ。

「まだまだですわ。ピークイン、攻撃指令で攻撃開始ですわ」

その指示を受け蜂達はウィンディとギャラドスに一齐に襲い掛かってきた。相性はこつちが有利とはいえあれだけの数に攻撃されたら流石にダメージの蓄積は間逃れられない……なら！

「ウィンディ、ヘレアドライブ、ギャラドス、竜巻！」

『ガルルウウウ！』

『ゴゴゴゴ！』

ウィンディはフレアドライブを発動して蜂達を焼き払っていく。そしてギャラドスは自分とウィンディの間に竜巻を起こし、自分が炎に巻かれないように炎を払った。

「それが隙ですわ。ドラピオン、もう一度クロスポイズン、ピークインはパワージェム」

ピークインはパワージェムを広域に放ち、ウインデイの回避コースを閉ざしてきた。それはギャラドスにも牽制の効果を発揮していて、迂闊に行動させる事が出来ない。上手いな……そこへ迫りくるドラピオンの姿は圧巻だ。恐ろしいものすら感じる。しかも素早い動きで火炎放射とかで迎撃するのは無理そうだ。だが……甘い！

「ウインデイ、燕返しだ！」

『ガルウ！』

ウインデイは燕返しを発動し、ドラピオンの背後に回った。その際にパワージェムの結晶に数発貫つたみたいだがそこまで酷いダメージを受けた訳ではない。肉を切らせて骨を絶つ！

まずは厄介な支援約を潰させてもらおう！

「ウインデイ、大文字でピークインを撃て！」

『ガルウウウ！』

「ピークイン、防御指令で大文字を受け止めなさい！」

『ビー！』

オレが指示を出した瞬間にアネガランがそう指示を出してパワージェムを止めてまた自分の巣からまた蜂を繰り出し大文字から身を守

った。うまいな……攻めるに攻めきれない……

「ドラピオン、さっきの屈辱を返しましょう。ウィンディをかみ砕きなさい」

っ！

大文字を放った隙についてドラピオンが背後からウィンディに襲い掛かってくる。そう簡単に行くと思うな！

「ギャラドス、冷凍ビーム！」

『ゴガー！』

そう指示をするとギャラドスは高速で冷凍ビームを放った。それはウィンディに攻撃を仕掛けて来たドラピオンの開いた口に直撃した。口の中が凍りついたドラピオンは口を閉じる事が出来ずにいた。その隙は逃さん！

「ウィンディ！」

『グルウ！』

オレの声を聞いた瞬間にウィンディは体を回転させ、尻尾をドラピオンに叩き付けた。今のはアイアンテール、これぐらい、あ、うんの呼吸で今のオレとウィンディならできる。それにより口の氷は碎けるが、ドラピオンは顔をしかめて余りにつらそうな顔をしている。これで……さあ、詰み将棋といくか。

「ギャラドス、アクアテールでドラピオンをビークインに向かって

弾き返せ！」

『ゴガー！』

『ドラ……』

勿論隙を逃さずドラピオンにアクアテールを叩き込みドラピオンを  
ビークインに向けて弾き飛ばした。

「……防御指令でドラピオンを受け止めなさい」

少し悔しそうな口調でそうビークインに指示を出した。再び蜂を出  
してドラピオンを受け止めた。こんな技量があるコイツの実力がよ  
く分かる。次で決着を付ける！

「ウィンディ！」

『ガルウ！』

オレが叫ぶとウィンディは頷いた。するとウィンディは『グルウウ  
ウ』と唸り始め力を溜めはじめた。あいつらをあの状態でなんとか  
時間を稼がないとな……

「ギャラドス、破壊光線！」

『ゴガー！』

オレが指示を出すと極太のオレンジ色の光線を放った。これなら！

「勝負決めにきたですわね。ですが、それを受け切れれば私の勝ち、  
わたくし

ドラピオン、守るですわ」

『ドラア！』

奴の指示に従いドラピオンは守るを発動する。まだだ！

「ギャラドス、撃ち続ける！」

『ゴガー！』

オレの指示でギャラドスはまだ破壊光線を照射し続ける。それに対してまだ守るを発動し続けるドラピオン、耐久レースになるか……これは……

「このままじゃ押し負けますわね。手っ取り早く決めましょう。攻撃指令」

『ビーー！』

攻撃指令！？

今頃そんな技が通用すると……っ！？

「気付いたみたいですね。狙いはあなたですわ」

く……オレを狙っているのか！

やられる！？

『ガルウウウ！』

！

オレが身を守る次の手を考えているとウィンディが吠えた。するとウィンディの鮮やかな毛が逆立ちそれと同時に物凄い熱いぐらいの風圧が走る。その風圧にオレはバランスを崩し、すぐそばにいたギヤラドスは大幅に弾いた。ウィンディが放たれたそれは攻撃指令の蜂を焼き払った。とにかく助かった……それにしても凄いパワーだ……あの時と同じか……

「な、何ですのこの力は!？」

流石にアネガランもこれには驚きのようだ。これはな……

「オレは最近までシンオウの山奥で修行していた。その時、山男みたいなポケモンに襲われ体が冷えすぎて死にかけて時……コイツがオレを守るために発揮した技だ」

この技を発動した瞬間……周りの雪がかなり溶けた。それでオレの体温も戻ってきてソイツを倒してなんとか生き延びた訳だ。

「発動まではユースケのユンゲラーのサイコマグナムを超える溜めの時間がかかる……だが、小細工は通用しないぞ！」

『ガルウ!』

ウィンディがオレの言葉に頷くと更に熱風は強くなる。このままじやかなりヤバくなるな

「ギヤラドス、よくやったな。休んでてくれ」

『ゴガ』

ギヤラドスはオレの言葉に頷いたのを確認するとボールに戻す。頼むぞ、ウィンディ！

「ブレイブフレア！」

『ガルウウウ！』

ウィンディが吠えるとウィンディの口元に特大の炎の球体が現れ、それにさつきまで放出していたオーラにも似た熱風はそれに集まっていく。そして……

『ガオオオオン！』

放たれた破壊光線を超える炎の光線。それはドラピオン達に向かっていく。

「守るは連続では使えない……最強の防御技がない以上まともに止める術は無いハズだ」

「余りあまく見ない事よ。防御指令！」

『ビーー！』

その指示を受けてビークインは今までに無いぐらい蜂を放出した。それを集中させて炎から身を守ろうとする。

『ガルウウウ！』

炎と蜂の激突、もの凄い蜂の量で中々突破出来ない。く……負けるものか！

「ウインディ！」

『ガルウウ！』

再びウインディが吠えるすると火力が更に上昇し、蜂を一気に焼き払った。そして……

『ドラア！？』

『ビィー！？』

ドラピオンとビークインを巻き込み壮大な爆発が起こる。これで終わりだ。

「ポケモンリーグでベスト4になった事がある私を倒すなんて……」

そうアナガラシが忌ま忌ましげに言うと煙りが晴れた。そこには完全にダウンしていたドラピオン、ビークインの姿があった。よし、オレの役目は果たせたな

「甘かったな。オレも前回のカントーリーグベスト4だ」

そう誇らしげに言ってやった。自分だけが強いと思うなよ。この天狗女！



ケンイチの力(後書き)

続く

「この人は人を不幸にする源だ！」（前書き）

ユースケ視点です。これが本日ラストの投稿分です

「この人は人を不幸にする源だ！」

「くっ……………」

そうネストさんが悔しそうに呟いた。イツキとコノハのバトル、凄  
い良い感じだった。始めて僕と会った時とはまるで別人だった。危  
なっかしくて助けに入ろうとした場面もあったけど、なんとか勝て  
たみたいだ。

「まさかナンバー3と2を破るなんてね……………兄様が認めるだけはあ  
るわ」

そうさばさばした表情でアネガランさんが言う。ケンイチが彼女を  
撃破。まあ苦戦はしてたけど、完勝していた。流石って感じだな。

「アネガラン、お前が姉さんを想い、慕う気持ちも分かる。俺だっ  
てあの人は好きだ。姉として尊敬している」

「ならば、なぜ裏切ったの！？あの時の誓いを忘れたとは言わさな  
いわよ、兄様！」

「分からののか！俺が尊敬しているのは社長として、全ての者の幸  
せを願う姉さんだ。ロケット団のボスの姉さんは大嫌いだ、正直言  
ってな」

……………アネガランさんはジネルバさんの言葉を聞くと舌を打った。誓  
いとかなんとか分からない言葉が出てきたけど……………とにかく……………と  
りあえずは危機から脱せたみたいだね……………多分一時的の事だろうけ  
どね。

「まあいいわ……。私とネストの役割は果たした。手持ちが全滅させられようが構いやしない。煮るなり焼くなり好きにしなさい」

アネガランさんが敗北宣言をする。役割……？

どういう事だろう？

「クソッ、時間稼ぎが目的かよ！」

そう言ったのはイツキだ。拳の握り方からかなりの悔しさが感じられる。時間稼ぎ？

もしかしてホウオウとルギアを呼び出すための時間稼ぎ……これってかなりマズインじゃないかな……ホウオウとルギアが来て操られたら僕達の勝ち目はかなり薄くなる早くなんとかしないといけないな……

「どうします？」

ゴールドがケンイチに尋ねる。作戦参謀さんはこれからどうするつもりだろう？

「とにかく、まずはオレとジネルバさん、それとそこまで消耗の激しくないアキト、ユウイチ、サクラ、シルバー、それとサカキで先鋒として乗り込む。ここまで来たらロケット団のボスはラジオ塔の頂上にしかいそつにないしな」

……ケンイチ、僕とラン、それとゴールドとユウコをそのボスって人に近寄せないためだね……カズマとカシスって素敵な護衛まで

追いていつてくれるなんてね。ケンイチも消耗してるハズなんだけどね……ようは僕達でラン達を守れて事だよ……それに僕達は頷く。しかし……

「残念だけど、それは叶わぬ望みね。姉様はあなた達を常に監視している。全員で乗り込まないなら強行手段に出るでしょう」

そうアネガランさんが笑い飛ばしてきた。監視……って事は……まさか！

「それはつまり……」

サクラの言葉に続いて、ユウイチが

「オレ達の行動全てがロケット団のボスにはお見通しって事か……」

僕が思った通りの事をユウイチが言う。それに加えてかなり彼女らを呼び出した強力なテレポートの使い手……って事は決まって……

「さあ、行ってらっしゃい……最終対決」

アネガランさんの言葉を最後まで聞く事は出来なかった。理由は簡単、僕達は飛ばされたから。テレポートを使って

ラジオ塔の頂上。一瞬の内に僕達はここに飛ばされた。頂上って訳で少し強い風が僕を力強く打っている。正直冷たいぐらいの風で体温が奪われていく感じがする。

「マジかよ……」

「信じられない……」

そんな驚きの声を漏らすカズマとカシス。これほど強力なテレポーターを使われたから当然だね。テレポーターで攻めてくるって思ったけど……まさか逆の手段で来るなんて……僕もこんなに強いテレポーターなんて始めてだから驚きだな。

「誰かいる」

そうユウコが急に何かに気付いたように

「どこなの、ユウコちゃん？」

「あそこです」

ユウコが指差した先で彼らに背を向ける人物が一人。どこか高級そうなドレスはその人物は着ている。あの人は……？

「あの人……まさか……」

アキトが驚きの声を漏らした。知り合い？

「……知ってるのか、アイツを」

シルバーがそうサカキさんに尋ねる。あの人顔が広いみたいだね。ロケット団のボスなのにさ

「アイツは……以前のロケット団とよく取引をしていた人物だ……。まさかアイツがボスだとはな……」

へえ……ロケット団と取引する企業なんてあったんだね……結構驚いたよ。とにかく！

「アンタは何者だ？」

ケンイチがいつも通りの口調で言う。でもその台詞には攻撃的なものが宿っている。その人物は振り返ってこっちを向く。

「「！？」」

「フフフフ、ようこそ。ファイナルステージへ……………坊や達」

……………この人は……………それにファイナルステージって……………

「ベネラ……………さん……………！」

ゴールドが絶句の表情で静かにその名前を口にした。ベネラさん……………この人がロケット団のボス……………ベネラさん……………それからモンスターボールからニューラに似たポケモンを出してくる。多分ニューラが進化したポケモンみたいだね。放たれた殺気、僕はすぐにそれを感じ取り、それが誰に向けられているかに気付く！

「マニューラ、泥棒！」

『ニューラ！』

そうベネラって人が言った瞬間、マニューラは2匹に増えた。これは身代わりか！

そしてそのうちの1匹が僕に迫りくる。さっきの殺気でこれぐらいのフェイント、僕には読んでいる！

狙いは……………

「ユースケ！」

ランが僕に向かって走ってくる。狙いは……………

『ニューラ！』



その瞬間、マニョーラが方向転換してランに向かう。やっぱり！

「え……………」

「ラァァァン！」

僕はそう叫びながらもランに飛び付いた。マニョーラは自慢の爪を奮いランに攻撃を仕掛ける。でも、僕が飛び付いてランがバランスを崩したせいで爪がランのネックレスに当たるだけで終わった。あ、危なかった…………でもまだこのまま安心してられない！

僕は体を捻ってランが背中を打たないようにする。勢いよく飛び付いたからそのまま僕は倒れてしまう。

「うつ……………」

痛たたた…………せ、背中を勢いよく打っちゃったよ…………

「ユースケ！」

そうランが心配そうに僕に言う。背中が痛いだけだから大した事は無いんだけど…………受け身を取ったからそこまで痛く無いし…………強いと言うならランの体重も上乗せたからその分普通より痛い…………

「僕は大丈夫…………ランは大丈夫なの？」

「うん、あたしは大丈夫…………でもペンダント…………取られちゃった……………」

僕の言葉にランがそう返してくる。そっか……大丈夫だったのか……よかった。良く見るといつも胸元にぶら下がっていた銀の羽のペンドラントが無くなってる。取られたのか……

「君が無事ならそれで良いよ」

そう僕は言うってからランに立つように促し、ランが立ちあがると僕も続いて立ち上がる。

「ユースケさん、ランさん、大丈夫ですか？」

そうサクラが僕達を心配して声を掛けてくれる。他のメンバーも僕とラン、それといつの間にか倒れていたゴールドとユウコの周りに駆け寄る。多分、ゴールドも狙われたんだろうな……僕はジャケットの汚れを払ってから

「うん、僕達には怪我は無いよ」

そうサクラにいつもの口調で返す。そして……ベネラさんを力強く睨み付けた。

「ユ、ユースケさん……？」

そうコノハが驚いたように言う。なんですか……そんなの簡単だ。僕は正直今までに無いぐらい腹が立っている。

「……恐ろしい程の気迫ですわね。ジネルバを破ったほどありますわ」

……

「ベネラさん……いや……ベネラ！僕にはあなたと話す口なんてもうない！僕の大切なものをことごとく奪おうとするあなたを僕は許さない！」

この人は……やっちゃいけない事をした……僕の大切なものをことごとく奪おうとする根源が……この人！

洗脳されたカズマとカシス

みんなの命を狙った罠

そして今、ゴールドの命を……僕が1番好きな人、ランの命を羽根を奪う、そんな事の為に奪おうとした。

この人は人を不幸にする源だ！

許してはおけないんだ！

「この人は人を不幸にする源だ！」（後書き）

続く！

アンテナをつぶせ！（前書き）

ベネラと対峙したイツキ達は……

アンテナをつぶせ！

凄まじい程のユースケさんの気迫……こ……怖……これがあの穏やかなユースケさんなのか？

「ふふ、そんなに怒っていればこちらにとっては好都合……」

ベネラが口元に人差し指を軽く当て、微笑する。ムカつくな……

「私も同感……あなたは許さない。絶対に！」

ユウコも同じように怒りをあらわにしている。だから怖いって……そして一触即発の雰囲気、始まるのか？  
ん？

「あだっ！」

「いたっ！」

あまりにも急過ぎる奇襲、それにユースケさんとユウコは対処出来ない。流石ジネルバだ。ナイス奇襲！

つて……なんでだ！

「ジネルバさん！どういうつもりですか！？」

「まさか嵌めていたんじゃないやありませんよね？」

……そうユースケさんとユウコが怒鳴り返すのに対して……

「お前ら！少しは精神こころを保て！相手は策士ともいえるボスなんだぞ！そんな単純にみえる戦法で勝てるワケが無いだろう！頭をちつとは冷やせこれが端から畏だと気付かないのかお前ら！！」

おお……凄いい説教……この男も本気で怒るなんてな……にしても……

「「畏！！？」」

ユースケさんとユウコだけでなく、オレを含めた全員が反応した。わ、畏って……ジネルバは胸に軽く手を平手のまま置き、軽く深呼吸するとベネラに問う。

「あのマニユーラの泥棒、ユースケとユウコが庇うと読んでたんだろ？」

「読んでた……！！？」

ユースケさんが驚いたように言い。ベネラは小さく笑いだし、やがて大笑いした。コイツ……

「流石はジネルバ。お見通しのようで……。そう、私はあなた達が庇うなんて計算に入ってたわ。むしろ庇わない理由なんて無いし……目的は命よりもこの羽。だからあえて分かりやすくしたのよ」

「嵌められてたなんて……」

啞然の口調でユウコが言う。く……ユースケさんとユウコの冷静さを奪う作戦だと……なんて奴だ……

「アイツ……………何かも計算内っていうのか……………!？」

チーム参謀のケンイチさんが若干悔しそうに言う。何かユースケさん達に助言でもしてたのか？

「さてと……………。状況は最悪だな。ならば手のうちようはアレしかないか……………」

小さくぼやくジネルバ。何か策があるのか？

「サカキさん、すまないが少し姉さんの相手を頼む。時間稼ぎ、と言うべきだが……………」

そうジネルバがサカキに対して言う。何をやる気だ？

「何か策があるのだろうか……………心得た。シルバーの命を狙った奴を見過ごす気は無いからな、構わぬ」

……………この人も人の親なんだな……………

「皆、空から遠距離攻撃の出来るポケモンを出してくれ。こうなれば、ラジオ塔から放たれている電波の根源……………ラジオの中枢、アンテナを破壊する！」

「だが、それで事態は良くなるのか？」

トサカ頭の問いには軽い笑みを含めて、ジネルバは答える。

「ルギアとハウオウは仮にも伝説のポケモン。この電波が無ければ



操れんから宝の持ち腐れになる」

なるほどな。ならさっさと行くぜ！

「頼むよ、ラテリオス！リザードン！」

『行くぞ、ラテリオス！』

『リザア』

「ラテリオスもお願い！」

『うん、お兄ちゃん！』

「カイリユー、トゲキツス出番だよ！」

『バウウ』

『チヨゲツ！』

「ポリゴン2、出番だ！」

「ピジヨット、君に決めた！」

『ピジヨオ！』

「ヨルノズク、行って！」

『ホオ』

「行ってくれ！リザードン、チルタリス、フライゴン！」

『リザア！』

『チルウ！』

『ギギーッ』

「エアームド、ゴースト、出番だ！」

『エアーツ！』

『ゴース……』

「ハクリュー、頼んだよ！」

『リユ〜！』

「トゲキッス、行って！」

『トゲ！』

「ヤミカラス、ゴースト！行け」

『ヤミー！』

『ゴース！』

オレはすぐにピジヨットを出す。それに加えてコノハがヨルノズク、アキトがりザードンとフライゴン、そしてチルタリス、ユウイチはエアームドとゴーストを出した。更にユースケさんがりザードンとラティオス、ランさんがラティアス、カシスさんがカイリユートとゲキッス、ケンイチさんがポリゴン2、ゴールドはハクリュー、ユウコはトゲキッス、トサカ頭はゴーストとヤミカラス……とそれぞれ

れがポケモンを繰り出した。サクラが何も出さないのは飛行タイプ、一応ムクバードがいるらしいが、遠距離攻撃を持っていない。なのでこの局面ではサクラは何もする事が出来ないみたいだ。

ジネルバもフライゴンを出し、その背に乗って飛行を始める。ポケモン達もその後を追うように、飛行していく。アンテナを破壊する……正直戦いの後の事を考えると破壊するのは頂けないが……この際仕方ねえな……

「目標は姉さんの……いや、ベネラのずっと後ろにあるアンテナだ！一斉攻撃で破壊するぞ！」

「はい！」

ジネルバの言葉にオレ達は頷く。敵にいるときは最悪な敵だけど……味方だったらこんなに頼もしいなんてな！

「そうはさせません……フーディン！彼らを遠」

な……ベネラの指示は途中で中断された。なぜならベネラの足元に特大の岩が直撃したからだ。今のはもちろんドサイドンの技だ。な……なんつー危険なマネを……そうしてる間にサカキがベネラと距離を詰める。

「お前の相手は私だ。よそ見をするな」

「……仕方ありませんわね……。ガラガラ！」

『ガラア』

対峙するドサイドンとガラガラ。両方かなりの実力者みたいだな……

…ここは間に入って行けないぜ……

「早く行け。ここは私が引き受ける」

「すまない！」

サカキの言葉に頷くジネルバ。その隙にジネルバのフライゴンとオレ達のポケモンは羽ばたいていく。頼むぜ、みんな！

「サカキ、邪魔をしないで戴きたいわね」

「仮にも我が息子に手をかけたのだから……覚悟してもらおうか」

「出来るものならばどうぞ」

対峙する元ボスと今のボスカ……その一方でジネルバはフライゴンの背に乗り、他のポケモン達を引き連れて程よい場所にまで浮上していた。

「一斉攻撃でアンテナを破壊するぞ！」

ジネルバの言葉、それと共にオレ達全員で構える。さあ、一気に行くぜ！

「リザードン、火炎放射！ラティオス、竜の波動！」

「ラティアス、竜の波動！」

「カイリユーは彗星群！トゲキッスは波動弾！」

「ポリゴン2、電磁砲！」

「ピジョット、エアスラッシュ！」

「ヨルノズクもエアスラッシュよ！」

「リザードンはオーバーヒート、フライゴン、チルタリスは流星群だ！」

「エアームド、ラスターカノン！ゴーストはシャドーボール！」

「ハクリュー、竜の波動！」

「トゲキッス、エアスラッシュ！」

「ヤミカラス、悪の波動。ゴースト、ヘドロ爆弾」

うおっ！

全員の攻撃が一齐にアンテナを直撃する。それによりラジオ塔が揺れる感じがした。おーお、すっげー突風……

「やったのかな……！？」

「あれだけの攻撃、耐え切るなんて無理に近くだろっな……」

サクラの言葉に同意に近い形で答えるユウイチ。だよな……これで駄目ならどうしろってんだ……

「チツ……」

ジネルバの舌打ち……正直オレも舌打ちしたいぜ……まさかな……

「なんつー頑丈なアンテナだよ！」

カズマさんが忌ま忌ましげに叫ぶ。あれだけ撃ってぶっこわせないって……まあ頑丈に作った方がいいよなあ……

「みんな、もう一度やるぞ」

そんなジネルバの号令、こうなったら何度だってやってやる！

「おう！」

オレはその言葉に力強く頷く。

「みんないくよ！」

そしてユースケさんが叫ぶ、それにみんなで頷く。それはポケモン達も同じだった。ユースケさんの言葉と同時に全てのポケモンが先と同じ攻撃を仕掛けようとする中、ゴールドのハクリューは竜の波動を放とうとしない。ってどうしたんだよ！

このタイミングで

「ゴールド、ハクリューは竜の波動を撃たないんだ！？」

アキトがそこで鋭い突っ込みを入れる。ナイス突っ込みだ。にしても本当にどうしたんだよ……

『リュウウウ………』

ハクリューが唸るように鳴くするとその上空にとんでもないエネルギーが集まっていく。げ……アレって見覚えが……やっぱりあれっ

てよ……

「あれって流星群だろ……！」

「嘘でしょ、信じられない……」

おいおい……奥義って技はさ……最終形態に進化して苦勞を重ねて特訓してやっと習得出来る技だぜ？

んなあつさり出来て……オレだけじゃなくてコノハも驚いてるぞ

「ハクリュー……流星群に挑む気なんだよね、やっぱり」

ゴールドの言葉に驚きの反応を示すアキト。まあ、流星群だからなあ……

「ハクリューが流星群って……まさかゴールド、アイツって……」

アキトの質問にゴールドが何かに察したように頷く。

「そうです。あのハクリューはフスベシティに伝わる『伝説のドラゴン』です」

「マジかよ……」

そう言いアキトは絶句の表情だ。伝説のドラゴン……マジかよ……伝説ってスゲーよな。おい！

「アキト、伝説のドラゴンって何なの？」

ユースケさんがそうアキトに尋ねる。そりゃ気になるよな……オレ

も結構フスベに滞在してたけど知らないし……

「『伝説のドラゴン』……フスベシティの竜の穴に眠る、最強のドラゴンポケモンだと聞いた事があります。その力はどのドラゴンよりも勝る、と」

「僕はそのハクリューを竜の穴で呼び覚まして、今こうして仲間にしたんです」

アキトが説明台詞を言い、ゴールドが補足するように言った。最強か……一度言ってみたい響きだぜ！

『リュウウウウウ！！！！』

ハクリューの流星群のパワーチャージが終わったみたいだ。にしても流星群か……強力な技の習得でゴールドもどんどん強くなってくな……差を広げられる訳にはいかないな……とにかく今は！

「ハクリュー！流星群、発射！」

『リュュー！！』

ハクリューの発射と同時に皆が一斉に攻撃を放ち、恐らく先程よりも強力であろう一撃が突き刺さる。これでどうだ！

「今度こそ……やっただろうな……」

「そうであってほしい……」

トサカ頭に続き、祈るようにユウコがそう、口にする。そうであっ



てくれよお……

「チツ……。まだブツ壊れないか……」

ジネルバが本当に苛立つように口にする。どんな頑丈に作ってあるんだよアレ……

「みんな、ポケモンを戻せ！後は俺のフライゴンがカタをつける！」

「だけど、あれ程の攻撃で壊れないものを……！」

ユースケさんがそうジネルバに言う。まあ……確かにそうだよな……

「壊せなくとも、与えたダメージは嫌というほど蓄積されている。ならば、俺のフライゴンがカタを着ける。下手に疲弊させるワケにはいかないからな」

……信じていいんだな……

「ご苦労さん、ピジヨット、後は休んでくれ」

『ピジヨオ』

オレの言葉にピジヨットが頷いたのを確認してからオレはピジヨットをボールに戻した。さあ、ジネルバはどうでるのかな？

なんだ？

フライゴンの体の周りに砂嵐を発生させてバリアのような球体が現れたぞ……

「いくぞ、フライゴン！我らが究極の必殺技を！！」  
『ギーツ！！！！』

フライゴンは咆哮を上げると口に莫大なエネルギーを溜める。翼を羽ばたかせ、砂嵐をフライゴンの目の前に寄せた。その形はまるでブラックホールのような、何もかもを呑み込むような、そんな感じだ。おい……コイツは想定外、何をやる気だよ！

「ゆくぞフライゴン！必殺 『砂塵破壊光線』！！！！」

『ギーツ！！！！』

その瞬間、フライゴンが破壊光線を放つと、砂嵐がその周囲にまとわりつき勢いを増してアンテナに直撃した。うお……なんて破壊力……それからゆっくりとジネルバを乗せたフライゴンが降りてきた。スゲーなおい！

「ジネルバさん、やりましたね」

ユースケさんが地に降り立ったジネルバに言った。いやあ、凄いぜ本当に

「ああ。これで……」

静かにジネルバはベネラの元へ歩み寄る。サカキとベネラの戦闘も一時的に中断されている様子だ。

「これでアンタも終わりだ。降参しろ」

ジネルバはベネラにそう言い放つ。しかし、ベネラは微笑するところ言った。な、何が可笑しいんだ！

「確かに私の負けね。でも、あの坊や達は気になるんじゃないかしら？」

「何がだ」

「どうせ負けた事だし、せめて我ら姉弟妹かぞくの話をしてあげたら？ア  
ナタに出来ないなら私がするしね」

そんなジネルバとベネラの会話。確かに……な……さっきのアネガ  
ランとジネルバの会話にあったように誓いとか訳の分からないキー  
ワードが出てきたから気になってたんだよな

「ジネルバさん、あなた達3人に何があつたんですか……」

そうゴールドが尋ねる。見た感じ、フーディンの動きはサカキのド  
サイドンが封じている。ジネルバは意を決したように口にした。

「永遠の生き別れを経験したのさ、俺達は」

……なんだって……あまりに意味深な雰囲気と言つジネルバいった  
い……いったい何があつたんだ！

アンテナをつぶせ！（後書き）

次回に続く

## 大誤算（前書き）

ベネラを追い詰めたイツキ達であったが……

イツキ「おっと！更新遅れた理由、教えてもらおうか！」

ユースケ「理由によってはタダじゃおかないよ！」

……色々あつたのさ……本当に……

イツキ「理由？」

レポートやったり、成績にかかわる小テストに向けて勉強したり、ゼニガメ育てたりムツクル育てたり、友達とバドミントンしたり……

ユースケ「半分遊んでるじゃないか！」

イツキ「覚悟は出来てるよな！」

逃げる！

イツキ「逃がすかあ！」

ユースケ「とりあえず本編どうぞ！」

## 大誤算

「永遠の生き別れ……………」

「それって一体……………」

ジネルバの言葉に困惑するオレ達。そんで今のはユースケさんとなんさんだ。

「『永遠の生き別れ』……………ね。いくら何でもちよつと大袈裟過ぎたくないかしら？」

そんなベネラの声をジネルバは無視し、ジネルバは低い口調で、静かに話し始めた。

「俺、アネガラン、ベネラの3人はとある家の子供だった。どこにでもいる普通のな。だが、俺が5、6歳頃に両親が離婚してベネラは親父が、俺とアネガランは母さんが引き取り育てた。以後、何年も互いの姿は見えていない。俺はその数年後、トレーナーになった。特に目標も持たず、各地を放浪する旅人。だが、俺が旅立って数年後、母さんが病に倒れ、亡くなった。母さんの遺言ではベネラという姉の存在がいたという事が示唆された。何せ思い出も無く忘れていた存在。突然母さんにその存在を突き付けられてな、ベネラを探そうと俺とアネガランは共に旅を始め、半年後若社長として大企業の社長に立つベネラが存在が姉だと判明したが、相手は社長だ。取り合ってもらえなかった。ああ、この『取り合ってもらえなかった』は社員に邪魔されたから、だな」

ジネルバに続き、ベネラも思い出すように口を開く。

「私も私で生き別れた弟と妹を探していたわ。何せ父がすぐに死んだものだから……。路頭に迷っていた私はこの会社の前社長に拾われたのよ。私には天性の才能があったらしくてね、前社長にはご子息がいなくて跡継ぎを探していたらしく、私に頼んできたわ。当然、恩もあつたから私は社長の座を継ぐ事はすぐに決断できたわ。そして数年後に2人がポケモンリーグに出ていたのを知ったわ」

「まあ、目立つておけば何か分かるというか……メディアの力を借りようとしてな。大成功だったよ。ベネラはバトル好きでポケモンリーグは欠かさずチエックしていたからな。リーグ終了後、十数年の月日を経て、やっと再会し、俺たちはベネラのボディガードっという名目で共に暮らす事になった。その時に誓ったのさ……」

ベネラ、ジネルバが次の瞬間、同時に発した。

「……生離れずに3人一緒にいる、と」

その言葉を聞き、オレ達全員は沈黙した。ジネルバの覚悟、かなりのもんだつたんだな。

「私は、こういう過去があつたから私達みたいな者を出さないためにロケット団に間接的に手を貸したわ。強引、といえるけどもね……形は捻れていても、歪んでいてもそれで私達のような者がいなくなるなら構わなかった。今こうしてルギアとホウオウの力を欲するのも……そういった事が間違っていると分かっていて……非合法だと理解した上で行っている！隣にいる大切なものを無くしたくないのはあなた達とて、同じでしょう！？」

ベネラは自らの想いを全てを語るように叫んだ。それに一瞬静寂が訪れ、聞こえるのが風の音だけになる。確かにアンタの覚悟は凄

さ、けどな！

「なら、僕の大切な友達や仲間を奪おうとした事はどうなるんですか！？」

あら……オレの言おうとした事を取られた……ユースケさんがそうベネラに向かって叫ぶ。そうだ。お前の覚悟も何も、言ってる事とやってる事が一致してねえじゃねえか！

「その点については申し訳ないと思ってるわ。少なくとも、ロツカにはホウエンの様子を見てこいと言ったのに余計な事をしてきた。これでは矛盾が生じる。だから敢えてあなた達と遭遇させたのよ、閉ざされた心を解放するには友の力があるのは当然の事。ラティアスについても申し訳なかったわ……」

ロツカの悪業をここまで潔く謝罪している。珍しい事もあるもんだ……ボスが素直に謝罪するなんてよ

「でも、そういう思想が今私にはある。それでも私の野望を邪魔するの、あなた達は？」

「……」

全員が黙り込んだ。確かに大層な理想だし、理想だけなら普通ならもっと応援してやったっていいくらいだ。けどな……

「ざっけんなよ teme！ 確かにアンタの理想もスツゲー事だし、辛い気持ちも分からないでもねえ……でもな……」

一度オレは言葉をそこで区切る。そして……



「結局表面だけだろうがなんだろうが teme の今やってる事はなんだよ！ラジオ塔のジャック？狂暴化電波の送信？結局は teme のエゴに忠実に実行してるだけじゃねえか！そんなのオレは絶対に認めない！認めてたまるかあ！」

そうオレは叫ぶ。オレが今まで見てきたもの、それにはコイツの気高い理想も何も何も感じられちゃいない、結局はコイツのエゴじゃねえかよ！

「その通りだ。確かにアイツの言葉に偽りは無い。だが、アイツのせいで辛い目に遭わないポケモンがいけないわけではない。いなかっただけではない、お前達も辛い目に遭ったんだ。なら、ベネラの実行動は間違っている。止めないといけない」

「そうですね」

「確かに……ジネルバさんの言う通り……」

ジネルバの言葉に頷くゴールドとユウコ。  
ベネラに余裕の笑みは無い。

「伝説のポケモンはもう出しても意味ないし、俺達の勝ちだな。」

アキトはそう余裕を見せてベネラを軽く挑発する。

「残念ね、それは無いわ」

「無理よ、いくらアンタがジネルバより強かったって、数の暴力にはどうあがいたって勝てないわよ！」

コノハが自信満々に言う。にしても数の暴力って……その台詞を聞くと同時にベネラが懐からあるスイッチを取り出し、そして即座に押す！

『ピジヨオオ！』

な……突然ピジヨットが暴走しだした。それは他のみんなのポケモンも同じみたいだ。すかさずにオレはモンスターボールにピジヨットを戻す。それは他のみんなも同じようだ。しかし、ベネラのポケモンには何の影響も無い。ドサイドンも我を忘れたように動き、拘束していたフリーデインが解放されてしまう。何をしゃがったんだ！？

「ヘルガー、行きなさい」

『ガルウ……………』

更に追加と言わんばかりにベネラはボールからヘルガーを繰り出してくる。

「電波は止まったんじゃないのか！？」

ケンイチさんの驚きに満ちた言葉。確かにアンテナの破壊で電波は止まったはずだよな……でも今は実際に……ジネルバにとっても計算外のように明らかに混乱していた。

「フッフ、あなた達は怒りの湖の湖底基地を破壊したでしょう？あそこから発してるのよ」

「あその研究施設はわたしとカズマが完全に壊したはずよ！どうして!?!？」

そうカシスさんが驚きを隠せないように叫ぶ。本当にどういふ事だ！

「簡単な話じゃないの。『秘密の部屋』があったのよ、あの基地には。更に……ずっと地下に」

「!?!」

秘密の部屋だと……それに対してジネルバが真っ向から反論した。

「ちょっと待て、あの部屋には確かにでかい機械があったし、データのバックアップ、いざというときの非常電源の管理の役割を担っていた！プログラムもちゃんと直に見たぞ、どういう事だ!?!」

「見せた後に改良を施した、に決まってるでしょう?」

「なっ……!」

な……ジネルバの決死の策ですら、ベネラの計算に入っていたのかよ。オレ達は完全に手の平で踊らされていたのか!

それに更にベネラは続ける。

「ココまで来たご褒美をあげるわ。伝説のポケモン、ルギアとホウオウを直に拝ませて……ね」

く……手も足も出ないのかよ……ポケモンなしじゃヘルガーにはどうあがいても厳しいどうする!

「そんな……!」

「くそつ、ココで敵の思うツボかよ!」

悔しそうにサクラとユウイチが言う。そして、ベネラが2つの羽を左手に持ち、右手に不思議な鈴を持つ。片方は透き通った透明色をしていてもう片方は深い海のような青と黒がほんの少しだけ混ざったような変わった色をした鈴だ。アレは……

「なんだよ、アレ……」

アキトの言葉にベネラはこう返す。

「伝説のポケモン、ルギアとホウオウを呼ぶには……羽だけでは不可能。ルギアは銀色の羽とこの海鳴りのスズが」

そう言うと、深い海の色をした不思議な鈴を敢えて少しだけ鳴らす。その響きは心地よく聞こえる。

「ホウオウを呼ぶには虹色の羽と透明なスズがそれぞれ必要。この2つさえ揃えばルギア、ホウオウは我が配下に収める事が出来るわ。時間なんてね、端から関係ないのよ、一切」

「なっ……!？」

な……なんだって!？」

誤算だったし、誤解だった。ずっと時間が関係あると思っていたのはジネルバも同様のようで、オレ達が驚きを隠しきれない。

「だ、騙したのか……」

カズマさんがそう言うのとベネラさんが笑いながら話します。ムカつく笑い方しやがって

「私は『ルギアとハウオウを手に入れる』としか言っていないわ。なのに部下達もあなた達も勝手に時間があると考えただけ。騙してないわ、あなた達の勝手な思い込みよ」

確かに誰も「ルギアとハウオウの降臨に時間が関わる」とは言っていない。勝手な思い込み、と言われても仕方が無いが……クソ！

「さあ、電波は怒りの湖から一気にココまで来てる以上、最高パワー………カントーにも影響は出ているかもね。まあいいわ、始めましょう」

否、2つのスズと2つの羽が光り始める。そしてスズから鳴り響く音色。光と音色はまるで共鳴しているかのようだ。く………止められないのか!?

「今こそその姿を見せなさい、ジヨウトに伝わりし伝説の存在……銀の翼、ルギア!!虹の翼、ハウオウ!!」

な………突然大地が揺れ始める。く………立ってるのが精一杯だ!

そして、姿を現す2つの巨大な丸い光。その光が解き放たれ、その強大且つ巨大な2つの存在が姿を現した。

一匹は白い体色をした少し丸帯びた翼竜のような存在。もう一匹は七色の翼と体をもつ翼竜のような奴だ。

『フオオオオオオ!!!!』

『ギヤアアアス!!!!』

アレが……ルギアとハウオウ……なんてプレッシャーだよ！

たかが雄叫びを上げただけなのに！

「フフフ………ルギアもハウオウも我が手に引き釣りおろす！」

ベネラが更に懐から先とは別のスイッチを出し、押した。その瞬間にルギアとハウオウの様子が一変する。

「何をしたんですか、一体!？」

ゴールドのが叫ぶ、それに対してベネラは

「海鳴りのスズ、透明なスズそれぞれ2つの音色を研究して特殊な電波を放ったわ。これが普通の電波と混ざればどうなるのかしらねえ？」

「!？」

ベネラの言葉の通りならば　ルギア、ハウオウはベネラの手に墮ちたのか!？

「さあ、ルギア。ハウオウ。私の野望の力となって、私のために忠誠を………フフフ………！」

そう、ベネラが言うとルギアとハウオウが大人しくなった。そんな事って……

「そ、そんな………！」

「完全に悪夢じゃねえかよ！コイツは！」

コノハの悲痛な叫びに似た声に続き、オレは叫ぶ。このままコイツの思うままになっちまうのかよ！

大誤算（後書き）

次回に続く！



**本領発揮！反撃開始！（前書き）**

追い詰めたと思っていたが逆に追い詰められたイツキ達……さあどうする？

**本領発揮！反撃開始！**

「どうしてあなたは、ここまでポケモンを道具に出来るんだ！」

ヘルガーの牙を目の前にしながらもユースケさんが叫んだ。その口調はかなり力強い。それだけあの人が怒りをあらわにしてるって事だ。オレだってここまでポケモンを道具……イヤ、兵器みたいに使っているアイツに対して腹が立っているぜ……

「道具？それはアナタ達だって同じでしょう？」

「何!？」

そういうベネラに対しケンイチさんが驚きの声を上げる。それは……  
……どういう事だ……

「だってそうじゃない？モンスターボールに閉じ込めて、ポケモンバトルという自分の娯楽のために傷つけあわせる。それでは道具と変わらないんじゃない？」

……そういうベネラの言葉も正論だ。悲しいけどそういう奴だっている。だが……オレが……イヤ、ここにいるみんなが積み上げて来たものは！

「それは違う！僕達が積み上げてきたのは、そんなものなんかじゃない！」

そうユースケさんが力いっぱいベネラを否定した。当然だよな。

「そうだな。確かに人間って人やポケモンの気持ちを理解出来なくて、まるでどこか人形のように使うアンタみたいな馬鹿野郎もいるけど……」

「だけど、楽しく遊んだり喧嘩したりもする。大切な友達だったりするんだよ？それを君は簡単に道具にしてる自分と同じって言えるのかな？」

そうカズマさんとカシスさんが続く、カズマさん……若干私怨が混ざってないか？

今の台詞……とにかく！

「だからこそ言える！オレはアンタを認めない！認めてたまるかぁ！」

「イツキ……そこはユースケさん達が締めるところよ……」

オレはカシスさんに続きそう叫んだ。それに素早くコノハが突っ込みを入れてくる。イヤさ……最近ユースケさん達は勿論、ゴールドとかユウイチに美味しいところ全部持つてかれてるからさ……つい……

「……それなら証明してみなさい。この電波を乗り越えて私わたくしのホウオウとルギアを倒してみなさい」

そう言うベネラは若干苛立っているように見える。しかし余裕はあるみたいで作り笑いに見えるが、あの余裕な憎らしい笑みは崩していない。そりゃ神のポケモンもいるしこっちのポケモンは電波の

影響でオレ達の声がまるで届かない……どうすればいい！

「やってみせるよ……それが、ポケモントレーナーとして今僕がやるべき事だ！」

そう力強くユースケさんが叫ぶとベルトに手を回す。まさか……

「ユースケさん……まさか……」

「ポケモンを出すつもりじゃ……」

ゴールドに続きユウコが続ける。オレもそう思ったとこだが……  
んなの！

「無謀だ！ポケモン達全てが完全に理性を失ってるんだぞ！お前……  
…最悪の場合自分の命も消すつもりか！？」

ジネルバの制止の言葉、でもそんなの聞く人じゃないのはオレはよく知っている。ユースケさんはその言葉を無視してそのまま構える。

「あの馬鹿！」

そう言うジネルバの台詞は最もだと思う。でもオレはこんな馬鹿は嫌いじゃないぜ？

「大丈夫ですよジネルバさん。ユースケは、アイツとユングラーなら……」

そうケンイチさんがまるで確信しているように言った。流石はユースケさん、信頼されてるんだな

「ユースケ……」

そう祈るように言うランさんは本当にキレイだ。正直、今『ドキッ』  
てしてしまった。まあ、こんな時に不謹慎だけど……ついそんな言  
葉を思ってしまう。

「行くよ……ユンゲラー！」

ユースケさんはベルトからボールを取り出しそれを投げる。そこか  
ら姿を表したのはユースケさんの相棒、ユンゲラーだ。しかし……

『グウ……ガガ……』

そこにはさつきユースケさんをからかっていたユンゲラーの姿は無  
かった。理性を失ったただの獣、そんな印象を感じられた。

「ユンゲラー！」

もう一度ユースケさんが叫ぶ。しかしそれでもさつきまでのまま暴  
走しているように感じる。

「ユンゲラー……どんなに……君が暴走しようが、どうなるのが…  
…」

ユースケさんがそう言う間にもユンゲラーが暴れようとしている。  
その両手にはエネルギーを蓄え始めている。あれは気合玉か!?

こんな……こんな事ってよ!

「君は僕の相棒だ！だから……だから、みんなを守るために僕に力を貸してくれ！」

「無駄よ。モンスターボールの中に入れてもその関係なくする程強力な狂暴化電波を受けてる以上、絆とかなんとかって精神論が通じるはずはないじゃない」

ユースケさんが叫ぶもそこにベネラが水を差すように言ってきやがった。あの野郎……ふざけてんじゃねえぞ……圧倒的有利だからって調子に乗りやがって……オレがそこで反論してやろうと口を開こうとした瞬間だった

「それは違う！モンスターボールも何も関係無い！僕とユンゲラーは僕にとって最高の相棒なんだ！電波なんかに負けるもんか！」

「現実を見なさい。あなたのユンゲラーはあなたを殺すかもしれないのよ？ そんな状況で精神論を貫いていればそれこそあなたの身は危険に冒される。ユンゲラーが仮に誰かの命を絶つてしまえば、もうユンゲラーは電波が解けてもその事実を知り、結果……絶望だけがユンゲラーを包むのよ」

ユースケさんはそう叫ぶがそう返してくるベネラの言葉も正論だ。それに対しユンゲラーはいつもの冷静さが無く、完全に暴走している。そしてそのままこちらに向いた。その気合玉で攻撃するつもりか！

「違う！僕達はみんなを傷つけるためにここにいないんじゃない！みんなを守るためにここにいるんだ！ユンゲラー、ここにいないみんなを……マサラにいるみんなも……守りたい人達を守りぬくために！僕の想いに答えて！」

『グ……ユー……ユースケ……？』

！？

な、なんだ！？

ユースケさんが叫んだかと思うと、突然ユンゲラーの体全体から光が放たれた。それと同時にユンゲラーが正気に戻ったようにさっきみたいにテレパシーで話し始める。本当になんだよコレ……まさか……ユースケさんの感情の激情をユンゲラーが本能的に察知して何か力を発揮してるのか！

「すごい……」

「ええ……信じられない」

今のユンゲラーを見てかゴールドとユウコが驚きの声を口にする。だろうな……オレだってビックリだ……にしてもこの光……なんだろうな、さっきまでの恐いぐらいの威圧感とは全く違う……なんか、優しさと温かさを感じる。それでいて力強くて……なんかそんな感じだ。

「ユンゲラー……」

『ワリい、ユースケ心配かけたな』

そう言うユンゲラーはさっきまでの口調だ。んでもって放つ光り？

オーラ？

のせいでとんでもない覇気を感じる。これが……カントーリーグ準

優勝者、ACEの称号を持つポケモントレーナー、ユースケさんの  
真の実力なのか！？

「そんな……こんな事って……」

『待たせたな！オレはいつでも相手になつてやる！』

ベネラが焦った口調で言うのに対してユンゲラーがそう強気な台詞  
を言う。

「勝負だ！ベネラ！」

そう叫ぶユースケさん、この人……凄すぎるぜ！

「ま、まさか本当にあの電波の影響を自力で跳ね除けるトレーナー  
が出てくるなんて……。正直意外。未知の可能性っていうのは貴方  
たちの事を言うのかしらね」

そう皮肉をタップリとこめた言い方をベネラはする。よっぽど悔し  
いみたいだな。ざまあないぜ！

「でも、戦えるのは貴方のユンゲラーだけ。それで私、ルギア、ホ  
ウオウを相手にするのは無理があるんじゃない？ まあどれか1つ、  
つていうのなら可能性は万一にあるでしょうけど。3大勢力の前に  
単体勢力は無謀よ」

ま、まあ……状況が変わった訳じゃねえんだよなあ……ピンチもピ  
ンチ大ピンチなんだよなあ……

「そんなのやってみなければ分からないです」



「…………『ACE』といわれる人物だからもう少しその部分くらいはお利巧だと思つてたけれど、やっぱりただのバカつて事かしら。まあ熱中というか熱血タイプならではの特性ね」

ベネラはそう言いつつ、気味が悪い笑みを浮かべる。確かに今の状況が良くなつた訳じゃねえ……………けどな……………ACEの異名は伊達じゃないんだぜ？

オレが旅だつてから偶然出会つただけのオレを導いてきたユースケさん。この人が起こしてきた奇跡みたいな事は奇跡なんかじゃない。努力してきた事が実つただけだ。だから……………ここでも本当になんとかしてくれそうだぜ。

「何だ、一体……………!？」

「何かが近づいている……………」

ん？

なんか急にサカキとトサカ頭が声を上げた。一体どうしたんだ？

何かが近づいてるって……………

「何かが近づいているってどういふ事だよ!？」

そう思つた事に素早く突っ込みを入れる。く……………オレが突っ込み担当になつてきてるのは気のせいかな!？」

「これはな、ジョウトの3聖獣の力を宿している、そうアイツは言つていた」

「「3聖獣!?!?」」

い……サカキの突然の言葉に思わず声を上げてしまつ。3聖獣……ライコウ達の事か!?

叫ぶ瞬間3体のポケモンが一瞬にして出現した。

「ライコウ!」

「エンテイ!」

「スイクン!」

オレ、ユースケさん、ゴールドの順番に叫んだ。ジョウトの3聖獣が勢揃いしやがった。焼けた塔で見た時も思ったけど絶景だな。ベネラも驚きの表情を隠せないみたいだな。

「待たせたな!」

「汝達の状況は把握している」

「更なる呪縛は我々が今解き放つ!」

それぞれそんな台詞を言う。それと共に3匹の体が突然輝きだした。な……なんだこれ!?

この感覚って……ライコウの時と同じ!?

「これでもう、思う存分戦えるはずだ!」

3匹の体の光が収まり、ライコウがそう言った。やっぱりか……よし、それなら思う存分にやれるぜ！

「あ、あれ見て！」

うおっ！？

突然コノハが出した大声とに驚きつつもオレはコノハの指差す、そこには3匹の鳥が舞っていた。一体は黄色の刺々しい姿の鳥、一体は水色の綺麗な姿の鳥、そしてもう一体は体中々に炎を身に纏った鳥だ。あれって……まさか！？

「ファイヤー！」

「サンダー！」

「あれ、フリーザーじゃない……！」

ケンイチさん、カズマさん、カシスさんがそれぞれ声を発した。あれが……カントー伝説の3鳥……ゴールドも咄嗟にポケモン図鑑を開いている。

「……伝説の3大鳥ポケモン……サンダー、フリーザー、そしてファイヤー……」

「チィ、3聖鳥までも現れるなんてね……」

苛立つように言うベネラ。その言葉にはもう、余裕は一切感じられない。ま、まあこんな状況になれば仕方ないか

『我らも助太刀致す!』

『オレ達の君主に手を出すなんざ良い度胸してんな……』

『私達もここからは参戦させてもらおう』

これって……テレパシーか。もうそんなのばかりで慣れちゃったぜ!

にしてもサンダー、フリーザー、ファイヤーがルギアの守護鳥ね……確かスクールの古典の授業でそんな話が無かったようなあったよな……ああ、分かんねえ!

「よし、これからチーム編成を行う!」

「ち、チーム編成?」

うおっ!

突然ジネルバがそう声を荒げた。その突然過ぎる言葉に疑問の声を出すのはアキトだ。チーム、編成か……

「相手はジョウトに伝わる伝説のポケモンだ。うまく戦力を考えねばならない。まずユースケ達はルギアを頼む。ゴールド、ユウコ、シルバー、サカキさん、三聖獣はホウオウを。三聖鳥は空からルギアとホウオウの攪乱をしつつ、援護を頼む」

「ちょっと待って! それじゃあベネラはどうするの!?!」

サクラが素早く突っ込みを入れる。流石はしつかりもののお姉さんタイプ、重要な事は忘れてないぜ。それに対して軽く吹くような笑い声を出すジネルバ。一体どうしたってんだよ？

「アイツは俺がやる。誰にも手は出させない」

「ちょっと待つてください！ ジネルバさんだけでは勝てない敵だと言っていたじゃないですか！」

そうユースケさんが反論する。だが、ジネルバはそれにこう返してくる。

「勝てない敵が相手でも戦うのが君たちのポリシーだろ？ それに…… バカ姉貴の尻拭いってわけではないんだけどな、あのバカは俺が倒す！ 誰にも手は出させない！ 邪魔はさせない！ アイツは俺の獲物だ」

「……………」

オレ達は一瞬、ジネルバの気迫に完全に呑まれたように感じる。にしてもポリシーってよ……別段そう言う訳じゃないんだけどよ……

「良いわ。ならば受けてたってあげる。かかっていらっしやい、ジネルバ」

「では行かせてもらおうか。おっと……皆」

そう言うベネラに対してジネルバはゆっくりと向かっていく。その途中急に立ち止まってこっちに振り向く。なんだよ。

「必ず生きる！　これが最後の戦いだ。絶対に死ぬなよ！！」

そう言うとジネルバは素早くベネラの正面へと駆けていった。へっ！

そんなの当然だぜ！

「どうしよっか、この状況」

サクラが本当に参った表情でそう言う。だよな……聖獣やら伝説の鳥やらの登場で色々混乱してる上にアレだもんな……たまったもんじゃねえよ……

「とりあえず逃げる訳にはいかないでしょう」

そう言うユウイチもなんか少し諦めたような表情だ。そりゃ……常識的に有り得ない展開ばかりだからなあ……こんな表情になっても仕方ないぜ……

「そうだね……ここまで来たんだ。これが最後っていうんだったらさ、もう少し頑張ってみようよ。それで、この嫌な戦いが終わるんだったらさ」

ユウイチに続くようにユースケさんが言う。そうだよな……ユースケさんの言う通りだよな

「うん、あたしもユースケと気持ちは同じだよ」

「たまにはカズマみたいに馬鹿に徹するのも悪くないな」

「おい……だけどそうだな。コイツでラストにしてやるっ！」

「それがわたし達に今出来る事だもんね！」

そうランさんにケンイチさん、カズマさん、カシスさんと続く。そうだな……オレ達もこの人達に負けてる訳にはいかないよな！

「コノハ、ユウイチ、サクラ、アキト」

「分かってるわよ！これで終わらせるわよ！」

オレがみんなの名前を呼ぶとコノハがそう力強く叫ぶ。それからみんなを見渡すとみんなゆつくりと、それでいて力強く頷く。みんなも覚悟を決めたみたいだな。んでだ

「ゴールド、オレとちょっと賭けをしねーか？」

「か、賭けですか？」

そうゴールドに提案してみる。当然のようにゴールドは首を傾げる。ま、当然だろうな……

「ああ、オレ達が先にルギアを倒したらオレの勝ち、お前達が先にハウオウを倒したらお前の勝ち。で、どうだ？」

まあ、分かると思うんだけどこれからの強大な敵と戦う訳だからさ、モチベーションを上げる意味を込めてオレはそう提案した。絶対に勝つって意味も込めてな。

「何を賭けるんですか？」

オレの言葉の意味を察したのかそうゴールドが返してくる。そうだな……

「ワカバ食堂でAランチ奢りなんてどうだ？」

「いいですね！ どうせならみんなでやりましょうよ。で、負けたほうが全部自腹で」

「おい、それ本気が！？」

「出来たらですよ。でも、その賭けはやらせてもらいます」

そうゴールドが返してくる。負けた時のリスクは確かにデカいが……リターンだってデカい、こういう賭けは嫌いじゃないぜ！

んじゃ、そう決まれば行くぜ！

「行くぞ！勝負だ、ルギア（ホウオウ）！」

オレとゴールドは同時に叫ぶとそれぞれの相手に向けて走っていった。さあ、最後の勝負だ



**本領発揮！反撃開始！（後書き）**

次回に続く！

総力戦！ルギアを倒せ！（前書き）

ルギアと対峙することになったイツキ達は……

## 総力戦！ルギアを倒せ！

現在ルギアとの戦闘中だ。結局あの化け物とともにやり合う訳にもいかないので飛行可能なポケモン数匹で、牽制をしつつ作戦を立ててみる事にした。現在空中にいるのはピジョットにコノハのヨルノズク、それからサクラのムクバードにユースケさんのリザードンにカズマさんのオオスバメだ。サクラのムクバードは遠距離に攻撃出来る技が無いからさつき出てこなかったんだな。

「エアスラッシュ！」

『ピジョオ！』

そうオレが先陣を切って叫ぶとピジョットは翼を奮いルギアに対してエアスラッシュによる攻撃を行った。空気の刃がルギアに直撃！

どうだ！？

『ギャオオオ！』

く……エアスラッシュが効いてない！？

確かにエアスラッシュはルギアに直撃していた。なのに……全くダメージなしかよ……逆に上げられた咆哮でビビってしまう始末だ。くそ……化け物かよアイツは！？

「アンタは何やってんのよ！次はわたしよ！ヨルノズク、エアスラッシュ！」

『ホーウ!』

オレに続く形でコノハもヨルノズクに攻撃させる。それでもダメージが無いみたいで相変わらず咆哮をあげた。ヨルノズクの攻撃も通らないのかよ……一体どうすればいいんだよ……

「遠くからが駄目なら一気に距離を詰めて! ムクバード、ブレイブバード!」

『ムク〜!』

そうサクラが無謀にも接近戦を心みる。おいおい……そんな無謀な事なんてしたら……

『ギャオオオン!』

!?

なんだあれは!?

ルギアは吠えると口を開き5条の光りの光線を放ってきた。コイツは……

『ムクツ!?!』

『ピジヨツ』

『ホオ!?!』

その光線はオレ達のポケモン達に霞めた。打たれ強いピジヨットの

ダメージは大きくないみたいだけど……ムクバードはバランスを崩し墜落していき、ヨルノズクはその場に踏み止まるけどゆっくりと降りてくる。

「そんな……ヨルノズク、戻りなさい！」

「ム、ムクバード、戻って！」

そう素早くそれぞれのポケモンを戻すコノハとサクラ、まともに揺さぶる事すらこんなに難しいのかよ！

「とりあえずダメージを与えないと……カズマ、イツキ、僕達が隙を作るから続いて！」

「おう、一気に行くぞ！イツキ、遅れるなよ！」

「分かってますよ！」

このままじゃまずいと判断したのかユースケさんがそう叫んだ。よし！

「頼むよりザードン、オーバーヒート！」

『リザアアア！』

そんなユースケさんの指示でリザードンは極太の熱戦を放った。あの程度は上空を暴れ回るルギアであるがその的はでかい上にそこまですぐ早い。見事にオーバーヒートは直撃、大きな爆発が起きルギアは大きくバランスを崩した。よっしゃ！

今だあ！

「ピジヨット！」

「オオスバメ！」

「ゴッドバード！」

『ピジヨオオ！』

『スバア！』

オレとカズマさんが叫ぶとピジヨットとオオスバメは高速で突撃していく。もちろん体制を崩しているルギアには対処は不可能だ。貰った！

『ギャオオオン！』

オレ達が放った攻撃は見事に炸裂、そして悲鳴を上げながらルギアは落下していく。これでやれなきや……

『ギャアアアアス！』

！？

「げっ……………！」

「嘘！？」

「冗談キツイぜ……………」

オレ、ユースケさん、カズマさんの順番で声を上げてしまう。あ、あれだけの攻撃を堪えるのかよ!?

『ギヤオオオス!』

ツ!?

またルギアが吠えた。だがと今度は攻撃がとんでこないが、変わりにルギアの体にあつた傷が治り始めた。おいおい……あれってよ……

『自己再生……だと……』

そう言うのはユンゲラーだ。やっぱりユースケさんの感情に関係してるのか、さっきまでの激情が収まっている今はさっきの光りは放っていない。あの力って本当に何なんだろう……やっぱりコントロールもなんかもあつたもんじゃないだろうな……

『ギヤアアアス!』

!??

完全に不意を付かれた。一瞬油断した隙にさっきと同じ光線を放ってきている。く……攻撃の後で隙だらけの今じゃ回避が間に合わない!??

「戻れ、ピジヨット!」

そうオレは焦ってピジヨットをボールに戻した。それはユースケさん達も同じで完全に肝を冷やしたような顔をしている。ボールに戻

したおかげで当たらなかつたけどさ……今の当たってたら……そう思うと本気でゾーッとする。ただじゃ済まないだろうな……

「冗談じゃないぞ……いくらやってもこれじゃ勝負にならないじゃん……」

そう言うのはアキトだ。確かにあれだけの攻撃をして倒しきれないなんてただの化け物じゃねえかよ！

伝説っただけあるぜ……

「一点集中攻撃なら……」

！？

そう突然ユウイチが呟く。一点集中攻撃だっ！？

「お前もそう考えてたか」

「ええ、これしかオレにはアイツを討つ方法が思い付きませんよ」

そうケンイチさんが言い、ユウイチが続く。一点集中攻撃ってよ……まさか……

「巨大マダツボミの時のをやるの？」

「ああ、それが出来ればあの化け物だろうが！」

そう尋ねるサクラにユウイチがそう言う。確かにアレならなんとかなるかもしれないけど……そんなの



「オレ達に当てられるのか？」

そう不安気にオレが言う。相手は伝説のポケモンだ。当てるだけならともかく一点に集中させるなんて……かなり難しい芸当だぜ……

「大丈夫だよ。なんのためにわたし達がいると思ってるの？」

そう笑顔で言うカシスさん。そうか……そうだよな！

「あたしとユースケとカシス、ケンイチくとカズマくとアキトくん、それとコノハちゃんでなんとかしてみせるよ。だからイツキくん、サクラちゃん、ユウイチくん、安心して究極技を撃って。それで決着を着けようよ」

そう言うランさんの口調はいつになく力強い。やっぱり気合い入ってんな。

「はい！」

そうオレはランさんの言葉に頷く。この人達が援護してくれるならなんとかなるはずだ。全てを託された以上、失敗する訳にはいかないな……

「それじゃ行こっか！」

そうユースケさんが力強く言った。よおし、行くぜ！

「オーダイル、君に決めた！」

『ダイル！……ダイ！？』

オレがボールを投げるとオーダイルが姿を現した。気合いを入れるように叫んだと思うと何故か腰を抜かしている。まあ……ルギアだからな……そりゃ驚くわな

「頼むぜオーダイル、この間と同じ作戦をやるぞ。ハイドロカノンでユウイチ達のラストバースとハードプラントに合わせるぞ。それで終わらせる！」

『ダ……ダイ……』

そう焦りながらもオーダイルはオレに返してくれた。多分こんな事態に陥るなんて考えた事も無かったんだろうな……ま、オレもそうだし当然か……目もなんか弱気な目だし……でもな！

「落ち着け！」

『ダイ！？』

オレがそう怒鳴るとオーダイルが驚いたように声を上げ、それからオレは続ける。

「オーダイル、お前が弱気になる気持ちも分からないでさいさ。だけどな、お前が戦ってきた相手はみんなもっとすげえ奴だっただろ？」

始めて戦ったジムリーダー、ハヤトさん、苦汁を舐めさせられたアカネ、可愛い顔してえげつなく強いミカン、暑苦しくなる程暑いバトルをしたシジマさん、本当に厳しくて手強かったヤナギさん、ド

ラゴンの強さを持って挑んできたイブキさん、それからコウにアキト、ゴールド、それからユースケさん、そんな凄い人達と戦ってきたオレとお前のコンビなら！

「ここでよ、ビビッて本当の力を発揮なんて出来なかつたらよ、ソイツらに申し訳ねえだろ！だからここは踏ん張ろうぜ！踏ん張ってここで終わりにしてやるうぜ！」

『……ダイル！』

オレがそう言い切るとオーダイルは少し時間を置いてから力強く頷いた。よし、目もいつも通りに戻った！

これならやれる！

「分かってるなサクラ、イツキ、狙いはルギアの頭、オレにタイミングを合わせる！」

そうユウイチが指示を出してくる。んなの分かってるよ！

「ああ、そっちこそミスんじゃねえぞ！」

そうオレは返してからオレはルギアの方を見る。タイミングを図らないとなた……

「ガブリアス、ドラゴンクロー！」

『GRAAAA！』

先手必勝と言わんばかりにアキトのガブリアスがルギアに飛び掛か

った。おいおい……それは……

『ギヤアアス!』

『GA!?!』

「ガブリアス!」

まあ、案の定ルギアに攻撃をぶつける前に翼に叩き落とされた。

なんでだ?

前から思ってたけど、アキトって強いのになんでこんなに嘔ませ犬なんだ?

「今だ!ウインディ、オーバーヒート!」

そう言うケンイチさんは鬼だと思う。翼を奮っていて出来た隙をついて、ケンイチさんのウインディが跳躍して突撃する。そして……

『ガウウウウ!』

『グギヤアアア!?!』

それは見事に直撃、そこに大きな隙が生じる、今か? いや、まだだ!

「ユンゲラー!」

「ピカチュウ!」

『行くぞ、ピカチュウ!』

『ピカア!』

そんな声が聞こえたかと思うとピカチュウを抱えたユンゲラーがルギアの頭の側に現れた。何をやる気だ？

「電磁砲行つけええ!」

『ピイツカツ!』

ピカチュウはユンゲラーの腕から飛び出して特大の電撃を放った。それはルギアを包み込むように爆発を起こす。な、なんてパワーの電磁砲だよ……ルギアも痺れてるような感じだしよ……

「今だ!サイコマグナム!」

『貰つとけえ!』

そんな隙だらけのルギアにユンゲラーはギリギリまで接近していた。そしてその拳をルギアの額に叩きつけた。その拳からまるで光りの矢のようなエネルギーが放たれ、ルギアが大きく後退する。すげえ……これがサイコマグナム……それと噂のユースケさんとランさんのラブラブアタックって奴か……これが最大のチャンスじゃないか? なら、これで決めてみせる!

「行くぞ!イツキ!サクラ!」

「おう!(うん!)(」

オレとサクラは全く同じタイミングで叫ぶ、狙いは一つ、ルギアの頭！

「ハイドロ……」

そこまで叫んだところで言葉が途切れる。なんとルギアからオーラみたいなものを発生させてくる。コイツは……一体……

「アレは……サイコブースト!？」

そう叫ぶユースケさんは焦った表情をしている。サイコブーストって確かケンスケって人のフリーデンが使った技だよな……マズクね？

伝説のポケモンにそんなの撃たれたらみんな纏めてお釈迦だぞ……どうする！

『ギャアアアア!』

き、来やがった!？

特大の念の塊がこちらに向かってくる。こうなったらハイドロカノンで！

「カシス、ジュカイン、カイリユー、やるぜ!」

「お任せ! イツキ、サクラ、ユウイチ、切り札はまだ撃たないですよ!」

そついいカシスさん達が前に出る。何をするつもりだ!？

「ジユカイン、死なば諸ともだ！リーフサイクロン！」

「行っけえ、カイリユー必殺の、彗星郡だあ！行っけええ！」

『ジユウウプー！』

『リュウウウー！』

そんな叫びと咆哮が響く。二つの特大のエネルギーがサイコブーストと激突した。うく……その強すぎる衝撃にオレは吹っ飛ばされそうになるがなんとか踏み止まる。ここで死ねるか！

オレはもう一度前を向く、そこではエネルギーのぶつけ合いが行われている。やっぱり伝説の力は強大でリーフサイクロンが押され始めている。

「このままじゃ……」

そう弱気な事を言うサクラ、畜生……どうする！？

「ちよろっと」

！？

突然そんな聞き慣れた声が聞こえてきた。オレは声の主の方を見る。あ、あれは！？

「わたし達がいる事忘れないでくれる？」

『そつだよ』

そう言うコノハの隣にいるルカリオその両手の間には特大の虹色のエネルギーの塊、あれは……いつかの！

「行くわよ……これがわたし達の……全力、だあああああ！」

『ソオオルサンシャイン！』

そう叫ぶコノハとルカリオ、ソウルサンシャイン、ありとあらゆるものに宿る波動を少しずつ借りて放つコノハのルカリオの切り札だ。隙がデカすぎるってリスクがあるが、その威力は馬鹿げている。それは一直線にサイコブーストに向かっていき激突した。それにより弾けとんだ。その時の爆発は強すぎる。その衝撃によって……

「キヤアア！」

『コノハ！』

く……コノハがその衝撃に堪えれず吹っ飛ばされた。こんなところで吹っ飛ばされたらコノハは……くそお！

「コノハア！」

「イツキ！」

オレは爆風に乗るように地面を蹴って跳び、コノハに向かって手を伸ばす。それにコノハも手を伸ばしてきたからなんなくコノハを捕まえる事が出来た。けど……跳んだのはいいけどこれからどうする……っつてうわっ！



『無茶しすぎだよ。イツキはさ』

そんなルカリオのテレパシーが聞こえた。その瞬間足が捕まれそのまま地面に落ちた。イテテ……

「大丈夫か、コノハ……」

痛みに堪えつつもオレはそう呟く……無茶はするもんじゃねえな……

「いたた……うん……ありがと、イツキ……」

そう言うコノハの頬が少し赤いのは気のせいだろうか。

「大丈夫ならいい。それよりも今は！」

オレはルギアがいる方向を見る。爆発が晴れたその先にはさっきの強力過ぎる爆発を近くで受けたため体制を崩していたルギアがいた。オーダイルはあの爆発にも動じずしっかりと立っている。行ける！

「サクラ、イツキ、今だぁ！」

そうユウイチが叫ぶ行くぞぉ！

「オーダイル、フルパワーのハイドロカノンだ！行っけえ！」

「メガニウム、これで終わりにするよ、ハードプラント！」

「ブラストバーンで終わりにするぞー！」

『ダアアイル!』

『メエグウウ!』

『バアアアクウウ!』

オレ達3人の叫び、3体の咆哮が響き3つの技はルギアの頭に直撃した。そして再び大きな爆発が起こった。

「やったの……」

「さあ……な……」

そういうコノハの言葉にオレは返す。しかしオレは嫌な予感がして仕方なかった。

総力戦！ルギアを倒せ！（後書き）

次回に続く！

## 最大のピンチ（前書き）

という訳で久しぶりの本編の更新です。

イッキ「どういう訳だよ……」

ルギアに持てる全力をぶつけたイッキ達、戦いはどうなる？

## 最大のピンチ

オレ達の究極技をルギアに叩き込んだのと同時にゴールド達も一斉攻撃をホウオウに叩き込んだみたいだ。

「流石にコレだけ受けて耐える事は無いよね……………」

「それが理想的なんだけどね……………」

そう希望を言う様に言うサクラとやばい現実を理解しているユウイチ。確かにオーバーヒートと2発のゴッドバードを喰らって無事だった化け物だからな……………倒れるとは思いにくい……………けど今のは一点集中攻撃だ。さっきより威力がある究極技だからな。致命傷はおつてるハズだ。ホウオウにしたってあれだけ撃たれたら致命傷は間違えられないと思うけど……………

『ギヤアアアアアアアアアアアア！』

『ホオオオオオオオオオオ！』

！？

爆発の中から咆哮と共に光線が飛んでくる。強烈な風圧と虹色の炎が……………これは……………

『ダイ……………！？』

『オーダイル！』

今のあまりにも急な攻撃に全く反応出来なかった。直撃はしなかったけど……

「大丈夫か!？」

『ダイル……』

そう弱々しくオーダイルは頷いた。畜生……あれだけの攻撃を当ててもあんな馬鹿なぐらいな攻撃してくるなんて……みんなは、みんなは大丈夫なのか!？」

オレは周りを見回す。みんなギリギリのところまで回避出来てるみたいだけど……ポケモン達がトレーナー達をかばったりしてみんなダメージを受けすぎたみたいだな……このままじゃマズイぞ……

「あれは何だ!？」

「せ、聖なる炎……ハウオウの専用技です!!」

アキトが今の攻撃をなんとか回避しつつもそう叫ぶ。ハウオウの厄介過ぎる炎だから仕方ないか……それに対してゴールド、凶鑑を持つてるから分かるのか……でもアチチ、容赦なく炎は襲って来やがるぞ……

「くそ、やはり詰めが甘かったか……!」

「どうすればいいのよ!？」

トサカの苦虫を噛むような言葉に半ばヤケクソ気味に叫ぶコノハ。

「んなもんオレが聞きてえよ！」

そうコノハに怒鳴り返す。本当にどうしたらいいか教えて欲しいぜ……そうしてる間にも煙りが晴れる。一体どうなってるんだ……？

！？

「なっ！？」

「信じられない……！」

「嘘でしょ……」

そりゃオレもユースケさんもランさんも声を上げちまうぜ……あんなセルギアとハウオウはピンピンしてるもんな……しかもあの野郎、ふざけるなよ……あれって……

「じよ、「冗談じゃないぜ……」

「いくらなんでも反則でしょ……」

「勘弁してほしいな、流石にコレは……」

カズマさん、カシスさん、ケンイチさんの順で言った言葉。そう言うのも無理は無いぜ……なんせ自己再生使って僅かでもあった傷をいやしてんだからさ……本当にどうすりゃいいんだよ……

「フライゴン、砂塵破壊光線……！」

『ギギーッ!!』

うおっ!?

そんな指示が聞こえたかと思うと破壊光線がとんできてルギアとホウオウに直撃した。コイツは……ジネルバとフライゴンの攻撃か! 「ジネルバさん、なんで」

そうユウイチがジネルバにそう聞く。それに視線だけでジネルバ答應た。へへ……ジネルバの奴、勝つたみたいだな。にしてもマズイぜコイツは……こっちはもう色々限界だぜ……オレの方もポケモンのほつもさ……

「ここは俺がやる。お前達はポケモンの回復に勤しんでくれ」

「分かりました」

そんなジネルバの台詞に頷くゴールド。回復たってゲームみたいに薬を使ったら体力が回復って事は絶対無いけど……今のうちに傷とかぐらいと治しといてやらないとな……それにまだ可能性が無くなつた訳じゃない!

可能性があるのならオレはそれに賭けるぞ!

「フライゴンだけでは不安だな。行け、カクレオン! メガヤンマ

! ヌケニン!!」

『グエッ!!』

『メガヤンツ!!』



『又ん!!』

そうジネルバがいいボールからカメレオンのようなポケモン、カクレオン。蜻蛉にそっくりなポケモン、メガヤンマ。んで蝉の抜け殻を連想させられる、又ケニンだ。カクレオン……だと……まさか！

「フライゴン、ルギアに竜の波動！　メガヤンマはハウオウに原始の力だ!!」

『ギギーッ!!』

『メガヤンツ!!』

ジネルバの指示が始まった瞬間にカクレオンはその姿を晦まし、フライゴンとメガヤンマがルギアとハウオウに攻撃を開始した。やつぱりかよ！

「怒りの湖で攻撃ってカクレオンからの攻撃だったのかよ……」

そう何故か微妙にいらつきながら言うオレだ。もちろんあんなセコイ手を使いやがってとか思ってたりする。その言葉にジネルバは「そうだ」と返してくる。ちえ……見えない何かがあるってのまではあの時に分かってたんだけどなあ……なんか悔しくなってきたぞ……とりあえず今はオーダイルとピジヨットの治療だな……オレはピジヨットのボールを取りだしスイッチを押してピジヨットを出す。それから携帯用のきのみケースからオボンの実とこれまた携帯用の薬箱からすごい傷薬を取り出す

「大丈夫か、オーダイル、ピジヨット」

『ダイル……』

『ピジヨ！』

そうオーダイルは辛そうな、ピジヨットはまだまだやれる余裕をそれぞれ見せてくれた。

「とりあえずコイツでも食っててくれ……」

オレはそう言いながらオボンの実を渡し、それから怪我が酷いオーダイルにすごい傷薬を吹き掛ける。それにオーダイルは少し顔をしかめる。少し我慢しててくれよ……

「もうちょつとだからな……もうちょつとだけ無茶するけどついて来てくれるよな……」

『ダイル……！』

『ピジヨ！』

そうオレの台詞にオーダイル達は答えてくれる。わりい……お前達の命はオレが預かったぜ……！

「ルギア、全てを吹き飛ばしなさい！　ホウオウ、あなたもよ！」

『ギヤアアアアス……！』

『ホオオオオオオ……！』

うげ……オーダイルとピジヨットとあんな話をしてた矢先にそれかよ。ベネラの指示で、ルギアに集まる莫大なエネルギーの念のオー

ラ。ハウオウの口元に集まる橙色のエネルギーあれは……この野郎！

「さ、サイコブースト！」

「破壊光線！？」

「チイ、又ケニン！」

『又ン』

ユースケさんとゴールドもあの技の正体に気づくと同時にジネルバは又ケニンに指示をだす。何をする気だよ！？

「撃滅しなさい！ ルギア、サイコブースト！！ ハウオウ、破壊光線！！」

「又ケニン、2匹の攻撃を正面から頼む！」

「ジネルバ！？」

狂ったように指示をするベネラ。それに対してジネルバは慌てることなく、又ケニンに攻撃を受けさせようとしている。く……んな無茶な！？

な！？

「なっ！？」

「嘘、攻撃が効いていない！？」

オレはついマヌケな声を上げてしまっ。それは攻撃した側も同じでベネラも軽く驚いている。コイツは……特性か？

「ヌケニンだけが持つ不思議な特性、“不思議な守り”。自分に効果抜群の攻撃でないものは全てこの特性により効果なしってものさ。中々トリッキーだろ？」  
なるほど……ってバカ！

敵に手のうちを……

「ホウオウ、火炎放射」

「えっ」

『ホオオオオオ！！』

自慢気に言うジネルバの隙をベネラが突き、火炎放射がヌケニンを直撃した。ヌケニンはその一撃でダウンしてしまう。だから言わんこっちゃない！

「も、戻れヌケニン！」

「油断大敵よ。アンタの最大の弱点」

「……だったな」

……よそ見するとか信用なんねえ……確か誰かがコイツがポケモンリーグ準優勝まで行ったって聞いたけど、そこで負けた理由ってよそ見してたからじゃないのか！？

「でも、アンタだけで倒せるとは思えないわ。到底時間稼ぎも無理。諦めなさい」

「諦めるわけないだろ？」

「僕達は諦めないぞ！絶対に勝つんだ！」

「そうです!!」

「ぜってえに負けてたまるもんかってんだ！」

ベネラの言った言葉にオレはもとよりジネルバ、ユースケさん、ゴルドは力強く叫ぶ。

「いいわ。では……………ここで果てなさいッッ!!」

ベネラが右手を振り上げ、ルギアとハウオウに攻撃の指示を与えようとす。まだだ、まだ万策は尽きた訳じゃない！

オレはオーダイルとピジョットに指示を出そうとしたその瞬間だった!?

『ギヤアアアアアアアア!!?』

『ホオオオオオオオオ!!?』

「!?!」

突如、ルギアとハウオウに攻撃が突き刺さった。ルギアの翼は少し凍りつき、ハウオウの体は電撃を受けたのだろっか震えている。

勿論、突然すぎる事に反応が追いつかない。今の攻撃は……！？  
にしても威力が馬鹿げているな……

「ここに攻撃を当てられるのはコガネデパートのみ……！ ルギア、  
ホウオウ、コガネデパートを破壊しなさい！！」

『ギヤアアアアアアア！！！！』

『ホオオオオオオオ！！！！』

ベネラの素早い判断と指示で、操り人形と化したルギアとホウオウ  
がエアロブラストと破壊光線を放つ。にしてもとんでもない思考パ  
ターンだよな……人格は尊敬なんて出来ないけど、トレーナーとし  
てはかなりの技量だ……コガネデパートに向かっていく光線しかし、  
からも一筋の光と強烈な炎が応戦するように姿を現し、エアロブラ  
ストと破壊光線を相殺した。本当にどうなってんだよ……何が起こ  
ってるんだ！

「一体、どうなっているの……！！？ 私を邪魔する者がまだいると  
いうの！？ あんな子供以外に！！」

拳を強く握り、怒りを露にするベネラ。へえ……あの冷徹女もこ  
うなるんだな。

「アンタの邪魔をしたい人なんてそりゃたくさんいるでしょ！！」

「自分の事しか結局考えていないんだからな、アンタは！！」

コノハとアキトがベネラにそう言い放つ。ベネラの顔つきが段々怒

りに満ちていく。よし、このまま怒らせて冷静さを……

「ならば今度こそ。ルギア、ホウオウ!!」

うぎゃ……迂闊だったぜ……強大な力を持つてんに挑発は危険だったのに……攻撃が来る。まさにその瞬間だった。突然、ゴールド達の背後から放たれる2つの強烈な電撃がルギアとホウオウを襲う。それも断続的に。

「……!!?」

「よぉ、待たせたな……」

「遅くなってゴメンね」

今のは!?

最初の声は知らない。でも後の声は知っている。

「え……」

「嘘……」

オレ達は唾然や絶句の表情を露にする。まさかわざわざ戦場に乗り込んでくる物好きがこんなにいるなんて……

「よぉ、やっとこさ見つけたぜ。それに……やけに賑やかだな」

「こ、コウタ!??」

コウタとゴールドにそう呼ばれた奴は黒のシャツ、橙のジーンズを身に着けて髪の毛は黒のどこにでもいる感じの奴だ。なんかオレと

かカズマさんとキャラがかぶってる気がするんだけど……

「コウタ、でしゃばらないの！」

「わ、分かったっつーの！」

「く、クリスちゃんまでどうしてここに！？」

そう漫才をするコウタとクリスの会話を断ち切るランさんの台詞。そう、オレの先輩にどっからどうみてもそっくりな女の子、クリスがいたのだ。相変わらずのどっやって作ったかわからない髪型は建材有限公司のご様子だ。

にしても何しに来たんだよ。情報集めてるって言ってなかったか？

「決着を」

！？

オレの疑問を解消するように誰かが口を開く。その誰かはオレがさつき唾然とした理由を作った人だ。なんでアンタが……

「……………着けに参ったんどす」「……………」

その場に姿を見せた5人の舞妓さんが同時にそう、口にした。どうしてアンタ達がここにいるんだよ！

そろそろ知恵熱でどうにかなりそうになってきたぜ……この後の展開が一切読めないオレだった。



最大のピンチ（後書き）

次回に続く！

## 逆転の兆し（前書き）

追い詰められたイツキたちの前に現れたのは……

イツキ「その前にまずはアンタを追い詰めないとな……」

はい？

イツキ「更新が遅すぎじゃあ！」

話せばわかる！

イツキ「問答無用！」

ユースケ「ハハ……とりあえず本編をどうぞ」

## 逆転の兆し

「決着を着けに……来た？」

そう反復するように返したのはベネラだ。まあ、当然っちゃ当然だな。突然つてのにもほどがあるからな……

「申し訳ねえが、その詳しい事はオレが話させてもらうぜ、いいだろ？」

「構わないどす。コウタはんも知っておる事ですし、何よりロケツト団の情報を集めてもらっておりましたから」

そう続くコウタに舞妓さんだけど……さっきから全然状況が読めないんだが……

「……集めれてないけどな、大して。色々巡つてたから。まあ、いや。じゃあ話すとするぜ」

コウタは軽く、深呼吸する。はてさて、どんな理由があるのやら

「今から少し前……カントーでのロケツト団騒動が終わってから数週間が経ってから、エンジユの歌舞練習場の中であるモノが盗まれた。それはジョウト地方の秘宝であり、同時に歌舞練習場の舞妓さん達が代々守り続けてきた大事なものでもあったのさ」

「その大事なモノってまさか……」

コウタに続きユースケさんが何が分かったか悟ったようにコウタに

問う。大体話は読めたぜ……コウタは黙って頷く。やっぱりかよ

「ああ、皆の考えてる通りだ。盗まれた大事な秘宝にして舞妓さん達が守り続けてきたモノってのはそのヤローが持ってたやがる、“海鳴りのスズ”と“透明なスズ”さ。突き止められたのは本当についていさつき。エンジュからでも見えたぜ？ ルギアとハウオウの姿はな！」

「……成る程。つまり、このスズをアナタ達は奪い返しに来たのね」

「それはあんさんのような、穢れた心の持つ者ではありません！すぐに返しなはれ！！」

舞妓さんが一斉に怒号を放った。なんて言うか……迫力に欠ける気がするなあ……

「ねえ、コウタ。クリス。何で電波の影響を……？」

「ん？ ああ、あの後よスイクンとまた会ったのさ。エンジュシテイでな。偶然クリスもいたもんで。だからオレとクリスは半ばついでに加護を貰ったのさ。もしもの時ように」

「もしもの時？ どういう事なの？」

ゴルドの問いにコウタは答えてユウコが更に問い掛ける。なんて言うご都合主義なこと……にしてもスイクンが元々舞妓さんを尋ねていたのか……どういう理由でそんなことを？

「どういう事なんだ、スイクン？」

トサカ頭の言葉。この質問にスイクンはどう答えるんだ？

『あの方達は最後の希望。ホウオウ様とルギア様、両者を解放する、最後の……』

「最後の希望!？」

「それ、どういう事よ!？」

思わずオレとコノハは声を上げてしまう。最後の希望……!？

どういふことなんだよ!？

「さあ、まずは準備から始めるか。なあ、ルギアとホウオウを足止めくらいはまだ出来るか？」

「勿論だよ。僕達のパートナー達はまだまだやる気だからね」

「出来るに決まってるよ!」

コウタの言葉にハッキリと「できる」と答えるユースケさんとゴードルド。オレはオーダイルの方を見る。オーダイルとピジヨットは指示を待つように構えている。

「よし、なら頼みがある。オレはオレのすべき事をするからよ、ルギアとホウオウの足止め……時間稼ぎを頼めるか？これは皆にか頼めない事だからな」

「ああ、任せておけ」

「それくらいはまだ出来るって！」

「コウタ、お前は何するつもりなんだ？」

コウタの言葉にカズマさんとカシスさんはいつもの陽気な口調で返した。相変わらず軽い人達だな。それに対してケンイチさんはそう聞き返す。

「オレはまだこの中でまともなバトルが出来る連中ではフルな状況さ。だから……余力があるうちにあのオバサンから2つのスズを取り戻す！」

「コウタはん、スズだけではあきまへん！ 羽も取り戻して下さいまし！」

「ああ、分かった……！」

そう言う魂胆かよ……んじゃコウタ、頼むぜ……

「とりあえず、全員のポケモンの総攻撃が決まれば……ある程度の時間は稼げます。あんさんらの行動に全てがかかっております」

舞妓さんは口を揃えてそう言い切った。確かに攻撃を集中させればさつきみたいに上手く動きは止めれるハズだよな……にしてもオレ達の行動しだいか……へへ、上等じゃねえか！

やってやるぜ！

「とりあえず時間が無いよな。レントラーの電撃が強力だったとしてもあのパワーで長持ちなんて無茶だ！」

「そうだね……まずはひとつ決めないと……」

コウイチのの言葉にサクラが頷いた。作戦としてはコウタが鈴を奪い返すまでの時間稼ぎのファーストストライクに止めまでの時間稼ぎのセカンドストライク……どうも辛い戦いになりせうだよなあおい！

「……行きなはれ……」

『ブウ……！』

『シィア……』

『ボルツ……！』

『ブラッ……』

『フィ……』

「い、イーブイの進化体達……」

「こんな数を間近で見れるなんてね……」

そう考えてるところに舞妓さん達がボールを投げるとイーブイが進化したポケモン5体が姿を現した。ゴールドやユウコも驚いている様子だ。こう見ると絶景だな……

「流石に一部ではイーブイマニアとか囁かれております、ヨウイチはんには敵いそうにありませんが、少しは腕が立つポケモン達です。お力になれば」

「充分過ぎる戦力だ。あつて越した事は無いだろう」

「まあ、一応……親父の言う通りではあるな……」

舞妓さんの言葉にサカキが反応し、シルバーも親父と同意見するのは嫌そうにも頷く。イーブイ系のポケモンは良く知ってるから分かるよ。こりゃ頼りになるな！

「さあ、行こう！これが最後の勝負だ！」

「はい！」

ユースケさんの台詞にオレを含めた全員が頷いた。その時だったそこフライゴンが飛来し、それに乗っていたのは……

「ジネルバ！」

オレをそう叫ばせた男、そうジネルバだ。全く悪運は強いんだなあ……あんたもさ……

「おっ、いよいよ始まるか。今のオレの手持ちはフライゴンとカク



レオンだけだが、手助けくらいはさせてもらっぞぞ

「ところでコウタは？」

そう言うジネルバ、それにクリスはそう尋ねる。どういう状況なんだ……！？

「アイツなら、姉さんと駆け引きの最中さ。アイツの目を見ると反対できなかった。反論なんてさせてくれそうにない目つきだったしな」

そう答えるジネルバだ。あの野郎、無茶しやがって……

「とりあえず奴が戻ってくるまで時間をかせぐぞ。どうする？」

そうシルバーは尋ねてくる。そうだな……一斉攻撃が定石じゃないか？

それなら確実に一時的にでも止めれるだろうっからな。

「ならコウタが来るまで時間稼ぎといくか！一斉攻撃で一気に……」

「呼んだか？」

ちよ……ええ！

コウイチがかっこつけて指示を出そうとしたところに突然コウタが現れる。レポートを使ったってのは分かるけどさ、あまりにも突然過ぎやしないか！？

「早っ！？ちよつと奪い返すにしては早過ぎじゃないのか！？」

そうオレが素早く突っ込みをいれる。セカンドストライクやらあーだこーだ考えてたオレ達が馬鹿みたいじゃなかよ！

「オレの実力にかかれればこれぐらい余裕……」

「ホント、信じられないわよ。こういうところもイツキと同じでただのビッグマウスのへタレって印象なのに……」

そう言おうとする。コウタにコノハが素早く言う。あー、だから雰囲気似てるって思ったのか……ん？

「「おい！」」

そうオレとコウタは全く同じタイミングで突っ込みを入れた。この野郎……覚えてろよ……

「全く……とりあえず、コイツ、取り返して来たぜ！」

そう弱冠自慢げに取り返したものの、そう虹色の羽と銀色の羽、そして二つの鈴をポケットから取り出して見せた。すげえすげえ！

よくやってくれたぜ！

コウタは羽をそれぞれの持ち主、ランさんとゴールドに渡す。ランさんは銀色の羽のペンダントを再び自分の首にかけてから口を開いた。

「取り返してくれてありがとうコウタくん。それでどうやって取り

返したの？」

「キ、キルリアのトリックを使ったのさ。な？」

『キル』

コウタが弱冠赤くなってんのをオレは見逃さなかったぜ。そりゃラ  
ンさんにあんなとびっきりの笑顔を向けられたらああなるだろうな。  
まあそんな事よりコウタの意見に頷くようにキルリアが首を縦に振  
った。トリックか……中々味な技を使うなあ……

「ふう〜ん。意外とアンタもやるのね」

「ど、毒舌過ぎるだろ、それ！！」

ユウコの相変わらずの毒舌な台詞に即座に突っ込みを返すコウタだ。  
つい笑ってしまっけど、なんかオレもそのうち同じ事を言われそう  
で怖いぜ……

「ユウコ、これ」

ゴールドは無言でユウコの左手を取り片手に握っている虹色の羽を、  
ぎゅっと握らせ、そのままゴールドの手は離れた。

「……………持ってて」

「ひひ」

え……な、何この空気、突っ込みしづらいんですけど……

「ひょー！ さっすがラブラ　ギャツ！！！」

そこに馬鹿が茶化すけどクリスの手刀により遮られた。これは酷い。

「にははは！ ユースケとランもユウコ達を見習って何かやった方がいいんじゃない？」

「ああ、どうしてカシスはこのタイミングでそんな事言えるかな！」

「少しは自重してよ〜！」

ユースケさん達の方もなんかやってるよ……やっぱりカシスさんっていう大砲がいるから……そうは言ってるけどユースケさん達は顔が赤くなってるから、自分達も少しは自重ってか慣れた方がいいと思う……

「おお！ こっちもラブラ……そげぶ!？」

また馬鹿が余計な事を言おうとしたけどまたクリスの手刀が突き刺さった。馬鹿は死ななきゃ直らないのかも……

「と、とりあえず……後は舞妓さんだな」

「そうですね」

コウタは頭を両手で抱えたまま、言う。そしてコウタは続けてこう口にした。

「こっからが本番さ……!!！」

んなの分かってるぜ、ロイツで終わりにしてやる！

逆転の兆し（後書き）

次回に続く

不気味な終わりに（前書き）

という訳で多分そろそろラジオ塔編が終わりに近づいてきます。

ユースケ「本当に長い戦いだっただよ……」

イツキ「これで終わりと思うと嬉しいようで悲しいな」

コロボも終わりって事だからね。ではござぞぞ！

## 不気味な終わりに

2つの羽に2つのスズ。一時はベネラの手に渡ったけど、無事持ち主、ゴールドとランさん、それから舞妓さんのもとに戻ってきた。そして、舞妓さん達も動き出す。

「コウタはん、始めますぞえ」

「ああ了解したぜ」

始めるって何をさ？

奇妙な動きをしだすしと……

「何を始めるんだ？」

「降臨の儀式さ」

それをコウタに聞いてみるとそんな返事が返ってくる。降臨って……  
…どついう事だ？

「降臨の儀式？ 何よそれ？」

コウタの答えにすかさずツッコミを入れるコノハ。どうやらオレとコノハのコンビは両方ツッコミ体質らしい。

「降臨の儀式ってのは本来、ルギアとホウオウをあるべき場所で呼び出すための儀式なのさ。ルギアならアサギとタンバを結ぶ渦巻き島、ホウオウならエンジユにあるスズの塔とかな。そしてその儀式



には舞妓さんの協力が必要不可欠でもあったりするんだ」

うん、さっぱり分かん。

「舞妓さんの？」

そう尋ねるカシスさんはなんか分かったみたいだ。この人っておちやらけてるけどやけに頭の回転が早いよな。ユースケさん達をからかう言葉が湯水のように沸いてでるのは絶対そのせいだよな……

「ああ。舞妓さんは伝説のポケモンを招き入れるための特別な舞を長年練習してきた。そして秘宝でもある2つのスズも同時に守護してきたのさ。力と心、2つが備わった者に伝説への挑戦権を与えるため」

ほえ……うんつまりさ、舞妓さんは伝説のポケモンを呼ぶことができるんだな。まあかみ砕きまくった解釈だけど間違ってないよな。それよりも……

「コウタ、幾らなんでも詳しくすぎる。何でだ？ 舞妓さんともやけに接点がありそうだが」

オレがしようとしていた質問をケンイチさんが先に尋ねる。だよな。あまりにも詳しくすぎだっつて

「ああ、だって俺いとこ従兄弟だもん。守護担当の人間だから。身内ってわけ」

へえ、身内ねえ……うん？

「「み、身内!?!」」

コウタの予想外な答えに全員が驚きの声を上げる。いやね……こんなビックマウスのヘタレタイプが守護者の身内でいいのか……うん……

「コウタはん、皆はん! 準備が出来ました! お願いします〜!」

「りょーかーい、任しときな〜!」

舞妓さんに呼ばれ、コウタもそれに手を振って返す。ベネラはサカキが相手をしてきている。って事はオレ達のやることは一つ!

「みんな、分かってるよな? もう」

「分かってるに決まってるだろ!」

「当然だよ!」

「みんな、これで終わらせるよ」

コウタの言葉にオレが返すと、続いてゴールドと返す。最後に締めるようにユースケさんが言うと全員が首を縦に振った。

「ところで降臨の儀式でルギアとホウオウをどうするの?」

ちよっ……まさかのランさんの疑問の言葉。まあ……疑問っちゃ疑問だけど決戦モードに水を差された感じでなんか嫌だ!

『降臨の儀式は本来、ルギア様と我が主、ホウオウ様を招き入れるものなのですが、元々は怒り狂うルギア様とホウオウ様の怒りを鎮めるためのもの。つまり、この儀式をすれば』

「ルギアとホウオウが開放されるってわけか。なるほど、合致がいたよ」

ユウイチの言葉にスイクンは黙って首を縦に振った。ふむ……また分からん。もうちょっとかみ砕いて言ってくれよ……なんで怒りを収めたら解放されるとかさ……とりあえず決着まで後一步ってとこだよな！

「全ての力を出し尽くすぞ！ ここまで来たら全勢力をルギアとホウオウに向ける！ 加減は不要だ！」

強く言うジネルバ。それに頷いてから。オレはオーダイルとピジヨット以外のボールを取り出し全部投げる。そこから飛び出してくるのはドンファン、ブースター、ハツサム、アブソルだ。そこにさつきから出ていたオーダイルとピジヨットと共に並ぶ

「最終決戦だ。みんな頼むぜ！」

『ダアイル！』

『ピジヨット！』

『パオツ！』

『ブイ！』

『……サムッ』

『アブ!』

全員が力強い鳴き声を上げる。よし……いつでも戦えるな。

『アブ……』

今思うとアブソルと出会った時にコイツが予見していたのは巨大マダツボミじゃなくてこの事件の事だったのかもしれない。辛い事は分かりだったけど……ついにここまで来たんだ。終わりにしてやる!

「イツキ……」

ん?

そう決意を決めるところにコノハがオレに声を掛けてくる。その後ろには彼女のポケモン達が最後の準備をしている最中だ。コノハの奴、なんだろう……

「なんだよ?」

「その……ね?手、繋いでいい?」

は、はい?

なんだよ急に……本当にいきなりだな……

「その……あの……さっきみたいに飛ばされたくないから頼んでるだけよ!勘違いしないでよね!」



「みんな、頑張つて！」

カズマさんとカシスさんのそんな声が聞こえてくる。祈るように叫ぶカズマさんと喉がおかしくなりそうな声で叫ぶカシスさん。いつまでみんなの攻撃が続く？

「みんな、根性見せるわよ！」

「みんな、もうひと踏ん張りだから頑張つて！」

「オレお前達の事信じてるぞ！だから……この勝負勝つんだ」

「みんな、頑張つてくれ！」

オレの隣で夢中で叫ぶコノハ、ポケモン達を励ますように声を出すサクラとポケモンを鼓舞するように叫ぶユウイチ、アキトの叫び。

「お前達なら絶対にやれる！行けえ！」

そうオレはみんなに負けないぐらい力強く叫ぶ。その瞬間だった！

「ルギアの体が光ってる！？」

「どういう事だ……？」

「え……銀の羽が……ルギアに共鳴してるの？」

そう、突如ルギアの体が光りだしたのだ。それに驚きを隠しきれず言葉を漏らすユウコとさか。それに加えランさんの銀の羽も輝

きだし。ランさんは驚きの声を上げる。これって……

「あっちも！」

「ホウオウもか……」

「って事は……やっぱり！」

同じ事がホウオウにも起こる。それを見たクリスとジネルバもまた、声を漏らし、ユウコは手に握っていた虹色の羽根が共鳴するよいに輝きだしたのに気付く。おいおい……これってまさか！

「ルギアとホウオウが……鎮まった……！？」

ルギアとホウオウの様子が穏やかになっている。こ、これって……  
…そういうことだよ……オレ達は……オレ達は勝ったんだ！

「お前の負けだ。今頃、スバルが怒りの湖の装置を破壊し終わっている頃だろう」

どうやらこっちも終わったみたいだ。ベネラを追い詰めたサカキがそう言う。スバルって人の事は知らないけど……どうやら終わったみたいだな。

「スバルがか！？」

声を荒げて驚くケンイチ。その中ジネルバはサカキの隣に、いやベネラの正面に立った。

「姉さん、アンタの負けだ。潔く降参しなよ」

「くっ……!」

『汝の罪はとても大きい。しかし、今ならばまだ間に合う』

『罪を償うのだ……。今なら皆、まだ許してくれる』

うおっ!?

突然背後から突然聞こえた声に振り返るとホウオウとルギアの姿が。これってコイツらねテレパシー……。って事は!

「ルギア! ホウオウ! もう大丈夫なのか!?!」

『うむ。心配をかけたようだがもう大丈夫だ』

『汝達には返しきれない恩が出来た……。』

そうかい……。なんか本当に終わった感じだな……。それにしても恩ねえ……。そうだな、まずはなんか美味しいものを……

「あんたは何考えてんのよ……」

そうコノハはオレの手を握ってる手の反対の手で頭を抑える。出たよ必殺読心術……。てかいつまで手握ってるつもりだよ。爆発だって多分もう起こらないってのにさ……

「何が罪を償え!?! 何がまだ間に合う!?! ふざけるんじゃないわよ! 私はまだ諦めていない! 私の野望であり、悲願を達するまで私は諦めないわ! アンタ達の勝手な理屈で全て進めるんじゃないわよ!?!」



「勝手な理屈はあなたの方でしょう!!」

うおっ!

あまりに突然のベネラの言葉に正直驚いた。それに素早く反論するユースケさん。全くその通りだ。するとハハハ、とベネラは今までに見せた事も無いような狂喜に満ちた笑みを浮かべた。なんだよ……コイツ、本気で怖い……

「まあいいわ……。今回はもう私に残る手札はない。でもね……。私は諦めないわ。フフフ……。おバカさん達。よりもよって“禁断の扉”を開ける手伝いをしたなんてね……。では御機嫌よう。いずれまたお会いしましょう、皆さん」

その言葉と共にベネラは姿を消した。フリーインのレポートなのは分かる。勝った……。けどなんか終わった気がしないぜ……。後味の悪いよなあ……。どうせならスッキリ終わらせて欲しかったぜ……

「禁断の扉……。それって一体……」

ゴールドはそう、静かに呟く。まあ何にしても関係ねえ、何度来たって叩き潰してやるだけだ!

不気味な終わりに（後書き）

次回に続く！

奮いゝライバルとしてゝ（前書き）

なんとかかベネラを撃退したイツキ達は……

## 誓い〜ライバルとして〜

ベネラがいなくなって、舞妓さんやルギア、ホウオウ、三聖獣、三聖鳥はお礼を言ってから去っていった。それからコウタ、クリスもその場もいなくなった。正直この戦いに勝つ事が出来たのはアイツらのおかげだからな……いくら感謝しても足りないくらいだぜ……それだけこの戦いって危なかったんだよな……なんか寿命が縮んだ気がするぞ……

「……とりあえずこれでようやく終わったな」

そんな言葉が静寂のラジオ塔に響く。そう言ったのはジネルバだ。だよなあ……本当に終わったんだよな……長い上に辛い戦いだっただぜ……

「そうですね、ルギアもホウオウも解放できましたし」

「そうだな、正直言って本当に危なかった……」

そうユースケさんが言い、続けてケンイチさんがそう返した。全くケンイチさんの言う通りだぜ……何回死ぬかと思ったか。特にスピアーに槍を突き立てられた時なんて……う……思い出したら身震いしてきたぞ

「……なんだ？」

「お前に渡すものが2つある」

ん？

そうしてる間にもトサカ頭にサカキがモンスターボールを渡す。親から子へのプレゼントか？

「……………何のつもりだ？」

うお、なんて険悪な……………流石はトサカ頭……………

「別に企んでなどいない。純粹に修行を乗り越えたお前に会った時に渡そうと思っていたポケモンだ。私に罪はあったとしても、このポケモンに罪は無いだろう？」

「……………確かに。その通りだ」

トサカ頭は奪い取るようにサカキの掌にあつたモンスターボールを取る。全く素直じゃない奴。本当は絶対に嬉しかっただろ。それからサカキは今度は紙袋を取り出した。なんだよそれ？

「そしてもう一つ。これはお前の師匠からだ」

「……………!!!?」

な、なにに！

師匠だと！

最近よく話に出てきた責任感のカケラもない師匠がか！

気になったオレはトサカ頭に視線を送る。直ぐに紙袋をサカキから受け取り、中の手紙を開いた。

「……」

「とさか頭、何て書いてあるんだ？」

オレはシルバーに近づき、その手紙を見る……さてどこから突っ込みを入れてやろうかな……ネタは広大な……とりあえずは！

「汚っ！これは人が書いていい字じゃねえ！これは一種の才能だろ！」

そう思いつきり叫んでやる。オレだって字は汚い。それでも誰だって読む事は出来ていたぞ。これは下手って言葉すら使っているのかも分からねえ……

「少しは黙れ。この手紙にはこう書いてある」

……なん……だと……あれを読めるだと……って事はかなりコイツも字が汚いんだな。オレには分かるぞ！

「ウツギ研究所へ向かえ、と」

「ウツギ博士のところにか？」

「……大方そうだろう」

ウツギ研究所ねえ……なんでそんなところに……そうしてるとサカキは一同に背を向けてモンスターボールからドンカラスを出す。逃げるのか？

「待つてください！ 僕はあなたをこのまま」

あわわ、相変わらず険悪なユースケさんとサカキ、サカキに対してユースケさんが見せた顔は本当に怖かった。このまままた戦いになるのか？

そう思った瞬間にジネルバが手でユースケさんを制止したのだ。こいつはどういう事なんだ？

「ジネルバさん……？」

ランさんがそう言う。どうやらこの人もユースケさんを止める気は無かったみたいだ。どんだけサカキが嫌いなんだ。

「仮にも今回はサカキに借りが出来ている。捕まえたいならあの人をまた何かをしでかした時が一番だな」

「……貸し借りなし、という事が」

「ええ。俺としてはここまで裏切らずに戦力になってくれたサカキさん、アンタに借りが出来ているつもりだ。だから俺は返したい。あえて逃がす、という手段を取って」

「……分かりました」

苦虫を噛むように、ユースケさんも納得する。確かにジネルバの言う通りだな。ここでコイツを討つたってなんにもならないしな。

「サカキ。あの時、スバルが怒りの湖にいるって言っていたな？」

「ああ。ここに来る途中でたまたま出くわしてな、私が向かえと指示を出しておいた。まあ何とかうまくやったらしい」

「……そうか」

ケンイチさんはサカキにそう尋ねた。スバルつてのはどんな人かは知らない。けどこの人には納得する事が出来ない人なんだろうな……そう言ってからサカキは最後にシルバーを少し、チラリと見て静かに飛び去って行った。まあ……なんにしてもアイツの助けが無かつたらこの戦いに勝てなかつたんだろうな……

「何とか姉さんを止める事が出来た。これも皆のおかげだ。礼を言うよ」

「だが、ベネラは『禁断の扉』という言葉が発していた。あれは何だ？」

「確かに気にはなるよね……」

ジネルバの安堵とは対照的に、カズマさんはベネラが逃げる際に発した言葉を気にしてるみたいだ。カシスさんは不気味そうにそう呟く。確かにあの野郎の台詞、ただのハツタリじゃなさそうだしな……

「すまないが……俺も何も知らなくてな……」

「ジネルバも知らねえって一体……」

「大方推測ではあるが、『禁断の扉』これは恐らくプラン名だろう。簡単に言うなら作戦名だ。そしてこれをアネガラやネストは知らない。多分……姉さんが1人で進めていたんだろう。ずばり



ルギア、ハウオウを使つての作戦失敗時に用意していたバックアッププランだな」

「バックアッププランなんて作っていたんですか……」

サクラが静かにジネルバの言葉に返した。サクラ、震えてるのか？

今回は大分怖い思いをしたと思うからな……サクラの反応も当然か……

「本来ならば姉さんを止めたところで自首を考えていたがこれは少し路線変更だな……。更なる手段なんて見当もつかないが探ってみなければ始まらないだろうし……」

ジネルバ、自首を考えてたから、ま当然と言えば当然か。

「でも、ジネルバでベネラが追い込めれるなら、ベネラを止める事は簡単じゃないのか？ ユースケさんもいるし」

そう言うのはユウイチだ。だよなあ……見つけければ余裕だろうよ。それにこっちは人数が多いんだ。数で攻めれば大丈夫だろ。

「残念だが、それは無理だろうな。正直言つて今のままでは姉さんをベネラを倒すなんて大方無理に近い。無理、というよりは不可能だ」

「どうしてよ！？ 明らかにアンタ、押してたじゃない！」

そうコノハが叫ぶ。確かにそうだよな……ん？

そう言えばオレの手をいつまで握ってるつもりなんだよ。照れ臭くなってきたぞ。

「手加減していた」

ハア？

ど、どという事だよ。本気でやって無いって。全く意味が分からないぞ！

「今回の戦い、姉さんは本気を一切出していない。本気を出せば、俺の本気を遥かに凌駕するアイツも出るはずだ。俺の手持ちを壊滅状態に出来る、アイツがな」

「アイツ……？」

ユウコの言葉。ジネルバは止まる事無く話し続ける。

「アイツは姉さんの切り札。俺の手持ちはアイツ1匹で殆ど戦闘不能にされてしまう。正直俺のフライゴンよりその実力は圧倒的に上だな」

おい！

なんだよそれ！

「ジネルバさんの手持ちを1匹で壊滅……」

「ありかよ、そんな化け物……」

ユースケさんに続いて、オレがついそんな言葉を漏らしてしまう。

ベネラの切り札か……ま、いかに化け物だろうが全力で叩き潰すだけだな

「んにしても、ユースケと戦った時は懐かしかったよ。かつていたんだ、ユースケのユンゲラーとはまた違うが、あんな風にポケモンが不思議な力を纏ったかのように強くなるポケモンを扱うトレーナーが」

そう話題を変えるように話始めるジネルバ。へえ……そんな事出来るのがユースケさん以外にねえ……世界はひろいなあ……

「僕のユンゲラーみたいに……？」

「ああ。でもあのポケモンはシャドーボールを飲み込んで光を纏った。シャドーボールのエネルギーを吸収した、というべきだろうな」

「そんな事をするトレーナーがいたのか……」

なんて無茶な戦い方……そんな戦い方する奴なんているのかよ……

「そいつが準決勝の相手だった」

「準決勝……！ 確かジネルバが敗退した試合！」

「そう。完全敗北だった。相手は1匹、俺はその1匹に負けたのさ。手も足も出ずにね」

アキトの言葉に返答するジネルバはなんか懐かしそうな顔をしている。本当にそんな化け物いるのかよ？

「そつだ、思い出した。その時のトレーナー、確かヨウイチだったよ」

「ヨウイチ?!?!?」

出たよ伝説のトレーナー。どんだけ強かったのかハタハタ疑問だぜ……

「と、父さんと戦った事があるんですか……!?!?」

「え、ヨウイチってお前の親父だったのか!?!?」

ゴールドはジネルバにそう言うのと仰天したようにジネルバが返す。なんかこの反応に見覚えあるなあ。なんていうか前の自分を見てる感じだな

「……因縁を感じるな。正直。まあアネガランを破ったサイコブリストを使うフーディン使いも蹂躪していたけどな」

えっとサイコブリストを使うフーディン?

どっかで見たことあるような……あ!

「サイコブリストを使う……フーディン……ハハハ……」

そう覚えがあるように呟くユースケさん。だよなあ、覚えが無いハズがないよなあ!

「ねえ、ユースケ。やっぱりそれって……?」

「だよね。ケンスケ、フーディンの使い手でマサラタウンに住むト

レーナー」

「ケンスケ……ケンスケだ！よく知ってるな……」

「当然ですよ。だって僕のお父さんですから」

へえ、うん？

まじかよ。あの決勝戦親子対決だったのかよ！

ゴールドといいユースケさんといいなんか父親が凄いよな。オレの親父は……ワカバのそよ風食堂の店主……うわあ、なんだよなんか悲しくなってきたぞ……

「そうか……なんだかんだで因縁があったってわけか……」

時代を超えた因縁か……なんかカツコイイよな。それからジネルバはふう、と一息置くとロケット団の衣服を脱ぎさる。その中から現れたのはとても旅人らしい、緑を基調としたジャケットやジーパンだ。

「俺もそろそろ行かせてもらおう。何か分かれば警察なり、何なり連絡を入れる。だからまあ、以前会ったリヨウマ……だっけ？ そいつに伝えておいてくれ。ロケット団を追う者同士、俺も出来る限りの事はしよう。……姉さんも止めたいしな」

最後の言葉はとても小さかった。でもその想いの強さは充分伝わるな……ベネラを止める。それがオレ達に出来るかは分からない。けどアイツがやるうとする事はどう考えても馬鹿な事ではない。そわな馬鹿な事をさせてたまるかよ！

「分かりました。ジネルバさん、また会いましょう」

「次の戦いでも来てくれよ！」

「待つてますからね！！」

ユースケさん、オレ、ゴールドはそう返してやる。ジネルバは小さな笑みを溢し、そしてフライゴンに乗る。他のポケモンをモンスターボールに戻し、

「また会おう！」

そう、告げてジネルバ達は飛び立って行った。行っちゃったか……なら……

「んじゃみんな帰ろうぜ！」

そうオレは言つと、みんなはこちらを向く。戦いは終わったんだ。なんか短いようで長かったよなこの戦いさ。

「あれ、コノハちゃんとイッキどうして手なんて繋いでるの？」

ん？

ああ、なんかジネルバと話に夢中になってたら忘れてたぞ。

「え！？あ……そのこれは……」

「何焦つてんだよ。あのさ一回コノハが爆発で吹っ飛ばされかけたろ？だから最後の攻撃で吹っ飛ばされないようにっさ」

なんか焦ってるコノハを無視してオレはサクラに説明してやる。

「……イツキ……」

「所詮はイツキか……」

「イツキじゃ駄目よねえ」

は、はい!?

なんだよそれ。オレが何をしたってんだ。なんでそんなにめっちゃくちや言うんだよ。サクラ、ユウイチ、カシスさん!

「詳しい事はコノハちゃんに後で聞かなくちゃね」

「コノハ、ちゃんと話してもらおうよ」

「ユウコ……アンタだけは道連れにしてやるわよ……」

そう続くランさんにユウコにコノハ、全くなんの話してんだよ……

「だから何の話を……」

「お前はユースケの惚気話でも聞いてなっ」

「ケンイチ!？」

そう呟くとケンイチさんとユースケさんが順に騒ぎ出す。うげえ、ユースケさんの惚気話なんて絶対に聞きたくねえ!

「うげえ……ついてねえなお前」

「ふん、ざまあ見る」

アキトがオレの思った事をそのまま言い。シルバーが……てめえふざけんなよ！

「さて、ユースケもコノハもどこからからかってやるうかなっ！」

「ふう……とりあえず獲物にならなくて助かったかな？」

そう呟くカズマさんとゴールド、全くどつという事なんだよ！？

でもこのみんなで笑い会える空気……やっと帰ってきたんだな、いつもの日常にな……



「んじゃ気をつけて！」

「うん、そっちもね」

そう言うオレの台詞にユースケさんがそう返してきた。昨日一日なんとか復旧したPCCで休んだオレ達はまたそれぞれの目的地に向けて旅立つ事になった。ユースケさん達はアサギへ、オレとゴールド達はワカバを目指してだ。アキトはというとまたフライングしてどこかに飛び出していった。アイツらしいっていうかなんというか……

「ランさん、今回は本当にお世話になりました」

そうゴールドがランさんに言う。そうだよな……コイツとユウコが仲直り出来たのは完全にランさんのお陰なんだよな。

「ふふっ、ユウコちゃんと仲良くね」

そう言うランさんの笑顔は少し大人びている。なんていうか……オレから見るとユースケさん達って本当にオレ達にとって先輩をやっつけてくれるよな。「はい」と少し照れ臭そうにゴールドは返した。

「今回は見逃してあげるけどコノハ、次会った時はしっかりと白状させちゃっよう」

「うわ〜ん！ユウコ、サクラなんとかしてよ！」

「私はカシスさんの味方よ」

「ご、ごめんネ……私じゃ助けられそうにないよ」

カシスさんの一言で涙目になってユウコとサクラに助けを求めるところでユウコは不敵な笑みを浮かべサクラは苦笑いしながら逃げに入る。なんか最近ユウコが黒いような気がしてならないんだよね……綺麗な花にはトゲがある。ランさんは怒ったら本当にありとあらゆる面で強いし、カシスさんは下手な事したらコノハみたいにされるし、ユウコは毒舌だし……コノハはデンジャラスで、サクラはサクラで本気で怒ると言葉と顔だけ（主に笑ってるけど目が笑ってないって奴）でユウイチを廃人状態に出来るし……うわ、オレの周りそんなのばっかだ……発言には少し気をつけよ……

「まあ気をつけていけよ。ロケット団が何かしないととは限らないからな」

「ふん、貴様に言われるまでもない」

「相変わらず可愛くない奴……」

そう言うケンイチさんの台詞にシルバーが返しそれにカズマさんが突っ込みを入れる。たしかにカズマさんの言う通りだぜ……

「大丈夫ですよケンイチさん、イツキとコノハとシルバーって発火剤がいますけどオレとサクラとゴールドって消化剤もいますから」

「おいユウイチでめえ！」

そう言うユウイチにすかさずオレは突っ込みを入れる。この野郎……  
…覚えとけよお……

「それじゃ僕達はそろそろ行くよ。次会う時は競い会うライバルだよ」

！

ユースケさんがオレ達に向かってそう言う。オレはみんなを見渡してから、ユースケさんの言葉に頷く。

「ええ、オレもユースケさんをギャフンって言わせるぐらい強くなります！」

「僕だって気持ちは同じです。もっともっと強くなって見せます！」

そう言うオレとゴールド、それを聞くとユースケさんは満足したように微笑んでから

「うん、約束だよ」

「それじゃみんな、またね！」

そうユースケさんが言った後にランさんがいつもの元気いっぱいと言つとユースケさん達は振り返って歩いていく。

「んじゃオレ達も行くか！」

「はい。行きましようー！」

そうオレの台詞の後にゴールドが頷くとユースケさん達とは反対に  
向かって歩き出す。目指すはオレの故郷ワカバタウンだ。

奮いゝライバルとしてゝ（後書き）

次回に続く!？

## いつもの日常へ(前書き)

イツキ「遅い！」

申し訳ないです……てな訳で今回もイツキ編。ウツギ研究所に向かったイツキ達は……

コノハ「とりあえず金銀メンバーとのコラボはいったんここで終わ  
りよね」

そう言う訳です。プラネットさんここまでありがとございました。

## いつもの日常へ

ついに帰って参りましたよ。我が故郷ワカバタウン！長かったなあ……いつ出発したっけ？

で目的地はウツギ研究所こっちはこっちでご無沙汰だよな。最後に行ったのが……いつだったっけか？

完全に覚えてないぜ……下手したらワニノコを貰った時以来来てないかも……

「……とりあえず、帰って来ましたね……イツキさん」

「ああ、でもオレはこのとさか頭の師匠が何でウツギ博士の研究所へ向かえって手紙を寄越したのか、気になるけどな」

そう言うゴールドの言葉にそう返してやる。なんでシルバーがウツギ博士のところなんだよ……

「とりあえず、そのウツギ博士に会う事そこからね」

「まあそうなるな」

ユウコの言葉に頷くユウイチ。サクラも「そうだね」って続ける。蓋を開ければ何が出てくるか……なあんか嫌な予感するんだよな……でドアノブをつかんでゆっくりとドアを開けた。

「「お久しぶりです、ウツギ博士！」「」

うわっ！

そう言ったオレだけど、ゴールド、ユウイチ、サクラも続いた。そっういやみんなポケモン貰ってるんだっけか？

忘れてた訳じゃないけどタイミングがピッタシってのに焦ったな。

「やあよく来たね。待ってたよ。……しかし本当にこの人数で来るなんてね……」

ウツギ博士は軽く手を上げ、会釈する。待ってた……？

どういう事なんだ……ん？

それと同時にシルバーが歩き出し、1つのモンスターボールを掌に出した。えと……どういう事なんだ……？

「とさか頭、どうしたんだよ？」

「何か様子が変よね……」

雰囲気急に変わりそれに対応するようにオレが言い、コノハが続ける。どういう事なんだ？

「シルバー、やっぱり……」

「……」

ゴールドの言葉に同調するようにシルバーは軽く頷く……だいたいが話を読めてきたけど……そんなの認めたくはない……

「コイツ（サナギラス）を返しに来ました……アンタのところから盗み出した、コイツ（ヨーギラス）を。進化させ」

「理由、聞かせてくれる？」



シルバーがその先を言う前に別の言葉に切られる。そうしたのはサクラだ。出た、サクラの怒る前に問いただすってやり方……お陰でぶん殴るタイミング逃しちまったぜ……てかユウイチとコノハがオレの両手押さえてるからそれどころじゃないか……そんなサクラの言葉に悲しげな眼で続けた。

「俺の親父はロケット団のボスだ。分かるか？ それを知らされず、おめおめと生きてきた自分が。俺は親父のやり方を一切許していない。そんな中、ロケット団らしき人物の出現が噂された。必要だっただよ、力が」

シルバーは少し間を置き、こう続けた。

「自分を、俺自身を強くし、ロケット団を叩き潰すだけのそんな力が俺は欲しかった。欲した。だからこそ、この研究所にいたヨーギラスを奪った。最終進化させれば、超強力なポケモンだと言われるバンギラスになる。俺の目的を達する上で必須だった」

「ロケット団を倒す為だけに非合法な手段を取ったってか、お前……」

ユウイチも流石に今回ばかりは呆れたのか頭を抑えている。そりやなあ……さてとサクラはどう出るか……

「それ、言い訳？」

「え……？」

「人のポケモンを捕る事が悪い事だって分かってたんだよね！なのになんでそんな事したの！」

「だから力が欲しくて……」

「それが言い訳って言ってるんだよ！」

「サ、サクラ！？」

完全にぶち切れてるサクラにシルバーは戸惑いながらも答え、コノハは焦った表情を見せる。とりあえず……

「コノハ、触らぬものには祟り無しだ。今のサクラは危険だぜ……」

「ふええ……あのサクラがねえ……」

「イツキとコノハちゃんは黙ってて！」

「はい！」

突如のこちらの攻撃にオレとコノハは背筋を伸ばして返した。ユウイチはそれを見て苦笑い、ユウコはコノハと同じように目を丸くしている。サクラは普段は温厚過ぎるから余計怖いんだよねあ……

「強くなるなら他にも方法はいくらでもあったはずだよ！それに……」

あゝあ……始まったよ。サクラの説教タイム、これが長いんだよ。サクラって「しっかり者のお姉さん」だもんな……スッゴいマジメだから一から十まで説教しちゃうんだろうなあ……  
で、ざっと10分、いやあ長いねえ……ユウイチにも同情するぜ……

「分かった！？」

「はい……」

うわぁ……素直に謝ってるよ。見てて痛々しくなってきたぞ……

「ほら、ウツギ博士に謝りなさい？ポケモンをとったりしてゴメンなさいって！」

「ゴメンなさい……」

あ、謝ってる。ここは笑うとこだけどサクラのせいで笑えねえ……

「アハハ……もういいよ」

そう、制止するよう言ったのはウツギ博士だ。苦笑いしながらいうのは若干引いてるからに違いないよな。

「シルバー君、君がやった事はサクラちゃんが言う通りとても悪い事だ。それはまず理解できるね？」

「……はい」

シルバーは目線をウツギ博士から少しだけ叛けつつ、頷いた。ウツギ博士はシルバーのモンスターボールからサナギラスを出して、サナギラスを少し見ると、続ける。

「……君はこのサナギラスに懐かれているね」

「……え？」

「このサナギラスを　　ヨーギラスを奪っていった罪はとても大きい。僕から1つ頼もう。構わないね？」

「自首でも何でも　　覚悟はできている」

反省はしてるか……なら加減ぐらいはしてやるのかな？

「そうじゃないよ、シルバー君。このサナギラス　　君に育てて欲しい」

「「！！？」」

「え……！！？」

ウツギ博士の言葉にコノハとか何人かが驚いた。ウツギ博士の事だからそう言うと思ってたさ。面白くなさそうにユウイチが舌打ちをしてるけどそれは見なかった事にしよう。

「見たところ、そのポケモンはすっかり君に懐いている。ポケモンにとって一番の幸せ　　分かるかい？」

……当然だな。オレは馬鹿だからそんなのしつかりと考えた事は無い。けどそんなのだいたい分かるぜ

「ポケモンにとって一番の幸せ　　それは好きな人の傍にいられる事。僕はサナギラスや君のポケモンの意志を汲み取ってあげたい。それにサナギラスは君といたいと願っているように見えるんだ。だったらそのポケモンは君と一緒にいるべきだと僕は思う」

シルバーはサナギラスを見る。サナギラスもまた、シルバーを見返した。シルバーは静かにふっ、と小さな笑みを浮かべた。それで隠せたと思ってるとは甘いぜ。

「……君のお師匠さん、いい人だと思うよシルバー君」

「師匠を知っているのか……!?!」

「いや、ココに少し前に来たんだ。君のした事を許して欲しいと、ね。師匠さんの言葉をそのまま借りると……」  
『アイツは、我が弟子はまだとても若く、同時にカントーを危機に陥れた悪の組織の首領の子供です。それを知らない彼がどれほど辛かったのか、それを知った彼はどこまで強さを求めたのか、師匠である自分でも想像がつかない。でも、アイツは本当はともいえない奴なんだ。アイツのしてしまった事はしかしとても重い。どうかアイツの事を、シルバーの事を 我が弟子にチャンスを与えてやってほしい。お願いします』  
と云っていたよ。ここまで弟子の事を思いやれる師匠もいないもんだ。シルバー君、君はとても幸せ者だよ」

「……はい、とてもムカつくほどにいい師匠。それが俺の師匠……」  
全くその師匠って奴は嫌な奴なのかいい奴なのか…… 実際のところよくわかんねえなあ……

「なあとさか……いや、シルバー、悪い事したって自覚があるんだつたらさ……このまま罰無しってのもダメだよな？」

「ふん、望むところだ」

そうオレはシルバーを煽るように言う。コイツのやった事は悪い事だ。それをコイツは理解してるし、ウツギ博士にああ言われて納得出来てるかって言われたらそんな事は無いと思う。だから！

「なら……歯あ食いしばれ！」

「……！」

オレはそう言っただくさまシルバーをぶん殴る。たった一発、ただ本気に近い一撃だ。それを受けたシルバーはバランスを崩して尻餅をついて倒れた。

「これが人を馬鹿にした態度をとったりしたのと、サナギラスを奪った分だ。これで全部勘弁してやるよ！」

そうオレはいつもの調子に乗った口調で言っただる。ま、これで十分だろ

「お人よしめ……」

そう立ち上がって言うシルバーの台詞を無視する。うっせえよ……お人よしで悪かったな

「ゴールド、いるー!?!」

うおっ！

そうしてると突然、ウツギ研究所のドアが思い切り開いて中にずかずかと足を踏み入れる女性……誰だあの人……ゴールドの名前を言っただって事はゴールドの母さんか。

「か、母さん!?!」

「ヨウコさん!?!」

ヨウコさん、それがゴールドの母さんの名前か。エプロン着用って点から見てもホント主婦だよなあ……

「ゴールド、ユウコちゃん無事だった!? 大丈夫?」

「ええ……大丈夫です、ヨウコさん」

「心配いらないよ母さん」

「そう、良かった……って。君たちはえーと……イツキ君にユウイチ君、それにサクラちゃんね?」

「は、はい」

突然の振られた事もあって少し顔が引き攣らせながらも返す。お、ビックリした……

「えーとその子は……?」

「シルバーだ」

「コノハって言います」

「そう、私はヨウコ。ゴールドの母親です、宜しくね」

とまあ、簡単なやり取りが起こる。出たよコノハの猫かぶり……相変わらずいつものと打って変わった態度だなあ……え……あ、そんな睨まないで、ハイ、私がるうございました。

「ヨウコさん、どうもです」

「あ、ウツギ博士！ ご無沙汰してます、ゴールドがホント、いつもお世話になって！」

「……女王<sup>クイーン</sup>って呼ばれたヨウコさんにそこまで言われるなんて恐縮ですよ」

「そんな、女王<sup>クイーン</sup>だなんて一昔前の話じゃありませんか、ねえ」

ウツギ博士とヨウコさんの世間話だ。うん……なんていうか大人の会話だよな……にしても……

「……女王<sup>クイーン</sup>ってどういう事なんですか？ ヨウコさん、ウツギ博士」

そうサクラがオレの思った事を尋ねる。だよな、女王<sup>クイーン</sup>ってどういう事だよ。

「ん？ ああ、ヨウコさんはね昔はコーディネーターだったんだよ。常勝無敗のトップコーディネーター、またの名を“演技界の女王<sup>コンテストクイーン</sup>”、それがヨウコさんのあだ名さ」

ふえ？

「とっぷこーでいねえたく？ 何だそりゃ？」

「えーとね、イツキ君。つまりは……」

「ここから先は私が説明しますよウツギ博士」



ウツギ博士の話に割り込むかのように発言するヨウコさん。はて、どんな話が出てくるか……

「私も他の人から話を聞いたんだけど、まああつた事実も付け加えて話すわね。トップコーディネーター、これは各地方のポケモンコンテストで優勝すればもらえるリボン、つまりはジムバッジのようなものね。これを5つ集めればその地方のポケモンリーグと言えるような大きな大会、グランドフェスティバルに出れるわ。そこで優秀な成績を収めたコーディネーターをトップコーディネーターって言うの。そしてこの私は……各地のグランドフェスティバルで優勝を重ねている身よ。ま、昔の事だけだね」

そう言つてヨウコさんは、悪戯つ子みたいに舌を出した。お茶目みたいだけど……年れ……いや、なんでもない。これは触つたらダメだと思つ……

「……さてと、この馬鹿……!!」

「ッ!?!」

うわっ!?!

突然のヨウコさんの怒鳴り声に声を上げてしまいそうになる。ヨウコさんの怒りの矛先はゴールドだけど……さっき考えてた事はなあ……

「あんだ、本当に分かつてるの!? 自分がどんだけ危ない事したかって! 下手したら死んじゃうかもしれないのよ!? それがどれほどいろんな人を悲しませるか……それはあんだが一番理解しているでしょ!?!」

「……………」

そこでゴールドは黙り込む。そりゃそうだよな、内容が内容だから反論できないよな……

「イツキ君や皆もよ！ あんた達も命を危険に晒してまでなんでそこまでしようとするの！？ もし自分が死んじゃったら、親御さんに何て言うの！？ 楽しく旅が出来るなら、例え負け続けても親にとって一番の幸せは、自分の子供が必死に、頑張つて旅をして、色々な経験を積む事！ 予期せぬ事態で死んでしまふ子だっている！ なのに、自分から死に行くような真似はよして頂戴！ ……もう、私は誰も失いたくないのよ……」

「……………母さん……………」

ヨウコさんから不意に流れる涙。その涙がどういう意味かは知らない。でもさっきの言葉から過去に何かがあったのは間違いない事だと思う。だからこそ厳しく言うんだな……

「……………ヨウコさん、私は……………知りましたよ……………？」

「え？」

そう口を挟んだのはユウコだ。そっか……………コイツも辛い過去があるんだっただよな……………

「ヨウコさんの気持ちはとても分かります。でも、私は知りました。一人で無理なことも、力をあわせれば 不可能を可能にする事は可能だと。私はずっとロケット団に一人で復讐するって思っていた。でも、私は……………皆と一緒に戦つて……………不安なはずなのに不安になり

ませんでした。怖かったです、勿論。だけど、皆が一緒にいてくれたから私は……戦えたんです」

「……ユウコちゃん……そっか。あんた達は私達が思うほどな子供じゃないって事ね。本当、皆強くなったわね……心も、体も、ポケモン達も、皆……」

涙を腕でユウコさんは拭うと、切り替えるように、口を開く。

「さあ！ じゃあ頑張ったご褒美にワカバ食堂で皆にランチを奢るわ！ これくらいは大人で割り勘にしましょう！ ね、ウツギ博士？」

「え？ 僕ですか！？」

「さあ、出発進行ー！！」

意気揚々と、ウツギ博士の白衣の裾を持って研究所の外へ出るユウコさんとウツギ博士。奢りだと……やったぜ！

「んじゃユウコさん、オレ先に行ってますね！」

そう言ってオレは勝手にウツギ研究所から飛び出す。

「あ、待ちなさいよ！」

コノハもそれを追い掛けるように走ってきた。少しいやな予感もするけど早く行こうぜ！

「よおし！ウツギ博士、ヨウコさん！この「こだわり特選唐揚げ丼」が食べたいです！」

「わざわざ一番高いの選ぶなあ、君も……」

「奢るとは行っただけど……大丈夫かしら……」

そんな自慢気に言うのは勿論オレ、それに頭を抱えているのは大人達だ。いやあ、せっかくおごって貰えるんだからめったに食べれない高級なものを選ばないとな！

「イツキさん……賭けって言っていましたけど……それ奢らせるつもりだったんですね……」

あはは……バレちゃってる……ま、まあこの際どうでもいいだろバシだって何かが起こるって訳じゃないしっか！

「イツキ！」

おわっ！

突然獰猛かつ野太くい声だ。マジかよ、それがバレただけで怒鳴るのかよ……うん？

獰猛かつ野太い声？

はて……知ってるような気が……てか知ってないとダメか……

「と……父さん……」

そうオレは多少怯えた口調で呟く……そこにいたのはどこかオレに似てるっていかオレが似てるんだけど……この人、ロウはオレの父親だ。実はオレの父さんはこのワカバ食堂のオーナーである。あ……いや、いるとは思ってたけどまさか本当に出てくるとは思ってなかったぜ……

「久しぶりだな……聞いたぞ。ヨウ……じゃなかったヨウコさんから。また馬鹿やったらしいな。いつも通りユウイチ君とサクラちゃん、コノハちゃん、それとヨウコさんとこのゴールド君とそのガールフレンドのユウコちゃんまで巻き込んで……俺は呆れ果てたぞ」

ま、まあいつもの事だけどさ……はあ……

「あれ、わたしってゆーいち達といつもこんな危険な事してたっけ？」

「え、違っの？」

そうサクラとコノハが小声で話しているのが聞こえる。おいおいサ

クラ、自分だけ優等生ぶろつても……まあ、優等生だけど、けっこうサクラって怒ったら怖いんだよなあ……手を付けられないんだよなあ……

「まあ、説教の方は済んでるみたいだからそつちの方はしないが……一つだけお前らみんなに聞くぞ？」

ん？

質問だつて？

なんだろう……

「自分が信じる事をしっかりとやり通せたか？」

……そう言う父さんの顔は真剣そのものだ。自分の信じる事が……アプソルの約束を守ってそれからあの馬鹿共をぶっ飛ばす。それが今回の目的だったからな……その質問の答えは決まってるぜ！

「ああ（はい）！」

そつオレ達は力強く頷く。そりゃそつだ。信念なくあんな事出来るわけやないからな。

「そつか、それなら俺から言う事は無いな。待ってる今から腕奮つてご馳走してやるから。という訳でヨウゴさん、ウツギさん、支払いはよろしく願いますよ」

そう言つて父さんは厨房の方へ去っていく。流石は父さん、相変わらずセコい。ご馳走するつて行つといて結局ウツギ博士からお金を

せしめようという……

「イツキさんがケチ臭かったりセコいのって絶対お父さん譲りですよね」

「だよな。あの父にしてあの子ありだ」

「図々しいところも間違いなくそうよ」

「おい、お前ら聞こえてるからな！」

ゴールドにユウイチ、そんなでもってユウコの言葉にオレがそう言うてやる。こんなどうでもいい会話だけど……こうしていると日常に帰ってきたんだなって、戦いが終わったんだなって感じた。

## いつもの日常へ（後書き）

### 次回予告

ユースケ「長い戦いを終えた僕たちに待っていたのは分かれであった」

ラン「みんなそれぞれの目標があるんだもん。だから引き留められないよ」

ユースケ「うん、それもそうだね。次回！ポケットモンスター ACE SECOND SEASON」また笑顔で会えると思うから『それじゃ次回もポケモンゲットだよ！』

ピカチュウ『ピッピカチュウ！』



「また笑顔で会えると思うから」(前書き)

今回はユースケ編。

戦いが終わってアサギに向かったユースケ達は……

「また笑顔で会えると思うから」

「ケンイチ、もう行っちゃうのか……」

「ああ、向こうでやり残して来た事がいっぱいあるしな。てかお前から感謝しろよ。お前らのピンチと聞いてポケモンリーグ寸前に飛び出して来てやったんだからな」

そう僕の言葉にケンイチが返してきた。今はアサギシティの港にいる。シンオウに帰るケンイチを見送るためだ。っていつかケンイチ、寸前に僕達を助けに来てくれたのか!?

なんていうか感謝だよ。誰か一人でも欠けてたらあの戦いは危なかったんだろうなあ……

「へ〜!なんだかんだでケンイチっていい奴よね」

「うん、ケンイチくんって優しいからね!」

カシスがそう陽気な口調で言うのに続きランがそう付け加える。確かにケンイチって優しいよね。なんだかんだ言うけど結局はこう友達想いなんだよね。

「んじゃ、元気でやれよ。可能な限りテレビで見せてやるからな」

「ああ。面白い勝負を見せてやるさ」

そう言うカズマの言葉にケンイチが返した。ケンイチになら本当にそれを期待出来そうだよな。

「それじゃユースケ、ランちゃん、カズマ、カシス、オレはもう行くよ。次会う時はみんな楽しくやるうな」

「うん、その時を楽しみにしてるよ」

僕はそう素直な気持ちを言った。もう一年ぐらい前、みんなそれぞれの夢に向けて旅立った。それ以来電話で話す事はあったけど、こっぴどやってみんなで集まる事は無かったからな……きっかけはどうかと思うけどコガネからアサギまでの旅は楽しかったよ。旅が一段階ついたらみんなと楽しく遊びたいな。

「じゃあな、みんな！」

そうケンイチが言うと振り返って船に向かっていく、ケンイチは少し振り返ると、少し笑ってからすぐに船に向かう。そしてそのままケンイチの姿は船の中へと消えていった。ケンイチ……武運がある事を祈ってるからね。

「いったか……」

「そうだね……」

そうカズマがしみじみとした様子で言い、ランもそれに続く。なんか一人減っただけで随分と寂しくなるもんなんだなあ……

「それじゃカズマ、わたし達も」

「ああ、分かってるって。ユースケ、オレ達はタンバに行つてこようと思う」

「タンバ……ジム巡りの続きだよな」

カズマにそう言われて僕はそう返す。そっか、カズマ達も別の進路に進むんだなあ……

「そだよ。だけどね、やっぱり1番の理由は君達2人のお邪魔は悪いからかな？」

へ……あ……ふ、不意撃ち過ぎるよ！

もちろんこんな事言うのはカシスだ。そな顔は悪戯好きの子供の笑顔を浮かべている。くそお……

「あゝ……もう！カシスはどうしていつもそうなの！」

「ニヤハハ、ごめんごめん」

カシスにランは顔を真っ赤にしてポカポカと軽く両手でカシスの頭に叩きかかった。ランの顔が赤いとか言ってるけど僕も真っ赤なんだろうなあ……

「全く、お前らは産なままだよなあ……ここまで進歩が無いと清々しいぞ」

「アハハ……」

カズマの突っ込みに僕は苦笑いで返す。確かに僕達も変わらないよなあ……カシスに何か言われても笑い飛ばすくらいにはなりたくないな。そういえば、変わらないと言えば……

「カズマ達も変わらないよね。お互いが立っている位置とかさ」

「……言うなよユースケ……心が折れそうだ」

「カズマ、何言ってるの？わたしと君が相棒って関係は変わってないと思うけど、なんでそれで心が折れそうなの？」

……それだからだよ……

「あわわ……カシス、その……ね……人をからかう前に自分の側にいる人の事を考えてあげてよ……」

「？」

ランのフォローするような台詞を言うけどクエスチョンマークをカシスは浮かべる。これはカズマも不憫な生活が続くなあ……

「あはは……フォローサンキューなラン……それじゃカシス、いこっぜ」

「うん……それじゃ二人共またね。ユースケ、ランを泣かせるような事しちゃダメだゾ？」

なんかふに落ちないような顔をしながらもカシスはカズマに言われて去っていく。でもそんな事より気になるのは！

「あ、当たり前だよ！」

またもや不意打ちを仕掛けてきたよ！

流石カシス……油断も隙もないよ……赤くなりながらも返すけど、  
そんなの当たり前だよ。それに約束もしたからね

「ランはともかくユースケは進歩したみたいだな。じゃあな二人共  
！」

そうカズマが言うとそのまま行ってしまった。進歩ありか……そう  
言われると嬉しいな。

「もう……結局はこうなっちゃうんだね……」

そう顔を赤くしながら頬を膨らませてランは言う。やっぱり最近こ  
んなの多いから仕方ないか……僕もランと対して変わらない状態だ  
しゅ……

「そうだね……あれ？」

こんな風に顔をオクタンみたいに赤くしながらみんなを見送った事  
……丁度1年ぐらい前にこんなにみんなを見送ったつけ？

懐かしいな

「どうしたのユースケ？」

「うん？前にもこんな事あったなって」

「そうだね……あの時、それぞれの目標に向かって歩き出したんだ  
よね」

そう言うランは少し寂しそうに見える。

「寂しい？」

「うん、少しだけね……でもみんな元気ならまた笑顔で会えると思うから大丈夫だよ」

そうランは笑顔で言うてくれる。そうだよ。ランの言う通りだよ。

「そうだね。それじゃそろそろ僕達も行くか」

「うん！」

僕の言葉にランは元気一杯に頷いた。それを確認してから僕達は振り向いて歩き出す。こうして僕の中でのラジオ塔事件は幕を閉じたと思う。でもまたロケット団との戦いは終わっていない。いっぱい逃げていった人もいるし、何より中核だったベネラが捕まっていない。あの人だけは許しておく事は出来ない。次会った時は確実に倒してみせる！

たとえどんなに強い力を隠してたって必ず……だからもっと強くなってみせる！

「また笑顔で会えると思うから」（後書き）

次回予告

イツキ「ワカバに戻ったオレと仲間たち、いや〜平和なのっていいえ」

ユウイチ「イツキ、平和ついでにスクールに顔出しに行こうぜ」

イツキ「それもそうだな。こうしてスクールに言ったオレ達はキサト先生に再会する。そこで聞いた話とは？次回！ポケットモンスター I ACE SECOND SEASON 『アイツの噂』次回もポケモンゲットだぜ！」

オーダイル『ダイイル！』



## アイツの噂（前書き）

今年ラストの更新になります。

イツキ「今年一年あんまりストーリーリー進まなかったなあ……」

耳が痛いことを……とりあえずどうぞ！

## アイツの噂

「いってきまゝす……」

「いってらっしゃい」

オレは眠そうにそう言いながら家を出ると、母さんがそう返してきた。それを聞いてからオレは玄関のドアを普通に開けて家を飛び出した。ワカバタウンに帰ってきたオレは現在、普通にスクールに行っている。深い理由は無い。まあ、卒業して以来行って無かったからな。たまにはキサト先生に顔を出さないと失礼だしな。

「ようイッキ、おはよう」

「おう、ユウイチ、おはようさん」

家を出てすぐに会ったユウイチに挨拶を返す。あら？

ユウイチの隣にいつもいるハズのコイツの姉ちゃんがないぞ？

「サクラはどうしたんだよ？」

「サクラ？ああ、アイツならヨシノシティに行ってるよ。コノハと買い物だったさ」

コノハと買い物ねえ……そこら辺、サクラは当然としてコノハも女の子なんだな……

「そんでイッキ……」

ん？

どうしたんだユウイチの奴、なんか嫌な予感がするんだが……

「お前……さっきまでコイツの姉ちゃんがいなかったかと思ってたよな……」

「なっ！？」

な、何故それを……ユウイチに凶星を付かれた。マジコイツエスパ  
ーかよ……

「やっぱりかよ……」

ハハハ、ユウイチさん、ちょっと怖いですよ。なんて威圧感だして  
るんですか……。

「イツキ、覚悟しろ！」

「だあ！ユウイチ、ストップ！」

「問答無用！誰がサクラの弟だ！」

この後オレがどうなったかなんて言うまでもない……

スクール職員室前

イテテ……ユウイチめ、アイツ柔道やってる癖に一般人になんて仕打ちを……で、当のユウイチはスクール時代、いつも使っていた練習用のバトルフィールドに先に行っている。あの野郎……散々オレをリンチにしているってアイツはさっさと後輩共の方を見に行きやがった。まあ、オレは元々キサト先生に挨拶する予定だったから別にいいけどさ……

「失礼します」

そうスクール時代とあまり変わらない口調でいいながら職員室の中に入る。こういうのも久しぶりだな。職員室には説教で呼び出された悪い記憶ばっかだったけど……

「あらイツキくん、久しぶりじゃない」

中に入るとショートカットで活発な印象を受ける女の人、オレの担任だったキサト先生が自分のデスクに座りながらコーヒーカップを片手にオレを迎えてくれた。いやはや、嫌になるぐらい見てたこの顔、なんか懐かしいな。オレは辺りを見回す。先生がキサト先生以外いないな……時間的には授業中だから出払ってるんだな

「久しぶりです」

そう基本的な挨拶をオレはする。いや、本気で久しぶりだぜ。

「まあ、立ち話もなんだしそこに座ってちょうだい」

「あ、ありがとうございます」

そう言いつつもオレはキサト先生に言われた通り、先生のデスクの隣の席に座る。

「イツキ君の活躍は色々聞いてますよ。君は一々ドラマチックな勝ち方ばかりするワカバ出身のトレーナーがいるってね」

「ハハハ……だよな……ジム戦だけを見てもワニノコの一か八かの空中戦から始まってバトルの最中に進化とか、限界な状態からの逆転とか……本当にそんなのばかりだ。なんつーか、余裕のバトルが無いというか……」

「ハハハ……ここに通ってた時だってそんなんばかりでしたよ」

そうオレは返す。全力で戦っても間一髪のバトルばかりなのはオレのお約束のような気がする。たまには余裕のバトルをしたい。

「そんなのばかりと言えば相変わらず厄介事に首を突っ込んでばかりいるようですね」

「いっ……そんな事まで知れているのかよ……」

「警察の人から連絡が何回もありました。アルフの遺跡の事件とか、

窃盗の常習犯のアジトに殴り込みをかけたとか、ロケット団と危険な戦いをしたとか！スクール時代に私は何回も言いましたよね！？危険に自分から首を突っ込むなって！」

八八八……まあ、ユウイチと絡んでると不思議と色々事件に巻き込まれたから、何回も嚴重注意を込めて言われた台詞だよなあ……

「それなのに進歩なしだなんて……先生、自信失っちゃいます」

あ……これはヤバイ……この展開は……まさか！

とにかくなんとかこの場を凌がないと……

「す、すいません……」

「いいんです。私はしっかりあなたをしっかりと指導することが出来なかったダメな先生ですから……」

畜生！

やっぱりこうなるのかよ！

この人、キサト先生はちょっととした事でふて腐るといって、マジで困った性格。主に無視されると発揮される。イヤさ、在学中に何回苦しめられたか……

「イヤ、そんな事無いっすよ。先生は凄いですよ！そう、イロイロと！」

……なんともごまかしにもならない台詞だ……久しぶり過ぎて上手くごまかし切れないか……

「下手な慰めの台詞はいいです」

……ダメか……仕方ない、話しを強引な方向転換して……

「と、ところでオレ達と一緒に卒業していった他の連中はどうしたんです？」

本当に無理矢理な方向転換だ。でも実際に気になるんだよな。ブリーダーになった奴やコーディネーターになった奴、レンジャーを志して専門の学校に進学した奴と、いろんな奴がいるからな、気になるぜ。

「ああ……、それなら色々話しを聞いてますよ」

……フウ……なんとか釣れたか……我ながらナイス方向転換だぜ！

「へえ……で、どんな感じなんですか？」

そうオレはキサト先生に尋ねる。懐かしい名前が出てきそうに楽しみだな。

「そうですね。一番よく聞くのはコウくんの話ですね」

な……コウだって!？

「コウ……ですか？」

「ええ。最近凄いいみたいですよ。いろんな町で行われている小さな大会らしいですが、次々と優勝を決めているらしいですよ」

アイツがそんなに活躍しているのか!?

コウ……スクール時代からのオレのライバルだ。冷静沈着な性格で、相棒のニューラと息のあった戦いをする。バトルの戦績は今のところ五分五分、毎回あのスピードに苦労させられたのはいい思い出だ。そのコウがそんなに強く……よし!

「先生、今、コウがどこにいるか知ってますか?」

「彼ならワカバに帰って来ていますよ。昨日はここに来てくれましたし……」

アイツは……この町にいるのか!?

「今日また修業に出発するって言ってましたが……」

!?

「先生、先にオレは帰ったってユウイチに伝えといてください」

「え……ちょっとイツキくん!」

そう言うキサト先生を無視して、オレは職員室を飛び出した。アイツがどれくらい強くなってるかこの目で確かめたい。オレの心はその一心であった。



## アイツの噂（後書き）

### 次回予告

イツキ「久々に対峙するライバル、その実力に舌を巻くオレ達」

コウ「それはおれのセリフだ。お前こそやっつけてくれるじゃないか！」

イツキ「この勝負どうなるのか!? 次回、ポケットモンスターAC  
E SECOND SEASON 『プレッシャー』 次回もポケモ  
ン、ゲットだぜ!」

ユンゲラー『来年もよろしくな!』

イツキ「なんでお前がなんだよ!とにかく良いお年を!」

## プレッシャー（前書き）

キサトから自分のライバルの話聞いたイツキは……

てな訳で久しぶりの更新です。なんか色々あってどうしても遅れま  
す……

## プレッシャー

「……コウ！」

オレは走ってワカバタウンとセキエイ高原を繋ぐ道、26番道路の入り口に来た。セキエイ高原、ジョウト、カントーのそれぞれのリーグを開催している場所だ。空気がよくていい場所らしい。早く行ってみたいぜ。にしてもしんどいな……。スクールからここまで全力疾走して来たからかなりしんどいぞ……。かなり息が上がってるや……

「イツキか……。久しぶりだな」

オレの言葉にコウは振り向いてそう言う。相変わらずの冷静口調だな。まあ、オレだって雑な口調は全く変わっちゃいねえけどな

「ああ。スクールの卒業試験以来だな」

オレはそうコウに返す。自分で言ってなんだけども、そういやそうだったんだよな。

「ふ……。そうだな」

そう相変わらずの口調で返してくる。さて、オレがなんでここまで走って来たか、わざわざそんな事を言いに来た訳ないぜ！

「コウ……」

「お前の言いたい事なんて分かっている。コイツだな……」

そう言いながらもコウは懐からモンスターボールを取り出し、そういつ分かつてるじゃんか！

「おう！噂に聞いたお前の実力、見せてもらっせー！」

そう言いながらオレは距離を取ってベルトにセットされているボールを取り出した。

「お前も相変わらずだな。まあ、人の事は俺も言えないがな……」

で、あつちもいつでも戦えるように戦闘体制を取る。勝負だ！

「アブソル、君に決めた！」

「ブラッキー、頼む！」

『アブウ！』

『ブイイ！』

オレはボールを投げるとアブソルが姿を表す。相変わらずの力強さを感じる姿だ。それに対してコウは黒いイーブイのようなポケモン、ブラッキーが姿を現した。ブラッキーって確かイーブイが進化したポケモンだっけな。全く、イーブイの進化ポケモンは多くて厄介過ぎるぜ……確かブラッキーは悪タイプ。アブソルも悪タイプ、こりゃやりづらいな……

「こつちから行くぞ。ブラッキー、電光石火だ」

『ブイイ！』

そうコウが指示を出すとブラッキーは素早い動きでアブソルに接近してくる。ブラッキー自体あまりスピードが早くないのかもしれないが、それぐらいのスピード今まで戦ってきた敵に比べたら！

「アブソル、こっちも電光石火！」

『アブウ！』

同じようにこっちも電光石火を発動してブラッキーと激突した。

『アブ……』

『ブイ……』

「パワーはそっちの方が上か……！」

激突した反動で両者が後退する。しかし、アブソルよりブラッキーの方が大きく後退している。コウのコメントが一見正しいように聞こえるが……

「ダメージを全然与えられていない!？」

そう、ブラッキーにはあまりダメージを受けている様子はない。お互いに高速で正面から激突したのに全然ダメージを与えられないなんて有り得ない。それだけブラッキーは打たれ強いって事だよな……こっちも悪タイプでソイツに決定力がある技が殆ど無いのに厄介な……

「ブラッキーをあまり甘くみない事だな。続けて行くぞ。ブラッキー、アイアンテール！」

コウは攻撃の手を緩めない。すかさずブラッキーはジャンプしてアイアンテールで攻撃してくる……まずい……打たれ弱いアブソルはソイツは貰えない！

「アブソル、地面にサイコカッターだ！それから電光石火！」

『アブウ！』

オレの指示で素早く地面に向けて自分の頭のアンテナ？

から念の刃を放った。それにより、すごい砂が打ち上がり、ブラッキーの視界を塞ぐこれなら簡単に回避が出来る！

「く……セコイマネをする。だが甘い！」

『ブイ！』

な、なんだ……コウの台詞と同時にブラッキーの目が黒く怪しく輝き始めた。あの技は！？

「く……アブソル、見切ってやれ！」

『アブウ！』

オレの指示でアブソルも目を輝かせた。するとアブソルの足元に突然黒い瞳のようなものが出現し、それが現れた瞬間にアブソルは後退した。そしてそのままその位置にブラッキーのアイアンテールが突き刺さった。あ……あぶね……

「黒い眼差しを読んできたか……」

黒い眼差し、一時的にはあるが、対象の相手の動きを拘束する技だ。それを浴びせた上でのアイアンテール、クソ……視界を塞いだからって油断もスキもあつたもんじゃねえ……

「たく……相変わらず油断も隙も無い奴だぜ……だが……オレを甘く見るなよ！」

オレはコウに対して思った事をそのまま言う。キショク防戦一方つてのはまずいな……反撃しねえと……

「アブソル、今度はこっちから行くぜ！影分身から電光石火！更に辻切りだ！」

『アブウ！』

オレの指示と同時にアブソルは影分身を発動した。その上で電光石火でブラッキーに突撃していく。

「く……ランダムな動きでくるか……！」

そんなコウの苛立ちの台詞、そりゃそうだろうな。ランダムな軌道でブラッキーに突撃していくアブソルの動きなんてそう簡単に読めるものじゃない。更にそれを捕らえるなんて中々出来たもんじゃないからな。攻撃力でアドバンテージが取るのが難しい以上、手数で勝負させてもらうぜ！

「行け、アブソル！」

『アブウ！』

『ブイ……』

何体かの分身がすり抜けていったかと思えば、本体が激突したらしくブラッキーはバランスを崩す。よし、ダメージは小さいが、この調子で攻めて行けば！

「もう一撃行くぜ！アブソル！」

『アブウ！』

オレが叫ぶとまたアブソルは分身達と共にブラッキーは突撃していく。もう一撃！

「調子づくなよ……！ブラッキー、鈍いを使って耐えろ！」

『ブイイ！』

コウは少し熱くなりつつ、ブラッキーにそう指示をください。するとブラッキーから力が湧き出てくるようなのを感じる。

『アブ……』

『ブイ……』

アブソルの一撃、しかし全くダメージを与えられる様子が無い。くそ……さっきより全然効いて無い。鈍いか……自分のスピードを犠牲にする代わりに防御力と攻撃力を強化する技だ。く……自分の防御を強化してそこにいずわるつもりかよ！



「まずはその厄介な分身に消えてもらっぞ……！」

く……何をするつもりだ！？

「ブラッキー、フラッシュだ」

『ブイ！』

「うわっ！？」

コウの指示と同時にブラッキーのは額のよつな模様から光りを放ち始めた。その強い光りにオレは思わず声を上げる。く……セコい事やりやがって……！

「その隙だ……ブラッキー、電光石火で分身をつぶせ！」

『ブイ！』

く……アブソルがフラッシュで怯んでる隙にブラッキーは電光石火を使い、一体ずつ分身を潰してきた。ク……こんな簡単にこの戦法を軽く破られるなんて……

「ブラッキー、仕掛ける！」

『ブイ！』

そう少し焦っている間にもコウ達は攻め込んでくる。そうはいくかよー！

「させるか、アブソル！」

『アブウ！』

オレはそこで叫ぶとさっきまで目が眩んでいたアブソルは良い反応を見せる。素早くブラッキーの方を向く。行くぜ！

「アイアンテール！」

『アブー！』

『ブイー！』

オレとコウ、そしてアブソルとブラッキーの声が完全に重なる。強い衝撃を受けてお互いに大きく後退する。ただで引けるか！

「アブソル、悪の波動！」

「ブラッキー、こちらも悪の波動！」

『アブウ！』

『ブイブイ！』

全く同じタイミングで再び悪の波動が放たれた。それは激突して大きな爆発が起こる。勿論体制を崩していたアブソルがそれに耐えられないハズがない。その衝撃で吹っ飛ばされる。

「アブソル！」

『アブウ……』

オレが叫ぶと、まるで大丈夫と言うようにアブソルは鳴きオレの目の前に着地する。ふう……間一髪だな。爆発により発生した砂煙が晴れてきた。そこには相変わらず余裕そうに立っているコウとブラッキー、へへ……流石だぜ……

「流石だな。一瞬でも気を抜けない面白いバトルをしてくれる」

『ブイブイ!』

そう言うコウの口元は不適な笑みを浮かべている。んなのオレの台詞だぜ!

「ああ、お前こそ相変わらずやってくれるじゃねえかよ!」

そうオレはコウへと返す。やっぱりコイツはオレに取って最高のライバルだぜ!

「このまま決着をつけたい……そんなところだが……」

!

そう言うコウはすでにオレ達から視線をそらし、別の方を見ている。それのおかげでオレも気づく、オレ達に向けられていた不自然な気配に。これは……なんなんだよ……

「コウ!」

「ああ、ブラッキー、悪の波動!」

「アブソル、お前もだ！」

『ブイー！』

『アゝブー！』

オレ達の指示でアブソル達は同時に妙な気配のする方向に悪の波動を放った。普通なら攻撃なんてしない。でも、コイツは何かおかしい。そう感じたから攻撃した。何かオレ達を監視しているようなそんな感覚に襲われたから。すると、それは見えない何かに激突したように弾け、爆発が起こった。な……何が起きてんだよ！

「アレは！」

そうコウが叫ぶ。爆発の先に何かが見えたのか？

オレは爆発の先をよく眺める。なんだ……！？

「ポケモン……なのか？」

オレは思わずそう呟く。爆発の先にいたもの、それは赤と緑の2色を貴重とした、見たことの無い生物だ。体格は丸みを帯びていてなんと頑丈そうな姿だ。なんていうか……一言でコイツを表すなら宇宙人、それ以外の言葉が見つから無い。コイツがオレ達を見ていたのか？

『ぼけもんとれーなーニツイテ、キロクカンリヨウ……』

『アブ！？』

「しゃべった!?!」

突如そいつの方向から声が聞こえた。アイツが喋っていたのか!?

『ニンゲンニミツカッタメ、ココデケイソクヲチュウダン、テツ  
シュウスル』

そう言うとそのポケモンはなんと体を何かゴムっというかなんというか、そんな感じで形を変え始めた。それは流線型っ感じの形になるとものすごいスピードで飛翔していった。

「なんだっただ……?」

「さあな……」

コウの言葉にオレはそう答えるしか無かった。にしてもアイツはなんだっただ?

結局バトルはその場で中断された。なんか気味が悪くてそのまま続行なんて出来ない感じだったからな……そのままオレはコウを見送って今はオレは自分の家の自室にいる。それでオレは今はベッドの上、ま、寝ようとしてるんだ。

『アブ………』

ん？

急に部屋で他のみんなと寝ていたアブソルが小さく喉を鳴らしながらオレのもとへ歩み寄ってきた。

「やっぱりお前も嫌な予感がするよな………」

『アブウ………』

オレの言葉にアブソルが小さく頷く。本当にあのポケモンは………なんだっただんだ？

## プレッシャー（後書き）

次回予告

イツキ「不気味なことはあったけどオレは再び旅を再開すべくコノハと合流する」

コノハ「ねえイツキ、アンタに会いたいって人がいるんだけど……」

イツキ「オレに？まあなんでもいいやどんな奴でもどんどこいってんだ！」

コノハ「次回、ポケットモンスター ACE SECOND SES  
ON 『ジャジャ馬娘の意外な特徴！？』次回もポケモンゲットよ  
！って……何よ、このタイトル！」

イツキ「おちつけて……」

オーダーイル『ダァイル……』

じゃじゃ馬娘の意外な特徴（前書き）

はい、久しぶりの更新です。

イツキ「遅い！」

ごめんごめん。コノハと合流したイツキ、彼が出会う人物とは……



## じゃじゃ馬娘の意外な特徴

予備のモンスタールールに、ポケモンフーズ、それにカロリーフレンドとか非常食……それと各種傷薬つと……よし、だいたい揃ってるな。

『ダイル!』

オレが出発の準備をしていると、オーダイルが突然オレの元へ駆け寄ってきた。全く……腹でも減ったのか？

「どうした？腹でも空いたのか？」

『ダイルダイル』

オレの質問にオーダイルは首を横に振る。違う？

なら……

「ああ、そっか、久しぶりにコノ八達に会うのが楽しみなんだな？」

『ダイル!』

やっぱりな。現在オレ達はヨシノシティのPCに宿泊している。なんのためか？

そりゃコノ八と合流してコガネシティまで行くためだ。ポケモンリーグ開催までまだ時間がある。だから人がいっぱい集まるコガネシティでいっぱいバトルして修業しようって訳だ。んで、今日このP

Ｃでコノハと合流する事になっている。コノハに会うのもいつぶりだっけな……？

あの戦い以来つてとこか。サクラがコノハがオレに会えなくて寂しそうって冗談で何回も名前を聞いてるけどさ、実際に会うのは久しぶりだぜ

「そっか、お前ルカリオ達と仲いいもんな」

『ダイル！』

オレの言葉にオーダイルは元気良く頷く。そうだな……コイツには悪い事してた気がするな

「んじゃそろそろ行くぞオーダイル。早くコノハに会おうぜ」

『ダイル』

オレがそう言ってからさっきまでチェックしていた鞆を担いで立ち上がり。オーダイルが頷いてるのを確認してからボールに戻した。んじゃ行くか。オレは部屋の入り口に架けておいた鍵を取ってから部屋を後にした。

「お世話になりました」

「ハイ、それじゃ気をつけて行ってくださいね」

オレがそう言いながらジョーイさんにオレの使っていた鍵を返すとジョーイさんは笑顔でそう言いながら鍵を受け取った。ジョーイさん、ポケモン専門の医者である。オレもバトルの後とかよくお世話になっている。それとこの人の最大の謎があつて各地のポケモンセンターにいるわけだが……みんな同じ顔してんだよ。どんなって……すっげーそっくりでさ……もう別人には見えないんだよ。うん……

「はい、ありがとうございます」

オレはそう返してから振り返って他の人の邪魔にならないように少し移動してからコノハを探す。えっとどこだ？

……あ、いたいた！

「お〜い、コノハ！」

「あ、イッキ！」

オレが見つけてすぐそう呼ぶとコノハはオレに気づいたのかこちらに振り向きそう返してくる。そのコノハに呼応するようにコノハの隣にいたオレ達より少し年上の男の人もオレの方へ振り返る。一体誰なんだ？

とにかくは……オレはコノハの元へ駆け寄る。相変わらずの自分は元氣いっぱいって誇示するようなポニーテールがオレの目を引く。

「よう、久しぶりだな」

「ええ、そうね！」

オレの台詞にそうなんだか嬉しそうに返してくるコノハ。だよな、一緒に旅する相棒と再会できたらそりゃ嬉しいよな。んで……さっきから気になってんのが……

「君がイツキ君だね。僕はヨウ、よろしく」

オレの疑問を解消するようにヨウと名乗る男の人が言った。

「コイツはわたしのお兄ちゃんデブリーダーよ」

とコノハが補足説明をしてくれる。へへ……お兄ちゃんねえ……へ……お兄ちゃん！？

「コノハ、お前……兄弟いたんだ」

「アレ……言っただけ？」

驚きのあまりついキョトンとした声を上げてしまつ。いや……初耳だよ……

「ああ。始めて聞いたぜ」

そう思った事をオレはそのまま言う。まさかのコイツの妹宣言には流石のオレでもかなりビックリしたぞ

「ハハハ、コノハラらしいな。イツキ君、うちのコノハラがいつも世話になってすまないね」

そう言うヨウさんはオレは勿論、ユースケさんとかに比べても大人だと思つ。こういう人を好青年っていうんだろつな。

「まあ、オレの相棒ですし当然ですよ」

さも当然というようにオレはそう言つてやる。まあコノハの世話ぐらい余裕余裕！

「何言つてんのよアンタは！世話してるのはわたしの方に決まってるじゃない！」

……うわ……予想通りの反応してきた……流石コノハだ。負けず嫌い過ぎる。

「コノハ、お前の強がりには別にいいよ」

「強がりじゃないわよ！本当にわたしが……！」

「うん、分かった分かった。そういう事にしとくぞ」

「うづ……お兄ちゃん！」

そんなコノハとヨウさんのやり取り。すげえ……コノハを手玉に取ってやがる。そんなの出来るのって、サクラぐらいかと思ってたぜ。

「まあコノハは置いておいてだ。イツキ君、僕とバトルしてみないかい？」

「バトル……ですか？」

あまりに唐突過ぎる提案にオレはついキョトンとしてしまう。なんだよこんな唐突に……

「ああ、コノハによく話は聞かされてたからね。君の実力がどれだけのものか試させてもらいたいんだ」

へ……そんな理由か……なら！

「勿論受けてたちますよ！」

そうオレは強気に言う。でもさ、この人さコノハはブリーダーって言っただけか？

なんか不安だな。

「イツキ！さつきはああ紹介したけどお兄ちゃんは元タレーナーだから遠慮なくやっていいわよ！一泡吹かせてやりなさい！」

……オレが少し不安がってた事を解消するようにコノハが教えてくれる。にしてもコノハがオレに仇を取らせようとしてる気がしてならないんだけどな……

「そういう訳だよ。ポケモンセンターに備え付けられているバトルフィールドに行こうか」

そう言うってからヨウさんはゆっくりとポケモンセンターの出口に向かって歩いていく。ヨウさんとのバトルか……どんなバトルになるか楽しみだ！

## じゃじゃ馬娘の意外な特徴（後書き）

### 次回予告

コノハ「お兄ちゃんと戦うことになったイツキ。だけどその技量の高さに悪戦苦闘してしまう」

イツキ「ほ、本当に現役引いてんのかよ！ちょっと並みのトレーナーなんかより断然強いぜ！？」

コノハ「ビビってんじゃないわよ！アンタの根性見せなさい！」

イツキ「畜生、やってやるよ！次回！ポケットモンスターACE  
SECOND SEASON 『イツキVSヨウ』次回もポケモン  
ゲットだぜ！」

オーダイル『ダイル！』



## イツキVSヨウ(前書き)

ヨウと戦うことになったイツキ。ヨウの実力はいかに？

## イツキVSヨウ

「行きますよ、ヨウさん！」

「ああ、いつでもかかって来なよ！」

そう言いながらもバトルフィールドを挟んでオレとヨウさんは構えた。現在、ヨシノPCに設置されているバトルフィールドにいる。さあ……勝負と行こうぜ！

「ルールを確認するわよ。ルールは1対1のシングルバトル。相手を先に戦闘不能にした方が勝ちよ。いいわね！」

「ああ！」

「もちろんだ！」

コノハがルールの確認をしてきてオレとヨウさんはそれに頷く。さあ、さっさと始めようぜ！

「それじゃ行くわよ、試合開始！」

「オーダイル、君に決めた！」

「頼むぞ、エンペルト！」

コノハの掛け声と同時にオレとヨウさんはバトルフィールドにボールを投げる。するとオレの投げたボールからはオーダイルが、ヨウさんの投げたボールからはどこかペンギンのような見た目の頑丈そ

うなポケモンが姿を現した。ペンギンだから水タイプか？

それともう一つあるとしたら氷か、堅そうな見た目から考えて鋼タイプか！

やりにくい相手だが、オーダイルの技は水タイプだけじゃない！

やり方しだいでやれるハズだ！

「オーダイル、高速移動！先手必勝だ！」

『ダイル！』

オレがそう指示を出すとオーダイルは高速移動を発動して超高速でエンペルトに向けて突撃していく。行くぜ……

「そう来るか。ならこっちも高速移動だ」

『ペル！』

ヨウさんが落ち着いた口調でそう指示を出してきた。それと同時にエンペルトは高速でオーダイルに向かってくる。スピードで勝負するつもりか！

だけど！

「こっちの方が早い！オーダイル、メタルクロー！」

「甘く見ないでもらおうか、鋼の翼！」

『ダイル！』

『ペル!』

オレとヨウさんの指示がバトルフィールド全体に響き渡った。それに反応してお互いに指示された技を発動した。お互いに硬化させた腕をぶつけあい、-カンカン-と小気味良い音が鳴り響く。鋼の翼を使ったって事は鋼タイプか？

なら!

「オーダイル、そのままエンペルトを振り払え!それから気合パUNCH!」

『ダイル!』

再び鋼の翼とメタルクローが激突した。その際にオーダイルは体全体を使ってメタルクローの腕を横に振った。それにより、エンペルトの翼のような腕を振り払った。上手いぞ!

『ダイール!』

そしてそのまま拳を作り、エンペルトに殴りかかった。これでどうだ!

「中々やるね。だけど、それは貰えないな!エンペルト!」

『ペルペル!』

『ダ、ダイル!?!』

何！？

ヨウさんがそうとだけ言うとエンペルトが鳴き、オーダイルがその場でずっこけた。な……何が起きたんだよ……！

「草結び……猪突猛進もいいけど、足元にも注意しないとね」

く、草結びだって……そう言われてオレはオーダイルの足元を見る。確かにオーダイルの右足に草が絡まっている。流石に手強い……！

「まだまだ行くよ。エンペルト、ラスターカノン！」

ッ！

転倒してるオーダイルに対して容赦ない追撃をしてくるヨウさん達、相性的にあまり効かないからって貰う訳にはいかない！

「オーダイル、転がってかわせ！」

オレはそう叫ぶ。横に転がってかわしてそれからハイドロポンプを当てれば一旦距離を取れるからその際に体制を立て直すぞ。流石にこのままじゃマズイ！

『ダイ……ダイル！？』

な……オーダイルが体を回転させようとしたが、半分回ったところでそれは止まってしまふ。なんで……あ！？

草結びの草が絡まって転がる事が……

『ダイール！？』

「オーダイル！」

ラストーカノンが直撃。それによりオーダイルは悲鳴を上げながらも吹っ飛んだ。それに思わずオレは叫んでしまう。く………叫んでる場合じゃない！

「オーダイル、地面に向けてハイドロポンプだ！」

『ダ、ダイル！』

草結びとラストーカノンにより中々大きなダメージを受けたオーダイルだったけど、地面に向かってハイドロポンプを使いゆっくりと着地する。ダメージは受けたけどなんとか距離はとれ……

「休ませはしないよ。エンペルト、高速移動！」

『ペル！』

く………本当に休む暇は与えてくれねーな………オーダイルが着地成功して一息ついている間にも迫りくるエンペルト、やらせるか！

「オーダイル、水鉄砲連射だ！行けえ！」

『ダイルダイルダイルダイル！』

オレの指示を聞き、間髪入れずにその大口を開き、水鉄砲を連続でオーダイルは放つ。これだけ撃てば1発ぐらい！

「甘い、甘いよイツキ君！」

『ペルー！』

な……エンペルトは水鉄砲をかい潜りながら突撃してくる。その際に掠りさえしていない。な、なんて腕前……今はブリーダーらしいから現役時代はもっと強かったんだな……そう考えている間にもギリギリまで接近されている。させるかあ！

「オーダイル、冷凍パンチだ！」

「鋼の翼で振り払え、それからハイドロポンプ！」

『ダイ！？』

く……マジかよ……オーダイルが拳を振り上げた瞬間、エンペルトは鋼の翼を使ってオーダイルの右腕を払い退け、その上オーダイルのバランスを崩してきた。マズイ！

『ペルー！』

『ダイル！』

おお！

間髪入れずにエンペルトはオーダイルに向けてハイドロポンプを放ってくるが、それをしゃがんで回避する。上手いぞ！

「やるね。だけど！鋼の翼を叩き付けるんだ！」

「メタルクローで受け止める！」

『ペルウ！』

『ダアアアイル！』

エンペルトはヨウさんの指示で両手を真上からオーダイルに叩きつけようとするが、それをメタルクローを両手で発動してしっかりと受け止める。よし、ここからが反撃のチャンスだ！

行くぜ！

「オーダイル、フルパワーだ！馬鹿力！」

『ダアアアアイル！』

『ペ、ペルウ！』

「エンペルト！」

オーダイルは馬鹿力を発動してエンペルトの両腕を払いのけ、その上でタツクルを食らわせてエンペルトを弾き飛ばした。今だ！

「行け、追撃の破壊光線！」

『ダアアアイル！』

『ペツ……ペルウ！？』

タツクルをくらい完全にバランスを崩しているエンペルトに容赦な



くオーダイルは極太のオレンジ色の光線を放った。それは見事にエンペルトに直撃して爆煙があがる。やったか!?

「やるねイツキ君……だけど、詰めが甘いね」

『ペル!』

く……ダメか……あがった爆煙の中からそんな鳴き声と共にエンペルトが現れる。その姿はまるで魔神を連想させられる。つ……強い!

「次で決めさせてもらっよ」

『ペル!』

ヨウさんがそう言うとエンペルトがパワーを貯めはじめた。まさか……アレで来るのか!?

「オーダイル、迎え打つぞ!」

『ダイ!』

オレがそう言うとオーダイルもパワーを貯めはじめる。行くぜ……

「ハイドロカノン!」

『ダアアアイル!』

『ペエエエルウウ!』

全く同じタイミングでオーダイルとエンペルトがハイドロカノンを

放った。その強力過ぎる水流はバトルフィールドの中央で激突する。く………凄い衝撃だ………究極技の衝撃で前を向くのが精一杯だ………だが、トレーナーのオレがここで引く訳にはいかない！

「行けえええ！」

『ダアアアアイイイル！』

「うおおおお！」

『ペルウウウウ！』

4つの叫び声がバトルフィールド全体を兎玉する。その瞬間だった！

「おわっ!?!」

「くっ!?!」

バトルフィールドの中央で激突していたハイドロカノンがとんでもない衝撃が走ったそれを受けてオレは思わずその場で尻餅をついてしまう。そんな事よりオーダイルは!?!

オレはバトルフィールドに視点を移す。するとそこにはよろけながらも立っているエンペルトとその場にしゃがみ込むオーダイル。く………パワー負けしていたのか!?!

「勝負あつたみたいだね。オーダイルはもう限界みたいし、僕のエンペルトはまだまだ元気だしね」

そうヨウさんがオレを諭すように言う。普通だったらそうかもしれ

ない……だけど……まだまだ！

「まだまだ！オレとオーダイルはこんなもんじゃない！オーダイル！」  
『ダイル！』

オレがそう叫ぶとオーダイルがそれに反応するように吠えて足を震わせながらもゆっくりと立ち上がった。流星はオレの相棒だぜ！

「まだ……立ってくるのか……」

限界を迎えながらも立ち上がるオーダイルを見てかヨウさんが焦りの表情を見せる。でも焦ってるのはオレも変わらない。オーダイルも後一撃受けたら確実にやられる状況だから……だから……次の一撃で決める！

「オーダイル！」

『ダイル！』

オーダイルが吠えると今度はオーダイルの体中を水色のオーラが纏い始めた。特性激流が発動したんだ！

これなら……行ける！

「ヨウさん……見せてあげますよ……オレ達の奥の手を！」

『ダイル！』

オレの言葉に続きオーダイルが鳴き声を上げる。すると水色のオー

ラがどんどん赤くなっていき、赤いオーラに姿を変えた。行くぜ…  
…これで決めてやる！

「行っけえ！かんけっせん間欠泉！」

『ダアアアイイル！』

オレの叫びと同時にオーダイルは吠えながらも特大の水色の球体を放った。それは一直線にエンペルトに向かっていく。

「君達の底力、恐れいったよ……だからこそそれに当たる訳にはいかない！エンペルト！」

『ペルウ！』

ヨウさんはそう指示を下すとエンペルトは高速移動を使い素早くそのエネルギー球を回避した。回避されたエネルギー球はそのまま地面に落ちる。その時！

- バシャーン！ -

「何！？」

『ペルウウ！？』

地面に落ちたエネルギー球は破裂してももの凄い勢いの水しぶきを起こした。その勢いは凄まじく、エンペルトを弾き飛ばした。これでどうだ！

『ペルウ……………』

今を受けてまだ立ち上がるのか!?

弾き飛ばしたエンペルトだったがまた立ち上がってきた。なんて夕  
フな奴なんだよ!

今のがダメなら……どうすればいい!

「……エンペルト、もういい。よくやった」

へ……唐突にヨウさんがそう言う。諦めたのか?

「イツキ君、今の技の水しぶき、普通の水じゃないよね?」

……流石というべきかなんというか……気づいたみたいだな

「ええ、今の水しぶきは熱湯です」

間欠泉、オレとオーダイルがワカバで過ごしている間に身につけた。  
技だ。凝縮されたエネルギー球を放ち、それを爆発させ、高温のも  
の凄い勢いの水しぶきを相手に浴びさせる技だ。広域に広がるハイ  
ドロポンプに近い衝撃と熱湯による強力なコンビネーション要素を  
含めた技で、水と炎の両面性を持つオレ達の新たな切り札だ。

「やっぱりな。エンペルトに火傷を見つけたからそうだと思ったよ」  
なるほど……

「体力が限界な上に火傷状態、これ以上エンペルトに無茶をさせる  
訳にはいかないしな。この勝負、僕の完敗だよ」

そう言いながらヨウさんはエンペルトの元へ駆けていく。そうだ、オレも！

「大丈夫か、オーダイル！」

『ダイル』

そう言いながらオレがオーダイルの元へ駆け付けるとオーダイルは笑み浮かべながら頷いた。おいおい……

「ていー！」

『ダ』

オレはその背中を軽く叩いてやるとオーダイルは声にならないうめき声を上げる。やっぱりかよ……

「ウソつくなんての。ヤバイ時はヤバイって言えよな」

『ダイ……』

「とにかくボールで休んでな」

オレはそう言いつつもオーダイルをボールに戻してやる。全く……でも、よく頑張ったな。

「流石だよイツキ君、コノハが言うだけの事はあるよ」

そうヨウさんが言いながらオレの元へ歩みよってきた。

「いや、ヨウさんの方がすごかったですよ！何回も負けると思いましたよ！」

そうオレはヨウさんに言う。いやさ、この人強すぎだよな。

「それにしても楽しいバトルだったよ。熱くて、燃えてくるようなそんなバトルだね。君はさしずめ【炎のポケモントレーナー】って奴なのかな？」

【炎のポケモントレーナー】……へっ！

「いいつすねそれ……オレにピッタリじゃないっすか！」

そうオレは返す。【炎のポケモントレーナー】オレとその相棒達に本当にピッタリだと思う。気に入ったぜ！

「そうかい。それじゃイツキ君、ポケモンリーグ、期待してるよ」

「はい！」

そうオレはヨウさんの言葉に力強く頷いた。

ヨシノシティ30番道路方面口

「それじゃコノハ、元気だな」

「うん、いつてくるね、お兄ちゃん！」

そうヨウさんが言うのに対してコノハが元気よく返した。現在はヨシノの30番方面口にいる。オレとコノハはオーダールの治療が終わるのを待つてからコガネに向けて出発しようとしていた。なんでコガネか？

あそこはジョウトで一番大きな町だからあそこなら人も集まる。だから色んなバトルを経験出来るって訳だ。ポケモンリーグ開催少し前まであそこを拠点に修行をしようって訳だ。にしてもな、コノハがお兄ちゃんって言う違和感がありまくりなんだよ……普段のコイツとギャップがありまくりというか……

「イツキ君、またコノハの面倒を頼んだよ」

今度はオレに向かってそうヨウさんが言う。んなの！



「分かってますよ。コイツの」……」

「だーかーらー！面倒を見てるのはわたしの方なの！どう考えたらそうなるのよ！アンタも調子に乗るな！」

「とは任せて下さい」って続けようとしたが、コノハに当然のように切られたあげく、無駄に説教された……イヤさ、オレも結構調子に乗る事はあるけどお前も負けずに暴走してる事も多いと思っぜ！？

「分かった分かった。それじゃイツキ君頼んだよ」

「もー！全然分かってないじゃない！」

にしても騒がしい兄妹だよな。なんかユウイチとサクラを立場をそのまんまひっくり返したような感じだな。

「ハア……ハア……もうなんでもいいわよ。バカ兄！イツキ、行くわよ！」

そうコノハが息を荒げながらオレにそんな提案をしてくる。そうだな、そろそろ行くか。

「ああ。それじゃ、ヨウさん。お元気で」

「ああ、ポケモンリーグは応援に行くよ。面白いバトルを見せてくれよ？」

「はいー」

オレはそんなヨウさんの言葉に力強く頷く。見せてやるよ。もっと強くなつて最高に面白いバトルをな！

## イツキVSヨウ（後書き）

次回予告

コノハ「罰ゲームよ！」

イツキ「は？コノハの罰ゲーム。何故か一日私につきあいなさいという……これって罰ゲームなのか？」

コノハ「う、うっさいわね！とりあえず一日つきあいなさい！次回、ポケットモンスターACE SECOND SEASON 『罰ゲーム？』次回もポケモンゲットよ！」

ルカリオ『素直にデートと……』

コノハ「言うなバカー！」

## 罰ゲーム？（前書き）

修行の拠点としてコガネに移動したコノハとイッキ。修行してるのかと思いきや……

## 罰ゲーム？

「イツキ、次アツチ行くわよ！」

「おいコノハ！たく……」

現在オレとコノハはコガネシティの遊園地にいる。んでさ……色々振り回されている訳だが……どうしてこうなった……えっとな、何日か前にコガネに到着して修行してた訳だが……昨日は息抜きも兼ねて自然公園にてポケスロンとかいう奴に参加してきた。オレ達2人で競って負けた方が罰ゲームってオレ達の中でルールを決めて参加した訳だが……コノハが2位でオレが3位という結果になった。いやさ、本当ならPCCの食堂でCランチを奢ってもらおう予定だったんだけどなあ……負けちまったら仕方ないって事でコノハの罰ゲームを受ける事になった訳だが……

「それじゃ罰ゲームとして明日1日わたしに付き合いなさい。それで勘弁してあげるわよ」

とコノハが意味不明な罰ゲームを提案をした事から遊園地に連行されるハメになった訳である。全く……罰ゲームじゃなくてもそれぐらいなら付き合っただけなのにさ、なんでわざわざこう遠回しな事をするのかね、アイツもさ

「ほらイツキ、早く来なさいよ！」

「はいはい、分かった分かったって！」

何故か妙にテンションが高いコノハにオレは多少呆れながらも着いていく。幸いこの間、帰宅した際に支給して貰ったお小遣で懐には

余裕がある。多少遊んだくらいじゃビクともしない。まあなんとかなるだろう。

「アレに乗るわよ!」

そう言っただけでコノハが指差したものの、それはいわゆる……巨大なレーズルを高速で爆走するアレである。名前は言わずもがな分かるだろう。ぜ、是非とも乗りたくない代物だ。オレは正直絶叫マシーンってのは苦手だと思う。ピジョットに捕まって空を飛ぶのもヤバいつてのにこんなのに乗ったら確実に吐くぞ……コノハはそれを知らないで言ってるのか？

はたまた知っててわざとやってるのか……今日1日付き合っただけで事になった以上これは避ける事の出来ない試練だ。く……どうする!？ここはまず逃げの一手を講じてみるしかなさそうだな。上手くいけばいいんだけど……

「コノハ、アレは後にしようぜ……」

とりあえずそう言ってみる。単純に執行猶予を作っただけであわよくば忘れて頂くという作戦だ。

「え〜!なんでよー!」

そうコノハが駄々をこねるように言う。ここは何か言い訳をするっきゃねえ!

「いやさ、お楽しみは最後に取っておくべきだろ?」

そうオレはコノハに言ってみる。これは我ながらナイスな遠回しだ。

さっすがオレ！

あつたまいい！

「なぐに言ってるんよ。今乗りたい気分なんだから。後で乗る気が無くなったらどうするのよ」

……ハ、ハイ？

コノハサンナニライツテラッシャルンデスカ？

ジヨウダンデスヨネ……

「アレ、どうしたのよイッキ、思考停止したような顔しちゃって」

ハハハ、ヨクオワカリデ……

「もしかしてビビっちゃったの？」

……ついにバレちまったか……イヤ、まだだ！

「んな訳あるかよ。ちょっと暑くてポーってしてただけだ！」

うっ、我ながら適当なごまかし方だ。これでごまかせるか？

「あやし……そうよね！イッキに限ってそんな事ないわよね！」

うん？

なんだ？

今何か言い変えなかったか？

い、嫌な予感が……

「なら早く行くわよ！今日は込んでるから早く並ばないと時間がもつたないわよ！」

……な、何故そうなる……

「はい？」

そうオレは疑問の言葉を口にする。そこに帰ってきた答えは……

「怖くないんでしょ？なら乗っても全然大丈夫よね？」

あ……コノハが妙にいやらしい笑みを浮かべながら言つのを聞いて始めてオレは気づいた。墓穴掘っちゃった……

「それじゃ、さっさと行くわよ！」

「チクショー！」

そう悲鳴を上げるオレをコノハが自分の腕をオレの腕に組ませて引っ張っていく。その途中

「このジェットコースターはカントー、ジョウト中では最速らしいぜ」

ってどこから聞こえたのは気のせいであって欲しい



「しんど……」

「ホント大丈夫？」

コノハ……お前がそれを言うのかよ……そう呟くオレに声をかけてくるコノハに心の中で突っ込んだ。現在、遊園地内にあるファーストフードのお店に立ち寄って休んでいる。ジェットコースターに乗せられたオレは言葉にならないほど死ぬかと思った。今の思考が支離滅裂なのも全部そのせいだ！

突っ込みを心の中に留めておくのもそのせいだ。正直そんな元気も今は無い。

「お前のせいで大丈夫じゃねーよ……」

それでも律儀にオレは突っ込みを入れて見せるのはなんでだろう…  
…意地みたいなもんか？

「悪かったわよ。まさかここまで慢心創痍になるなんて思ってたから……」

そう言うコノハは流石に悪い事をしたって気持ちはあつたみたいだ。あれは残酷過ぎる所業だと多分あのロケット団すらこんな残酷な事はしないはずだ。それを平気でやってのけたコノハはオレには怖い。まあ、いつもの事だけども……とにかく……

「同情するなら何か奢って……」

コノハが弱気に出てるのをいい事にオレはそう要求してみる。いわゆる同情するなら金をくれって奴だ。本気で辛いんだぜ？

今さ……

「アンタねえ……まあいいわ、何食べたい？」

おお、結構話が通じるじゃんか。そうだな……

「チーズバーガーとコーラでよろしく」

「……辛い割にガツつりね……分かったわ。それじゃ買ってくるね」

そう言うとコノハは店のレジに向かって歩いていった。はあ……調子に乗ってあんなに頼んだけど食えるかなあ……

「そっぴや今更だけどさ、この前のロケット団事件の影響が全然残ってないみたいだな」

少し休んで多少は元氣を取り戻したオレはチーズバーガーをかじりながら言った。コガネシティではんの最近起こったロケット団の占領事件、アレで何か影響が残ってるって思ってたけど全然残って無かった。流石はジョウト地方の中心都市ってとこだな。

「そうね。ラジオ塔のアンテナはわたし達が壊したからまだラジオ放送は出来ないみたいだけど……」

あ……そっぴえばそんな事したっけか？

オレはラジオは聞かないから忘れてたな。でもさ、結局あの破壊って全く意味をなさなかったよな……なんのためにアレは破壊されたんだろ……なんか不憫で仕方ないんだけど……

「ハア……アオイちゃんのトーク番組、いつも楽しみにしてたんだけどなあ……」

そうコノハはホットドッグをかじりながらもとても残念そうに言った。案外コノハってミーハーなところがあるんだな。ランさんに初めて会った時の反応だって好きなアイドルを見つけた女の子の過剰な反応そのものだったしな。そんなところがなんか意外でなんか見て面白いんだよな、コノハってさ

「文句言つなよ。結局壊したのはオレ達だしそれぐらい仕方ないって」

とりあえずコノハの機嫌を取り繕うようにオレはそう言う。あんまり取り繕えて無い気がするが気にしない。

「ああもう、全部ロケット団のせいよ！」

そう悲鳴をあげてまたホットドックを口にするコノハ。まあ……コイツの言う通りなんだよな。あの馬鹿共が余計な事をしなければこんな事にはならなかったんだよな……

「でさ、急に話は変わるけどさ」

「何よ？」

そうオレが言うとコノハがぶっきらぼうにそう返してきた。大したことじゃねえんだけどさ……

「なんでさ、これが罰ゲームなんだよ」

「へ？」

そうオレが言うとコノハは気が抜けたような顔でマヌケな声をだす。

「いやさ、一日ぐらい罰ゲームじゃなくたって付き合ってたっていいのにさ。そんな遠回しな言い方しやがって訳わかんねえよ」

そうオレがずっと思っていたことを言う。気になって仕方なかったからいい機会だし聞いておこうともってな……

「な……それは……その……別になんでもいいじゃない！」

「なんだよ……急に逆切れしやがって……」

そう顔を何故か赤くしながら荒げた声で言うコノハにオレは突っ込みを入れる。すると更に「うるさい！」と怒鳴りながらホットドッグに噛みつく。本当に急に顔を赤くしてどうしたんだ？

ん？

あ……オレはコノハに起こってる面白いことに気づく。コイツは人の事を子ども扱いするけど自分自身も子供なんだなって思う。まあ、教えてやるか……

「なあコノハ、興奮するのもいいけどさ……鼻についてるマスタードをどうにかしようぜ」

「え……っ！？」

そうオレが教えてやる。そう、コイツの鼻の上に黄色の物体？

マスタードが張り付いていたのだ。興奮していたとはいえどうしたらそんなところにマスタードが……コノハは少し間を置いてから顔を真っ赤にしてホットドッグについていたティッシュユってかなんというか……まあそんな感じの奴を取って素早く後ろに振り返ってそれで鼻をふく挙動を見せた。その瞬間！

「ヒギ イ @ > a ; ; ! #

「うおっ

その瞬間声にならない声を上げ、オレは驚きの声を上げる。マスタードみたい辛いもんが鼻の上で伸びるのか……コイツはつらいよなあ……地面についていた足を上げて本当に辛そうにもがいているのが分かる。おいおい……

「おいおい、大丈夫かよ」

そう言いながらオレは立ち上がってコノハの隣まで移動する。まあ、ジェットコースターで酷い目にはあったけど、コイツのどこかメルヘンチックなところを見るとどうでもよくなっちゃったよ。んじゃせっかくここに来たんだしコノハを早く復活させて思いっきり楽しまないとな。

## 罰ゲーム？（後書き）

次回予告

イツキ「よし、気晴らしに牧場に来たぜ！」

コノハ「……あれ？修行のためにわたし達コガネに来たのよね……  
難で遊んでばかりいるのよ……」

イツキ「……いや、してるって多分してるんだと思うよ……と、と  
にかく次回！ポケットモンスターACE SECOND DEAS  
ON 『新たな出会い』次回もポケモンゲットだぜ！」

ルカリオ「ごまかしたね……」

オーダイル「だいる……」

新たなる出会い（前書き）

ここ一カ月色々忙しく更新できなくて申し訳ないです。とりあえず  
ストックもあるのでしばらくは安定していけるかも……

イッキ「んじゃ始まるぜ」



## 新たなる出会い

オレとコノハはエンジュとアサギの間にある牧場、アサギ牧場に来ている。ポケモンリーグがもうギリギリまで迫っているので気晴らしに来た訳だ。最近特訓ばかりしてたからたまにはゆっくりしなとな。

「うん、すごい気持ちいいわね！」

「そうだな」

広大な平地に流れてくる少し冷たいぐらいの風をあびてコノハが言う。そう言うコノハの短い髪がなびいてコノハは顔にかからないように髪を抑える。こういうところを見るとコノハが可愛いと感じる。そういうところはやっぱり女の子って事だな。さてと

「みんなも気持ちいいか？」

『ダイル！』

『パオン！』

『ピジョオ！』

『ブイブイ！』

『サム』

『アブ！』

オレはそう後ろから着いて来ているみんなに尋ねるとハツサム以外は元気良く頷いた。ハツサム……お前、相変わらず愛想悪いな。この牧場はこの広大な平野のせいかな、観光客はポケモンを自由に出してのんびりしていいらしい。本来の牧場なら規制がかかるだろうけど、ここにはそんなのは無い。だからこそここを選んだんだよな。ここならみんなでのんびり出来るしさ。

「ポニータ！アンタ少し元気過ぎよ！」

『ヒヒーン…』

コノハの怒声が上がリ、ポニータは鳴きながら駆け回る。確かに元気だよな。やっぱり牧場つてのがポニータは好きなんだな。牧場の匂いとかイロイロとさ……

「ああ、もう！ちょっと待ちなさいよ！」

『ヒヒーン…』

そのままポニータはご機嫌に駆けていく。確かに元気になりすぎだな……早く追わないとこれだけ広がったら探すのが大変になるな。早くしないと……

「コノハ、早く追いかけてよ！」

「分かってるわよ。みんな、離れないでよ！」

『分かってるよ』

『ホー!』

『ブイ!』

『ウソオ!』

『ウキイ!』

オレはそう声を掛けると、コノハは自分のポケモン達にそう声を掛け、ルカリオ、ヨルノズク、シャワーズ、ウソツキー、エイパムは同意するように頷いた。それを確認してからコノハも走り出す。オレ達も追わないとな

「オレ達もちゃっちゃと追っぞ」

オレがそうみんなに言つとそれにみんな頷いた。よし、ちゃちゃっ  
と行くか!

オレはポニータを追って走り出した。

ポニータはかなりゆっくり、それもオレ達とかけっこするようにゆつくりと陽気に走っているの、見失う事は無い。本当にポニータは楽しそうだ。やっぱり牧場効果は絶大みたいだ。ん？

とぼとぼと女の子が歩いているのが見える。女の子はポニータがそっちに向かって走ってるのに気がついていないみたいだぞ……ポニータも気づいてないみたいだし……あ、危ない！

「危ない！」

「え……きゃあー？」

『ヒビーン！』

……コノハが叫ぶと女の子はポニータに気づいて尻餅を付き、ポニータも女の子に気付いてジャンプして女の子を避けた。あ、危ない……ギリギリじゃねーかよ……

「ごめんなさい！大丈夫だった!？」

そうコノハが女の子に声を掛ける。コノハにしては珍しく敬語だ……明日は氷柱が……ま、いつか……まだオレは死にたくないし……

「あ、うん……大丈夫よ」

そう女の子が返してきた。ふう……よかったよかった。

「えーと、あなた達は？」

そう女の子がオレ達に尋ねてくる。おっと名乗らないと失礼だな

「オレはイツキ、で、あのさつきからポニータを追いかけ回しているのがコノハ、旅のポケモントレーナーだ」

女の子に謝ってすぐに再びポニータを追いかけ始めたコノハの事も含めて紹介する。にしてもポニータ、いくら牧場がポニータにとって嬉しい環境だからってはいしゃぎ過ぎだよなあ……少しは自重して欲しい

「へへ、トレーナーさんなんだ。アタシはモミジ、この牧場の調定役みたいなものをしているわ」

へへ、この牧場の人なのか……調定役って事は牧場のポケモン達が喧嘩した時とか納める役目って事だよな……モミジの見た目を説明すると、オレと同じ年ぐらいで、サクラより一回り小柄で長い髪を後ろで縛っている。そんなコイツがよくそんな事が出来るよな。オレとかコノハなんかより断絶立派だぜ……

「って事は管理人さんの家族なんだ」

常識的に考えればそうなるよな。ちなみに管理人さんはどこにでもいるようなおじさん、ダンディなあごひげが特徴的だ。

「そ、後お姉ちゃんとお母さんも一緒に働いているんだ。家族4人で仲良くこの牧場を経営してるんだよ。いいでしょ」

そう言うモミジはとても誇らしげな表情をしている。家族か……母さんも父さんも今頃何をしてるんだろう……多分母さんは家でのん

びりしてるだろうし、父さんはそよ風食堂の厨房に立ってるんだろ  
うな。

「も〜！ポニータ！いい加減にしてよ！」

『ヒヒヒン！』

……相変わらずポニータに弄ばれるコノハが少し可哀相になってき  
た。にしてもなあ……

「アハハ、元気なポニータね」

「普段はあんなんじゃないんだけどなあ……」

モミジの台詞にオレがそう付け加える。本当に今のポニータは元気  
だよな……

「ちょっと待って、今大人しくしてあげるから」

今大人しくするって……どういう事だ？

するとモミジは自分のポケットから銀色の長方形の物体を取り出し、  
それを口にくわえる。あれって……ハーモニカか……そして息を吹  
き込んで吹き始めた。それから響くのはとても優しく心地良い音  
色、それに加えてなんか気持ちが悪く落ち着くような感じがする……こ  
の歌って……

『ヒヒヒン？』

「え……ポニータ？」

その歌を聞いた瞬間ポニータが急に落ち着いて走り回るのを止める。それにコノハも呆気にとられてるみたいだ。凄いな……一体なんでこんなに……

『ヒヒーン』

「ハハ、くすぐったいよ」

落ち着いたポニータはハーモニカを吹いているモミジの元へ歩いていきモミジの頬を舐めた。それに対しモミジはくすぐったそうに反応を示す。

「す……い……ありがとう、え」と……」

コノハがモミジの名前を呼ぼうとするけど名前が分からないみたいだ。まあ、当然か。あんなに必死でポニータを追い掛けてた訳だし

……

「モミジよ。よろしく、コノハ」

「ええ、よろしくね！」

……どうしてだろうな……コイツらってなんか似てるな

「それにしても凄いわねモミジ、あんなはしゃいでいたポニータを修めるなんて」

そうコノハが感心したように言う。確かにな、アレは凄い技だよな

「アレはね、癒しの歌って言えばいいのかな？昔お母さんに教えて

貰った歌だね。ポケモン達はこの歌を聞くとね、心から落ち着くみたいなんだ」

へへ、癒しの歌か……オレが感じたのもそれか。ん？

ポケモン？

この音色ってポケモンに効果が……オレってどこか野生に近いってのか！？

「へへ、凄いわね。わたしもその歌、演奏してみたいな」

オレは弱冠シヨックを受けてる間にもそう会話が続く、コノハが音楽か……にあわ……いや、野暮な事は言わないでおくか……まだ死にたく無いし……

「いいよ。後で教えて上げる。でも変わりにアタシにポケモンバトルを教えてよ。トレーナーさんなんでしょ？」

バトル？

なんで急に……

「いいけどさ、なんで急にバトルなんて……」

オレが突っ込みを入れる。最近突っ込みの回数が増えてきた気がする。

「そつね、ここは秘密って事にしておこうかな？」



そうモミジはイタズラっ子みたいに言う。ふに落ちないけど、ま、いっか

「分かった。少しぐらいなら付き合っただよな、コノハ」

「ええ、勿論よ」

そう言うコノハが少し嬉しそうなのは何故だろう？

同年ぐらいの女の子と久しぶりに話せて嬉しいのかもな。

「それじゃ少しこれでも飲んで待ってて、アタシのポケモン達連れてくるから」

そう言ってモミジは自分の足元に置いてあったバスケットから牛乳ピンを2本取り出してオレ達に渡してくれる。それからモミジは走っていった。

「モミジか……」

オレ達の新しい友達の名前を呟いた後、牛乳ピンの蓋を外してピンに口をつけて飲みはじめた。

## 新たなる出会い（後書き）

### 次回予告

イッキ「モミジとバトルすることになったコノハ、まあ、バトルつて言ってもなあ……」

コノハ「ちゃあんと手加減ぐらいはするわよ……まあ見てなさいよ」

イッキ「どーだか……次回、ポケットモンスター ACE SEASON D SEASON 『コノハVSモミジ』次回もポケモンゲットだぜ！」

ポニー「ヒヒィーン」

コノハ「アンタもいい加減に落ち着いてよね……」

## コノハVSモミジ（前書き）

牧場で出会った少女、モミジの練習に付き合うことになったコノハ。  
どんなバトルをするのか？

## コノハVSモミジ

「ルールは1対1のシングルバトル、先に相手を戦闘不能にしたほうが勝ちだ。いいな、コノハ、モミジ」

オレは距離を取って向かい合って立つ、二人に尋ねる。さて、モミジにバトルを教える事になったオレとコノハはまあ実践してみようぜ、という訳で、コノハとモミジがバトルする事になった。この勝負、トレーナーじゃないモミジがどこまでやるか楽しみだな。

「分かってるわよ！モミジ、全力でかかって来なさい！」

「分かってるって！あなたに勝つぐらいで行かせてもらっわ」

そうモミジが強気で言う。そのセリフは自信からくるものでは分かってる。モミジの口調はオレのピンチの時の空元気と同じ感じだな。

「それじゃやるわよ、頼むわよ、ウソツキー！」

『ウソウソ！』

コノハがそう言うのとコノハの後ろにいたウソツキーは前にでた。ウソツキーのバトルは何となく久しぶりに見るような気がする。

「アタシはこの子よ。お願い、デルビル」

『ガルウ』

そう言うとモミジの後ろから黒い獰猛そうな見た目をした犬のよう

なポケモン、デルビルが姿を現した。デルビルか、確か、悪と炎タイプを持ったポケモンだったな。確かに犬のポケモンって牧場でケンタロスとかを誘導するために追いつけ回しているイメージがあるからな、ピツタリと言えばピツタリだな

「それじゃ試合開始！」

「行くよ！デルビル、電光石火！」

『デルウ！』

試合開始直後にモミジ達が動いた。デルビルは電光石火を発動、素早い動きでウソツキーに突撃してくる。そして……

『デルウ！』

ウソツキーにスピードを活かした体当たりを決めた。スピードは牧場を駆け回ってるだけあって並以上のスピードだ。だが……

『デル………』

『ウソ？』

ウソツキーにはダメージは与えていない。逆に堅すぎて自分にダメージを受けているようだ。流石にウソツキーに電光石火は効かないよな……

「ええ！どうして！？なんで効かないの！？」

これに思った以上にモミジは驚いている。ウソツキーの事を草タイ

プとでも思っていたのか？

まあ、ここはアドバイスだな。普通ならそういう事はダメだが、これはあくまでもモミジの練習だ。アドバイスは必要でしょう

「モミジ、ウソッキーは岩タイプだぜ？ノーマルタイプの電光石火じゃ効かないぜ？」

そうオレは説明してやる。ウソッキーって本当に迷惑な見た目してるよな。多分始めて見る奴は大体草タイプと間違えるんじゃないか？

「そ、そうなんだ……でもアタシ、デルビルの技を、電光石火と吠える以外知らないよ……」

……な、なんだってー！

んなアホな……まあ確かに牧場じゃ、電光石火と吠える以外の技を使う機会って無い感じが……牧場のポケモンを攻撃するのもどうかと思うし……まあ、仕方ないかもな……

「えっと……ウソッキー、とりあえず距離をとるわよ。怪力を使つてー！」

『ウソォー！』

そうウソッキーが吠えると、怪力を発動、そしてデルビルを投げ飛ばしー先ず距離をとった。デルビルは焦りながらも上手く地上に着地する。

「イッキ」

コノハがオレに何かアドバイスするようになって視線を送ってくる。  
おいおい……お前、教えるのって難しいんだぜ？

なのに完全に人任せにすんなよ。オレとしては結構しんどいぞ

「あつと……モミジ、デルビルのタイプって知ってるか？」

一応確認しておく。まあ、これぐらいは知ってるよな？

「えつと……悪と炎タイプだね。それぐらいは把握してるよ」

そうか、それは知ってたか、よかったよかった。

「なら話は早い。悪タイプのポケモンの基本技は噛み付く、炎タイプの基本技は火の粉って技なんだ。デルビルは確か両方覚えるポケモンだったと思うぜ」

そうオレは説明する。本当にこの二つはそのタイプの基本技って言える技だから絶対に習得するよな？

「うーん……分かった。とにかくやってみる！」

そうモミジが期待半分、不安半分の表情で言った。まあ、始めて使う技だからそうかもしれないよな。オレだってオーダイルの技……ワニノコの時に始めて水鉄砲を指示をしたときはそんな感じだったもんな。

「なら、行くわよ。電光石火から噛み付く攻撃！」

『デルウー！』

デルビルは再び電光石火を発動し、ウソツキーに接近して口を大きく開いた。そりゃやっぱり使えるよな。

「ウソツキー、正面から受け止めるわよ！固くなりなさい！」

『ウソツ！』

コノハが指示を走らせるとウソツキーはガードの体制をとる。固くなるを発動させたんだな。

『ガルウウー！』

そこに勢いよくウソツキーの腕に噛み付いた。それを受けたウソツキーは辛そうに顔をしかめた。いくら固くなっても噛み付かれたら痛いよな……

「今だよ！もつともつと噛み付く攻撃！」

『ガルウウー！』

その指示を聞き、休む間も無く、デルビルは更に噛み付き始めた。相手に休む暇を与えないこの攻撃、中々悪くない戦術だ。噛み付く攻撃は相手を怯ませる事がある技だしそういう風に使うには悪くないな。まあ、モミジがそれを知ってるとは思わないけど………ただこの戦術には大きなリスクが伴う。それは……

「甘いわよモミジ、ウソツキー、怪力！」



『ウソオ!』

『デルウ!?!』

「ええ!?!」

そういうコノハの指示、それに素早い反応をしたウソッキーは再び噛み付こうとしているデルビルを捕まえて再び投げ飛ばした。接近するって事は相手の攻撃のリーチの中に入るって事だ。って事は相手が攻撃してくるって事だ。特に頑丈なポケモンが相手の場合、接近してからの小技による連続攻撃ではあまりダメージを与えられない。その上、反撃のチャンスを多大に与えてしまいかなり危険だ。今のがウソッキーお得意のアームハンマーだったらただじゃ済まなかったな。そこら辺、コノハ達が手加減しているって事がよく分かる。

「うっ……こんな単調な攻撃じゃ駄目って事かあ……」

そうモミジが多少落ち込んだ口調で言う。この戦術の穴に気付いたみたいだな。これは大きな進歩だな。

「ならば次はコレよ!火の粉!」

『ガルウ!』

モミジの指示でデルビルは火の粉を口から放った。この練習、まだまだ続きそうだな。何となく初心に戻ったような気分をオレは感じながら、二人のバトルを見守り続けた。

「ありがとうモミジ、今日は楽しかったわ」

「うん、それはアタシもだよ」

コノハがモミジにそう言い、それにモミジがそう返した。バトルの結果、分かると思うがコノハの圧勝。モミジの指示によるデルビルの攻撃は何回も繰り返し返して行われた。その攻撃の度にモミジの攻めは上手くなっていく。それでもコノハとの技量の差、デルビルとウソッキーとの力量の差は覆す事は無理だった。果敢に攻める度に怪力で投げ飛ばされ、その攻めじゃ、まだまだ甘い事を教えられ、最終的にはアームハンマーをウソッキーが炸裂させ、勝負の決着となった。まあ、正直言えば、怪力で投げる時にアームハンマーを使つてればそれでコノハの勝ちだったから、実質、怪力を使った回数コノハが勝つたって事だ。まあ、圧勝だな。で、その後はコノハとモミジは約束通り、ハーモニカをやった訳だが……オレはモミジの

仕事を押し付けられて牧場のポケモンのお相手、普段はこんなお仕事なんてしないので、ケンタロスの角で付かれるは、ミルタンクに追いかけて回されるわけで、本当に大変だったぜ……

「……オレは……」

「あはは……ゴメンネ……」

そうオレがくたびれたように言うと、モミジが苦笑いをしながら謝ってくる。まあ、気にしないけどさ……

「それじゃモミジ、またね！」

「ええ、コノハ、イツキ、また会いましょ」

「ああ、勿論だ」

そうコノハが言いモミジ、オレの順番で続く。それからオレ達は振り向いてエンジユに向けて歩きだした。

「ん？」

「イツキ、どうしたの？」

今、ベルトのモンスターボールが揺れたような……

「イヤ、なんでもない……」

アブソルかオーダイルのボールだったような気がするけど……気のせいだよな？

オレは何か不吉な予感を感じつつもエンジュに向けて足を進めた。

## コノハVSモミジ（後書き）

### 次回予告

イッキ「コガネでの修業を一区切りしオレ達はポケモンリーグに向かうことに」

コノハ「で、結局特訓なんてしたっけ？」

イッキ「聞くんじゃない！次回、ポケットモンスターACE SEASON SEASON 『ポケモンリーグへ』次回もポケモンゲツトだぜー！」

オードイル『ダァイル！』

## ポケモンリーグへ(前書き)

一度実家に戻りポケモンリーグに向けて準備を行うツッキ達。  
そして旅立ちの日……

## ポケモンリーグへ

モミジと別れ、オレとコノハは一旦ポケモンリーグに必要なものをそろえるために自分の実家がある。ワカバとヨシノにそれぞれ帰郷していた。ポケモンリーグの日はもうすぐだ。今日合流してポケモンリーグの開催されるセキエイ高原に向かうつもりだ。よし……万が一のための食品も準備したし傷薬とか必要な分のお金とかも持った。よし、メンバーっ！

「オーダイル！」

『ダイル！』

「ドンファン！」

『パオン！』

「ピジヨット！」

『ピジヨオオ！』

「ブースター！」

『ブイブイ！』

「ハツサム！」

『サム』

ちえ……相変わらず可愛いげが無い奴

「アブソル！」

『アブウ！』

そうオレは全員の名前を呼び上げると全員が全員まあ、可愛いげが無い奴もいたけど気合いの声を上げた。よし……気合いは十分、やれるな。

「よし、んじゃ行くぜ、みんな戻れ！」

それを確認してからボールを取り出し皆をボールに戻し、オーダイルのボールから順にベルトにセットしていく。よし、準備完了！

そろそろコノハが来る頃だな。そろそろ出るか。オレは自室のドアを開けて部屋を飛び出した。ゆっくりと階段を降りて一旦台所に入る。そこには見慣れた光景、母さんが台所で洗い物をしているところだ。出発前に一言言っておかないとな。

「母さん！」

「イツキ、もう行っちゃうのね」

そう言う母さんは少し寂しそうである。けど……もう行かないと

「ああ、オレ！」

「分かってるわよ。しっかりやってきなさい。悔いは残さないようにね」



「ああ！」

そうオレは母さんの言葉に頷く。そんなの当たり前だった！

「それじゃ母さん、行ってきます！」

「いつてらっしやい」

そう言ってからオレは台所を飛び出した。玄関まで駆けて行って自分のシューズを履こうとしゃがみ込む。あ……靴紐が新品になっている……母さん……オレはそんな母さんの心遣いにうれしくなりながらも靴紐をしっかりと結び直した。よし、行けるな。オレは立ち上がって扉を開ける。んじゃ、待ち合わせのスクールにでも行くかな。ふうって息を吐いてからオレはスクールに向けて歩き出した。

「おつそーい！どうしてアンタはいつもそんなに時間にルーズなのよ！」

オレは時間通りにスクールに来たのはいいんだが……先手必勝と言わんばかりにコノハに憎まれ口を言われた……でも時間ピッタリだけど……

「どう見たって時間ピッタリじゃねえかよ」

そうオレは突っ込みをいれる。ふ……お前の続く突っ込みなんて読めてるぜ！

「5分前行動ぐらいしなさいよ！」

やっぱりかよ……最近コイツの台詞とか行動パターンが読めるようになってきたぞ。普段は超強気で理知的な部分もあるコノハだけど、本質的には子供っぽくて単純なんだよな……脳内メルヘンを構築してるしさ……

「はいはい、分かったよ」

「何よその適度な返事わぁ！」

流しかたも覚えた。これを普段から実施してきたヨウさんは偉大だと思っ。

「悪かったって」

「……」

あんまりにも適当に流すもんだからスネちまったか……悪い事しち  
まったかな？

こついう場合やること決まってるよな。

「んじゃ、そろそろ行くこうぜ。誰かさんのせいで野宿なんかしたく  
ねえからな」

「な、なんですって！誰かさんって誰の事よ！」

オレの台詞に予想通りの反応するコノハ次の台詞は決まってる。

「んなのお前に決まってるじゃんか！」

「な、なんですってー！」

顔を真っ赤にして怒るコノハは怖い。やべ……少し調子に乗りすぎ  
た……

「へへ、やれるもんならやってみな！」

「アンタわぁ！」

アハハ……一度売っちゃったケンカって取下げられねえ……そうオ  
レは呟くとコノハに背中を向けて走り出した。ふう……オレも進歩  
しねえなあ……

## ポケモンリーグへ（後書き）

### 次回予告

コノハ「お祭りよ！お祭り！」

イツキ「うわっコノハテンション高いって！どうしてオレの周りにはこんな祭り好きが多いんだよ！」

コノハ「次回！ポケットモンスターACE SECOND SEA  
SON 『イツキの悪夢』次回もポケモンゲットだぜ！」

イツキ「ちょ！何その不穏なタイトル!？」

ルカリオ『どんまい』

## イツキの悪夢（前書き）

無事になんとかポケモンリーグの会場に到着したイツキとコノハは

……

## イツキの悪夢

「ハハハ！この勝負もらっぜ！Kの4枚！革命で形勢逆転だあ！」

そうオレは高らかと勝利宣言しながら手札から4枚のカードを出す。  
ハハハ！

ざまあないぜ！

「イツキ……切り札は最後までとっとくもんだ。6の4枚革命返しだ」

「どづいつ事なんだあ！」

そう言いながら出すユウイチに悲鳴を上げるオレがいた。

「悪いわねイツキ、こんなにながつつり奢ってもらっちゃってさ」

「いやいやコノハ、負けるコイツが悪いんだって!」

「だよー。まさかイツキがこんなに大富豪が弱いなんて!」

「ゴ、ゴメンネ、イツキ……」

「畜生……覚えてるよ……」

そう会話が続いた。今日はポケモンリーグ開催寸前の前夜祭だ。んでセキエイで合流したユウイチとサクラと一緒に遊びに行くわけになったわけだが……ユウイチが突然賭けをしようとして持ち出しそれに乗ってしまった。屋台の焼きそばを賭けて大富豪で勝負することになったんだけどさ……自分の実力を全く考えずに安直に受けたのが失敗だった。見事に連敗を喫してしまいこうやってみんなに奢っている訳だ。トホホ……財布はまだ元気だけどさ、いきなりこの大量消費は泣けてくるぜ……

「落ち込んでないでお前も食べるよ。中タイケてるぞ」

そう言うユウイチは色々嫌な奴だと思う。奢ったのはオレなのによ……オレは涙を堪えつつも焼きそばをすする。うん、本当に美味いよ。でも……ハア……テンション下がるなあ……

「まあまあ!そんな気を落とさないでって!たかが1パック300円じゃーん!」

な……なん、だと……

「コノハ！お前は塵も積もれば山となるという言葉を知らんのか！300円は確かに露店に売ってるものの中では安くて良心的な値段さ。だがよ、4パック買えばどうなる、1200円だぞ！それだけあれば漫画を2冊買った上にイマウ棒を6本も買えるんだぞ。それをお前は分かつてる言っているのかよ！」

我ながらとんでめない熱弁をコノハにしたと思う。でもこんな事熱弁したくなかったと思わないでもないが……

「ア、ハハ……その、ね……ゴメンネ……」

そう言うのはコノハじゃなくてサクラだ。サクラって根は優しくてすっごい真面目だから、こういう時も本気で謝ってるんじゃないかなあって思う。だからこの場合はサクラは許せるんだ。サクラは……だが！

「サクラ、気にする必要はないさ。賭けで負けるイツキが悪いんだからさ」

「そーそ、だから気に病む必要なんて全くないよ」

「お前らは許せねえ！」

そう続けて言うユウイチとコノハにオレは思わず叫び声を上げる。ああ、こいつらの邪悪さを今日改めて実感したよ！

「ゆーいちもコノハちゃんも少しは反省してよ……」

そう言うサクラの台詞がなんかオレの気持ちを代弁してるように聞



こえてなんとも言えない気分になった。

さてユウイチとサクラと別れてオレとコノハは相変わらず祭を楽しんでいる。いつかコイツとした約束もあったからな。そいつを破る訳にはいかないでしょう。

「いやはや、やっぱりお祭りはいいもんよねえ！」

そうご機嫌でいうコノハはやっぱり普段はがさつで横暴だけど女の子なんだなっと思う。それでも、それでもオレは突っ込みたいところがあるんだ！

「なあコノハ……オレはそれは無いと思うんだ」

「何よ……」

「流石にその格好は無いと思うぜ……」

コノハの格好、頭にはリオルのお面、片手には綿飴、反対の手にはクジで手に入れたハズレの景品のおもちや……どっからどうみてもこれは酷いぞ……

「どこがよ……これぞお祭りって格好じゃない！」

……え……嘘……だろ……お祭りっていったら浴衣姿とかはっぴを着て笛を吹いてるとこだろ……まあこんなの個人的なイメージだからさ、人によって差はあるだろうけどさ……あれは、その無いでしょう。流石は脳内メルヘン……

「あ、イツキくん、コノハちゃん！」

不意にそんな声を聞いてオレとコノハは声が聞こえた方に振り返る。そこにいた二人組を見てオレは啞然としてしまう

「ランさん！ユースケさん！お久しぶりです！」

「うん、久しぶりだね二人とも」

そうコノハが言いユースケさんがそう返す。そう、そこにいたのはユースケさんとランさんだ。どうやら相変わらずバカッフルで元気そうだな。手なんて繋いでやがらあ……それよりも気になるのが……

「そのユースケさん、ランさん、その頭についてるのって……」

「え……ケーシィのお面だけど……」

「あたしはピカチュウのお面だけど……」

……メルヘンっていうかなんていうか……その子供っぽい人が周りにこんななにしたことに動揺を隠せないオレであった。

## イツキの悪夢（後書き）

### 次回予告

イツキ「遂に始まったポケモンリーグジョウト大会。オレは緊張しながらも予選の第1回戦に挑む」

コノハ「イツキ、アンタは何やってんのよ！本気でやりなさい！」

イツキ「だあ、分かってる！分かってるよ！予選の1回戦、オレは無事に勝てるのか？次回、ポケットモンスターACEとSECOND SEASONの予選一回戦（前編）も次回もポケモンゲットだぜ！」

ドンファン「パオーン」

予選1回戦(前編)(前書き)

予選の一回戦。初めてのポケモンリーグに挑むイツキの心境は……

## 予選1回戦(前編)

ポケモンリーグの予選リーグ一回戦寸前、現在控室にいる。昨日行われた開会式、そこで再会したカズマさんとカシスさん、それとコウやアキトと再会した。やれやれ本当に強敵揃いの大会になりそうだけ。で、今に戻る。控室のベンチに座って試合開始を待っている訳だ。相手はミコトって人でどうやらユースケさんとランさんの知り合いらしい。あの人達の知り合いって事はそうとうの実力者なんだろうな……そう思うと燃えてくるぜ！

- 次の試合、イツキ選手対ミコト選手、すぐに試合が始まるので入場お願いします。繰り返しします。次…… -

うし……オレの番だな。相手がどんな相手だろうが全力でぶつかっただけだ。オレはモンスターボールをセットしてあるベルトを引っ張り上げ、それを腰にセットする。よし……行こうぜみんな！

オレは控室のドアを勢いよく開けて部屋を飛び出す。そしてそのまま会場に走っていきこうとしたその時だった。

「イツキ」

「ユースケさん……」

後ろから声が聞こえて振り返るとそこにユースケさんがいた。しっかりいつもの赤いジャケットを着ていつでも戦える格好だ。次の試合でもユースケさんの試合なのかな？

どっちにしたってオレのやることは決まってる！

「ユースケさん、あの時、ヒワダでアンタと戦った時と違っつて事を見せてあげますよ！」

「うん、楽しみにしてるよ」

そう力一杯ユースケさんに指差しながら言つとユースケさんは不敵な笑みを浮かべながらそう返してくる。よっしゃ、目にもを見せてやるぜ！

ユースケさんの言葉にオレは頷いてから振り返って会場に向かって走り出した。よおし、行くぜ！

- ワアアアアア! -

!?

オレが走って会場に入った瞬間、今までに聞いた事が無いほどの歓声が聞こえた。すげえ……これがポケモンリーグ……うひゃあ、なんか緊張してきたぞ。今までこんなに緊張したのは初めてだぜ……おっと怖じけづいてる場合じゃねえな。オレはもう一度走ってバトルフィールドに入る。向こう側ではもう女の人スタンバイを終えている。あの人ミコトって人が……おっと、今は試合に集中しねえとな。

「あなたがイツキね。わたしはミコト、フタバタウンのミコトよ!」

「オレはイツキ、ワカバタウンのイツキだ。いい勝負しようぜ!」

相手が乗りのいい自己紹介してきたのでオレはそう力強く返した。へへ、面白いバトルになりそうだぜ!

「それでは試合を始めます。ルールは3対3のシングルバトル! それでは試合開始!」

最初からバトルフィールドにいた審判が試合開始の合図をした。よし、行くぜ!

オレは素早くベルトに手を回しボールを手に取りバトルフィールドに投げられる。行くぜ!

「ドンファン、君に決めた!」



『パオーン!』

「行くわよ、クチート!」

『クチイ』

オレがボールを投げるとバトルフィールドに元気よく姿を現した。それに対してミコトが出してきたのはクチート、可愛い容姿をしているが頭から髪のように伸びている大きな顎から狂暴な何かを感じる。タイプは……悪か？

いや、見た感じのイメージで判断するのは危険だな。とりあえず攻撃してみるか。

「行くぜドンファン、先手必勝だ。捨て身タツクル!」

『パオーン!』

オレの指示に従いドンファンは真正面からクチートに突撃していく。さあ、どう動いてくる？

「横っ飛びで回避!」

『クチイ』

クチートはその小柄な姿通りの軽快なステップでドンファンのタツクルは回避されてしまう。ちい……こんな単純な攻撃じゃ捕らえられないか!

「続けて氷の牙で攻撃よ!」

『クチイ!』

『パオ……』

く……なんてフットワークだよ。回避してすぐにまた飛んで背中  
の顎でドンファンに噛み付くなんて……しかも相性は悪いからダメー  
ジがデカイ……このまま噛まれたままではいけない!

「じたばたして振り払え!更にストーンエッジで追撃!」

『パ、パオーン!』

ドンファンは氷の牙によるダメージに苦しみながらもその場に止ま  
り体じたばたさせてクチートを振り払った。宙に舞うクチート、勿  
論追撃のストーンエッジも行くぜ!

行けえ!

『パオ!』

「甘いわよ!岩砕き!」

『クチイ!』

なっ!?

ミコトの出した指示、それを受けたクチートは空中で体制を立て直  
してから、飛んでくる岩に向けて拳を叩き付けた。それにより岩が  
砕け散るけど岩自身の勢いは殺されない。そのまま散弾としてクチ  
ートに襲いかかる。これでダメージが……!?

「いくらストーンエッジでも威力が拡散できればダメージは小さいわよ！クチート、気合パンチ！」

そうかよ！

今のでタイプは大体読めたぜえ……次に叩き込む技はコイツだ！

「ドンファン、氷のつぶてだ。奴の集中力を奪え！」

『パオオン！』

そうオレが指示を出すとドンファンが吠え、自らの周りに氷で出来たつぶてをいくつも作りだした。それはクチートに一直線に向かっていく。コイツは避けられないぜ！

『クチ……！』

弾速が早い氷のつぶてはクチートに命中した。しかしそれはクチートには全然ダメージを与えられていないようだ。だが、今のつぶての狙いは集中力を奪う事、集中力を奪われたクチートの拳はドンファンには全く効かない。それともう一つ、今のでダメージは殆ど無かったって事はさっきの岩の散弾で殆ど効かなかった事も合わせて考えると、その条件を満たしているのは鋼タイプ……ようやくお前の正体が掴めたぜ……行くぜ！

「炎の牙で攻撃だ！」

『パオオン！』

弱い拳を決めて、隙だらけのクチートにドンファンは自らの牙に炎を宿らせて噛み付こうとする。これなら！

「アイアンヘッドを地面に叩きこんで！」

『クチイ！』

！？

隙だらけのクチートは回避はしない、自分の頭を硬化させた頭を無理矢理したに降る事によって体勢を低くしてドンファンの噛み付きを避けたのか！？

しかも次の攻撃に繋がってやがる……土煙があがって視界が……けど、そう簡単にさせてたまるかあ！

「そこよ！冷凍パンチ！」

『クウチイ！』

「カウンターだ！」

『パオーン！』

オレが叫び、ドンファンが吠えた瞬間に更に大きな土煙が上がった。どうなった！？

『パオーン！』

！？

砂煙りの中から咆哮が聞こえる。砂煙りはすぐに晴れる。そこには倒れたクチートと勝ち誇ったように立ち尽くすドンファンの姿があった。カウンターでの効果が抜群の攻撃をさらに倍返しする作戦。これがなくちゃ完全にやられてたな……にしても手強いな……これがポケモンリーグか……でもとりあえずは一勝！

「クチート、戦闘不能！ドンファンの勝ち！」

「ありがとうクチート、休んでて」

審判のコールが掛かりミコトはクチートをボールに戻した。次は……おっとその前に！

「ドンファン、大丈夫か！？」

『パオツ！』

そう言うオレの台詞にドンファンは頷くけど……嘘が下手過ぎるぜ。それはさ……

「足を奮えさせて何言ってるんだよ……」

『パオ……パオ！』

そう指摘するオレにドンファンは鼻を左右に体全体を使って振って否定の意志を見せる。お前……そうか！

やれるんだな！

「よし、ならもつちよつと頼むぜ」

『パオン！』

そう言つとドンファンは力強く頷いた。本当に頼むぜえ……

「行くわよ……エルレイド！」

そう言つてミコトが出してきたのはエルレイドとかいうポケモンだ。両手に刀みたいのがついていて事から見て明らかな武党派なポケモンだな。タイプは見た目にいつかみたキルリアの面影があるからエスパーにもうひとつ、多分格闘タイプだな。

「ドンファン対エルレイド、試合開始！」

そう審判がコールをかける。先手必勝！

「ドンファン、捨て身タックル！」

『パオン！』

ドンファンはエルレイドに向かっていく。さあ、この勝負、勝つぜ！

予選1回戦（前編）（後書き）

さて今回登場したミコトですが、覚えてる方は覚えていているかと思いません。前作ユースケとランとダブルバトルをした子です。

前作ではリーグに登場する予定でしたが、尺の都合上登場で来ませんでしたので今回登場してもらいました。

イツキ「全く、その都合でいきなり強敵とかたまないぜ……」

てな訳で次回に続きます。

予選1回戦(後編)(前書き)

予選の一回戦もいよいよ後半戦。イッキはどつ戦つのか？



## 予選1回戦（後編）

オレの指示でドンファンは真正面からエルレイドに向かっていく当たれ！

「エルレイド、かげうちで避けて！」

そんな指示をミコトが走らせた瞬間だった。エルレイドが溶けるように姿を消したのだ。く……かげうちってマツバさんも使ってたっけか？

く……どこに消えた！

「今よ、リーフブレード！」

『エルウ！』

！？

そのミコトの指示が走った瞬間にドンファンの背後にエルレイドが姿を現した。そして目にも止まらぬスピードで腕を使いドンファンにリーフブレードを叩き込んだ。

『パオ………』

それを叩き込まれたドンファンは膝をついてそのままダウンした。ドンファンを良く見ると目を回している。

「ドンファン、戦闘不能！エルレイドの勝ち！」

さんな審判のコールが掛かった。く……さっきの冷凍パンチのダメージも蓄積してたから耐えられないよな……

「ドンファン、良くやったな！後は休んでくれ！」

そうオレはドンファンをボールに戻す。良く頑張ってくれたな……次のポケモンはどうする……？

ここはコイツだ！

「ピジヨット、君に決めた！」

『ピジヨオー！』

そうオレがボールを投げると巨大な鳥ポケモン、ピジヨットが姿を現した。インファイターってんなら苦手そうな空中戦で勝負してやる。

「それでは試合開始！」

そう審判のコールがかかる。先手必勝だ！

行くぜ！

「ピジヨット、電光石火！」

『ピジヨオー！』

オレの指示でピジヨットは目にも止まらぬスピードでエルレイドに

突撃していく。まずは距離を詰める！」

「サイコネシスで動きを止めて！」

っ！？

ミコトのそんな指示でエルレイドは目を細める。捕まる訳にはいかない！

「ピジヨット、急上昇するんだ！」

ピジヨットはそこで急上昇、サイコネシスは受けずにすんだらしく。特に動きに不自由さはない。しかもそこでピジヨットは止まらない。上昇しつつもエルレイドの背後に回った。この位置……行くぞお！

「ピジヨット、エアスラッシュ！」

『ピイジョオ！』

『エルウ……………』

「エルレイド！」

ピジヨットの放った空気の刃、それはエルレイドに襲いかかった。結構なダメージを与えたようで動きを一瞬止める。よし、追加攻撃だ！

「更にエアスラッシュ！」

『ピジヨット……………』

調子に乗ってエアスラッシュを1発2発と連射、コイツで一気に決着を！

「調子に乗らないでよ……エルレイド、ジャンプ！」  
『エルウ！』

ミコトが叫ぶとエルレイドはピジョットに向かってジャンプする。エアスラッシュに当たりに来たのか！？

『エル！』

！？

エルレイドはエアスラッシュに当たる寸前に念力を使ったのかふわりと少しだけ浮き上がりエアスラッシュを回避した。いや……それだけならいいけど、更にそこからエアスラッシュを踏み台にしゃがったのか！

少し弱くなっていたジャンプの勢いはまた元に戻り凄いい勢いで向かってくるエルレイド。そんなのありかよ！

「私のエルレイドを甘く見すぎてたみたいね。行くわよ、サイコカッター！」

「！？そう簡単にやらせるかよ！鋼の翼！」

『エルウ！』

『ピ、ピジョ……』

接近してきたエルレイドの攻撃、自慢の両手の刀のような部分でたたき付けるような攻撃を呆然としてたオレ達はなんとか右の翼を硬化させて受け止める。あ、危な……やられるかと思っただぜ……！

「な!？」

オレは危機を逃れたかと思って安心していると新しい現実を突き付けられる。エルレイドのサイコカッターを鋼の翼で受け止めてるピジヨットは飛ぶための浮力が無いのか!？

「そのまま体重をかけて！」

『エルウ!』

く……相手もそれを狙ってたかのようにピジヨットを地面に叩きつけようとしてきやがる。どうする……ピジヨットは破壊光線みたいな口から放つ技なんて覚えていないから実質左の翼だけでなんとかしないといけないのか!？

どうする……

『ピジヨオ!』

!

オレが作戦を決め兼ねているとピジヨットが動いた。なんと体重をかけるために近づいていたエルレイドの顔に嘴で噛み付いたんだ。これって……ついでに技か……いつの間にこんな技を……じゃない!

今はエルレイドを倒す事に集中だ！

「今だピジヨット！燕返し！」

『ピイジヨオ！』

ピジヨットに顔を噛み付かれ嫌がるそぶりをしていたエルレイドは隙だらけだった。ピジヨットはサイコカッターを振り払い素早くエルレイドの背後に回っていた。形成逆転！

コイツでも食らえ！

「かぜおこしを浴びせてやれ！」

『ピジヨピジヨピジヨオ！』

『エルウウ！』

「エルレイド！」

そこで休む暇は与えない。強力な風をぶつけてエルレイドを地面にたたき付けるた。でもこれぐらいじゃあのエルレイドはやられないのはあのでたらめな動きを見て大体悟ったぜ。次の一撃で決着をつける！

「コイツで決着をつける！ブレイブバード！食らええええ！」

『ピイジヨオオオ！』

エルレイドがたたき付けられ上がった土煙に目掛けてピジヨットは真正面から突撃していく。ピジヨットの特性は鋭い目だからあれ程度の土煙なんてなんでもない！

行けえ！

「逃げてエルレイド！」

『エルウ……………』

土煙から吹っ飛ばされたエルレイドはバトルフィールドを転がっていきそのまま目を回していた。そして土煙から悠々と非行して登場するピジヨット。うっし！

「やったぜピジヨ……………え」

オレの言葉は途中で中断させられる。なぜなら突然ピジヨットが糸が切れた人形みたいに落下したからだ。どうして……………

「ピジヨット！」

オレは考えるのをやめてピジヨットの元へ駆け寄る。特に目立った外傷は無いけど……………完全に目をまわしている。どうして……………

「道連れを使うなんて……………無茶するんだから……………」

そんなミコトの声が聞こえる。道連れ……………自らを倒した相手を自分と同じ状態、ようは戦闘不能の状態に持ち込む荒業だ。あのエルレイド、最後の最後になんて事しやがるんだ！

「ピジヨット、すまねえ……オレが迂闊過ぎた。ゆっくり休んでくれ……」

そうオレはピジヨットを戻してからオレは自分のいるべき場所に戻る。これがポケモンリーグの戦い……本当にちよつとした失敗とか慢心が負けに繋がってる……上等じゃねえか……やってやるぜ！

「最後の1匹……やるわねイツキ君……」

そうミコトが声をかけてくる。へっ！

「当然！でもアンタも強いよ。本当に面白いバトルだぜ！」

そういうミコトに返すオレだけど……このミコトって人の歳つくていくつなんだろう……高確率で年上だろうなあ……こんな酷い言葉遣い……まずいだろうなあ……

「これが最後の勝負エンペルト、頼むわよ！」

『ペルウ！』

そうミコトが言いながら出して来たのはヨウさんも使っていたエンペルトだ。エンペルトか……一戦を引いていたヨウさんのエンペルトも強かったからな……コイツは手強いぜ……

「ならオレはコイツだ！オーダイル、君に決めた！」

『ダイル！』

それに対してオレはオーダイルだ。ここ1番の状況ならコイツで行くしか無いでしょう！



まあ、多少デジャブって気がしない訳じゃねえけどさ……

「それでは、試合開始！」

「オーダイル（エンペルト）、高速移動！」

『ダアイル！』

『ペルウ！』

審判がコールを掛けた瞬間にオレとミコトは動いた。オーダイルもエンペルトも高速移動を発動して接近していく。それからお互いの格闘間合いに入らないように牽制をしあっている。やっぱりこうなるみたいだな。なら！

「そこだメガトンパンチだ！」

『ダイル！』

『ペル！？』

オレ達が先に仕掛けた。オーダイルは優れたフットワークを生かしてエンペルトの間合いに入りエンペルトに拳を叩き込む。まあそんな簡単に直撃貰ってくれる訳ないか……エンペルトは自分の翼を盾のように使いメガトンパンチをガードした。鋼タイプだからダメージは大きくないみたいだけど大きくのけ反る。今ならもう一撃行ける！

「更にメガトンパンチだ！」

『ダイル!』

追い撃ちをかけるように指示を出すとオーダイルは更に殴り掛かる。  
今度は直撃だ!

「アクアジェットでカウンターを叩き込んで!」

『ペルウ!』

『ダイ……』

く……拳を振りかぶったオーダイルの懐にアクアジェットでエンペルトが突っ込んできやがったんだ。それで体勢を崩した。これ以上は!

「滝登りで弾き……」

「遅いわ! ハイドロポンプ!」

『ペエエルウ!』

『ダイイイイ!?』

「オーダイル!」

オレは思わず叫び声を上げてしまう。ハイドロポンプの直撃を受けたオーダイルは吹っ飛ばされダウンするもすぐに、でもよろよろとしながらも立ち上がる。

「大丈夫か！」

『ダイ……』

そうオーダイルはゆっくりと頷く。だよな……オレ達は色々辛かったり死にかけたりとかしてきたんだ！

そう簡単に負けてたまるかよ！

「そう簡単にはいかないか……エンペルト、波乗り！」

『ペルウ！』

ミコトの指示と共にエンペルトの足元から巨大な波が現れ、それにエンペルトが乗り、こちらに突撃してくる。そうくるなら新技を見せてやる！

「オーダイル、吹雪を食らわせてやれ！」

『オオオダアイル！』

オーダイルが吠えた瞬間フィールド全体を包むように強烈な冷気が放たれた。それは波を凍結させていき、エンペルトもまとめて凍らせようとする。このまま行けば！

「そんな簡単に行くと思わないで！そこから飛び降りながら鋼の翼よ！」

『ペ……ペルウ！』

!?

エンペルトは波が完全に凍りつく前に波から飛び降りるように飛んだ。そして……

『ダイ……!?!』

『ペルウ!』

く……落下の勢いを使った鋼の翼をオーダイルの顔に叩き込んできた。それを受けたオーダイルは体勢を大きく崩してしまふ。

「追撃のハイドロポンプ!」

「く、来るぞ!」

『ペルウ!』

『ダイル!?!』

お……あぶな……容赦ないエンペルトの攻撃はオーダイルは焦りつつも重心を思いつきり左にかける動きで回避する。本当に間一髪だったけど……今のをかわされたあつちは同様してるハズだ!

今度はこっちの番だ!

「かわらわりを使え!倍返しだあ!」

『ダイイル!』

『ペル……』

オーダイルは重心を左に傾けたまま右手で攻撃する。エンペルトは体勢を崩す。その隙にオーダイルは体勢を直し、拳を一段二段と叩き込む。効果が抜群の攻撃をこれだけ与えれば！

「た、体勢を立て直すよ。高速移動！」

『ペル！』

さらに一撃を与えようとしたのを高速移動で後退し回避された。流石に簡単には行かないか……なら！

「高速移動で追撃だ！逃すものかよ！」

『ダイル！』

そこで一気にオーダイルは駆け出す。距離を詰めて一気に終わらせる！

「近寄せちゃ駄目！水の波動で攻撃して！」

『ペルウ！』

な！？

高速で迫るオーダイルに向けてエンペルトは特大の水の波動を放ってくる。特性激流か！？

あの強力な水の波動は当たれない……でも回避も間に合わない……

なら……イチバチオーダイルを信じてやるしかない！

「冷凍パンチで受け止める！」

『ダアアイル！』

オーダイルはそこで拳に冷気を纏わせて拳を振るう。そこで水の波動を横殴りにして水の波動を検討違いの方向に吹っ飛ばした。このまま突っ込むぜ！

「オーダイル、突っ込め！」

『ダイル！』

オレの指示を聞いたオーダイルは更に加速し、エンペルトに向かっていく。

「鋼の翼で迎撃して！」

『ぺ、ペルウ！』

流石にあんな無茶な事をされたらミコト達も焦ったみたいだな。エンペルトは焦って接近したオーダイルに鋼の翼を叩き込もうとするけど当たらない。頭を振るように頭を下げてその攻撃を回避する。そして右の拳を一度開いてから握り直した。これで終わりだ！

「オーダイル、気合パンチだ！」

『ダアアイル！』

「エンペルト！」

オーダイルの拳はエンペルトに炸裂した。その重い一撃はエンペルトを吹っ飛ばしフィールドの反対まで吹っ飛ばした。これでどうだ！

『……………』

エンペルトを目を細めて良く見ると目を回していた。

「エンペルト、戦闘不能！オーダイルの勝ち！よってイツキ選手の勝ち！」

そうコールがかかる。う……………う……………

「うおっしゃあ！やったぜ！」

オレは馬鹿みたいに叫びながらもガッツポーズをする。勝った勝ったぜ！

ポケモンリーグ初勝利なんて嬉しいってもんじゃないぜ！

『ダアイル！』

「は……………ちょオーダほげっ!？」

そう感極まってるところに喜びのあまりかオーダイルが突っ込んできた……………イテエよ……………

「テテテ……………よくやったなオーダイル！今回の勝利はお前がいなければ無理だったぜ」

『ダイル!』

そうオレが言うとおーダイルは嬉しそうに頷いてからオレからどいてくれる。悪い事をしてる自覚はあったんだな……まあ、ともかくオーダイルがどいてくれたからなんとか立ち上がる事は出来た。本当に痛いぞ……

「大丈夫?」

?

そんな声が聞こえ、声が聞こえた方を向くとそこにはミコトの姿があった。

「私達の完敗ね……行けると思っただけどなあ……」

そう言うミコトは凄く悔しそうだ。そりゃ……そうか……

「オレだって負けるかと思っただぜ……」

本当に危なっかしいバトルだったからな……後一手でも間違ってたやられてたんだろうな……

「私に勝ったんだからちゃんと決勝リーグまで行ってよね?」

……ミコト……これが、勝った奴の責任、か……

「ああ!言われなくてめ分かっているって!絶対に決勝リーグまで行ってやるさ!」



そうオレは力強く言った。ミコトにだけじゃなくて、自分に言い聞かせるぐらいの気持ちで

予選1回戦（後編）（後書き）

次回予告

イッキ「一回戦をなんとか勝利で飾ったオレの試合の次はユースケさんの試合だ」

ラン「頑張ってユースケ！こんなところで負けちゃだめだよ！」

イッキ「一回戦お手並み拝見と行こうか！次回、ポケットモンスター I ACE SECOND SEASON 『必ず突破してみせるよ！』次回もポケモンゲットだぜ！」

サンド『ピキィ！』

イッキ「お前は何でそこにいるんだよ………」

「絶対に突破して見せるよ!」(前書き)

イツキの次はユースケの順番。前回準優勝の意地を見せられるか？

「絶対に突破して見せるよ！」

イツキとミコトのバトルはイツキの勝ちで終わっていた。本当にイツキの言っていた通り、あの時とはまるでなにもかも違っていた……僕もうかつかしてられないな。次は僕の試合だ。さっきエックしたけどみんなのコンディションは最高に良い状態だ。どんなバトルになったってそう簡単には負ける事は無いと思う。

『時間だな』

ユンゲラーのテレパシーが聞こえる。僕は「うん」って頷いてから愛用の赤いジャケットを着込んで、ポケットに入れておいた指先だけ出るようになってるグローブを嵌める。それから6つのボールがセツトされたベルトを腰に巻いて準備完了！

「行くよ、ユンゲラー、みんな！」

『ああ！』

僕はユンゲラーの言葉を確認してから控室から飛び出す。予選一回戦、必ず突破してみせるよ！

- ワアアアアアア！ -

僕がスタジアムに入場すると物凄い歓声が上がった。なんだかなあ……どうもこの雰囲気には慣れないなあ……ただでさえいつも緊張して臨んでいるのに余計緊張しちゃうよ……

「ユースケ！頑張れー！」

！

歓声の中から聞こえたよく聞き慣れた声に僕は振り向く。全くさ……自分でも呆れちゃうよ。ランの声だけは正確に聞き取れる自分……僕……僕は観客席を探してみる。一例二列三列と……あ、いたいた！

僕の視線の先にはランとカズマ、カシス、それにイツキとコノハ、ユウイチとサクラまでいる。ラン達はみんなもう勝ち進んでいる。僕が最後の一人って訳だ。ここは絶対に負ける訳には行かないな。僕は気を引き締め直してから振り返る。バトルフィールドの反対側には結構なお年のおじいさんだ。それでいて結構な覇気を放ってるところから見ていわゆる達人って呼ばれる人みたいだね……

「ほう、君がACEエクスの異名を持つ少年か……」

そう言うおじいさんは余裕の表情をしている。やっぱり長生きして出来た人生の重みの差って奴なんだろうな……それよりACEって言われるのあんまり好きじゃないんだよなあ……過大評価されてる感じでさ……

「ふむ、油断ならない相手みたいじゃな。お手柔らかに頼むぞ」

おじいさんはそう言うけど……絶対にそんな事してる余裕無いつて……

「こちらこそよろしくお願いします」

僕はそう返してからいつでもボールを取り出せるように構える。それに対して相手のおじいさんが構えてきた。本当に手強い相手みたいだね。予選の一回戦から辛いよ……ま、それはそれで面白いけどね。

「それでは準備はよろしいですか？ルールは3対3のシングルバトルです。試合開始！」

そんなコールがかかり僕は素早くベルトからボールを取り出す。久しぶりに行ってみようか！

「頼むよ、サンドー！」

『ピキィー！』

僕がボールを投げるとブロックのような跡がある黄色のネズミのよ

うなポケモンが姿を現した。サンド、僕がカントー地方を旅してる時に初めて自分の力でゲットした大切な僕の仲間だ。ラティオスと交換で自宅から連れて来たんだ。多分ポケモンリーグでラティオスを出す事は無いと思う。

ラティオスは伝説のポケモン。通常のバトルなら出す事はあるかもしれないけどポケモンリーグは別だ。テレビに映る事になるからね……ラティオスはロケット団に狙われてるだろうけどそれどころじゃなくなる。ハンターといった犯罪者に狙われる事になるかもしれない。そうなれば僕だけじゃ守りきれぬ自信が無い。

ランもラティアスを連れてるから危ない目に会うかもしれない。だからかわいそうだけど今回は出番はお預けだ。ちなみにランもラティアスをバタフリーと交代している。ラティアスはなんか光の偏光で見た目を変える事が出来るらしくて……ランの家で小さい頃、7歳ぐらいの時のランに変身して生活してららしい。それを見てランのお母さんもなんか嬉しそうとか。なんていうか突っ込み所満載だよ。とりあえず今は集中だね。

「行くのじゃ、チャーレム！」

そう言っておじいさんが出して来たのはヒヨロツとした胴体にはかまを履いてる様なポケモン、チャーレムが姿を現した。確か……リョウトの手持ちにいたっけ？

確かタイプは格闘とエスパー、特性のヨガパワーっていうのでマリルリみたいに凄いパワーを持ってるんだっけ？

厄介なポケモンだな……とりあえず攻めて行こう！

「サンド、先手必勝だよ！ブレイククロー！」

『ピキィー！』

サンドは2本の足を使ってチャールムに向けて駆けていく。そのスピードはお世辞にも軽快とは言えないけど一歩一歩が力強い。これなら行ける！

「チャールム、冷凍パンチじゃ！」

ギリギリまで近付いたところでカウンターを狙うように冷気をおびた拳を奮ってくる。クロスレンジ！

『ピキ……！』

『チャア！？』

本当にギリギリだった。ギリギリまで接近したサンドは膝を限界まで曲げてその攻撃をスレスレで回避する。ギリギリの回避をされてチャールムは驚きの悲鳴をあげる。サンドは全然鈍ってないみたいだね。それじゃ、行っけえ！

『ピキイ！』

『チャ……』

懐に入ったサンドはそこでジャンプをしてアッパーを決めるようにブレイククローをお腹に炸裂させた。それを受けたチャールムはお腹を押さえながら大きく後退した。まだまだ行くぞ！

「サンド、そこからスピードスター！」

『ピキイ……』



ブレイククローを決めてから更にサンドから高速の星の形をしたエネルギーを連続で口から吐き出す。当たれ！

「そう何度も攻撃は喰らわんよ。チャーレム、その攻撃を見切るのじゃ」

『チャア……………』

チャーレムが静かな声を出すと同時に目が輝き出しスピードスターを容易に回避してしまう。そう簡単にはいかないか……………なら！

「サンド、捨て身タツクル！」

攻撃を回避してるチャーレムに向けてサンドは真正面から突撃する。そして懐に入ったところでもう一度足のフットワークを最大限まで生かして突進した。これを受ければ！

「チャーレム、飛び膝蹴りじゃ！」

『チャアアア！』

『ピ……………キ……………』

「サンドー！」

おじいさんの指示を受けたチャーレムは膝を上げ、片方の足を上げ、反対の足で跳躍した。突っ込んでいたサンドに合わせたその一撃でサンドは蹴り上げられ吹っ飛ばされた。く……………強い……………

『ピキ……』

それを受けてもすぐに立ち上がるガッツはサンドの長所だよ。

「サンド、まだまだやれるよね?」

『ピキ!』

そう僕の言葉にサンドは頷いてくれる。なら次の攻撃に賭けよう!

「まだ立ってくるか……ならば、マツハパンチじゃ。とどめを受けて貰う」

『チャレ!』

素早く突っ込んでくるチャーレム、ギリギリまで引き寄せて……今だ!

「サンド、どろかけをチャーレムに浴びせるんだ!」

『ピキイ!』

『チャ!?!』

突っ込んでくるチャーレムに向かって放ったどろかけ、それは見事にチャーレムの顔にヒットしていて完全に視界を塞いでいた。目を封じられたチャーレムの拳は見事に外れてしまう。今が絶好のチャンス、相手は技を空振って隙だらけの上に突っ込んで来たせいでサンドに懐に入り込まれている。これで終わりだ!

「サンド、シャドークロー！」

『ピキィー!』

サンドの爪が黒いオーラを纏い、それを素早くチャールムの腹部にヒットさせた。それを受けたチャールムはサンドに覆いかぶさるようにダウンした。効果は抜群の一撃を受けたからね。今のは効いたハズだよ。

『ピキ………』

チャールムに押し潰されていたサンドはそのもとチャールムの下から出てきて、チャールムの顔を指差す。あ……完全に目を回してるや。

「チャールム戦闘不能! よってサンドの勝ち!」

審判さんのコールが掛かる。やった!

まずは一勝!

「チャールム、戻るのじゃ………こつも簡単にチャールムを破るとはの………」

「ブレイククローが決まってるじゃないと無理でした。あれでチャールムが打たれ弱くなって無かったらこつも簡単にはいきませんでしたよ」

ブレイククローには受けた相手の防御を高確率で低下させるという効果がある。あれで防御が低下した上に効果は抜群の一撃だからこつ簡単には堪えられないよ。

「なるほどの……なら次のわしのポケモンはコイツじゃ！頼むぞ、ハガネール！」

『グオオオオン！』

そう言っておじいさんが出して来たのはなんとハガネールだ。僕ってなんかハガネールとはつくづく縁があるような気がするな……戦う相手がよく持つてるよ。

「サンド、頼むよ！」

『ピキィー！』

僕の言葉に頷くサンドは凄い頼もしい。でも体格的にもサンドが大きく負けてるなあ……どう戦おっか？

「試合開始！」

そう考えてるうちにコールが掛かった。相手は鋼と地面タイプ。こちらとしては決定打になる技は持っていない。どうする？

「ハガネール、アイアンテールじゃ！」

『グオオオオン！』

「サンド、避けるんだ！」

『ピキィー！』

とつさに僕は指示を出すとなんとかサンドはそれに反応してハガネールの攻撃を回避した。それにより地響きが起こり、地面にひびが入った。く……ミカンの時も思ったけど、やっぱりハガネールの重量は怖いな……確か400Kgだったけ？

本当に冗談じゃないよ。なら！

「サンド、思いつ切り地面を揺らすんだ！」

『ピイキイ！』

僕の指示でサンドは地面に拳を叩きつけるとフィールドが揺れ地震が起こった。それによりハガネールがバランスを崩す。ウエイトが大きい分、バランスを崩したら体勢を立て直すのに時間がかかるからね。このまま一気に行くよ！

「サンド、一気にハガネールを駆け登るんだ！」

『ピキツ！』

バランスを崩していたハガネールをサンドは駆け登る。そして一気にハガネールの頭にまでのぼり詰めた。これでも受けてみなよ！

「怒りの前歯だよ！」

『ピイキイ！』

『グオオオン！？』

「ぬう！？ハガネール！」

頭部にサンドは牙を剥く。怒りの前歯はどんなに頑丈なポケモンでも確実に大きく相手の体力を持っていく技。これならいくらハガネールだつて！

「まだじゃ！ジャイロボールじゃ！」

『グオオオオ！』

『ピッピキ……！？』

「わわ！？サンド、ハガネールから離れないで！」

ハガネールは急激に体を高速回転をして噛み付いているサンドを引き離そうとする。これは……我慢比べだね……

「ハガネール、もっと回転するんじゃ！」

「サンド、頑張れ！」

『グオオオオ！』

『ピキイ！？』

なおも回転し続けるハガネールに食らいつくサンド。この勝負……どうなる！？

『グオエ………』

『ピキ？』

!?

あ……ハガネールの回転が弱まってきた……？

あ……ハガネールが目を回してきたのか！

だからってサンドに出せる指示なんて変わらない。我慢比べだけ……  
…頑張れ、サンド！

『グエヘエ………』

「ハガネール!？」

ついにハガネールが崩れる。そのままハガネールは目を回して倒れた。また起こる地響き、く……400Kgはとんでもないよ……でもサンドはハガネールに噛み付いたままだ。今なら！

「サンド、行ける!？」

『ピキヤアア………』

……君も目を回してたのか……でもこの距離ならもう関係ない。必殺の一撃をハガネールに叩き込むだけ。

「サンド、爆裂パンチだ！行っけえええ！」

『ピキヤ………ピキヤアアア!』

『グオオオオオオン!』

「ハガネール!?」

目を回していてもこの一撃は外さなかった。爆裂パンチはハガネールに炸裂した。それによりハガネールは絶叫をあげ動かなくなった。勝った……のか？

「ハガネール、戦闘不能！サンドの勝ち！」

審判さんのコールが掛かる。よし、勝った！

「サンド、ここまでよく頑張ってくれたけど……まだ行ける？」

『ピキヤ……』

そうサンドは僕の問い掛けに頷く。そっか……

「うん、分かったよ。サンド、お疲れ様、ゆっくり休んでて」

『ピキ!?ピキヤア!』

僕の台詞に反論するようにサンドは声を出すけど僕はそれを無視してサンドをボールに戻した。ああ言ってるサンドほど信用出来ない事は無いからね。ほんと体中を奮えさせて何言ってるんだか。あれだけ振り回されて吹っ飛ばされるのを我慢してて体力が無くならないはずが無いよ。さてと、僕の2番手はどうしようかな？

やっぱりここは短期決戦をしたい。これからも勝ち進むならこんなところで消耗したくない。だからここは出し惜しみしてる訳にはいかない！



「頼むよ、リザードン！」

「行くのじゃ、フライゴン！」

『リザアア！』

『パイグイ！』

僕は出したのはウンゲラーとは別のもう一人の相棒とも言えるポケモンだ。尻尾の炎は戦闘体勢をとると同時に大きくなる。いつでも戦えるみたいだね。

「試合開始！」

試合開始のコールがかかる。それと同時にフライゴンは動いた。地面に拳をたたき付けるとリザードンに向かって地面がひび割れていく。それに対してリザードンは地面を蹴るように飛びあがった。それと同時に地面が割れる。今のは地割れ……危ないなあ……迂闊に地上で戦うのもまずそうだよ……リザードンが飛び上がるのに呼応するようにフライゴンも翼を広げて飛び上がる。空中戦をやるしかないみたいだね。

なら！

「リザードン、ドラゴンクロー！」

「フライゴン、こちらもドラゴンクローじゃ」

『リザー！』

『ピギイ！』

リザードンとフライゴンは互いに素早く接近すると、鏝せり合いが起こる。接近戦は互角ななか？

更に爪をぶつけようとリザードンが拳を突き出すとフライゴンはそれを払うように腕を振るい、リザードンは弾き飛ばされる。やっぱりドラゴンタイプだけあるね。凄いパワーしてるよ。でもまだまだ！

「テールバーナーで一気に距離を詰めるんだ！」

『リザア！』

リザードンは僕の指示と同時に尻尾を真っすぐに伸ばすと炎がガスバーナーのように噴射され、ものすごいスピードを發揮しフライゴンに突撃していく。そしてその両手にはドラゴンクローのオーラを纏っている。これなら！

「ええい！ドラゴンクローで迎え撃つのじゃ！」

それに対してフライゴンは迎え撃ってくる。またドラゴンクローどっしの鏝せり合いになるのは体力的にまずいかもしれないね……なら！

「リザードン、そこで燕返し！」

『リザア！』

『ピギイ!?!』

「な!?!」

接触ギリギリでリザードンは目にも止まらぬ早さでフライゴンの背後に周り込んだ。燕返し、本当に良い技だよ。行くよ!

「リザードン、メガトンキックだ!行っけえ!」

『リザア!』

『ピギヤアアア!』

「フライゴン!」

背後に回ったりリザードンの力一杯放った蹴りはフライゴンに炸裂した。その蹴りを受けたフライゴンは勢いよく地面に落下していき、凄い地響きと砂煙を上げる。今のはかなり効いたハズだけど……まだ油断出来ないな……! !

「リザードン、来るよ!」

『リザ!?!』

「そこじゃ!」

は、反応出来てよかったあ……僕は土煙の中で光を見たと思った瞬間叫んでいた。リザードンはギリギリのタイミングで反応し、そこから飛んできたオレンジ色の光線に当たらずにすんだ。今のは破壊光線!

本当に手強いな……ありとあらゆる状況を利用して攻めてきてる……  
…本当に達人だよ。

「フライゴン、電光石火じゃ！」

！？

完全に奇襲だった。破壊光線を撃ったから反動でしばらく動けないからって油断したのが駄目だった。フライゴンは目にも止まらぬスピードで土煙から飛びだしてリザードンに迫ってくる。何か反撃を！

「エアスラッシュで撃ち落とすんだ！」

『リイザア！』

「そんな苦し紛れの攻撃なんてのう……」

リザードンが翼から放つ空気の刃は簡単に回避され接近を止める事が出来ない。ここは……

「テールバーナーでそこから……」

「遅い！フライゴン、ドラゴンクローじゃ！」

『ギユピイ！』

『リザ……！！？』

離脱が間に合わなかった。ドラゴンクローは見事にリザードンに直撃した。それを受けてリザードンはその場から大きく後退する。まだまだ！

「リザードン、行けるよね。ドラゴンクロー！」

『リザア！』

「ほほほ、こいついづのはどうかの？気合パンチじゃ！」

『ピギイ！』

！？

リザードンは向かってくるフライゴンにドラゴンクローで迎え撃ち、フライゴンは気合パンチをしかけてきた。クロスレンジでの攻撃はリザードンのドラゴンクローはフライゴンの頭にかするだけで終わり、逆に気合パンチもリザードンの頭に直撃した。フライゴンのダウンアッパーのような拳でリザードンは地面に向かって弾き飛ばされる。

「リザードン！」

『リザ！』

僕の声に呼応するように鳴くと、地面ギリギリで翼をはためかせ地面に激突するのを防いだ。ふう……間一髪だったよ……

「休ませはせんよ。フライゴン、竜の波動じゃ！」

「そう簡単に！こつちも竜の波動だよ！」

『ピギイイ！』

『リザア！』

おじいさんの指示を聞きフライゴンは竜巻のようなエネルギー波を放ってきた。まけじと僕も同じ指示を出すとリザードンも竜の波動を放った。二つの技が激突し、衝撃波が発生しフライゴンは後退し、リザードンは衝撃により体を押されて地面に着地する。遠距離での撃ち合いじゃ勝負にならないね……なら、一気に距離を詰めて！

「リザードン、テールバーナー！」

『リザ……リザア！？』

ああ！？

リザードンは再び飛び立とうとした時に僕達は気付く。リザードンの足元には砂の渦が出来ていた。これって砂地獄じゃないか！

それにはまってしまったりリザードンは空を飛べない。これが電光石火からの一貫の作戦だったんだ……流星に手強いなあ……

「ほほほ、これで終わりじゃのお。流星群！」

『ピギユウイ！』

そんな指示と同時にフライゴンが吠え、リザードンの真上にエネルギーの雨が降り注いでくる。オーバーヒートで相殺を狙う？

いや、ここは……イチかバチかやってみよう。そこから形成逆転だ！

「リザードン、地割れだ！」

『リザアア！』

「な、なんじゃと!?!」

僕がイチかバチか叫ぶとリザードンは自分の足元に拳を叩き込む、すると足元の地面が割れる。今なら！

「リザードン！」

『リザア！』

その瞬間テールバーナーを使いリザードンは流星群の範囲から脱出した。ふう……フライゴンが使ってきたからもしかしてって思ったけど、地割れが出来てよかったよ……地割れで砂地獄ごと地面を割って離脱したんだ。さあ、これで終わりにするよ！

「リザードン、ドラゴンクロー！」

「フライゴン、竜の波動じゃ！」

『ピギユイ……』

「そんなんで！リザードン、突っ切るんだ！」

『リザアア……』

リザードンはドラゴンクローの腕を盾にするように前に出す。そのままリザードンは竜の波動を押し返していく。威力が落ちた竜の波動なんて！

『リザアア！』

『ピギイ………』

「まだまだじゃ！破壊光線じゃ！」

竜の波動を突っ切ったリザードンはフライゴンにドラゴンクローは炸裂した。その場で堪えてフライゴンは次の攻撃をしようとリザードンに向く。させるもんか！

「リザードン、テールバーナーをフライゴンに向けるんだ！」

『リザアア！』

『ギユイ！』

「なんじゃと！」

リザードンは自分の股下から尻尾をフライゴンにむけて炎をガスバーナーのように噴射しフライゴンを弾き飛ばした。それによりリザードンも後退し上手く距離をとる。さらにフライゴンの放った破壊光線は弾き飛ばされたせいで検討違いの方向に飛んでいく。反動で動けないフライゴン、これで終わりだ！

「リザードン、ブラストバーン！」



『リザアア！』

リザードンはそう指示を出す。翼を大きく広げしつかり体勢を整えた。そして尻尾の炎が大きく、更には青白くなり口にエネルギーを溜め始める。余りの熱でリザードンの口の近くが歪んで見える。行っけえ！

『ピギイ！？』

「フライゴン！」

リザードンは特大の青白い炎の固まりを放った。それはフライゴンに直撃し、特大の火柱があがった。これでどうだ！

「フライゴン……ぬう……ここまでとは」

そうおじいさんが言うと同時に爆煙が晴れる。そこにはダウンして倒れているフライゴンの姿があった。そこにゆっくりリザードンは降りてきて、しっかりとした足取りで着地する。

「フライゴン、戦闘不能！リザードンの勝ち！よってユースケ選手の勝ち！」

「やった！リザードン！」

『リザアア！』

そんなコールの瞬間に僕はリザードンの元へ駆け寄る。するとリザードンは本当に嬉しそうな笑顔で僕に近付いてくる。それを迎えて

から僕はみんなのいる方へ振り返る。そこには嬉しそうに騒いでいるみんなの姿があった。その中でカズマは親指を立てた腕をこちらに向けている。僕はそれに同じ様に片手の親指を立ててカズマに向けてみせた。カズマ、決勝トーナメントで会おう！

「絶対に突破して見せるよ！」（後書き）

今回リザードンは地割れを使いましたが。これは初代ポケモン限定で使えた技です。現在はわざマシンもなく遺伝もできないので使用できません。とりあえず今回の補足でした。

次回予告

イツキ「決勝までコマを進めたオレを待っていたのはアキトだ」

コノハ「イツキ、アンタ大丈夫なの！？緊張なんてしてるんじゃないでしょうね！」

イツキ「冗談！そんなわけあるかよ！相手がだ誰だろうが叩きのめしてやるだけだぜ！次回、ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEASON ～ 『リベンジ！アキトを倒せ！』次回もポケモンゲットだぜ！」

オーダイル『ダイル！』

リベンジ！アキトを倒せ！（前書き）

無事に予選の決勝まで勝ち進んだイツキの相手はアキト、一機はど  
う戦うのか……

リベンジ！アキトを倒せ！

「ようアキト、まさかこんなところでお前と会うなんてよ！」

「それはごつちの台詞だ。とりあえず軽く片付けて決勝トーナメントに行かせてもらっぞー！」

へへ、言ってくれるじゃないの！

今はポケモンリーグの予選の決勝戦。で、相手はあのアキトだ。いつかのリベンジ果たさせてもらっぜー！

そっちがその気ならオレもその気だ。ちゃちゃっと片付けて決勝トーナメントに進ませてもらっぜー！

「その減らず口を今封じてやるからな。覚悟しとけよお………」

そう言いオレはベルトに手を掛けて構え、アキトも同じように構える。一触即発の雰囲気。

「準備はよろしいですね。ルールは3対3のシングルバトルいいですね？」

「おう！」

それを後押しするような審判の台詞にオレとアキトは力強く頷いた。行くぜ……

「ハッサム、君に決めた！」

『サムッ!』

「頼むぞ。ポーマンダ!」

『マンダアア!』

オレがボールを投げるとそこからハツサムが姿を現した。それにたいしてアキトは青い体に赤い翼を生やしたドラゴン、ポーマンダを繰り出した。コイツは手強い相手だな……

「試合開始!」

試合開始のコールが掛かる。よっしゃあ 先手必勝だ!

「ハツサム、バレットパンチ!」

『サム……!』

オレの指示を受けたハツサムは弾丸のような勢いでハツサムに突撃する。特性テクニシャン、バレットパンチでも食らいやがれ!

「ポーマンダ、飛べ!」

『マンダアア!』

アキトの指示でフワリとポーマンダは浮き上がりハツサムの拳を回避してきた。く……流石にいい動きしてやがる。だけどまだまだ行くぞ!

「もう一回バレットパンチ!」

『サムッ!』

今度はジャンプしバレットパンチでポーマンダに向かっていく。これなら!

「無駄だ! たたき落とせ!」

『マンダアア!』

『サムッ……!』

「ハッサム!」

やる……ハッサムのカレットパンチに合わせてドラゴンクローで合わせてきた。叩き落とされないように踏ん張るハッサムだけ……その重量を支え切れず地面に落下した。やっぱりアキトは強い……なんかロケット団との戦いの時はなんか噛ませ犬って感じだったけど戦ってみると分かる。ガブリアスを中心としたドラゴン軍団の戦闘力は本当に怖いぐらいだ。だけどまだまだ終わる訳にはいかない!

「こっからが本番だ! ハッサム、電光石火!」

「来い! もう一回叩き落としてやる!」

『サムウ!』

もう一度ハッサムは跳躍する。今度は翼を広げ電光石火を使ってだ。それにしっかりと身構えて対応しようとするポーマンダ。そうはいくか!

「アイアンヘッドをぶつけてやれ！」

『サムウ！』

『マンツ！？』

ドラゴンクローに対してハツサムは自らの頭を更に硬化させそのままぶつけた。勿論そんなもんをドラゴンクローじゃ抑える事は出来ない。ポーマンダは大きく上空へと投げ出された。そこは隙だらけだ。貰ったあ！

「ハツサム、自然の恵！」

「何い！？」

『サムウ！』

『マン！？』

そう指示を出した瞬間にハツサムはポーマンダに追い縋るように突っ込む。その最中に突然ハツサムのハサミが水色に輝きはじめた。自然の恵は持っているきのみによつて事なつたタイプの力を発揮出来る技だ。通常バトルの際にきのみを持たせる事は多くない。片手が塞がったり、きのみのでいで集中できなくなったり、僅かにでも重くなる事を嫌うトレーナーも多いからな。きのみを持たせるトレーナーも少ないしこの技なんて珍しいと思う。けど、それが相手に付け入るチャンスになることもある！

ちなみにハツサムの持つてるのはヤチエの実つてきのみだ。ヤチエ



の実を自然の恵で使つと氷の力を得る事が出来る！  
お前のドラゴン軍団に対しての対策だ。受けてみやがれ！

『サムウウー！』

『マン……ダア……』

ハツサムの水色の力を宿したハサミは見事にボーマンダの腹部に炸裂した。よしオレの勝ちだ！

「舐めるなよ！ボーマンダを簡単に倒せると思つな！大文字！」

『マアア……ンンン！』

『サムウウウ……！』

「ハツサム！」

ハツサムの一撃を受けたボーマンダは仕返しと言わんばかりに口から炎を吐いてハツサムに浴びせてきた。それを受けたハツサムは落下していく。く……炎技なんて受けたらハツサムは……そしてそのまま地面に落下した……オレが迂闊だったから……

『マン……』

あ……ハツサムが地面に落下した瞬間に糸が切れたように落下してそのままダウンした。相打ち……か……

「両者戦闘不能！」

そのコールが掛かると同時にオレはハッサムの下に駆け寄る。

「おい、大丈夫か!？」

『…………』

あちゃ…………ハッサムの奴完全に目を回しちゃってるな…………

「よく頑張ったな。後は休んでくれ」

そう言いつつオレはハッサムをボールに戻した。それから素早く所  
定位地にもどる。さつと次はどうするか…………うし、決めた!

「ピジョット、君に決めた!」

『ピジョオ!』

オレは2つ目のボールを取り出し投げるとピジョットが姿を現した。  
ピジョットはせわしなく翼を奮いながら相手の準備を待っている。  
よし、気合いは空回りしかねないくらい入ってるな。

「ピジョットで来るか!なら!チルタリス、頼むぞ!」

そう言いアキトが出してきたのはチルタリスだ。水色の体に綿毛の  
ような翼が特徴のポケモンだ。にしてもコイツは…………なんか苦手意  
識が…………フスベの時のじいさんの一件を思いだすからよ…………

「それでは試合開始!」

掛かる審判のコール、一気に攻める!

「ピジョット、エアスラッシュから電光石火だ！」

『ピジョオ！』

オレの指示にピジョットは吠えながらも翼を奮い空気の刃を放つ。それからすかさずに電光石火を発動し、それを追い抜かんばかりの勢いで突っ込んでいく。

「そんなもんじゃな！チルタリス、軽くかわしてやれ！」

『チルウ！』

チルタリスは少し上昇するだけの動きでそれを回避してきた。流石に上手いけど……こっちの攻撃は終わっちゃいない！

「そこだ。翼で打つ攻撃！」

『ピジョオ！』

エアスラッシュに隠れるように飛行していたピジョットは素早く上昇しチルタリスに迫る。行けえ！

「チルタリス、真下から来るぞ！」

『チルツ！？』

再びヒラリとかわして見せようとするチルタリスだがそうはいかない。真下という死角からの攻撃なんて回避するのは難しい。受けてみやがれ！

『ピジョット！』

『チルウ……』

ピジョットの翼は見事にチルタリスに炸裂した。まだまだ行くぜ！

「旋回してからもう一回翼をぶつけてやれ！」

『ピジョット！』

ピジョットはオレの指示に従い急旋回をしチルタリスに向かっていく。

「竜の息吹で打ち落とせ！」

『チルウウー！』

接近していくピジョットに向けてチルタリスは自らの息吹を放ってくる。そんな攻撃に！

「そのまま突っ込め！当たるなよ！」

『ピジョット！』

ピジョットは勢いを止めない。少し軌道をずらすように動くときまでピジョットのいた場所を竜の息吹が突っ切っていく。そんな単調な攻撃でピジョットを捉えられるものかよ！

『チルウ……』

「チルタリス！キショー……やるじゃんかよ。ピジヨットめ！けど、それ程度の攻撃じゃ全然足りないな！」

もう一度ピジヨットはチルタリスに翼をたたき付けた。しかしチルタリスはまだまだ元気だ。畜生……やつぱり打たれ強いよなあ……あのモコモコそんなに頑丈なのかよ。けどよ！

「んなハズないだろ！ピジヨット、かまいたちを食らわせてやれ！」

『ピジヨオー！』

『チル……』

ピジヨットは電光石火を発動し素早くチルタリスの隣を通過していく。その際の鋭い風圧がチルタリスを襲った。かまいたちは空気の渦を起こしてそれを鋭い空気の刃としてぶつける技だけど、こついで強引な起こし方もあるんだ！

「背中を向けたな！竜の息吹で叩き落とせ！」

「ピジヨット、なんとか旋回してチルタリスに向き直せ！」

『チルウウウ！』

『ピジヨオオー！』

再びピジヨットを襲う竜の息吹をピジヨットは旋回して回避する。こついで一気に攻める！

「ピジヨット、オウム返し！」

『ピジヨ！』

「何！？」

『チツ…………ルウウ…………』

オレの指示を聞いたピジヨットは口からチルタリスの放った息吹を放った。その不意をつく攻撃は見事にチルタリスを捉えた。オウム返しは最後に相手が使った技をやり返す技だ。竜の息吹はチルタリスに効果は抜群。受けたチルタリスは痺れたのか動きを止める。今だ！

「コイツで決まりだ！ゴッドバード！」

『ピジヨオー！』

オレの指示を聞いてピジヨットはものすごい光りを放ちつつもチルタリスに突撃していく。これでオレの勝ちだ！

ん？

なんだこのデジャブ……………なんか嫌な予感が……………

「ただで終わるか！滅びの歌を歌ってやれ！」

『チ〜ル……………』

『ピジヨ……………』

な……不気味に響くチルタリスの歌声が……それを聞いたとたんに  
ピジヨットの突撃が止められてしまふ。そして苦しみ始める。この  
技は……やべえ！

「ピジヨット、戻れ！」

『ピジヨ……』

オレはベルトからボールを取り出しピジヨットをボールに戻した。  
危な……滅びの歌は聞いたポケモンを戦闘不能にする技だ。そんな  
の最後まで聞かせたくないからな……

「すみません、ピジヨットは棄権でお願いします」

「そうか、ピジヨット棄権！よってチルタリスの勝ち！」

そんなコールが掛かる。ちえ……後少しだったのにあれないぜ……  
……でも……

「チルタリス、悪い無茶させたな。休んでてくれ」

『チル……』

そう言いつつもチルタリスをボールに戻す。滅びの歌は両刃の剣だ。  
全てのポケモンをノックアウトするって事は自分も含めてノックア  
ウトって事だ。まったく、危険な技を使うぜ……

「次がラストか……」

「全く軽くのしてやるつもりだったのに……」

「うっせえ、それはオレの台詞だ。んじゃいつかの借りを返してやる！」

そう言うアキトにオレはそう返す。勿論ラストはコイツだ！

いつかの雪辱晴らしてやれ！

「オーダイル、君に決めた！」

『ダアアイル！』

オレがボールを投げるとオーダイルが姿を現した。力を持って余しているかのように両腕でいかにも力持ちつてのをアピールするようにポーズをとった。よし、いつでも行けるな！

「やっぱりラストはそいつか、ならオレもコイツで行くぞ！カブリアス、行ってこい！」

『GRAAAA！』

そうアキトが叫ぶと青い鮫のような風貌を持つガブリアスが姿を現した。やっぱり出てきたかよ。そこなくっちゃな！

「試合開始！」

そんな試合開始のコールが掛かった。よし、行くぜ！

「オーダイル、高速移動！」



『ダイル!』

そうオレの指示を聞いたオーダイルは頷いてから高速移動を発動しガブリアスに向かっていく。ガブリアスに追いつくにはこれしかない!

「そんな単純な戦い方で!ガブリアス、こっちも高速移動!」

そうアキトが指示を出すとガブリアスも高速移動を発動し、オーダイルに向かってくる。流石に速いが……スピードで勝負が決まる訳じゃない!

「オーダイル、先手必勝だ!冷凍パンチだ!」

『ダアアイル!』

オレの指示を聞いてオーダイルはガブリアスに殴り掛かった。とりあえず貰つとけ!

「そんな動きじゃな。ガブリアス、ドラゴンクロー!」

『GRA!』

『ダイツ!?!』

今のは!?

オーダイルが振りかぶった一瞬の隙にガブリアスがオーダイルにドラゴンクローを叩き込んできた。早い……これがガブリアスのスピ

「ドなのか？」

「まだまだ行くぞ！ドラゴンクロー！」

バランスを崩すオーダイルに追い縋るようにガブリアスは突撃してくる。く……そんな思った通りに行くと思うな！

「オーダイル、アクアジェットで応戦だ！」

『ダアイル！』

『GA！？』

体制を崩しているオーダイルだが、体制を崩したままアクアジェットを発動した。あまりにも無茶な指示にガブリアスは反応出来ずに弾きとばされた。よし、スピードだけで圧倒出来ると思うな！

「オーダイル、冷凍ビームだ！ガブリアスを休ませるな！」

『ダアアイイイル！』

「やべっ！？ガブリアス、逃げる！」

休む暇なんて与えるかよ。そんな気持ちでオレはオーダイルに冷凍ビームの指示を出した。しかしそれに当たってくれるガブリアスじゃない。その素早い動きで回避しつつもオーダイルに向かって来る。なんて奴だよ……けど黙ってやられるか！

「オーダイル、ドラゴンクローだ！」

「そうかよ！ガブリアス、こっちもドラゴンクロー！」

『ダアアイル！』

『G A A A！』

ガブリアスとオーダイルの爪は勢いよく激突し弾きあった。パワーは互角か！

「オーダイル、まだまだ行くぜ！アクアテール！」

「そう簡単に行くか！こっちはアイアンテールだ！」

『ダアアイル！』

『G R A A！』

間髪を入れず指示を出すオレとアキト、オーダイルとガブリアスもそれに答えるように自らの尻尾を激突させ、またお互いに後退する。まだまだあ！

「高速移動から、気合パンチでぶん殴れ！」

『ダイル！』

オーダイルは高速移動による高いフットワークを使い駆ける。食らえ！

「そうはいくか！ガブリアス、大文字でオーダイルを討て！」

『GRAAA!』

『ダイル!?』

「オーダイル!」

ギリギリまで接近していたオーダイルを迎撃するように体制を立て直したガブリアスは口から炎を吐きだしオーダイルは炎に巻かれて動きを止めてしまった。けどそんな攻撃なんかじゃ!

「まだまだ!ハイドロポンプで押し返せ!」

『ダアアイイイ!』

炎に襲われながらもオーダイルは口から強烈な水流を放った。

『GA!?』

「ガブリアス!」

それは軽く大文字の炎を跳ね退けてガブリアスに直撃しガブリアスを吹っ飛ばした。よっしゃあ!

今のは効いたハズだぜ!

「大丈夫かガブリアス!」

『GRA……』

アキトにそう言われてからガブリアスはよろりと立ち上がってくる。

近距離でハイドロポンプ喰らってまだ立ってくるかよ。流石にそんな甘くないか……

「イツキ……やっぱりお前は強敵だよ。隙あらば一気に勝負を決めようとしてくる……簡単に止める事が出来ない本当の強敵だ」

オレにとってもそうだよ。全く一筋縄じゃいかせてくれないぜ……絶対ロケット団との戦いの時コイツ手を抜いてたろ……

「だからやらせてもらうぞ！俺達の十八番を！俺達の最強の得意技を！」

来るか！

「ガブリアス、砂嵐だ！」

『GRAAAA！』

そうアキトが指示を出した瞬間にガブリアスが吠え、砂が舞い上がり砂嵐が起こりガブリアスの姿が砂に紛れるように消えていった。来た。初めてアキトとガバイトと戦った時にアイツが使ってきた、それで負けた戦術だ。あの時の雪辱、ここで果たす！

「オーダイル、砂隠れで来る！嫌な音だ！」

『ダイイル！』

そうオーダイルは吠えると自分の耳を抑えてから口から嫌な音を放ち始めた。きしょお……この黒板を引つかく音は苦手だ……トレーナーにもちゃっかりダメージ来る技だよなコレ……とにかく今の内

に集中だ……ガブリアスにもこれは効いてるハズだ。悲鳴を探せ……聞こえた！

「オーダイル、右だ！ハイドロポンプ！」

『ダアアイル！』

オレの指示に呼応するようにオーダイルはハイドロポンプを放った。

『GA……』

ガブリアスの悲鳴、捉えた！

「行かせ、とどめの吹雪だ！」

『ダアアアアアアアアアア！』

オーダイルはさっきと同じ方向に吹雪を放つ。これは避けられない。やったか！

「甘すぎるぞイツキ、ガブリアス、吹っ飛ばせ！」

『GRAAAA！』

「下！オーダイル、避ける！」

『ダイリ！？』

「オーダイル！」

オーダイルは真下からの攻撃に吹っ飛ばされた。穴を掘る攻撃……  
それでもなんとかオーダイルは着地して構える。それでも体は震え  
てるからダメージは大きいみたいだ。多分もう力は殆ど残ってない。  
手段は選んでられない……

「オーダイル、フルパワーだ！」

『ダイ……ダアアアイル！』

オーダイルは少し深呼吸してから咆哮を上げる。すると激流の水色の  
のオーラを纏い始め、それは赤色に変わっていく。オレが炎のポケ  
モントレーナーってヨウさんに言われた由縁、教えてやるぜ！

「とどめを受ける！」

『GRAAAA！』

そうアキトは叫ぶとガブリアスが突っ込んできた。受けてみやがれ！

「かんけっせん  
間欠泉！」

オレの叫びに呼応するようにオーダイルは水の水球を放った。これ  
なら！

「！？ガブリアス、避ける！」

『GRA！？』

危険を感知したアキトはガブリアスに指示をだす。それは見事にガ  
ブリアスは回避した。放たれた間欠泉はガブリアスの背後に着弾し  
大きな水しぶきを放った。それは砂嵐を吹っ飛ばし、さらに回避し

たガブリアスを襲い強すぎる衝撃に弾き飛ばされオーダイルに向かってくる。

「なんて技……だが、甘かったな！ガブリアス、ドラゴンクローでとどめだ！」

『GRAAAA!』

吹っ飛ばされた勢いを利用したドラゴンクローはオーダイルの頭に炸裂した。オーダイルはそれにバランスを崩す。

「勝ったぞ！」

「甘いぜアキト……この読み合いは……オレの勝ちだ！」

『GRA!?!』

『ダイ……』

オーダイルは倒れる瞬間に足を出して持ちこたえる。そしてその目は死んでいない。むしろこの瞬間を待ってたみたいだ。嬉しいのだ。これで決める！

「終わりだ！気合パンチ！」

『ダアアイイル!』

オレの叫びと同時に最後の一撃を放った。それはガブリアスの顎を捉えガブリアスを吹っ飛ばした。

「ガブリアス！」



それを受けたガブリアスは完全に目を回している。これは……

「ガブリアス、戦闘不能！オーダイルの勝ち！」

審判のコールが掛かる。よっしゃあ！

「勝ったぜオーダイル！」

『ダイル！』

オレの言葉にオーダイルは力強く頷く。よく頑張ったな……

「全くお前達は計り知れない奴だよ」

そう言うのはアクトだ。へへ、だろ！

「まあな、でも正直負けると思ってたぜ」

アクトの台詞に正直な気持ちを返す。いやいや何回やられると思っ  
た事か……

「全く間欠泉……熱湯を超える火傷効果のある水技なんてありかよ  
……そんなの考えも着かないっての！」

アクトめ気付いたか……うん、むやみにコレは撃てなくなったな  
……

「次は負けないからな」

「オレだってそうだ」

そうオレはアキトと握手する。それと同じようにオーダイルも向こうでガブリアスと握手をしている。アキト……次だってオレが勝つからな！

リベンジ！アキトを倒せ！（後書き）

次回予告

イツキ「決勝リーグの前日1日の休暇がやってきた」

コノハ「イツキ、覚悟してなさい！一日つきあってもらうわよ！」

イツキ「うげえ……なんとか逃げねえかな……次回！ポケットモンスターACEのSECOND SEASON 『それぞれの一日』  
次回もポケモンゲットだぜ！」

『ピジョット』『ピジョット！』

## それぞれの一日(前書き)

今日は決勝リーグと予選の間の休日。危険を察知したイツキは……

## それぞれの一日

く……このままいくとヤバイな……このままだと危険な事になるぞ……ユースケさんとはかくとしてユウイチとカズマさんは捕まっちゃまった……取り合えず今は安全に部屋から逃げる方法を考えよう……よし！

「行くぜ、ピジヨット！」

『ピジヨオー！』

そう言つてボールを窓の外に放り投げるとボールからピジヨットが姿を現した。オレは窓から飛び降りてピジヨットの背中に乗った。よし、このままセキエイの原っぱまで……

「ちよろつとイッキ……どこに行くつもり？」

『ホウウ……』

げ……待ち伏せ……

「いやさ……コノハ、ちつと空の散歩に……」

『ピジヨオ……』

そう、オレの目の前にいたのはヨルノズクに掴まっているコノハだった。マジで待ち伏せとか想定外だったぜ……

「それじゃ付き合ってもらおうよ！」

ちえ……結局こうなるのかよ……

「荷物持ち頼むわよ」

「キシヨー……」

「イツキ、次アツチ行くわよ！」

「へいへい……」

コノハに急かされオレはトボトボとついていく。その両手にはすでに紙袋が握られている。昨日カズマさん達と話してたんだよ……ポケモンリーグの本戦と予選の間の1日、休日がある。まあ今日の事なんだけども……基本的に娯楽がたつぷりと用意してあるこのポケモンリーグ会場にはシヨツピングモールみたいなものもありまして……まあ休日って事で気が抜いて遊ぶならやっぱりこの日、でだ……長

い旅の間満身にシヨツピングをしてない女の子が周りにいるわけでありまして……更には便利な荷物持ちになる男もいるもんですから……まあ、こうなる訳だ。

それをカズマさんに教えて貰ったからオレとユウイチは逃げるのに必死になってた訳だが……ユウイチは朝が苦手なサクラの性格を把握した上で早起きして逃げようとしたけど、いつの間にか部屋に追いついてあつた推理小説に気になって手を出してしまったのが最後、読み耽つてしまい御用となつた。ブービートラップにかかりやがつて……幼なじみ通しの裏の読み合い……サクラに分配が上がつたみたいだな。んでカズマさんは居留守  
を行使したみたいだけど……相手が悪かつた。カシスさんの人をおちよくるセンス、カズマさんをからかうような声にそれに条件反射でカズマさんが突つ込みを入れてしまい御用となつた。

電話でそう聞いたからオレだけでもって思ったが……無理だつた……ちなみにアキトはまた修行の旅に出ちまつた。今度はシロガネ山とかなんとか言つてたっけか？

「あ、ランさんとユースケさんだ」

「うん？」

そうコノハが言い、コノハが指差す方向を見ると、そこには言葉通りユースケさん達の姿があつた。ありや……荷物持ち……な訳無いよな。誰がどう見てもデートだよ。え、ユースケさんも確かにランさんに荷物持ちさせられてる。けど明らかに違ふのは無理矢理持たされてるかいなかだ。ユースケさんの顔は笑顔……もう言わないでもいいよな……なんだこの差は、天と地程差がある……なんか負けた気分なんだが……

「いいなあ……ランさん……」

うん？

そうコノハが突然呟く。一体どうしたんだ？

「どうしたんだよコノハ、突然いいなあってさ」

「えっ！？き、聞こえてたの！？」

はあ？

あんなにハッキリ言っというて聞こえてたとか何いってんだかコイツは……

「な……なんでもないわよ……」

そうコノハは言うけど明らかになんでもあるし……顔赤いぜ……

「もしかしてユースケさんみたいな彼氏が欲しいのか？残念だったな、隣にいるのがオレでさ」

そう多少からかうように言ってみせる。さて、どうくるか……

「そう思っただったら少しはわたしの方を向きなさいよ……」

「え……どうゆう事だよ……」

コノハの言ってる事が分からないんだが……

「うっ……うっさいわね！この馬鹿！さっさと行くわよ！……」



その顔を真つ赤にして先に歩いていくコノハだけど……

「おい、なんなんだよ！？ってちょっと待てよ！」

「うっさい！」

ちつくしょう、全く訳わかんないぜ！

そう思いながらもオレはコノハについていく。まったく……気難しいとことかやっぱりコノハも女の子なんだなと思った今日この頃であつた。

セキエイ高原特設PC

で、今はポケモンセンターに来てる。なぜならここで組み合わせの

抽選会があるからだ。うわ……なんだろうめっちゃくちゃ緊張するんだけど……

「イツキこいイツキこい……」

そう言っつてユウイチが馬鹿みたいにオレの隣で呟く。コイツ、オレには負けないっつて思ってるな……

「ユウイチ、お前は黙れ。お、始まるみたいだな」

そうオレが言っつと抽選がスタートしたとんどん組み合わせが決まってるいく。えと……オレは……あつたあつた！

「……知らない人だな……」

そうオレは思わず呟いた。まあなんかパツとしない顔してるけど、それを言っつたら普段ボーっつてしてるユースケさんも同じだから油断出来ないな。

「勝てよイツキ。オレに無償で勝利を提供するために！」

「ユウイチ、だから黙っつとけ」

そう言っつユウイチにオレはそう言っつ。まったくそう言っつ照れ隠しの仕方があるかよ。

けどな、言われなくたっつて勝っつてやるよ！

そうオレは心の中で誓っつた。

## それぞれの一日（後書き）

### 次回予告

コノハ「ついに進出したポケモンリーグ本戦。イツキ、気合入れていきなさいよ！」

イツキ「分かってる！特にこいつにだけは負けられるかよ！」

コノハ「いい気合ね！絶対に勝ちなさいよ！次回、ポケットモンスターI ACE SECOND SEASON 『決勝トーナメントの壁（激突編）』次回もポケモンゲットよ！」

オーダイル『ダイル！』

決勝トーナメントの壁（激突編）（前書き）

遂に始まるポケモンリーグ第1回戦。イツキはどう戦う？

## 決勝トーナメントの壁（激突編）

ふう、今は選手控え室にいる。

本線の一回戦が始まる寸前、なんだよ……目茶苦茶緊張する……

今までだってこんな事はいくらでもあった。だけど今は異常だと思っ。本戦っただけでここまで緊張するなんて……

ユースケさん達っこの緊張感の中でずっと戦っってきたのか!?

いや、あの人達緊張感っものがあるのかも怪しい節があるからな。特にカシスさん辺りなんて色んな意味で脳内幸せそうだからなあ

「ハハ、ため息ばっかしてても仕方ないか」

そうオレが開き直ったように呟いてから立ち上がり勢いよく一回だけ飛び跳ねてから顔をパンパンと気合を入れるように叩く。よし！

気合が入ったぞ。一気に片付けて2回戦に進んでやるぜ！

「行くぜ、みんな！」

そうベルトにセットされている6つのボールに向けて言うと、それをしっかりと自分の腰に巻き、それからそのままダッシュで控室を飛びだし会場に向かった。一回戦、必ず勝ってやる！

- ワアアアアアア -

!

入った瞬間にとんでもない歓声になる。

予選とは何もかも違うなあ。ま、ビビッてたんじゃバトルなんて出  
来ないからな。とりあえず気合い入れて行くぜ！

オレはすぐに相手の方を向く。そこには昨日の対戦の組み合わせ表で表示されていた少しひ弱な印象を受ける男の人がいる。さてとどんな戦い方をしてくる相手なんだ？

全く読めない分少し不気味だな……

「お互いに準備はよろしいですね。これよりポケモンリーグ本戦第1回戦の試合を始めます。ルールは3対3のシングルバトル。それでは試合開始！」

そんな審判のコールが掛かる。それと同時にオレはベルトにセットされているボールに手を回す。最初から飛ばして行くぜ！

「オーダイル、君に決めた！」

『ダアアイル！』

オレがボールを投げて姿を現したのはパートナーのオーダイルだ。頼むぜ！

「行け、メタグロス！」

そう言っただけで相手的人が出してきたのは青色のどうみても重量級のポケモン、メタグロスが姿を現した。

メタグロスか……超重量級って有名だけど厄介な奴に当たったな。正面からやり合いのは辛い相手だけど、だからってやり方は変わらない。

いつも通り攻めるだけだ！

「それでは試合開始！」

そんな試合開始のコールが掛かった。よし、行くぜ！

「オーダイル、先手必勝だ！高速移動から気合パンチ！」

『ダイル！』

オーダイルは高速移動を発動、体を身軽にしてメタグロスに接近していく。まずはコイツを食らえ！

「甘いですね。電磁浮遊で回避しなさい」

『グロウ』

そんな指示が入ると同時にメタグロスは浮遊してオーダイルの拳をスカされてしまう。

『ダイ………』

「オーダイル！」

その上に体当たりを食らわせてオーダイルは勢いよく尻餅をついた。く………いい腕してやがる！

「最初に言っただけ起きたい事がある」

！？

そう相手が口を開く。言っておきたいこと？



「断言しよう、今の君ではボクを倒す事は出来ない！」

「な、なんだと！」

そんな彼の発言にオレはつい声を荒げてしまう。勝てないだと！

「そつだよ。予選の試合を見せてもらったけど、まだまだボクに勝つには未熟！」

！

そつ断言するかよ。今までコイツはやばいって思った相手はいたけど、こんなことを言ってきた相手は初めてだ。

正直スッゲームカツク

「そこまで言うならやってみやがれ！オーダー、滝登り！」

『ダイル！』

軽くキレてるオレはそつがむしゃらに指示を出した。

多少ムツてしてるのはオーダーも同じらしく。ヘッドスプリングで軽く立ち上がり、持ち前のフットワークでメタグロスに飛び掛かった。受けてみやがれ！

「甘いよ。コメントパンチで叩き落とすんだ」

『グロス！』

『ダイイル！？』

「オーダイル！」

あまりに単調な動きだったせいかジャンプで向かってくるところをあの腕で叩き落とされた。

言うだけあるぜ。けどオーダイルは上手く着地して体勢は崩していない。まだまだ行ける！

「行けるよな、ハイドロポンプ！」

『ダアアイイル！』

オレの指示でオーダイルは必殺のハイドロポンプを放った。当たれ！

「メタグロス、高速移動で回避！」

く、ハイドロポンプによる攻撃は用意に回避されてしまった。…重量級のポケモンの癖になんて身軽なんだよ！ だけど！

「逃がすか！こつちも高速移動だ！」

そうオレが指示を出すとオーダイルがメタグロスを追うように駆け出す。丁度電磁浮遊が切れたのかメタグロスが降りてきている。このチャンス貰うぜ！

「オーダイル、そこだ！滝登りだ！」

「鉄壁」

『ダアアイル!』

『グロス!』

オーダイルの正面からの突撃だったけど、メタグロスはびくともしない。キショーなんて頑丈なんだよ!

逆にこっちが吹っ飛ばされうとかどうにかしてるぜ

「反撃いくよ。アームハンマー!」

『グロオ!』

『ダイル……』

うわっ!

弾かれた隙を狙われたオーダイル、メタグロスの重い拳をなんとかブロックするけど、重量を込めた拳を受けたせいで膝をついてしまふ。くそう、攻撃が上手く決めれねえ……

「もう一度アームハンマー」

『グロオ!』

また振りかぶってオーダイルに拳を叩き込もうとするメタグロス。そう簡単にそいつをもらうかよ!

「オーダイル、地ならし！」

『ダアアイル！』

拳が当たる寸前にオーダイルは拳を地面に叩き付ける。地面が軽く振動しメタグロスの拳は外れてた。今だ！ やられた分はやり返す！

「そこだ、気合パンチ！」

『ダアアイル！』

『グロオオ………』

「何……メタグロス！」

へへ！

やっと一撃きまつたぜ。オーダイルの拳はメタグロスの顔面に突き刺さった。

案外効いてるらしく、顔を若干メタグロスはしかめている。もう一撃だ！

「オーダイル、アクアテール！」

『ダイル！』

もう一撃だと言わんばかりにオーダイルはしつぽをメタグロスの顔面にたたき付けた。これでどうだ！

「それぐらいじゃ足りないな。メタグロス、雷パンチだ！」

『グロオス！』

「しまっ……オーダイルかわ……」

『ダイ……』

アクアテールを放ったばかりで無防備なオーダイルに雷パンチが決まった。オーダイルはまた膝をついてしまう。

畜生、相手の方が一枚上手なのか？

だけどそう簡単に諦めてたまるか！

「まだいけるよなオーダイル、ハイドロポンプだ！」

『ダアアイイル！』

全力で放ったハイドロポンプ、さっきはにがしたがこの距離なら外さねえ！

コイツでも食らえ！

「重力で体を地面に固定するんだ」

『グロオ！』

！？

重力……だと！  
メタグロスはかわす所か重力を発動し、その場に深く張り付いてハイドロポンプに吹っ飛ばされないようにしてきた。なんて無茶な事を！

「今だ、高速移動から雷パンチ」

！？

ハイドロポンプが止んだ瞬間にメタグロスは高速移動を発動し、オーダーイルにとどめを刺さんと突っ込んでくる。そんなの！

「オーダーイル、高速移動で……っ！」

そう指示を出すオーダーイルは膝をついて立てそうにない。

く、さっきまでのダメージで強くなった重力の中で立てないのか！？

「オーダーイル！」

『グロオオ！』

『ダイル……』

雷パンチは見事に炸裂。オーダーイルは少しだけ吹っ飛ばされそこでダウンした。

「オーダーイル……」

完全に目を回してダウンしてるオーダーイル。そんな……

「オーダイル、戦闘不能！メタグロスの勝ち！」

そんな審判のコールがかかる。

オーダイルがこんなにあっさりやられるなんて……

「オーダイル、よく頑張ったな。ゆっくり休んでくれ」

そう言いオレはオーダイルをボールに戻した。

「まずは一体……さてと後どれだけでもつかない？」

……ああムカつく！

いいぜ、そっちがその気ってんだっいたらイジでもギャフンって言わせてやるぜ！

「ブースター、君に決めた！」

『ブイ！』

オレがボールを投げて姿を現したのはブースターだ。

重力に少し戸惑ってるみたいだが、全然問題なさそうだ。コイツで一気にケリをつける！

「それでは試合開始！」

試合開始のコールが掛かった。よし、先手必勝だ！

「行けブースター、大文字だ！」

『ブイイイ！』

オレの叫びに呼応するようにブースターが吠え、大火力の炎を放った。

「メタグロス、かわせ！」

『グロ……』

「当たるな」

そう言う奴に対してオレは不敵な笑みを見せながら断言する。

「何！？」

『グロオオオ！』

無論、メタグロスに大文字は炸裂した。

オーダイルの攻撃を何回も受けた上に重力が強くなってる以上避けれるかよ！

「くっ、メタグロス！」

「メタグロス戦闘不能！ブースターの勝ち！」

そんなコールが鳴り響いた。よし、まずは一勝！



「な、中々やってくれるね……」

「へっ！自分の実力を過信して自惚れているアンタなんかにかけてたまるかよ！」

そうオレは叫ぶ。この勝負、意地でも負けてたまるか！

決勝トーナメントの壁（激突編）（後書き）

次回に続く

決勝トーナメントの壁（決着編）（前書き）

ポケモンリーグ一回戦のイッキの戦いも後半戦。

強敵相手にイッキ達は勝てるのか？

## 決勝トーナメントの壁（決着編）

「ボクの2番手……いけ、ドサイドン」

『G A A A A!』

そう言っただけで相手が出してきたのは怪獣のようなポケモン、サイドンに鎧のようなものを纏わせたポケモンだ。

見た目通りパワーはダンチだけどスピードは無い。相性は悪いけどブースターのスピードで十分やっていけるハズだ！

「やるぜブースター！」

『ブイ!』

オレの掛け声にブースターは吠えたかと思うと、直ぐさま戦闘体勢をとった。よおおし、行くぜえ！

「それでは試合開始！」

審判の試合開始のコールが掛かった。まずはこっちから仕掛ける！

「行くぜ、電光石火！」

『ブイ!』

オレの掛け声と同時にブースターは第一歩目を踏み出した。そして一気に加速してドサイドンに向かっていく。

電光石火にしては早くは無。けどドサイドンと比べれば圧倒的だ。  
まずは距離を詰める事からだ！

「ロックブラストで牽制しろ」

『GOOOO!』

「！ブスター、ドサイドンの周りを回ってロックブラストに捕まるな！」

『ブイ……!』

ブスターに向けて容赦なくドサイドンの指先からガトリングのよ  
うな勢いで岩を飛ばしてきた。

それをブスターは電光石火を使いことごとくロックブラストを回  
避する。このまま死角に回って！

「ブスター、死角に回り込め！そこから火炎放射だ！」

そんな指示に従いブスターはさらに加速し、ロックブラストに捕  
まる事は無い。

んでもって相手は鈍足だ。背後を、死角を取った！

『ブウウイ!』

ブスターは火炎放射を放った。それは見事にドサイドンに直撃し

た。コイツの威力に期待しちやいないが……

「そんなもので……ドサイドン、地均し！」

『G A A A A!』

『ブイ………』

うわっ！

キショー、やっぱりそうかよ！

地面が揺れてオレとブースターはバランスを崩す。地鳴らし、厄介な技を！

「そこにロックブラスト！」

さらに追い撃ちのように迫るロックブラスト。オレ達が正面から突撃するだけと思つな！

「ブースター、守るを使え！」

『ブイ!』

ブースターが吠えると光りの膜を張り、岩の弾丸を反らして攻撃を防御した。

危ない危ない……とにかく次だ！

「反撃行くぜ！ブースター、電光石火でドサイドンとの距離を詰め

る！」

『ブイ！』

そんなオレの指示に頷いてからブースターは急激に加速し、一気にドサイドンに近づいていく。次の相手の取る手は……

「接近なんてさせないよ。ドサイドン、地均……」

「来ると思ったぜ！ブースター、ジャンプだ！」

『ブーイー！』

ブースターは地面を蹴るように思いっきり跳躍した。それにより地響きによる攻撃は完全に回避する。ただどこっからだ！

「ジャンプするとは迂闊だったね。岩石砲！」

『G…RAAAAAA！』

きた！

ドサイドンが口から放った特大の岩石は高速でブースターに迫ってくる。コイツに対抗する手段なんて一つしか残ってねえ！

イチバチ……勝負だ！

「ブースター、地面に向かってオーバーヒートだ。フルパワーで飛べえ！」

『ブイ……ブイイイ！』

フルパワーで放たれた熱線は地面に突き刺さった。その勢いでブースターは僅かにだが浮き上がる。それが美味しい。僅かに浮き上がって岩石砲の射線から外れた。ふう……高く跳んだからオーバーヒートでも上昇出来るか怪しかったけどなんとか上手くいったな……んじゃ、ドサイドンが反動で動けない間に決着をつける！

「ブースター、着地した瞬間に電光石火で突撃だ！」  
『ブイイ！』

着地した瞬間地面をそれを蹴り出すようにドサイドンに向かって跳んだ。行けっ！

「いいぜブースター、馬鹿力！」

『ブイイイイ！』

『G U O O ! ? 』

正面からのブースターの馬鹿力は炸裂した。それを受けたドサイドンは大きくのけ反る。コイツで決着をつける！

「ブースター、アイアンテール！」

『ブウイ！』

オレ達は吠える。アイアンテールの一撃をドサイドンの腹に炸裂させた。これで、どうだあ！



『GRUU……』

アイアンテールの重い一撃を受けたデサイドンはダウンした。へへ！  
楽勝楽勝！

「ドサイドン、戦闘不能！」

そんな審判のコール。よし、2連勝だ。このまま行く！

「……ここまでやってくるとは計算外だよ。予選ではここまで力を発揮して無かったのに……」

そう言う相手の台詞には焦りが込められているのが分かる。

「ワリいな！オレ達は実戦で強くなるタイプだぜ！予選のデータなんて役に立たないぜ！」

そう言ってみせる。だよな、よく考えたら今までのバトル……特にジム戦なんて今までやった事が無い事ばかりしてたもんなあ……

本当ににぶつつけ本番ばっかだよなあ……

「くっ！ けどさっき言ったハズだ。今の君には僕に勝つことは出来ないってね！プテラ！」

『ギューイ！』

最後に出して来たのは、プテラ、アルフの遺跡の事件で若干トラウマが……

まあそれは置いておいて勝つことが出来ないか、こっちだって言っただけだ！

「こっちも言ったよな。オレは実戦で強くなるタイプだってな！勝てると思うなよ！ブースター、よくやったな！ラストは頼むぜ、ドンファン！」

『パオーン！』

そうカー杯言い切る。こういう自信家相手に弱気なんて見せる訳にはいかない！

そこでここでブースターは交代。流石にオーバーヒートと馬鹿力なんて使ったら能力ダウンもいとこだもんな。これ以上は無茶だからな……

「それでは試合開始！」

試合開始のコール。空を飛ぶプテラをどう捉える？

「来ないならこちらからいくよ。プテラ、高速移動から鋼の翼！」

そんな指示とともにプテラが高速で突っ込んでくる。考える暇もくれなか！

「ドンファン、氷のつぶて！」

『パオーン！』

そんなオレの指示でドンファンの周りに氷で出来たつぶてが現れ、それは一斉に高速でプテラに向かっていく。効果は抜群の一撃だ。受けてみやがれ！

『ギユイ！』

げっ！

氷のつぶての段幕をあんな簡単に鼻歌を歌いながらって言うても間違いないぐらい余裕でプテラはその中をかい潜ってドンファンに迫る。やらせるか！

「ドンファン、カー杯連続で地響きを起こせ！」

『パオーン！』

空中にいるプテラにはあくまで効かない。ただ、この地響きの目的は！

「視界が……」

『ギユイ……』

そう、こうやって視界を潰すためだ。砂埃を無理矢理起こしてなんとかドンファンを見失わせた。

まあオレも見失っちゃったけどな。でも次の指示を！

「ストーンエッジだ！」

そんな指示をして見せると微かに鳴き声が聞こえたかと思うと砂埃の中から鋭い岩がいくつかプテラに向かって放たれた。

しかしそれは上昇するって僅かな行為で回避されてしまう。キシヨ  
ー！ どうすればいいんだ！

「なるほど、空中戦はキツイみたいだね。なら、プテラ火炎放射！」

『ギューイー！』

『パオ！？』

わぁ！

空から火炎放射で爆撃だなんて聞いてねえぞ！

今の鳴き声からして当たりはしなかったみたいだけど、このままだと確実にそのうち火炎放射が当たっちゃう。どうする？

『パオオオン！』

「ドンファン！」

またぎりぎり当たらなかったみたいだ。

丁度砂埃も晴れてきて視界が回復する。そこにはダメージを殆ど追っていないドンファンが、でもやっぱりこのままじゃマズイのには  
変わりない。

火炎放射の爆撃……これをなんとかしないと負ける

『パオ！』

え、ドンファンがオレの方へ振り返り力強くなく。

火炎放射の爆撃は続いているのにそんな事を……

そっか、少し弱気になってたみたいで心配かけてたのか。でももう大丈夫だ

ドンファンが空中戦が無理って道理を引っ込めてやる！

「ドンファン、フルパワーの地震だ！」

『パオーン！』

ドンファンは更に地面を揺らす。さっきのドサイドンとドンファンの地鳴らしのせいか地面がポロポロになってたらしく地面がまるでジェットコースターの登り面みたいに割れて上がってきた。コイツを使う！

「血迷ったのか！ プテラ、更に火炎放射」

おまけのように放たれる火炎放射、まずはそれを避ける事からだ！

「ドンファン、転がってかわせ！」

そんなオレの指示でドンファンは転がり始める。そして火炎放射にはドンドン加速していき当たらない。よし、ここまで加速したならいける！

「その勢いを使え、飛べ！ドンファン！」

『パオーン！』

「なにいい！」

『ギユイイイ！』

そう、ドンファンは跳んだ。岩の柱を利用してそのままプテラに向かって跳んだのだ。

あまりに無茶苦茶な戦術に相手は呆然とするばかり、そんな状態でプテラは回避なんて出来ない。

転がるの一撃は見事にプテラに炸裂。よっしゃあ上手くきまったぜ！

「くっ……離脱を……」

そんな指示の元体勢を立て直して逃げようとするけど……

「氷のつぶて！」

『パオツ！』

『ギユイ……』

すかさず氷のつぶてを放ち、それは見事にプテラに炸裂それで体勢を崩した。まだまだ！

逃がすか！

「これで決着をつけるぜ！ドンファン、のしかかり！」

『パアアアオオオン！』

見事にドンファンはプテラにのしかかった。プテラは脱出しようとしたがもう遅い。これで終わりだ！

『ギユイイイ！？』

落下の勢いを利用したのしかかりは決まった。そんなのプテラは堪えられない。プテラは目を回してダウンした。勝った…のか？

「プテラ戦闘不能！ドンファンの勝ち！よってこの勝負、イッキ選手の勝ちです！」

そんなコールがかかる。

「やった勝ったぜドンファン！」

本戦初勝利の実感を審判のコールで感じ、そのままドンファンのもとに駆け寄る。

するとドンファンもこっちに向かって駆け寄ってきて、嬉しそうに鼻をオレの顔を撫でるように当ててくる。く、くすぐったいって！

「まさか、こつも簡単に負けるなんて……」

そう呟く男の人は落胆の表情を見せている。勝てなくて当たり前さ

……

「確かにアンタは強かったよ。けど、相手の事を過小評価し過ぎたのがアンタの最大の敗因だ！」

この人に勝ったことで自信が持てた。オレ達は強くなった！

これからの戦い、コウだろうがユウイチだろうが、ユースケさんにだって負けるものかよ！



決勝トーナメントの壁（決着編）（後書き）

次回予告

イツキ「2回戦に進出したオレの相手はシノブって人だ」

ユースケ「シノブ……ずいぶんご無沙汰な名前だね。シノブは強いよ。イツキ気合い入れていきなよ」

イツキ「当然ですよ！最初から全力でぶつかるだけです！次回、ポケットモンスターACEのSECOND SEASONの『VSそっくりさん？』次回もポケモンゲットだぜ！」

オーダイル「ダイル！」

VSそっくりさん？（前書き）

無事に2回戦を迎えたイツキ。その相手とは……

VSそっくりさん？

第2回戦に駒を進めたオレは第2回戦のバトルフィールドに立っている。でお相手はシノブっていう野生味溢れる人だ。

確か予選の一回戦で戦ったミコトさんのパートナーってユースケさんが言ってたな。強敵って言ってたけど、まあなんでもいいや。

真っ向勝負だ。やってやるぜ！

「へえ、お前がミコトを倒したイツキって奴か。オレはシノブ。ミコトの仇は討ってやるからな。覚悟しとけよ！」

そう自己紹介をするようにシノブ…さんが言うが仇ってなんだよ……  
てか何故かこの人をさん付けで呼ぶのに抵抗があるのはなんでだろう……

「そうはいくかよ！このまま意地でも勝ち進んでやるんだ。アンタにそう易々と負けてたまるか！」

そうタメ口でオレは帰す。相手は年上なんだけどな、どうしてこうなるんだよ。

「やれるもんならやってみろ！絶対に勝ってやる！」

「へっ！望むところだ！」

今のやり取りでなんとなく分かった気がする……

この人、なんかオレに似てるな。好戦的なのところとかお調子者っぽいところとかさ。

同族嫌悪ってかなんていうか……似てる二人は喧嘩するって奴だろ  
うな。

「よおし、行くぜハッサム！」

「真つ向勝負！ケンタロス頼むぞ！」

そう言つてシノブ……さんが出して来たのは牛の姿をしたポケモン、  
ケンタロスだ。

闘牛ってイメージのポケモン。コイツほど『暴れる』って技が似合  
うポケモンはいないだろうな。

「審判スルーかい……まあいいや、これよりイツキ選手とシノブ選  
手の試合を始めます。ルールは省略！それでは試合開始！」

うわ、審判をスルーしたせいかなんかやけくそ気味なスタートさせ  
る。

アレ、この展開知ってるような……

「先制行くぞ？ケンタロス、捨て身タックル！」

『ブモオオ！』

うげっ！

先制攻撃と言わんばかりにケンタロスが真つ正面から突っ込んできた。

全くお似合いな技を！

ただ、お似合いな技な以上威力も保障される訳だから貰う訳にはいかない！

「ハツサム、鉄壁で受け止める！」

『サムッ………』

そこでハツサムは硬化して防御の体勢をとった。まともに喰らう訳にはつたけどかわすには遅すぎたんだよね……

『サム………！』

そこでしっかりと受け止めて少し後退するだけで済ませた。けど、ダメージは少なくないみたいだな。

だけど、やられただけじゃすませねえ！

「反撃だぜ！ハツサム、メタルクローだ！」

『……サム！』

やられたままじゃ終わらせない。直ぐさま反撃の一撃をハツサムはケンタロスの額に叩き込んだ！

それに呻くケンタロスだが、上手く頭を左右に降って自らの角を連続で当ててハッサムを横に弾き追撃をさせてくれない。

やっかいな事を、でもまだだ！

「ハッサム、そこから連続切りだ！」

「そうかよ、乱れ突き！」

ハッサムのハサミとケンタロスの角が激突して弾き合う。相手の方が手数が多くて負けてるように見えるけど、手数が増すだけ威力が伸びるこの技なら！

『ブモ！？』

『サム』

威力が押し勝ったハッサムはケンタロスを弾き飛ばす。そこでニヤリとハッサムはする。まだだ！

ハッサム、行け！

「ハッサム、バレットパンチ！」

『サムッ！』

『ブモオ……………』

そこに追撃が入る。弾丸のような拳で更にケンタロスは後退する。このまま一気に！

「ハツサム、バレットパン……」

「そうはいくかよ！ケンタロス、地震だ！」

『ブモオ！』

『サム……』

「うわっ！」

！

不意に出されたその指示はケンタロスに素早く地震を起こさせた。  
おかげでオレはバランスを崩すしハツサムはずっこけるし……って  
こけた！？

「ケンタロス、踏み付けてやれ！」

「ハツサム、えっと……とりあえず堪えろ！」

『ブモオオオ！』

『サ、サムウ！？』

そんないい加減な指示をするけどハツサムはなんとか踏み付けをガ  
ード（？）できた

ふう、危ない危ない

「まだまだ踏み付けだあ！」

く、まだ踏み付けてくるか！

「ハッサム、リフレクターを使い！」

『サムッ！』

直撃の寸前にリフレクターをハッサムが出現させ、踏み付けのダメージを抑えた。その隙にハッサムは体を転がらせてそこを離脱して立ち上がる。

危ないなあ、流石にやってくれる！

「まだまだ続くぜ！捨て身タックル！」

『ブモオオオ！』

休む暇を与えずに次々と攻撃してくるケンタロス。

その場凌ぎの戦術が効かない、だったら！

「ハッサム、つのをハサミで掴んで受け止める！」

『ブモオオオオ！』

『サムウウウウ！』

真っ向から2匹のポケモンは激突する。ハッサムは起用にケンタロスの角を掴んでその場で腰を落として踏ん張る。



ケンタロス……なんてパワーだよ！

だけど、真っ向勝負するだけがハッサムの脳じゃない！

「ハッサム、イチかバチかだ！相手の勢いを使え！」

『サム、サム！』

そんなオレの指示でハッサムは後ろに転がる。

するとケンタロスは自分の勢いを殺せずにそのまま後ろに吹っ飛ばされた。へへ！

ユウイチ直伝の巴投げだ。っても実際教えて貰ったわけじゃねえけどな。けど、これがチャンス！

最後の勝負だ！

「ハッサム、一気に距離を詰める！アイアンヘッドだ！」

「ケンタロス、体勢を立て直せ！ハッサムが来るぞ！」

『ブモオ！？』

『サムウウー！』

「貰ったああああ！」

決着となる一撃、宙を舞うケンタロスにハッサムは自らの固い頭で

ヘディングを決め地面にたたき付けた。

それで目を回したケンタロス。よし、まずは一勝だ！

「ケンタロス、戦闘不能！ハツサム勝ち！」

「く……もどれケンタロス！」

そうケンタロスを戻すシノブ……さんは悔しそうな表情だ。

出だしから、落とすのはきついから当然か

「やるな！だったらコイツでどうだ！ゴウカザル、頼むぞ！」

『ウキイイ！』

そこで出てきたのはゴウカザルだ。ゴウカザルって確か炎、格闘タイプ……

相性が悪いハツサムで真っ向勝負するのも危険だけどやってみなくちゃ分からない！

「ハツサム、このまま行くぜ！」

『サムッ！』

そう頷きハツサムは構える。よし、十分やれるぜ！

「試合開始！」

そのコールと同時にオレ達は動く。先に仕掛ける！

「ハツサム、電光石火！」

『サムッ！』

ハツサムは自らの重い体を振り回し複雑な軌道を取りながらもゴウカザルに向かっていく。まずは一撃を！

「こつちも電光石火だ！ハツサムに捕まるな！」

『ウギヤア！』

シノブ：さんも同じようにゴウカザルに指示を出す。するとゴウカザルも電光石火を発動。

く、目で追うのがやっとだな。これじゃとてもじゃないけどハツサムじゃ追いつけない！

「火炎放射だ！」

『ウキヤア！』

高速な動きでゴウカザルは一気にハツサムの死角に飛び込んできた。そして遠慮もない炎攻撃。

くっ、当たる訳にはいかない！

「ハツサム、そこで高速移動だ！加速しろ！」

『サムッ!』

電光石火と高速移動の併用。超加速を起こしたハッサムは一気に火炎放射から逃れる。

そしてそのままオレの指示無しでゴウカザルに向けて電光石火で駆け出す。よし、今のスピードならやれる!

「そこだ!切り裂く攻撃!」

「させるか!ガードしろ!」

そんな指示だったけど、オレのハッサムのパワーを舐めるなよ!

『サム』

『ウキヤッ!?!』

そんなガードじゃハッサムの攻撃はガードは出来ないぜ!

見事にガードは崩れ、ゴウカザルは隙だらけだ。もう一撃を!

「かわらわりだあ!」

『サムウ!』

「フレアドライブ発動しながらブロック!やらせるな!」

!?

そんな意図不明の指示。ゴウカザルは体全体から炎を発してその体制のままブロックする。

かわらわりの攻撃でまた体制を崩す。まだだ、逃がすか！

え……

『サムッ……』

！？

ハッサムがダメージを！

まさか、フレアドライブの炎に直接触れたせいか！

「隙ありだ！ゴウカザル、フレアドライブ！」

「ハッサム、逃げろ！」

『ウキヤアアア！』

『サム……サムウ！』

そう叫ぶオレの指示を無視してハッサムはゴウカザルに向かっていく。あの馬鹿！

捨て身の攻撃しようつてのによ！

『サムウウウ！』

『ウキヤアアア！ウキヤアアア！』

正面からハッサムはゴウカザルに突撃した。頭からの重い一撃を腹に受けて一瞬ゴウカザルはのけ反るが、直ぐさま体制を立て直しフレアドライブでハッサムを吹き飛ばした。

「ハッサム！」

それに思わず吹っ飛ばされてダウンしたハッサムの元に駆け寄る。

完全に目を回してやがる。無茶しやがって。後で説教してやるからな！

「ハッサム戦闘不能！ゴウカザルの勝ち！」

くっ！　オレはぐちぐち言いながらもハッサムをボールに戻して元の位地に戻った。次はどうする？

とりあえず困った時は相棒の力を借りますか！

「オーダイル、ここは頼むぜ！」

『ダアアイル！』

そこで姿を現したのはオーダイルだ。さあ、頼むぜ相棒！

「試合開始！」

試合開始のコールが鳴る。さあ、行くぜ！

「オーダイル、高速移動だ！」

「接近戦か！だったら、こっちは電光石火だ！」

そこでゴウカザルとオーダイルは同時に加速しお互いの距離を一気に縮めた。そこだ！

「オーダイル、アクアテール！」

「甘い、ゴウカザル雷パンチだ！」

『ウキヤ！』

『ダイル！』

素早いオーダイルを容易捉えて来るゴウカザルは流石だ。

そしてオーダイルの尻尾と自らの拳が激突しお互いに後退した。

相性が悪い技を受けたけどアクアテールで勢いだけは殺したからそこまでダメージは大きくない！

「インファイトで追撃だ！」

『ウキヤアアア！』

そう雄叫びを上げながら一気にゴウカザルはオーダイルの懐に飛び込んで来る。やられる！？

「オーダイル、ガードしろ！」

「遅い！」

『ウキヤキヤキヤキヤ！』

『ダイ！？』

！？

インファイトは強力な技だ。けど、あまりオーダイルにダメージを受けたような気配はない。後退もそれほどしてないし、踏み込みが甘かったのか？

イヤ、それだけじゃない。明らかな力不足だ。まさか……

「オーダイル、地震を使え！ゴウカザルの足を止める！」

「く……跳べ！」

「アンタ達の方も遅いぜ！」

『ダアアアイル！』

『ウカヤア……』

直感に任せてオレは叫ぶ。

インファイトを決めて一旦後退していたゴウカザルだったけど、地震に対しては反応できず効果は抜群の攻撃を受けてバランスを崩した。やっぱり！



ゴウカザルの反応が鈍い。ハツサムの捨て身の攻撃が響いてるんだ！  
これがチャンス、一気に行くぜ！

「コイツで止めだ！アクアジェット！」

『ダアアイイル！』

「ゴウカザル！」

オーダイルは高速で水流を身に纏いゴウカザルに突撃、その一撃でゴウカザルを吹っ飛ばした。どうだ！

「ゴウカザル、戦闘不能！オーダイルの勝ち！」

吹っ飛ばされたゴウカザルは目を回してたみたいだ。よし、2勝目！

後1つだ！

「ゴウカザル戻れ！ミコトが負けるだけあるな……けど俺はこんなところで負けるわけにはいかないんだ！ ドンガラス！」

『カア！』

ラストに出てきたのはドンガラスか！

全てをコイツに託したって事は油断なんて出来ないなコイツは……

「試合開始！」

審判のコール、最初から飛ばして行くぜ！

「オーダイル、高速移動！」

オーダイルは自らの体重を軽くして加速してドンガラスに向かっていく。コイツでも受けてみやがれ！

「冷凍パンチ！」

『ダアイル！』

オーダイルの素早い拳。それはドンガラスに向けられている。これでも食らえ！

「ドンガラス、燕返し！」

さっきまで動きを止めていたドンガラスはオーダイルの拳が突き刺さる瞬間にドンガラスはオーダイルの背後に回ってきた。

「熱風で弾き飛ばしてやれ！」

『カアアア！』

『ダ、ダイル！？』

オーダイルはドンガラスの両翼から放たれた熱風に弾き飛ばされた。そして顎から転んでしまう。だ、大丈夫かよ……

「背中から一発喰らって貰うぜ！ドリルくちばし！」

！

そんなの貰ってたまるかよ！

オーダイルだってそんなの堪えられるか分からないってのに！

「来るぞオーダイル！波乗りだ！」

『！……ダイル！』

背後からの追撃に気づいたオーダイルは地面に向けて力一杯両手をたたき付けた。

すると大きな波が発生してオーダイルはそれに乗り、その場を猛スピードで離れた。

あの状態じゃ立ち上がる時間ロスも命取りだからな。多少強引だけでも離脱させて貰ったぜ。

波である程度移動したオーダイルは直ぐさま波から降りてついでに立ち上がる。

「ドンカラス、逃がすな。悪の波動！」

『カアアア！』

『ダイ……』

くっ！ 体制を立て直してるタイミングすらまともに与えてくれないシノブ…さん達。

今のは外れたから助かったけど、このまま受け身のままなんでやっ  
てられるかよ！

「オーダイル、こっちも攻撃だ！吹雪！」

『カア〜』

『ダアア……………』

オレ指示で吹雪を撃とうとしたオーダイルだったがその攻撃はドン  
カラスがこけにしたような攻撃を急に背後から仕掛けてきて終わる。

不意打ち……………この！ やっかいな技を！

「まだまだ！ドリルくちばしで追撃だ！」

『カアアア！』

バランスを崩してるオーダイルへの追撃、そんなの許す訳にはいか  
ない！

「オーダイル、嫌な音を使え！」

『“ @ x ”』

『カ、カア……………』

「おわっ！」

「くっ……」

「うっ、だからこの技は嫌なんだ……」

フィールド周辺に嫌な音が響き渡り、オレを含めたオーダイル以外の人やポケモンが耳を抑えて動きを止めた。

そこだあ！

「オーダイル、冷凍パンチだ！」

『ダイル！』

『カア！？』

「ド、ドンカラス！」

動きを止めているドンカラスに氷の拳が突き刺さる。

効果は抜群の一撃はドンカラスを見事に吹き飛ばした。

しかし、そこは流石に頑張る。落下寸前に翼を奮い上昇する。防御が下がってる状態の拳だったんだけどな……ゴウカザルはダメージがあつたからあっさりだったけど、やっぱり強いな。

「やるなイツキ……ここまで追い詰めるなんてよ。俺の勝ち目は殆ど無いと思う……けど、後悔だけはしたくないし負けたくもない。だから今から全力の一撃をぶつける！そしてここから活路を見出だしてやる！覚悟しやがれ！」

……これだ！

これがこの人の強さだ。どんな追い詰められても諦めず最後まで全力で戦い抜こうとするこれこそがあの人の強さなんだ。

これは真っ正面から受け止めるしかない。避けたりなんて賢い事は抜きだ。真っ向から受け止めてやる！

「ゴットバードだ！」

「オーダイル、フルパワーだ！馬鹿力で正面から受け止める！」

『カアアアア！』

『ダアアイル！』

パワーとパワーの正面からの激突。どうなった！？

しばらくの静寂……上がった土煙が晴れてきた。あっ！

「ドンカラス戦闘不能！オーダイルの勝ち！よってこの勝負イッキ選手の勝ち！」

やった……のか？

イマイチ実感が……

『ダアアイル！』

へ、うわっ！

呆然としてるところにオーダイルは突っ込んできてオレは吹っ飛ばされてしまう。嬉しいのは分かるけど……

「イテテ、お前も大きくなっただからさ。いい加減手加減ぐらい覚えてくれよ……」

『ダイル……』

そう反省したのか少ししょんぼりとするのは素直なコイツらしいと思う。

「でもやったな。次は3回戦だぜ」

そう言いながら倒れたままオーダイルに向けて右手の親指を立てる。するとオーダイルも同じように親指を立て返した。

「おいおい大丈夫か？」

ん？

そうしてるとシノブ…さんがオレの元へ歩いてきて手を差し延べてくれる。

「あ、ありがとうございます」

オレはその手を取って立ち上がる。で、敬語なのはご愛敬って奴さ。

「ミコトが負けただけあるな。俺の完敗だよ」

「えっ？　そうですか？　なんか照れ臭いっスね」

そうシノブ…さんに返すオレ。どうしても【さん】付けに抵抗があるのは何故だろう……

「自信持てよ。お前のその真っ直ぐさと無謀なまでの勇気があれば  
そう簡単には負ける事がないと思うぜ」

「……はい！　シノブ…さん。ありがとうございます。オレ、やれるところまで全力でやってみます！」

「……【さん】って言うの無理してないか？」

タハハ、バレたよ。なんか締まらないけど、シノブ…さんに言った  
よぶにやれるところまでやってやるさ！



## V S そっくりさん？（後書き）

はい、今回は前作のポケモンリーグ辺の冒頭部に出てきたシノブに登場してもらいました。忘れられていて何かと不憫な彼とミコトでしたがなんとか出せてよかったです。

### 次回予告

イツキ「よっしゃあ！2回戦突破したし、コノハ、いったんここでタッチだ！」

コノハ「へ……私の出番？ よおし気合い入れてくわよ！サクラ、勝負よ！」

イツキ「遂に始まったコノハとサクラの直接対決。おてんば娘とまじめな少女。勝つのはどっちになるのか？」

コノハ「だれがおてんばよ！次回、ポケットモンスターACEのSECOND SEASONの『逆極性な二人』次回もポケモンゲットよ！」

ルカリオ「ゲットっていうけどあんまゲットしてないような……」

コノハ「それに突っ込むな！」

## 逆極性な二人（前書き）

今回はコノ八編、その対戦相手はサクラ、コノ八はこの強敵にどう戦うのか？

## 逆極性な二人

「……………」

無言でこちら側を見つめるサクラの覇気はかなりのものだった。いつかの説教事件で本気で怒ったサクラは恐かった。

それがやっぱり事実だったみたいに今のサクラの放つプレッシャーは強い。正直逃げちゃいたいところだけど、そうも言える訳ないじゃない！

「サクラ……勝負よ！」

「コノハちゃん、手加減は無しだよ！」

いつもの口調とサクラの口調は変わらないんだけど……なんだろう、本気のサクラってこんなに怖いんだ。

ユウイチが頼りにしたり怖がったりする訳よ。それじゃ行くわよ！

「それでは試合開始！」

「行くわよ、エイパム！」

「お願いね、ピッピ」

『ウッキィ〜』

『ピィ〜』

サクラの出してきたポケモンはピンク色のどこかピカチュウを連想させられてしまうポケモン、ピッピだ。

その愛くるしい姿を攻撃するのはちょっと罪悪感を感じるけど、今は容赦はしない！

「先手必勝よ！エイパム、猫騙し！」

『ウキイ〜』

わたしの指示でエイパムは動く素早い身のこなしでピッピに接近しピッピの目の前でパンと猫騙しをする。それに怯んでピッピは動きを止める。チャンス！

まだまだ行くわよ！

「エイパム、乱れひっかき！」

『ウキヤキヤキヤ〜！』

「ピッピ、守るを使って」

『ピィー！』

そんな指示でピッピは光の膜を発生させてエイパムの乱れひっかきを弾き飛ばした。

しっかりとガードしてくるわね。流石はサクラ、堅実な動きね

でも！

「まだまだ行くわよ！ダブルアタック！」

『ウツキイ！』

そこに隙なく連続攻撃をエイパムにさせる。スピードある連続攻撃がわたしの基本戦術よ！

「ピッピ、コスモパワーを使いながらブロックして！」

『ピィー！』

ピッピが突然輝き始め、それに構わずエイパムの攻撃。

まずは拳の一撃に、それからの尻尾攻撃。でも効いてない。本当に堅実に防御してくる！

「反撃するよ。コメットパンチ！」

『ピッ！』

そんなのに当たる訳ないでしょ！

「エイパム、電光石火でそこから離れて！」

『ウキウ！』

素早く横に跳ねてコメットパンチを回避する。そしてそのまま距離をとった。

まだよ、もつと行くわよ！

「エイパム、スピードシター！」

「ピッピ、往復ビンタで撃ち落として！」

『ウキヤアー！』

『ピイ！』

尻尾を奮い放った無数の星のエネルギー波なんだけど、殆ど往復ビンタで撃ち落とされてしまう。

ああもう、サクラもやってくれるわね。だけどまだこっちの手はあるわよ！

「エイパム！電光石火で一気に」

「そこまでだよコノハちゃん！重力！」

『ピイ！』

『パ、パム………』

え、どういう事？

エイパムの動きが鈍くなった？

それに重力って、あっ！

「重力、自分の周りの重力を強くする技だよ。これでエイパムの自慢のスピードは生かせないよ」

確かにそうだけど！

「効果はフィールド全体だよ？そっちは動きが余計に遅くなるわよ」  
そうサクラに力説してみせる。そうだよ。遅くなっただってビビル必要ないのよ！

「でも技のも当たり易くなるのを忘れて無い？普段通用しないようなこの技もね。ピッピ、歌って！」

『ピイ！ピイピ。ピイピ。ピイピ。……』

うーん睡魔が……じゃなくて！

この技をされるとどうしてもアカネのピッピを思い出してしまふ。アレはともかく、本当の歌うって技は成功しにくいよね。でも重力下だから……

『ウキヤ……アア……』

エイパムはピッピの目の前にたどり着く寸前に眠ってしまった。ア  
ワワワワ、そんな

「コノハちゃん、降参、してくれるよね？」

そういう笑顔で言うサクラが今は悪魔に見える。

『【笑顔の悪魔】……つてところだね。今のサクラは』

そうルカリオがわたしにテレパシーで言ってくるけどそれは言い得て妙ね。絶妙のネーミングセンスよ。

でもそんな事考えてる場合じゃないわよ！

「誰が！」

「ごめんね。ピッピ、目覚ましビンタ！」

『ピィー！』

『ZZZ……パム！パムウ……』

あわわわわ！

眠ってるポケモンを起こす代わりにその眠ってるポケモンに対しての威力がハンパない事になる技。しかもエイパムには効果は抜群だから……

「エイパム、戦闘不能！」

審判のコール、強い、これがサクラの実力なの？

「エイパム、よく頑張ったわね。後は休んでて！」

そう言ってわたしはエイパムをボールに戻した。次はっ



『コノハ、僕が行くよ。ピッピには相性がいからなんとかして見せるよ!』

そう自信満々で言うルカリオだけど

「ダメよ。また歌うで眠ったら話にならないじゃない。だからこころは……」

そう言つて次のボールを手取る。重力の影響がある以上、歌うは脅威だったらここは!

「ヨルノズク、頼むわよ!」

『ホオ〜!』

そこで姿を現したのはヨルノズク。ヨルノズクは重力で地面に引張られてしまふけどなんとか脚で着地する。危ないわね、ここはこの重力を逆手に取る!

「試合開始!」

再び試合開始のコール。重力で飛行できないせいでもろくに移動も出来ない。だけど!

「ピッピ、コメントパンチ!」

『ピィ〜!』

サクラの指示でピッピが真っ向からヨルノズクに向かってきた。

ヨルノズクだったら特性が【不眠】だから歌うは通用しない。だからああやって真っ向から向かってきた。この重力、逆に使わせてもらうわよ！

「ヨルノズク、そこで催眠術よ！」

『ホウ〜……………』

「あっ！」

『ピ。ピ……………』

催眠術、これって成功率が低い技なんだけど重力のお陰で絶対当たるのよ！

そこで眠ってしまったピッピ。さあ今度は逆の立場よ！

「サクラ、降参するなら今のうちよ！」

「コノハちゃん、やるね。審判さん、ピッピは降参をお願いします」

「分かった。ピッピ、棄権につきヨルノズクの勝ち！」

審判のコールがかかる。

素直にここで引いてくるのがサクラらしいかも。サクラってポケモンに無茶させるのは嫌いだから夢食いとか色々できるヨルノズクとの戦いを嫌ったみたいね。ともかく一勝！

次も貰うわよ！

「流石にやるねコノハちゃん。でも私だって負けれなんだから！ムクバード、お願い！」

『ムクバード！』

続いてサクラの出して来たのはムクバードだ。あれ？

ムクバードが普通に空飛んでる。重力が元に戻った？

ならヨルノズクも行けるわね！

「ヨルノズクも飛んで！」

『ホオ〜』

そう陽気な鳴き声を上げながらヨルノズクは翼を奮い空を飛ぶ。よし、行けるわね！

「試合開始！」

再び試合開始のコールがかかった。空中戦、わたしにどこまでやるかしら？

とにかく弱気は禁物よね

「行くわよヨルノズク、エアスラッシュ！」

『ホウ！』

素早く翼を奮い空気の刃をムクバードに放った。これが当たれば！

「電光石火で回避しつつもヨルノズクに近寄って！そこから吹き飛ばしー！」

！

さすがにムクバードは早い。悠々とヨルノズクのエアスラッシュを回避して一気に接近してくる。

けど、まだまだ手ならあるわよ！

「ヨルノズク、守るを使って！吹き飛ばされちゃダメよ！」

『ホウ！』

『ムクウウー！』

ムクバードが放った風はトレーナーのわたしも少し吹き飛ばされそうになる強風だった。けどこれくらいじゃ負けない！

ヨルノズクが守るを発動して今の位置を維持してる以上わたしが弱気になる訳にはいかないし、チャンスだってある。

「吹き飛ばしが終わった瞬間にサイコキネシスで応戦よ！」

『ホウ……ホオオ！』

『ムク！？』

吹き飛ばしが止んだ瞬間に守るは解除され、すかさずにヨルノズクが反撃のサイコネシスをムクバードにぶつけた。念による攻撃は効果テキメン！

ムクバードは結構苦しんでいるわね。ここは一気に行くわよ！

「ヨルノズク、一気に接近して翼で打つ攻撃よ！」

サイコネシスで怯んでいる一瞬の隙をヨルノズクは逃さない。

そこで鋭い目を輝かせてムクバードに突撃していく。これで終わりよ！

「ムクバード！」

『ム……ムクウウウ！』

！？

突然ムクバードは吠えた。それはあまりに突然の事だからわたしもヨルノズクも怯んで動きを止めてしまう。

凄い気迫だけど、それだけじゃない！

これってまさか！

『ムウウクウ！』

またムクバードは吠えると突然輝き始めた。これってやっぱりそうよね、土壇場にやってくれるじゃない！

『ムクホオク!』

光が止むと思うところにはムクバードが一回り大きくなってさらに立派なトサカを身につけたポケモンがいた。

確かあのポケモンはムクホークだっけ？

昔お兄ちゃんの対戦相手が使ってたのを見たことあったわね。それとわたしが戦う事になるとわね、上等じゃない!

「進化したからって!ヨルノズク、やることは同じよ!翼で打つ攻撃!」

『ホオ〜!』

わたしの指示でムクホークに向かって行こうとしたけど

『ムク!』

『ホウ……………』

ムクホークに威圧されて動けてない!?

特性【威嚇】なのは分かるけど、ちょっと強気過ぎない!

ムクバードも特性【威嚇】だったんだけど、何この急変ぶりはねえ

進化したから自信ついちゃったのかしら?

「進化……だつたらもう一度！吹き飛ばし！」

『ムクウホー！』

『ホオ！？』

あ、いけない！

考え事してる間にムクホークの吹き飛ばしでヨルノズクは吹き飛ばされていた。

『ホウ……ホオ！』

…地面にぶつかる寸前に翼をばたつかせて浮力を得て地面に落下せずすんだ。ふう、ギリギリねえ……

「まだまだ行くよ！電光石火で急降下！」

『ムクウ！』

「ヨルノズク、避けなさい！」

『ホウ！？』

一息ついているヨルノズクにムクホークが襲い掛かる。

急降下にしてきて、その鋭い脚の爪でヨルノズクはらにぶつけてそのまま地面にたたき付けられ押さえ付けられた。

うそお、電光石火だけで完全に動きを止めるなんてどういう事よ！

基本的にサクラは攻撃技を余り使ってこない。けど補助技とかそこから辺の技の使い方が凄く上手いのよ。  
証拠にたったこれだけでこの状況。強いな

「これで動けないよ！今度は素直に降参した方がいいと思うけど？」  
ぐぬぬ、またサクラはそんな事言う。基本的に相手をKOするって戦い方が好きじゃないってのは分かるけど何となくしゃくに触るなあ！

「誰が！油断してたら足元すくわれるのはそつちよ！念力！」

「当たり前だよね、がむしゃら攻撃だよ！」

「ムクッ！」

「ホウ……ホオ〜！」

ヨルノズクの念力が発動する寸前にムクホークが大暴れしてそれでもとヨルノズクは念力で吹っ飛ばした。

「大丈夫なの！？ヨルノズク！」

「ホウ……」

なんとか無事だったみたいで首を少し捻ってから体を起こす。

でもダメージは大きいみたいね。もう無茶はさせれない、次の攻撃に全てを賭けてやるっきゃないわ！



「ヨルノズク、これが最後の勝負よ！」

『ホウ！』

そうヨルノズクは再び翼を広げ飛び上がった。するとその体は光に  
つつまれ始める。決戦用の必殺技よ。受けてみなさい！

「勝負をかけるつもりみたいだね……ムクホーク、覚悟は出来てる  
？」

『ムクウ！』

そうサクラが言うとムクホークは一旦上昇し、勢いをつけてヨルノ  
ズクに向けて旋回する。あっちも来るみたいね！

これで終わりにするわよ！

「ゴットバード！」

「ブレイブバード！」

『ホオオオ！』

『ムクウウ！』

2体のポケモンが正面から激突したどうなったの！？

『ムク………』

『ホオ〜……………』

ダブルノックアウト……………ヨルノズクもムクホークも完全にダウンしている。引き分け？

「両者戦闘不能！」

そんな審判のコールがかかった。

「ヨルノズク、ありがとう。アンタはよくやったわ」

そう言いつつわたしはヨルノズクをボールに戻した。強い……………わね

……………

伊達にユウイチのお姉ちゃんやってる訳じゃないのね。次がラスト

……………わたしのポケモンは！

「ルカリオ！」

『僕はいつでも行けるよ！』

そうルカリオが戦う準備が出来てるってテレパシーでわたしに伝えてくる。

それじゃ行くわよ！

「ルカリオ、思いっきりやってきなさい！」

『行つくぞおおー！』

わたしがボールを投げるとルカリオがそう叫びながら姿を現した。その様子なら十分いけるわね！

「メガニウム、勝ちに行くよ！」

『メグウ！』

それに対してサクラが繰り出してきたのはメガニウムだ。相性はなんととも言えないわね……だけど！

「試合開始！」

「ルカリオ、神速！」

『！』

試合開始のコールと同時にわたしは叫ぶ。そしてすぐにルカリオは姿を消した。先手必勝よ！

「ブレイズキック！」

『こんのおお！』

神速のスピードでメガニウムの後ろにルカリオが回った。そして炎をまとった蹴りをたたき付けようとする。まずは一発よ！

「メガニウム、つるのムチでジャンプよ！」

『メグー！』

そこでメガニウムはつるのムチを地面にたたき付けてジャンプした。それによりあっさりブレイズキックはかわされてしまう。

ってなんて回避の仕方してんのよ！

メガニウムの大きな体格でそんなの冗談じゃないわよ！

「甘い香りを散布して、それからそのままのしかかり！」

「ルカリオ、鼻を摘みなさい！それからなんとか逃げなさい！」

『ふにゃ……じゃなくて！わぁ！』

ルカリオ、甘い香りにやられそうになってる。

でもなんとかのしかかりを避けられたみたいね。

だったら次の手よ！

「ルカリオ、波動弾でメガニウムを撃つよ！」

『こんのおおお！』

手と手の間にエネルギーを溜め、それを素早くメガニウムに向かって放つ。これならどうよ！

「エナジーボールで迎撃して！」

『メグウ！』

二つの技は中央で激突して爆発した。くっ、素早く迎撃されたわね

……

でもこれはこれでいい煙幕。利用させて貰うわよ！

「神速からのボーンラッシュよ！」

『まかせて！』

そう叫び爆発の中をルカリオは突っ込んでいく。

その両手には長い骨を持っていてそれをメガニウムに向けてたたき付ける。これでも喰らいなさい！

「メガニウム、つるのムチでブロックして！」

『メグウ！』

突然の攻撃にもしっかりと対応してくるサクラは流石ね。

しっかりと一発はブロックしてきたる……けど！

「一回で終わる技じゃないわよ、コイツはね！」

『じんのぉー！』

「リフレクターを張って。それからつるのムチで出来るだけブロック！」

『メグ………メグメグウ!』

そう強気にわたし達は攻める。

それでもリフレクターとつるのムチでダメージを抑えてくる。相性的にもよくない技を選んだから全然効いていない!

このままじゃジリ貧よ!

『こんのおお!』

「メガニウム、今だよ!」

『メグウ!』

『うわっ!?!』

え!

攻撃が効かない事に焦ったルカリオが大振りになったところをつるのムチでお腹を叩かれた。でもそんな攻撃なんて!

「まだまだよ、宿り木の種!」

!?

『メグウ!』

『こいつは………!』

サクラの指示でメガニウムは口から種を吐き出し腕に絡み付いた。宿り木の種、ルカリオのエネルギーを吸い取るつもり！？

「ルカリオ、インファイトで一気に行くわよ！」

長期戦はもう出来なくなつた。一気に攻める！

「メガニウム、守るを使つて！」

『メグツ！』

くっ！

メガニウムは光の膜を張つてあっさりルカリオのインファイトはガードされた。流石にこんな単調な攻撃が通る訳ないか、でもまだまだ行くわよ！

「ブレイズキックよ！」

『でやあ！』

『メグ……』

すかさずに放たれたルカリオのブレイズキックはしつかりとメガニウムに炸裂した。効果は抜群の一撃は案外効いてるみたいでメガニウムは顔をしかめている。まだ行くわよ！

「ルカリオ、もう一撃よ！」

「メガニウム、つるのムチで払いのけて！そこから種爆弾！」

『メグウ！メグッ！』

『このっ！うわっ！？』

つるのムチで器用に炎のパンチが払われた上に種爆弾が見事に炸裂して弾き飛ばされた。

うう、本当に器用な戦い方をしてくるよ。こっちは宿り木の種のせいでタイムリミットがあるのに時間を稼ぐような戦いつて訳じゃないけどルカリオの攻撃をしっかりと受け流してきてる……

「ルカリオ、大丈夫！？」

『うん……くっ……』

ああもう！

宿り木が地味に効いてるみたいね。どうすればいい？

せめて守るさえなんとか出来れば勝機があるのに、守るさえぶち抜く事が出来れば！ ぶち抜く？

あ、アレがあるじゃない！

正直成功するかは分からないけど、このまま負けを待つよりマシよ！

わたしやイツキを多くの人を守ってくれるために、自分達の目標を勝ち取るために使われたこの技、使いこなしてみせるわ！



「ルカリオ、右手に気合玉のエネルギーを集中させて！」

『え、それってまさか！』

ルカリオも気付いたみたいね

「ええ、アレをやるわよ！」

『うわあ、でもそれしかないみたいだね。やってみるよ』

そうルカリオは言うのと集中し始める。黄色のエネルギーがルカリオの右手に集中し始めた。それは徐々に拡大して大きくなっていく。

確かエネルギーの集中に念の力による拡大。っていう無茶な一点集中って理論だけど、ルカリオはそれを理解したうえで一人で行おうとしている。頼りになるわよ。

さ、これで決めるわよ！

「ルカリオ、アンタの事を信じるわよ！神速！」

「来るよムガニウム、守る！」

『メグウ！』

そんな指示を出した瞬間にメガニウムは光の膜を張り防御体制に入りルカリオは消える。そしてルカリオはメガニウムの眼前に姿を現した。

これでも、喰らいなさい！

「行っけええ！サイコマグナム！」

『うわああああ！』

ルカリオの拳から光の矢が放たれる。気合玉のエネルギーを拡大した上で凝縮させてるから貫通力はあるわよ！

『メグ……メグウ！？』

「う、うそ！メガニウム！」

案の定サイコマグナムはメガニウムの守るを撃ち抜いた。

で、出来た、サイコマグナム。こんな無茶な技、ユースケさんはよく考えついたわね。これを使おうなんてさっきまで思い浮かばなかったわよ……

それでメガニウムはというとサイコマグナムの直撃を受けて完全にダウンしていた。炎のパンチのダメージも結構効いてたからね。これが止めになつたみたいね

「メガニウム、戦闘不能！ルカリオの勝ち！よってコノ八選手の勝ちです！」

勝った……勝ったわよ！

「やったわねルカリオ！」

『うん、僕達の勝ちだね！』

わたしがルカリオにそう言つとりカリオが嬉しそうに喜んでわたしの元へ駆け寄ってくる。そんなところって本当にオーダイルに似ているわよねアンタは。

「コノハちゃん」

「あ、サクラ」

そうサクラがわたしの方へ向かってゆつくりと歩み寄ってきた。どうしたんだろ？

「コノハちゃん、わたしの完敗だよ……まさか最後の最後でアレなんてなあ……」

サクラも仰天だったと思うわよ。まさかサイコマグナムが登場するなんて思わないでしょうし

「サクラも随分やってくれたと思うわよ？進化なんて随分と大胆な事やってくれちゃって！」

そうわたしは返す。ムクバードの進化なんてホント読めなかったわよ……

「えへへ、私はコノハちゃんを見習わないとね。私にはコノハちゃんみたいに強気な攻めは出来ないからね」

それはわたしも同じよ

「わたしだってサクラみたいに器用な戦い方は出来ないわよ。変化

系の技を中心にどうしたらあそこまで戦えるか教えて欲しいくらいよ」

そうわたしはサクラに言う。

ピッピの時はもちろん、ムクホークの時もメガニウムの時も完全にサクラのペースに乗せられてたからね。

本当に勝てたのが奇跡って思うぐらいよ。そうわたしが言っているとサクラがニツコリと笑顔を浮かべて

「これからも一緒にもっと強くなるからね」

と言ってきた。そんなの当たり前じゃない。

「ええ、イツキとユウイチをビックリさせれるぐらいにね」

そう返すわたしも満面の笑みを浮かべた。さあ、次は3回戦よ！

## 逆極性な二人（後書き）

さて今回は書いているうちにとんでもない展開になった今回です。

コノハ「間違いなくそうよね。あれじゃ」

サクラの戦い方は以前から考えてましたが、なんか書いているうちにグダグダになってきていた気がします。新しい試みって難しいです  
すね……

次回予告

コノハ「勝ったわよイツキ！次はあんたの番よ！」

イツキ「前回のデジャブがなんか半端ないけどOKだ！このままいくぜ！」

ユースケ「って……イツキの対戦相手って！」

イツキ「相手がどうだからって関係ない！全力でぶつかるだけだ！

次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜  
『理不尽な強敵』次回もポケモンゲットだぜ！」

アブソル『アブウ！』

## 理不尽な強敵（前書き）

無事に第3回戦まで進出したイツキ。彼の相手とは？

ユースケ「嫌な予感がする」

では、どうぞ

## 理不尽な強敵

オレの正面にはどっからどうみても獯猛な格闘家ってイメージの人が立っている。

3回戦の相手らしいけど、この人もマサラタウン出身のポケモントレーナーらしい。確か、リョウトって言ったっけ？

昨日の抽選会でなんかユースケさんと揉めてたけど、確かランをあーだこーだって言ってたからユースケさんの恋敵って奴か。確かケインチさんが言ってた話だとランさんってスクール時代から結構モテたらしいからな。

ユースケさんには恋敵が多かったそうだ。で、その憧れのランさんを搔っ攫っていったのを根に持つ輩がいるみたいだ。それが目の前のリョウトって人みたいだな。

「……ムっ！お前、ユースケと同じ感じがするな」

そうリョウトさんが言うけど、その理屈が分からない。うーん、ユースケさんとは性格もバトルでの戦い方も全部違うような気がするけど、似てるねえ……

「間違いない……お前、天然タラシだろ！」

「ハア！？」

突然そんな事を言われてオレは思わず叫んでしまった。

おいおい、オレはそんな事してないって、ユースケさんとはもかく……女の人に会っても綺麗な人だとかスタイルがいい人だなんて思う程度で、口説こうだなんて一回もした事はないぞ！

「ユースケ、と似てる感じがするお前は好かん！徹底的に叩き潰してやる」

なんスカその八つ当たりはみたいなの、怨むぜユースケさん……

けど喧嘩を売られた以上は！

「上等じゃんか！そっちがその気ならこっちもその気だ！真っ向から相手してやる！」

こういう輩との戦い方は分かってる。

徹底的に攻めて敵の戦意を奪う。そうすれば頭を冷やすハズだ！

てか意味の分からない八つ当たりをされてイラついてるんだ。覚悟しやがれ！

「試合始めていいかな……いいよね？試合開始！」

何その諦めたようなコールは……きっとあのリョウトさんに呆れたんだろうなあ……

そくに違いない！

きっとオレは悪くないと思うんだ。うん



「いつくぜえ！アブソル、君に決めた！」

『アブウ！』

「カイリキー、Ready Go！」

オレはアブソル、それに対して相手はカイリキーだ。4本腕のいかにも怪力って雰囲気醸し出しているポケモンだ。

ちっ、相性は最悪だな。特性がノーガードだったら絶対絶命もいところじゃねえか。いきなり追い詰められたぜ

「先に攻めさせて貰う。カイリキー、ストーンエッジ！そこからそれを盾に突撃だ！」

『リツキイ！』

そうリョウトさんが叫ぶとカイリキーは拳を地面にたたき付ける。すると地面が砕け鋭い岩が浮き上がりそれはアブソルに向かって飛んできた。まずは特性を見極める！

「アブソル、電光石火でストーンエッジを避ける！」

『アブツ！』

そう指示を出すとアブソルは電光石火の加速を生かしストーンエッジの範囲から離脱した。

で、ストーンエッジは何も無い空間を通過していくだけだ。かわせたって事は特性はノーガードじゃない。根性か！

とりあえず特性は見定めた。だったらやることは一つだ！

「アブソル、もう一回電光石火だ！今度はカイリキーの懐に飛び込め！」

『アアブウー！』

『リキツ………』

アブソルは急加速してカイリキーの腹に体全体をぶつける。一瞬怯んだけど、全く効いてる様子が

「そつちからレンジに入ってくるとは好都合！カイリキー、空手チヨップだ！」

『リキイ！』

そこに容赦無くカイリキーのチヨップが迫る。

当たればアウト、だけど当たらなければそんなの！

「アブソル、そんなもん見切ってやれ！」

『アブツ！』

そんなオレの指示を聞いたアブソルは目を輝かせた。そして空手チヨップの一撃を体僅かにそらすだけの動きで回避した。ナイス回避だ。そこから行くぜ！

「サイコカッター！」

『アブウ！』

『リキ……』

カイリキーのどてっ腹にサイコカッターは炸裂したそこで後退するカイリキーだけど、逃すかよ！

「もう一丁食らえ！」

「カイリキー、空手チョップで受け止める！」

2体のポケモンの攻撃は激突する。

ウエイトが大きな分、アブソルをパワーで押し退けた。

くっ、相性はいい攻撃を指示してるんだけどなあ、あそこまでパワーがある相手だと単純な攻撃だったら逆に押されちまう。

まあ、アブソルもパワーがあるからどっちもどっちだけど、それでもウエイトの差がある以上はこっちが不利だ。やっぱりまともな格闘戦はマズイ？

「まだまだ、空手チョップだ！4本腕の利点を見せてやれ！」

『リキイ！』

そう隙の無い攻撃を仕掛けてくるカイリキー、4本の腕を連続で振

り回ってきて、こちらにたたき付けようとしてくる。

まさに容赦が無いってのはこのことだぜ。けど、そんなもんをまとも喰らってたまるか！

「アブソル、下がって回避だ。そこからサイコカッター！」

『アブ、アブウ！』

そのチョップを間一髪で回避したアブソルは大振りになりがちなチョップの間をかい潜ってカッターのようなトサカみたいなのをカイリキーにたたき付けた。それにカイリキーはのけ反る。

よし、効いてる！

だったらまだまだ行くぜ！

「もう一撃サイコカッター！」

「ビルドアップで受け止める！」

『リキイ……リッキイ！』

『アブウ！アブツ！？』

っ！？

サイコカッターの一撃は見事に入ったけど、ビルドアップをしていたカイリキーには決定打にならない。

そんでもって2本の腕に捕まってしまった。このままじゃ！？

「クロスチョップで止めをさせ！」

『リキイ！』

さらに上の2本の手が振り上げられた。どうする！？

とにかくなんか指示出しとけ！

「その、とりあえず相手をなんとか頑張れ！」

『アブ！？アツブツブー！』

！

そこで相手を挑発するようにアブソルはカイリキーに向けて舌をぺろっと出して子馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

するとカイリキーは顔を真っ赤にしてチョップを振り下ろした。やられる！？

『リキイ〜！？』

「な、落ち着けカイリキー！」

『アフウ……………』

振り下ろした手はカイリキー自らの手に突き刺さった。これは痛い……………

アブソルの奴、わざわざカイリキーを挑発してこれを狙ってたんだな。自信は無かったみたいでホっとしたのかため息を漏らしていた。ま、なんとかなったし結果オーライってとこだな。とりあえず次で決めるぜ！

「サイコカッター！」

『アブウ！』

『リ……キイ……』

追撃のサイコカッターの一撃が決まった。自らのクロスチョップを受けていたカイリキーにサイコカッターの 3 回目のダメージに耐えられなかったみたいだな！

流星に効果は抜群の攻撃をあれだけ受けて無事だったのは勘弁だったぜ……

「カイリキー、戦闘不能！アブソルの勝ち！」

試合終了のコールが掛かった。よし、先ずは一つとったぜ！

「よっしゃあ！アブソル、やったぜ！」

『アブウ？アブ……』

あり、なんか怒ってる……ソッポ向かれちまったよ。さっきの頑張ってたのがマズかったみたいだな。ま、一勝出来たしOKだ。

「悪タイプだからって油断したか。だがコイツでどうだ！エビワラー、Ready Go!」

『ワラワラー!』

そこで出てきたのは両手のグローブが印象的なエビワラーだ。確か格闘タイプのポケモンだったハズ……って相手は格闘タイプ使いつて奴か？

アブソルと相性最悪じゃん。どう戦う？

「試合開始!」

「行けっマツハパンチ!」

!?

そうしてる間にも試合が始まってしまった。

エビワラーはもの凄いフトワークでアブソルに突っ込んで来た。それを同じように電光石火を発動して寸のところ回避するアブソルは流石だと思う。よおし、反撃だ!

「行くぜ、サイコカッターだ!」

『アブウ!』

さっきまでの脹れっ面から一転、オレの指示に応えるようにアブソルは吠えた。

再び電光石火を発動して今度はエビワラーとの距離を詰める。これでも受けてみる！

「エビワラー、カウンターだ！」

『エビィー！』

！？

不意をつくようなそんな指示。サイコカッターで仕掛けたアブソルの一撃をカウンターを当てようとするエビワラー。マズイ！

『アブウウウー！』

「よせええええ！」

『ワラ……ワラー！』

オレの静止の叫びも虚しくアブソルはサイコカッターをエビワラーにたたき付け、エビワラーはそれを倍返ししてきた。くっ、アブソル！

「アブソル、戦闘不能！よってエビワラーね勝ち！」

そんなコールと一緒に駆け出していた。アブソルのパワーを倍にして返されるなんて堪ったもんじゃないよ！

「おい！大丈夫かよ！」

『アブ……アビィー』



目を回してなんか譎言たわごと言ってる……この様子だとそこまで心配いらないな。バトルは無理っばいけど。

「アブソル、よく頑張ったな。後は休んでくれ」

そうオレはアブソルをボールに戻した。本当によく頑張ってくれたな。相性が悪い相手ばかりにここまで善戦したアブソルの頑張りを無駄にする訳にはいかねえ！

なんとしても負ける訳にはいかない！

「次はお前だ！ピジョット君に決めた！」

『ピジョオ！』

オレは二つ目のボールから出したのはピジョットだ。相性はこっちが有利だし、数々の強敵を撃破してきたピジョットならならやれる！

「試合開始！」

再びスタートする戦い。行くぜピジョット！

「先手必勝！エビワラー、バレットパンチ！」

「っ！」

『ワラー！』

『ピ、ピジョ……』

先に仕掛けて来たエビワラー、弾丸のような加速で殴りかかってきた。

反応は遅れて指示は出せないが、ピジョットは自らの翼を盾のようにしてバレットパンチの攻撃をガードした。そのまま吹っ飛ばされるも地面に落ちる事なく体制を立て直し上昇した。

ふう、そこら辺のつつさの行動には本当に助けられるぜ。とりあえず反撃だ！

「ピジョット翼で打て！」

『ピジョッ！』

『ワッ……！？』

上昇して素早く旋回してエビワラーに素早く翼をたたき付ける。それでバランス崩したエビワラー。まだまだ、休ませると思うな！

「そこだ、電光石火！」

更に追い撃ちをかけるように電光石火を発動して高速で旋回し、その勢いのままエビワラーの顔面に足の一撃を浴びせた。

それにエビワラーはよろけてくれたのはありがたい。頭突きでもないのに相手が怯んでくれるのも美味し過ぎるってもんよ！

まだまだ行くぜ！

「そこだ、吹き飛ばしてしまえ！」

『ピジヨオ！』

『ワラー………』

そこで休ませる程オレはお人よしじゃない。強風を浴びせてピジヨットから距離を離してやった。

これでエビワラーから一々反転して距離を取る必要もない。このままいく！

これで、勝負だ！

「ピジヨット、ブレイブバード！」

ここまで崩したら小細工なんて必要無い。これで終わりだあ！

「エビワラー、見切れ！」

『ワラー……！』

『ピジヨット！？』

ギリギリでそれをかわしてくるエビワラーは流石だ。完全に崩したのこー！

けど、まだ攻め終わってない！

「エアスラッシュ！」

『ピジョ！』

そのまま上空に逃れたピジョットは華麗に振り返りエビワラーにエアスラッシュを放った。これでどうだ！

「突破しろ！スカイアッパー！」

『ワラー！』

「げえっ！」

こちらのエアスラッシュをもろともせずエビワラーが飛び掛かってきた。

『ピジョ……』

「ピジョット！」

無茶な攻撃に対応が間に合わないピジョットはスカイアッパーの直撃を受けて落下し始める。でも、オレの声が聞こえたのかなんとかピジョットはバランスを建て直し無事ですんだ。助かったな

「止めだ！落下の勢いを利用しながらメガトンパンチ！」

っ！

さっきとは逆の立場だ。休む暇をくれない。多分これを貰ったらそれでアウトだ。距離は殆どないから吹き飛ばしや電光石火じゃ間に

合わない。だったらこれしかない！

「ピジヨット、燕返しだ！」

『！……ピジヨオ！』

『ワラッ！？』

迫る拳がピジヨットに入る寸前に拳をすり抜けるようにかわし、エビワラーの背後にピジヨットは回った。

危な、燕返しは素早く敵の背後に回って絶対に一撃を決める技だ。回避の手段としてそれを使ってみたけどうまくいったみたいだな！

メガトンパンチを透かしたエビワラーは勢いよく地面に落下した。よし、これはチャンスだ。コイツで決めてみせる！

「終わりだ！ブレイブバード！」

エビワラーが地面が落下して起こった土煙でエビワラーは見えない。でもそんなのに気にかける必要は無い！

『ピジヨオオ！』

『ワ、ワラアアア！？』

「エビワラー！」

ブレイブバードは炸裂したのか土煙の中からエビワラーが吹っ飛ばされてきた。そして勝ち誇るようにピジヨットが土煙の中から飛び

出した。特性【鋭い目】の前じゃ土煙一つなんとも無いぜ！

「エビワラー戦闘不能！ピジヨットの勝ち！」

勝負が決した事を告げるコールが掛かった。よし、これで二つ目、次は……ドイツだ！

「エビワラー、よくやったな。流石に相性を付かれたら嬉しいか」

そう言うリョウトさんにはまだ余裕が見られる。ピジヨットはまだまだ余裕だつてのに、気に入らないな……

「ピジヨット、まだいけるよな？」

『ピジヨオー！』

そこでピジヨットに確認するとまだまだ行けると鳴き声を上げる。

よし、ピジヨットはまだまだ戦える！

「戦局を打破するにはコイツしかない！ヘラクロス、ゴオー！」

『ヘラクロス！』

！？

相手のリョウトさんが出してきたポケモンはカブトムシのような見た目をしたポケモン、ヘラクロスだ。タイプは格闘と虫、さつき相性があるだこーだ言ってた癖に飛行タイプに目茶苦茶弱いヘラクロスがラストかよ！

ただどそれ故に油断なんか出来ない。それだけ自信があるって事だからな……

「試合開始！」

試合開始のコールがかかった。よし、行くぜ！

「先手必勝だ！ブレイブバード！」

『ピジヨオ！』

「いきなりなんて攻撃を！？ヘラクロス回避だ！」

『ヘラッ……ヘラア……』

ちっ！

かわされたか、紙一重のところではピジヨットのブレイブバードは回避された。

しかしその風圧でヘラクロスはバランスを崩した。当たれば決まっていたけど、こんな単調な攻撃が決まる訳ねえか、でも後ろはとつたんだ。まだまだ行くぜ！

「そこだ！エアスラッシュ！」

休む暇なんて与えるかよ、ピジヨットはその場で振り返り翼を振るい空気の刃を放った。これで！

「ヘラクロス、飛べ！」

『ヘラア！』

そこで背中の翼を振るいヘラクロスは飛び上がりその攻撃を回避した。

ハッサムみたいにあんな小さな翼でも飛べるんだな。でも空中戦でピジヨットに勝てると思うなよ！

「そこだ！一気に距離を詰める！」

「させるものか！ストーンエッジ！」

『ピジヨオー！』

『ヘラア！』

接近するピジヨットに迎撃しようと無数の鋭い岩が迫りくる。だからって！

「電光石火で！」

『ピジヨット！』

ストーンエッジの攻撃を電光石火を使いあっさりと回避する。そして高速の体当たりを決めた。それにヘラクロスはバランスを崩した。まだ追撃を！

「翼で打つ攻撃だ！」



『ピジヨオー!』

オレの指示でピジヨットはまた仕掛ける。バランスを崩してるヘラクロスに翼をたたき付けようとする。効果は抜群のコイツなら!

「かわらわりで受け止める!」

『へラッ!』

翼で打つの一撃は簡単にかわらわりで受け止められてしまう。

くっ、あっさりかよ。かわらわりで弾かれたピジヨットは僅かに後退するがすぐに体制を立て直す。次の攻撃を!

「エアスラッシュ!」

「守るで受け止める!」

『ピジヨ!』

『へラッ!』

追撃の攻撃もあっさりとブロックされる。

近距離からのエアスラッシュもそうブロックしてくるなんて

「そこだ、ストーンエッジ!」

『へラッ!』

そうしてる間にもヘラク羅斯はストーンエッジで仕掛けてこようとする。回避は無理か……？

だったら！

「羽休めだ！体力を回復してダメージをごまかすせ！」

『ピジョ………』

そこでピジョットは翼を閉じて体力回復を図る。ストーンエッジは直撃したけど、羽休めを発動中は飛行タイプは消滅するようになっている。

だからノーマルタイプのピジョットにはそこまでのダメージにはならない！

翼を閉じていたピジョットは落下していくが、地面ギリギリで翼を広げそこで踏み止まった。

ピジョットもギリギリまで回復出来たみたいだな。ここからはんげいっ！？

「気合パンチで追い撃ちをかける！落下の勢いを使え！」

『ヘラァー！』

そうしている間にもヘラク羅斯がピジョットに迫ってきていた。ただでやれると思うな！

「オウム返し！」

『ピジヨット！』

ヘラクロスの気合パンチの攻撃をオウム返しで返そうとする。ピジヨットの翼はヘラクロスの拳と同じように力を蓄えそれを奮った。

『へラア！』

『ピジヨ！……ピ……ピ……』

「ピジヨット！」

オウム返しで迎え討ったのはいいけど落下の勢いとかヘラクロスの素のパワーの大きさであっさり押し負けて地面に勢いよく落下し、そのままの勢いで吹っ飛ばされてしまった。

強い、ピジヨット相手に出してきただけある！

「中々やるみたいだがここまでだな……」

そつりヨウトさんがいい、それと同時にヘラクロスはピジヨットの前に着地した。

キシヨー、貫禄ありやがるなあ……

でもどうするこの展開。どう足掻いても相手の思いつボな展開だ。下手に動いてもやられるだけだ。どうする……！

ピジヨットの目はまだ死んでるいない。アイツ、何か企んでるな。

そいつに賭けるしか無い！

「この展開でめ諦めてないか。だがこれで終わりだ！ストーンエッジ！」

！

ヘラク羅斯の目の前に鋭い岩が突如出現する。これが隙だ！

「やれ、ピジヨット！」

『ピジヨオー！』

『へ、ヘラツ！？』

「砂かけだと！？」

ピジヨットは自らの翼で砂を巻き上げ、その巻き上げた砂はヘラク羅斯の目に入りヘラク羅斯のストーンエッジは見事に外れてくれた。そしてピジヨットはわざと砂煙が起こるように大きく翼を奮い上昇した。ここで決着をつけてやる！

「ピジヨット、熱風だ！」

「ヘラク羅斯、来るぞ！守るを使え！」

『ピジヨオー！』

『へラツー！』

ピジヨットは上空から熱風を放つそれは土煙を軽々と吹っ飛ばし、土煙からはヘラクロスが姿を現した。守るを発動して熱風を完全にブロックしているけど、まだまだ攻撃は終わっていない！

「もつとだ！ピジヨット！」

『ピジヨオ！』

更に翼を強く奮い、熱風の威力は増す。守るはこんなんじゃ突破できはしないけど！

「く、時間切れか！」

『ヘラッ！？』

守るは連続では成功しにくい技だ。だから長時間の熱風からは守り通せなかったみたいだな。根競べはオレ達の勝ちだ！

「まだだ、堪えるを発動しながら突っ込め！」

『ヘラアアア！』

！？

な、なんとも馬鹿な事にヘラクロスは熱風の中を突き進んでくる。堪えるを発動してるからってなんて無茶を！

「そこだ、起死回生の一撃を叩き込め！」

「っ！ピジヨット、暴風を起こせ！これで完全決着だ！」

『ピジヨオオオ！』

『へラアアアア！』

ピジヨットは翼を奮いより強力な風起こし、暴風を放つ。

それにも負けず、起死回生を發動して突撃してくるヘラクロス、両者が激突しそうになる寸前にヘラクロスは停まる。暴風の威力でこれ以上先に進めないのか！

けど、それでもなおヘラクロスは進もうとする。多分このまま進めば起死回生が炸裂してヘラクロスの勝ち、このまま凌げばピジヨットの勝ちだ！

「行っけええええ！」

「うおおおお！」

オレもリョウトさんも吠える。激しい技の激突は続く。この勝負、勝つのはオレ達だああああ！

「もつとだ！ピジヨット！」

『ピジヨオオ！』

！

そうオレ達の叫び声に呼応するように僅かに、殆ど気付かないよう

なレベルだけど勢いが増した気がした。それと同時だった。

『へ……へラア……』

「へラクロス？」

そんなへラクロスの気の無い鳴き声が聞こえたと思うとそれが引き金になるようにへラクロスは暴風に押され始めた。それがどんどん押しして行きそして……

『へラアアアアア！』

「へラクロス！」

へラクロスは吹っ飛ばされ悲鳴を上げ、リョウトさんは叫んだ。これで決まりだ！

「へラクロス、戦闘不能！ピジヨットの勝ち！よってイツキ選手の勝ち！」

審判のコールがかかった。へラクロスは完全に伸びている。よし……

『ピジヨオ』

そう鳴きながらピジヨットはゆっくりとオレの隣に着地する。今ならコイツの言ってる事が分かる気がする。

「ああ、オレ達の勝ちだ！」

勝利した事を誇るようにオレは言ってやった。へへ、これで4回戦

進出だぜ！

「うおおおお！オレってユースケみたいなタイプに勝てないのか…  
…！」

と倒したりヨウトさんはうめき声を上げている。まあ、これは無視してと

今回は危ない戦いだったな。正直ピジヨットでガンガン押せていけなかったら多分ヘラクロスで負けてた。相性が良くなかったら確実に…

これからもつと厳しい戦いになる。そんな予感を本能的な何かでオレは感じた



## 理不尽な強敵（後書き）

今回は久しぶりにユースケの恋敵であるリョウトに登場してもらいました

リョウト「ユースケ！お前、ランと許さん！」

ユースケ「嫌な予感が的中だよ！僕は逃げるよ！」

という訳で今回はこの辺で失礼します。

## 次回予告

イッキ「またデジャブだけどコノハ、お前の番だぜ」

コノハ「ええ！次の相手、意地でも負けるわけにはいかない！最初から飛ばしていくわよ！」

イッキ「ああ、気合い入れていけよ！次回、ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEASON ～ 『コノハVSラン』 次回もポケモンゲットだぜ！」

ルカリオ『よろしくね』

## コノハVSラン（前書き）

今回はコノハ視点

憧れであり目標であるランと対戦することになったコノハ。コノハは憧れである彼女を超えることが出来るのか？

## コノハVSラン

……イツキ、また勝ち上がったわね。アイツなんだかんだで悪運はいいから今回もなんとか駒を進めてきた。本当にその悪運を分けて欲しいと思う。わたしの相手はあのランさんだ。

ランさんの強さは本当によく知っている。去年のポケモンリーグを見たときにその舞うようなバトルに憧れて、旅の最中に出会ってわたしの目標になった。

ヒワダタウンで戦った時は手も足も出なかったけど、あの時とは違う今回は勝つわよ。たとえ誰かに無理って否定されたって絶対に！

「行くわよ、ルカリオ、みんな！」

『うん、行くこう！』

そのルカリオの台詞をテレパシーで聞いたわたしはベルトを腰にセツトする。さあ、行くわよ！

わたしはゆっくりと控室のドアを開ける。緊張なんてしていない。うん、大丈夫、いつも通り戦えるわ！

それで会場に向かって歩いて行くけど……そこから歩いて来たのはイツキだ。勝ち誇った顔をして戻ってくるけど、なんか憎たらしいわね……

「イツキ、お疲れ様。一応おめでとぅって言って上げてあげるわよ」

そうわたしは言う。どうしても挑発的な言い方になるのは気持ちを  
ごまかしているから。

素直になれないのはなんでかしらね

「サンキュー！で、お前大丈夫なのか？」

大丈夫なのか？

って言葉は多分ランさんと戦う事を言っている。そんなの！

「当然よ！ちゃんと気合いも入れてきたわ」

「あ、そういえば違和感があると思ったらいつもの面倒なのがない  
な」

むう、面倒くさいって何よ。

わたしは、ポニーテールにして纏めていた髪を短く切った。分かり  
やすい気合い入れね。

「面倒って何よ！ま、いいわよ。これがわたしの気合い入れよ！」

「ああ、気合い入ってるみたいだな。んじゃ頑張れよ！」

そうとだけ言っただけでイッキはそのまま出口に向かって歩いていく。全  
く、相変わらずデリカシーないんだから。

さあ、おしゃべりはここまでにして行くわよ！

そう思ったらわたしは駆け出していった。打倒ランさん！

絶対に勝ってくるわよ！

バトルフィールドを挟んで向こう側に立っている少女、ランさん普段は凄いいおしとやかでやさしいランさんだけど、やっぱりいつもと気迫が違うわね。

やっぱりユースケさんといちゃついてるだけじゃなかったのね……

「コノ八ちゃん、髪切ったんだ」

「はい！似合ってますか？」

「うん、活発なコノ八ちゃんに似合ってると思うよ」

試合前にこんな緊張感の無い話をしていていいのかな？

まあ、こういうのがランさんらしいっていつかなんというか

「ありがとうございます。それじゃ勝負ですよ、ランさん！」

「いつでもいいよ。掛かってきて！」

そう返しつつも勝負を吹っかける。それを待ってたようにランさんはいつでも戦えるという意志を見せてきた。

「これよりコノ八選手とラン選手の試合を始めます。ルールは3対3のシングルバトルです。よろしいですね？」

審判がそう確認を取ってくる。そんなの！

「はい！」

そうわたし達は叫んで返す。お互いに気合は十分か、燃えてきたじゃない！

「それでは試合開始！」

試合開始のコール、行くわよ！

「行くわよ、ポニータ！」

「キュウゴン、お願い！」

わたしが素早くベルトからボールを取り出し、ボールを投げると出てきたのはポニータだ。

それに対してランさんはキュウゴン。あのキュウゴン、ラジオ塔の時までロゴンだったのに進化してたんだ。黄色の綺麗な毛並みに9本の尻尾の先に青い炎を燈っていてすごい綺麗に見える。

レベルの高さも凄いのが分かるけど、毛並みが凄い綺麗でコンテストの方に出しても行けそうな感じがする

「行くわよポニータ、電光石火！」

『ヒヒインー！』

先手を取るわよ！

ポニータは電光石火を発動してギザギザの軌道を取りながらキュウゴンに向かって行く。行け！

「キュウゴン、こっちも電光石火！」

『コオン！』

ランさんもキュウゴンに電光石火を発動させ、ポニータと反対にしたいだけの同じ軌道をとってきた。距離を詰めさせないつもり！？

キュウコンの特性は確か【貰い火】、一説には伝説のポケモン、グライドンと同じ【日照り】って特性のロコンもいるみたいだけど、ランさんのキュウコンは前大会でリザードンの炎攻撃を吸収してたから間違いなく【貰い火】……迂闊に炎技は使えない。

でもそつちだつて条件は同じよ！

こつちも特性は貰い火、炎攻撃なんて効かないわよ！

「キュウコン、エナジーボール！」

『コオン！』

先に仕掛けてきた！

キュウコンから放たれた緑のエネルギー弾。草タイプの技なんて！

「ポニータ、一気に距離を詰めるわよ！電光石火！」

『ヒビインー！』

わたしの指示でポニータは駆け出す。エナジーボールを撃つのに出来たその隙を狙う！

当たってもリスクは小さいからこのまま行ける！

「コノハちゃん、誘いに乗ったね！キュウコン、金縛りだよ！」

『コオン……ー！』



『ヒヒ！？』

「嘘っ！？」

電光石火で向かって行って行っていたポニータの動きが急に止まってしまった。金縛りで電光石火を封じられたの！？

「そこだよ！電光石火！」

『コオン！』

『ヒーン……』

動きを止めてしまったポニータにキュウコンは電光石火で仕掛けてきた。電光石火の直接攻撃か……ポニータは後退したけどダメージは大きくない。電光石火で来たって事は決定打が無いって事ね！  
だったら意表さえつけければ！

「まだまだよ！神痛力！」

「そこ、飛び跳ねてかわしなさい」

『！』

『ヒヒーン！』

ギリギリでキュウコンの念による攻撃をポニータは回避すり。続けて行くわよ！

「上から行くわよ！踏み付けてしまいなさい！」

『ヒヒインー!』

『コン……コオン!?』

「キュウコン!」

飛び跳ねるからの攻撃は見事に炸裂した。ポニータを視認しようとして見上げたキュウコンは太陽を背にするように跳んでいたポニータ、それで太陽を見てしまう形になって怯んでしまい、落下の勢いを利用した踏み付けが炸裂した。

これはラッキーね!

踏み付けられたキュウコンはまだ怯んでいる今のうちに!

「そこよ!催眠術!」

「キュウコン、神秘の守り!」

『ヒヒイ……!』

『コーン!』

ポニータは自らの目から催眠術を放つけどそれはキュウコンがとっさに張った銀色の膜のようなものに阻まれ消えてしまう。

異常状態狙いもカットされたか。お互いに決め手に欠けてるから不利とまではいわないけど

「まだよ！突進！」

「キュウゴン、神通力！」

『ヒヒウン！』

『コオン！』

キュウゴンの神通力を受けながらも強引にキュウゴンに突撃してキュウゴンを吹っ飛ばした。どんな不利な状況だって諦めないわよ！

「強いねコノハちゃん、でもあたしも負けたくないの！キュウゴン、頑張っつて、神通力！」

「それはこっちも同じよ！踏ん張りなさいポニータ、突進だ！」

『ヒヒイン！』

『コオン！』

ポニータにキュウゴンの念による攻撃は炸裂するが、それを無視してポニータはキュウゴンに突進した。

さっきと全く同じ展開、けどさっきより強力な突進が炸裂し今までのダメージが蓄積していたキュウゴンはダウンした。

それと同じく無理な戦い方にポニータもダウンした。ゴメン、ポニータ……

「両者戦闘不能！」

そんなコールがかかる。ポニータも目を回していたが、キュウコンも目を回していたみたいね。まだ有利とも不利とも言えないわね

「ポニータ、無茶させてゴメン！アンタの頑張り無駄にはしないわよ！」

その声を掛けつつもポニータをボールに戻した。次のポケモンはどつする？

「ここはこの子で行くわよ！」

「シャワーズ、アンタの力を貸して！」

「行こう、エーフィ！」

『『ブイ〜！』』

そこでわたしが出したのはシャワーズだ。それに対してランさんは薄い紫色の猫のような見た目のポケモン、エーフィだ。シャワーズと同じくイーブイから進化したポケモンでエスパークタイプ。

確か前大会のカシスさんとのバトルで活躍したポケモンよね？

何をしてくるか分からないけど注意しなきゃ

「試合開始！」

試合開始のコールが掛かった。さっきと同じで先に仕掛けるわよ！

「エーフィ、サイケ光線！」

『ブウイ！』

つてわあ！？

「シャワーズ、オーロラビーム！」

『ブイ！』

そんな事を思ってると思えば先に仕掛けられた。本当にスピード勝負でくるわね。けど、相殺したわよ！

「一気に距離を詰めるよ！電光石火！」

『ブイ！』

更にランさんが攻め込んでくる。スピードと戦術、ランさんの得意分野だったわね。でもやらせない！

「シャワーズ、白い霧よ！」

『ブイ！』

そうシャワーズに指示を出すとシャワーズが吠え、体全体から白い霧を放出しだした。これで視界を悪くすれば！

「隠れたって！エーフィ、スピードスターだよ！」

『ブイ！』

「シャワーズ、くるわよ!？」

『ブイ……』

そんなランさんの指示で霧に巻かれたエーフィはスピードスターを放って来たみたい。それはシャワーズに命中したみたいで少し鈍い鳴き声をシャワーズは上げた。視界を封じてもそんな手で来るなんて聞いてないわよ!

でも嘆いてばかりいられない。これが駄目なら次の手よ!

「シャワーズ、濁流よ!」

『ブイ!』

わたしの意志を理解した如くシャワーズのさっきいた場所から強力な水しぶきの音が聞こえた。そしてその水しぶきは霧を吹き飛ばしてバトルフィールドをうめつくす如く波となった。霧がアダになるなら吹き飛ばすだけよ、ついでにダメージだって与えるんだから!

「エーフィ、光の壁を張って!それから瞑想で凌ぐよ!」

『ブイ』

そんなランさんの指示が聞こえる。案の定霧は吹っ飛ばす事が出来た。けどそこまでエーフィにはダメージを与えていない。

しっかりとブロックしてきたから当然か。でもまだまだ攻めるわよ!

「ハイドロポンプよ！」

「エーフィ、堪えて！」

『ブイイイ！』

『ブイ………』

シャワーズの強力な水流はエーフィに直撃した。しかしエーフィは後退しない。多分さっきの光の壁の影響だけど、守りに徹してる以上こっちに負ける要素は無いわ！

「このまま受け身になってちゃ駄目！エーフィ、サイコキネシスを使って！」

『イ………ブイイ！』

このままじゃ駄目なのをランさんも当然分かっていたみたいでそんな指示を出してきた。そんな手を使ったって！

『ブイ！？』

へ？

「嘘お！」

思わず声を上げてしまった。だって、ハイドロポンプの水流をサイコキネシスで反らすなんて……

「瞑想の力を甘く見すぎだよ！電光石火！」

ハイドロポンプの攻撃を退けたエーフィはシャワーズにまた電光石火で向かって来る。何度来たって！

「シャワーズ、もう一度濁流で吹き飛ばしなさい！」

『ブイイ！』

また吹き荒れる濁流。それはまたエーフィを飲み込もうと迫っていく。もう一度喰らいなさい！

「っ！また！エーフィ、サイコショック！」

『ブイ！』

今度は相殺を狙ってきたみたいだけど濁流の勢いはそれ程度では止めれない。サイコショックのエネルギーは濁流にそのまま飲み込まれた。貰ったわよ！

「エーフィ、光の壁を張ってからシャワーズに狙いを定めて！」

『ブイ！』

な、何をしてくるつもり！

「力を振り絞って！破壊光線！」

『ブイ……ブウウイ！』

ええ！？



このタイミングで破壊光線！

濁流を受け止める覚悟で放って来たっていうの！

そんなの！

「苦し紛れの攻撃なんて！シャワーズ、溶けて回避して！」

『ブイ！』

「避けられた!?!」

起死回生のエーフィの破壊光線の一撃はシャワーズが溶けてあつさり回避出来た。そしてエーフィは濁流に巻き込まれる。まだよ、ハイドロポンプで！

「ハイドロ……え……」

『ブイ!?!』

さっきまでそこにいたハズのエーフィはそこにはいなかった。

嘘でしょ！

いくら破壊光線を撃って無防備になっていたってあのエーフィがあれで流される訳……まさか！

「シャワーズ、下から」

「気づくのが遅いよ！エーフィ、穴を掘る攻撃！」

『ブイイ！』

『ブイ！？』

そこでランさんのエーフィは地面からシャワーズに襲いかかってきた。あの破壊光線自体がブラフだったっていうの！？

濁流をの攻撃は確かにこちらの視界も奪っていたから隙を与えない攻撃は出来なかった。

その間にこんな手で来るなんて！？

でもダメージは大きくない、まだやれる！

「シャワーズ、ハイドロポンプで終わりにするわよ！」

『ブイ！』

吹っ飛ばされたシャワーズは空中で体制を整えそのままハイドロポンプを放った。それは穴を掘るを炸裂させた状態のエーフィは回避が間に合わない。今度こそ！

「サイコキネシス！」

『ブイ！』

あ！

わ、忘れてた！

ハイドロポンプはサイコキネシスでまた方向をそらされあらぬ方向へ曲がってエーフィには当たらない。そしてそこでエーフィの赤い宝石みたいないな部分に怪しくオレンジ色のエネルギーが集まり始めた。これって……

「空中なら避けられないよね？破壊光線！」

「ランさん勘弁して！」

そう言ってる間にも破壊光線のエネルギーは溜まっていく。ど、ど、どうしよう！

避ける方法なんて本当に何も無いじゃない！？

「今の台詞、降参ってとっていいよね？」

「え、あ、はい」

あ、あれ？

ランさんは笑顔で聞いてくるけど、なんか嵌められたような……

『ブイ？』

「あ……」

破壊光線のオレンジ色のエネルギーは突然小さくなって拡散した。それからシャワーズはそのまま落下して尻餅をついた。あ、あれ……

…？

「コノ八選手の棄権宣言につき、シャワーズの棄権！よってエーフィの勝ち！」

え、は、嵌められた！

「ラ、ランさんずるいですよ！」

「ハツタリに騙されるコノ八ちゃんが悪いんだよ。ね、エーフィ？」

『ブイ〜』

そうエーフィにランさんが問い掛ける。それにエーフィが頷くけど……わああん、ずるいわよお！

『ブイブイー！』

あ、なんかシャワーズがわたしに怒ってるし、り、理不尽よお！

「ごめん！本当にごめんって！話は後でね！」

『ブ・』

そう文句を言いそうなところを強引にボールに戻した。うっ、後でシャワーズと話すのが怖いんだけど……

「ランさん、やっぱり強いですね。だけどわたしだって負けたくは無いですよー！」

ズルイとは思ったけど、やっぱりそれを抜きにしてもランさんは強い。技量の差がどうしても見えてしまう。けどね！

「ルカリオ、アンタが頼りよ！思う存分暴れて来なさい！」

『任せて！』

そうわたしは最後のボールを投げた。もちろん出てきたのはルカリオ、頼むわよ、アンタの力を信じるわ！

「試合開始！」

試合開始のコールが鳴る。今回は慎重に行こうかしら？

「コノハちゃんも全力で来るのなら、あたしもそれに応えないとね。イーフィ、バトンタッチ！」

『ブイ〜』

そうイーフィが鳴くとイーフィは自らのボールに戻っていく。

バトンタッチはパワーアップやパワーダウンしたのをそのまま次のポケモンに引き継ぐ技。もちろんあのポケモンでくるわよね……

「ありがとうイーフィ、それじゃ行くよ、ピカチュウ！」

『ピッカ！』

もちろんラストに出てきたのは黄色の電気鼠……ピカチュウだ。ランさんのパートナーで、その電撃の威力は本当に洒落にならない。

瞑想でパワーアップしてるから余計に、どう戦おうかしら？

ハハ、さっきは慎重にって思ったけど、やっぱり性に合わないわね。いつも通り先手必勝で行くわよ！

「ルカリオ、神速！」

そんなわたしの指示でルカリオは駆け出す。素早い動きで一気にピカチュウに向かっていく。まずはこれで行くわよ！

「ボーンラツシュ！」

『はあああ！』

そうルカリオは叫ぶとルカリオの手には長いコンのようなものが出現し、それをピカチュウに目掛けて両手で振り回した。当たれ！

「ピカチュウよけて！それからかわらわり！」

ブンブンと振り回すルカリオのボーンラツシュをピカチュウはバツクステップをして華麗に回避する。そして大振りになった瞬間にピカチュウは飛び込んで来てコンの中央を叩き割って来た。

これで重い一撃は狙えないか……けど！

「ダブルボーンラツシュよ！」

『うおおおー！』

『ピカア…』

2つに別れたコンをルカリオは更に振り回す。ピカチュウはそれを伏せたり跳んだりしてかわしているけど当たるのは時間の問題よ！

「電光石火で後退して！それから10万ボルト！」

『ピッカ！チャアア！』

そこでピカチュウは荒業をしてきた。ルカリオの懐に飛び込みその胸を電光石火の脚力を使って蹴りその勢いで強引に後退した。そのせいでルカリオもバランスを崩して！

や、やるわね。けど、10万ボルトまで貰わないわよ！

「ボーンラツシュで切り払って！そこから距離を一気に詰めて！」

『ハア！たあ！』

バランスを崩しつつも迫る電撃を2本に別れたボーンラツシュを振り回し、電撃を切り払った。そしてそのまま一気に距離を詰めていく。

「やらせない！ピカチュウ、放電だよ！」

『ピイカアア！』

『っ！？』

！

ピカチュウは広域に体から電撃を放つ。それをリカリオはボーンラッシュでなんとかブロックしてみせた。距離を詰めさせないつもり！

ルカリオはさつきからボーンラッシュで電撃を払ってるって言うてもダメージが完全に無い訳じゃない。地味にダメージは受けてるのよ。このままだとじり貧ね……だったら！

「ルカリオ、投げつける攻撃よ！それから波動弾！」

『てりゃ！行けっ！』

せう器用に左手でコンを投げてから波動弾を放つ。コンに当たってくれる訳がないのは分かっている。あっさりと回避されてしまった。でも目の前には波動弾、どう対抗するつもりかしら？

「そこから神速よ！」

さらに指示を出し、ルカリオが距離を詰めはじめる。3段階えよ、一気に決めるわ！

「ピカチュウ、10万ボルトで撃ち抜いて！」

『ピイカアチユウウ！』

ギリギリまで迫っていた波動弾をピカチュウは10万ボルトで相殺しようとしてくる。激突時の爆発を煙幕がわりに使えば！

二つの技は激突し、そのまま爆発を

『わああー！』



するどころか完全にパワー負けして撃ち抜かれた!?

あわわ、ギリギリルカリオには当たらず無かったけど。瞑想でパワーアップしてるの忘れてたわよ。

でそこでルカリオは足を止めてしまう。ギリギリ回避するためには仕方ないけど、それは危ないわよ!

「ピカチュウ、そこだよ!雷パンチ!」

『ピイッカ!』

『うわっ!?!』

隙を見つけてピカチュウがルカリオの懐に飛び込んで雷パンチを決めて吹っ飛ばしてきた。

う、流石に手強い。また距離を取られた。このままじゃ……

「ピカチュウ、ライトニングシャドー!」

『ピイッカ!』

!

距離を取られて焦っていると押し込むようにランさんは指示を出してくる。

ピカチュウが思いっ切り放電したかと思うとピカチュウの隣に4体

のピカチュウが立っていた。

ライトニングシャドー、確か電気エネルギーを消耗して4体の分身を作り出す技。普段は充電してから使う技だけど、充電無しって事は素で電気エネルギーを消費してやってるの!?

休む暇なんてくれないつもり!?

「いくよ!ロケット頭突き4連発!」

『ピカアア!』

分身のピカチュウ達が吠えた。そしてロケット頭突きでピカチュウはルカリオに突っ込んできた。それを囿に何かするつもりでしょうけど、そうはいかないわよ!

「ルカリオ、まとめて吹っ飛ばしなさい!気合玉!」

『行っけええ!』

そうルカリオの手の間に気合玉が完成し、それをロケット頭突きで突っ込んできたピカチュウに直撃された気合玉は爆発を起こし回りの分身も吹っ飛ばした。

どお!

あんまり甘くみちゃ駄目よ!

「そこよ!ルカリオ、神速で」

『っ！？来たっ！』

え？

「わあっ！？」

ルカリオが察知したのは爆発の中から飛んできた雷だった。本物が身代わりを囮にして雷を撃ってきた。

あ、危なかった……今はルカリオが咄嗟に見切りを使ったから助かったけど、ぎりぎりね。でも避けれたならチャンス！

電気エネルギーを大きく消費してる今なら！

「ルカリオ、神速！」

「今を避けて来たの！？ピカチュウ、大丈夫！」

『うおお！』

『ピカア……………』

高速でピカチュウにルカリオが迫り右手に持ってたコンを振り回す。なんとかピカチュウは避けるけど電気の使いすぎたのかどこかゲツソリしている。

まだまだ！

「はっけい！」

『ハア!』

『ピカ……』

「ピカチュウ!」

はっけいを受けて大きくピカチュウを弾き飛ばす。行ける!

次で決着を!

「ルカリオ、全ての力を右手に集めて!」

『うわああああ!』

そこでエネルギーをルカリオは溜めはじめた。これで、終わりよ!

「神速で一気に距離を詰めて、そこからサイコマグナム!」

『はあああ!』

一気にピカチュウにルカリオに近づいて行く。受けてみなさい!

「その技にだけは当たれない!ピカチュウ、波乗り!」

『ピカ、ピカア!』

っ!

ピカチュウが不意をつくように地面に手をつけると大きな波が起こつてそれに乗りルカリオに向かってきた。な、波乗りピカチュウ!?

電撃をほとんど使えないからって油断してた。その手が残ってたなんて！

神速で向かっていったルカリオはピカチュウの波乗りを回避は間に合わない。波に巻き込まれてルカリオは流されてしまう。完全にわたしのミスよ！

ルカリオ、大丈夫かしら？

「大丈夫ルカリオ！」

『波に飲まれたぐらいじゃ……』

波に飲まれ吹き飛ばされたルカリオはノツサリと立ち上がる。大丈夫、またやれるみたいね。

そういえばピカチュウはどこに、ルカリオを吹っ飛ばしたところまでは見てただけど……ええっと、バトルフィールドにはいない！？

どこに行ったの！？

あれ？

いまポツって何かが頬に当たった気がする。すると微弱ではあるけど雨がバトルフィールドに降り出して来た。わたしは嫌な予感感じて空を見上げると

「ピカチュウ、準備いいよね？」

『ピカア!』

え、わたしが上を見上げるとそこにはピカチュウの姿が……電磁浮遊で飛んでるみたいだけど、波乗りをしながら少し充電してたのね。でも少しっただけならあんなビリビリしてないと思うんだけど、わたしがルカリオとやり取りしてるうちにちゃっかり電撃を溜めてた訳!?

それから雨乞い……スツゴい嫌な予感するんだけど!

「これで決めるよ!雷!」

『ピカアチユウウウ!』

溜め込んでいた電撃の威力は絶大だ。それは上空からルカリオに向かって落ちて来る。回避を!

「ルカリオ、神速で回避!」

『く……!』

迫る雷をルカリオは高いフットワークを生かして回避した。しかし

「えっ!」

『なっ……!』

雷は地面に落ちる寸前に曲がりルカリオに向かって来た。そっか、

雨の中の雷って回避が……

『逃げ切れない……くそおおお！』

「ルカリオ！」

見事に雷はルカリオに炸裂した。そんな、雷の直撃を受けたルカリオはそのままダウンした。その目は完全に目を回して……うっ！

「ルカリオ、戦闘不能！ピカチュウの勝ち！よってこの試合ラン選手の手勝ちです！」

勝負を決まった事を告げるコールが掛かった。わたし、負けたのね

……

「ルカリオ、ありがとう……」

そうわたしはほぼ無機質な感じで言うてからルカリオをボールに戻した。

「コノハちゃん……」

そうピカチュウを抱き抱えたランさんがわたしに声を掛けてきたけど……

「ランさん、わたしの負けです。やっぱりランさんは強いですね」

そうとだけ言うて出口に向かって駆け出していた。ハア、わたし何やってるのかな……？

「コノハ」

控え室に戻り、撤収の準備をして部屋から出たところに行ったのはイツキだった。珍しい、心配でもしてくれたのかしら？

まあ、どうせサクラのお節介だと思っけど……

とりあえずあんまり酷い顔は見せたくない。だからわたしは無理矢



理笑顔をつくつてみせた。

「アハハ……負けたわよ。やっぱランさんは強いわ！」

つて言ってみせる。ごまかせたかしら？

「ハア、お前なあ……」

そうイツキは呆れたと言わんばかりの表情で言う。あ、あれ？

ごまかせて無かった？

「いつも勝ち気で意地ばっかり張ってて負けず嫌いでどこか泣き虫でメルヘンチックなお前がな、ポケモンリーグっていうでかい舞台で憧れであり目標だった相手に負けてそんなヘラヘラしてる訳ないのは分かってるんだよ！」

っ……！

イロイロ余計なのがついてた気がするけど……なんでよ、普段は鈍チンの癖になんで分かってるのよ！

さつきから我慢してた何かが目からこぼれ落ちた気がする……

「オレってさ、頼りないけどたまには頼っていいんだぜ？」

イツキ！

「イツキ、ちょっとだけ我が儘聞いて貰うわよ……」

そう言ってわたしはイツキの胸に体を預けた。ゴメンイツキ、シャツを濡らしちゃうわ……

多分、ていうか絶対酷い事になると思う。

「ハア、仕方ないなあ。泣き止むまでこのままできてやるよ」

そう言ってイツキはわたしの背中をまるで慰めるかのようにポンポンと軽く叩いてくれる。

こんなところはサクラはもちろんカシスさんとかモミジ、それに優しいけど毒舌なあの子には見せられないなあ……

でも、今はこのまま甘えていようとわたしは思った。

## コノハVSラン（後書き）

### 次回予告

イツキ「4回戦にコマを進めたオレの相手はユウイチ、へっ！あのバカ相手なら楽勝だな！」

サクラ「イツキ、そんなこと言ってるけどゆるいちはそんな弱くないよ？」

イツキ「げっ、サクラがそう言うのならやばいかも。ま、オレはいつも通り全力を尽くすだけだ！次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜「仲いい二人は喧嘩する？」次回もポケモンゲットだぜ！」

ブースター「バイバイ！」

仲いい二人は喧嘩する？（前書き）

無事にリョウトを撃破し、準々決勝にコマを進めたイツキ。

そこで彼を待ち受けていたのは……

仲いい二人は喧嘩する？

「イツキが相手って言うんだったら楽勝だな。ちゃちゃっと挑発してこちらのペースに持ってってこの勝負はゲームセットだ！」

「……………どーだか？サクラがないと残念な【ゆるいち】にどこまでやれる事やら？欠伸びながらも勝てると思うぜ」

……

「お前とは雌雄を決する必要があるそうだな……………」

「ああ、奇遇だな。オレも同じ事を思ってたぜ……………」

睨み合うレックウザとライコウ、ザングースとハブネーク、その他色々……………って感じた。

オレの目の前、厳密にはバトルフィールド越しにだけユウイチが立っている。ポケモンリーグ第4回戦……………相手はユウイチだ。

口ではあんな事言ってたけどアイツにあっさりと勝てるなんか一切思っちゃいない。きっとアイツだってそう感じてるハズだ。どうやって勝とうか？

いや、頭を使った頭脳戦だったらどう逆立ちしたって勝てない相手だ。小細工は抜き、真っ向勝負だ！

「これより、イツキ選手対ユウイチ選手の試合を始めます！ルールは3対3のシングルバトル、それでは試合開始！」

試合開始のコールが掛かった。それと同時にオレ達は動く、素早くベルトに手を回し、ボールを一つ取ってそれを投げた。頼むぜ！

「ハッサ……」

『ブイ！』

「行くぞ、エアームド！」

『キャシィン！』

……普通にボールを間違えた。こんな土壇場でオレは何をやってるんだ。とりあえず行くぜ！

「ブースター頼むぜ！」

『ブイブイ！』

そうオレはブースターを激励するように言う。間違っても間違っても出したなんて言えないよな……

「くっ！読まれてたのか！イツキの癖にやってくれる！」

……ユウイチにも実はって感じでは言えないよな。ま、いいやこのまま行くぜ！

「甘いぜユウイチ！お前の思考なんてお見通しだ！」

「そうかい！エアームド、鋼の翼だ！」

『キシヤア!』

『ブイツ!』

そう自慢気に言ってる間にもユウイチ達は攻めてくる。エアームドの急降下してブースターに遅い掛かってくるが、それをブースターはジャンプで軽く回避する。

よし、いいぞ!

「油断も隙も無しかよ! 火炎放射だ!」

「旋回しつつも回避だ! そこからスピードスターで段幕を張れ!」

『ブイイイ!』

『キシヤアア!』

火炎放射をブースター放つが、方向転換する動きでそれを利用して回避してきたあげくにスピードスターで攻撃してきた。

くそっ、やらせるかよ!

「ブースター、穴を掘る!」

『ブイツ!』

ブースターは地面に潜る事でなんとかスピードスターを回避した。危な、けどここから反撃だ!

「上がってすぐに火炎放射！」

穴を掘って別の場所からブースターは飛び出す。それはエアームドの真下だ。そして火炎放射での攻撃だ。受けてみやがれ！

「っ……回避しつつも急降下して鋼の翼！」

『ギシヤ……ギシヤイ！』

火炎放射はエアームドは捕らえていたが、それを掠る程度で済ませたきたのは流石だ。そしてまたブースターに迫ってくる。そうかよ！

「もう一回穴を掘る！」

『ブイ！』

そう迫ってくるエアームドの攻撃を穴を掘って回避した。空中戦やつてくるなら地中戦だ！

「穴の中から火炎放射！」

「上昇して回避しろ！ちっ！イッキめ、ディクダ叩きでもやらせるつもりか！」

『ブイ！』

『ギシヤ……』

直撃は避けられたものの、また攻撃は掠めた。おしい！



でも次は直撃だぜ！

「もう一回火炎放射だ！」

『ブイブイ！』

また別の穴を開けてイーブイは姿を現す。そしてまた火炎放射でエアームドを狙う。当たれ！

「高速移動だ！そこからスピードスターでブースターを狙え！」

『キシヤア！』

遠距離からの火炎放射の砲撃はあっさりと回避されてしまう。ユウイチだったらまた近づいてくる。そこを狙えば！

「もう一度穴に潜れ。とりあえずやり過ぎすぞ！」

そうオレは指示を出し、ブースターは穴に潜りスピードスターをやり過ぎした。よし！

「ワンパターンなのは相変わらずだな！エアームド、そのまま手頃な穴に接近しろ！」

『ギユイ！』

！

なに、わざわざ近づいてきた！？

だったらこつちもやりやすい。火炎放射で！

ギリギリまで引き付けて……今だ！

「来たぞ！羽の音がする穴から火炎放射！」

穴に近づいてきたエアームドにブースターもその穴に近い場所に火炎放射を撃つように指示を出す。その時だった！

「これで終わりだイツキ！金属音！」

『ギイイイ！』

そう吠えたかと思うとエアームドは金属が擦れるような嫌な音を穴に向かって発し始めた。

くっ、耳が痛い……でもどうしたんだブースターの奴。火炎放射を放たないけど、いくら嫌な音を聞かされたからって……

「イツキ、音つてさ、狭い場所だと反響してやたらと響くんだよな。それがさ、万が一耳をつんざくような音だったらどうなると思う？」

えつと……ハイ？

「だあああ！ブースター、大丈夫かあ！」

そうユウイチに言われてオレは叫ぶ。ユ、ユウイチの奴なんて事してくれるんだよ！

『ブ、ブイ……』

「ブースター！」

穴からのっそりとブースターは姿を現した。うわあ、凄いゲッソリしてる。

「おい、大丈夫かよ！」

『ブイ……』

「ブースター、戦闘不能！エアームドの勝ち！」

そこでブースターは首を横に振ったかと思うとその場で目を回してダウンした。ユウイチの奴、ブースターを一回の攻撃？

で倒すなんてやってくれる！

「わりいブースター、オレの判断ミスで辛い思いをさせちゃって……後は休んでくれ！」

そうオレはブースターをボールに戻した。くっ、このまま引き下がる訳にはいかない！

何よりこのままユウイチを調子に乗せる訳にはいかない！

ほら、今だって勝ち誇った顔してるしさ……

「野郎、次はそうはいかないぜ！ピジョット、君に決めた！」

『ピジヨオ!』

そこでオレが出したのはピジヨットだ。空中戦ならオレだって出来る!

「ピジヨットか……それぐらいでエアームドを止められると思うな!」

「舐めるなよ!コイツだって強敵を倒してきたんだ。エアームドぐらい倒してやる!」

『ピジヨオ!』

オレはそうピジヨットを鼓舞するように言うと、ピジヨットは吠え、戦闘体制をとった。一気に決めてやる!

「試合開始!」

試合開始のコールがかかる。行くぜ!

「ピジヨット!電光石火で一気に距離を詰めろ!」

『ピジヨオ!』

高速でピジヨットはエアームドに向かっていく。まずは距離を詰める事だ!

「無駄だ!吹き飛ばしで距離を詰めさせるな!」

『ギユイイイ!』

そんなユウイチの指示でエアームドは強風を起こしピジヨットを吹き飛ばそうとする。

その強風に電光石火で飛行していたピジヨットは徐々に押されてきてるけど……負けてたまるかよ！

「まだまだ！ブレイブバード！」

『ピジヨオー！』

『ギユイー！？』

「バカか！？」

そう指示を出すとピジヨットはそこでブレイブバードを発動し、強風の中突き進んでいった。パワーで押し切ってやる！

「うおおおおー！」

『ピジヨオオオー！』

『ギユイツー！？』

「っ……ゴールド先輩かよお前達は！」

吹き飛ばしの強風をピジヨットは押し切った。そしてエアームドにブレイブバードを炸裂させ、エアームドを弾き飛ばした。まだまだ！

「へへっ！あの人の後輩だから仕方ねえだろ！ピジヨット、こっち

も吹き飛ばしだ！」

『ピジヨオ！』

『ギユイ……………』

そう休む暇なんて与えない。バランスを崩しているエアームドに強風を浴びせ、さらに追い詰める。まだまだあ！

「ゴッドバードだ！地面に叩きつけてやれ！」

「くっ、エアームド、体制を立て直せ！」

『ピジヨオ！』

『ガユツ……………』

体制を立て直すように指示するユウイチだがもう遅い。ゴッドバードはバランスを整えたころにはエアームドを捕らえていた。その一撃の勢いに任せ、地面に向けて突撃していく。これなら！

「自滅するつもりか！エアームド、鉄壁を使い！自殺行為に付き合っ  
つてられるか！」

『ギユツ……………ギユイ！』

「ピジヨット、ギリギリで離脱だ！」

『ピ、ピ、ピジヨオ！』

無茶な加速で地面に向かっていったピジヨットだが、ギリギリのところでエアームドを放して離脱した。ギリギリ過ぎて超低空飛行をしたのちまた上昇する。

一方エアームドは地面に高速でたたき付けられ大きなダメージを負ったみたいだ。いくら鉄壁でも今のは効いたみたいだな！

「くっ、エアームド、大丈夫か!？」

『ギシイ……』

そうユウイチの問いに答えるエアームドは辛そうだ。けどまだ戦意は消えちゃいない。なら、その戦意も確実に叩き折る！

「止めだ！熱風だ!」

『ピジヨオオ!』

「エアームド!」

強力な熱風の一撃、効果は抜群の一撃は決定打になった。それによりエアームドは目を回している。決まったぜ！

「エアームド、戦闘不能！ピジヨットの勝ち!」

「やったなピジヨット!」

『ピジヨ』

そうピジヨットはオレの言葉に嬉しそうに頷く。へへっ、流石はピ

ジヨット、頼りになるぜ！

「イツキめ、中々やってくれるな！」

そう言うユウイチは少し嬉しそうに見える。それはオレの台詞だけ

「そっちこそ相変わらず強いな。流石はユウイチだけ」

そう返すオレ。ユウイチはいつもオレより強かった。スクールの時からずっと……だからこそこんな台詞が出たんだと思う。

「お前からそんな台詞を聞くんなんて思ってたよ！オレの2番手はコイツだ！ゴルダック、頼むぞ！」

『ゴルダック！』

そうユウイチがボールを投げると姿を現したのは水色の河童を連想させられるポケモン、ゴルダックだった。コイツは強敵だけ！

「へっ！強いつてのは認めるけどそう簡単に勝てるだなんて思うなよ！行くぜ、ピジヨット！」

『ピジヨット！』

そうピジヨットはオレの台詞に呼応するように鳴く。試合開始のコールを待つ。まだか、まだかっ！

「試合開始！」



心配のコールが掛かる。ユウイチ、ここからが本番だぜ！

仲いい二人は喧嘩する？（後書き）

という訳で今回のユウイチ戦は前後編になります。

コノハ「なんていうか、ユウイチがえぐい……」

サクラ「流石にこれは後でゆっくりいちにお説教しないと駄目かも」

っそんなこんなで次回に続きます。

ここからが本番！イッキVSユウイチ（前書き）

お互いにポケモンが1体倒され互角の勝負なイッキとユウイチ。幼なじみ対決はどっちが勝つのか？

ここからが本番！イツキVSユウイチ

「ピジヨット、電光石火だ！」

「ゴルダック、アクアジェット！」

『ピジヨオ！』

『ダアアック！』

互いに最高速を発揮して正面から激突した。その勢いは凄まじくお互いに後退する。追撃、行くぜ！

「ピジヨット、そこでエアスラッシュ！」

『ピジヨット』

オレの指示でピジヨットは空気の刃を放つ。それをゴルダックは面倒臭そうにガードしてきた。

近距離からの攻撃だけど、流石にそれが致命傷になる甘くないか！

「イツキ、そんな迂闊な攻撃でなんとなかると思うなよ！渦潮だ！」

『ゴルウー！』

！

そんなユウイチの指示でゴルダックは両手を空に翳したかと思うと

そこに水で出来た渦が現れた。げえ！

あれに当たったら動きが止まっちゃうぞ！？

「ピジヨット、距離を取れ！」

『ピジヨ……………』

「遅い！」

『ダアアック！』

近距離でエアスラッシュを撃たせたのがまずかった。隙だらけのピジヨットは渦潮に飲み込まれてしまった。マズイ！

「野郎！ブレイブバードで渦潮なんてぶった切ってやれ！」

『ピジヨット！ピジヨット！』

ブレイブバードを無理矢理渦潮から抜け出そうとするけど渦潮から抜け出せない。くっ！

なんて拘束力だよ！

「貰った！吹雪だ！」

『ゴルウ！』

げえっ！

拘束されてるところに吹雪だつて！

渦に水をジワジワと氷始める。ここは凌ぐしか……

「羽休めで凌ぐんだ！」

『ピジヨット！』

そこでピジヨットが羽を閉じて体力を回復しようとする。羽休めを使えば飛行タイプは一時的に無くなる。これで吹雪のダメージを抑えられる！

そのまま渦は氷つき、地面に落下して渦は粉々に砕けちりピジヨットは脱出出来た。助かった……

「ピジヨット、大丈夫か！？」

『ピジヨット……』

なんとか脱出して上昇したピジヨットは寒そうにしている。吹雪は流石に効くなあ。水で濡れてたせいか少し凍っている感じだ。ユウイチめ、相変わらず厄介な事をしてくる！

「終わりだ、ハイドロポンプ！」

その指示でゴルダックの口からハイドロポンプが放たれた。そいつを貰う訳には！

「ピジヨット、電光石火だ！」

『ピジヨット！』

そこでピジヨットはなんとか電光石火を発動し、降下しつつもハイドロポンプを回避し、そのままゴルダックに向かっていく。でもそのスピードは遅い。くっ、さっきの吹雪にやられたのがキツイか

「しぶといな、けどこれで終わりだ！吹雪だ！」

『ゴルウー！』

そこでまたユウイチが叫ぶ。ユウイチ、勝負に焦りすぎたな！

「今だピジヨット、追い風だ！」

『ピジヨオー！』

「何っ！」

『ダック！？』

そこでオレが指示を出すと急停止したピジヨットは翼を広げと吠えた。するとピジヨットの背後からピジヨットの背中を押すように強い風が吹きはじめた。

追い風、コイツは背中を風が後押しして素早さを一時的に早くする技だけど今の狙いはそれじゃない！

「ふ、吹雪が！？」

『ダック！？』

そう、追い風が相手側には向かい風として作用したんだ！

吹雪は風に押されゴルダック自身に直撃した。それを受けたゴルダックはダメージを受け、少しだけ、本当に一部だけ凍ってしまい動きが制限された。これで決めてやる！

「ピジヨット、ブレイブバードだ！」

『ピジヨオオ！』

「くっ！ゴルダック、諦めるな、勝機はまだある！ハイドロポンプだ！」

『ゴル、ダアアック！』

そこでユウイチはハイドロポンプで攻めてきた。その水流は一直線にピジヨットに迫るが構わずピジヨットも突き進む。撃ち抜け！

『ピジヨット！』

『ダック……！』

ゴルダックのハイドロポンプを見事にピジヨットは突き抜けゴルダックを吹っ飛ばした。流石だぜ！

「よっし あっし！」

よっしやあー！



って叫ぼうとしたところだったがその声は途中で止められる。ピジヨットのブレイブバードは決まったけど……そのままピジヨットは上昇する事無く地面に墜落した。

それを見た瞬間に駆け出してみたいで気がついたらピジヨットの目の前にいた。しゃがみ込んでピジヨットの頭を何回か叩く。完全に目を回してるみたいだ。

「流石だったぜピジヨット、後は任せてくれ」

そうピジヨットを労ってボールに戻してからオレは自分のいるべき場所に戻る。

ゴルダックも限界だったのかすでにバトルフィールドにはいなくなっている。本当にピジヨットは頑張ってくれたな。

「お互いに次のポケモンを！」

そんな審判の声。次のポケモン……そんなの決まってる！

「ユウイチ、相性がどうとかなんて言わないよな？」

「まさか。お前こそ負けて泣くなよ！」

そう続く会話。次のオレ達のポケモンは！

「オーダイル、君に決めた！」

「バクフーン、行くぞ！」

『ダアアイル!』

『バクフウン!』

お互いに出したポケモンはそれぞれのパートナーだ。オレはオーダーでユウイチはバクフーン、難しい言葉なんて知らない。幼なじみ同士、相棒同士で勝負だ!

「試合開始!」

試合開始のコール、行くぜ!

「高速移動!」

「電光石火だ!」

『ダイル!』

『バクウ!』

2体のポケモンは加速し、正面から自らの額をぶつけあった。頭突きってというか宣戦布告って感じというか……

で、勢いのあまりお互いに後退するのは愛嬌だと思う。ここから勝負だ!

「メガトンパンチだ!」

『ダイリ!』

「甘い！背負い投げだ！」

『バクウ！』

『ダイツ！？』

「マジッ！？」

なんとそこでバクフーンはオーダイルの拳を鮮やかに避けて見せるとすぐに背負い投げでオーダイルを投げてきた。

マ、マジかよ！

そんなのポケモンにさせるなんてありなのかよ！

『ダアアイル！』

投げられたオーダイルは直ぐさま立ち上がりダメージを堪えるように首を振る。

そうしてる間にもバクフーンはオーダイルに仕掛けてきた。コイツは！

「雷パンチ！」

『バクウ！』

『ダイ……』

！

ギリギリで雷パンチの一撃は腹に掠るだけで済んだ。オーダイルがとっさに後ろに跳んだのが幸となったみたいだな。で、バックステップからオーダイルは仕掛ける。今度はこっちの番だ！

「メガトンパンチ！」

『ダイル！』

『バクウ………』

オーダイルはバックステップ直後に直ぐに前へ跳びメガトンパンチを仕掛けた。そのメガトンパンチの攻撃もさつきと同じように、バクフーンの腹に掠るだけで終わる。流星にやるな！

「この距離ならもう一撃狙える！滝登りだ！」

「バクフーン、突っ込んでくる力を利用してやれ！」

『ダイイイ！ダイツ！？』

『バクウ！』

げっ！

突撃するオーダイルに対してバクフーンは体をずらし足に足を引っ掛けてこけさせて来やがった。くそっ！

ユウイチの奴、バクフーンが2足歩行になったからってこっぴつ厄介な動きを教えやがって！

さっきの背負いの時も思ったけど厄介ってもんじゃないぞ！

「火炎放射で追撃だ！」

『バクウ！』

そんな事を思ってる間にもユウイチは攻めてくる。

野郎、こんな事でやられてたまるか！

「そう簡単に事が進むと思うなよ！オーダイル、アクアテールだ！」

『ダイル！』

そこですぶとくオーダイルは尻尾を奮う。火炎放射はアクアテールの水のパワーで払いのけられた。よし！

「早く立ち上がれ！今度は水の波動で反撃だ！」

『ダイ……ダイル！』

火炎放射の攻撃をなんとか払ったオーダイルは素早く立ち上がり水の波動で攻撃する。これが当たれば！

「それに当たると思うなよ！バクフーン、雷パンチで叩き碎け！」

『バクウ！』

ギリギリの距離からの攻撃は雷パンチで軽く破壊される。くそっ！

近距離からの攻撃もブロックしてきたか！

「そこだバクフーン、火炎放射！」

『バアアアクウウウ！』

『ダイ………』

オーダイルは火炎放射の直撃を受ける。けど火炎放射の一発ぐらいでオーダイルを止めれると思うなよ！

「舐めるな！ハイドロポンプ！」

『ダイル！』

そこでオーダイルも根性を見せる。火炎放射をハイドロポンプで弾き除け、そのままハイドロポンプはバクフーンに向かっていく。それを姿勢を低くするだけで回避してくる。まだこっちの攻撃は終わっていない！

「オーダイル、滝登りだ！」

『ダイル！』

そこでオーダイルは滝登りを仕掛ける。これでも食らえ！

「だったらこっちはフレアドライブだ！」

『バアアクウウ！』

また正面から激突し大きく後退する。だけど今のは完全にオーダイ

ルが押し勝ってる。このまま！

「ハイドロポンプで追撃だ！」

「純粋なパワー勝負じゃ勝てないか！だったらこうだ！蓮獄を使え！」

『ダアアイイイル！』

『バアアアクウウ！』

オーダイルのハイドロポンプに対してバクフーンは炎の竜巻を放ってきた。それはハイドロポンプと激突し大きな爆発を起こした。炎技でハイドロポンプを止めてきた！？

なんて火力の技だよ、喰らったら火傷しそつだな……

「大丈夫かオーダイル！」

『ダイ………』

今の爆発に巻き込まれたオーダイルはバランスを崩したけどダメージは殆ど無いみたいだ。これならまだ行ける！

「だったらオーダイル、波乗りで………」

「遅いぞイツキイ！オーダイル！」

『ダイ！？』

「なんだと!?!」

驚きの声をオレ達は上げてしまつ。遅い、だと?

『バクフウウン!』

っ!?

正面からバクフーンは距離を詰めてきた。電光石火がこのっ!

「オーダイル、ガードするんだ!コイツはマズイぞ!」

『ダイ……!』

「遅いつて言った!バクフーン、雷パンチからブラストバーン!」

『バアアアクウウ!』

『ダイツ……!』

ガードが間に合わないオーダイルに雷パンチが突き刺さつた。それで転倒したオーダイルは無防備だ。マズイ!

『バクウウ!』

ほえるバクフーンが放つたブラストバーンはオーダイルに直撃し火柱が立つた。そんな、ここまでなのか……?!

「勝つたぞ、イツキ!」



そう勝利の雄叫びをユウイチが上げた瞬間だった。

『ダアアアアイル!』

- バシヤアアア -

っ!

不意に火柱が消し飛び大きな水しぶきが上がった。今のは!

「へへ、相棒……やっってくれるな!」

『ダイル』

そうオレが言うときさっきの派手な消火のせいで上がった湯気からオーダイルが姿を現した。ダメージは結構受けてるみたいで右手で左腕を抑えている。

「間欠泉……」

そうユウイチが呟く。ああ、無茶と思うけどオーダイルは間欠泉の爆発に近い水流で炎を吹き飛ばしたんだ。

ま、自身も結構ダメージを受けたみたいだけど……

けど、もっとダメージを受けた奴もいるぜ!

『バ、バク……』

間欠泉の水流で吹っ飛ばされたバクフーン、ちゃんと巻き込まれたみたいだな。ブラストバーンの反動と間欠泉のダメージで身動きが

取れない今しかチャンスは無い！

「コイツで止めだ！ハイドロカノン！」

『ダアアイル！』

「バクフーン！」

オーダイルの渾身の一撃は見事に炸裂した。これで、終わりだあ！

ハイドロカノンは直撃し、バクフーンは吹っ飛んだ。そしてそのままバクフーンは立ち上がってこない。

「バクフーン、戦闘不能！オーダイルの勝ち！」

そんな審判のコールがかかる。うっ……

「うおおおおっ！勝ったぜ、ユウイチ！」

「ハハ、イツキ……お前達には負けたよ。なっ、バクフーン」

『バクウ……』

そうバクフーンはオーダイルに肩を貸してもらいつつもゆっくり立ち上がりつつも頷く。

それから茶化すようにオーダイルが何かを言うとバクフーンは少し怒ったように鳴く。やっぱりこんなやり取りをしているとコイツら親友だなんて思う。

「イツキ、オレに勝ったんだから行けるところまで行けよ。サクラとコノハで応援してるからな」

「ああ！相手がコウだろうがユースケさんだろうがガンガンぶっ飛ばして行ってやるぜ！」

そうユウイチの言葉にオレはそう返した。ああ、相手が誰だろうがやってやるぜ。

これからはもっとキツイ戦いになるけど……いつものガッツでなんとかしてやるぜ！

ここからが本番！イツキVSユウイチ（後書き）

次回予告

コノハ「遂に準決勝まで来たわね！気合い入れていきなさいよイツキ！」

イツキ「それだけどオレの相手さ、コウか。ちと不安だな」

コノハ「アンタは何自分のライバルに憶してるのよ！いつも通りやつてきなさい！次回、ポケットモンスターACE〜SECOND SEASON〜『宿命のライバル』次回もポケモンゲットよ！」

アブソル『アブ！』

## 宿命のライバル（前書き）

ユウイチを撃破した夜、イツキは会場ハズレで考えごとをする。

そこで偶然彼が出会った人物とは……

## 宿命のライバル

今は会場の近くにある丘で転がって考え事をしている。ユウイチを撃破したオレの次の相手はコウだ。

ちなみに今日の他の試合はユースケさんとランさんの真剣にやってるのに茶番にしか見えない試合とコウと知らない人の試合、そんなもってカズマさんとカシスさんの試合だ。

まあ、それぞれの勝者はユースケさんとコウ、んでカズマさんだった訳だが……なんかうん、ユースケさん達の試合だけ茶番に見えたのはなんでだろう……

バカップルだから仕方ないか。それより今はコウだ。

試合は明日。アイツのメインは悪タイプ。まあタイプは気にしないで無茶するってのは分かってるけど、オレはアイツに勝てるのか？ PCに預けたオーダー達はそろそろ全快すると思う。アイツ達のを力を限界まで引き出さなけりゃオレには勝ち目は無いと思う。オレにそれが出来るのか？

「イツキ」

「おわっ！カ、カズマさん！なんすか急に！」

そうオレに冷たい缶をカズマさんがしゃがみ込んで頭にピタッて当

ててきた。

冷たっ！

な、なんつー不意打ちだ！

そう言いつつもオレは体を起こしジュースを受け取る。

お、コーラか。でも炭酸苦手なんだよな……

「珍しいな。お前が考えごとだなんて……なんか変なものでも食ったのか？」

そう言いつつカズマさんはオレの隣に座った。

「カズマさんには言われたくないです。で、カズマさんはどうしてここに？」

「眠れなくて少し風に当たりに来たんだよ。で、何を考えてたんだ？」

率直に聞いてくるなあ……ま、答えても損は無いし、しっかり答えよう。

「明日戦う奴、スクール時代からのオレのライバルなんですよ。アイツ、スッゲー強くて、勝てるか不安で仕方なかったんです。だから少し頭を冷やしてたんですよ」

どうしても弱気になってしまっオレがいる。

相手がコウっていうライバルだからこそなのかもしれない。それをカズマさんに伝えると。腕を組んで『うんうん』とうなずいてから

「ライバルと対戦ならそういうもんさ」

「他人事みたいに……カズマさんも次ユースケさんですけど大丈夫なんですか？」

そう、この人の次の相手はユースケさんだ。この人もこの人でライバル対決なんだよなあ

「ああ。不安もあるけど、勝とうが負けようが全力を尽くすことしか考えてないよ。全力を出せなかったらアイツも残念がるだろうし、なによりオレとジユカインも面白くないだろうしな」

面白くないかあ。

なんとなくだけどカズマさんらしいや。

「お前も同じだろ？」

あ、それもそうか……

不安がつてて全力を出せなかったらコウもがっかりするし、オレもオーダイルも納得なんてできないよな！

「そうですね。そう言われたら不安がつてるのもバカみたいになりましたよ」

そう言いながらオレはコーラの缶を開くいてチビツとだけ口に含ん



だ。

炭酸は苦手だなあ……

「ああ、その意気だ。バカはバカらしくバカやればいって事さ！」

「アンタには言われなくなかったですよ、バカズマさん！」

なんていうか……似てる性格だとどうしてこう喧嘩腰になるのだろうと思う今日この頃であった。

「コウ、この間の決着着けようぜ！」

「イツキ……卒業試験の時の雪辱、晴らさせてもらおう……！」

そんなオレの台詞に対してコウが返す。今はポケモンリーグの会場のバトルフィールドに立っている。正面にはコウ。オレのライバル……

大丈夫だ。不安な気持ちはない。絶対に勝ってやる！

「それでは、これより準決勝を開始します。ルールは3対3のシングルバトル。それでは試合開始！」

試合開始のコールがかかった。行くぜ！

「アブソル、一気に行くぜ！」

「ブラッキー、頼む……！」

『アブウ！』

『ブイツ！』

そこで出てきたのはブラッキーとアブソル。この間の決着つけようぜ！

「行くぜ、先手必勝だ！アブソル、電光石火だ！」

『アブ！』

先に仕掛けたのはオレ達だ。ブラッキーに高速でアブソルは向かっていく。まずはコイツを食らえ！

「火炎放射だ！」

『アブウウ！』

オレの指示を聞いてアブソルは火炎放射を放つ。

直撃さえすれば！

「肉を切らせて骨を断つ！しっぺ返しだ！」

そうコウの指示を聞いたブラッキーは火炎放射を突っ切ってアブソルに一撃を加えて来た。

しっぺ返し、後手に回った時に威力が増す技……やるな、この間とは全然違いやがる

「アブソル、まだまだ行けるよな！着地してから10万ボルト！」

『アアブウウ！』

オレ達の攻撃はまだまだ続くアブソルの角が怪しく輝きそこから強力な電撃が放たれた。

火炎放射の次は電撃だ。受けてみやがれ！

「ブラッキー、電光石火で回避しつつ距離を詰める！それには当たるな！」

『ブイ！』

そんなコウの指示でブラッキーが突貫してくる。接近戦、だったら！

「アイアンテール！」

『アブ………！』

『ブイツ………！』

正面からアイアンテールをお互いに激突させ、大きく後退する。

パワーはこっちが勝ってるみたいで向こうの方が後退してる度合いは大きい。

このまま一気に決着をつけてやる！

「電光石火から馬鹿力だ！コイツで終わりにしてやる！」

『アブウ！』

オレの指示でアブソルは電光石火を使いジグザグの軌道を取りながらブラッキーに向かって行く。その体には赤いオーラ。

これで終わりだ！

「鈍いを使って受け止める！」

『ブイイイイ！』

そんなコウの指示でブラッキーはその場で身構える。そして正面からアブソルの一撃を受け止めてきた。お、押し切れるか!？

「アブソル、フルパワーだ！」

『アブウウー!』

「もっと鈍いを使え。確実に受け止める」

『ブ……ブイ!』

!

アブソルのフルパワーの攻撃をブラッキーは耐えてきた。押ししていたハズのブラッキーはしっかりと足をつけてその場に踏み止まっている。

くっ、けど馬鹿力のダメージは小さい訳じゃない。0距離攻撃で!

「火炎放」

「遅いぞイツキ！ブラツキー、突進だ！」

『ブイツ！』

『アツ……アブウ！？』

「アブソル！」

コウの指示はオレより早く通る。動揺したから！

突進は炸裂しアブソルは見事に吹っ飛ばされた。打たれ弱いアブソルには鈍いでパワーアップしたブラツキーの一撃には耐えれなかった。完全に目を回している。流石に、強い！

「アブソル、戦闘不能！ブラツキーの勝ち！」

審判のコールがかかった。あの勝負の続きはオレの負けか！

「やるな……」

そう小声で言ってから軽く舌打ちする。

コウイチのテクニクを生かした戦いもやつかいたけど、コウも中々やるなあ……

「当然だ。伊達にここまで勝って来てはいない。そう簡単に勝てると思うなよ……！」

どうやらオレの声は聞こえてたみたいだ。本当にここまで来たのはマグレじゃ無いのが分かる強さだ……

ただこのまま引つ込む訳には行かない。ここは一気に！

「頼むぜ、ドンファン！」

『パオーン！』

そこでオレが出したのはドンファンだ。お前の力、信じるぜ！

「試合開始！」

試合開始のコール。先に仕掛ける！

「ドンファン、丸くなるから転がる攻撃だ！」

『バオツ！』

オレの指示で正面から仕掛ける。鈍いを使いパワーと防御を得た代償にスピードを失っているブラッキーはギリギリで避ける力しかない。

転がるの攻撃はブラッキーを霞めるだけで終わる。まだまだ！

「そこでドリフトだ！直撃させてやれ！」

『パオオ！』

そこでドンファンはオレの指示でドリフト走行して短距離でブラッキーに向き直る。

そして勢いをさっきより増してブラッキーに向かって行く。アカネ

のミルタンクも使ってきた転がるからのドリフト走方、今度は回避出来ないぜ！

「イツキ、もう一回しっぺ返しを受けたいみたいだな。だったら望み通り食らわせてやる！ブラッキー！」

『ブイツ！』

転がるで激突する寸前にブラッキーは構える。それを待ってたぜ！

そのままドンファンは突撃するとブラッキーは一瞬顔をしかめるが紫色のオーラを纏いだす。しっぺ返し……2度も同じ技をただで喰らうと思うな！

「そいつを待ってた！カウンターだ！」

『パオ……パオン！』

「っ！なんだと！」

『ブウブイツ！？』

カウンターを、丸くなってたドンファンが元に戻りながら発動した。倍返したあああ！

弾き飛ばしたブラッキーはそのままダウンし立ち上がってこない。よし！

「ブラッキー、戦闘不能！ドンファンの勝ち！」



「よっしゃあー！」

ドンファンの勝利を宣言するコールがかかった。

「ドンファン、よく頑張ったな！」

『パオオ！』

そうドンファンはオレの声で嬉しそうに鳴いた。よく頑張ってくれたぜ！

「流石は俺のライバルだ。やってくれるな……！」

「オレだって伊達にここまで昇ってきたんじゃない！あまり甘くみるなよ！」

そうオレはコウの言葉に力強く返した。コウ、お前にだけは負けてたまるかよ！

## 宿命のライバル（後書き）

てな訳ライバル対決が始まりました。

さて、そんなことより久々のコウの登場です。少し前に登場しましたがその前に登場したのが本当に最初あたり……

ジャイトといいACEではどうしてもメインライバルは空気になるのはどうしてでしょうか？

リーグ後にも彼らに出番を作れたらなと思う愚痴でした。

## 宿命の決着（前書き）

互角の勝負を展開するイッキとコウ。この勝負はどつころがるのだ  
らうか……

## 宿命の決着

「頼むぞ、ミカルゲ……！」

そこでコウが出してきたポケモンは……岩？

ミカルゲって言ってたけどなんか亀裂がある岩が出てきただけだが……

「……起きろ。出番だぞ」

そうコウが頭を抑えながらも言う。寝てるのか……？

『ルゲエエ』

！

『パオツ！？』

岩から突然なんか不気味な唸り声が……まさか、何か出てくるのか！？

『ルゲエエ』

！？

中から出てきたのは紫色の気体みたいな何かだ。それには顔みたいのになってる。

コイツが……ミカルゲ……なんて不気味な奴だ……見た感じゴース

トタイプと、岩？

違うな、悪タイプか！

特性は見ただけでここまで分かりやすいのも少ないと思う。

オレ達をビビらせてるんだ。多分【プレッシャー】に違いない。厄介だな……

「それでは、試合開始！」

再び試合開始のコールがかかった。相手は何をしてくる？

イヤ、どんな手で来るか関係無い。オレはオレのやり方を貫くだけだ！

「正面突破だ！転がる攻撃！」

『パオーン！』

オレの指示でドンファンがミカルゲに真っ向から突撃する。勿論あんなに重そうなミカルゲには回避は間に合わない。転がる攻撃は見事に本体に炸裂。  
どうだ！

「体が重い分……耐久力はお墨付きでな……！」

『ルゲエ』

……真っ向から転がる攻撃を受けたのにピンピンしてやがる。なんてタフな奴だよ！

「そこだ……！鬼火で攻撃だ」

『ミカア……』

そんなコウの指示で口を開き見るからに妖しい火の玉を放って来た。弾速は遅い……十分避けれる！

「ドンファン、かわせ！そこから突進だ！」

『パオン！』

そんなオレの指示で回避しつつも真っ向から突っ込む。オレの考えが合っているか確かめる！

「無駄だ……！ミカルゲ、今度はシャドーボール！」

「構うな！突っ込め！」

『ミカア！』

『パオーー！』

ミカルゲが放ってきたシャドーボール、そんなもん効くかよ！

まあ、ダメージはあるけど……

突進の攻撃はミカルゲをすり抜けた。やっぱりタイプはゴースト……厄介な相手だぜ……

基本的に技のレパートリが少ないオレのドンファンにとって破壊力

がある突進とかカウンターは何気にかなり重要な技……それが効かないって事はかなり不利な状況って事なんだよな……この展開どう打開する？

「隙だらけだ……！鬼火だ」

『ミカルア！』

突進ですり抜けてそこで旋回しようとしてる隙に鬼火をドンファンに決めようと狙ってくる。させるかよ！

「ドンファン、高速スピンから水鉄砲！」

『パオツ！』

そこでドンファンは体を捻って高速回転をする。そしてそのまま出鱈目に水鉄砲を放つ。

それが鬼火に見事に命中し上手く消火出来た。これでこの展開は打開出来た。一気に！

「そこだ！かぎ分けるから捨て身タツクル！」

『パオオン！』

そこでドンファンが仕掛ける。かぎ分けるを使えばノーマルも通るようになる！

これなら！

「回避は間に合わない……！だったらミカルゲ、捨て身でいい鬼火を当てる！」

『ミカルア!』

『パオツ……パオ!』

っ!

無茶な突撃だったのは分かった。捨て身タツクルの一撃でミカルゲは吹っ飛ぶ瞬間に鬼火を……

これで物理攻撃の威力が反撃された……けどまだドンファンには余力がある!

このままパワーで!

「ドンファン、そのまま捨て身タツクルで!」

「イツキ、猪突猛進だけで勝てると思ったら大間違いだ……!」

『ミカルア……』

突っ込んで行くドンファンに対してミカルゲは何やら怪しげな光りの玉を放ってきた。

それはドンファンに命中し、ドンファンが輝きだしたと思ったらドンファンから光りの玉が飛び出しミカルゲの元へ戻っていきそれを飲み込んだ。

一体何を!?

「何をしやがった!?!」

「痛み分け……お互いの体力を分かち合う技だ。ミカルゲは消耗してたからな。ドンファンの体力を奪わせて貰った」



『パオ……』

『ミカア』

痛み分けだと……こっちはガンガンダメージを当てていったのに……それをアダにされるなんて……  
こっちは火傷してて攻撃力が落ちているのに！

『パオ……パオッ！』

！

それでもドンファンはさっきの指示通り突撃をする。  
まだこっちが諦めたと思うなよ！

オレとドンファンの最後の一手はこれだ！

「行けっ！ドンファン！」

『パオオオン！』

『ミカア』

正面から捨て身タックルが決まった。けどミカルゲは笑顔のまま。  
体力が回復したからって余裕かよ！

けど……これが最後の一手だったと思うな！

「ドンファン、そのままがむしやらだ！」

「っー！」

『パオオオツ！』

『ミカアアア！』

がむしゃら……自分が追い詰められれば追い詰められる程相手にダメージを与える技だ。

攻撃力関係なくダメージを与える技だから火傷なんて関係ない！

『ミカアアアア！？』

見事にミカルゲを弾き飛ばした。これでお互いに限界……先手を貰って終わらせる！

「氷のつぶて、コイツで決まりだ！」

『パオオオン！』

『ミカア………』

「ミカルゲ！」

弾き飛ばしたミカルゲに追い撃ちの氷のつぶての追撃が入った。

それが止めとなった。吹っ飛ばされて地面に落ちたミカルゲはそのままさっきの岩の中に戻っていった。

これは……

「ミカルゲ、戦闘不能！ドンファンの勝ち！」

審判が決着を告げるコールを掛けた。よし、勝ったぜ！

「ドンファン、大丈夫か！」

『パオ………』

勇ましくミカルゲを吹っ飛ばしたドンファンだったけどもう限界だったみたいだ。

よく頑張ったな………

「ドンファン、お前の頑張りは無駄にしないぜ！後はオレ達に任せ  
てくれ！」

『パオ………』

そうオレはドンファンをボールに戻した。

次がラスト………多分アイツはアイツの相棒を出すと思う………だった  
らオレだって引くわけには行かない！

「オーダイル、ドンファンとアブソルの頑張り、全部お前に托す！  
行っけええっ！」

『ダアアアイル！』

オレがボールを投げ、それから姿を現したのはオレの相棒、オーダ  
イルだ。

「マニユーラ………！お前の力を奴らに見せてやれ………！」

『マニユッー！』

コウが出してきたのは黒い体の猫に赤い帽子みたいのを身につけた

ポケモン、マニョーラだ。進化してたのか……  
だけどオーダイルだってパワーアップしてる。そう簡単にはやられ  
はしない！

「試合開始！」

試合開始のコールが掛かる。一気に行くぜ！

「高速移動だ！」

『ダイツ！』

そこでオーダイルは一気に加速し、マニョーラに真っ向から向かっ  
ていく。最初の一撃はコイツだ！

「切り裂く攻撃だ！」

『ダイル！』

一気に接近し、乱暴に両手を振り回しマニョーラに仕掛ける。しか  
しそんな攻撃はあっさりとマニョーラに回避される。

「マニョーラ、そこから切り裂く攻撃だ！」

「へっ！そんな攻撃に！オーダイル、吠えてやれ！」

『ダアアアアイル！』

『マニョーラ……』

そのオーダイルの吠えるにビビったマニユーラは一旦距離をとってくる。

そこから追撃だ！

「オーダイル、追撃だ！アクアジェットで！」

「追撃なんて許すな……！凍える風！」

『マニユ〜』

『ダイ……』

アクアジェットを発動し、突撃をしようとするオーダイルに凍える風をマニユーラはぶつけてきた。

それを受けたオーダイルの動きは鈍くなり、そのうちにマニユーラには追いつけない位置まで引かれてしまう。

『ダイ……』

『マニユ……』

そこで2匹のポケモンは嬉しそうに笑みを浮かべる。

スクール時代からオレとコウはライバル、って事は必然的にコイツらもライバルって事だ。お互いにその実力が健在で嬉しいんだろうな。

「イツキ、オーダイル、流石だな。相変わらずのパワーファイトで厄介でしょうがない」

「そっちこそ、相変わらぬの身軽さ……面倒な相手だぜ！」

そう言うオレ達もやはり嬉しそうに見えるかもしれない。  
それだけ熱くなってるんだからな！

「今度はこつちから行く……！電光石火！」

『ニューラッ！』

っ！

早いっ！

電光石火で迫るマニューラのスピードは圧倒的だ。目で追うのが精一杯だ……

「オーダイル、ブロックだ！」

『ダイッ………！』

『ニューラッ！』

あまりに素早い電光石火を真っ向からオーダイルは貰ってしまう。  
くっ………こんなスピードでこられたら回避もへったくれも無いぜ………

「もう一度電光石火………！そこから乱れ引っかき！」

『ニューラッ！』

「だったらこつちだ！メガトンパンチ！」

『ダイルッ！』

正面から迫るマニョーラにオーダイルは拳を奮うけどあっさりと回避され、眼前まで迫られる。

この縦横無尽にバトルフィールドを駆け回るって戦い方……カズマさんもそんな戦い方だけど、こっちはパワフルさが劣る変わりに自由度はこっちの方が上だな……

『ニョラニョラニョラニョラッ！』

『ダイツ……！？』

顔を容赦無くオーダイルの顔にマニョーラは乱れひつかきを決めていく、このっ……！

「オーダイル、なんとか……」

「冷凍パンチで追い撃ちをかける……！」

『ニョラッ！』

『ダイ……』

うわっ！

顔面に冷凍パンチを叩きこんできた。それを受けたオーダイルはバランスを崩して、そのうちにマニョーラは後退していく、逃がすかよー！

「怯んでる暇は無いぜオーダイル、水鉄砲連射！」

『ダイツダイツダイツ！』

後退するマニユーラに向けられる水鉄砲、でもそう簡単に当たるマニユーラじゃない。  
オーダイルはオーダイルで予測して撃つてて予測も当たってるのに  
掠りもしない。  
だったらこれでどうだ！

「オーダイル、間欠泉だ！」

『ダアアイルツ！』

細かい狙いはいらぬ。口から巨大な水の塊をマニユーラに向けて放つ。

そんなの勿論当たらないけど……その塊は地面に着弾して巨大な水しぶきをおこした。

コイツなら回避なんて！

「マニユーラ、行けっ！」

『マニユツ！』

『ダイツ！？』

！？

その掛け声と同時にオーダイルの真下からマニユーラが襲い掛かってきた。速っ……いつの間に穴を掘ってたんだよ！

それをしぶとく回避したオーダイル。ここから反撃だ！

「オーダイル、メガトンパンチ！」

『ダイルツ！』



「そんな事では！ブレイククロー！」

『ニユラッ！』

オーダイルの拳は突き刺さらない。ギリギリですかさね、ブレイククローを腹に叩き込まれオーダイルはバランスを崩す。マズイ！

「おまけにもう一度ブレイククロー！」

「しっかりブロックだ！やらせちゃいけない！」

『マニユッ！』

『ダイツ………！』

今度は後退させられたけどしっかりブロック出来た。ただダメージはしっかり蓄積してきている………！  
このままじゃ押し切られる！

「電光石火から辻切り………！」

『ニユラッ！』

まだまだ休ませてくれないコウ達は鬼だと思つ。  
ま、オレが言えた事じゃないけど。

「オーダイル、高速移動で下がれ！」

「逃げれると思っているのか………！」

『ダイー！』

オーダイルは高速移動で後退するがそれでもマニユーラは追いついてくる。

それだけ加速したならコイツを避けれるかよ！

「アクアジェット！」

『ダイルツ！』

「っ！避けるマニユーラ！」

『ニユ……』

高速で突っ込んでくるマニユーラにはこれは避けれ無かったみたいだ。

見事にアクアジェットはマニユーラの腹部に炸裂し吹っ飛んだ。へっ！

打たれ弱いのは変わってないみたいだな。

小回りが聞いて小柄で小回りが効く分打たれ強くは無い……そこを狙えばいい！

「マニユーラ、まだまだ行けるな……！」

『マニユ……』

吹っ飛ばされたマニユーラはゆっくりと立ち上がる。今のは効いたみたいだな。

「相変わらずの馬鹿力……打たれ弱いマニユーラには一発一発が命

取りか……こうなったらここで決着をつける！マニョーラ！」

『ニョラッ！』

そんなコウの声でマニョーラは構える。何をする気だよ……

「オーダイル、警戒しろ何か来るぞ！」

『ダイ……』

同じくオーダイルも構える。さあ、いつでも来やがれ！

「行くぞ……！高速移動から電光石火！」

！

マニョーラにそんな指示を出すと同時に動き出した。速いつ！

高速移動と電光石火の連携、更に身軽で軽量なマニョーラの機敏な動きが合さって今まで戦ってきた相手の中でもダントツに速い。

駄目だ……目で追うのもキツイ……！

「そのまま素早さで翻弄してやれ！」

『マニョッ！』

『ダイッ！？』

ガンガン容赦無くスピードを生かしてマニョーラが攻撃を仕掛けてくる。

そのスピードの前にオーダイルは対応も出来ずにどんどんダメージを喰らっていくのが分かる。

くそっ……勝路を見出ださないと……どうする……

「そのまま地面に叩き付ける……！」

『マニユラアアア！』

『ダイイイツ！？』

「オーダイル！」

っ！

そうしてる間にもスピードを生かしてオーダイルの腹部にマニユラが右腕でボディブローを決め、そのまま地面に引きずるようにオーダイルを押ししていく。

こうなったら……こうだっ！

「オーダイル、岩砕きだ！左手で地面を砕けっ！」

『ダイイイイ……ダイルツ！』

そんなオレの叫びに呼応するようにオーダイルは吠える。そして拳を地面にたたき付けると地面が割れ、岩が飛び散った。

『マニヤア！？』

「何っ！？」

それはその目前を走っていたマニユラに直撃し、動きを止めた。岩なんて、打たれ脆いマニユラには弱点にも程がある。おまけに氷タイプだ。効果は抜群だぜ！

「今がチャンスだ。オーダイル、立てええええええ！」

『ダアアアイル！』

マニユーラは止まってもオーダイルはまだ勢いで引きずられ続けたが、そこで両手をつき、なんとか止まり重い足取りで立ち上がった。

これなら行ける！

「オーダイル、高速移動で一気に距離を詰める！」

『ダイルツ！』

そこでオーダイルは高速移動を発動し、マニユーラに向かっていく。これで終わりにしてやる！

「マニユーラ、しっかりしろ！オーダイルが来るぞ……！」

『ニユツ……マニユツ！？』

そうしてる間にもオーダイルはマニユーラに接近する。逃げられてたまるかっ！

「オーダイル、ハイドロ……！」

「させるかっ……！マニユーラ、気合パンチ！」

『マニユウウー！』

っ！

こっちの予想に反してマニユーラは突っ込んでくる。  
やられる！？

『ダアアイル！』

『マニユー！？』

！？

マニユーラの拳がオーダイルの顔面に決まる瞬間、オーダイルは左足を思いっきり引いて僅かな動きで回避した。そしてマニユーラの放った拳の手を掴みそのまま宙に向かって投げ飛ばした。

これって……荒いけどユウイチのバクフーンと同じ動き……だけど宙に浮いていて隙だらけ、チャンスは今しかない！

「オーダイル、馬鹿力だ！これで終わりだ！」

『ダアアイルッ！』

『マニユーウウウ！？』

「マニユーラ！」

そこでオーダイルは跳ぶ、そして渾身の一撃をマニユーラに叩き込んだ。

その一撃でマニユーラは地面に上手く着地出来ずに叩き付けられた。完全に目を回すマニユーラ……やったのか……？

「マニユーラ、戦闘不能！オーダイルの勝ち！よって、イッキ選手の勝利です」

勝った……オレ達は、コウに勝ったんだ！

「うおおおおおっ！」

『ダアアイルツ！』

オレは叫ぶ、そしてオーダイルも叫ぶ。

この舞台上でオレ達のライバルに勝った事が嬉しくてひたすら。

「マニユーラ、よくやったな。ゆっくり休んでくれ……イッキ！」

叫び声をあげる中、コウの声が聞こえオレとオーダイルは叫ぶのをやめる。

「コウ」

「流石は俺のライバルだな。だが、次は負けない。次の時は俺が勝つからな」

そうとだけ言って背中を向けてゆっくりと歩いていく。

へっ！

そうかよ！

「次だって勝つのはオレ達だ。絶対に負けないからな！」

そうオレは叫ぶ。次だって勝ってやる。ライバルのお前だけには絶対に負けないからな！

## 宿命の決着（後書き）

### 次回予告

イツキ「決勝までコマを進めたオレの前に立ちふさがるのはやっぱりあの人！」

コノハ「アンタは覚悟を決めなさいよ。ビビってたんじゃ勝負にならないからね！」

イツキ「次回、ポケットモンスター ACE ～ SECOND SEA  
CON ～ 『決選前日』 次回もポケモンゲットだぜ！」

オーダイル『ダイル！』



決戦前日（前書き）

決勝までコマを進めたイツキ。

カズマと熾烈なバトルを繰り広げるユースケ。  
彼らは何を思っただろうか

## 決戦前日

「貰ったぜ、リーフブレード！」

「それぐらいで！サイコカッターで受け止める！」

『ジュプツ！』

『くっ……！』

ジユカインの振り下ろす一撃をユンゲラーは左手に出したサイコカッターでなんとか受け止めた。

カズマとの準決勝。僕は既にカズマのマッスグマとグラエナを倒したけど、逆に僕もリザードンとストライクを倒されている。

それでユンゲラーとジユカインのバトルになってるけど……このままじゃマズイ、なんとか、なんとかしないと！

「念力で一旦距離を取って！そこからサイココーティングシャワー！」

『だああああ！この野郎！』

『シュプツ！？』

「相変わらず粘り強い！ジユカイン、まともに貰うな！」

ユンゲラーも伊達に強敵達と戦ってきた訳じゃない。

念力を使いジユカインを跳ね退け、そしてさっきまで使っていたサイコカッターを回転をかけて投げつける。そしてそれに向かいサイケ光線を連続で放った。

勿論エネルギーはサイコカッターで拡散し、ジユカインに回避が難しい衝撃波となった。それは威力は大きくないけど回避は容易く無い。それを悟ったカズマはジユカインにガードをするように指示を出す。そこだっ！

「フルパワーのサイコカッターで攻撃だ！」

今度はこっちから攻める！

今度はユンゲラーの左手からじゃなくて右手に握るスプーンからさっきより大きいサイコカッターが発生した。

さっきより強力な念の剣を受けてみなよ！

『うおおおっ！』

「リーフブレードで切り払え」

『ジユプ……』

極太のサイコカッターの剣の一撃をリーフブレードであっさりと受け止めてくるジユカインは流石だと思う。

だけど！

「そこだ！サイケ光線！」

『もらったあああ！』

『ジユプツ！？』

そこでサイコカッターから伸びるようにサイケ光線が放たれジユカインを跳ね退けた。エネルギー変換はユンゲラーの得意分野！

それを忘れてたのが失敗だったね！

「やるっ……ユースケ、ユンゲラー、今のぐらいでいい気になるなよ！草結びだ！」

『ジユプ……！』

『なにっ！？』

ええ！

弾き飛ばしたジユカインが着地して前に倒れないように手を地面に付いたかと思うとユンゲラーに巻き付くように草が地面から伸びてきた。

う、迂闊だった……しっかりと捕まってしまうって手も動かさそうにない。だけど！

「このタイミング！一発デカイのぶちかましてやる！」

『ジユプ！』

「そこだ、ソーラービーム！」

「そう簡単に！ユンゲラー！」

『分かってる！』

そこで直ぐさまユンゲラーはテレポートで直ぐさま草結びから逃れ、光の光線をなんとか回避出来た。危ない危ない……だけどここから反撃だ！

「炎のパンチで！」

『この野郎！』

『ジユプ……』

ジユカインの頬にユンゲラーの拳が突き刺さる。けどそれぐらいじゃ全くジユカインは堪えない。

一瞬炎に怯んだだけで直ぐに構え直す。これ程度じゃ駄目か……だつたら！

「ユンゲラー、まだまだ仕掛けよう。炎のパンチ！」

「接近戦で勝てると思うなよ！リーフブレード！」

『ジユプッ！』

ユンゲラーの拳が刺さる寸前にリーフブレードを振り回し接近を許してくれない。器用な事を……！

「そこだっ！はたく攻撃！さらにタネマシンガンだ！」

『ジュプツジュプツ！』

『おわっ！うわあああ』

「ユンゲラー！」

素早い動きでジュカインはユンゲラーをひっぱたき、無理矢理隙を造ったと思えばタネマシンガンで容赦無く追撃してきてユンゲラーが思いつきり吹っ飛ばされた。

はたくみたいな技は威力は無いけど挙動が凄早い。カズマらしいスピードを生かした戦い方だよっ！

「まだまだジュカイン、逃がすな！」

『ジュプツ！』

そこで更にジュカインは向かって来る。そうはいかない！

「サイコシヨックだ！接近なんてさせちゃ駄目だ！」

『当然！』

そこで僕は叫ぶ。ユンゲラーは呼応するように技をサイコシヨックを発動した。スプーンから物理的な衝撃波を連続で放ち地面を何度も砕いた。そう簡単には！

「燕返し！」

『ジュプウウ！』

そこでジュカインは消えたかと思うと背後に回られていた。

燕返しにしたって早過ぎるよ！

「ユンゲラー、後ろだよ！」

『分かってるよ！』

「いつまで背中を向けてやがる！ジュカインは後ろだ！」

『ジュプウウウ！』

『グウ！？』

そこで振り返った瞬間にジュカインがまたユンゲラーを一度ひっぱたく。そしてまたバランスを崩したところに……

「今度はリーフブレード！ユースケ、コイツで終わりにしてやる！」

『ジュウウプッ！』

まだだ！

まだやられた訳じゃないんだ！

「リフレクターで凌いで！」

『おわっ……!』

リーフブレードはユンゲラーに決まる。けど、ユンゲラーはその場で踏み止まる。

正直リフレクター無しだったらと思うと冷や汗ものだよ……今度はこっちの番だ!

「サイコネシスで吹っ飛ばすんだ! 距離を取ろう!」

『おう! あらよっと!』

そう、悲鳴に近い声を……まあテレパシーなんだけど、上げてサイコネシスでジユカインを投げ飛ばし、空に向かって打ち上げた。一気に!

「サイケ光線で攪乱しながら攻撃だ!」

『こいつで終わりにする!』

そこでユンゲラーは消え、直ぐさま打ち上げたジユカインの真上に移動しサイケ光線を一発、更に少しだけレポートで移動し更に一発。

『ジユプ……』

「くっ……賢しい攻撃を……だったら!」

「止めだ! サイコマグナム!」



『貰ったあ！』

サイケ光線を受け、ダメージを受けつつも落下しているジユカインの真下にユンゲラーは姿を現す。そして手早く貯めたサイコマグナムのエネルギーを真上に放とうと拳を振り上げた。

サイコマグナムってよく接近して撃ってるけどリーチが短い訳じゃない。

ただ、当たり難いんだ。圧縮してるから……

けど、相手が空中にいる以上、踏ん張らないといけないから地面に足を付かずサイコマグナムが撃てないからこれしかない！

これで終わりにする！

「そいつを待ってた！ジユカイン、サイコマグナムなんて構うな！リーフサイクロンでまとめて吹っ飛ばしてやれ！」

『ジユプウウウ！』

「行けえええ！」

『撃ち抜けええええ！』

ユンゲラーが光の矢を放ったと思ったたらその瞬間にジユカインもリーフストームの発展技、リーフサイクロンがユンゲラーを巻き込んでいた。

これは、マズイ……けど！

「ユンゲラー！」

「ジユカイン！」

僕とカズマはそれぞれ相棒の名前を呼ぶ。僕にはこの勝負、本当にどうなるか分からなかった。

「……まさかオレの望み通りの展開になるなんてな」

「よかったじゃない。まあわたしとしては喜べないんだけどサ」

ハンバーガーショップの座席に座り、そうハンバーガーをかじりながら呟くとオレの正面の座席にカシスさんが座った。

その両手には大きなハンバーガーの入ってるっぽい袋を持っている。

「カシスさん……カズマさんを放っておいていいんすか？」

ユースケさんとカズマさんのバトルはリーフサイクロンをサイコマグナムが撃ち抜き決着になった。

で、何故この台詞なのかはあの人コノハとかオレにお調子者ってとことかどこか似てるからな。結構放っておいたらマズイ気が……

「大丈夫だって。カズマはキミが思ってる程情けなくないわよ。ただちょっと拗ねちゃってるけどね」

「オレが思ってる通り過ぎじゃないですか……」

そう言うカシスさんの台詞にオレはそう返して見せる。

本当にこの人は何を考えてるか分からない。

「ニヤハハ、だからほとほり冷めたぐらいにこれ持って会いに行こうと思ってるね。で、丁度いいところにキミを見つけた訳」

ああ、話し相手って訳ね……

「へえ、成る程。そう言えばカシスさんってユースケさん達とはいつ以来の付き合いなんですか？」

そうオレは返す。話しのお題が無いからな。こうやって世間話でもするわ

「うんと、一年と半年ぐらい前ね。カズマと一緒に旅に出た頃にユースケと会ったのよ。その時はユースケとだけだったけど……それからその相棒のケンイチに会って、今度はその幼なじみのランと会って……」

「アレ？あの二人って当時から付き合ってた訳じゃないんですか？」

「そんな事無かったわよ？友達以上恋人未満って感じね。付き合い出したのも結構最近のハズよ？」

へ、へえ……い、以外。ランさん達が元々あんなにバカップルじゃなかった事とか元々ユースケさんがケンイチさんと旅してたとか……

まああの人にもイロイロあったんだな

「まあ今じゃ周りが糖尿病になりかねない程の甘々だけどね。今頃明日に備えてとかなんとか言っただけイチャイチャしてるんじゃない？」

そう面白そうにカシスさんが言った。アハハ、なんか想像出来る……

「アハハ、いつも通り茶化しに行かなくていいんですか？」

「ううん、今は止めとく」

アレ？

以外な返事……「勿論」って返事を期待してたんだけどな

「わたしはね、二人の事が大好きだから。ユースケが覚悟を決めよ

うとしててランがその後押しをしようとしてる時にそんな意地悪は出来ないわよ」

……なんとなくだけど、なんとなくだけどカシスさんってどんな人か分かった気がする。

普段は幼さを残した印象が強いけど、なんていうかサクラとは違ったベクトルを持った優しいお姉さんって感じだな。そう見るとユースケさんなんかより断絶大人だよな

そう思ってると突然カシスさんが何かに気づいたのか面白そうに笑みを浮かべると立ち上がる。一体どうしたんだ？

「それはキミ達に対しても同じだよ。コノハ、後で話しをちゃんと聞かせてもらおうわよ」

そう玩具を見つけた子供のような笑みを浮かべながらカシスさんが言う。

え、コノハ？

「カ、カシスさん！話して……話すような事はしませんし、ありませんよ！」

オレは振り返るとそこにはコノハがいた。コイツもハンバーガーでも食べに来たのか？

「ニヤハハ、どうだか。それじゃイツキ、わたしはもう行くわ。コノハ、頑張ってね」

そうカシスさんが言ってそのまま去っていく。一体なんだったんだか？

「カシスさん！もう……」

そうコノハがぼやきながらカシスさんの代わりにオレの前の席に座った。

オレにしてみればお前がどうしたって感じなんだよな……

「どうしたんだよコノハ、そんな声を荒げてさ」

「なんでもないわよ……そんな事よりちょっと手出して」

手？

なんだろう？

「渡したいものがあるのよ。だから早く手を出しなさい」

そうコノハが言う。渡したいもの？

なんだろう？

「はいこれ」

「コイツは……」

そう言って渡してくれたものはいつかお礼にコガネで買ってやったペンダントだ。

「お守り代わりよ。アンタが持ってなさい」

「あ、ああ……」

どこかいつもと違うけど強いコノハの迫力にオレは圧倒される。

どうしたんだよコノハの奴。にしてもお守りって、これって確か料理が上手くなるご利益じゃなかったか？

ま、野暮は無しだな。

「……わたしは信じるわよ」

へ？

「沢山の人がコースケさんが勝つって思ってるかもしれないけど、わたしはアンタが勝つって信じる……だから！」

そうかよ。そこまで言われて引き下がる訳にはいかないでしょお！

「ああ、分かったよ。お前の信頼に応えてやる！絶対に、絶対に勝つてくるからな！」

そうコノハの台詞にオレは力強く返す。オレ自信の目標に加えてコノハとの約束か。こりゃ負ける訳にはいかない！

明日は、絶対に勝つぜ！

決戦前日（後書き）

次回予告

イツキ「遂に始まった決勝戦。これがラストバトルだ！」

ユースケ「イツキ、あの時とは全く違っつ！僕も負けるもんか！」

イツキ「勝負だ！ユースケさん！次回、ポケットモンスター ACE  
SECOND SEACON 『二人のACE<sup>キース</sup>』次回もポケモン  
ゲットだぜ！」

ブースター&サンダース『ブイ！』



二人のACE（エース）（前書き）

決勝戦。再びユースケと激突するイツキ。

イツキはユースケとどう戦うのか？

## 二人のACE（エース）

……ポケモンリーグ決勝戦、ついに始まるのか……控室にいるオレは閉じていた目を開いた。

オレはグローブを手に嵌めてそれからベルトにセットされたボールを確認する。

オーダイル、ドンファン、ピジヨット、ブースター、ハッサム、アブソル……ようやく立ったこの舞台……絶対に勝ってみせるっ！

「行くぜ、みんな！」

そう自分に言い聞かせるように叫んでからゆっくりと控室の扉を開けて出発した。んじゃ決勝戦、やってやるぜっ！

-ワアアアア！-

会場に足を踏み入れるとももの凄い歓声が聞こえた。痺れるような歓声！

緊張した空気！

ついにオレはここまで来たんだ。長かった……本当に長かった！

「……イツキ、勝負だ！」

オレがバトルフィールドに入るとそう声がかけられる。その声はユースケさんの声だ。オレの目標で……ある意味師匠と言える人……絶対に倒してやる。今日、この手で！

「はい、あの時の借りを返してやりますよ！」

そうオレはその台詞に真っ向から返す。ヒワダタウンでの圧倒されたバトル、オレは忘れちゃいない！

ここは絶対に勝つんだっ！

「これよりイツキ選手とユースケ選手の試合を始めます。ルールは

3対3のシングルバトル！それでは試合開始！」

試合開始のコールが掛かった。始まった！

まずはオレはコイツだっ！

「ブースター、君に決めた！」

「サンダース、頼むよ！」

『『ブイブイツ！』』

……お互いにイーブイの進化系のポケモン……  
さあ、どう戦うとしようかな？

「サンダース、電光石火！」

『ブイツ！』

ユースケさんがそうしてるうちにも仕掛けてくる。流石に速い……  
けどな！

「ブースター、火炎放射だ。サンダースの足を止める！」

『ブイイイツ！』

その素早い足を止めるべく、進路を妨害するようにブースターは火炎放射を放った。

まともにスピードでやり合っても勝てないからな……だったらパワーでやらせて貰うぜ！

「そう来るか……だったら10万ボルトで火炎放射と相殺だ！」

『ブイイイ！』

サンダースはオレの目論み通りに足を止め、10万ボルトで火炎放射の相殺を狙って来た。

激突した二つの技は激突し、大きな爆発を起こした。今だ！

「突っ込めブースター電光石火だ！」

『ブイツ！』

そこでブースターは爆発の中を突っ込む。特性貰い火だからこそあつさり出来る芸当だ。

さあ、行くぜ！

「ブースター、炎の牙で攻撃だ！」

「そんな単調な攻撃なんかに！すなかけを使うんだ！」

『ブイツ！』

『ブイ……！？』

っ！

正面から向かっていったブースターに思いっきりサンダースは砂を跳ね上げてかける。それにより視界が奪われブースターはあっさりとその攻撃を回避されてしまう。

まだだ！

「そこから捨て身タックルだ！休む暇なんて与えるな！」

『……ブイツ！』

視界をやられたつてもそんなの一時的だ。そこで容赦無くブースターはサンダースに突っ込む。これなら！

「二度蹴り！」

『ブイイ』

『ブ、ブイ………』

っ………！

そこでサンダースは背を向けたかと思うと思いつきブースターの顔を蹴り上げてきた。それを受けたブースターは思いつき後退する。

くそお………軽くあしらって来やがって………

「そこだよ！10万ボルトだ！」

『ブイイツ！』

まだ来る！

「ブースター、電光石火で回避だ。そこから今度はアイアンテールで仕掛ける！」

『ブイツ！』

ブースターは電光石火で駆け出す。サンダースと比べたら全然遅いけど………攻撃中は隙だらけだ！

「そうはいかない！サンダース、ミサイル針！」

「構うな、突っ込め！」

『ブイッ！』

『ブイ………』

突っ込むブースターに10万ボルトの攻撃をやめ、小回りの効くミサイル針で仕掛けて来たけど………そんな攻撃なんかじゃ！

『ブイッ！』

『ブ………イ………』

「サンダース！」

アイアンテールは見事に炸裂しサンダースを弾き飛ばした。相性は良くないからダメージは大きくないけど………これで隙は作った！

これでも食らえ！

「オーバーヒートッ！」

『ブウウイイイ！』

ブースターが放った熱線はサンダースに向かっていく。これで決まれ！

「サンダース、直撃は受けちゃ駄目だ！10万ボルト！」

『ブイ！？ブイイッ！』

反撃するように10万ボルトで押しつけて来るけど……10万ボルトぐらいで！

「終わりだあああ！」

『ブイイイ！』

「サンダース！」

10万ボルトを押し切り、オーバーヒートはサンダースに炸裂し大きな爆発を起こした。

「へへっ！ちょっと派手にやり過ぎちゃったかな？」

『ブイ〜』

オーバーヒートの直撃、これで勝てなかったら……

「まだだ！10万ボルト！」

『ブウウイイイ！』

！

『ブイ………』

「ブースター！？」



爆炎の中から突如飛び出す電撃を回復することが出来ず直撃を受けた。今のを耐えたのか！

「……………これで決めてやる！サンダース、一気に距離を詰めてゼロ距離の雷！」

『ブイイイ！』

10万ボルトを受けて怯んでいるブースターにサンダースが迫る。まだまだ！

そいつを貰ってたまるか！

「砂を巻き上げる！砂かけだ！」

『……………ブイツ！』

「視界を潰したって！かぎ分けるを使うんだ！」

『ブイー！』

ブースターが砂を巻き上げるけど……………鼻を使って来たか……………だったからこうだ！

「守るを使え！直撃は貰うな！」

『ブイイイ！』

自分で起こさせた砂煙で視界が悪いけど……………守るで雷をなんとかしたのが分かる。ここは！

「そこだっ！こっちもかき分けるから馬鹿力だ。終わりにしてやる！」

『ブイイイ！』

「来るよ！ジャンプで回避するんだ！」

『ブイツ！』

っ！

器用にもサンダースは助走もなく軽々跳び馬鹿力の攻撃を回避してきた。くそっ……ブースターの技が何一つ通用しない……

「そこだっ！10万ボルト！」

『ブウウイイイツ！』

『ブイイイ！？』

「ブースター！」

更に攻め込んでくるユースケさん達。電撃がブースターに炸裂する。くそ……オレ達はこのまま負けるのか……いや、まだブースターの目は死んじやいないんだ！

何か手を……！

そうだ……まだオレ達には切り札があるじゃないか……文字通りオレ達のとっておき……これで決めてやる！

「まだまだ！ブースター、【とっておき】だ！」

『ブーイイイ！』

その指示と共にブースターは青白い輝きを放ち始めた。そしてサンダースの10万ボルトをもとせずにブースターはサンダースに突撃する。これで！

「サンダース、逃げる！」

「行っけええええ！」

『ブイツ！』

10万ボルトで攻撃していたサンダースに回避は間に合わない。とつておきの一撃は決まった。

全部の技を相手に見せた時にだけ使える技、それが【とつておき】だ。名前通りっていうのは本当にコイツの事だよな

「サンダース、戦闘不能！よってブースターの勝ち！」

審判のコールがかかった。サンダース、気を失ったみたいだな。よし……勝ったぜ！

「やったぜブースター！」

『ブイ………』

ありゃ、流石に無茶させすぎたみたいだな……オーバーヒートに馬鹿力で能力も低下してるから無茶はさせれないな……

「よし、ブースター後は休んでくれ！」

そう言つてオレはブースターをボールに戻した。よく頑張ってくれたぜ。上手く出鼻はくじけた！

後はオレの腕の見せ所、一気に叩いてやる！

「……………本当にあの時に比べたら段違いに強くなったね……………だけど僕だつてここまで来た以上は負けられないんだ！リザードン、行こう！」

『リザアアアア！』

来た！

ユースケさんの2番目のポケモンはその実力は手持ちの中でもトップクラス。コイツをどう攻略する……………

「ドンファン！行くぜ！」

『パオーン！』

そう考えてたけどやっぱ止めた。がむしゃら過ぎるぐらいがやっぱりオレらしい。そうやって今まで勝ってきたんだ！

それに、ドンファンだつていつかの借りを返したいだろうしな……………

「試合開始！」

試合開始のコールがかかった。最初から飛ばして行くぜ！

「ドンファン、ストーンエッジだ！」

『パオーン！』

オレがそう指示を出すと元気よく鳴くと目の前に鋭い岩がどこからか現れ、それは高速でリザードンに向かって行く、これでも食らえ！

「飛べ、リザードン！」

ま、当たるとは思ってたけど何事もなく避けられるとなあ……

「火炎放射で空中から爆撃だ！」

「ドンファン、それに当たるな！転がって逃げろ！」

『パオツ！』

そこでドンファンは転がって迫りくる火炎放射の攻撃を回避する。まずは凌いだ……次はこっちの番だ！

「水鉄砲で！」

『パオツ！』

そこでドンファンは放水するように水鉄砲でリザードンを狙う。けど、当たらない。巧に空中で機動をとって回避しつくる。けど相手にだって決定打なんて与えれない。降りてきてからが勝負だ！

「だったら炎の渦だ！」

『リザアアア！』

！

真上からの炎の渦で攻めてくる。そいつをもらってたまるか！

「高速スピンから水鉄砲！」

『パオツ！』

ドンファンを囲むように吐き出された炎だけどそれをなんとか水鉄砲でなんとか払いのける。へっ！  
炎の渦ぐらいで止められるかよ！

「今だよりザードン！炎のパンチ！」

『リザアアア！』

「うっ！ドンファン、つのでつく！」

『パオツ！』

いつの間にか迫ってきていたリザードンの拳を角で弾いた。テールバーナー……厄介な事を！

「そこだ！氷のつぶて！」

『パオン！』

『リザ……』

弾いた瞬間にドンファンが氷のつぶてで仕掛け、リザードンが顔を

しかめる。まだまだ！

「捨て身タツクルだ！」

『パオオオオツ！』

「来るなら！リザードン、怪力で受け止めるんだ！」

『パオツ！』

『リザアア！』

ドンファンとリザードンとのパワー同士の真つ向勝負だ！

「行っけえええっ！」

「リザードン！」

『パオオオツ！』

『リザアアア！』

更に両者が吠える。思いっきりリザードンを押していくドンファンは止まらない。よおしこのまま弾き飛ばしてやる！

「……ドンファンの力も利用するんだ！投げ飛ばしてしまえ！」

『リザアツ！』

『パツパオツ！？』

「いつ!?!」

嘘だろ!

突っ込んで来るドンファンの力を思いつきり利用され、怪力のお陰もあってかドンファンの巨体が宙を舞った。なんて無茶な戦い方しやがるんだよ!

のんびり顔して無茶するのがこの人だ……それを忘れてたぜ……

「一気に行くよ!フリーフォール!」

『リザッ!』

『パオッ!』

っ!

宙を舞うドンファンをリザードンは抱き抱えるように掴み上昇し始めた。げっ……上空から落とすつもりだよ……

自在に飛べるリザードンなら落下中のドンファンに好きだけ仕掛ける……そうはいくか!

「ドンファン、じたばただ!思いっきり暴れてやれ!」

『パオンッパオン!』

『リ、リザッ!』

「リザードン!」

よっー!



リザードンをじたばたで跳ね退けた！  
今なら追撃も行ける。これでも食らえ！

「岩石封じだ！コイツで止まれ！」

『パオオオン！』

ドンファンが吠えるところからか突如岩が出現し、自分の鼻を振り回しリザードンに向かって飛ばした。  
バランスを崩してる以上はかわせないぜ？

『リザア！？』

「わあーリ、リザードン！」

あたふたとした様子のユースケさんと岩石封じをまともに受けてしまい落下していくリザードン。よし、リザードンの上を取った！  
このまま決めてやる！

「捨て身タックル！」

『パオーン！』

岩石のせいで身動きが取れず落下していくリザードンに落下の勢いを利用して向かっていくドンファン、これで！

「まだまだよ！遠慮はいらない。フルパワーの逆鱗を使っただ！」

『ガルウ…………リザアアアアア！』

っ！

ユースケさんが叫ぶとリザードンが輝き始め、そして暴れるように岩を弾き飛ばした。なんつう力技を！

『リザアアアア！』

『パ、パオツ！？』

「ドンファン！」

突っ込むドンファンを逆鱗のおかげで有り余る力で勢いを止め、それから尻尾でドンファンの背中を叩き、カ一杯叩き地面に叩き付けた。

っ、っええ……

「まだ勝負はついてない！ストーンエッジだ！」

『パオ……パオオン！』

地上から空中にいるリザードンに向けられた一撃、当たれ！

「最後の力を振り絞るんだ！ブラストバーンツ！」

『リザアアアアアア！』

ユースケさんとリザードンが吠える。その瞬間にリザードンの尻尾の炎が青白くなり、超特大の青白い火炎球を放った。コイツはユウイチのバクフーンと火力がダンチ……！

「ドンファン！」

ブラストバーンが直撃し、巨大な火柱が上がった。そして……

「ドンファン……」

「ドンファン、戦闘不能！よってリザードンの勝ち！」

火柱が消え、試合の決着を告げるコールが掛かった。完全に目を回しているドンファン、オレの完敗だ……！

「ドンファン、よく頑張ってくれたな。後は任せてくれ」

目を回しているドンファンにそんな言葉は届かないと分かりつつも、  
辛い言葉を言いながらボールにドンファンを戻した。

「リザードン、お疲れ。後は休んでて」

『リザ……』

そうユースケさんはリザードンをボールに戻した。

岩石封じのダメージも大きかったみたいだし逆鱗の消耗は半端なものじゃない。なんせその疲れで混乱する事だつてあるらしいし……  
その上にあのブラストバーン……無理もないか……

「お互いにポケモンを」

と審判がオレ達に声をかけてくる。最後の一体……これで決着がつくんだ。ポケモンリーグもユースケさんとの戦いも……

「イツキ、正直ここまで追い詰められるとは思わなかったよ」

そうユースケさんは不適な笑みを浮かべながらも言う。そりゃ……

「オレは……アンタに憧れてそれを超えたくてここまで強くなったんです。これぐらい当たり前ですよ！」

そうオレも不適な笑みを浮かべながらも言う。

それに……お守り預かってるんだ。安々と負ける訳にはいかないからな

「そうかい！だったら全力で勝ちに行くだけだ！ユンゲラー、僕のすべてを賭けるよ！」

『おう！行くぜ、相棒！』

最後に出てきたのは……ユースケさんの相棒のユンゲラーだ。激戦を勝ち抜きユースケさんを支えた相棒。その実力は侮る訳にはいかない！

「オーダイル……頼むぜ」

そうオレはオーダイルのボールを手に取ってから目を閉じる。ラストバトル、お前に賭けるぜ！

「行けっ！」

『ダアアアイル！』

オレがボールを投げ、オーダイルが姿を現す。

「それでは、試合開始！」

「オレ達の全てをぶつける！今がその時だっ！」

『ダイツ！』

試合開始のコールと同時にオレ達が叫ぶ。これが……最後の勝負だ！

## 二人のACE（エース）（後書き）

次回に続きます。

書いていて思ったのですが、なんとなくイツキとコノハに実力差がついてるように見えるような感じでした。元々イツキとコノハは完全に互角なハズなんですけど……

ランとコノハの試合が、完全に僕のミスでランの圧勝になってしまった感じ。そのためか今回、ランを倒したユースケと互角にイツキが戦ってる感じになってしまいコノハと力の差が出来てるような感じに……

コノハのフォローをすると、元々ランとは接戦になるハズだったので力の差は殆どないはずなんです。

では、今回はこの辺で失礼します。

## 決着！イツキVSユースケ（前書き）

お互いの死力を尽くして戦うイツキとユースケ。

パートナーの同士の間角の勝負。イツキはユースケを超えることが出来るのか？

そして勝負の結末はいかに！

## 決着！イツキVSユースケ

「行くぜ、アクアジェット！」

「サイコカッターで切り払うんだ！」

『ダイツ！』

『甘いっての！』

サイコカッターを左手からユンゲラーは発生させそれを使いアクアジェットで突撃するオーダイルの方向を受け流すように変えた。本当に器用な動きしやがる。だったら次はコイツを食らえ！

「ハイドロポンプだ！」

『ダアアイイルツ！』

アクアジェットが避けられた瞬間にオーダイルはアクアジェットを中断し、ユンゲラーに対して振り返る。そして間髪入れずにハイドロポンプで仕掛ける。当たれ！

「当たるな！ユンゲラー、サイココーティングシャワーで！」

『コイツを食らえ！』

即座に振り向いてハイドロポンプを何事も無かったように回避し、左手のサイケカッターを回転させて投げつけてきた。



「舐めんな！」

『ダイツ！』

そうオーダイルは腕を振り回しサイコカッターを弾き飛ばしたそんなもんが通用するかよ！

「今だよ！」

『貰った！』

！

そこへすかさずユンゲラーはサイケ光線を撃ってくるけど……当たらない。へへっ、狙いが甘い……何っ！？

『ダイツ！？』

「嘘だろ！」

弾き飛ばしたサイコカッターにサイケ光線が命中、そのエネルギーが拡散し、オーダイルの後頭部に襲い掛かりバランスを崩してしまふ。

くっ……そんなのありがよ……

「今だ！ユンゲラー！」

『そこ！』

「オーダイル、いわくだき！」

『…ダイ!』

『うわっ!?!』

一瞬怯んだ隙に一気に攻めてきた。ギリギリまで接近され、サイケ光線で撃つて来た。

それを甘んじて受けるオレ達じゃない。オーダイルは地面を力強く足踏みし、地面を砕いた。それによりユンゲラーはバランスを崩し、サイケ光線を外す。

「取った!アクアジェットだ!」

『ダアアイル!』

いわくどきでバランスを崩した所にオーダイルはアクアジェットを発動した。

コイツを貰つとけ!

「テレポート!」

『当たるかよ!』

そうテレポートでユンゲラーはアクアジェットの攻撃を回避してくる。くそっ、余裕かよ!

「そこ!サイケ光線!」

『喰らえ!』

雨を降らせるようにテレポートで上昇したユンゲラーがサイケ光線を仕掛けて来る。そんな攻撃に！

「オーダイル、高速移動！」

『ダイ〜』

サイケ光線の攻撃を容易にオーダイルは回避して見せる。次はこっちの番だ！

「水鉄砲連射！」

『ダイルツ！』

サイケ光線の雨の中、反撃するように地上から水鉄砲を放つ。空中で簡単に避けられるかよ！

「ユンゲラー、テレポート！」

そう指示を出すとまたユンゲラーが消える。次の一手だって分かっている！

「後ろだ！冷凍パンチ！」

『ダアイル！』

『げっ！？』

「いつ！？バリアーで！」

オーダイルが振り向いた先に予想通りユンゲラーが姿を現した。ア  
ンタのお得意の戦術はよく知ってるんだよ！

『うわあ！』

「追撃だ！アクアジェット！」

「ユンゲラー！まだだ、スピードスター！」

『ダイ………』

バランスを崩したユンゲラーに追撃をしようとするけどスピードス  
ターで動きを抑制された。流石に、簡単にはいかないか………だけど！

「怖い顔だ！」

『ダイイイ………』

『っ！』

スピードスターからの追撃を行おうとオーダイルに手を向けようと  
したユンゲラーの動きが鈍る。貰ったあ！

「そこだ、かみ砕く！」

『ダアイル！』

オーダイルがユンゲラーに迫る。コイツで決まれ！

「動きが遅れたって！念力だ！」

『うつ……！』

！

器用な事を……念力で噛み付くスピードを遅くしてその間に引くなんて……

本当に器用な戦いをしてくるぜ……

「エナジーボール！」

『いつまでもビビッてると思うな！』

『ダイ……ダイルツ！』

「そんなもんでやれると思うなあ！高速移動からドラゴンクロー！」

エナジーボールが直撃したにも関わらずオーダイルは突進する。行っつけえ！

「サイコカッターで凌ぐんだ！」

『ちつ……くつ！』

『ダアアアイル！』

暴れるオーダイルの爪をなんとかユンゲラーは弾いて来るけど……そんな時間稼ぎなんて！

「アクアテールで押し切れ！」

「バリアーからリフレクター！」

『ダアイル！』

『うわああああ！？』

「ユンゲラー！」

よっしやあ！

リフレクター越しとは言えアクアテールが直撃した。勿論吹っ飛んだユンゲラー。

よし、このまま！

「ドラゴンクローだ！」

『ダイツ！』

更に追い撃ちを仕掛けようとオーダイルがユンゲラーに向かっていく。これでどうだ！

「まだだ！パワートリックからサイコカッター！」

『くっ！』

ギリギリでまたサイコカッターを発動し、両手にそれを持って受け止めてきた。

嘘だろ！？

パワートリックって技があるのは知ってたけど……防御を捨ててパワーに回して来やがったのか。

「そのまま押し返すんだ！」

『うおおおっ！』

『ダ………ダイツ！？』

そんなのありかよ！

ユンゲラーが純粹なパワーでオーダイルを弾き飛ばしたってのかよ

………！

弾き飛ばされ大幅に後退したが素早く体勢を立て直すオーダイル。  
だけとまだだ！

「ハイドロポンプだ！」

「当たるな！右に飛べ、それからサイコカッターを投げつけるんだ  
！」

『ダアアイル！』

『うおおっ………危な、次はこっちの番だ。これでも喰らえ！』

ハイドロポンプの攻撃をユンゲラーは回避し、更にサイコカッター  
を投げつけてきた。さっきとは違ってそれには当たれない！

「冷凍ビームで撃ち落とせ！」

『ダイ………！』

迫るサイコカッターを凍結させて撃ち落とした。そんなのに当たる

かよ！

つてユンゲラーがない……一体どこに……まさか！

「オーダイル、来るぞ！後ろだ！」

『ダイツ！？』

『ヒョイト！』

『ダ……』

なっ……オーダイルの後頭部にドロップキックを叩き込んできた。テレポート……そのせいでオーダイルはバランスを崩す。まずい！

「雷パンチからのサイケ光線で追撃だ！」

『さっきまでのお返しだ！』

「オーダイル！」

『ダイ！ダイイイツ！』

お返して済む攻撃かよそれは！

さっきまでこちらがしかけていた以上の攻撃が帰ってきた。雷パンチを背中に叩きつけられ、更にサイケ光線で攻撃し、その勢いで少しだけ後退する。くそっ！ 技の使い方がいちいち器用すぎる！

「今だ！ホールディングリフレクター！」



『止まれ!』

『ダイ……!?!?』

「しまった!」

オーダイルを拘束するように細かいリフレクターが複数現れる。くそっ、その技そんな使い方じゃねえから!

「今だ! ユンゲラー、フルパワー!」

『うおおおお!』

そう吠えるようにユンゲラーが叫ぶと右手にエネルギーを溜めはじめる。サイコマグナム……そいつを貰うわけにはいかない!

「行っけえええ! サイコマグナム!」

『うおおおお!』

「そこだ、嫌な音!」

『!?!?』

迫るユンゲラー、に対しオーダイルは嫌な音で攻撃した。くっ……自分の耳にもダメージは入るけど……

『ちょ! やめ、やめろ!』

「み、耳押さえるんだ! わああ!」

ユースケさん達は動きを止めて耳を押さえる。よし、サイコマグナムは止めた。次はこうだ！

「今だ、かわらわりだ！」

『ダイル！』

オーダイルは無理に動き、かわらわりを使いリフレクターを叩き割り、動けるようになる！  
一気に攻める！

「アクアジェットだ！コイツでも喰らえ！」

『ダイルッ！』

『がつ………』

「ユンゲラー！」

思いっきりアクアジェットがユンゲラーの腹に炸裂した。嫌な音で低下してる防御のユンゲラーはフィールドの隅まで吹っ飛びダウンする。今のは効いたハズだ！

「ユ、ユンゲラー、大丈夫！」

『………なんとか。本当に強敵だぜ。イツキとオーダイルの奴………』

そうユンゲラーは立ち上がってくる。流石の底力………この人達はこのからが強いんだ。油断は出来ないな………

「うん。だけどここまで来てまた負ける訳にはいかないんだ！」

『そうだ、行くぞー！』

そんな会話がいったかと思うとしぶとくユンゲラーが立ち上がって来る。マジかよ……

「だったらまだまだ行くぜ！高速移動！」

『ダイツ！』

そこで加速し突っ込むオーダイル、一気に距離をつめてこっちのペースに持ち込む！

「自己再生からテレポート！」

『……！』

オーダイルがギリギリまで接近したところでユンゲラーは姿を消す。自己再生で回復して来たっていつてもあの時間じゃ大した量は回復できちゃいない！

「雷パンチだ！」

「後ろだ！受け止める！」

『「」のやるおおー！』

『ダイイイー！』

クロスレンジ！

ユンゲラーの強力な拳はオーダイルの顔面に炸裂したけどその手はユンゲラーの腕をしっかりと握っている。貰った！

「終わりだ！ハイドロカノン！」

『ダアアアイル！』

両手を掴むオーダイルはその大顎を開きハイドロカノンの強力な水流を放った。

その力は強力で掴んでいたユンゲラーね手をすっぽ抜け吹っ飛ばした。

「……………くっ……………！」

「勝ったぜ、ユースケさん！」

『ダ……………ダイル！』

そうオレ達は吠える。勝った、勝ったんだよな……………吹っ飛んでいったユンゲラー、ハイドロカノンには堪えれ無かったみたいだな

「……………甘いよイツキ、僕達の切り札はサイコマグナムじゃない……………！ユンゲラー！」

！

そうユースケさんが眩くとユンゲラーが消えていく。身代わり……………どこだ、どこにいった！

『イツキ、オーダイル、オレならここだ!』

『ダ、ダイ!?!』

「オーダイル!」

真下からオーダイルに襲撃を仕掛けられた。その一撃、オーダイルは空を舞う。

穴を掘る……身代わりで注意を引き付けて穴を掘って潜ってたのか!?!

「これで終わりだ! ユンゲラー!」

『うおおおおっ!』

地面からの攻撃で吹っ飛ばされたオーダイルは反動で動けない。くそっ……くそおおおお!

「気合玉、行つけええええ!」

『喰らええええ!』

気合玉は直撃し、大きな爆発が起こる。この瞬間、オレのポケモンリーグの挑戦は終わった

## 決着！イツキVSユースケ（後書き）

そんなこんなで決着となりました。

イツキに勝たせてユースケをまた挫折させてやりたい。と、少し意地悪いことを考えたりしていましたが、それじゃイツキが増長してしまうので今回のような結末になりました。

ちなみにユースケ達の切り札は”サイコマグナム”では無く”身代わり”です。

初代の最初から使っているこの技はやっぱりユースケとユンゲラーの常とう手段であり切り札だと思います。やっぱり最後はカントーでの冒険を支えてきた”みがわり”と”気合玉”この二つで決めたはずと思っていたのでそんな展開に出来てよかったです。

おそらく次は2話連続投稿。イツキ編とユースケ編です。では、この辺で失礼します。

「オレ達はたどり着いたんだ！」（前書き）

今回はユースケ編。イッキのオーダーダイルを見事に打ち倒したユースケとユンゲラー。

そんな彼を待っているのは……

「オレ達はたどり着いたんだ！」

「オーダイル戦闘不能！ユンゲラーの勝ち！よってこの試合、ユースケ選手の勝ちです」

勝ちを告げるコールが掛かったダウンしたオーダイルと今までのダメージのせいで膝をついて息絶え絶えとしているユンゲラー……  
実感がなんか湧いてこない、えつと勝ったのか……？

「……勝ったぞユースケ、オレ達はたどり着いたんだ！ポケモンリーグ優勝っていう到達点に！」

そんなユンゲラーのテレパシーが僕に伝わる。

……そうだね。僕達は遂にここまで来たんだ！

「うわああああ！やったよ、ユンゲラー！」

僕は高ぶる感情のままに叫ぶ。

難しい事はいい、今はただそうしたかったんだ！

「おい、馬鹿！痛い、痛い！止めるユースケ！」

そのまま勢いに任せ、僕はユンゲラーに抱き着く。

なんか悲鳴を上げてるけどそんなのは無視。今はこうしたいんだ。いつも喧嘩したり嫌味を言い合ったり、一緒に馬鹿やったりしてきた僕の相棒。きつといなかったこんなところまでたどり着け無かったと思うから。

「ありがとうユンゲラー、みんな！みんなの事、僕は大好きだ！」



そう僕はユンゲラーを抱きしめながらも叫ぶ。すると、ユンゲラーは照れたのか黙る。ハハッ、珍しいよユンゲラーが照れるなんてさ。その他のポケモン達もボールから嬉しさを示すようにボールを震わせる。

リザードン、サンド、サンダーズ、マリルリ……本当にありがとう

「……流石はユースケさんですね。オレの負けです」

「イツキ」

オーダイルを戻しそう噛み締めるように言う。

……強引に自分を納得させようとしてるのが分かる。決勝戦で負ける悔しさは僕は知っている。

勝者は敗者に何も言っちゃ駄目なんだ……

「じゃ、オレはもう行きます。優勝おめでとございます」

「……」

そう言うとイツキは駆け出していく。イツキは強いな……僕はお父さんとの勝負に負けた時は何も言えなかった。泣くことしか出来なかったのに……

正直な気持ち、僕にはACEエースっていう二つ名で言われるけど、この二つ名はイツキにこそ相応しいと思うんだけどな。

諦めない姿勢とか、パートナーを不安にさせないようなその前向きさとかさ

「それじゃ戻ろうかユンゲラー。閉会式まで時間があるからそれま

でゆっくりじようよ」

『ああ。ランとイチヤイチャするのもいいけど、まずはオレらをポケモンセンターに預けてからにしろよ?』

そう僕はユンゲラーから離れてから言つとそう返してくる。な……ちよっと待ってよ!

「イ、イチヤイチャって!とにかく戻れ!行くよ」

『ああ』

そう楽しそうに言うユンゲラーを僕はボールに戻し会場を後にする。ああ、僕の相棒はどうしてこうなんだ!

PC屋上

- ユースケ、よく頑張ったな -

「うん、あの日お父さんに負けたから僕は優勝って場所までこれたんだと思う。ありがとう」

ポケギアを通して聞こえるお父さんの声。僕が勝ったのをテレビで見知っていたのが電話をかけてきてくれたんだ。なんか凄く嬉しいな

- だけど、僕もまだ息子には負けるつもりはないからな。帰ってきたらどれだけ強くなったか見てやる -

「うん、了解。それじゃまた今度」

- ああ、お母さんにご馳走を用意して待ってるからな -

そうお父さんが言うと電話が切れた。ご馳走か……なんか凄く楽しみだな。

「えと、そろそろ閉会式だから行かないと……ジョーイさんからユンゲラー達を受け取って……」

そう独り言のように言い、屋上から出ようと振り返った。すると……

「あ……ユ、ユースケ……」

僕が振り返るとそこにはランの姿があった。ラン……なんか慌ててるけどどうしたんだろ……

「ラン、どうしたの?」

「あ、その心の準備が……」

こ、心の準備?  
な、何それ……

「う、うん……その……ん……こつこつ事……」

そうランが言うと僕の隣まで歩みよって来て……

「ん」

「え……」

頬に何か温かい感触……え……?

「……おめでと、ユースケ。今のは頑張ったご褒美だよ」

……ほえ……ご褒美……

そう言うランの顔は赤い。僕も人の事言えないけどさ……

「う、うん……でもランが支えてくれなかったら出来なかったと思う。ラン、ありがとう」

ランに僕はそう言う。ランが……今はないけどケンイチと旅出来なかったら僕はどうなってただろう。多分、ユンゲラー達がいなくても、ラン達が居てくれなくても僕はここに居なかったんだろうな

「どういたしまして。でも油断しちゃ駄目だよ？」

「え？」

ランの言葉に僕はつい疑問詞を浮かべてしまう。どういうこと？ま、油断なんてするつもりは無いんだけどさ

「油断してたらすぐにあたしが追い抜いちゃうんだから」

……そうだね

「そんな事させないよ。絶対に負けるもんか」

そう僕は力強くランに返す。恋人でありライバルのラン、彼女にだけは負けないように頑張らないとな

「オレ達はたどり着いたんだ！」（後書き）

イツキ編に続く

何度転んでも（前書き）

ユースケと互角の戦いを繰り広げるも敗北してしまっイッキ。

控室に戻ったイッキは……

## 何度転んでも

「オーダイル！」

気合玉の直撃を受けたオーダイルは完全にダウンしていた。ああ……

「オーダイル、戦闘不能！ユンゲラーの勝ち！よってユースケ選手の勝ちです」

敗北を告げるコール、ダウンしたオーダイルと大ダメージを受けて膝をついているユンゲラー……

「オーダイル……」

オレはオーダイルの元へダッシュで駆け寄る。大丈夫……な訳無いか

『ダヒィ〜』

完全に目を回してダウンしている。くそ……くそ……くそっ！

「オーダイル、本当に頑張ったな。サンキュ……」

そう言いながらオレはオーダイルをボールに戻し、立ち上がる。

……あれ、なんでだよ。負ける事には慣れてるハズなのに、ここまでする声が出ないくらい辛いなんて……今は声を絞りだすんだ

「……流石はユースケさんですね。オレの負けです」

「イッキ」



オレの言葉にユースケさんはそうとだけ返してきた。

こういう時余計な事を言わないでくれるのは嬉しい。下手な慰めは一番傷つく……

「じゃ、オレはもう行きます。優勝おめでとつございます」

そうとだけ言うとオレは背中を向けて走り出す。

落ち着いて、歩いてここから出ていく事は出来なかった。

控室

「……………」

これからどうしよう、正直今は誰にも会いたくない。  
なんていつか悔しさを盾にして当たり散らしちまいそうぞや……

「イツキ！」

え……そんな声が聞こえたかと思えば

「バーン！」

と控室のドアが開かれた。だ、誰だよ！

「やっぱり拗ねてたんだなお前は」

「そういうところは変わってないんだね」

「ユウイチ、サクラ……………」

バーンって入って来たのはユウイチとサクラだ。やっぱり拗ねてた  
っておい！

「んだと……………やっぱりってどういう事だよ！」

どうしても殺気立ってしまう……………何やってんだよ、オレは……………

「こー一番で悔しい思いしたらいつもそうだったからな。オレ達が知らない訳無いだろ」

……そうだったか？

自分自身の事だから正直覚えてない。

確かに結構最近だと怒りの湖の一件でロケット団の幹部に複数対1で負けた時とかアカネに負けた時とかそうだったかもしれない。

「イツキ、あなたの気持ちは分からないでもないけど……」

「ああ、まだ時間はあるけどちょっとしたらすぐ表彰式だからな。そんな態度で表彰式に出たらお前に負かされたトレーナーに失礼だぞ」

……ユウイチの言う事は分かる。分かるけど

「そんな事は分かってる！けど、そう簡単に割りきれ程オレは大人になれてない……」

「そう……イツキ、その難しい事は言えないけど、元氣出して」

オレの八つ当たりやりにサクラはそう返してくれる。

本当にオレは何やってんだよ。これじゃただの馬鹿じゃねえか！

「イツキ、わりい説教みたいになったな。でも準優勝おめでとう。じゃ、オレ達は行くからな」

「うん、ユウイチ、サクラ、ゴメンな。八つ当たりみたいな事して……」

……準優勝をした事を祝ってくれるユウイチ。それに謝罪で返すのが辛い

「うつん、大丈夫だよ。それじゃ表彰式の後でね？」  
そう言つてユウイチ達は部屋を出ていく。

二人共サンキューな……ちよつとは元気が出た。

「イツキ、いる？」

え……今度は聞き慣れた声が響く。この声つて……

「コノハ……」

そう、続いて部屋に入って来たのはコノハだ。ユウイチ達にかけてみたいに心配させちまったかな？

「やっぱり落ち込んでるか……ほらイツキ、元気出しなさいよ。これあげるから」

そう言つてコノハが手に持っていたレジ袋から板チョコを取り出して渡してくれる。これもイツキなりの励ましなんだろうな……

「ああ、サンキュー」

そう言つてそれを受け取る。せつかく励ましてもらつてるんだから無下には出来ないよな……オレはその銀紙を剥がして口に入れる。  
う……

「苦っ……お前、ブラックじゃねえかよ……ブラックのチョコレー

トとかどういふ趣味してんだよ」

コイツの料理の下手さは味覚音痴から来てるのかもな……まあ、ブラックの美味しさをオレはまだ理解してないだけかもしれないけど……

「な、なんですっ……え？ イツキ？」

アレ……コノハ、どうしたんだ？

ん……アレ？

どうしたんだ？

「なんで、なんで涙が……」

オレの頬には涙が伝ってきている。なんで、なんでこんなのが……

「チョコが……苦すぎるのか？ ハハ、オレもまだまだ子供だよな……」

「イツキ……」

自嘲気味にオレは言う。違う……この涙はそんなんじゃない……

「違うよな……オレは……悔しいんだよな……勝ちたかった、憧れのユースケさんを倒して、優勝カップを持ち帰ったかったんだ」

オレは自分の本音を吐き出す。もう、我慢の限界だ！

「それで負けて手に入れたのがこんな苦いチョコレートだぜ？ そんなの、そんなのねえよ……」

悔しい……この苦いチョコを噛み締めて押さえていたつもりの涙が出てきた。これが……ポケモンリーグで負けるって事なんだな……

「イツキ……もく、また言わせるつもり？」

……な、何を……

「アンタ誰よ！」

っ！？

「わたしの知ってるイツキは負けたくらいじゃメソメソしないわよ！負けたならまた強くなろうと真っ直ぐ一直線に努力する。それがイツキよ！」

……

「アンタ、そのチョコレートみたいに苦い思いしたんでしょ！ならいつもみたいにそれを強いバネにして跳躍しなさいよ！強くなりなさいよ！」

……そうだな

「わりいなコノハ、そうだったよな……それこそがオレの本来の姿だよな！」

「そうよ、それでこそイツキよ！」

確かに悔しい思いはした。けどだからってそのまま進歩しよう

しなかつたら駄目だよな。

「ありがとなコノハ、腑抜けたオレに火を入れてくれて」

「か、勘違いしないでよ！わたしはアンタの事が心配だったんじゃないよ……」

……相変わらず素直じゃないな

「前にもこのやり取りあったな……」

そうオレは口にする。確かアカネに負けた時だったよな……

「そう……」

「ね」と続くだろうコノハの口にオレは手に持ったチョコレートをねじ込んでやった。

「な、何すんのよ！」

急なオレの攻撃にコノハは涙目になりながらも抗議の台詞を言う。  
んなの決まってるじゃんか！

「こんな苦いもん食わせた仕返しだよ」

「イツキィ〜待ちなさい！」

「誰が待つかよ！」

そう言いながらオレは控え室から逃げるように飛び出す。こうやって

ていつもの騒動が始まる。今はお前とこつやっていたいから、少し意地悪な事したけど、オレ、忘れないよ。さっきのチヨコの味とお前の言葉、だから見ててくれよ。オレが強く跳躍するところをな



## 何度転んでも（後書き）

さて、イツキとユースケ。それぞれのリーグ編でのエピソードです。落差は酷いですが、やっぱりイツキってこういう風に負けて強くなるタイプなんだなと思います。という訳でユースケに負けたイツキはこれからもどんどん強くなっていくことだと思っています。

では、この辺で失礼します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2867h/>

---

ポケットモンスターACE～SECOND SEASON～

2011年11月22日05時14分発行